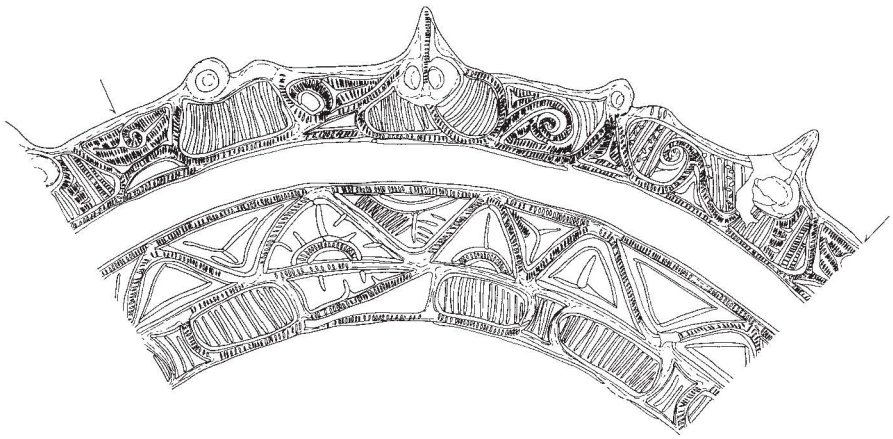
狭山市遺跡調査会報告書　第13集

丸　山　遺　跡

―― 学校法人　国際学園グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――



2003

埼玉県狭山市遺跡調査会

第２号住居跡遺物出土状態

第２号住居跡出土土器

第５号住居跡土層断面

第５号住居跡出土土器

序

狭山市には、先人の文化を今に伝える埋蔵文化財が数多く所在しています。こうした古人の営みの跡は、古くは先土器時代から武士が鎌倉街道を舞台に活躍した中世まで、途中多少の断絶を見ながらも現在に至る郷土の歴史を雄弁に語り続けています。こうした遺跡の多くは、当市を北東方向に貫流する入間川の両岸に立地し、川に育まれた市民共有の大切な財産と言えるでしょう。しかしながら、市域は首都圏から40km 圏内という通勤の利便性から昭和40年代以降の急激な都市化の波の中で、常に破壊の危険にさらされてきました。そして、現在も社会的に認知されつつも、開発と保存の狭間で不安定な立場を強いられています。

狭山市遺跡調査会では、このような状況の中で民間開発に対応して埋蔵文化財の発掘調査を実施し、後世に伝えるため記録保存に努めてまいりました。本報告書は、狭山市柏原に所在する丸山遺跡第１次調査の成果をまとめたものです。調査は、大学のグランド造成を原因として平成３年度に行ったもので、縄文時代中期の竪穴住居跡14軒が発見され、やや小規模ながらも環状に廻る当時の特徴的な集落跡の一端が明らかとなりました。また、報告書刊行に至る室内整理の過程で100個体以上の土器が復元され、当時の人々の表現力の豊かさや、地域間交流の歴史を窺うことが出来ます。本書は、これらの成果を可能な限り詳細にまとめたものですが、考古学研究者のみならず市民の皆様の生涯学習に資するとともに、文化財保護の精神を培う一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査においてご理解、ご協力をいただいた学校法人国際学園及び工事関係者、寒風の中、調査に献身的に従事し、報告書刊行までの長い間ご協力いただいた協力員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成15年９月

狭山市遺跡調査会

会　長　　野村　甚三郎

例　言

1　本書は、狭山市柏原字半貫所在の丸山遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。
2　本書で報告する発掘調査は、学校法人国際学園によるグランド造成に伴うもので、調査費用の負担も同学園によるものである。
3　発掘調査の届出に対する文化庁の指示通知は、平成５年１月８日付、委保第５－1334号である。
4　発掘調査は丸山遺跡調査会が主体となり、平成３年10月11日から平成４年２月14日まで実施した。
5　出土品整理は調査終了直後から開始し、平成12年度まで断続的に実施した。報告書作成は個別の調査会を統合して平成４年度に発足した狭山市遺跡調査会が主体となって平成13～15年度に行った。
6　発掘調査は石塚和則が担当し、飯田優子、伊倉榮男、薄田明子、加藤稲子、国重和子、坂入しげ子、坂入　誠、指田ツネ、田口文枝、那須テルヨ、増田久美子、山本とし子、渡辺裕子が参加した。
7　出土品の整理と図版の作成は石塚が担当し、飯田優子、伊倉榮男、伊藤美穂、今井綾子、薄田明子、大石雪枝、加藤稲子、岸　幸子、小林はつみ、斉藤通子、坂入しげ子、佐々木美保子、瀬戸山真由美、高森志都、那須テルヨ、橋本弓子、坂東昭子、増田早苗、三浦良子、水村弘子、山崎好子、山川淑恵、山本とし子の補助を受けた。
8　土器文様展開図のトレースの一部は石塚　香氏の協力を得た。
9　石器の石材鑑定は、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団の西井幸雄氏に依頼した。
10　本書の執筆には石塚があたった。
11　本書の編集は狭山市遺跡調査会が行い、石塚が担当した。
12　発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏、諸機関からご教示、ご協力を賜った。記して厚く感謝の意を表する（敬称略）。

石塚　香、市川　修、加藤恭朗、金子直行、熊澤孝之、権田恒夫、斉藤祐司、坪田幹男、富元久美子、中島　宏、中平　薫、並木　隆、西井幸雄、早川修司、細田　勝、松本尚也、村上達哉、柳戸信吾、埼玉県教育委員会文化財保護課、入間市教育委員会、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団、坂戸市教育委員会、所沢市埋蔵文化財調査センター、飯能市教育委員会、日高市教育委員会

凡　例

1　遺構図の縮尺は住居跡１／60、同炉跡・屋内埋甕１／30、土壙１／40、調査区全測図１／200、１／500とし、各挿図にスケールを付した。
2　全測図中の略号は、SJ が住居跡、SK が土壙、SC が集石土壙、SD が溝状遺構を示す。
3　遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは海抜高を示す。
4　遺物実測図の縮尺は土器実測図１／４、文様展開図１／８、土器拓影図１／３、石器実測図２／３、１／３、土製品１／２で、各挿図にはスケールを付した。
5　本報告書に掲載した出土品は、狭山市教育委員会で保管している。

目　次

巻頭図版
はじめに
例　言
凡　例
挿図目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査の組織 …… 3
3　発掘調査の経過 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
1　遺跡の概観 …… 5
2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
1　調査成果の概要 …… 13
2　縄文時代草創期の遺物 …… 13
　石　器 …… 13
3　縄文時代中期の遺構 …… 14
　住居跡 …… 14
　集石土壙 …… 44
　土　壙 …… 44
4　縄文時代中期の遺物 …… 49
　土　器 …… 49
　石　器 …… 127
　土製品 …… 164
Ⅳ　近・現代の遺構 …… 169
1　検出遺構 …… 169
　溝状遺構 …… 169
Ⅴ　考　　察 …… 170

《附　編》

挿図目次

第１図　丸山遺跡確認調査トレンチ配置図……２
第２図　狭山市遺跡分布図……６
第３図　丸山遺跡と周辺遺跡……９
第４図　丸山遺跡第１次調査区位置図……11
第５図　丸山遺跡第１次調査区全側図……12
第６図　縄文時代草創期の遺物……14
第７図　第１号住居跡……15
第８図　第２号住居跡（１）……17
第９図　第２号住居跡（２）……18
第10図　第２号住居跡（３）……19
第11図　第３号住居跡……20
第12図　第４号住居跡（１）……22
第13図　第４号住居跡（２）……23
第14図　第５号住居跡（１）……24
第15図　第５号住居跡（２）……25
第16図　第６号住居跡……27
第17図　第７号住居跡（１）……28
第18図　第７号住居跡（２）……29
第19図　第８号住居跡……31
第20図　第９・10号住居跡（１）……33
第21図　第９・10号住居跡（２）……34
第22図　第11号住居跡（１）……36
第23図　第11号住居跡（２）……37
第24図　第12・13号住居跡（１）……38
第25図　第12・13号住居跡（２）……39
第26図　第12・13号住居跡（３）……40
第27図　第14号住居跡（１）……42
第28図　第14号住居跡（２）……43
第29図　集石土壙・土壙（１）……45
第30図　土壙（２）……47
第31図　第１号住居跡出土土器（１）……50
第32図　第１号住居跡出土土器（２）……51
第33図　第１号住居跡出土土器（３）……52
第34図　第２号住居跡出土土器（１）……54
第35図　第２号住居跡出土土器（２）……56
第36図　第２号住居跡出土土器（３）……57
第37図　第２号住居跡出土土器（４）……59
第38図　第２号住居跡出土土器（５）……61
第39図　第２号住居跡出土土器（６）……62
第40図　第２号住居跡出土土器（７）……64
第41図　第２号住居跡出土土器（８）……66
第42図　第２号住居跡出土土器（９）……67
第43図　第３号住居跡出土土器……69
第44図　第４号住居跡出土土器（１）……70
第45図　第４号住居跡出土土器（２）……72
第46図　第５号住居跡出土土器（１）……74
第47図　第５号住居跡出土土器（２）……75
第48図　第５号住居跡出土土器（３）……77
第49図　第５号住居跡出土土器（４）……79
第50図　第５号住居跡出土土器（５）……80
第51図　第６号住居跡出土土器……82
第52図　第７号住居跡出土土器（１）……84
第53図　第７号住居跡出土土器（２）……85
第54図　第７号住居跡出土土器（３）……87
第55図　第７号住居跡出土土器（４）……89
第56図　第７号住居跡出土土器（５）……90
第57図　第７号住居跡出土土器（６）……91
第58図　第８号住居跡出土土器（１）……93
第59図　第８号住居跡出土土器（２）……95
第60図　第８号住居跡出土土器（３）……97
第61図　第８号住居跡出土土器（４）……98
第62図　第８号住居跡出土土器（５）……100
第63図　第９号住居跡出土土器（１）……102
第64図　第９号住居跡出土土器（２）……103
第65図　第10号住居跡出土土器（１）……106
第66図　第10号住居跡出土土器（２）……107
第67図　第11号住居跡出土土器（１）……108
第68図　第11号住居跡出土土器（２）……110

第69図　第12号住居跡出土土器（１）……112
第70図　第12号住居跡出土土器（２）……113
第71図　第12号住居跡出土土器（３）……114
第72図　第13号住居跡出土土器……116
第73図　第14号住居跡出土土器（１）……118
第74図　第14号住居跡出土土器（２）……120
第75図　第14号住居跡出土土器（３）……121
第76図　遺構外出土土器（１）……123
第77図　遺構外出土土器（２）……124
第78図　遺構外出土土器（３）……126
第79図　第１号住居跡出土石器……128
第80図　第２号住居跡出土石器（１）……130
第81図　第２号住居跡出土石器（２）……131
第82図　第２号住居跡出土石器（３）……133
第83図　第３号住居跡出土石器……134
第84図　第４号住居跡出土石器……135
第85図　第５号住居跡出土石器……136
第86図　第６号住居跡出土石器……137
第87図　第７号住居跡出土石器（１）……139
第88図　第７号住居跡出土石器（２）……140
第89図　第８号住居跡出土石器……142
第90図　第９号住居跡出土石器（１）……144
第91図　第９号住居跡出土石器（２）……145
第92図　第10号住居跡出土石器……146
第93図　第11号住居跡出土石器……147
第94図　第12号住居跡出土石器……148
第95図　第13号住居跡出土石器（１）……150
第96図　第13号住居跡出土石器（２）……151
第97図　第14号住居跡出土石器（１）……152
第98図　第14号住居跡出土石器（２）……153
第99図　土壙出土石器・遺構外出土石器（１）……156
第100図　遺構外出土石器（２）……157
第101図　遺構外出土石器（３）……159
第102図　出土土製品（１）……165
第103図　出土土製品（２）……166
第104図　出土土製品（３）……167
第105図　出土土製品（４）……168
第106図　丸山遺跡出土土器変遷図（１）……174
第107図　丸山遺跡出土土器変遷図（２）……175
第108図　丸山遺跡出土土器変遷図（３）……176
第109図　第１期の土器群　……177
第110図　第３期の土器群（１）……181
第111図　第３期の土器群（２）……182
第112図　第５号住居跡土器出土層位概念図……184
第113図　第２号住居跡土器出土層位概念図……186
第114図　丸山遺跡出土中峠諸類型……188
第115図　第１・２期の住居跡と土器（１）……191
第116図　第１・２期の住居跡と土器（２）……192
第117図　検出住居跡の平面設計（１）……194
第118図　検出住居跡の平面設計（２）……195
第119図　集落変遷図（１）……199
第120図　集落変遷図（２）……200
第121図　遺物出土地点位置図　……206
第122図　表採遺物（１）……207
第123図　表採遺物（２）……208
附　図　丸山遺跡全側図

巻頭図版目次

巻頭図版１　第２号住居跡遺物出土状態
第２号住居跡出土土器
巻頭図版２　第５号住居跡土層断面
第５号住居跡出土土器

図版目次

図版１　丸山遺跡第１次調査区全景
図版２　第１号住居跡全景・第１号住居跡炉跡
図版３　第２号住居跡全景・第２号住居跡炉跡
図版４　第２号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
図版５　第２号住居跡遺物出土状況（３）・（４）
図版６　第３号住居跡全景・第３号住居跡炉跡
図版７　第４号住居跡全景・第４号住居跡炉跡
図版８　第４号住居跡遺物出土状況
　　第５号住居跡全景
図版９　第５号住居跡炉跡
　　第５号住居跡遺物出土状況
図版10　第５号住居跡土層断面・第６号住居跡全景
図版11　第６号住居跡炉跡
　　第６号住居跡遺物出土状況
図版12　第７号住居跡全景・第７号住居跡炉跡
図版13　第７号住居跡遺物出土状況
　　第８号住居跡全景
図版14　第９・10号住居跡全景・第９号住居跡炉跡
図版15　第９号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
図版16　第10号住居跡遺物出土状況（１）・（２）
図版17　第11号住居跡全景
　　第11号住居跡遺物出土状況
図版18　第12号住居跡全景
　　第12号住居跡遺物出土状況
図版19　第13号住居跡全景・第14号住居跡全景
図版20　第14号住居跡遺物出土状況
　　第１号集石土壙全景
図版21　第１・２（１）号住居跡出土土器
図版22　第２号住居跡出土土器（２）
図版23　第２号住居跡出土土器（３）
図版24　第２号住居跡出土土器（４）
図版25　第２号住居跡出土土器（５）
図版26　第３・４（１）号住居跡出土土器
図版27　第４（２）・５（１）号住居跡出土土器
図版28　第５号住居跡出土土器（２）
図版29　第５号住居跡出土土器（３）
図版30　第６・７（１）号住居跡出土土器
図版31　第７号住居跡出土土器（２）
図版32　第７号住居跡出土土器（３）
図版33　第７（４）・８（１）号住居跡出土土器
図版34　第８号住居跡出土土器（２）
図版35　第８号住居跡出土土器（３）
図版36　第８（４）・９（１）号住居跡出土土器
図版37　第９号住居跡出土土器（２）
図版38　第10・11（１）号住居跡出土土器
図版39　第11号住居跡出土土器（２）
図版40　第11（３）・12（１）号住居跡出土土器
図版41　第12（２）・13（１）号住居跡出土土器
図版42　第13（２）・14（１）号住居跡出土土器
図版43　第14号住居跡出土土器（２）
　　遺構外出土土器・表採土器
図版44　小型石器・第１号住居跡出土石器
図版45　第２号住居跡出土石器（１）・（２）
図版46　第２（３）・３号住居跡出土石器
図版47　第４・５号住居跡出土石器
図版48　第６・７（１）号住居跡出土石器
図版49　第７（２）・８号住居跡出土石器
図版50　第９号住居跡出土石器
図版51　第10・11号住居跡出土石器
図版52　第12・13（１）号住居跡出土石器
図版53　第13（２）・14（１）号住居跡出土石器
図版54　第14号住居跡出土石器（２）・（３）
図版55　土壙・遺構外出土石器（１）
図版56　遺構外出土石器（２）・土製品

Ⅰ　調査の概要

1　発掘調査に至る経過

試掘調査の実施

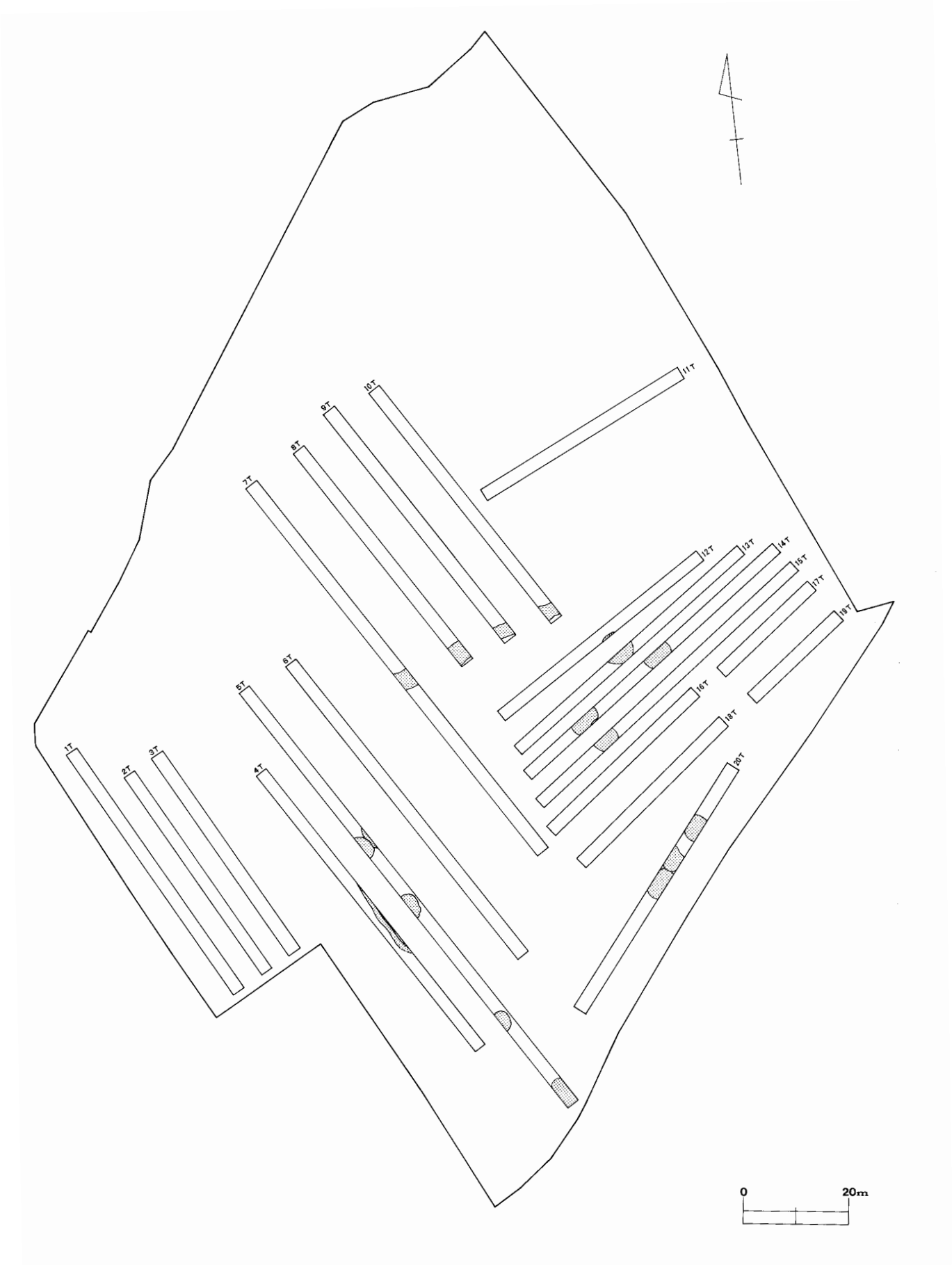
平成３年５月、学校法人国際学園よりグランド造成事業に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出された当該開発については、昭和63年度にすでに埋蔵文化財包蔵地の照会がなされていたが、当時、狭山市教育委員会には発掘調査担当者が１名しかおらず、しかも上広瀬地区区画整理事業に伴う調査に専従していたため対応し得なかった経緯がある。そのため、早急な対応が求められたが、平成３年度に増員なった職員も４月より城ノ越地区ほ場整備事業関係の調査に従事していたため即応は不可能であった。こういった状況の中で、事業者との協議を行い、試掘調査は６月中に、本調査が必要な場合には城ノ越遺跡発掘調査終了後に実施することで合意した。試掘調査は、６月10日から６月17日にかけて、開発区域全域19,320㎡を対象として、狭山市教育委員会社会教育課が行った。対象区内には雑木、植木畑があるため、調査は任意の間隔で随時設定したトレンチを21本入れ、遺構検出に努めた（第１図）。その結果、開発区域の南東部分に縄文時代中期の遺構11箇所、北部には東西を横切るように根切り溝と思われる溝状遺構が検出された。縄文時代の遺構のほとんどは住居跡と考えられ、円を描くように分布していた。この結果について、国際学園、工事関係者に現地で報告するとともに、三者で検討のうえ、本調査実施範囲を確定した。ただし、設計変更の余地もあるため後日再度協議を行うこととした。

発掘調査までの経過

平成３年７月２日、狭山市役所において三者協議が行われた。すでに試掘結果については報告済みであるため、当日は設計変更案と調査開始時期について主に協議がなされた。国際学園側からは鉄塔周辺部約2,400㎡を緑地として現状保存としたい旨の提案があった。この結果、過日確定した対象区からこれを除き、残り3,658㎡について発掘調査を実施、調査開始は10月中旬頃とし、諸準備をそれまでに完了することで合意に達した。協議結果を受けて、狭山市教育委員会では丸山遺跡調査会を発足させ、本調査に至る事務を調査会に委嘱した。文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出は平成３年９月21日付で文化庁あて提出した。なお、本調査の業務委託契約は、平成３年10月11日に学校法人国際学園と丸山遺跡調査会間で締結され、即日調査を開始した。

なお、発掘調査の届出に対する文化庁の指示通知は、例言に示したとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	開　発　者	調査面積	時　　代
丸　山　遺　跡 （県遺跡番号22－037）	埼玉県狭山市柏原 字半貫1,866外	学校法人 国際学園	3,658㎡	縄文時代前期・中期 奈良・平安時代



第１図　丸山遺跡確認調査トレンチ配置図

２　発掘調査の組織

発掘調査（平成３年度）

主体者　狭山市丸山遺跡調査会	会　長	武居富雄（狭山市教育委員会	教育長）
	理　事	斎藤勝治（狭山市文化財審議会	委員長）
	理　事	山崎　稔（狭山市教育委員会	次　長）
	理　事	水越昭久（　同	参　事）
庶　務　狭山市丸山遺跡調査会	事務局長	大澤晋平（　同	社会教育課長）
	事務局	伊藤　清（　同	文化財係長）
	事務局	小渕良樹（　同	文化財係主事）
	事務局	石塚和則（　同	文化財係主事補）
	事務局	松嶌直人（　同	文化財係主事補）
調査担当		石塚和則	

整理・報告書刊行（平成15年度）

主体者　狭山市遺跡調査会	会　長	野村甚三郎（狭山市教育委員会	教育長）
	理　事	今坂隆二　（狭山市文化財審議会	委員長）
	理　事	濱田良一　（狭山市教育委員会	次　長）
庶　務　狭山市遺跡調査会	事務局長	名雲康仁　（　同	社会教育課長）
	事務局次長	末吉　隆　（　同	社会教育課主幹）
	事務局	石塚和則　（　同	社会教育課主任）
	事務局	大野美由紀（　同	社会教育課主任）
	事務局	安井智幸　（　同	社会教育課主事補）
整理担当		石塚和則	

３　調査の経過

発掘調査（平成３年度）

平成３年

10月11日（金）～11月22日（金）

調査実施に関する諸手続きを終え、10月14日に現場事務所設置、機材を搬入し調査を開始する。10月15日より表土除去を始める。調査区内は篠竹の繁茂が広範囲に及んでいたため、表土除去と併行して調査区全体の根の処理を行った。遺構確認作業は調査区西側より実施し、根除去が済み次第、徐々に確認範囲を拡大していった。11月18日までに調査区中央部までの確認を終える。第１～５号住居跡、第１・２号溝状遺構を検出した。10月16日から18日にかけて基準点測量と杭打ちを行う。遺構個々の調査は10月17日より、第１・２号住居跡の掘り下げから始める。また、調査区北側を東西に横断する第１号溝状遺構の掘削については、土木作業員の協力を得た。第２号住居跡は当初より多量の土器の出土があったが、11月第２週目にはほぼ全体像が明確となった。第４・５号住居跡の調査は11月11日より開始した。後者は床面上10㎝ほどに焼土、炭化物の層が遺構全体に認められ、床面も焼けていたため火災住居と判断した。また、焼土、炭化物層直上からは第２号住居跡と同様、多量の土器が出土した。11月15日から19日にかけて、これらの

遺構の遺物出土状況写真を終え、順次遺物出土状況図、遺構平面図作成に入る。

11月25日（月）～12月27日（金）

第２号住居跡等の遺物出土状況図、遺構平面図の作成に併行して、調査区東側の遺構確認作業を行う。第６～10号住居跡が検出され、順次調査に入る。第７号住居跡からは大量の浅鉢の出土を見る。第８号住居跡では、勝坂式末の土器群に混在して加曽利ＥⅠ式土器の出土が確認された。また、出土状況図作成を終えた第２号住居跡の全景写真準備中に、遺構の外側で柱穴状ピットが確認された。さらに、隣接する第２号溝状遺構清掃中に当該遺構の壁から炉跡が検出されたため、周辺を精査したところ第３号住居跡が追加確認された。年内中に第１～５号住居跡及び第１号溝状遺構の調査を終える。また、12月中旬頃より新聞記者の来跡が相次ぐ。なお、年内の調査終了が不可能となった時点で国際学園側と協議し、平成４年２月中旬までの期間延長の承諾を得た。

平成４年

１月７日（火）～２月14日（金）

調査再開。第６～10号住居跡の調査を継続しつつ、調査区南東部の遺構確認を行う。第11～13号住居跡を検出し、掘り下げを開始する。いずれも加曽利Ｅ式の土器を伴い第６号住居跡とほぼ同時期と考えられる。この頃、埼玉県立埋蔵文化財センターより現地説明会開催の打診を受ける。調査期間に若干の余裕があるため、実施の方向で準備を進め所沢市役所内記者クラブにおいて調査概要を説明し、開催要綱の掲載を依頼する。１月13～17日にかけては、第７号住居跡の遺物出土状況図の作成、第11～13号住居跡の掘り下げと現地説明会の準備に追われる。１月19日、現地説明会の開催。県内各地より550名以上の参加があった。25日までに第７号住居跡の遺物取り上げと第11～13号住居跡の掘り上げをほぼ終える。27日には図面作業等を一時中断し遺構群の清掃を行い、28日に航空測量を実施した。航空測量終了後にその写真から第６号住居跡東側に遺構プランを視認する。急遽、30日から第14号住居跡の調査に入り、２月７日までに当該住居跡の調査を終える。２月10日以降、第６～13号住居跡平面図作成、各住居跡の炉跡調査を順次行い、２月13日に完了した。同日、機材の撤収。14日には現場事務所を引き上げ、現地作業の全てを終える。

出土品整理・報告書刊行（平成４年度～平成15年度）

出土遺物及び図面整理作業は、他の事業の合間をぬって断続的に実施した。平成12年度後半には土器実測、石器実測の大半を終えたため、報告書刊行に向けて図版作成作業を開始した。平成13年度前半は、緊急発掘調査が２件入ったため一時作業中断を余儀なくされたが、後半には図版作成を終えた。平成14年５月より原稿執筆を開始し、並行して割付けを行った。平成14年度後半には大規模な発掘調査が入ったため、平成15年５月まで中断したが、６月より整理作業を再開し、原稿執筆と並行して遺物写真撮影を実施。９月には編集作業をすべて終え、報告書刊行の運びとなった。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の概観

丸山遺跡は、狭山市柏原字半貫地内に所在する縄文時代と奈良・平安時代の複合集落遺跡である。市内においては、西武新宿線狭山市駅より北へ3.6km にあり、狭山市でも川越・日高両市との市境に近い位置に所在する。本遺跡の立地する入間川左岸の通称入間台地は、入間川をはさんで南側に狭義の武蔵野台地と対峙し、北側は越辺川によって区切られている。周辺は一見平坦に見えるが、北小畔川以南から入間川の間の旧地形は多くの小河川によって開折された小支谷に埋没谷を含めて非常に複雑な地形を呈している。丸山遺跡は、このような小河川の一つ、智光山公園内に水源を持つ現在の５号幹線水路と本市と日高市の境界付近に流れる南小畔川によって形成された幅の狭い台地上に立地している。また、遺跡周囲は湧水起源の小流にさらに侵食され、独立丘状を呈している。標高は遺跡中央が55m、周辺部50m 前後、遺跡南側の水路付近の低位面は48m 前後を測り、南東方向に強い傾斜が認められる。台地平坦部から斜面にかけて縄文時代中期を主体とした濃密な遺物散布が認められ、多数の当該期遺構の存在が予想される。

2　歴史的環境

市内縄文時代遺跡概観

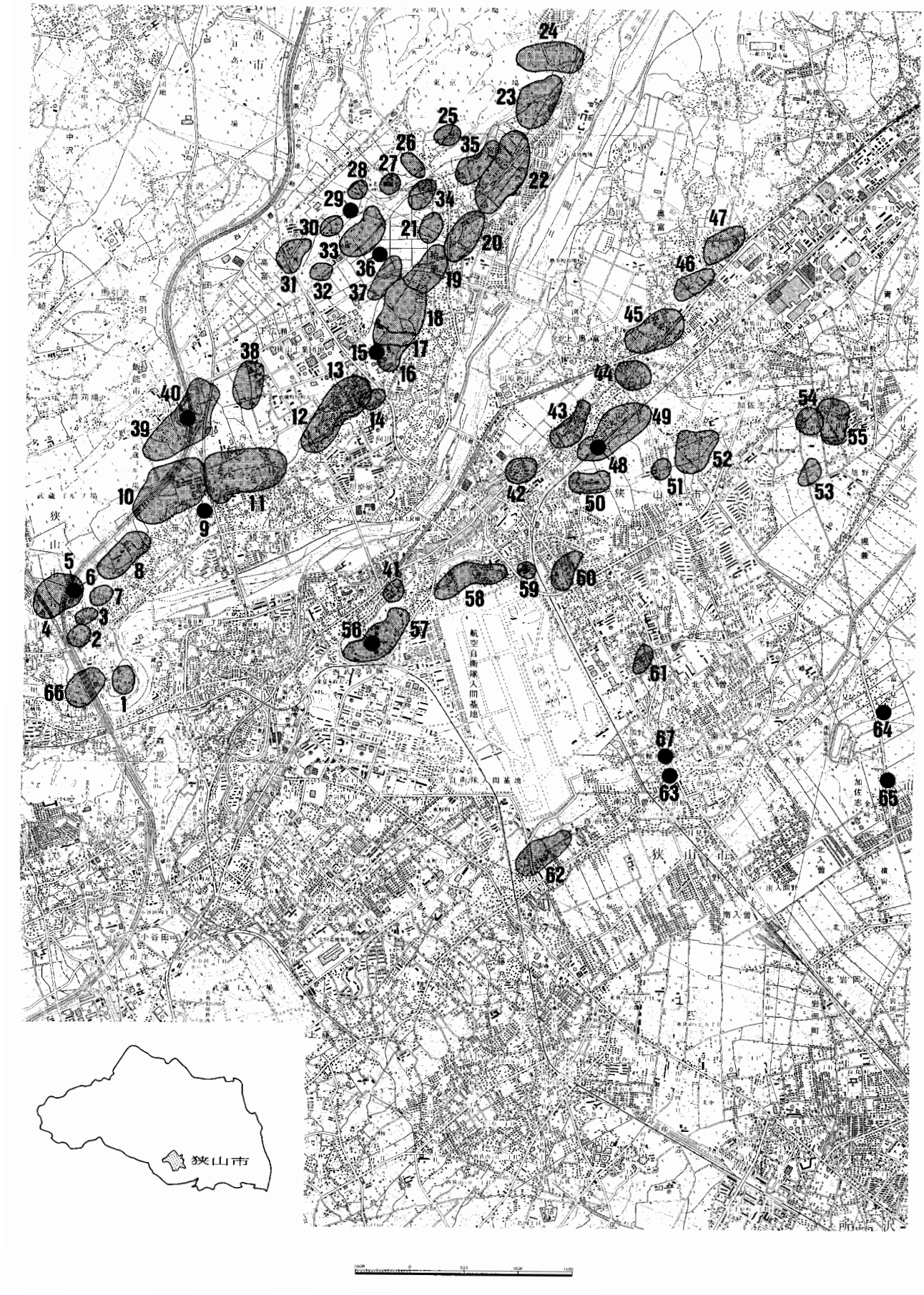
丸山遺跡南側の小河川流域には、両岸に縄文時代遺跡が多数分布している。その密度は、市内においても特異な様相を呈し、南小畔川沿いに日高市、飯能市にも広がっている。これらの遺跡形成時期は、現在知られているところでは草創期から後期後半に至るが、その主要時期は前期及び中期中葉から後期前半にかけてである。この傾向は、入間川両岸の段丘上や市域南側に流れる久保川流域の他の市内縄文時代遺跡と概ね一致している。

狭山市内には67箇所の遺跡が所在する（第２図）が、その大多数から縄文土器が出土している。特に昭和60年代以降、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）関係の調査を含めて、数々の発掘調査が実施され、多くの成果が上げられている。これらの成果の蓄積と継続的に行う分析により、今後市域を含めた本地域の縄文時代における歴史的動態を明らかにしていくこととなろう。ここでは、近年の新知見を含めて概述するとともに、市内の縄文時代遺跡群を俯瞰することにする。

市内における当該時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落規模の拡大、遺跡数の急激な増加等、大きな動きが認められるが、前述のように数的には中期中葉から後期前半のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中するが、その前後においても近年の調査で資料的蓄積が若干認められる。

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡（39）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）、今回報告の丸山遺跡、右岸では滝祇園遺跡（42）と市内各地で当該期のものと考えられる尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加するものと思われるが、現時点では土器を伴っていないため本期の詳細については不明である。

早期では押型文土器の小破片が高根遺跡（33）で出土している他、隣接する同一水系の日高市向山遺跡では本段階主体の住居跡６軒が検出されている。南小畔川右岸沿いには該期の遺跡が多く分布する見通し



第２図　狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

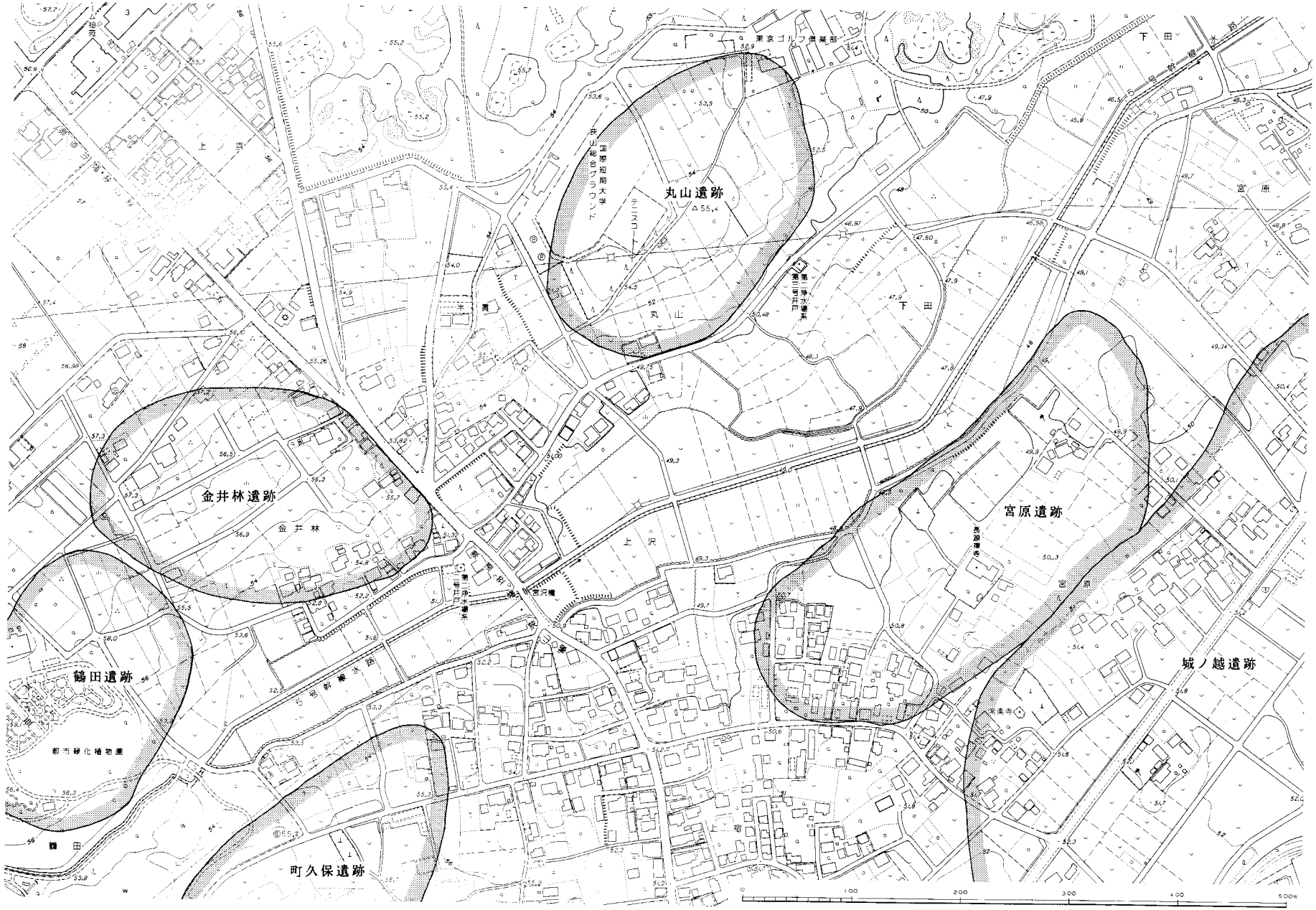
1　東八木窯跡群（22049）奈・平
2　八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平
3　八木北遺跡（22021）奈・平
4　八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平
5　沢口上古墳群（22020）古（後）
6　笹井古墳群（22019）古（後）
7　沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平
8　宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平
9　金井遺跡（22071）中
10　金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中
11　上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平
12　霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平
13　今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平
14　上広瀬古墳群（22001）古（後）
15　森ノ上西遺跡（22079）先
16　森ノ上遺跡（22008）縄（中）、奈・平
17　富士塚遺跡（22009）縄（中）、奈・平
18　鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
19　小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中
20　御所の内遺跡（22012）奈・平
21　英遺跡（22074）奈・平、中
22　城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中
23　宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平
24　字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平
25　丸山遺跡（22037）縄（草・前～後）、奈・平
26　金井林遺跡（22035）縄（前～後）
27　鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
28　上の原東遺跡（22065）奈・平
29　上の原西遺跡（22063）縄（中）
30　半貫山遺跡（22061）中
31　稲荷山遺跡（22058）縄（後）
32　前山遺跡（22059）縄（中）
33　高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
34　町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中
35　宮原遺跡（22017）縄（前～後）
36　下双木遺跡（22078）縄（草）
37　上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平
38　上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
39　西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平
40　東久保遺跡（22070）先
41　上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
42　滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平
43　峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平
44　戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平
45　揚櫨木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平
46　坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平
47　稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平
48　上中原遺跡（22025）先
49　中原遺跡（22025）縄（早～後）、奈・平
50　沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平
51　沢久保遺跡（22041）縄（中）
52　下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平
53　吉原遺跡（22067）縄（前）
54　下向遺跡（22085）縄（前～後）
55　台遺跡（22084）縄（前～後）
56　稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
57　稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
58　石無坂遺跡（22083）縄（中）、奈・平
59　富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平
60　富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平
61　富士見南遺跡（22081）縄（中）
62　町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平
63　七曲井（22046）中
64　堀兼之井（22047）中
65　八軒家の井（22076）中
66　八木前遺跡（22087）縄（前・後）
67　堀難井遺跡（22089）中

があり、今後の調査進展に期待するものである。早期後半には、市内でも動きが認められるようになる。今宿遺跡では野島式に比定される条痕文系土器を伴う炉穴が確認されている。圏央道関連調査では、西久保遺跡で炉穴が検出された。構造や重複状況から早期のものと考えられるが、具体的時期は不明である。

前期前半では花積下層式が今宿遺跡で、関山式が宮原遺跡（35）で採集されているが、未だ遺構の検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった集落調査例がある。昭和56年に調査された入間川右岸の揚櫨木遺跡（45）では、段丘崖に沿って線状に伸びる住居跡群が検出されている。本遺跡に近接する稲荷上遺跡(47)でも、平成７年度実施の調査において同時期の遺構が検出され、良好な一括資料を得ている。また、左岸では笹井地区に該期遺跡の集中があり、八木前遺跡（66)、八木遺跡（２)、八木上遺跡（４）では、圏央道関連の調査において黒浜期の遺構が調査され、これらを含めれば入間川両岸にわたって広く黒浜期集落が展開していた様相が明らかとなっている。諸磯期以降の遺跡としては、笹井に所在する金井上遺跡（10)、八木上遺跡があり、前者では前期後半の包含層、後者では前期終末期の住居跡が１軒検出されている。該期に遺跡減少、縮小傾向があることは周知であるが、市域においても例外ではない。

中期には表面採集資料も含めてであるが、遺跡数は39箇所と急増し市内遺跡全体の60％を超える。特に中葉からの増加、集落規模の拡大は顕著となる。代表的な遺跡としては、今回報告の丸山遺跡、前期から後期後半までの継続が確認されている宮原遺跡が市域東部の柏原に、大規模な集落跡として著名な宮地遺跡が西部の笹井に位置するが、いずれも入間川左岸に立地する。宮地遺跡（８）は現在までに６次にわたる調査が実施され､70軒に及ぶ住居跡群が検出され､それらの分布状況から双環状集落と考えられている。主体となる時期は、勝坂期中頃から加曽利ＥⅢ期であるが、称名寺式土器を伴う土壙も検出されており、後期初頭まで継続するのは確実とみられる｡ただし､現在のところ加曽利ＥⅡ期の遺構数減少が認められ、これを遺跡内に時期的な占地変化とみるか、該期における集落規模縮小とするのかは今後の未調査区域の調査進展を待ちたい。なお、本遺跡の北約1.5km には飯能市から日高市にかけて南小畔川が流れており、その流域沿いにも多くの縄文時代遺跡が連なる。圏央道開通後、これらの遺跡でも数回にわたって調査が行われている。近年では、日高市向原遺跡で加曽利ＥⅡ期を主体とする大規模な集落跡が検出されているが、あたかも宮地遺跡の縮小想定期に連動しているかのようで興味深い。いずれにしても、市域北側と周辺地域の当該期の繁栄は瞠目すべきものがある。中期末では、入間川左岸において前述の宮地遺跡、柏原地内の森ノ上遺跡（16)、字尻遺跡（24)、右岸では揚櫨木遺跡等、市内各地で継続期間が限定的な小規模な集落跡が確認されており、加曽利ＥⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。また今宿遺跡では、同時期であるが張り出しを持たないタイプの径３m 前後の小型住居跡が確認されている。本タイプの住居跡は、日高市宿東遺跡等でも検出例があり、柄鏡形住居跡との系統性、共存関係等、興味深い問題が提起されている。

後期の遺跡としては17遺跡が確認されているが、中期末からの遺構減少、遺跡規模の縮小がそのまま継続しているものと言えよう。また、遺跡立地は台地低位に移る傾向が認められる。調査事例は少なく、遺構が検出された遺跡は３遺跡を数えるのみである。市域南部、久保川流域に立地する下向沢遺跡（52）では、昭和26年、入間川町誌編纂事業の一環として調査が実施され、狭山市における発掘調査の嚆矢となっている。『入間川町誌』の記述によれば、縄文時代後期の住居跡１軒、集石土壙１基、土壙１基が検出されている。その後、同遺跡では２回にわたって調査が実施され、中期末から後期初頭にかけての住居跡状



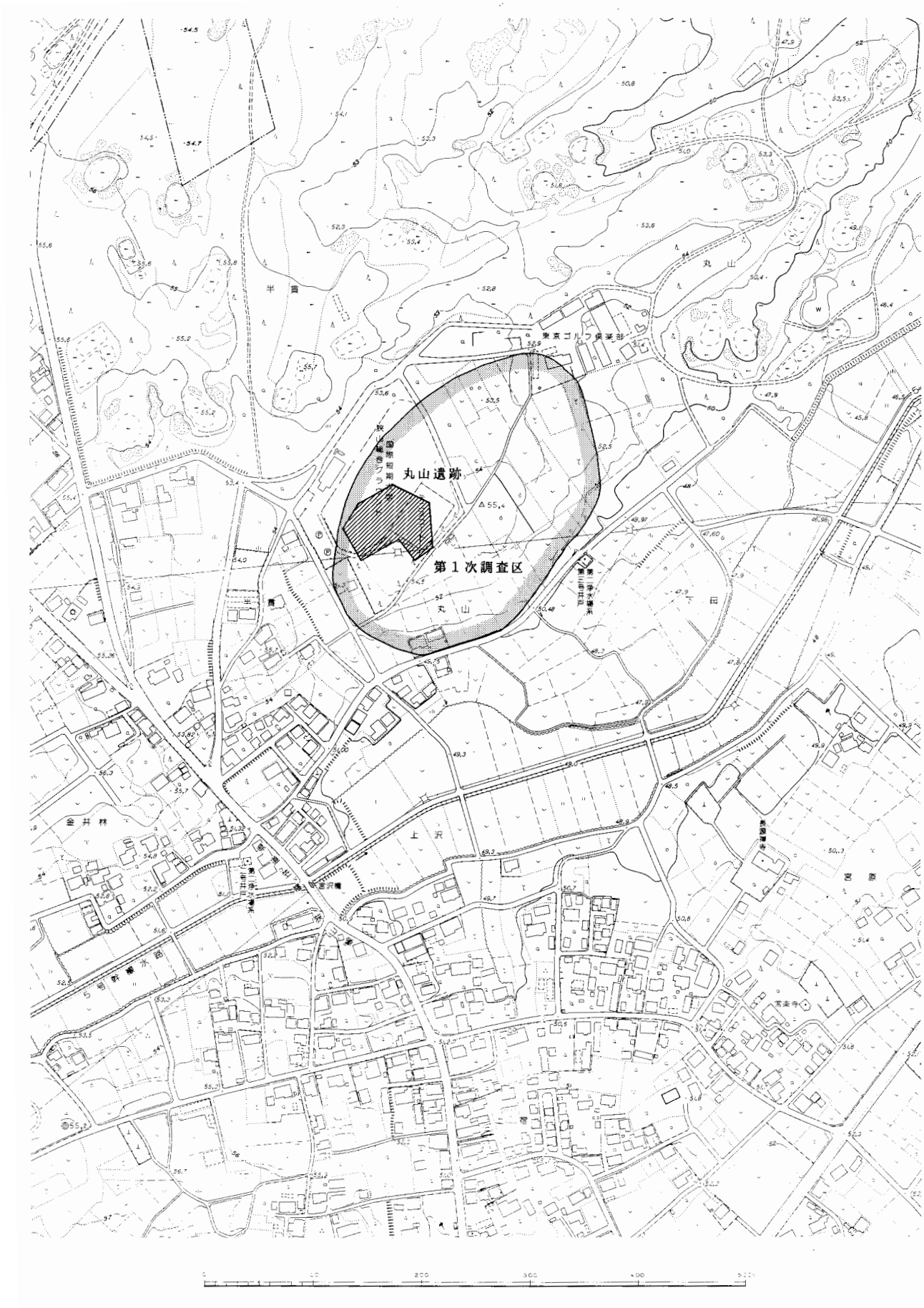
第３図　丸山遺跡と周辺遺跡

の遺構が検出されているが、上層部の撹乱が著しくその様相は不明確となっている。柏原所在の高根遺跡は丸山遺跡と同様、智光山公園に水源を有する小河川に面して立地する。昭和59年度の市立動物園建設に伴う発掘調査では後期前半の住居跡１軒、後期初頭から前半にかけての屋外埋甕５基、土壙多数が検出された。高根遺跡の北東に位置する同水系の宮原遺跡は、前期から後期後半に至る大規模な遺跡である。市域で唯一、加曽利Ｂ式が表採されているため、長らく調査が待たれていた。平成13年、携帯電話中継基地建設を契機として初めての調査が実施された。調査対象となったのは、南側に丸山遺跡を望む遺跡北斜面の一部で、堀之内期の住居跡６軒、屋外埋甕１基、後期前半を主体とする土壙群、包含層が確認され、少なくとも加曽利Ｂ期まで継続する集落の一端が明らかとなった。遺物の中には注口土器や筒形土偶の顔面部を含み、貴重な成果が得られた。また、本遺跡の南側に接する城ノ越遺跡（22）では、平安時代の遺構覆土からの出土であるが、安行Ⅱ式土器の口縁部破片が確認されており、宮原遺跡が後期末まで継続する可能性を示唆している。なお、縄文時代晩期の遺跡は現在までに市内では発見されていない。

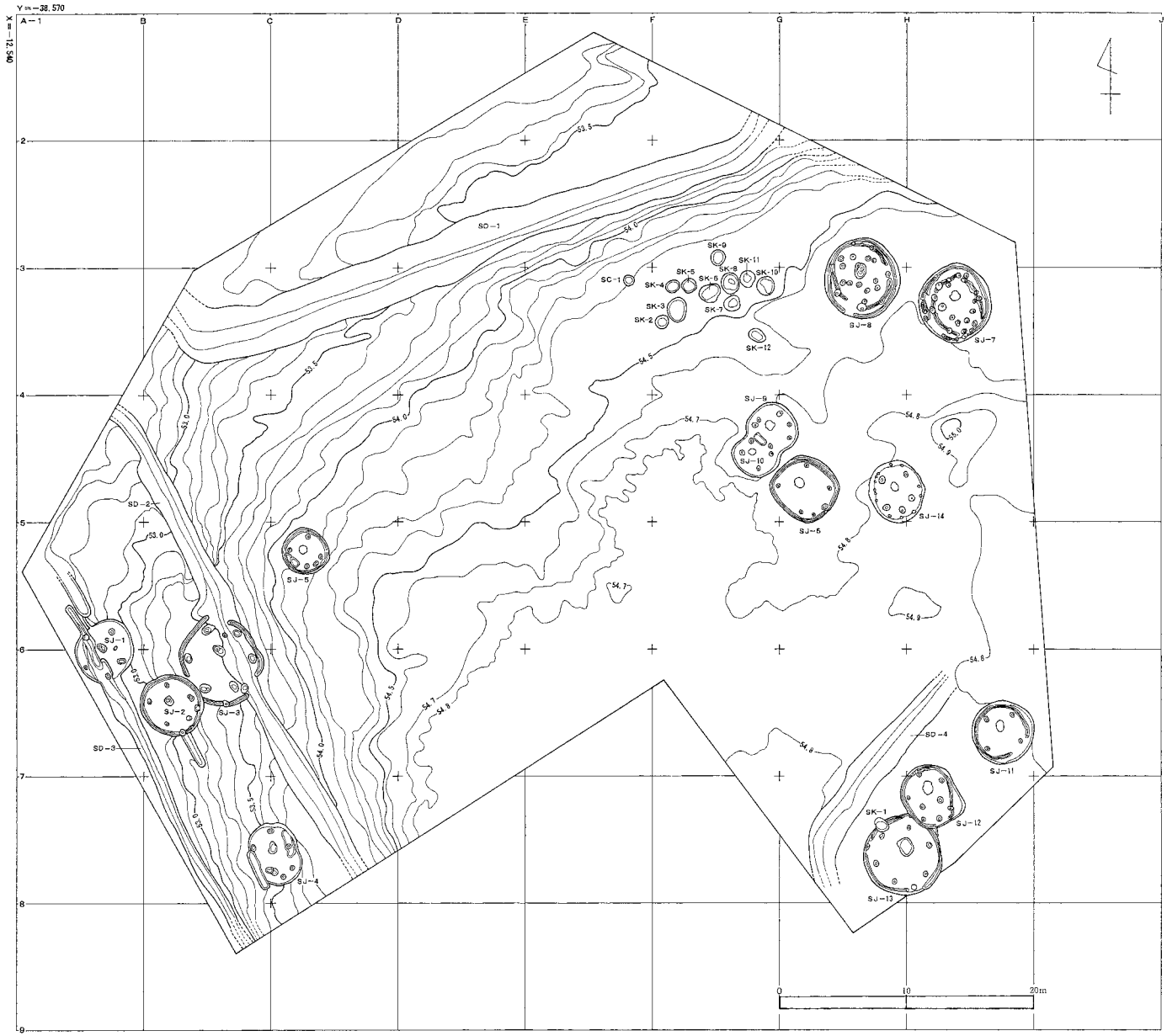
丸山遺跡とその周辺

丸山遺跡周辺には、前述したように智光山公園に水源を有する小河川両岸に、近接した位置関係をもって前期から後期に至る多数の縄文時代遺跡が展開している（第３図）。図中にはすべてを網羅できなかったが、左岸には東から字尻遺跡、丸山遺跡、金井林遺跡（26）、鶴田遺跡（27　未調査）、上野原西遺跡（29　未調査）と連なり、稲荷山遺跡（31　未調査）、前山遺跡（32　未調査）をもって水源付近に及ぶ。右岸では、西より高根遺跡、町久保遺跡（34）、宮原遺跡と続く。また、宮原遺跡の背面には入間川崖線に面して城ノ越遺跡、宮ノ越遺跡（23）がひかえている。この遺跡密集現象は、稲荷上遺跡以西の日高・飯能両市域でも南小畔川流域に継続する。遺跡密集の要因は、多数の湧水点が認められることから、取水の容易さを第一とすることができよう。また、これらの水資源に支えられた食料資源も豊富であったことも推測を待たない。入間川左岸段丘沿いにも同時代遺跡の連続展開がみられるが、湧水点は南小畔川流域に比して少なく、集落形成と拡大を阻害しているようである。現に周辺に湧水点を有する笹井の前期集落群や中期の大集落である宮地遺跡を除けば、集落規模や継続性にかなりの差が認められる。

丸山遺跡周辺の遺跡については、調査面積は限定的ながら多くの調査が行われており、その結果から実態が明らかになりつつある。主体となる時期は、市域全体で遺跡拡大が認められる前期中葉以降、中期末に及ぶ。前期黒浜期の土器片は字尻遺跡、丸山遺跡、金井林遺跡、宮原遺跡、宮ノ越遺跡で認められ、表採資料も含めればほとんど遺跡で出土を見る。ただし、前掲の遺跡からは前期住居跡の検出はなく、土壙、陥穴が確認される程度で、採集活動痕跡の露営地的なものである。該期の活動拠点と断じ得る遺跡は未だ確定していない。中期では、丸山遺跡を始めとして字尻遺跡、町久保遺跡、高根遺跡で住居跡が検出されている他、金井林遺跡では包含層が検出されている。これらの検出遺構のうち、字尻遺跡のものは加曽利ＥⅢ期のものであるが、他は勝坂末から加曽利ＥⅡ期にかけての遺構であり、これらの時期に集落形成の最盛期を迎えたと解釈できよう。また、現時点では明確な環状集落が検出されている丸山遺跡と対岸に立地する宮原遺跡が本地域における中核となっている可能性を指摘し得る。中期末から後期前半にかけては字尻遺跡、宮原遺跡、高根遺跡と数的には増加するが、規模は縮小し立地も低位面に降りる。未調査遺跡が多い中、確定的なことは言えないが、後期においては小河川流域の水場を中心に小規模集落が維持されたものと思われる。しかし、後期後半の宮原遺跡断絶後、丸山遺跡周辺も含めて、市域から人間活動の痕跡は消え、営為の歴史は古墳時代後期になってようやく入間川流域の段丘上に再登場することとなる。



第４図　丸山遺跡第１次調査区位置図



第５図　丸山遺跡第１次調査区全側図

Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物

１　調査成果の概要

今回の調査は、遺跡の北西側3,658㎡を対象として実施した（第４図）が、工事対象区域は遺跡のおよそ１/４に及ぶ。調査結果から、今回の調査区が縄文時代の遺構主要分布域の大略北側に当たることが明確となった。検出された遺構は、縄文時代の住居跡14軒、集石土壙１基、土壙12基である（第５図）。住居跡はいずれも中期のもので、重複関係は少なく遺存状態も比較的良好である。時期内訳は勝坂式後半段階４軒、勝坂式最終末・加曽利ＥⅠ式前半段階６軒、加曽利ＥⅠ式後半段階１軒、加曽利ＥⅡ前葉段階３軒である。集石土壙、土壙は時期決定資料を欠くため、中期とする以外、具体的時期は不明である。また、土壙群北側には薄いながら遺物包含層の形成が認められ、遺構群と同時期の遺物が出土している。

住居跡群の総体的な平面分布は、北に広く開口する馬蹄形状を呈し、開口部付近に集石土壙、土壙がかたまって位置している。また、現状保存とした鉄塔付近でも勝坂期の住居跡が確認されており、勝坂段階の住居跡群は大略環状を呈すると思われる。さらに、調査区南側斜面部には多量の遺物散布が認められることから、南斜面肩部の遺構密度はかなり濃いものと予想される。ただし、その時期は遺物量比から加曽利Ｅ期に偏る。分布形態も肩部に沿った線状分布が考えられ、勝坂式段階と加曽利ＥⅠ後半以降では集落構造原理の変化が想定される。溝状遺構は断面形状、位置関係、組み合わせから近・現代のもので地境あるいは根切りの溝と考えられる。覆土には縄文土器の流れ込みが見られたのみで、当該遺構の時期を明確にする遺物は確認されなかった。ただし、第３号溝状遺構の覆土中位から針金が出土している。

出土遺物は、コンテナにして70箱を数える。土器の約７割が勝坂式、３割程度が加曽利Ｅ式で遺構軒数を如実に反映している。復元された完形、半完形土器は100個体を超える。特に、第２号住居跡出土土器を始めとする勝坂式後半期の一括出土土器群は注目に値するとともに、本地域の基本資料となり得よう。石器は縄文時代中期の一般的な組成を呈し、多量の打製石斧の他、磨製石斧、石鏃、石錐、石皿、砥石等が見られる。また、中期以外のものとして草創期の有舌尖頭器が第８号住居跡覆土内より、後期のものと思われる石錘が遺構確認面より採集されている。

２　縄文時代草創期の遺物

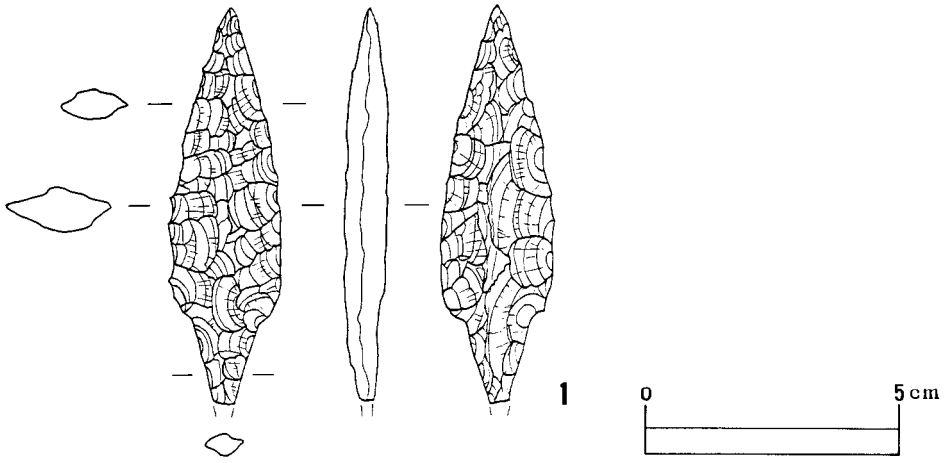
石　器

表採石器（第６図）

第６図１は、第８号住居跡の覆土より出土したものであるが、明らかに時期が異なるため表採扱いとした。なお、第８号住居跡は調査区北西部の台地肩部付近に位置している。

本石器は、縄文時代草創期の有舌尖頭器と考えられる。基部の先端を欠損する。最大幅は基部より若干上にあり、形状も均整がとれた優品である。正面は両側縁からの細かい調整剥離によって覆われ、素材となった剥片の様相を残さない。稜は中心よりわずかに左に寄る。裏面の調整は正面に比してやや粗く、特に右半分に大きな剥離が目立つ。裏面の稜は、ほぼ中央を通っている。現存長5.8cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cm を測り、重量は5.5g である。石材はチャートを使用している。

中期の住居跡からの出土であるため、時期等の詳細は不明である。



第６図　縄文時代草創期の遺物

３　縄文時代中期の遺構

住居跡

第１号住居跡（第７図）

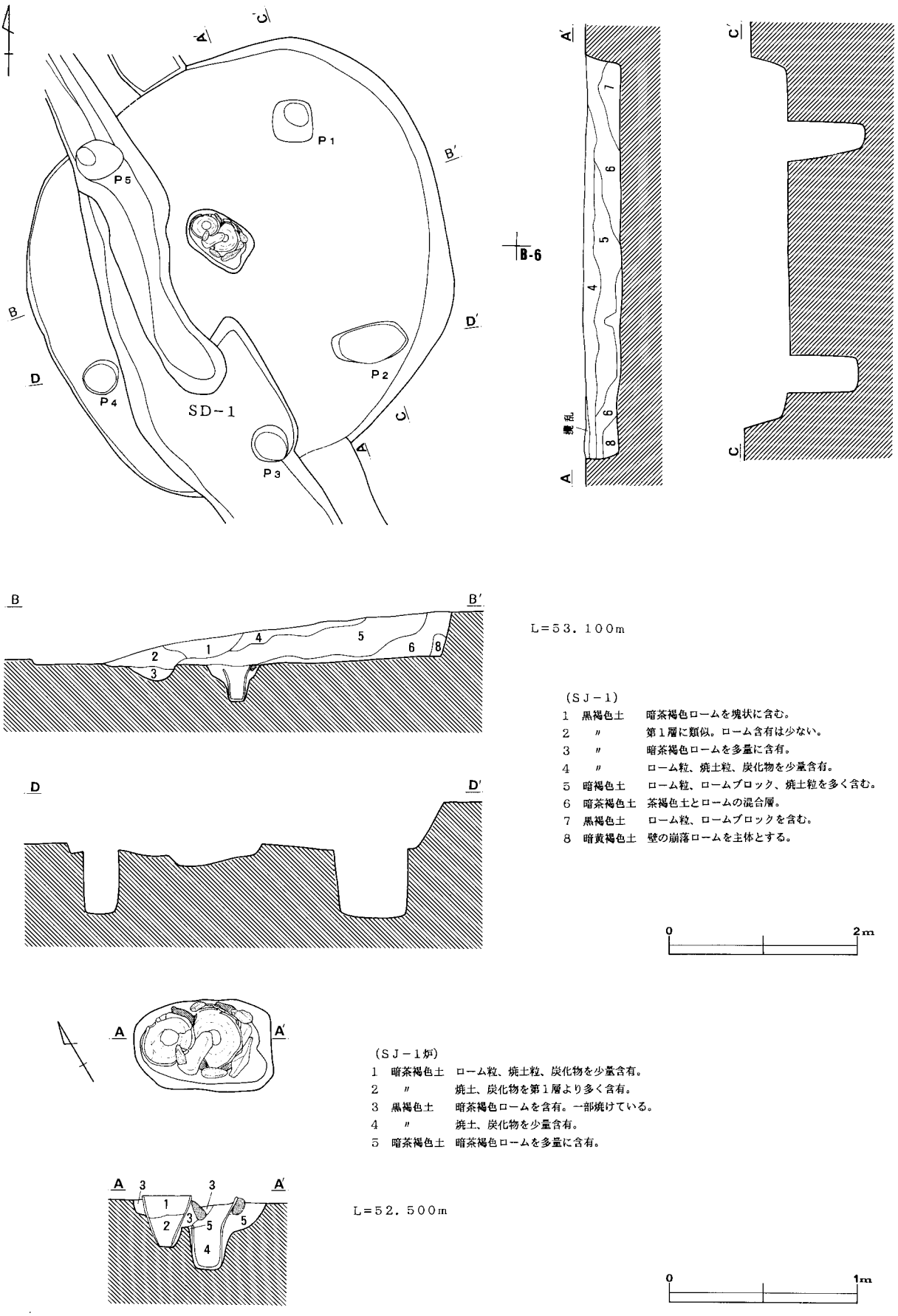
本住居跡は、調査区西端の斜面部、Ａ－５・６グリッドで単独で検出された。北西から南にかけて、地境と思われる第３号溝状遺構に切られ、床面の一部を破壊されている。床面の標高は52.5m 前後を測り、今回検出された遺構の中ではもっとも低位にある。また、南側約2.5m には第２号住居跡が位置する。

平面プランは、北壁が直線的で東西方向にやや長いが、大略円形を呈する。炉跡とＰ３を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ－16°－Ｗを指す。規模は長径4.4m、短径4.2m、深さは斜面上位の東側で45cm を測る。床面は概ね平坦で炉跡周辺は硬化が著しいが、柱穴付近から壁にかけては軟弱であった。また、南壁付近は若干高くなっている。床面西側の一部は粘性の強い水性ローム上にある。壁はわずかに外反して立ち上がる。ピットは５箇所検出された。位置関係から、いずれも主柱穴と考えられ、深さはＰ１＝82cm、Ｐ２＝72cm、Ｐ３＝71cm、Ｐ４＝64cm、Ｐ５＝51cm をそれぞれ測る。平面的には大略五角形に配置されている。壁溝は検出されなかった。

炉跡は遺構中央やや北寄りに位置する。新旧の炉が重複し、北炉が南炉を壊して構築されている。北炉は胴下半部を欠く深鉢を使用した土器埋設炉である。掘り方のプランは円形と思われ、径推定40cm、深さは28cm を測る。南炉は土器埋設石囲炉で、底部を残す土器を埋設している。土器上面にのる自然礫は北炉埋設土器との位置関係から、本炉の炉縁石が動いたものと考えられる。掘り方は長方形プランを呈し、長辺推定60cm、短辺48cm を測る。中位に段差を設け、下半部は土器の形状に合わせて掘り込まれている。深さは36cm を測る。土器に新旧が認められず、柱穴も１軒分しか認められないため、同一遺構内での作り替えと考えられる。両者とも覆土中の焼土は少なかったが、埋設土器と周囲の被熱は顕著であった。

覆土は８層に分層されたが、全体的に茶褐色の強い色調を呈している。上位面から下位への自然堆積が明確であった。遺物量は比較的少なく、そのほとんどが第５層中より散乱した状態で出土している。復元し得た土器は、炉埋設土器を含めて５個体である。石器は打製石斧を中心に、磨製石斧、敲石が見られる。また、遺構中央に床面から若干浮いた状態で重さ12.5kg の台石が出土した。

本住居跡の時期は、炉埋設土器から勝坂Ⅲ式前半段階と考えられる。


A
A'
C
C'
B
B'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
SD-1
B-6
撹乱
L=53.100m
L=52.500m
(SJ-1)
1 黒褐色土 暗茶褐色ロームを塊状に含む。
2 〃 第1層に類似。ローム含有は少ない。
3 〃 暗茶褐色ロームを多量に含有。
4 〃 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
5 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒を多く含む。
6 暗茶褐色土 茶褐色土とロームの混合層。
7 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
8 暗黄褐色土 壁の崩落ロームを主体とする。
(SJ-1炉)
1 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2 〃 焼土、炭化物を第1層より多く含有。
3 黒褐色土 暗茶褐色ロームを含有。一部焼けている。
4 〃 焼土、炭化物を少量含有。
5 暗茶褐色土 暗茶褐色ロームを多量に含有。
0
2m
1m

第7図　第1号住居跡

第２号住居跡（第８～10図）

本住居跡は第１号住居跡に近接しており、A・B－６グリッドで検出された。東側に第３号住居跡が重複している。また、現代の芋穴に南壁の一部を破壊され、覆土上層部に耕作による撹乱を若干受けているが、限定的であるため遺存状態は遺構、遺物ともに極めて良好であった。

平面プランは整った楕円形を呈する。規模は長径5.0m、短径4.6m で、該期住居跡の典型的規模と言えよう。深さは斜面上位の東側で45cm を測る。Ｐ１とＰ５の中間、炉跡、Ｐ３を結んだ線を主軸とすれば、方位はＮ－54 °－Ｗ を示す。床面は概ね平坦で堅緻であるが、東から西に向かって緩い傾斜が認められた。ピットは８箇所検出され、それぞれの深さはＰ１＝67cm、Ｐ２＝66cm、Ｐ３＝70cm、Ｐ４＝74cm、Ｐ５＝60cm、Ｐ６＝42cm、Ｐ７＝28cm、Ｐ８＝64cm を測る。この内、主柱穴はＰ１～５で平面的には整った五角形に配置されている。ある程度の深度を有するＰ６、Ｐ８の性格については入口に関係する施設か、支柱穴としての役割が考えられる。壁は、わずかに外反しつつ立ち上がる。壁溝は全周にわたって検出され、西側がやや深く掘られている。床面の微傾斜と考え合わせると興味深い事例と言えよう。

炉跡は遺構中央やや北寄りに構築されていた。下半部を欠く大型円筒形土器を使用した土器埋設炉で、掘り方上面のプランは不整楕円形を呈する。長径64cm、短径53cm、深さは28cm を測る。上位には段差があり、下位は土器の形状に合わせて掘り込まれている。また、埋設土器の口縁部は床面レベルより若干上に突出する。土器覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、土器内面と周囲の被熱痕跡は顕著であった。

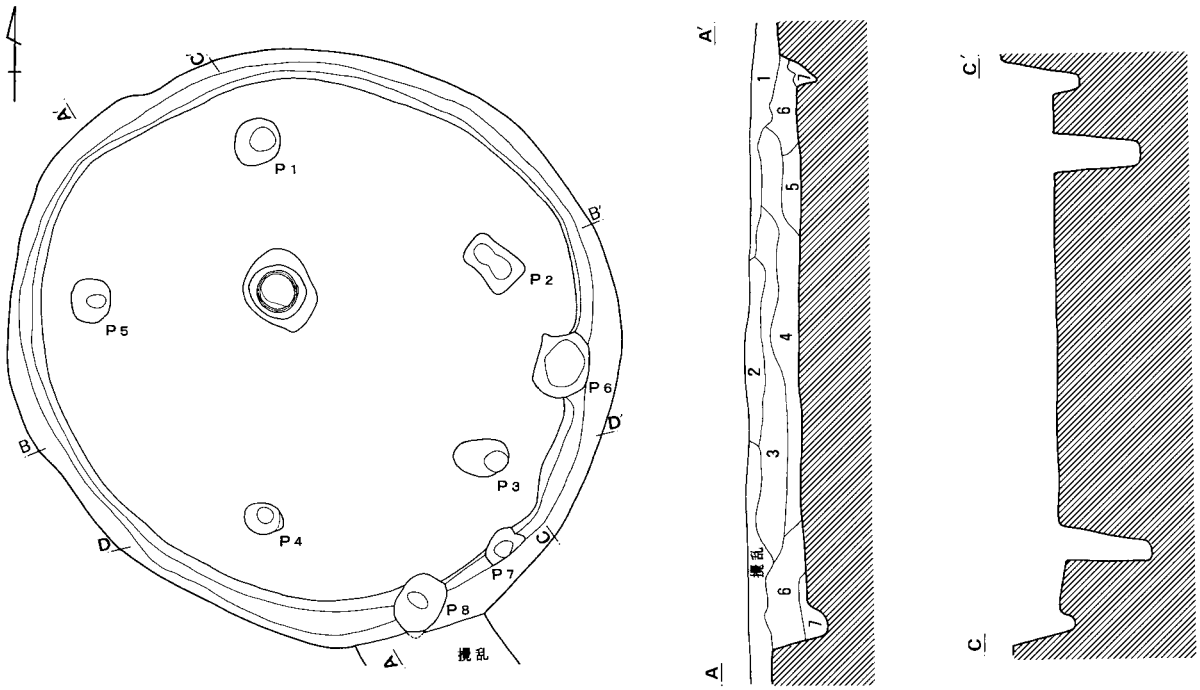
覆土は全体的に黄褐色の強い色調を呈していた。遺物量は極めて多く、第３層中及び第４層直上で25個体、第４・５層中、床面より若干浮いて４個体が出土している。後者のうち２個体は入れ子状となっていた（第９・10図）。第３層中の土器群は、その破損状況から投棄されたというより、あたかも置かれたような状態で出土し、特に遺構南側に集中する様相が看取された。また、中峠類型、「三原田型深鉢」の出土は、在地系土器群との共伴関係が注目に値しよう。土器以外の遺物としては、60点以上の打製石斧、石鏃４点の他、敲石、石皿、耳栓がある。なお、第２層中には多量の焼土の混入が認められ、遺物の出土状況から廃棄行為に伴う儀礼行為を想起させる。

本住居跡は、炉埋設土器と覆土出土土器から勝坂Ⅲ式前半段階と考えられる。

第３号住居跡（第11図）

本住居跡はＢ－５・６グリッドに位置している。第２号住居跡の全景写真撮影準備中、当該住居跡に一部重複して検出されたものである。当初、炉跡が検出されなかったため、掘立柱建物跡とした経緯がある。遺構東側の大部分は、第２号溝状遺構に破壊されている。また、掘り込みが非常に浅いため、残存部分の覆土、床面等の遺存状態は不良である。

平面プランは若干角張るが、概ね楕円形を呈している。平面形との兼ね合いから、主軸をＰ１・４と炉埋設土器を通る線と考えると方位はＮ－３ °－Ｗ となる。規模は長径6.9m、短径推定6.1m で、近接する他の住居跡に比して大きめと言える。確認面からの深さは残存部分で10㎝を測る。床面は大半が撹乱を受けているが、残存部分は概ね平坦である。壁は、壁溝の断面形からの推定であるが、若干傾斜して立ち上がるものと思われる。ピットは９箇所検出された。深さは、検出面よりＰ１＝64cm、Ｐ２・３＝67cm、Ｐ４＝69cm、Ｐ５＝83cm、Ｐ６＝76cm、Ｐ７＝33cm、Ｐ８＝21cm、Ｐ９＝12cm をそれぞれ測る。内Ｐ１～６が主柱穴と考えられ、Ｐ３・４間がやや長いが、平面的には大略六角形に配置されている。また、Ｐ８については入口に関連する遺構の可能性がある。壁溝は一部途切れるが、第２号溝状遺構による撹乱部分



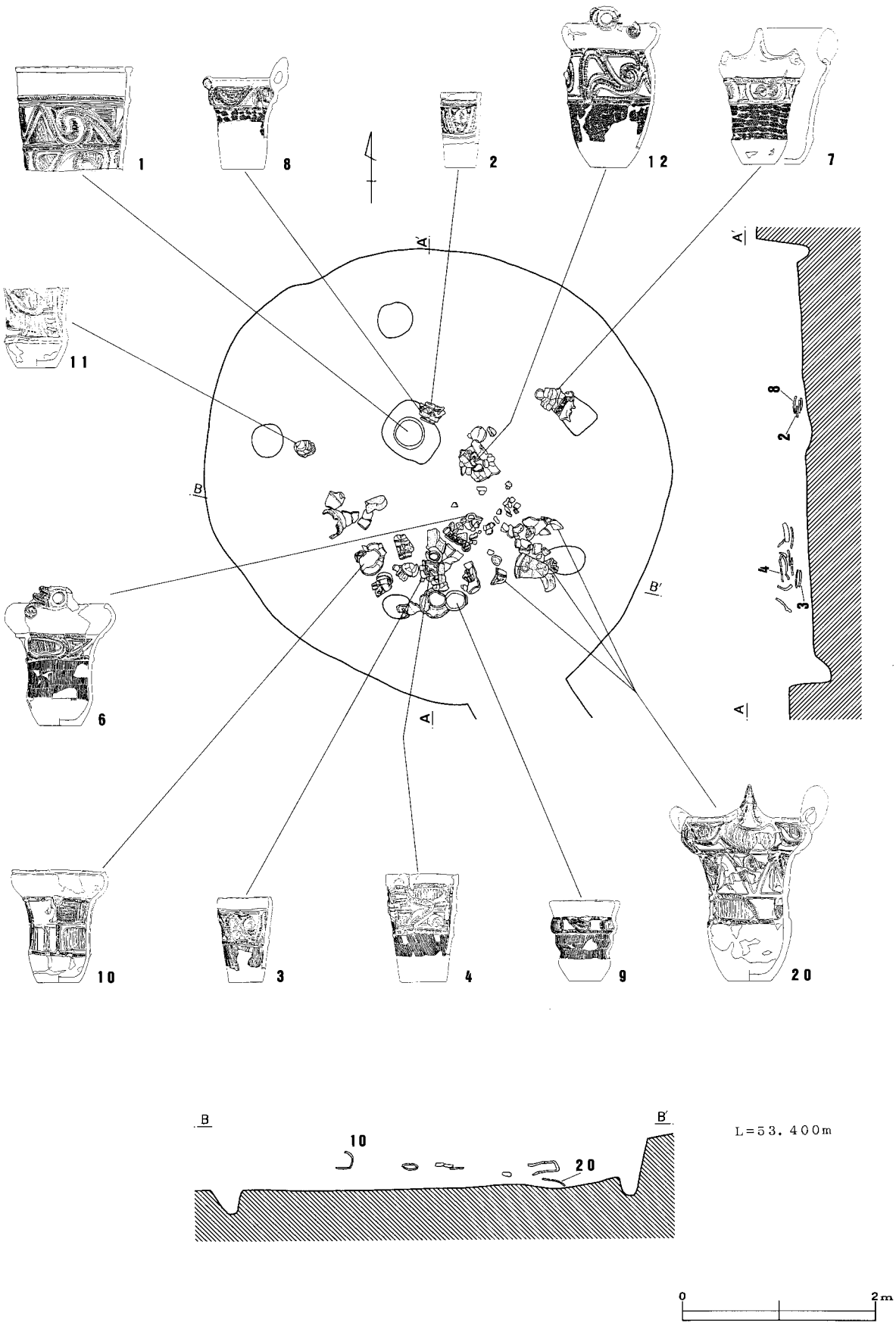
（SJ－2）

1	黒褐色土	ローム粒、ロームブロックを多く含む。
2	〃	ローム粒の他、多量の焼土、炭化物を含有。
3	〃	第2層より黒色が強く、焼土、炭化物の含有は少ない。遺物を多量に包含する。
4	暗黄褐色土	ローム粒を多量に、焼土、炭化物を少量含有。
5	〃	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
6	茶褐色土	ロームブロックを主体とする層。
7	〃	ローム粒を主体とする層。第6層より軟弱。

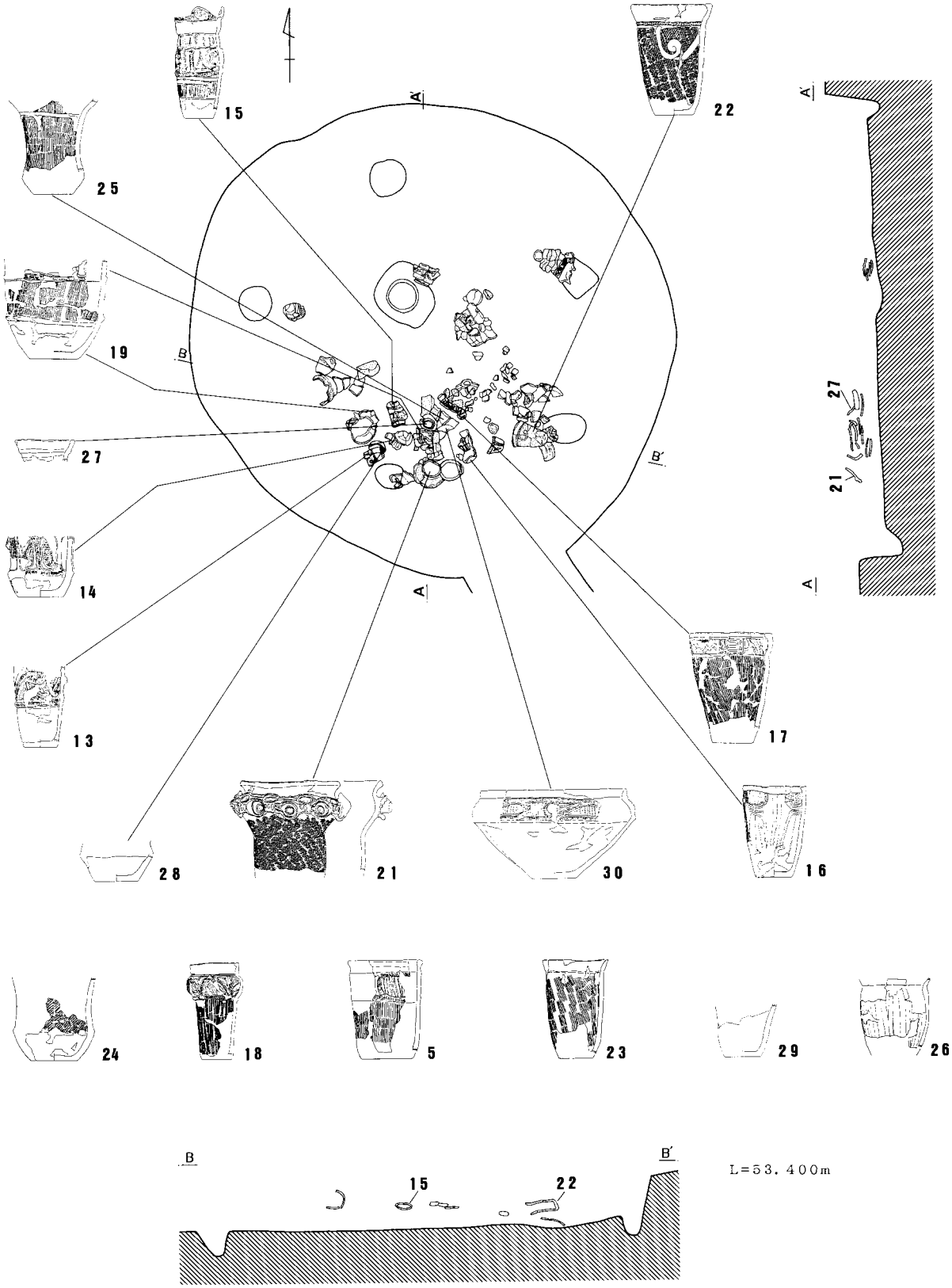
（SJ－2炉）

1	黒褐色土	ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2	〃	第1層より炭化物を多く含む。
3	暗黄褐色土	焼けたロームブロックを主体とする。
4	黒褐色土	ローム粒を多量に、焼土粒を少量含有。
5	〃	ロームと黒色土の混合層。堅く締まっている。

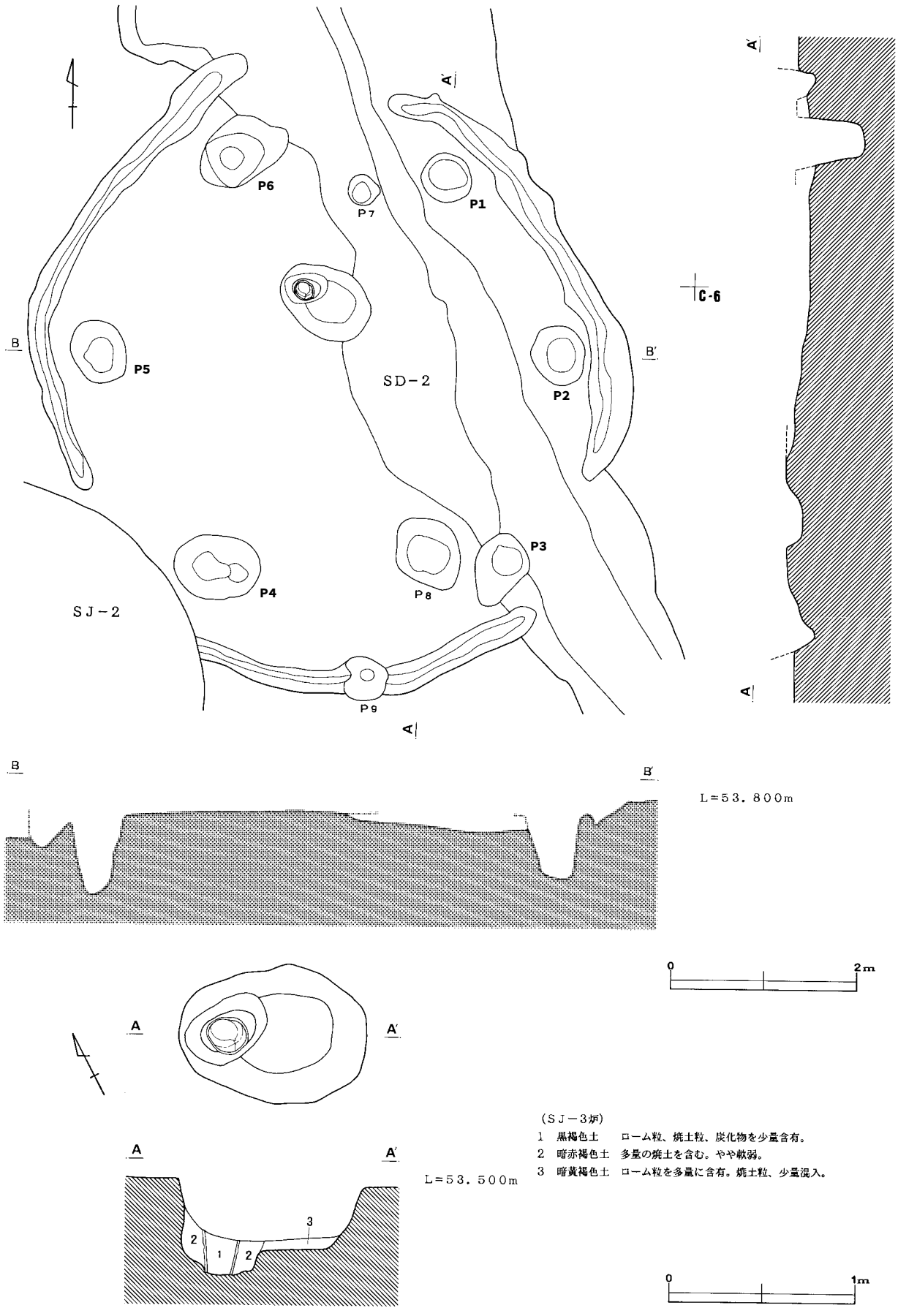
第8図　第2号住居跡（1）



第９図　第２号住居跡（２）



第10図　第２号住居跡（３）


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
SD－2
SJ－2
C-6
A
A′
B
B′
L＝53．800m
L＝53．500m
0
2m
1m
（SJ－3炉）
1　黒褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2　暗赤褐色土　多量の焼土を含む。やや軟弱。
3　暗黄褐色土　ローム粒を多量に含有。焼土粒、少量混入。

第11図　第３号住居跡

も含めて、全周していたと思われる。

炉跡は上層部を第２号溝状遺構による撹乱を受けているため、当初確認し得ず、溝状遺構精査時に検出された。位置は、床面中央よりやや北西に偏在している。形式的には、口縁部、胴下半部を欠く円筒形土器を使用した土器埋設炉であるが、埋設部位は低く、位置も掘り方の西側に偏在している。土器内部には焼土、炭化物は少なく、土器固定土の第２層に多く認められた。掘り方の平面プランは主軸に沿って長軸を有する楕円形で、長径101cm、短径76cm、深さ52cm を測る。

遺構覆土はほとんど残存しないため、詳細は不明である。ただし、柱穴、壁溝はロームブロックが多量に混入した黒褐色土で覆われていた。なお、柱穴中からは柱痕は検出されていない。

本住居跡は、炉埋設土器から勝坂Ⅲ式後半段階と思われる。

第４号住居跡（第12・13図）

本住居跡は、調査区の南西隅の斜面部、Ｂ・Ｃ－７グリッドで他の住居跡とは離れて検出された。西側約２m には第２号溝状遺構が南北に走る。

平面形は南北が東西に細長く、やや不整な楕円形を呈している。Ｐ１・７の中間と炉跡、Ｐ３を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ―47°―Ｗを向いている。規模は、長径4.9m、短径3.5m で、遺構確認面からの深さは斜面上位の遺構東側で28cm を測る。床面は概ね平坦であるが、中央から南側にかけて若干高くなる。硬化面は炉跡周辺に顕著に見られるが、他の部分は軟弱であった。ピットは７箇所検出された。床面からの深さは、Ｐ１＝77cm、Ｐ２＝62cm、Ｐ３＝58cm、Ｐ４＝75cm、Ｐ５＝61cm、Ｐ６＝37cm、Ｐ７＝80cm を測る。位置関係と深度からＰ１～５が主柱穴と考えられ、平面的には整った五角形を呈する。ただし、住居跡平面形と主柱穴配置に違和感があり、一部掘り残した可能性がある。なお、Ｐ４は位置と深度から入り口に関係する遺構と思われる。壁は強く外反して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は遺構中央やや北寄りに構築されていた。中位以下を欠いた円筒形深鉢を埋設し、北側のみであるが炉縁石を配する。形式的には土器埋設石囲炉と言えよう。掘り方上面のプランは不整形を呈している。長径90cm、短径61cm、深さは最も深いところで28cm を測るが中位に段差を有する。埋設土器内の覆土には焼土、炭化物はほとんど認められなかったが、土器内面と周辺の被熱痕跡は顕著であった。

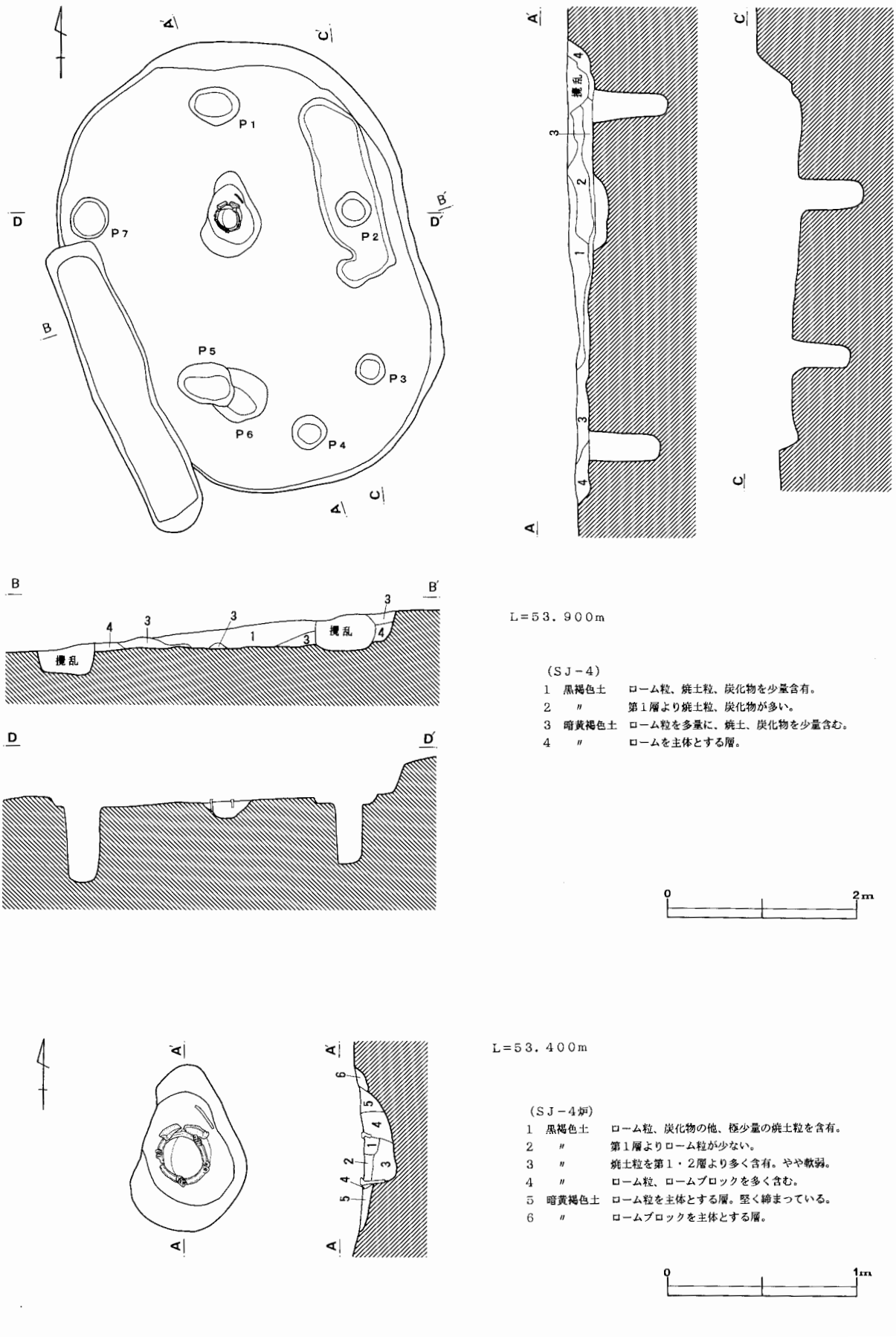
覆土は全体的に黄褐色の強い色調で、４層に分層し得た。遺物量は比較的少ないが、炉跡西側にまとまった出土があり、炉埋設土器を含めて７個体が復元されている（第13図）。その大半が、床面より若干浮いた状態で第１層中より出土している。石器は少数で、打製石斧の他、破損した敲石がある。

本住居跡の時期は、炉埋設土器と覆土出土土器から勝坂Ⅲ式後半段階と考えられる。

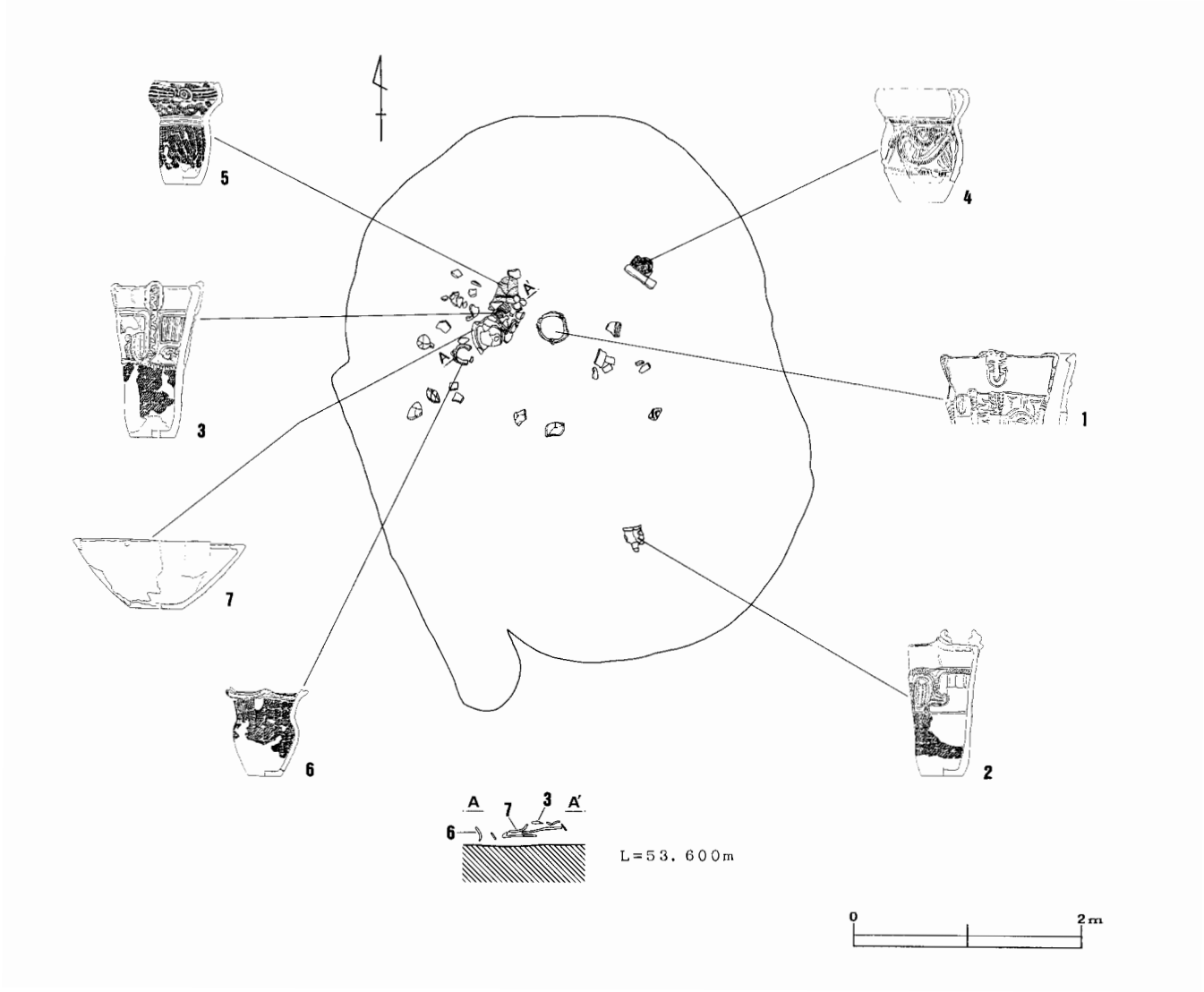
第５号住居跡（第14・15図）

本住居跡は調査区西側のＣ－５グリッドに位置し、台地肩部と緩斜面の境目に占地している。西側約７m には第３号住居跡が位置する。他の遺構との重複は無く、撹乱もほとんど受けていないため、遺存状態は今回報告の遺構中、最良と言える。また、出土遺物も豊富であった。

平面プランは大略円形を呈している。Ｐ１・４の中間とＰ５を結んだ線を主軸とすれば、主軸方位はＮ―37°―Ｗとなる。規模は長径3.6m、短径3.5m で今回報告する住居跡の中で最も小規模である。深さは58cm を測る。床面は概ね平坦で堅緻であるが、ほぼ全面にわたって被熱痕跡があり、一部は焼土化、硬質化している。また、炉跡の南側は若干窪んでいる。ピットは６箇所検出された。それぞれの深さは、Ｐ１＝63cm、Ｐ２＝61cm、Ｐ３＝63cm、Ｐ４＝66cm、Ｐ５＝13cm、土壙状を呈するＰ６は９cm を測る。こ



第12図　第４号住居跡（１）

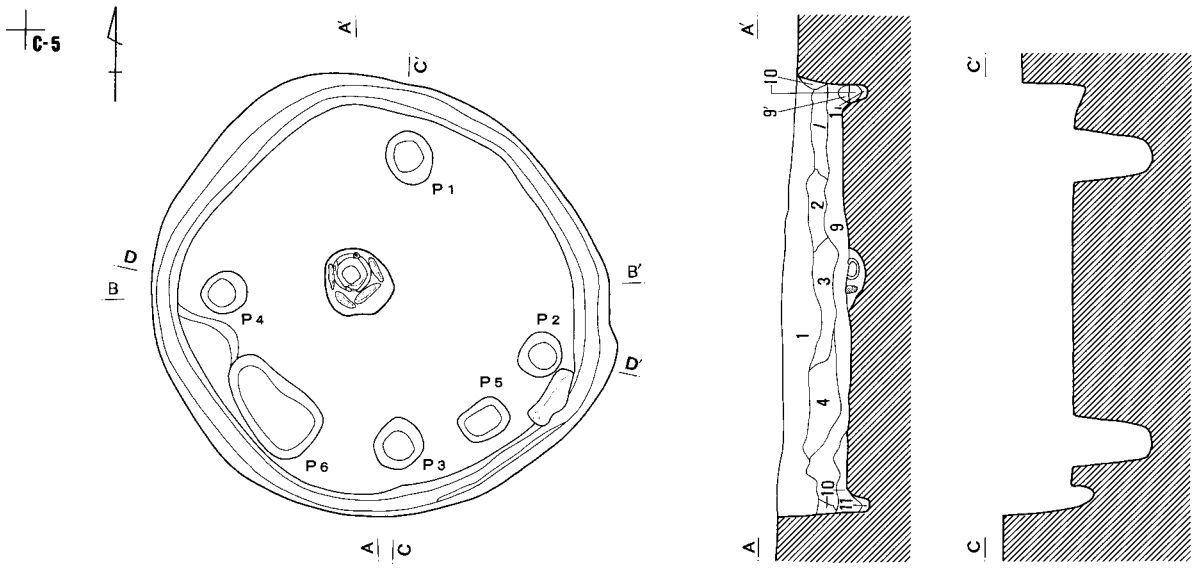


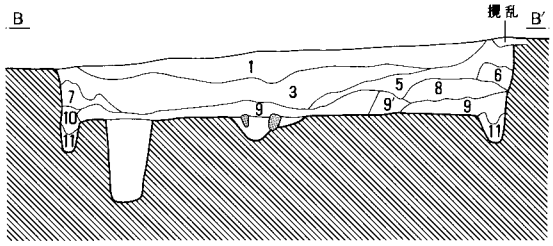
第13図　第４号住居跡（２）

のうち、主柱穴と考えられるのはＰ１～４で、規模、深さともに酷似する。平面的には北側に開放する整った台形状に配されている。南壁溝近くのＰ５は、入り口に関係する遺構と思われる。また、西壁に接するＰ６に類似する内部施設は第９号住居跡にも認められ、さらに近年隣接する日高市内遺跡の発掘調査でも同時期の住居跡内で検出されている。柱穴覆土は黄褐色、茶褐色を主体とし、やや軟質な印象を受けた。いずれの柱穴でも柱痕は確認されなかったが、覆土上層には炭化物、焼土が顕著であった。壁はわずかに外反しつつ立ち上がる。壁溝は全周にわたって検出され、幅20cm 前後で全体的に深く掘られている。なお、壁構覆土内にも主柱穴同様、炭化物、焼土の混入が認められた。

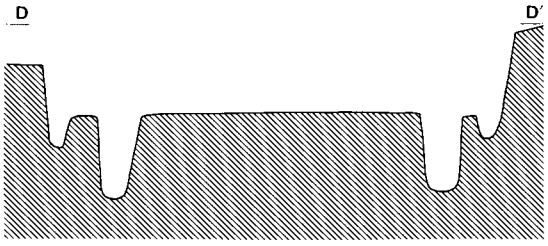
炉跡は中央より若干北に偏して位置する。下半部を欠いたキャリパー形深鉢を埋設し、北側以外に炉縁石を有する土器埋設石囲炉で、掘り方上面のプランは不整楕円形を呈している。長径58cm、短径54cm、深さは22cm を測る。埋設土器覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、内面の被熱痕跡は顕著である。

覆土は11層に分かれる。特記すべきは、床面上10㎝前後の厚さで検出された第９層で、黒色の強い色調を呈し、焼土と炭化物を多量に含有していた。一部には焼土ブロックが集中する部分も認められる。床面の被熱痕跡と本層の特徴から、上屋の焼失あるいは解体後に火をかけたものと思われる。また、第９層の上から壁際に形成された第４～８層は茶褐色土を主体とし、焼土、炭化物をほとんど含まないが、多量のロームブロックが混入しており、周堤土の埋め戻しの可能性を指摘し得る。本住居跡から出土した土器群



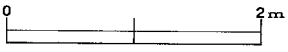


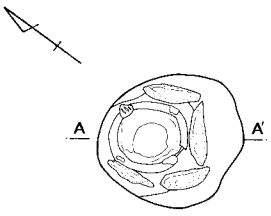
L＝54．300m

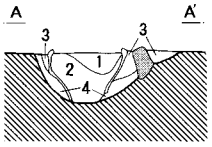


（SJ－5）

1	茶褐色土	黒色のやや強い層。ローム粒を多く含有する。
2	暗茶褐色土	ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含む。第1層より、色調が暗い。
3	茶褐色土	ロームブロックを多く含む。他に少量の焼土粒、炭化物を含有。
4	黒褐色土	黒色の強い層。ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含む。
5	〃	ローム粒を多く含むが、色調は暗い。ローム粒を多量に含有する。焼土粒、炭化物は極少量含む。
6	暗茶褐色土	ローム粒、焼土粒、炭化物を極少量含有。
7	〃	第6層より茶色が強い層。焼土粒、炭化物を少量含有。
8	〃	ロームブロックを多量に含む。
9	黒色土	炭化物、焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。やや軟弱。
9	〃	第9層中、焼土粒、焼土ブロックが集中する部分。
10	茶褐色土	ロームを主体とする層。焼土粒、炭化物を少量含む。
11	暗茶褐色土	ロームを主体とするが、粒子が第10層より細かい。



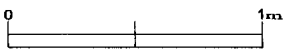




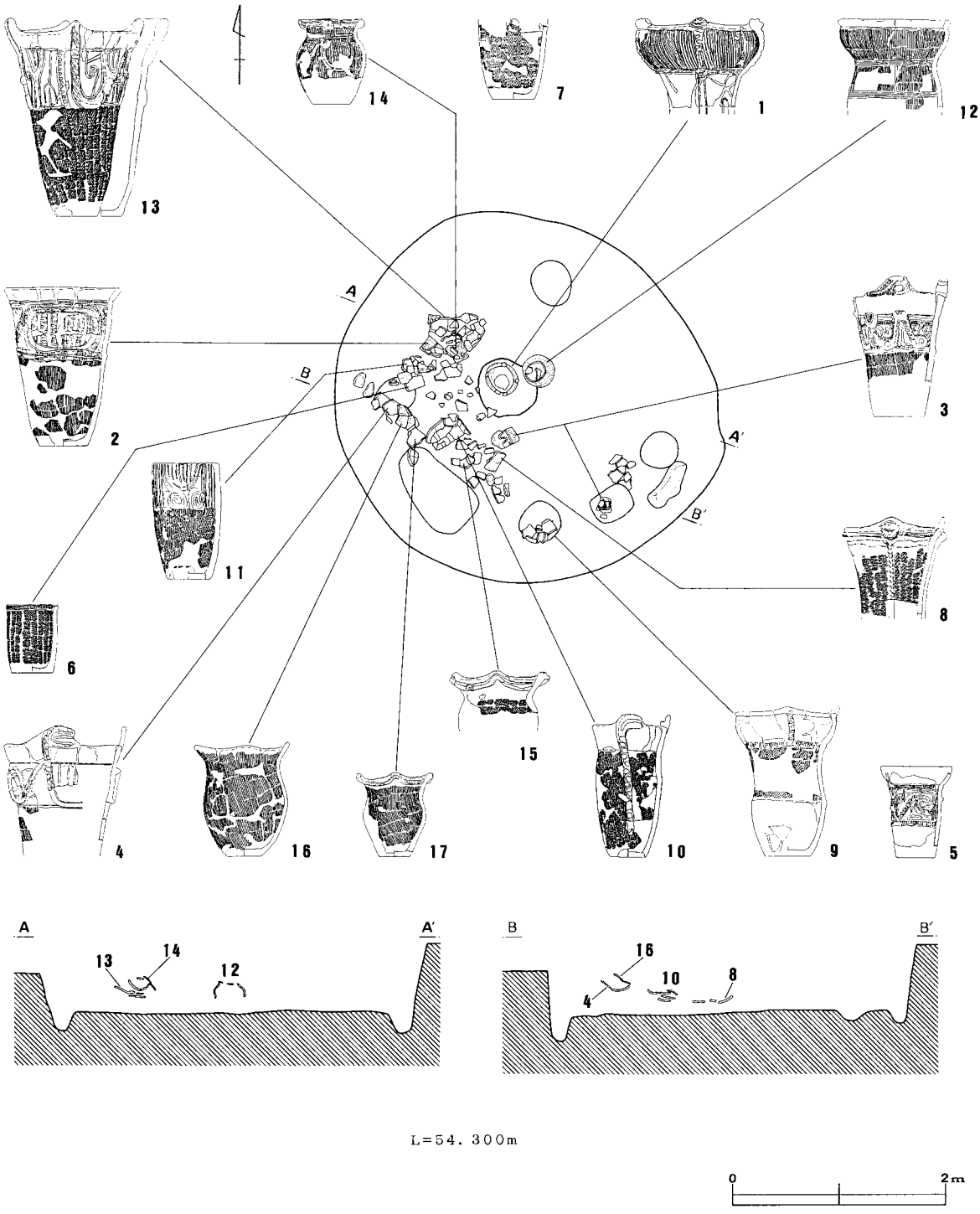
L＝53．700m

（SJ－5炉）

1	黒色土	ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有。
2	暗茶褐色土	ローム粒、焼土粒、炭化物が第1層より少ない。
3	黒褐色土	ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。堅い。
4	暗黄褐色土	被熱部分。焼けてブロック状を呈する。



第14図　第５号住居跡（１）



第15図　第５号住居跡（２）

はこれらの層の直上、遺構中央より西側に大量廃棄されていた。一部散乱状態のものを認められるが、ほとんどの土器は第２号住居跡と同様、置かれたような状態で出土している。復元された土器は、炉埋設土器も含めて17個体である（第15図）。これらの状況から、本住居跡は罹災あるいは解体から遺物廃棄までが比較的短期間のうちになされたと考えられ、住居廃棄から埋没に至る過程は異なるものの、第２号住居跡と同様、何らかの儀礼行為の存在を感じる。石器出土量は多数にのぼり、主体となる打製石斧の他、磨製石斧、敲石がある。なお、南壁際床面直上から出土した台石の重量は25.6kg を測った。

本住居跡の時期は、炉埋設土器と覆土出土土器から勝坂Ⅲ式後半段階と思われる。

第６号住居跡（第16図）

本住居跡は調査区東側の台地上位の平坦面に占地され、F・G－５グリッドにある。北西側には、近接して第９・10号住居跡が、東側４ｍには第14号住居跡がそれぞれ位置している。他の遺構と重複せず、撹乱もほとんど受けていないため、浅いながら遺存状態は極めて良好である。

平面プランは、隅丸方形を呈している。Ｐ１・４とＰ２・３の中間を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ－45°－Ｗを向く。規模は、長径5.1m、短径4.8mで、確認面からの深さは32㎝を測る。床面は全体的に堅緻で概ね平坦であるが、炉跡周辺に顕著な硬化が看取された。ピットは５箇所検出され、それぞれの深さは、床面からＰ１＝65㎝、Ｐ２＝95㎝、Ｐ３＝70㎝、Ｐ４＝72㎝、Ｐ５＝13㎝を測る。この内、Ｐ１～４が主柱穴と考えられ、平面的には東西にやや長い整った長方形に配置されている。南壁に近接するＰ５は入口に関係する遺構と思われる。柱穴覆土は黄褐色を主体とし、いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。壁は外反しつつ立ち上がる。壁溝はＰ５周辺以外を除いて、ほぼ全周にわたって検出された。

炉跡は、中央よりやや北寄りに構築されている。構造的には石囲炉であるが、西側の一部は炉縁石が抜き取られている。掘り方上面のプランは楕円形を呈している。長径78㎝、短径66㎝、深さは18㎝を測る。炉底はよく焼けており、中央部は焼土化していた。また、炉縁石の被熱痕跡も顕著であった。

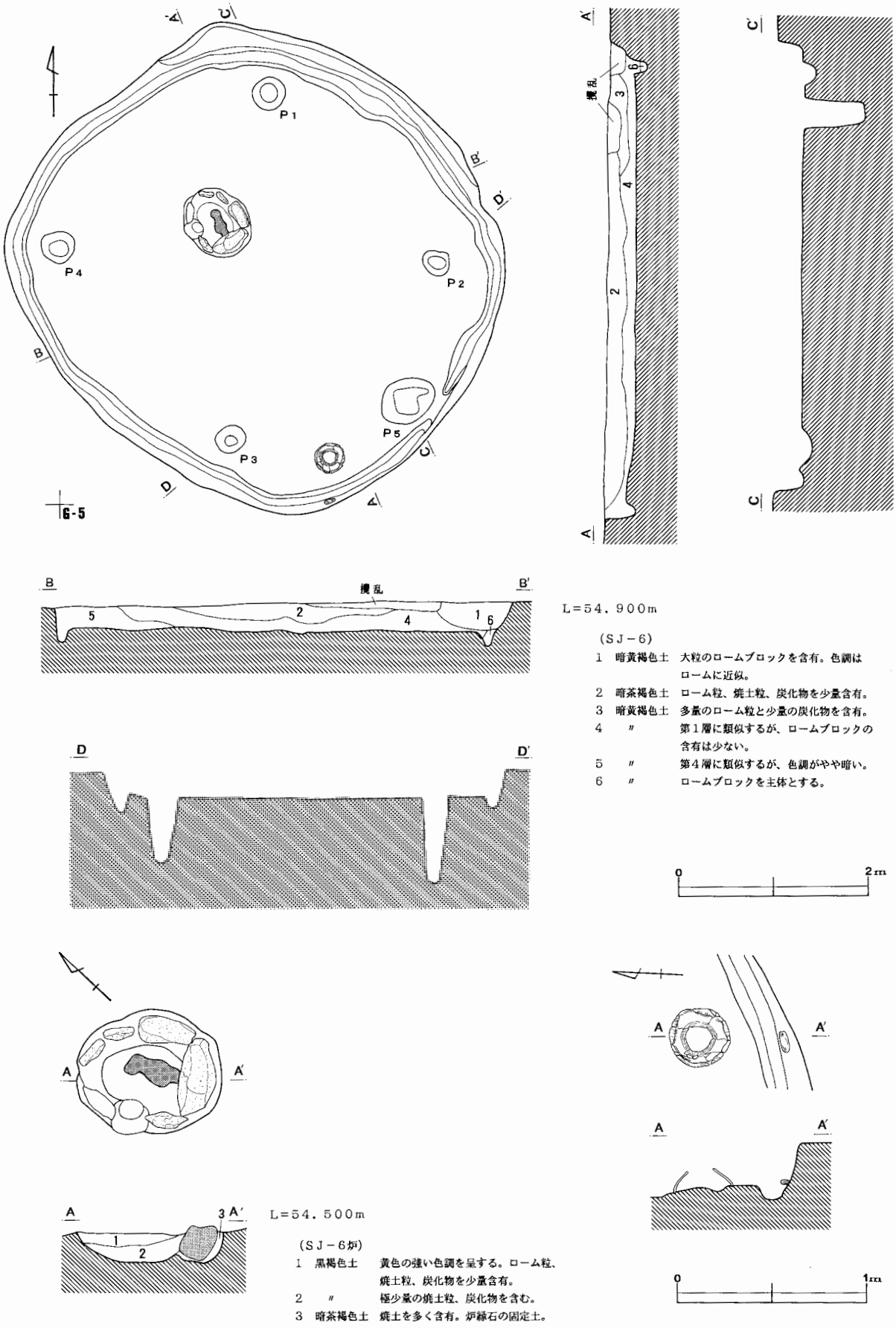
覆土は６層に分割された。いずれも、やや茶褐色の強い色調を呈している。出土遺物は極端に少なく、コンテナ１箱にも満たない。時期を明確にした遺物は、床面南側Ｐ３・５間に逆位で出土した深鉢の上半部で、土圧からか口唇部は床面にめり込んでいた。出土状況から推測すると、住居使用時にこの状態で容器として使用されていた可能性もある。また、当該遺物の南側壁際からは、磨製石斧が出土している。その他の遺物としては、打製石斧、敲石、凹石があるが、いずれも少数である。

本住居跡の時期は、床面直上の伏甕から加曽利ＥⅡ式前葉段階とすることができよう。

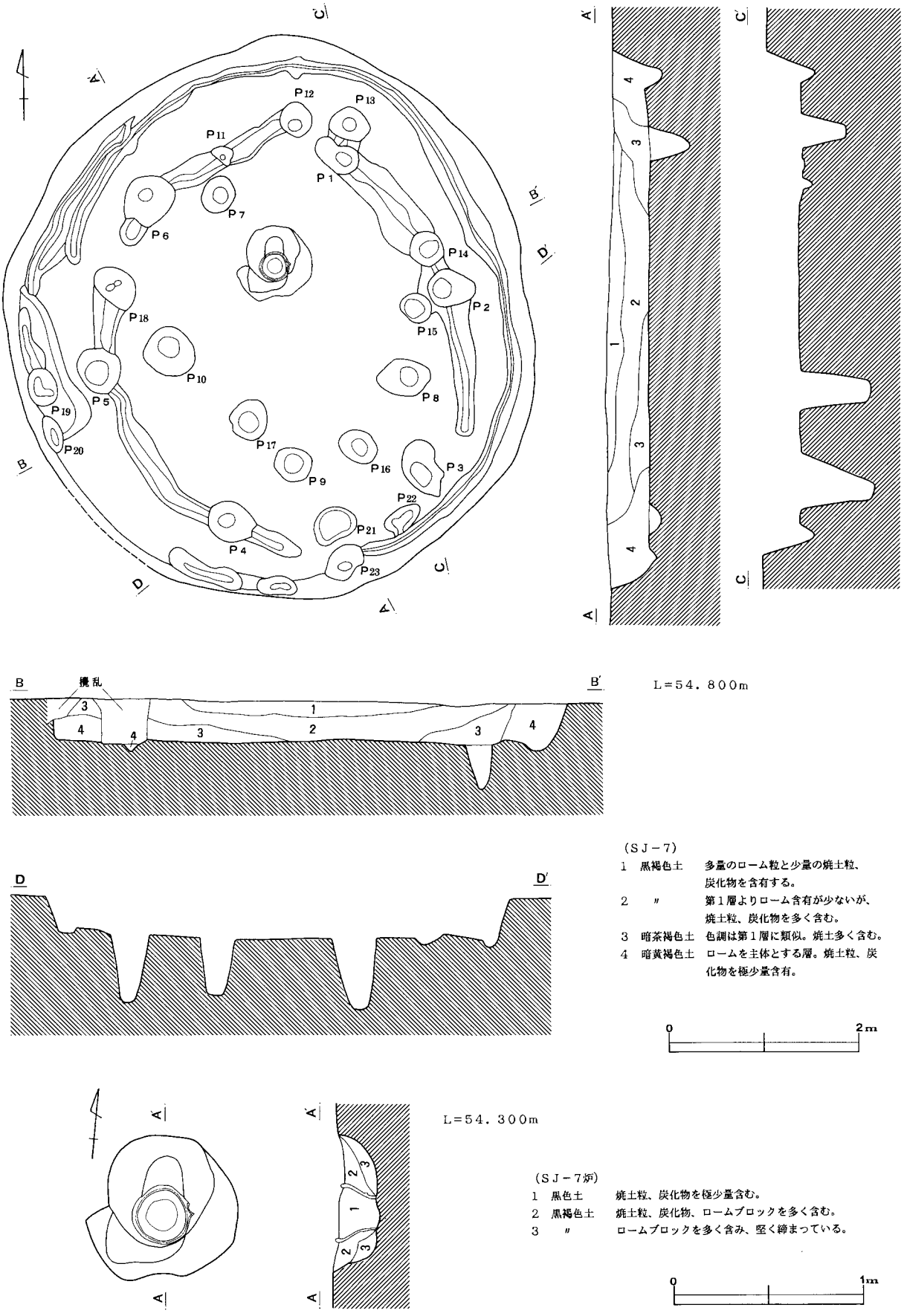
第７号住居跡（第17・18図）

本住居跡は、調査区北東隅の上位平坦部で検出され、Ｈ－２・３グリッドに位置する。西側には、近接して第８号住居跡がある。一部に撹乱を受けているが、遺存状態は良好である。なお、壁溝が２条検出され、拡張あるいは遺構内重複が認められる。

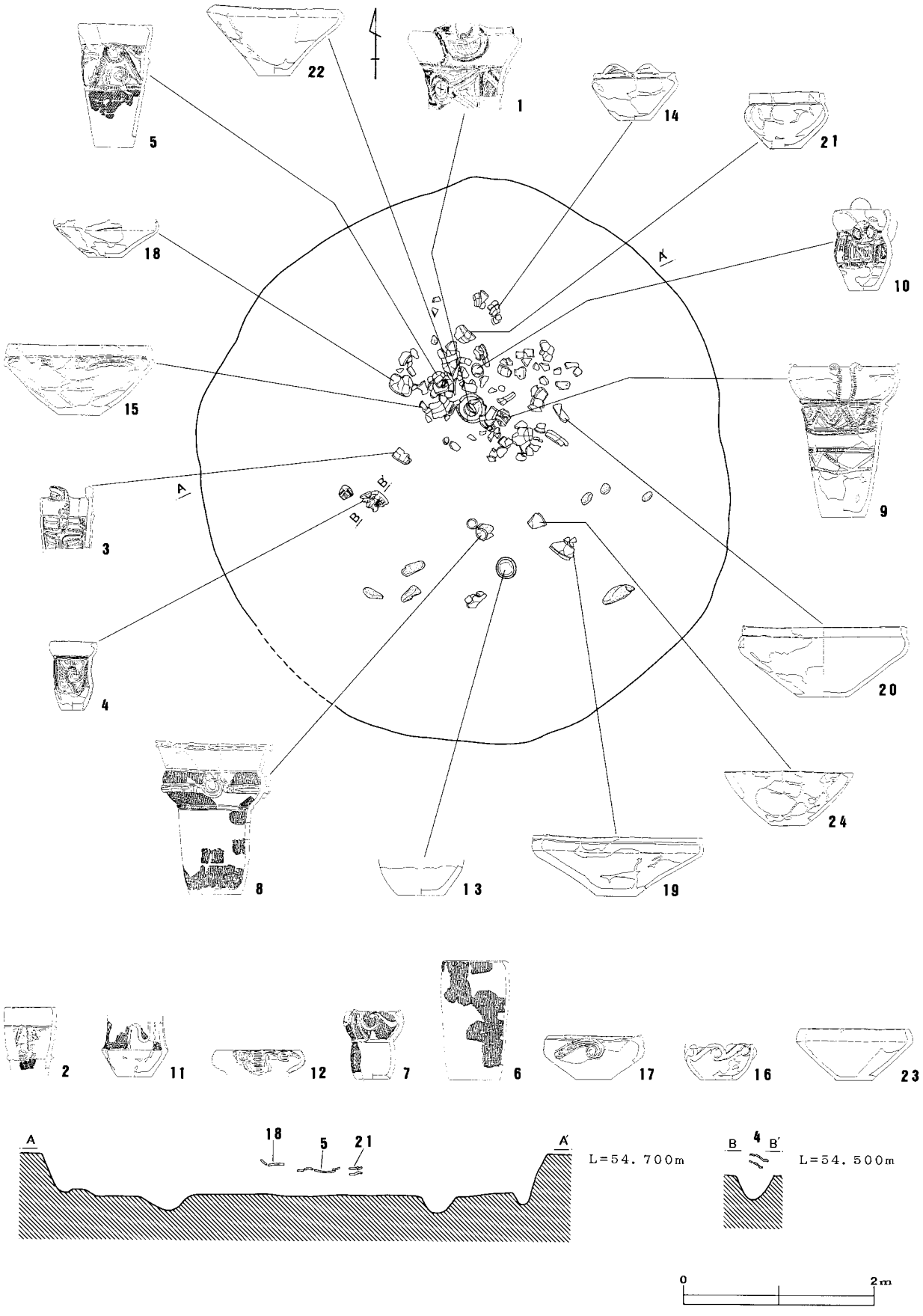
開口部平面プランは、南北に若干長いが大略円形を呈する。Ｐ１・６とＰ３・４の中間を結んだ線を主軸とすると、主軸方位はＮ－11°－Ｗを指す。規模は、長径6.0m、短径5.6mで、確認面からの深さは45㎝を測る。内側の壁溝に伴う旧住居跡は、南北に長い楕円形プランを呈している。長径推定4.6m、短径3.9ｍを測る。ピットは23箇所検出された。床面からの深さは、Ｐ１＝63㎝、Ｐ２＝71㎝、Ｐ３＝88㎝、Ｐ４＝74㎝、Ｐ５＝64㎝、Ｐ６＝87㎝、Ｐ７＝67㎝、Ｐ８＝76㎝、Ｐ９＝61㎝、P10＝55㎝、P11＝18㎝、P12＝40㎝、P13＝50㎝、P14＝51㎝、P15＝52㎝、P16＝27㎝、P17＝114㎝、P18＝18㎝、P19＝23㎝、P20＝９㎝を測る。床面は、新旧住居跡ともに概ね平坦で、炉跡周辺に顕著な硬化が認められる。ピットはP21＝６㎝、P22＝４㎝、P23＝32㎝をそれぞれ測る。新住居跡の主柱穴は、位置関係からＰ１～６と考えられ、平面的には東西にやや長い六角形に配置されている。ただし、各々の柱穴周辺には他の候補も想定でき得る。内側の旧住居跡の主柱穴については、配置関係からの明確な組合わせが特定できない。柱穴覆土は黄褐色を主体とし、いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。壁溝は、新住居のものが西側から南側にかけて断続的になる。特に南西側の間隔が広く、入口に関係する可能性もある。旧住居の壁溝は、拡張・


P1
P2
P3
P4
P5
G-5
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
攪乱
1
2
3
4
5
6
L=54．900m
(SJ－6)
1 暗黄褐色土 大粒のロームブロックを含有。色調はロームに近似。
2 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
3 暗黄褐色土 多量のローム粒と少量の炭化物を含有。
4 〃 第1層に類似するが、ロームブロックの含有は少ない。
5 〃 第4層に類似するが、色調がやや暗い。
6 〃 ロームブロックを主体とする。
0
2m
L=54．500m
(SJ－6炉)
1 黒褐色土 黄色の強い色調を呈する。ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2 〃 極少量の焼土粒、炭化物を含む。
3 暗茶褐色土 焼土を多く含有。炉縁石の固定土。
0
1m

第16図　第６号住居跡



第17図　第７号住居跡（１）



第18図　第７号住居跡（２）

重複の段階でいくらかの掘り下げが行われたためか、深さが一定していない。また、南側は大きく開口する。壁は外反しながら立ち上がるが、顕著な崩落痕跡は認められなかった。

炉跡は、中央やや北寄りに位置している。下半部を欠くキャリパー形深鉢を埋設した土器埋設炉で、掘り方上面のプランは不整形を呈する。長径74㎝、短径70㎝、最深部での深さは26㎝を測る。土器覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、炉底面の被熱痕跡は顕著である。

覆土は全体的に茶褐色の強い色調で、自然堆積の状態を呈していた。４層に分かれる。第３・４層は黄褐色土に近い色調を呈し、その上面に当る第２層中に遺物が多く包含される。遺物は多量で、第２層上位から下位にかけて床面から若干浮いた形で出土している。特に、炉跡周辺に集中する傾向が認められた(第18図)。出土土器では浅鉢が圧倒的に多く、復元された23個体の内、12個体が本器種である。この他、中峠式類型の出土も注目される。なお、炉埋設土器と覆土出土土器の間には若干の時間差が見られるが、旧住居跡の炉が新住居でもそのまま使用された可能性が考えられる。石器も多量に出土しているが、主体的な打製石斧は破損品及び破片が大勢を占める。他に敲石、磨石が見られる。土製品としては耳栓が３点、覆土中から他の遺物に混在して出土している。

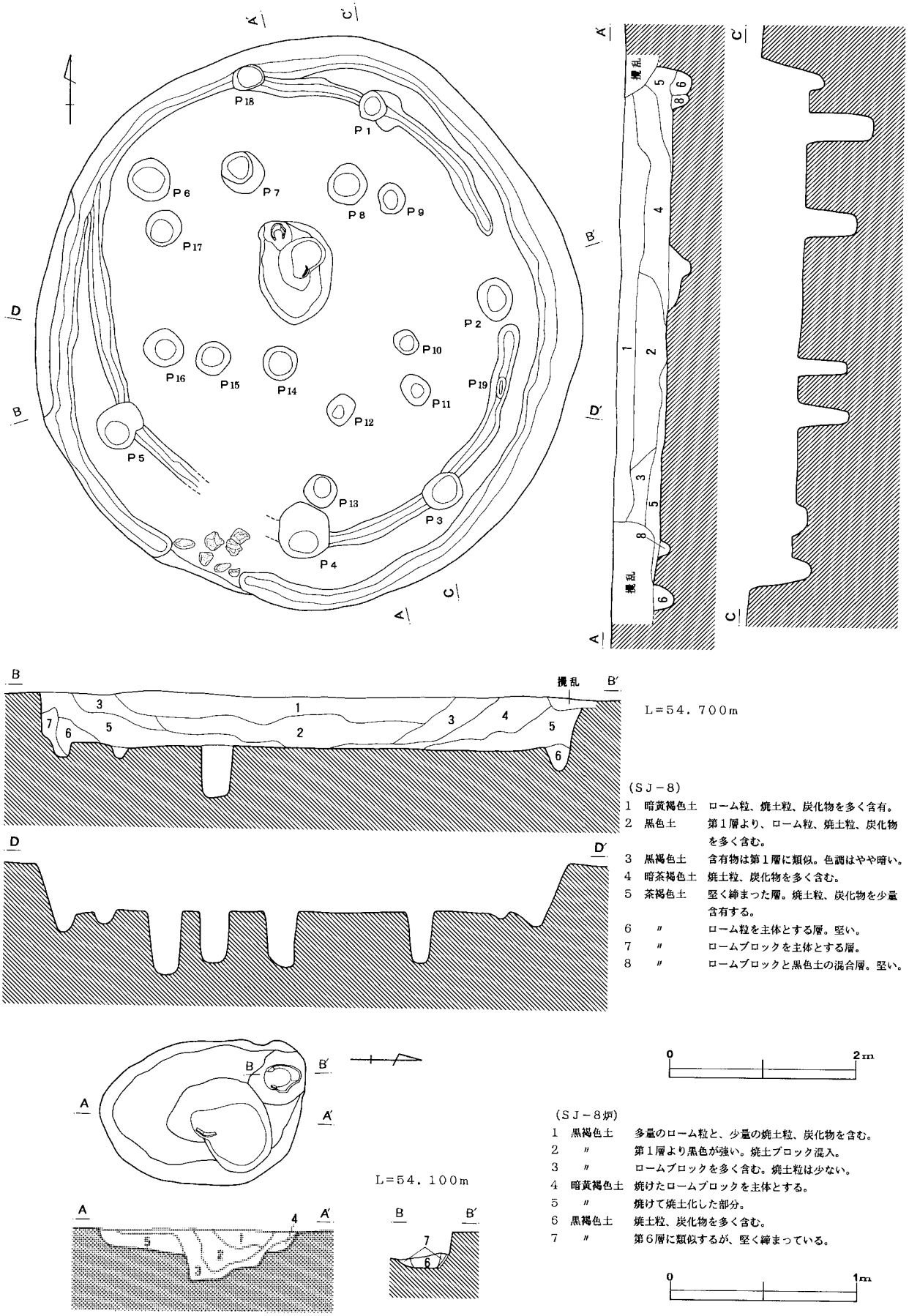
本住居跡の時期は、炉埋設土器が勝坂Ⅲ式前半、覆土遺物が勝坂Ⅲ式後半・加曽利ＥⅠ式前半段階に比定できるが、ここでは新住居廃棄時の一括性を重視して後者としておく。

第８号住居跡（第19図）

本住居跡は、第７号住居跡に近接して、調査区北東側の台地上位、平坦部で検出された。G－２・３グリッドに位置している。一部に撹乱を受けているが、遺存状態は良好である。なお、第７号住居跡と同様、壁溝が２条検出されており、拡張あるいは遺構内重複と考えられる。

平面プランは、やや不整な円形を呈している。主軸は、Ｐ１・６とＰ３・４の中間と思われ、方位はＮ－21°－Ｗを向く。規模は、長径6.1m、短径6.0mで、深さは56㎝を測る。内側の旧住居跡は、南北に長い楕円形プランを呈し、北西壁の一部を共有する。長径5.3m、短径4.1mを測る。床面は、新旧住居跡ともに概ね平坦であるが、両者の壁溝深度から拡張・重複時に若干の掘り下げが行われたと考えられる。南西壁際には一部貼床が施されている。また、炉跡周辺の硬化が顕著であった。ピットは床面全体から19箇所検出された。床面からの深さは各々、Ｐ１＝69㎝、Ｐ２＝74㎝、Ｐ３＝80㎝、Ｐ４＝63㎝、Ｐ５＝71㎝、Ｐ６＝72㎝、Ｐ７＝52㎝、Ｐ８＝72㎝、Ｐ９＝54㎝、P10＝53㎝、P11＝55㎝、P12＝13㎝、P13＝70㎝、P14＝57㎝、P15＝56㎝、P16＝70㎝、P17＝73㎝、P18＝33㎝、P19＝５㎝を測る。新住居跡の主柱穴は、位置関係から想定するとＰ１～６と考えられる。平面的にはＰ３・４間がやや狭いながら整った六角形に配置されている。旧住居跡の主柱穴については明確な組合わせが指摘できないが、Ｐ８、P17は北側の一辺に当たるものと思われる。柱穴覆土は黄褐色を主体とし、やや軟弱であった。また、いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。壁溝は、新住居のものが西側から南側にかけて断続的になる。特に南西壁の一部で切れる他は全周する。旧住居の壁溝は東壁の一部と南西側貼床部分で切れる。拡張・重複の段階での掘り下げの結果からか、新住居のものに比してやや幅狭で浅い。壁は、南側の一部に撹乱を受けているが遺存状態は良好で、わずかに外反しながら立ち上がる。

炉跡は、中央やや北寄りに構築されている。調査の結果、新旧２つの炉跡が確認された。北側の炉は、上半部を欠いた円筒形深鉢を埋設した土器埋設炉で、土器は一部のみ残存していた。南炉は掘り方壁に土器片が密着していたのみで、両者ともに住居廃棄時に破壊されたものと考えられる。掘り方上面のプラン


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
攪乱
L=54．700m
(SJ－8)
1 暗黄褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有。
2 黒色土 第1層より、ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含む。
3 黒褐色土 含有物は第1層に類似。色調はやや暗い。
4 暗茶褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。
5 茶褐色土 堅く締まった層。焼土粒、炭化物を少量含有する。
6 〃 ローム粒を主体とする層。堅い。
7 〃 ロームブロックを主体とする層。
8 〃 ロームブロックと黒色土の混合層。堅い。
0
2m
L=54．100m
(SJ－8炉)
1 黒褐色土 多量のローム粒と、少量の焼土粒、炭化物を含む。
2 〃 第1層より黒色が強い。焼土ブロック混入。
3 〃 ロームブロックを多く含む。焼土粒は少ない。
4 暗黄褐色土 焼けたロームブロックを主体とする。
5 〃 焼けて焼土化した部分。
6 黒褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。
7 〃 第6層に類似するが、堅く締まっている。
0
1m

第19図　第８号住居跡

は不整楕円形を呈している。長径102㎝、短径82㎝、深さは北炉が21㎝、南炉が29㎝を測る。覆土中には焼けたロームブロックが多量に混入していた。また、炉底面の被熱痕跡は顕著であった。

覆土は、全体的に茶褐色の強い色調で、第７号住居跡の様相に類似し、８層に分かれた。第３層以下は黄褐色土を主体とする層で、出土遺物は上層の第２層に集中する。遺物は多量であったが、他の一括出土状況とは異なり、全体的に散乱した印象を受けた。復元された土器は27個体を数え、勝坂式最終末と加曽利ＥⅠ式前半の土器の共伴が注目される。石器は、打製石斧を主体とし、他に磨製石斧、敲石が見られる。

本住居跡の時期は、覆土遺物から勝坂Ⅲ式後半・加曽利ＥⅠ式前半段階に比定できよう。

第９号住居跡（第20・21図）

本住居跡は調査区西側のＦ・Ｇ－４グリッドにあり、台地上位の平坦部に占地している。南西側で第10号住居跡と重複しているが、本住居跡の方が新しい。また、南側には第６号住居跡が近接して位置する。

平面プランは、第10号住居跡と重複するため南西側が不明確であるが、土層断面と他の部分から大略円形を呈するものと思われる。Ｐ１・４の中間とＰ２・３を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ－26°－Ｗを指す。規模は径3.9m 前後で、同時期の他の住居跡に比して小規模である。確認面からの深さは34㎝を測る。床面は全体的に堅緻で概ね平坦であるが、中央部分が若干窪んでいる。炉跡周辺は顕著な硬化が認められた。ピットは６箇所検出された。床面からの深さはＰ１＝71㎝、Ｐ２＝70㎝、Ｐ３＝61㎝、Ｐ４＝62㎝、Ｐ５＝65㎝、土壙状を呈するＰ６＝３㎝を測る。位置関係から主柱穴はＰ１～４と考えられる。平面的には北側に開放する整った台形状に配され、第５号住居跡の柱穴配置に類似する。ただし、Ｐ４についてはＰ５がこれに代る可能性もある。入口を想定し得るような遺構は検出されなかった。また、西壁推定部近くに位置する土壙状のＰ６は、類似例が第５号住居跡でも検出されており、住居内での何らかの作業を行うための施設と考えられる。機能を暗示するように、Ｐ６北側からは床面直上で砥石が出土している。柱穴の覆土は茶褐色土を主体とし、柱痕は検出できなかった。なお、Ｐ３内から砥石の一部が出土したことから、柱は住居廃棄時に抜き取られたものと思われる。壁は大きく外反する。壁溝は確認されなかった。

炉跡は、中央より北寄りに偏して構築されていた。口縁部と胴下半部を欠くキャリパー形深鉢を埋設し、南側のみ炉縁石を有する。他の石が抜き去られた可能性もあるので、一応土器埋設石囲炉としておく。掘り方上面のプランは不整形を呈している。長径67㎝、短径58㎝、深さは20㎝を測る。土器覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、土器内面の被熱痕跡は顕著で、剥離が多く見られる。

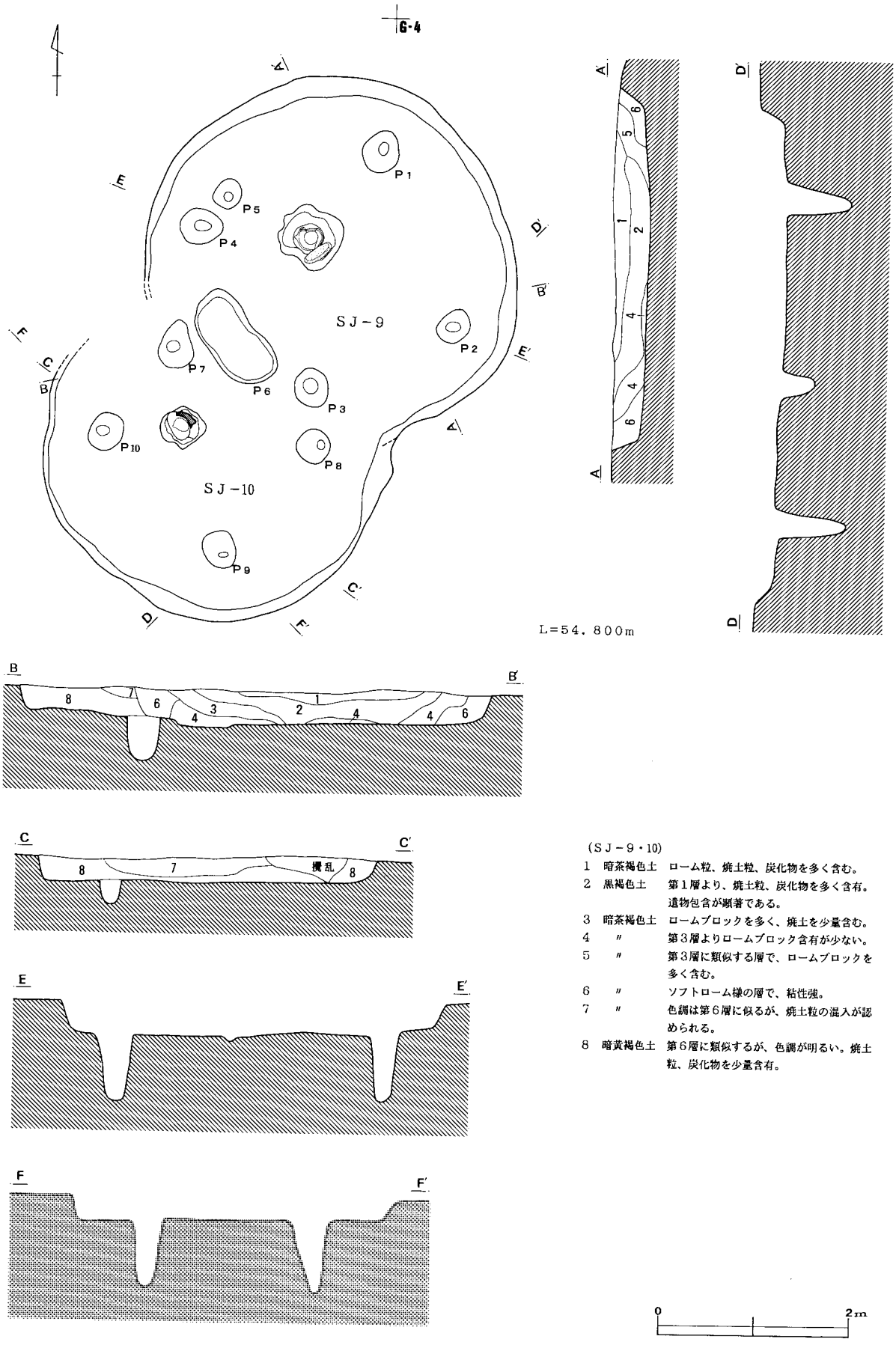
覆土は、全体的に茶褐色の強い色調を呈している。出土遺物は他の遺構に比して少なめである。傾向としては第２層中位に多く、特に炉跡の西側にまとまって出土した（第21図）。また、第４層以下ではほとんど遺物をみない。復元された10個体である。本住居跡でも、勝坂式最終末と加曽利ＥⅠ式前半の土器の共伴が認められた。出土石器には打製石斧の他、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、砥石がある。

本住居跡の時期は、炉埋設土器と出土土器から勝坂Ⅲ式後半・加曽利ＥⅠ式前半段階に比定できよう。

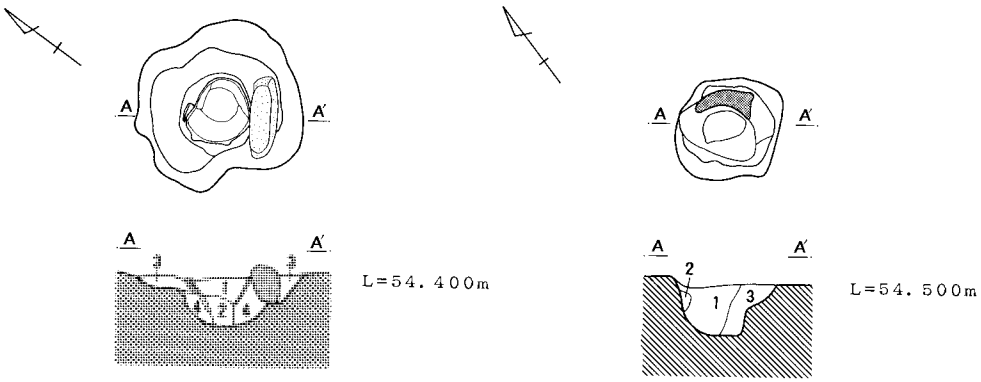
第10号住居跡（第20・21図）

本住居跡は調査区東側のＦ－４グリッドに位置し、台地上位の平坦部で第９号住居跡とともに検出された。第９号住居跡には、北壁から西壁の一部を切られる。

平面プランは、第９号住居跡との重複関係から北側が不明であるが、残存部分と柱穴配置から、ほぼ円形を呈するものと考えられる。主軸をＰ７・10とＰ８・９の中間を結んだ線とすれば、方位はＮ－49°－Ｗを向く。規模は長径推定3.7m、短径推定3.4m で、第５・９号住居跡に近似する。確認面からの深さ

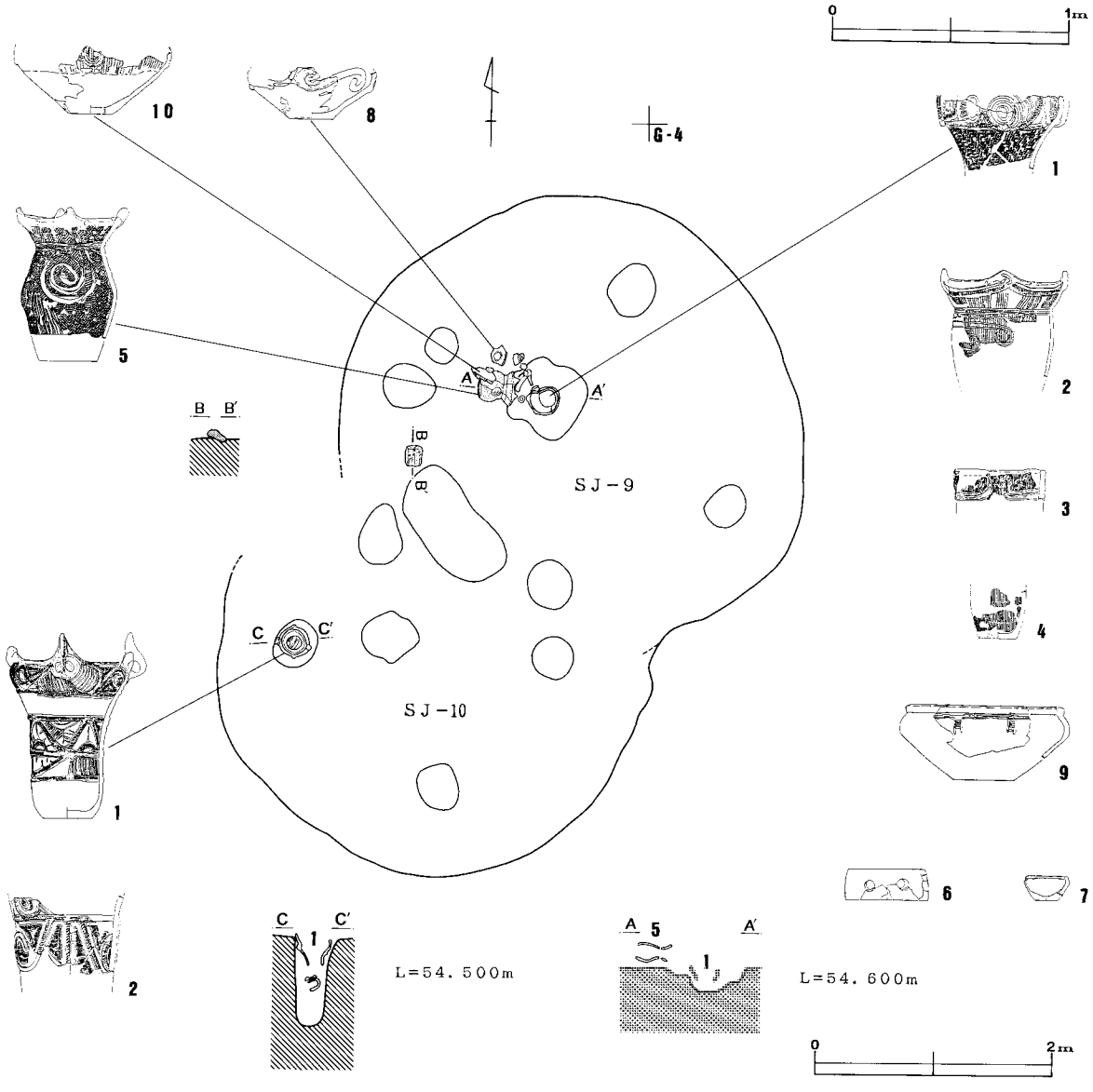


第20図　第９・10号住居跡（１）



（ＳＪ－９炉）
1　黒褐色土　ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物を少量含有。
2　〃　第１層よりロームブロックを多く含む。
3　〃　ローム粒、焼土粒を極少量含有。堅い。
4　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。被熱顕著。

（ＳＪ－10炉）
1　黒褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含む。
2　〃　焼土粒を多く含有。
3　〃　焼土粒、ロームブロックを多く含む。



第21図　第９・10号住居跡（２）

は25㎝を測る。床面は全体的に堅緻で概ね平坦であるが、西壁から中央に向かって若干の傾斜が認められる。炉跡周辺には顕著な硬化が見られた。ピットは４箇所検出され、全てが位置関係から主柱穴と認定し得る。床面からの深さはＰ７＝71㎝、Ｐ８＝65㎝、Ｐ９＝75㎝、P10＝71㎝を測る。平面的には、南東側に開放する台形状を呈している。入口を想定し得るような遺構は検出されなかった。

柱穴覆土は、茶褐色の強い色調を呈し、全体に軟弱であった。柱痕は検出されなかった。なお、P10内には勝坂式末の土器が柱穴にはめ込まれたかのような状態で出土し、下半部は自重で剥離したように柱穴の底近くに横倒しになっていた（第21図）。これらの出土状態と柱穴覆土から、柱が抜かれていた可能性を指摘しておきたい。壁は緩く外反して立ち上がる。壁溝は、第９号住居跡と同様、検出されなかった。

炉跡は、中央よりやや北寄りに位置する。埋設土器、炉縁石ともに無く、一見地床炉のように見られるが、被熱痕跡と掘り方断面の観察から少なくとも土器は埋設されていたと考えられる。掘り方上面のプランは不整方形を呈する。一辺42㎝前後で、深さは24㎝を測る。覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、東側に被熱による赤色変化と硬化が認められた。

覆土は、全体的に茶褐色の強い色調を呈している。壁溝も存在しないことから、当初第９号住居跡との分離は困難であったが、Ｐ７の覆土と第６層の分離から判断し得た。土器、石器ともに、出土遺物は極めて少ない。特に第８層からはほとんど出土していない。復元された土器はわずか２個体であるが、P10内出土土器は今回報告の中でも優品と言える。石器は打製石斧と敲石があるのみである。

本住居跡は、P10出土土器から勝坂Ⅲ式前半に比定できよう。

第11号住居跡（第22・23図）

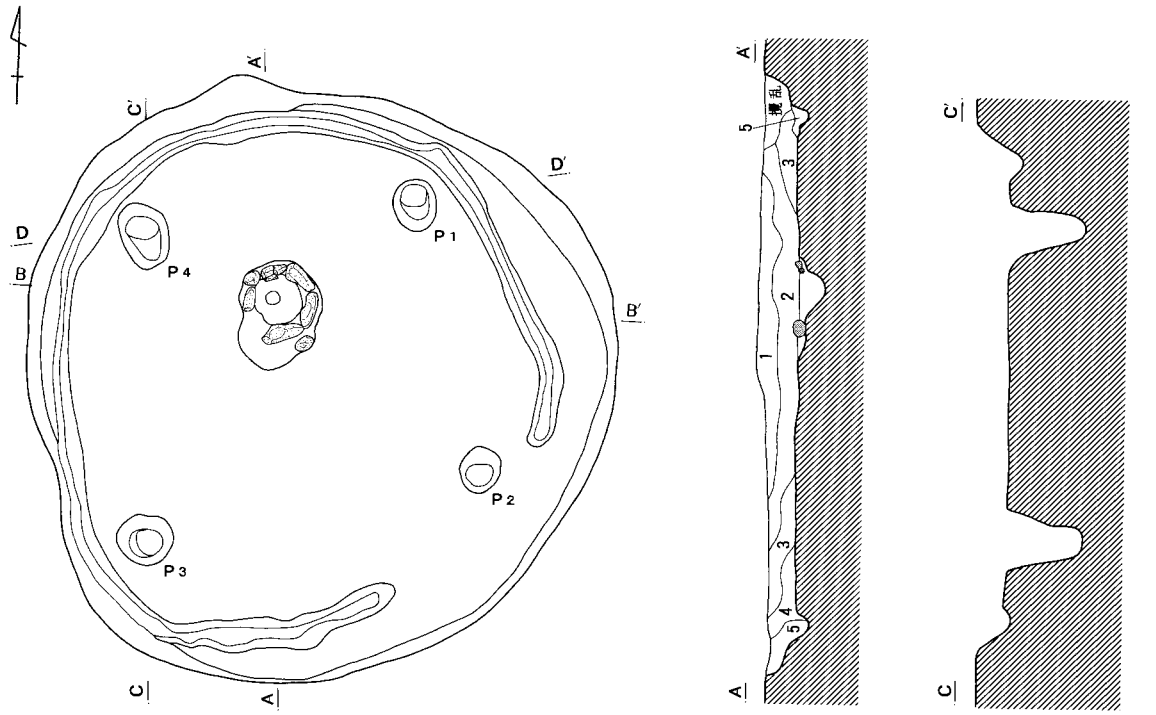
本住居跡は調査区南東隅の台地平坦部に位置し、Ｈ－６グリッドにある。南西約３ｍには、第12・13号住居跡が重複して所在する。また、北側には第４号溝状遺構が東西方向に走る。

平面プランは、不整楕円形を呈している。Ｐ１・４とＰ２・３の中間を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ－７°－Ｗを指す。規模は、長径4.9m、短径4.7mで、確認面からの深さは31㎝を測る。床面は概ね平坦であるが、顕著な硬化面は炉跡周辺に限定される。検出されたピットは４箇所のみで、位置関係からすべて主柱穴と思われる。それぞれの深さは、床面からＰ１＝63㎝、Ｐ２＝53㎝、Ｐ３＝59㎝、Ｐ４＝60㎝を測る。平面的には南側に若干開く台形状に配置されている。覆土は茶褐色を主体とし、いずれの柱穴からも柱痕は検出していない。壁は大きく外反して立ち上がる。壁溝はＰ２周辺、約1.5mにわたって確認できなかったが、その他の部分では切れ目無く続く。幅20㎝前後、深さ15㎝前後を測る。東壁では壁溝と壁の間に間隔が空くが、周辺は部分的に撹乱を受けているため、遺構プランは誤認した可能性もある。遺構の平面プランは、壁溝に沿った輪郭が妥当とすべきであろう。

炉跡は、床面中央よりわずか北寄りに構築されている。石囲炉で、不整楕円形プランの掘り込みの北側部分に、円を描くように炉縁石が並ぶが、南西側の一部を欠く。掘り方上面は長径81㎝、短径64㎝、深さは19㎝を測る。炉縁石、炉底ともによく焼けており、炉床中央部は焼土化していた。

覆土は５層に分層できた。全体的に、茶褐色の強い色調を呈している。遺物量は比較的少なく、主に第２層中位から出土している。平面的には、遺構中央より東側に偏在する（第23図）。復元された土器は14個体あるが、ほとんどが破片からの復元実測である。土器と同様、石器も少ない。器種として打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、石皿がある。

本住居跡の時期は、覆土出土土器から加曽利ＥⅠ式後半段階に比定されるが、土器の中には加曽利ＥⅡ

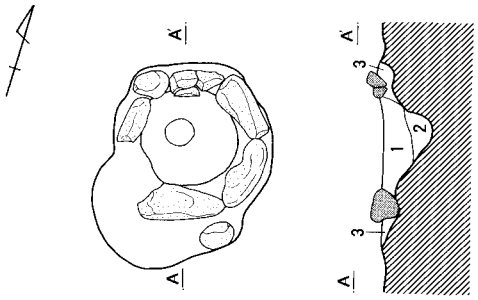


L=54.900m

(SJ-11)

1 暗褐色土　ローム粒を多く、焼土粒、炭化物を少量含有。
2 黒褐色土　第1層より黒色が強く、焼土粒、炭化物を多く含む。遺物包含が顕著。
3 暗茶褐色土　ソフトローム様の層。焼土粒、炭化物を少量含有。
4 〃　第3層より明るい色調を呈する。ロームブロックを少量含む。
5 〃　ロームブロックを多量に含有。

0 2m



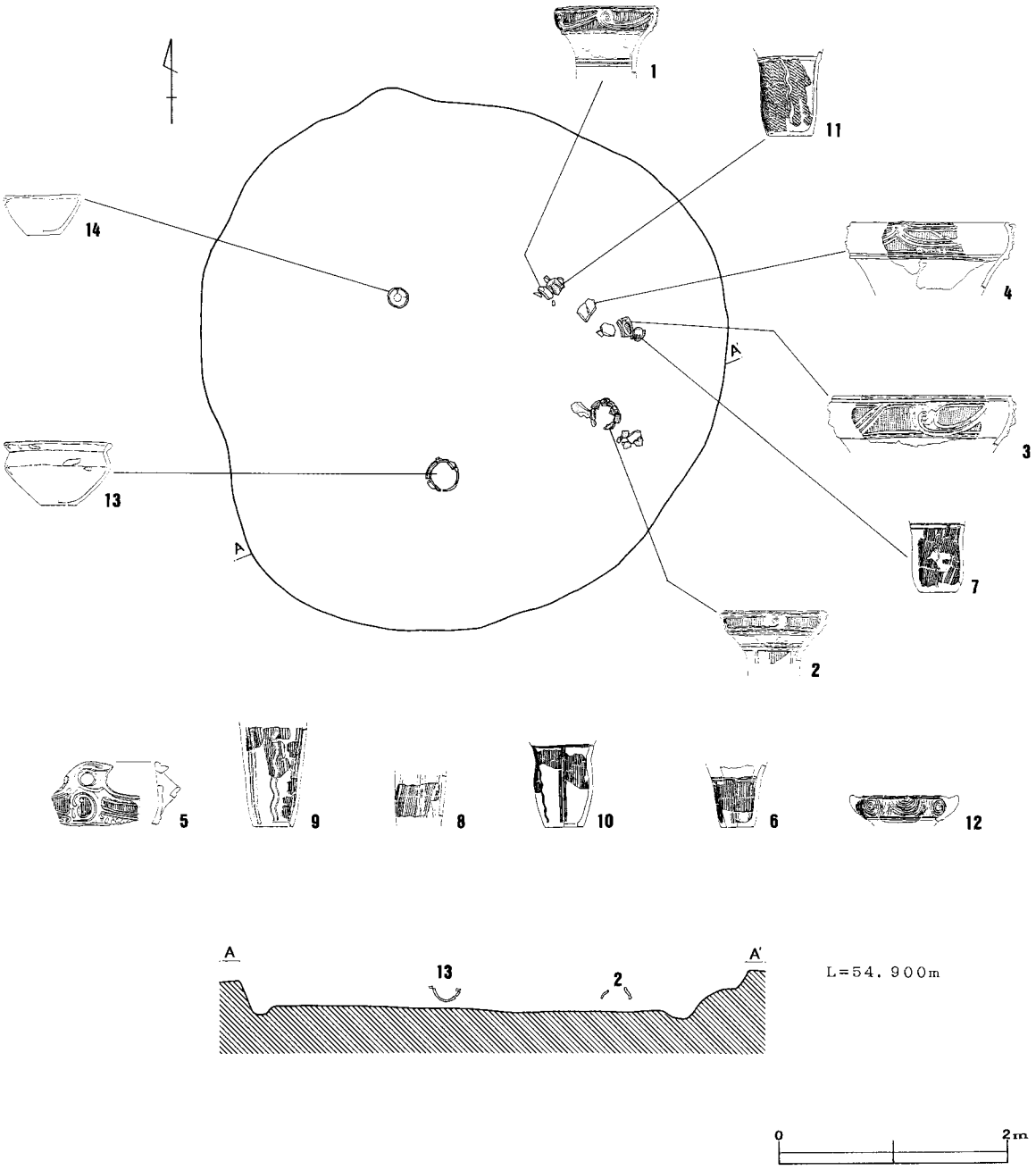
L=54.600m

(SJ-11炉)

1 黒褐色土　ローム粒、炭化物を含む。
2 茶褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有。
3 〃　ロームブロック、焼土粒を多く含む。

0 1m

第22図　第11号住居跡（1）



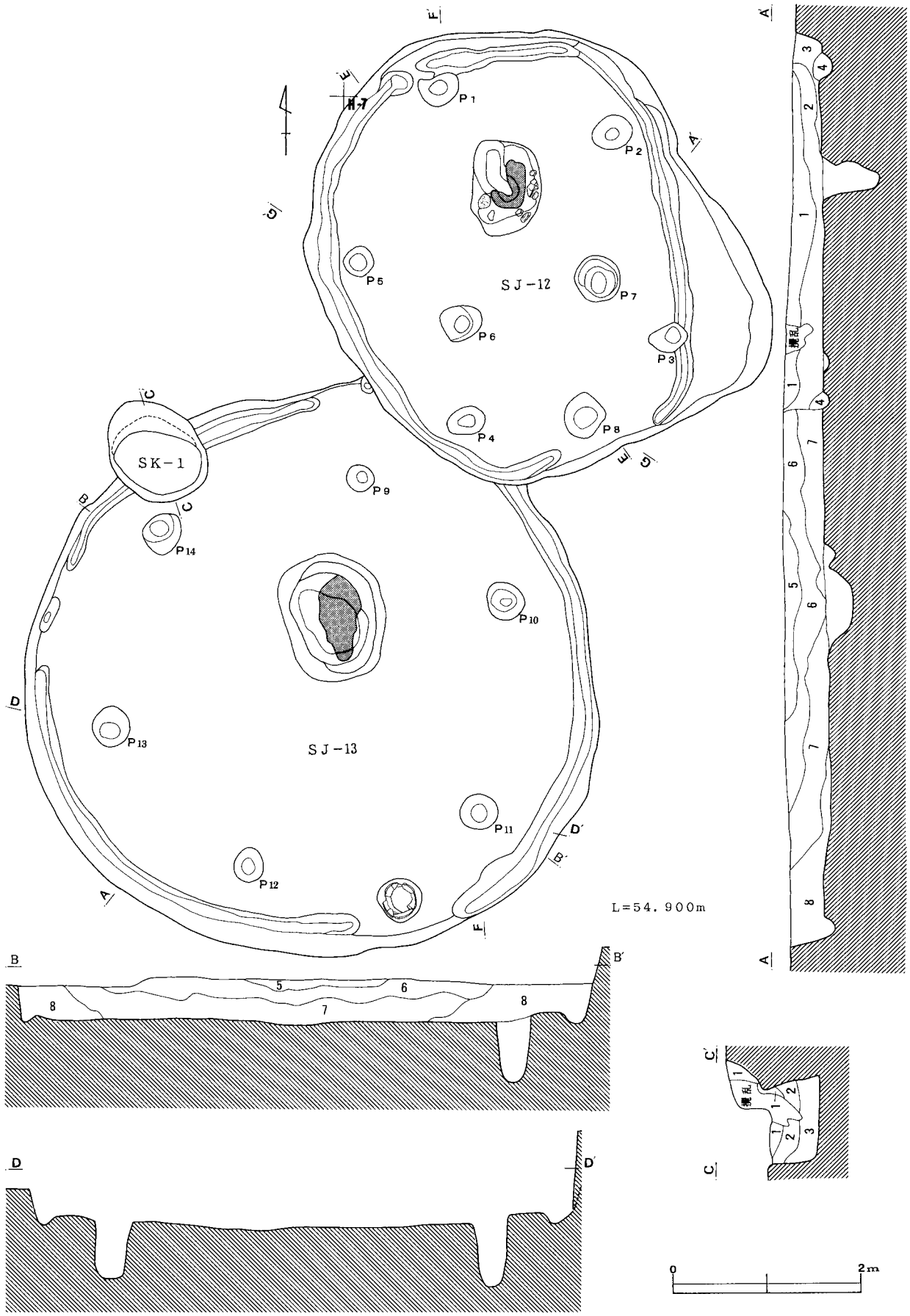
第23図　第11号住居跡（２）

前葉段階のものも認められる。

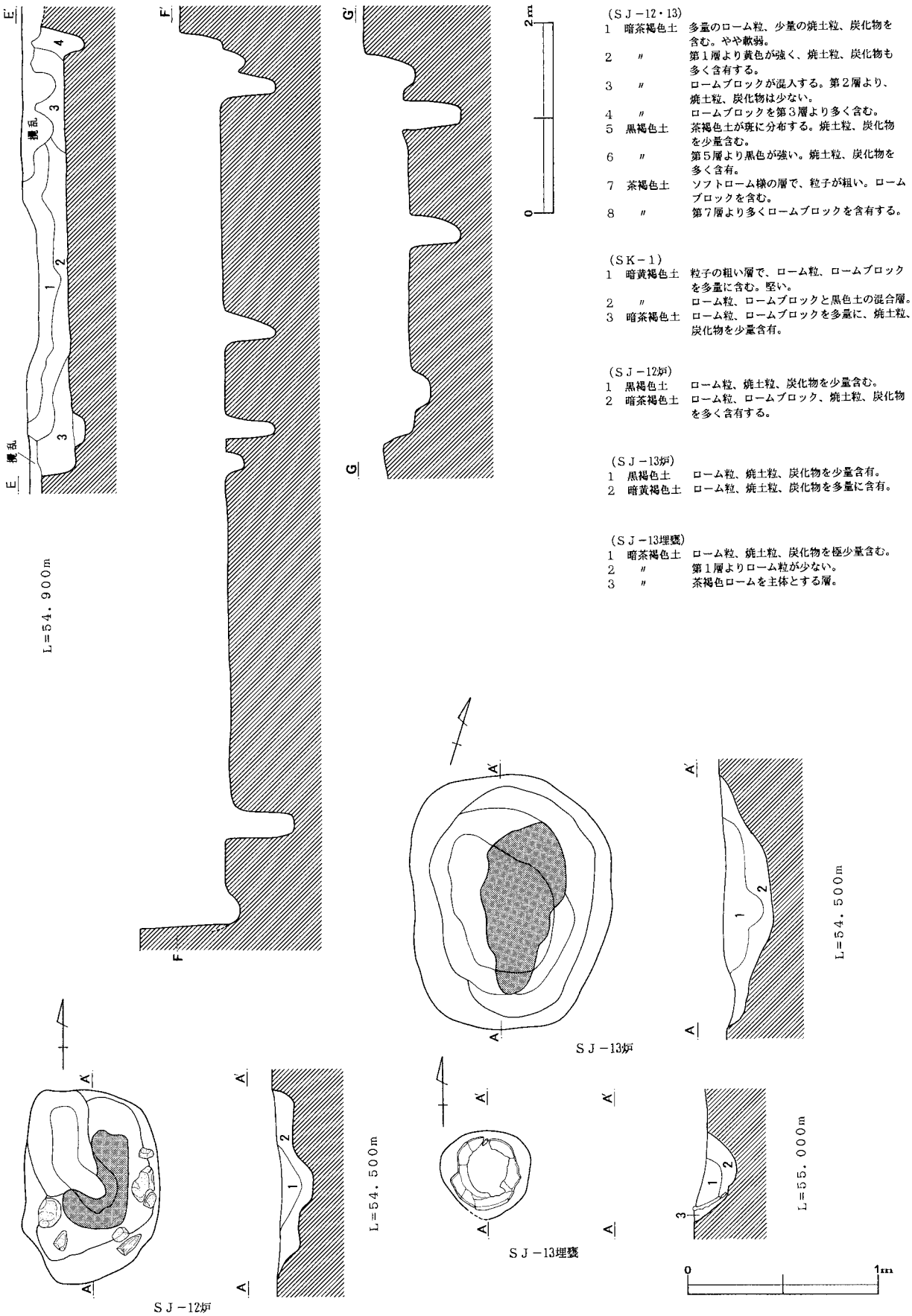
第12号住居跡（第24～26図）

本住居跡は調査区南縁の台地平坦部、Ｈ－６・７グリッドに位置する。南西側は第13号住居跡と重複するが、新旧関係は本住居跡が後出している。北側には、第４号溝状遺構が東西に走る。

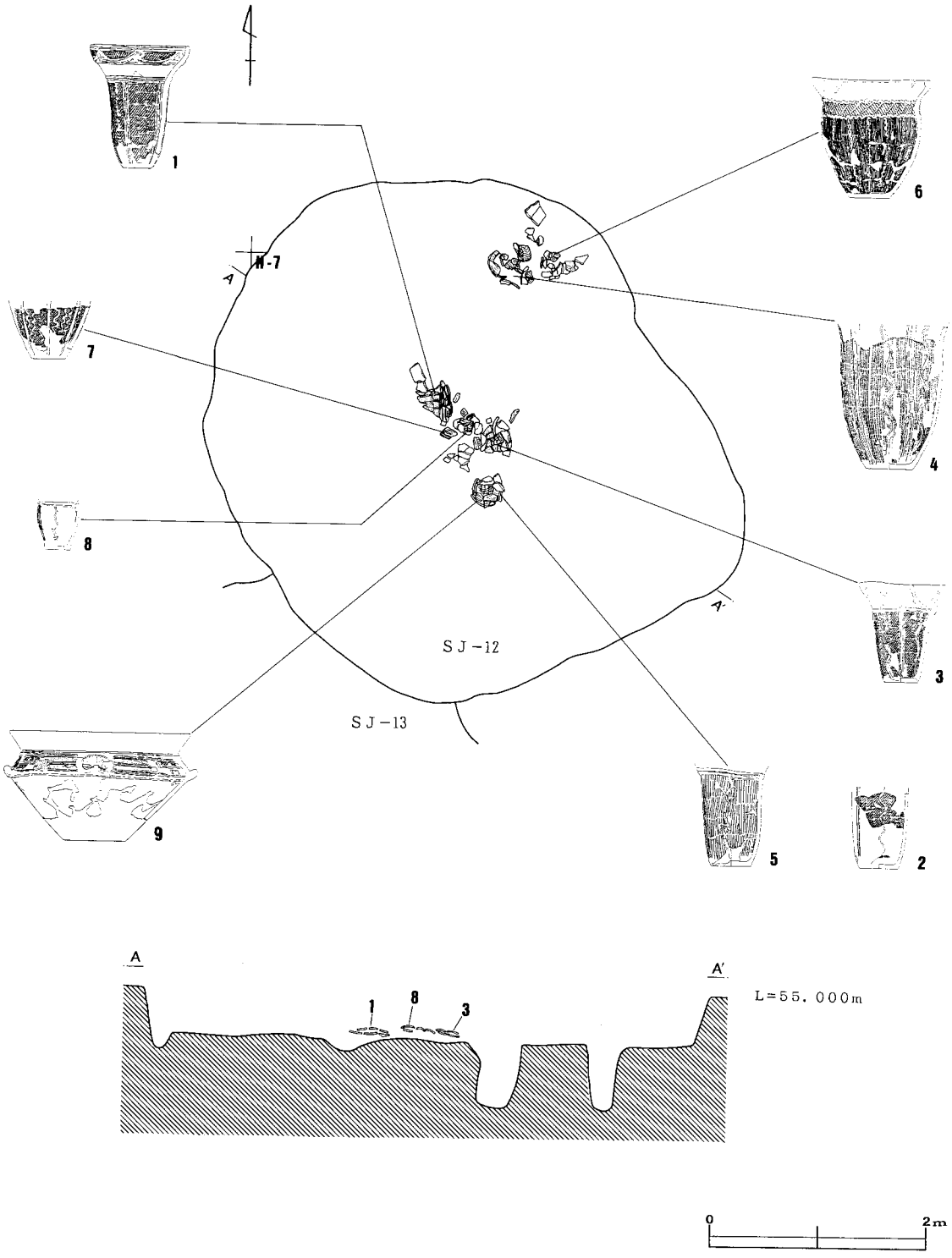
平面形は不整楕円形プランだが、掘り過ぎの可能性がある南東側を除けば、隅丸五角形に近い形状を呈する。Ｐ１とＰ３・４の中間を結んだ線を主軸とすると、方位はＮ－25°－Ｗを指している。規模は、長径5.0m、短径4.3mで、確認面からの深さは41㎝を測る。床面は概ね平坦であるが、炉跡を中心に硬化面が広がる。検出されたピットは８箇所で、床面からの深さはＰ１＝56㎝、Ｐ２＝60㎝、Ｐ３＝60㎝、Ｐ４＝55㎝、Ｐ５＝59㎝、Ｐ６＝52㎝、Ｐ７＝60㎝、Ｐ８＝17㎝をそれぞれ測る。この内、Ｐ１～５が主柱穴と推



第24図　第12・13号住居跡（１）



第25図　第12・13号住居跡（2）



第26図　第12・13号住居跡（３）

定され、平面的には北側に頂点を持つ五角形に配置されている。また、いずれの柱穴も壁溝にほとんど接する位置に穿たれている点が興味を引く。Ｐ６・７は主柱穴と同等の深度を有する。当初、拡張の可能性を考えたが、対応するピットは検出されなかった。また、Ｐ２・３、Ｐ４・５との相互の位置関係から間仕切様の遺構と考えておく。柱穴覆土は茶褐色土を主体とし、柱痕は確認されなかった。壁は緩く外反して立ち上がる。壁溝は南壁部分で途切れる他は、幅20㎝前後で切れ目無く続く。深さ10㎝前後を測る。南壁の壁溝途切れ部分の中央にはＰ８が位置し、その在り方から入口遺構の可能性が高い。

炉跡は、床面中央よりやや北寄りに位置している。不整楕円形プランの掘り込みを持ち、焼けた石が東から南の縁辺に沿うように出土した。炉底中央部は焼けて焼土化し硬化している。この様相から、元々は石囲炉であり、住居廃棄時に破壊したものと解釈した。掘り方上面は長径104㎝、短径73㎝、深さは18㎝前後を測る。炉内から出土した石の内、２点は磨製石斧の未製品で互いに接合している。

覆土は４層に分層できた。全体的に、茶褐色の強い色調を呈する。遺物は第２層中位、床面から若干浮いた形で出土している。平面的には、炉跡南側と北東壁際にまとまっている（第26図）。復元された土器は９個体あり、加曽利ＥⅡ式前葉段階と曽利Ⅱ式の良好なセットと言えよう。石器の出土量は少なく、器種として打製石斧、磨製石斧未製品、敲石がある。

本住居跡の時期は、覆土出土土器から加曽利ＥⅡ式前葉段階に比定されよう。

第13号住居跡（第24・25図）

本住居跡は調査区南縁の台地平坦部にあり、Ｇ・Ｈ－７グリッドに位置している。北東側で第12号住居跡と重複し、本住居跡が切られる。北壁には、第１号土壙が重複する。なお、南壁の一部はわずかながら調査区外にある。

平面形は整った円形プランを呈している。Ｐ９・14の中間と炉跡、屋内埋甕を結んだ線を主軸と考えられ、主軸方位はＮ－18°－Ｗを向く。規模は今回検出された遺構の中では大型の部類に入り、径6.2m、確認面からの深さは50㎝を測る。床面は概ね平坦であるが、南側付近に若干の凹凸が認められる。炉跡周辺には硬化面が広がる。検出されたピットは６箇所で、位置関係、深さからすべてが主柱穴と考えられる。平面的には南側がやや開くが、整った六角形に配置されている。床面からの深さはＰ９＝64㎝、Ｐ10＝60㎝、Ｐ11＝74㎝、Ｐ12＝64㎝、Ｐ13＝62㎝、Ｐ14＝67㎝をそれぞれ測る。いずれの柱穴も壁溝に、やや近い位置に穿たれている。柱穴覆土は茶褐色土を主体とし、明確な柱痕状の土層は確認できなかった。壁はわずかに外反して立ち上がる。壁溝は南側中央部分、部分的に断続するが、検出部分では幅10～20㎝、深さ10㎝前後で掘られている。南側、屋内埋甕付近で途切れるのは、入口と関連するものと思われる。

炉跡は、床面中央より若干北寄りに構築されている。楕円形プランの掘り込みを持つ。中央部分は南北に細長く焼土化している。埋設土器、炉縁石等は伴わないが、被熱部分が中央に位置する在り方から、炉縁石を抜かれた可能性もある。掘り方上面は長径136㎝、短径108㎝、深さは30㎝前後を測る。

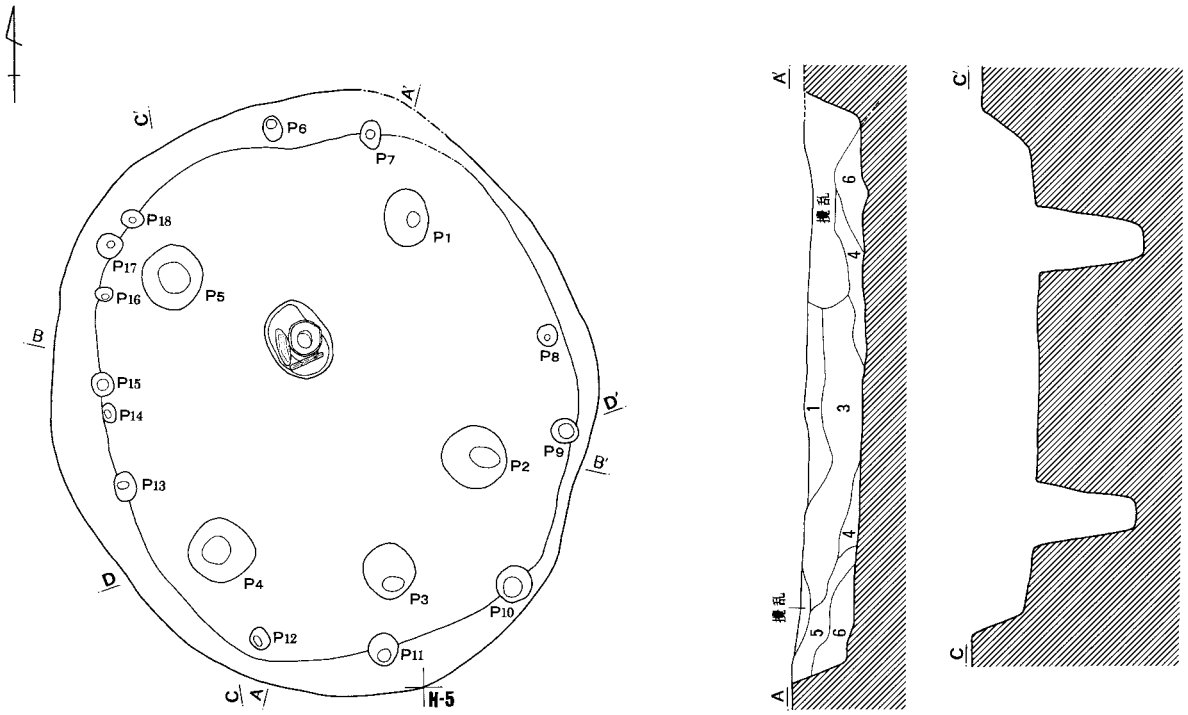
屋内埋甕は、南側中央より、壁からわずかに離れた位置に埋設されていた。本埋甕両側は、壁溝がほぼ等間隔で途切れており、住居構築の当初段階から設置位置と入口を限定していたものと考えられる。土器は加曽利ＥⅡ式古段階のもので、胴部を欠いた状態で正位に埋設されていた。掘り方は不整円形を呈し、径48㎝前後、深さは25㎝を測り、断面形は鍋底状を呈している。

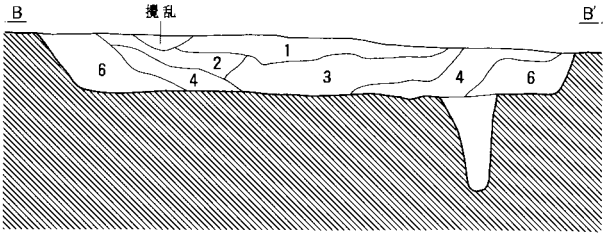
覆土は４層に分層できた。全体的に、茶褐色の色調を呈している。遺物出土量は少なく、多くは第６・７層中に散乱した状態で出土している。復元された土器は、屋内埋甕を含めて４個体である。石器は打製石斧を中心として、スクレイパー、敲石、砥石、石皿破片があるが、土器と同様少ない。

本住居跡の時期は、屋内埋甕から加曽利ＥⅡ式前葉段階に比定されよう。

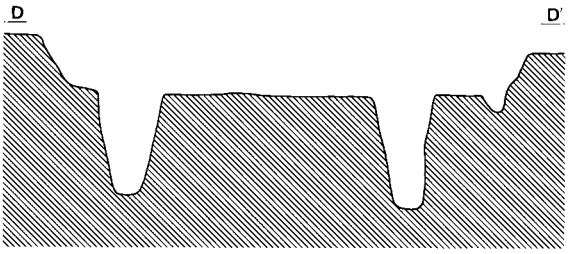
第14号住居跡（第27・28図）

本住居跡は調査区東側のＧ・Ｈ－４グリッドに位置している。台地上位の平坦部に占地され、西側３ｍには、第６号住居跡が位置する。他の遺構との重複関係はなく、遺存状態は良好と言える。ただし、北東壁と床面の一部を立木によって破壊されている。なお、本遺構は当初見落され、航空測量後、写真上で確



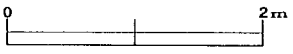


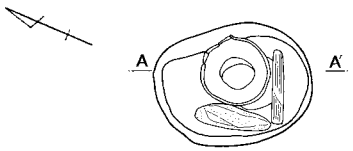
L＝54．900m

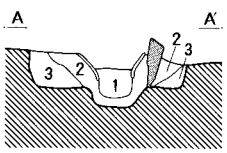


（SJ－14）

1　暗茶褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。やや軟弱。
2　黒褐色土　第1層の含有物の他、小粒のロームブロックを含む。
3　黒色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含む。遺物の多くは当該層に包含されていた。
4　暗茶褐色土　ソフトローム様の層で、ロームブロックを含有。
5　〃　第4層より色調が暗く、堅い。
6　〃　第4層に似るが、ロームブロックを多量に含有する。



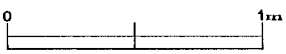




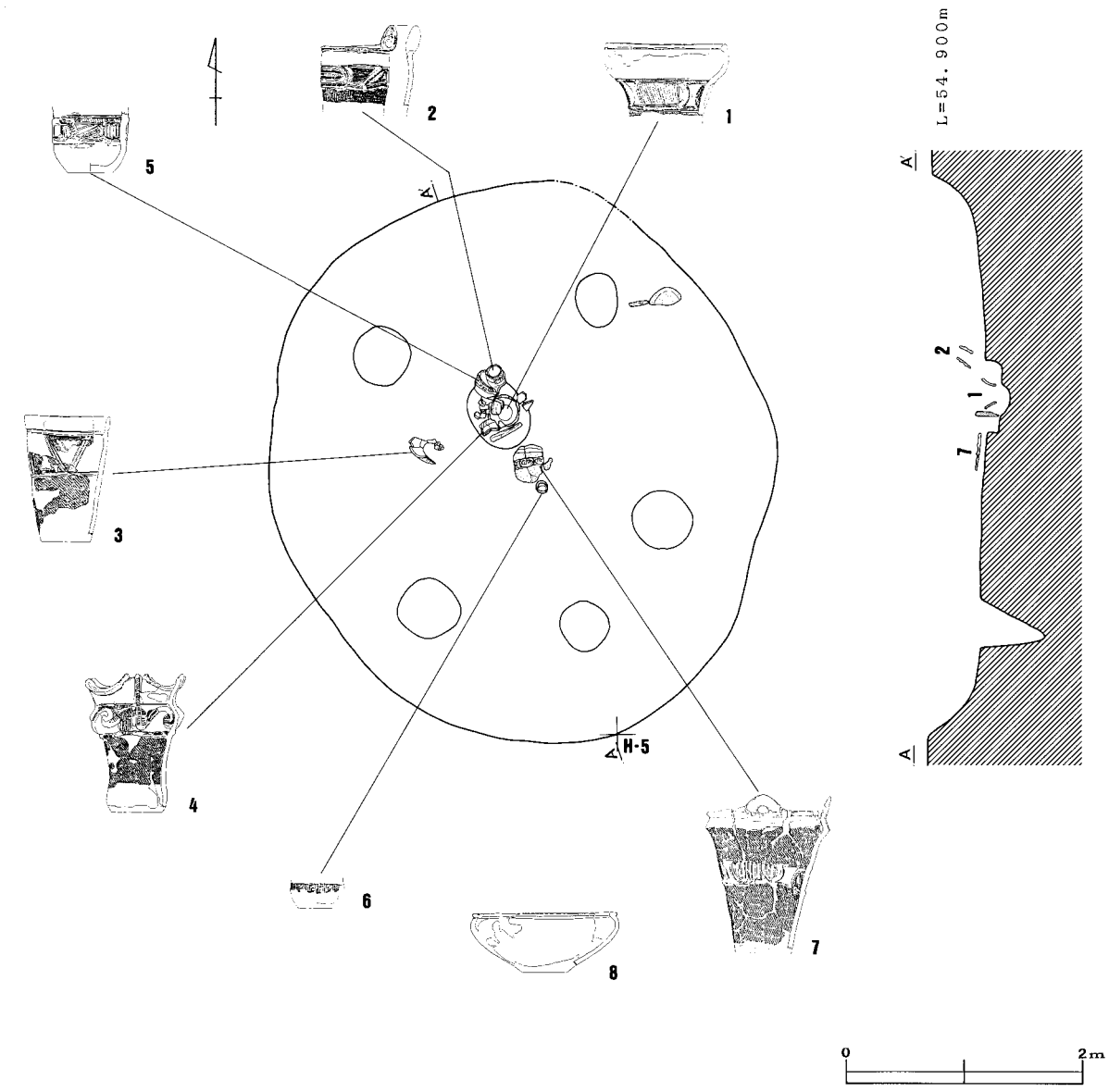
（SJ－14炉）

1　黒褐色土　黒色の強い層。ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2　〃　第1層に類似するが、炉中央部は焼けて硬化している。
3　暗黄褐色土　被熱のためロームがブロック状となっている層。

L＝54．400m



第27図　第14号住居跡（1）



第28図　第14号住居跡（２）

認されたものである。よって、航空写真には写っていない。

平面プランは、南北に長軸を有する楕円形で、整った形状を呈している。主軸をＰ１・５の中間と炉跡、Ｐ８を結んだ線とすれば、方位はＮ－18°－Ｗを指す。規模は長径4.9m、短径4.3m、確認面からの深さは47㎝を測る。床面は全体的に堅緻で概ね平坦であるが、床面北東側には若干の凹凸が認められる。炉跡周辺と、主柱穴に囲まれた部分には顕著な硬化が見られた。ピットは18箇所検出されたが、新旧時期の重複は認められない。床面からの深さはＰ１＝99㎝、Ｐ２＝88㎝、Ｐ３＝53㎝、Ｐ４＝79㎝、Ｐ５＝83㎝、Ｐ６＝33㎝、Ｐ７＝６㎝、Ｐ８＝19㎝、Ｐ９＝14㎝、Ｐ10＝31㎝、Ｐ11＝46㎝、Ｐ12＝12㎝、Ｐ13＝14㎝、Ｐ14＝11㎝、Ｐ15＝17㎝、Ｐ16＝３㎝、Ｐ17＝11㎝、Ｐ18＝20㎝をそれぞれ測る。この内、規模、深さから主柱穴と考えられるのはＰ１～５である。平面的にはＰ３・４間がわずかに開くが、整った五角形状を呈している。他の小ピットは壁下端に沿って穿たれており、主柱穴との位置関係が三角形状に対応するものが多いことから、上屋を支える補助的機能、あるいは間仕切りに関係するものと推定される。なお、Ｐ６・11は大略長軸状に位置し、深さから考えても上屋に積極的に関連する可能性が高いことを指摘しておく。柱

穴覆土は黄褐色の強い色調を呈し、全体に軟弱であった。いずれも柱痕状の土層は確認できなかった。入口を想定し得る遺構は認められなかった。壁は外反しつつ立ち上がる。壁溝は検出されていない。

炉跡は、中央より北寄りに構築されていた。口唇部の一部と胴下半部を欠く勝坂式のキャリパー形深鉢を埋設し、西側と南側に炉縁石を配する。他の石が抜き去られた可能性もあるので、一応土器埋設石囲炉としておく。掘り方上面のプランは楕円形を呈し、長径62㎝、短径48㎝、深さは23㎝を測る。掘り方中位に段を有し、埋設土器部分は深く穿たれている。土器覆土中の焼土、炭化物は少なかったが、土器内面と周囲には被熱痕跡が顕著で、剥離が目立つ。なお、南側の炉縁石には大型の石皿を使用している。

覆土は、全体的に黄褐色の強い色調を呈し、第１層からの遺物出土は僅少で当初見落しの要因となった。遺物量は多めで、土器は第３層中より多量に出土している。特に炉跡直上にまとまっている（第28図）。復元された土器は、炉埋設土器を含めて８個体ある。石器は打製石斧を中心としているが、他に炉縁石に再利用された石皿や、Ｐ１東側の床面直上で大型の敲石と被熱痕跡を有する磨製石斧等が出土した。

本住居跡は、炉埋設土器と覆土出土土器から勝坂式前半の所産と考えられる。

集石土壙

第１号集石土壙（第29図１）

本遺構は、Ｅ－３グリッド北西端、台地北斜面の肩部付近に単独で位置する。今回検出された唯一の集石土壙である。東側には第２～12号土壙がまとまって占地している。

平面プランは東西方向が若干長いが、大略円形を呈している。長径1.6m、短径1.5m、深さは中央部で41㎝を測る。断面形は、壁が緩やかに傾斜する鍋底状であるが、壙底は被熱による凹凸が認められる。数回にわたる使用により、掘り返された可能性もある。

覆土は３層に分かれる。出土遺物は破砕焼石を主体とするが、中期のものと思われる被熱した浅鉢小破片と敲石が出土している。遺物包含は第１層内にほぼ限定される。遺物の平面分布は、北側にやや偏っている。

本遺構の時期は出土土器から中期と推定されるが、詳細な時期については断定し得ない。

土　壙

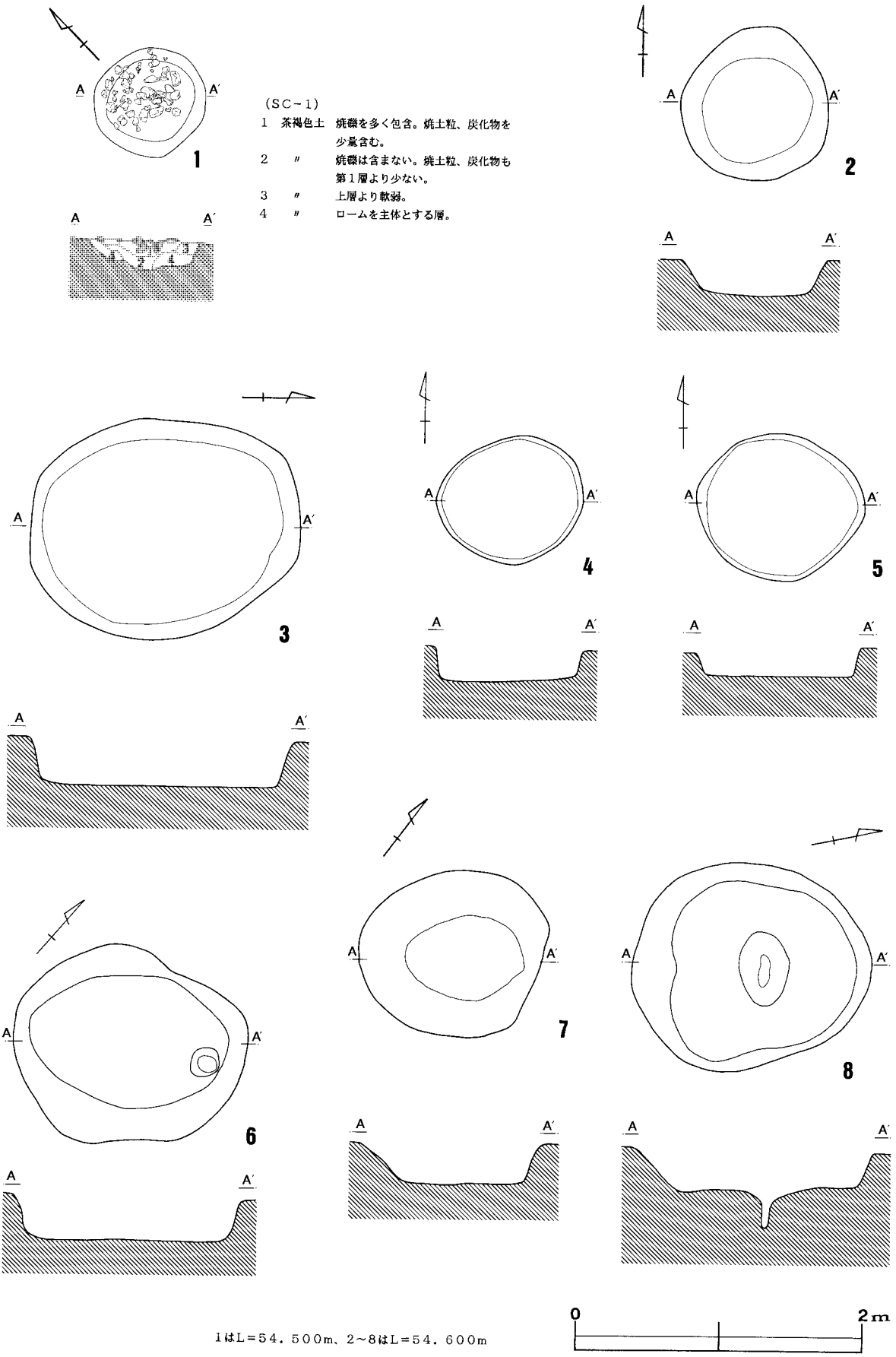
第１号土壙（第24図）

本土壙はＧ－７に位置し、第13号住居跡北壁に重複する。両者の新旧関係は、撹乱を受けているため土層断面はやや不明瞭であるが、本住居跡を切るものと判断した。

開口部は第13号住居跡覆土内にあったため、約１／２は不明である。残存部分の平面形は、東西に長い楕円形、断面は袋状を呈する。開口部から中位までは漏斗状に傾斜し、下半部は北側に広がりつつ壙底に至る。壙底は概ね平坦である。規模は、開口部が推定で長径1.2m、短径1.0m、壙底は長径0.9m、短径0.8m、確認面からの深さは109㎝を測る。

覆土は中央部に撹乱を受けているが、３分割し得た。いずれも堅く締まっていた。出土遺物は、縄文土器の細片のみで、いずれも流れ込みと考えられる。

本遺構の時期は、形状と第13号住居跡との重複関係から中期以降の所産と思われる。



第29図　集石土壙・土壙（1）

第２号土壙（第29図２）

本遺構は、F－３グリッドにあり、他の土壙と同様、台地平坦部の北西側に近い台地肩部に位置している。東側には第３号土壙がある。

平面形は、やや不整ながら概ね円形を呈し、径1.1m 前後、確認面からの深さは23㎝を測る。断面形は台形状を呈し、緩やかに傾斜する壁から平坦な壙底に至る。

覆土は茶褐色土の単純層で、出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙は時期決定資料を欠くが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期の所産と考えられる。

第３号土壙（第29図３）

本土壙は、F－３グリッドに位置する。他の土壙と群在する形で、調査区北西側の台地肩部にある。西側には第２号土壙が近接する。

平面形は、やや不整な楕円形を呈している。長径1.9m、短径1.6m、確認面からの深さは32㎝を測る。断面形は台形状を呈し、急角度に傾斜する壁から壙底に至る。壙底は概ね平坦であった。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙は時期決定資料を欠くため断定し得ないが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期の所産としておく。

第４号土壙（第29図４）

本遺構は、F－３グリッドにあり、台地平坦部の北西側の台地肩部に立地している。南側には第３号土壙、東側には第５号土壙が位置している。

平面形は、整った楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.9m、確認面からの深さは19㎝を測る。断面形は箱状を呈している。壁はほぼ直立するように立ち上がり、壙底は平坦である。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

時期は遺物と伴わないため断定し得ないが、他の遺構との比較から縄文時代中期の所産と思われる。

第５号土壙（第29図５）

本土壙は、F－３グリッドに位置する。他の土壙と群在する形で、調査区北西側の台地肩部に立地する。西側からは第４号土壙が検出されている。

平面形は、東側がややすぼまる楕円形を呈している。長径1.2m、短径1.1m、確認面からの深さは16㎝を測る。断面形は箱状を呈している。ほぼ直立する壁から、平坦な壙底に至る。

覆土は茶褐色土の単純層で、出土遺物は縄文土器の細片のみである。

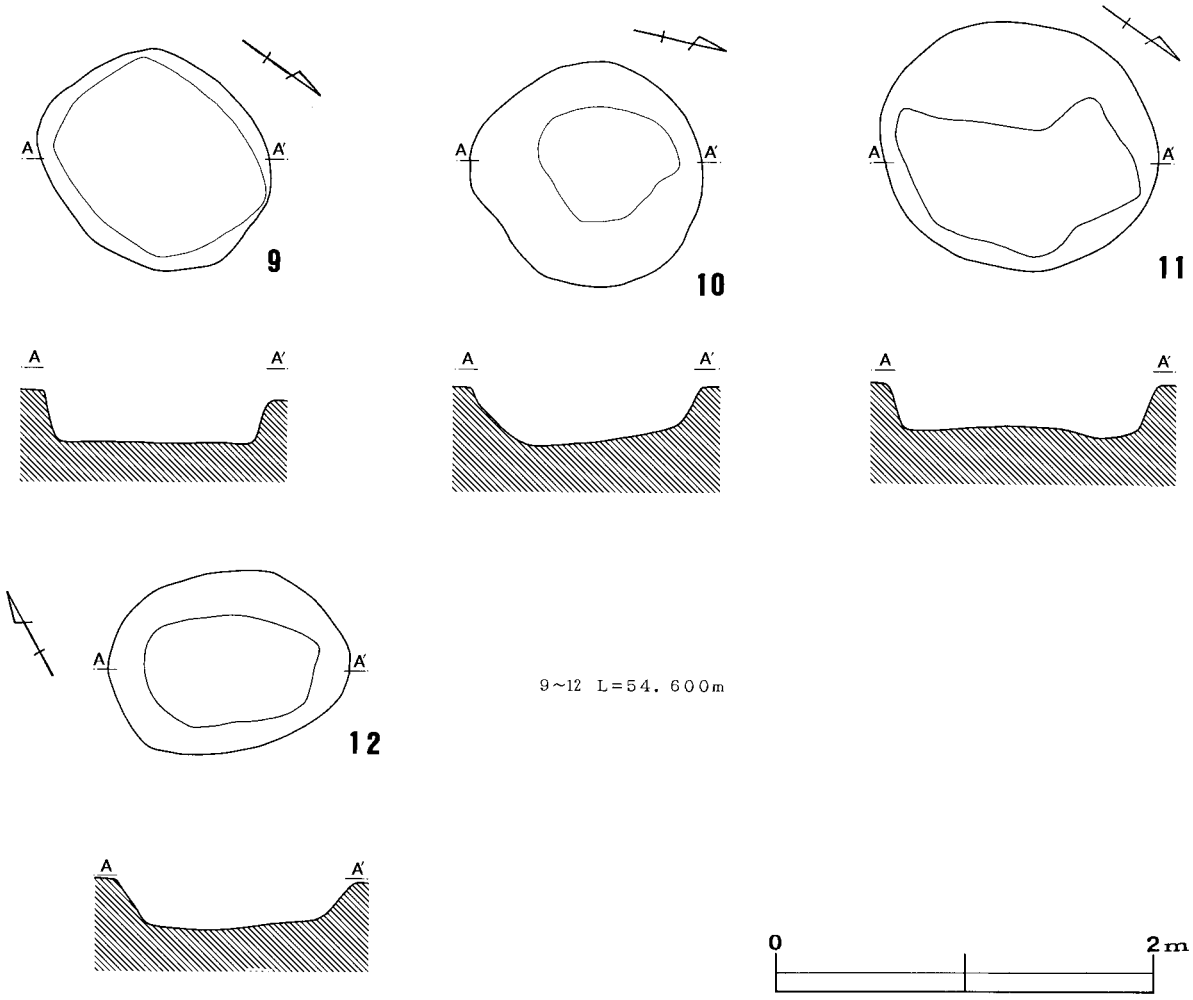
本土壙の時期は決定資料を欠くため断定し得ないが、他の遺構との位置関係から縄文時代中期の所産としておく。

第６号土壙（第29図６）

本土壙は、F－３グリッドに位置している。他の土壙と群在する形で、調査区北西側の台地肩部にある。周囲を他の土壙に取り囲まれている。

平面形は、北・南壁がやや括れる不整な楕円形を呈している。長径1.6m、短径1.4m、確認面からの深さは28㎝を測る。断面形は隅の丸い台形状を呈し、急角度に傾斜する壁から平坦な壙底に至る。壙底東端には、深さ10㎝の小ピットが１箇所穿たれている。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。



第30図　土壙（２）

時期は決定資料を欠くため断定し得ないが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期のものと考えられる。

第７号土壙（第29図７）

本遺構は、F－３グリッドにあり、他の土壙と同様、台地平坦部の北西側に近い台地肩部に位置している。北側には第８号土壙が検出されている。

平面形は、やや不整な楕円形を呈する。長径1.3m、短径1.2m、確認面からの深さは29㎝を測る。断面形は鍋底状で、東壁のみ急角度に立ち上がる。壙底は概ね平坦である。

覆土は茶褐色土の単純層で、出土遺物には縄文土器の細片の他、被熱痕跡のある敲石がある。

本土壙の時期は決定資料を欠くため断定し得ないが、他の遺構との位置関係から縄文時代中期の所産と思われる。

第８号土壙（第29図８）

本土壙は、F－３グリッドに位置している。他の土壙と群在する形で、調査区北西側の台地肩部にある。周囲を他の土壙に取り囲まれている。

平面形は、やや不整な楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.4m、確認面からの深さは31㎝を測る。断面形は鍋底状を呈し、南壁は傾斜が緩やかである。壙底は若干の凹凸があり、中央からは平面楕円形、深さ28

㎝の小ピットが検出されているが、用途は不明である。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙の時期は決定資料を欠き限定し得ないが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期の所産と考えられる。

第９号土壙（第30図９）

本遺構は、Ｆ－３グリッドにあり、他の土壙と同様、台地平坦部の北西側に近い台地肩部で検出された。土壙群の最も北側に位置している。

平面形は四辺形に近い不整な楕円形状を呈し、長径1.2m、短径1.1m、確認面からの深さは26㎝を測る。断面形は箱状を呈している。急角度に傾斜する壁から平坦な壙底に至る。

覆土は茶褐色土の単純層で、出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙の時期は決定資料を欠くため確定し得ないが、他の遺構との位置関係から縄文時代中期のものと思われる。

第10号土壙（第30図10）

本土壙は、Ｆ－３グリッドに位置している。他の土壙と群在する形で、調査区北西側の台地肩部にある。土壙群の最も西側に位置する。

平面形は、やや不整な円形を呈し、長径1.3m、短径1.2m、確認面からの深さは32㎝を測る。断面形は鍋底状で、緩やかに傾斜する壁から概ね平坦な壙底に至る。壙底は不整形を呈し、北から南に向かって若干傾斜が認められる。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙の時期は決定資料を欠き限定し得ないが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期の所産と思われる。

第11号土壙（第30図11）

本遺構は、Ｆ－３グリッドにあり、他の土壙と同様、台地平坦部の北西側に近い台地肩部で検出された。東側に第10号土壙、西側には第８号土壙が位置する。

平面形は、やや不整な楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.3m、確認面からの深さは28㎝を測る。断面形は隅丸の箱状で、緩やかに傾斜する壁から壙底に至る。壙底は平面形が不整形を呈し、凹凸が目立つ。

覆土は茶褐色土の単純層で、出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙の時期は決定資料を欠き断定できないが、他の遺構群との位置関係から縄文時代中期のものと考えられる。

第12号土壙（第30図12）

本土壙は、Ｆ－３グリッドに位置している。他の土壙と同様、調査区北西側の台地肩部に検出された。土壙群の最も南側に位置している。

平面形は、東西に長軸を持つ楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.0m、確認面からの深さは26㎝を測る。断面形は鍋底状で、壁は緩やかに傾斜している。壙底は概ね平坦である。

覆土は茶褐色土の単純層。出土遺物は縄文土器の細片のみである。

本土壙は時期決定資料を欠くが、他の遺構群との位置関係と覆土から縄文時代中期の所産と思われる。

４　縄文時代中期の遺物

土　器

第１号住居跡出土土器（第31～33図）

本住居跡の出土土器は比較的少なく、図化し得たものは炉埋設土器を含めて６個体である。いずれも、勝坂Ⅲ式前半段階に比定できよう。

１・２は、炉埋設土器である。１は北側の新炉に埋設されていたもので、口縁部の一部と同下半部を欠損するが残存部分は全周する。器形は口縁部がやや開く円筒形土器で、胴部上半部に文様帯を持つ。口縁部無文帯は幅が狭い。口唇部は、面取りしたように角張る。文様帯は上限を無文帯、下端を隆帯で区切る。その間に波状隆帯を巡らし、二等辺三角形状区画を８単位作出する。波頂部は上方に若干突出する。隆帯上には、爪形文による加飾が施されている。隆帯脇には沈線を引くが、これに平行して２本目の沈線を巡らしている。手法としては、縦位区画文土器のパネル文的様相を持つ。区画内充填手法はそれぞれが微妙に異なるが、基本的には２種類認められる。区画中央を縦位に区切って、半分に三叉文とこれに沿う爪形文を施しこれに刺突を付し、残り半分には縦位、斜位の集合沈線をもつものと、今一つは三叉文を区画内両側に並立させるものである。ただし、両側に同一文様を充填するのは１単位のみである。全体の印象としては、横帯文土器の胴部中位の文様を彷彿とさせる。隆帯上及び区画内の爪形文は非常に細かく、やや古い様相を呈している。胎土には、大粒の砂粒を多く含んでいる。胴下半部には撚糸Ⅰを縦位施文する。現存高30.0㎝、口径26.8㎝、器厚0.9～1.5㎝で、図化部分の残存率は約75％である。

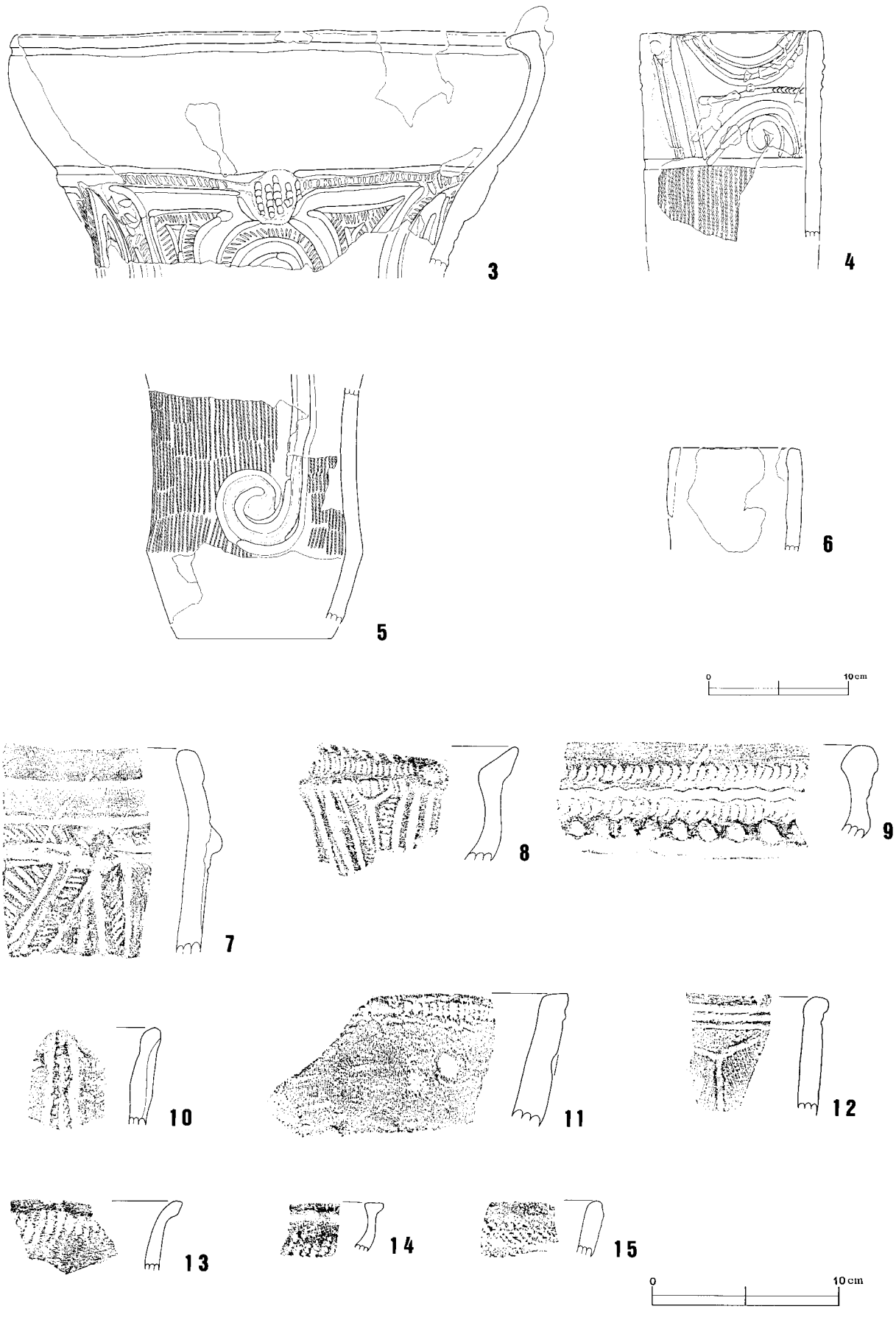
２は旧炉に埋設されていたものである。口縁部を欠く他、被熱のため取り上げ段階で細片化してしまった部位が多く、残存率は40％と極めて悪い。ただし、炉埋設土器には珍しく底部を残している。器形は、胴部中位から口縁部に向かって大きく開く。下半部は大略円筒状を呈し、底部付近でわずかに径を減じる。胴部には地文単節 RL を縦位に、やや間隔を空けて施しているが、底部付近は空白となっている。現存高39.8㎝、底径13.0㎝、器厚1.0～1.4㎝を測る。１とほぼ同時期の所産と考えられる。

３～６は、覆土内から出土したもので、いずれも勝坂式末のものである。３は口縁部が袋状を呈するキャリパー形の深鉢である。口縁部は無文帯で、口唇部は肥厚し上端の平坦面はやや内傾する。小突起が１箇所認められ、口唇部直下には太い沈線を引く。頸部には上下に単沈線を伴う隆帯で胴部を巡らし、以下を文様帯とする。隆帯上には粗い刻目、半截竹管による刺突文等を付している。文様は隆帯による三角区画を基調とするが、単位数不明。隆帯脇には単沈線を引き、区画内は平行する２本目の沈線を施す。また、頸部隆帯との接合点にはバリエーションが見られる。区画内には三叉文と付随する刻目が施されている。主文様である区画隆帯は全体に低めに作出されており、他の粗い文様要素とあいまって平板な印象を与えている。現存高17.4㎝、口径37.1㎝、器厚0.9～1.9㎝、図化部分での残存率は約45％である。

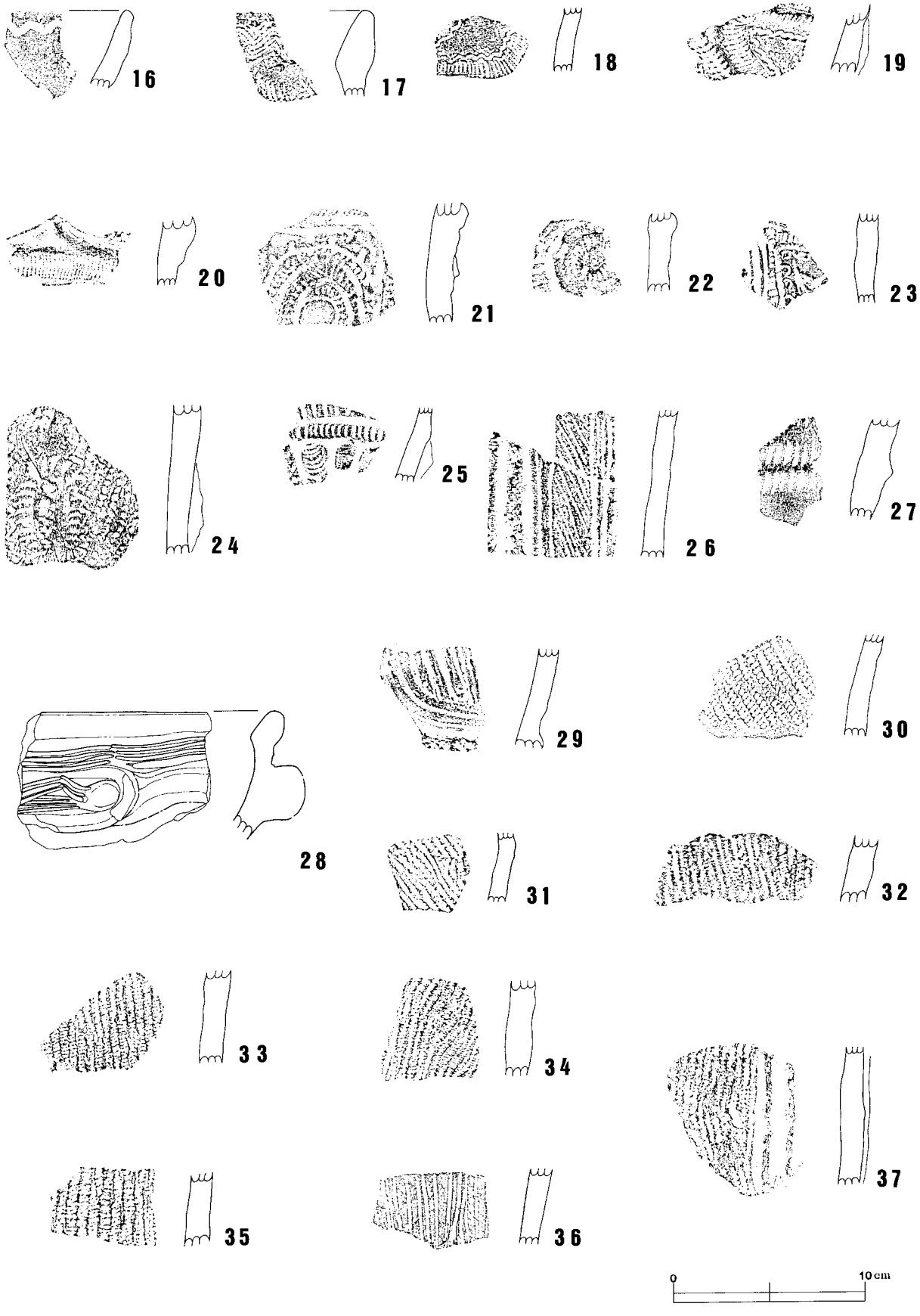
４は小型の円筒形深鉢で、破片からの復元実測である。残存率は、図化部分で25％にすぎない。上半部全体を文様帯とし、下半部とは沈線で分割している。文様は、口縁部の突起から垂下する集合沈線で推定２単位に分割し、その間に沈線の上下対弧文を施す。対弧間には沈線を横走させるが、一部三角押文に変更している。下半部には撚糸Ⅰを縦位施文する。現存高15.1㎝、口径推定12.8㎝、器厚1.1～1.3㎝を測る。

５は多喜窪重文タイプの胴下半部であるが、底部の屈曲は弱く典型的なものではない。地文に撚糸Ⅰを施文した後に垂下する隆帯を貼り付け、下端を渦巻状にする。隆帯脇には太い沈線を伴う。推定２単位。屈曲線以下は無文となっている。図化部分での残存率は約40％。現存高16.8㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

第31図　第１号住居跡出土土器（１）



第32図　第１号住居跡出土土器（２）



第33図　第１号住居跡出土土器（３）

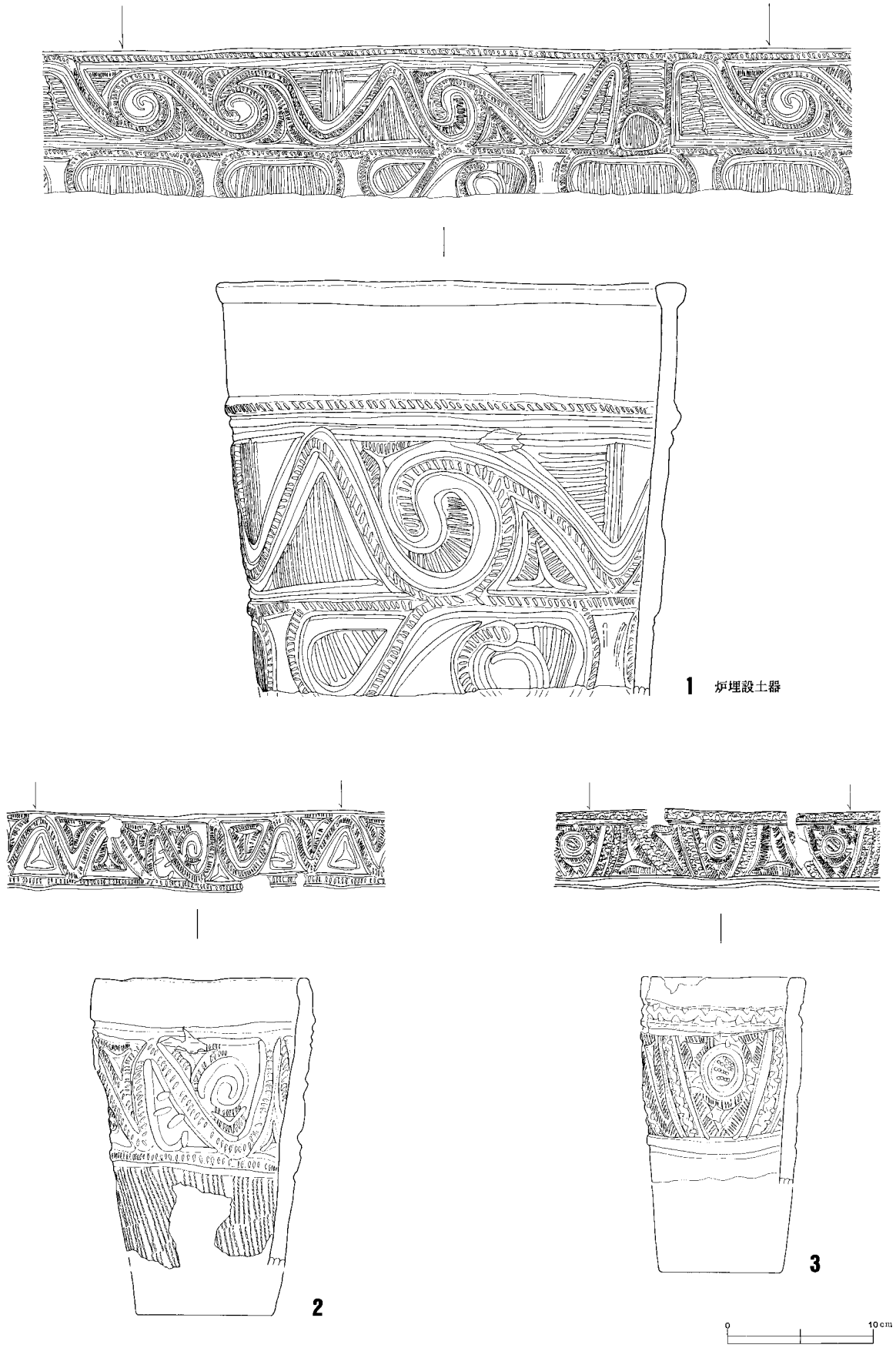
6はいくつかの破片から復元実測したもので、小型の円筒形土器である。器面にはナデが加えられている他は無文である。現存高7.4㎝、口径推定9.2㎝、器厚1.0～1.1㎝である。

7～37は覆土各層から出土した破片で、勝坂式、加曽利ＥⅠ式が認められる。7は円筒形深鉢の口縁部破片で、無文の口縁部下に三角区画を展開する。隆帯上には刻目、区画内には三叉文や結節沈線を充填している。8はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、縦位集合沈線が特徴的である。三叉文に付随する爪形文は、やや粗雑である。9は口縁部文様帯を区画するたが状の隆帯下が無文であることから、浅鉢と判断した。区画隆帯上には指頭状の圧痕を付す。口縁部文様は、棒状施文具による刻目を2段に横走させ、中間には交互刺突による綾杉文を入れる。10は深鉢の口縁部で、口唇部の突起部分である。連鎖状隆帯を垂下させている。11・24は抽象文土器である。11は口縁部破片で、口唇部直下に爪形文を巡らし、波状沈線を併走させる。無文部中央には日輪状モチーフの文様を置く。24はワラジ虫状の貼り付けを持つ。12は円筒形土器の口縁部で、線状の三叉文に細沈線による充填が見られる。13～15は深鉢の口縁部破片で、13・14の口唇部は肥厚する。地文は13が無節Ｒ縦位、14が単節RL縦位、15が単節RL横位施文である。16は口唇部に三角押文の波状線を巡らす。17は櫛歯状施文具による波状沈線が施され、胎土には金雲母を含んでいる。18～20・22・27は隆帯脇に爪形文を施し、18・19は波状沈線を伴う。21は円筒形土器の文様帯部上部で、区画内の充填文に交互刺突文が認められる。23・26は縦位区画文土器で、半截竹管の平行沈線によるパネル文の一部を残している。区画内には25が結節沈線、26には斜行する細沈線が見られる。25・29は区画の一部で、25には大柄の爪形文、29に半截竹管内皮の集合沈線が施される。28は口頸部がやや膨らむ器形の深鉢で、口唇部直下に半截竹管の平行沈線を引き、隆帯は横展開の「S」状のモチーフと思われる。胎土には多量の金雲母を含有する。口唇部直下に平行沈線を引くものとして「三原田型深鉢」があり、これに類似するものと考えられる。30～35は、地文縄文の破片である。30は単節RLの横位施文、他は0段多条の単節RLで31のみ横位、その他は斜位に施している。

第２号住居跡出土土器（第34～42図）

本住居跡からは、良好な一括遺物が出土している。復元し得た土器は、完形、半完形を含めて30個体にも及ぶが、第９・10図に示したようにその多くが床面上に厚く堆積する黄褐色土層の直上に、置かれたかの様な状態で出土している。一部の土器には新しい様相も看取されるが、出土状況からほとんどの土器の廃棄時の同時性は確実と考えられる。いずれも、勝坂Ⅲ式前半段階に比定される。また、非在地形土器である「三原田型深鉢」を含む組成は注目に値しよう。

1は炉埋設土器で、図化部分で全周する。内外面ともに被熱が顕著で、あばた状の剥離が見られる。器形は、わずかに外反する円筒形を呈し、口唇部にはたが状に隆帯を巡らす。口縁部は無文帯となっているが、幅は狭い。胴部文様は二段構成を採り、上端は幅広の隆帯で分割する。口唇部は、面取りしたように角張る。文様帯は上限を無文帯、下端を隆帯で区切る。上段の文様は隆帯による渦巻文と三角形区画の組合わせを３単位配しているが、１単位は逆方向を向かせ背面する単位間に縦位の長方形区画を置く。また、他方に隣接する単位と組み合わせて「S」字状文を描出している。１単位のみ崩すことによりそれぞれの単位がすべて別の顔を持たせていることになる。隆帯上には太目の刻目を付し、隆帯脇には２本の平行沈線を施している。区画内には三叉文と付随する刻目、縦位、横位の集合沈線、縦位の波状沈線が認められる。下段文様は、楕円区画の４単位配置であるが、１単位は内側を斜行隆帯で分割する。区画内充填は、他の区画に縦位集合沈線を引くが、この単位のみ欠損部分より上昇する隆帯により渦巻文を付加する。隆



第34図　第２号住居跡出土土器（１）

帯上、隆帯脇の処理については上段と同様である。文様全体の構成は、横帯文土器の胴部文様に酷似する。現存高28.5㎝、口径27.9㎝、器厚1.1～2.0㎝を測る。

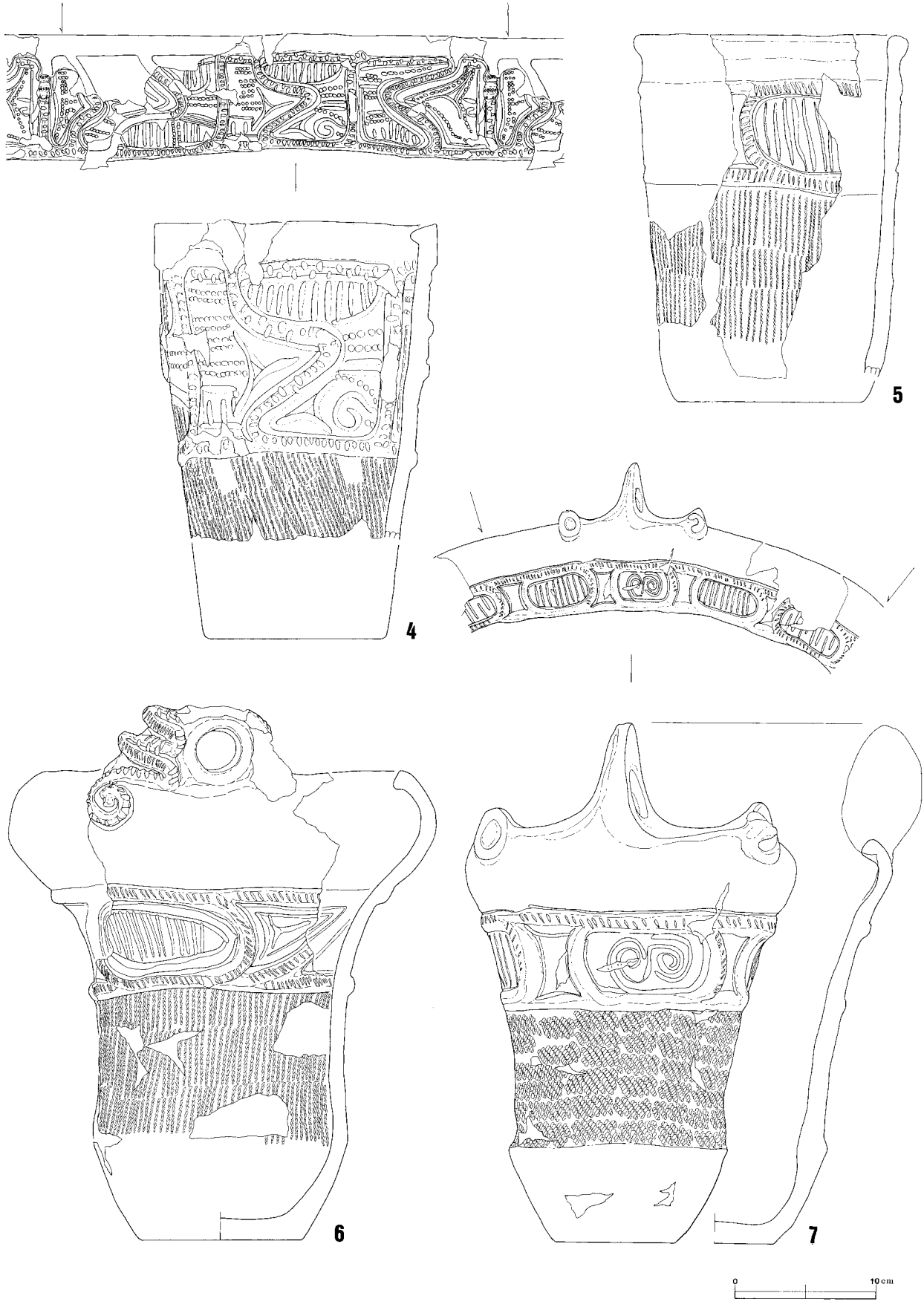
2は小型の円筒形土器である。器形はわずかに外反し、口縁部は若干内傾する。口縁部は幅の狭い無文帯である。文様帯は上半部にあり、上端を沈線、下端を隆帯で区画する。区画は隆帯によってなされ、横展開の波状を呈する。隆帯上には刻目を加飾し、脇には単沈線を引く。ただし、作出された10単位の区画には整った三角形の他、半楕円状のもの、三叉状のものがある。波底部は、文様帯区画隆帯より高くなっている。区画内は三叉文、渦巻文等中央に置き空間にはやや粗い刻目を施しているが、交互刺突文のみの区画もあり、それぞれ異なった顔つきを見せている。胴下半部は撚糸ｌを縦位、やや斜位に施す。図化部分で残存率90%。現存高20.0㎝、口径13.4㎝、器厚0.9～1.5㎝を測る。

3も小型円筒形土器で、8の中に入れ子状になって出土した。口縁部は幅の狭い無文帯で、わずかに外反する。文様帯は上半部にあり、上端を交互刺突文、下端を2本の沈線で区画する。交互刺突文は先端が尖った施文具によるものである。文様は、上端と同様の交互刺突の半隆起帯で台形区画を5単位作出するが、1単位のみ四辺形状を呈している。区画内の充填は、上方が開放する区画には中央に二重沈線による円文を置き、周囲に肉彫状三叉文と付随する爪形文を施す。円文の内側には、連続刺突文を並列させている。他の区画は大柄の三叉文を中央に、周囲を爪形文が充填されている。胴下半部は地文を持たない。残存率は、図化部分で約90%である。現存高14.2㎝、口径10.8㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

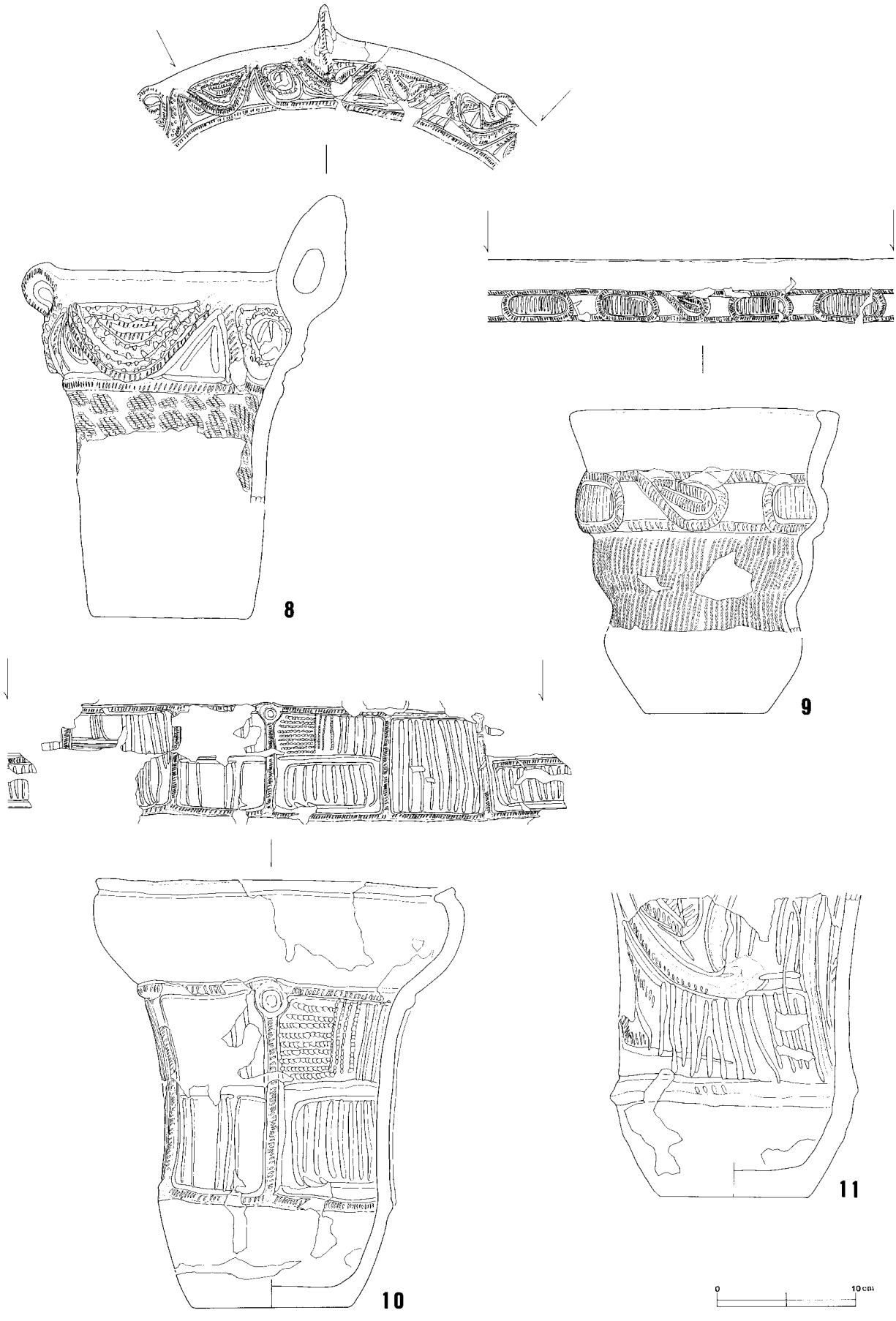
4は、口縁部が若干開く器形の円筒形土器である。他の土器に比して焼成が甘く、色調も灰色がかっている。口縁部は非常に幅の狭い無文帯で、口唇部内側には稜を持ち平坦部は内傾する。一部口唇部に至る剥離が認められ、文様帯内の隆帯と連結して把手あるいは突起が付されていた可能性がある。文様帯は幅広で上半部にある。下端は幅広の隆帯により分割している。文様は隆帯により長方形区画を3単位作出している。区画中間には、横方向に鋸歯状に突出する隆帯を置くが、内1単位はこれを2本施している。他の区画もそれぞれ逆方向を向かせ、異なる効果を出している。いずれの隆帯にも単沈線が伴い、隆帯上には粗い刻目や瘤状の突起、交互刺突が加えられている。横突出隆帯はその先端から連続する沈線により、これと連動した形で半円状区画を描出し、これにより区画内をさらに上下に分割するかのような表現を見せている。空間充填には交互刺突文、縦位集合沈線、三叉文、列点等が見られるが、これらは同一施文具で施されたようである。胴下半部には撚糸ｌが、やや粗く施文されている。図化部分の残存率は約70%。現存高22.7㎝、口径推定20.0㎝、器厚1.1～1.6㎝を測る。

5は円筒形土器で、破片からの復元実測である。他と同様、幅の狭い口縁部無文帯を持つ。口唇部は外側に肥厚する。文様帯は上半部に位置し、上下端ともに隆帯で区画されている。文様は、残存部からの推定では楕円区画を配すものと考えられる。区画内には集合沈線を引く。下半部には、撚糸ｌを縦位に施文している。現存高24.3㎝、口径は推定で17.6㎝、器厚0.8～1.2㎝を測る。

6は、口縁部が袋状に大きく膨らむキャリパー形深鉢である。胴部はほぼ全周するが、口縁部から頸部にかけて約3/4を欠く。口唇部は平坦部を持ち、内傾している。把手は1箇所のみと思われる。大型の円環状基部にうねるタイプの蛇体文を刻目、刺突文で加飾した隆帯で表現し、末端は渦巻状を呈する。把手上部は欠損する。頸部文様帯は上下端を隆帯で分割し、内側に楕円区画文を推定3単位と楕円区画間を上下二分する三角形区画を配するものと思われる。また、楕円区画の外形が明確で、上下隆帯より優先されている。隆帯上には刻目、隆帯脇は複沈線を引く。区画内文様は、楕円区画内に縦位集合沈線、三角区



第35図　第２号住居跡出土土器（２）



第36図　第２号住居跡出土土器（３）

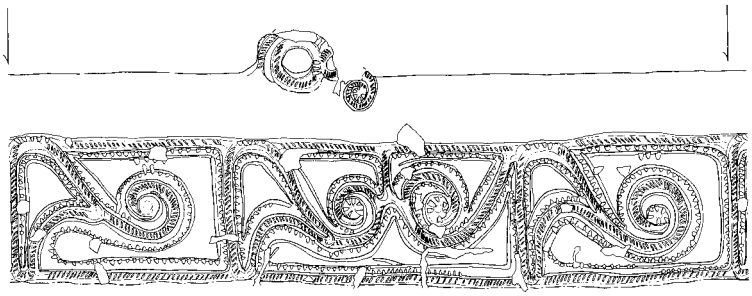
画内に三叉文を施している。胴部は直線的に立ち上がり、撚糸1を縦位に施文しており、一部隆帯上にかかる。底部は弱く屈曲する屈折底で、形状は第32図５に類似する。屈曲線以下は無文となっている。現存高38.1㎝、口径推定25.4㎝、底径11.4㎝、器厚0.9～1.5㎝を測る。残存率65%。

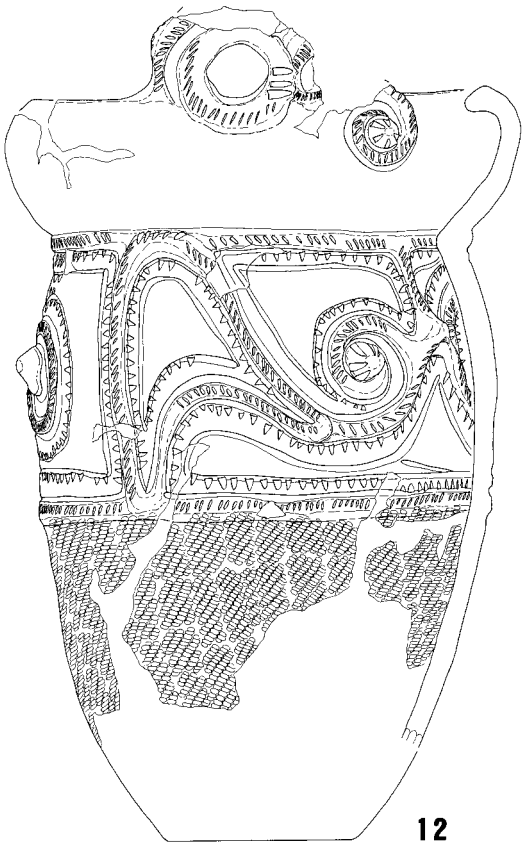
７は口縁部から頸部にかけて一部欠損するが、ほぼ完形の土器である。残存率95%。口縁部は６と同様、袋状に膨らむ無文帯であるが、上下幅が狭く張り出しも弱い。口唇部内側に接合痕を残す。１単位の大把手を置き、その両側に把手から流すように小突起を配する。把手には図右側から窪みを入れる。小突起は、左側が円文状、右側が渦巻状を呈する。頸部の文様帯は、上下端の隆帯は分割が明瞭で上部隆帯上には刻目、隆帯脇に単沈線を付す。幅も広めである。下端隆帯上には一部のみ刻目が見られる。楕円区画文は４単位で、把手配置と概ね連動する。また、いずれも区画隆帯の右側を耳状に突出させている。隆帯脇には単沈線を引くが、隆帯上の加飾は一定していない。区画内も、縦位集合沈線のみのものの他に渦巻文を並列させるもの、縦位交互沈線を施すものが交互に配置されている。胴部はわずかに括れる。底部は弱く屈曲する屈折底で、形状は６に類似している。胴部には単節 RL を密に横位施文するが、屈曲線以下は無文である。器高37.2㎝、口径21.5㎝、底径8.4㎝、器厚0.9～2.1㎝を測る。

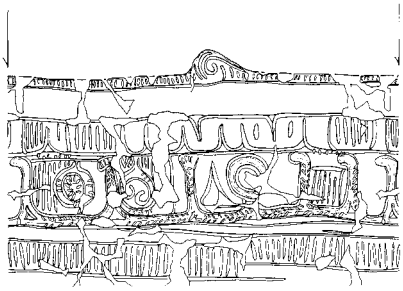
８は口頸部に文様帯を持つ土器で、胴部は欠損する。口頸部文様帯部は若干膨らみ、口縁部の幅狭の無文帯はわずかに外反する。把手は上部が尖頭状を呈する眼鏡把手で、縁部に刻目を付す。また、対面には手捻状小突起を配している。文様帯下端は、隆帯によって分割されている。文様は、全体的に粗雑な印象を与えている。所謂重三角文の体裁を採り隆帯による10単位の三角形区画を持つが、把手右側の単位はやや丸みを帯び他のものとは異質なものにしている。隆帯上には粗い刻目、交互刺突文を付す。三角区画の上位単位は、充填が密で主文様隆帯に沿うように交互刺突文を施した半隆起線を重層させるもの、三叉文に刻目を伴うものなどがある。下位単位は充填が疎で、三叉文、松葉状文、隆帯に平行する三角文がみられるが、刻目を伴う単位は少ない。胴部には単節 LR を縦位、斜位に施文するが、やや間隔を空けるように施す。現存高23.2㎝、口径15.4㎝、器厚1.0～1.5㎝。図化部分での残存率は80%。

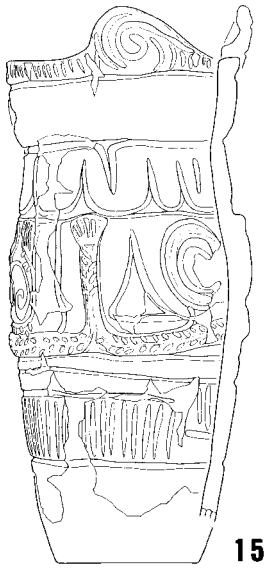
９は頸部に文様帯を有する土器で、３段に括れる器形を呈する。胴下半部を欠く。口縁部は外反する幅広の無文帯で、口唇部内側には稜を持つ。文様帯は上下を隆帯により明確に区分し、５単位の区画文を配している。区画隆帯は上下隆帯より１段高くなっており、区画外形を優先させている。隆帯上には刻目、隆帯脇には単沈線を引く。区画文は楕円区画を基本とするが、１単位のみ水滴状としている。区画内は楕円区画には縦位の集合沈線、水滴状区画には斜行沈線に刻目を付す。胴部には地文撚糸1を縦位に施している。現存高16.2㎝、口径16.0㎝、器厚0.8～1.2㎝。図化部分での残存率は95%。

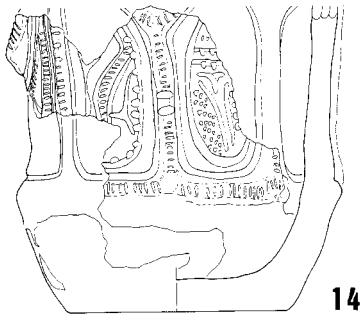
10は口縁部が袋状に膨らむキャリパー形深鉢である。口縁部は無文帯で、口唇部直下に沈線を巡らす。また、一部に剥離痕を残しているため、把手があった可能性が高い。口唇部内側の平坦面は内傾している。胴部はわずかに括れている。文様帯は幅広で、頸部から胴下半部に及ぶ。上下端は隆帯により明確に区画され、垂下する隆帯により方形区画を５単位作出している。垂下隆帯のうち２本は、上端隆帯との接合点に突起を付している。隆帯上には、丁寧な刻目を加飾し、隆帯脇には単沈線を引く。区画内は各々、異なった充填手法を採る。縦位集合沈線を施すもの、上下に分割するもの、左半分のみ上下分割するものなどが認められるが、全体的に簡素な印象を与えている。また、一部には沈線に替えて結節沈線を採用している。底部は無文で、胴部の括れと文様帯下端の隆帯があいまって弱い屈折底状を呈する。残存率70%。現存高31.1㎝、口径21.8㎝、底径11.0㎝、器厚0.9～1.4㎝を測る。











第37図　第２号住居跡出土土器（４）

11は、胴部上半部の一部から底部にかけて残す。残存部分の器形は、10に酷似している。胴部に展開する幅広の文様帯は５単位構成で、下端を隆帯によって分割している。文様は、隆帯による三角区画を基調とするが、矩形のものも認められる。特に図正面とした区画は幅広の台形で、中央に垂下する隆帯が三日月状を呈し先端は肥厚している。隆帯上には粗い刻目を付し、隆帯脇には単沈線を伴う。区画内は、縦位集合沈線を粗く充填したものや三叉文に刻目を付加したものがある。底部は弱い屈折底で無文である。現存高21.8㎝、底径10.5㎝、器厚1.0～2.1㎝。図化部分の残存率は約50％である。

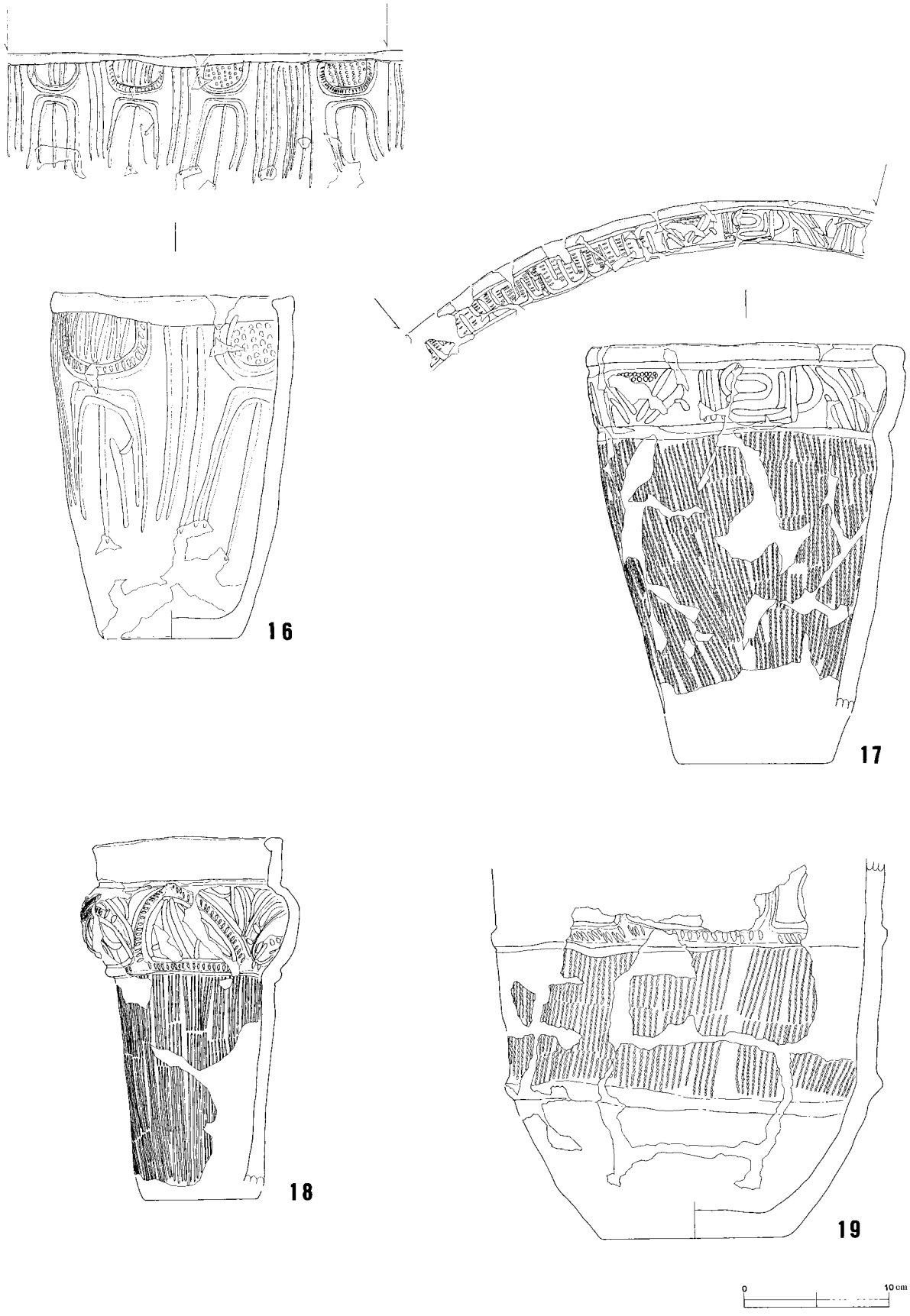
12は口縁部が袋状に張り出し、胴部中位がやや膨らむ樽形の器形を持つ。口縁部の一部と底部付近を欠損する。口縁部には円環状の基部に隆帯によるうねるタイプの蛇体文を付した把手を持つが、６と同様先端部を欠く。口縁部は大きく内屈し、口唇部内側は丸みを帯びている。文様帯は頸部から胴部上半部に横位展開する。上下端は隆帯により明確に区分されている。これを垂下隆帯により矩形に４分割する。隆帯上には刻目、隆帯脇には複沈線を引く。区画内には波状の区画と渦巻文を組合わせた抽象文類似の文様を作出しているが、内１単位は渦巻文のみで逆方向を向かせ隣接単位と連結させる。そのため、３単位構成を採っているようにも見える。渦巻の先端は突起状を呈し、ここに三角形の刺突を加える。また、隆帯脇の複沈線間にも同一施文具により、三角形刺突を連続して施している。空問は無文で、加飾性が高い勝坂式にあっては異例であるが、これにより主文様を際立たせる効果を持っているようである。なお、胴部単位構成と把手は連動していない。胴下半部には０段多条の単節 RL を縦位施文し、一部は文様帯下端の隆帯にまで及んでいる。図化部分での残存率80％。現存高39.2㎝、口径23.8㎝、器厚0.9～1.3㎝を測る。

13は小型円筒形土器で、口縁部から胴部上半部及び底部を欠く。文様帯は胴部上半にあり、下端は隆帯により区画されている。文様は隆帯の上下動による三角区画を基調とし、２に類似する様相が認められるが、一部は上端隆帯に結合せずに横位の反転隆帯文に変化している。隆帯上には刻目を加飾し、隆帯脇には単沈線、複沈線を引く。区画内充填手法には、三叉文に幅広の刻目を伴うもの、斜位集合沈線等がある。胴下半部は無文である。図化部分での残存率は70％。現存高20.0㎝、底径推定8.6㎝、器厚0.9～1.6㎝。

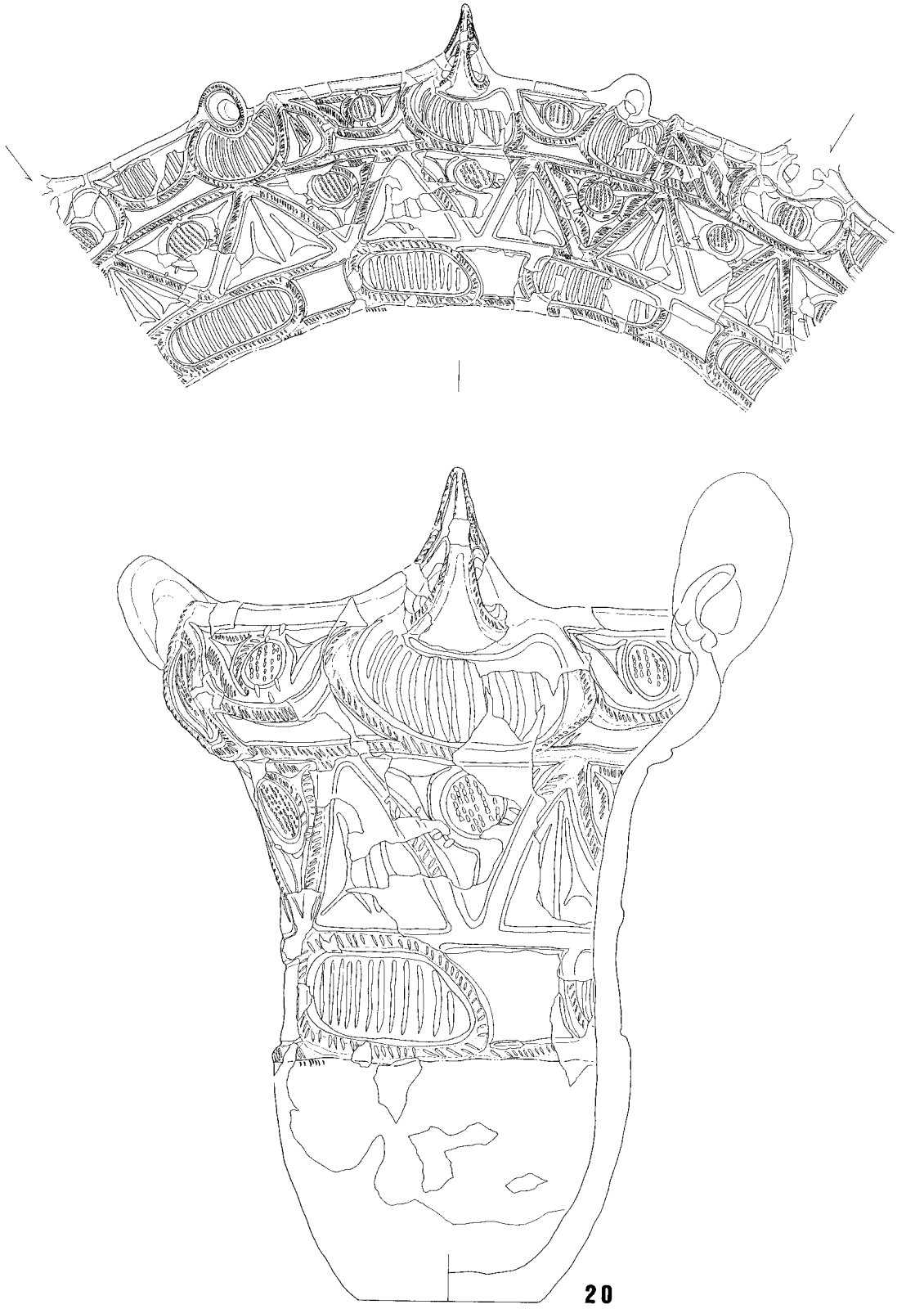
14は胴下半部のみ残存する。器形は不明であるが、10のように胴部に幅広の文様帯を展開する土器と考えられる。胴部は下半部でやや括れ、文様帯下端以下が弱い屈折底を呈する。文様は垂下する隆帯が下端隆帯に結合し、矩形に区画される。隆帯上には刻目、隆帯脇には複沈線を伴う。区画内には一部円形文状の隆帯を残すが、詳細は不明である。充填手法には三叉文、列点文、三角形刺突等が認められる。図化部分での残存率は45％程度である。現存高16.0㎝、底径11.6㎝、器厚1.0～1.6㎝を測る。

15は小型円筒形土器の器形を呈するが、器面の構成は12に似る。底部を欠損する。口縁部には渦巻文と同心円沈線を施した蛇体文省略型の突起を持ち、内側に円形、三角形の凹みを施す。口唇部には沈線を巡らして段差を設け、刻目を付している。口縁部は緩く外反する無文帯である。文様帯は、頸部から胴部下半部にかけて３段構成を採る。上位帯は上下交互沈線により幅広の交互刺突文類似の文様を描くが、約１/３は縦位集合沈線を施している。中位帯は４本指モチーフあるいは蛇体状の上昇する隆帯で５単位に分割し、内３単位には円環文を隆帯、沈線で描き中核として周囲には縦位集合沈線、三叉文等を充填する。他の２単位は、矩形区画に縦位集合沈線のものと無文のものである。隆帯上には綾杉文、隆帯脇には単沈線を引く。下位帯は平行沈線間に縦位集合沈線を付すが、途中でくいちがうため、全体では螺旋状を呈している。底部付近は無文である。残存率は、図化部分で90％。現存高27.1㎝、口径9.8㎝、器厚0.6～1.2㎝。

16は口縁部がわずかに内湾する円筒形土器で、ほぼ完形の個体である。口縁部は、口唇部直下に段差を



第38図　第２号住居跡出土土器（５）



第39図　第２号住居跡出土土器（６）

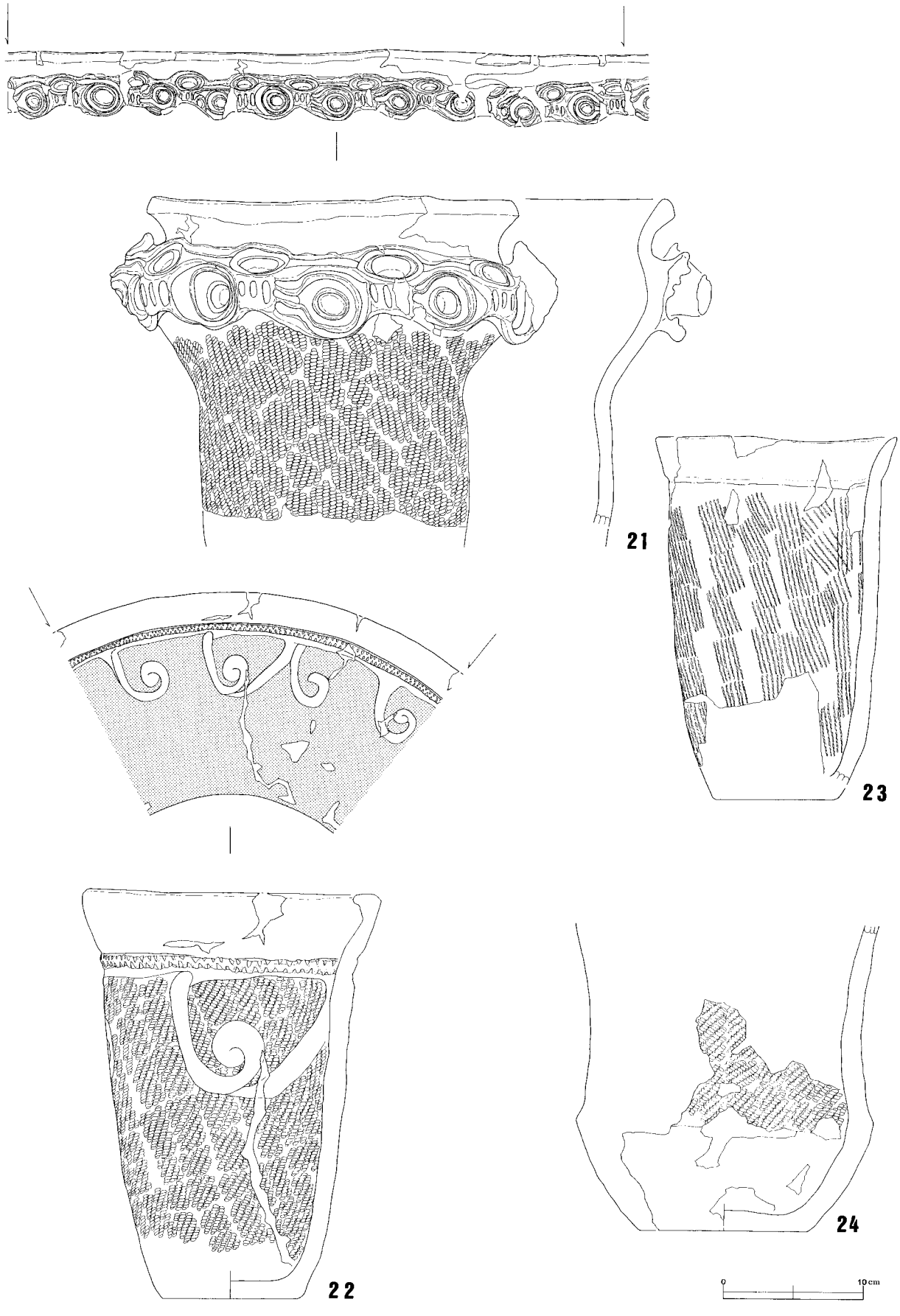
設けた極狭い無文帯で、口唇部はやや内傾した平坦面を持ち内面には稜を有する。胴部文様は分帯せず、口縁部無文帯直下から胴下半部まで一帯をなす。器面を３本あるいは９本の縦位沈線で４単位に縦位分割し、その間に沈線描出の纏状文を置く。モチーフとしては、人体文あるいは上下対弧文に類似するものと言えようか。上部の半円状区画は平行沈線で描かれ、沈線間に刻目を持つものと持たないものを交互配置する。区画内には集合沈線と列点状刺突文を施し、刻目の有無とともに４単位すべての顔つきが異なる。下部の逆Ｕ字状沈線は、４単位とも同一手法で作出されている。地文は施されていない。残存率は95%。器高24.0㎝、口径13.8㎝、底径9.2㎝、器厚1.0～1.4㎝を測る。

17は上半部にかけて開く器形の円筒形土器で、底部は欠損する。文様帯部分はわずかに膨らみ、口縁部は幅の狭い無文帯となっている。口唇部は内側にせりだし、幅広の平坦面を作る。文様帯は幅が狭く、上下端は太い沈線で区画している。文様帯は大きく二区分されている。隆帯による区画は持たない。展開図左側には、上下区画沈線から伸びる太沈線により交互沈線文を施し、沈線間には間隔を空けた爪形文を截痕文状に付す。展開図右側には、左と同じ施文具で三角形、楕円形の文様を３単位描出する。一部の空間には列点文が施されている。胴部には地文、撚糸ｌを縦位、斜位に施している。図化部分での残存率は60%。現存高25.7㎝、口径19.8㎝、器厚1.1～1.3㎝を測る。

18は口縁部が直立する無文帯で、文様帯部が膨らむ。口唇部は内面に張り出し、平坦面を作る。胴部は円筒形を呈している。文様帯は上端を沈線、下端を隆帯で区画する。上下区画間に三角形区画を基調とする区画を隆帯によって作出するが、一部渦巻状のものも認められる。波頂部は推定で６単位。隆帯上には刻目、刺突文、背割沈線を施しており、器形も含めて他の土器に比して若干新しい様相を持つ。隆帯脇には単沈線を引く。区画内には、対面する三叉文を基本とする沈線文を充填する。胴部には木口状施文具により４本単位の条線を施している。現存高24.2㎝、口径13.2㎝、器厚0.8～1.1㎝。残存率は、およそ60%。

19は、大型土器の胴下半部である。胴部中位に展開する文様帯下端が残存する。楕円区画の一部が看取され、文様構成は６に類似するものと考えられる。単位数不明。隆帯上には粗い刻目、隆帯脇には単沈線を伴う。底部近くには隆帯を巡らし、弱い屈折底とする。文様帯下端隆帯と屈折部隆帯間には、地文撚糸ｌを縦位施文する。図化部分での残存率40%。現存高25.8㎝、底径12.5㎝、器厚1.1～1.9㎝を測る。

20は覆土下層､第４・６層中に散乱するような状態で出土した。勝坂式の中でも伝統的な横帯文土器で、口縁部が大きく内湾するキャリパー形深鉢である。口唇部は内面に張り出すように肥厚する。文様帯は三帯構成を採る。口縁部には、尖頭形を呈する眼鏡状把手と耳状の小突起を各２単位、対面するように配するが、把手１箇所を欠損する。口縁部文様帯は隆帯による重三角文を基調とするが、外形は崩れ、半円状、楕円形に変貌している。また、小突起右側の単位は意図的に異なった形状のものを配している。把手と小突起を核として基本的に４単位構成を採るが、把手間の単位を含めると８単位となる。隆帯上には粗い刻目、隆帯脇には単沈線を引く。区画内充填手法には縦位集合沈線を多用しているが、円環文の両側に三叉文を伴うもの、三叉文に刻目を付すものもある。三叉文は丁寧に描出されている。また、円環文内側には結節沈線、外縁には交互刺突を施す。中位文様帯は、波状隆帯の上下動による三角形区画を10単位配す。口縁部文様帯とは連動しない。波頂、波底は上下端の隆帯に連結し、区画外形が優先される。上位区画内には円環文に三方からの三叉文を組合わせる。空間には刻目、交互刺突が部分的に付される。下位区画内は、対面する三叉文間に縦位沈線を引き、すべての区画に同一文様を描く。隆帯上及び脇の処理は口縁部文様帯に準ずる。下位文様帯は、楕円区画を３単位配置する。区画内には縦位集合沈線を施している。底



第40図　第２号住居跡出土土器（７）

部は無文で、やや外側に張る形状は櫛形文土器に類似する。やや新しい様相と言えようか。器高53.7㎝、口径29.8㎝、底径11.6㎝、器厚1.3～2.1㎝。残存率70%。

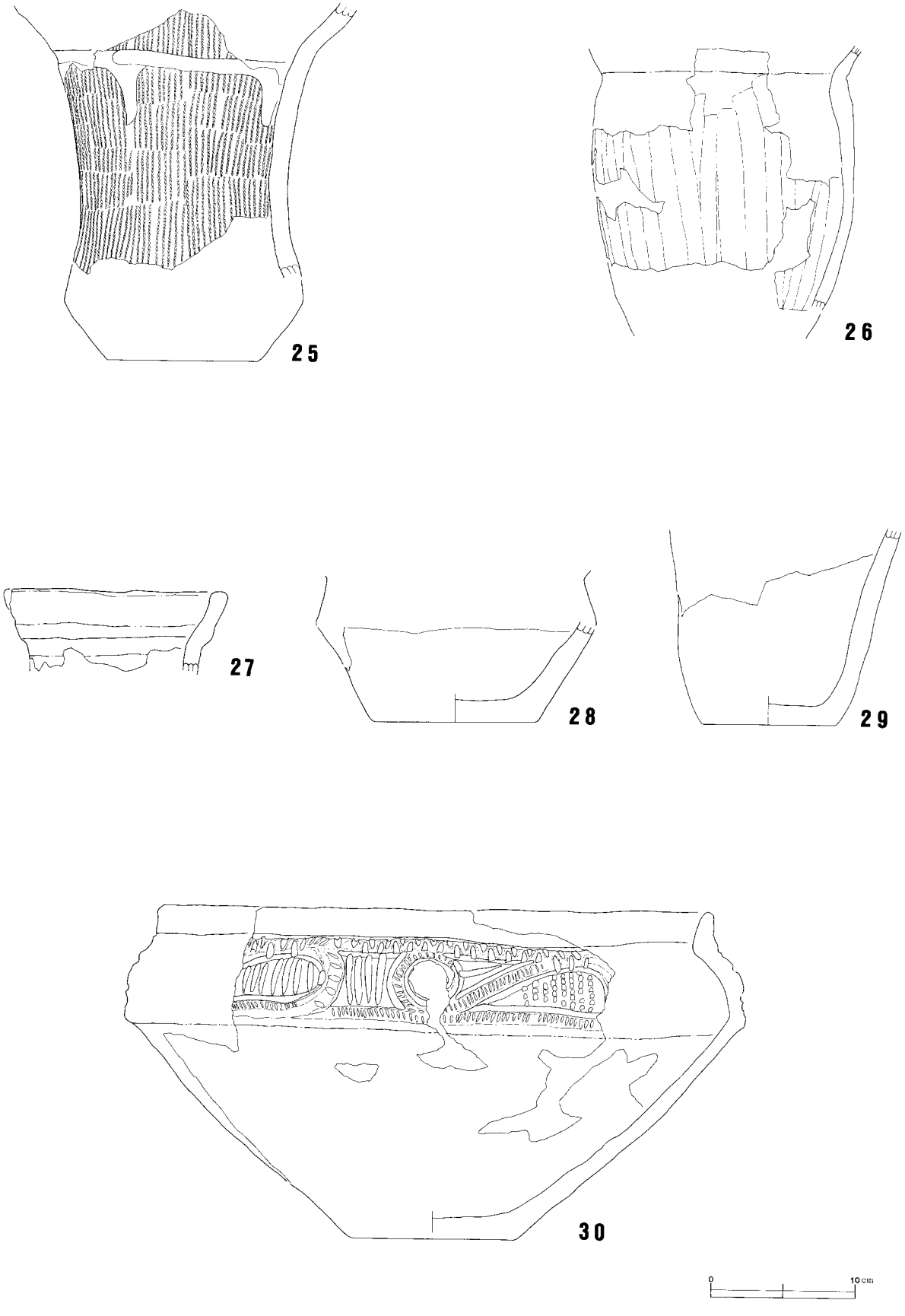
21は、中峠式類型の所謂「三原田型深鉢」である。口頸部上半に展開する文様は「河童」様の典型例で、本類型の中でも確立された段階のものと言えよう。口縁部の一部と胴下半部を欠損する。無文の口縁部は平縁で歪みが認められ、内傾した後に外反する。文様帯部分は丸みを帯びて膨らむ。文様は中空突起10単位を巡らすが、個々の要素は円環文を基調としている。それぞれの円環文は、上部は円孔を開け下部のものは凹状に作出し、上下の組合わせが「河童」様の表情を演出する。円環文周囲には同心円状に隆帯を貼り付けるが、一部横方向に開放させ鍵穴状にするものもある。下部円環の連結部には３本の縦位沈線を施している。なお、文様下端は下方に垂れ下がっている。頸部は文様帯やや下にあり大きく括れ、胴部で若干膨らみをもたせる。頸部以下には、当該類型に多い沈線文が認められず、単節 RL を斜位に施文するのみである。胎土は他の土器に比して白色砂粒を多く含む。焼成は不良で、文様部分に剥離が目立つ。残存率は、図化部分で70%。現存高22.6㎝、口径24.6㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

22は円筒形土器であるが、文様構成、地文施文後の文様描出等、同段階の在地系土器とは大きく異なる。残存状態は良好で、ほぼ完形と言えよう。口縁部は丸みを帯びて外反する幅の狭い無文帯で、口唇部内面には張り出しを持ち平坦部を作る。頸部は弱く括れ、三角形連続刺突による交互刺突文を巡らしている。胴部は中位でわずかに膨らむ。文様は、地文単節 RL の斜位施文後に描出する。交互刺突文直下には指頭により地文を磨り消し、そこから垂下する渦巻文を４単位施す。いずれも同一方向を向くが、内１単位は三角形区画状を呈している。底部付近には地文は及ばず、無文としている。器高29.1㎝、口径22.7㎝、底径9.6㎝、器厚0.9～1.6㎝を測る。

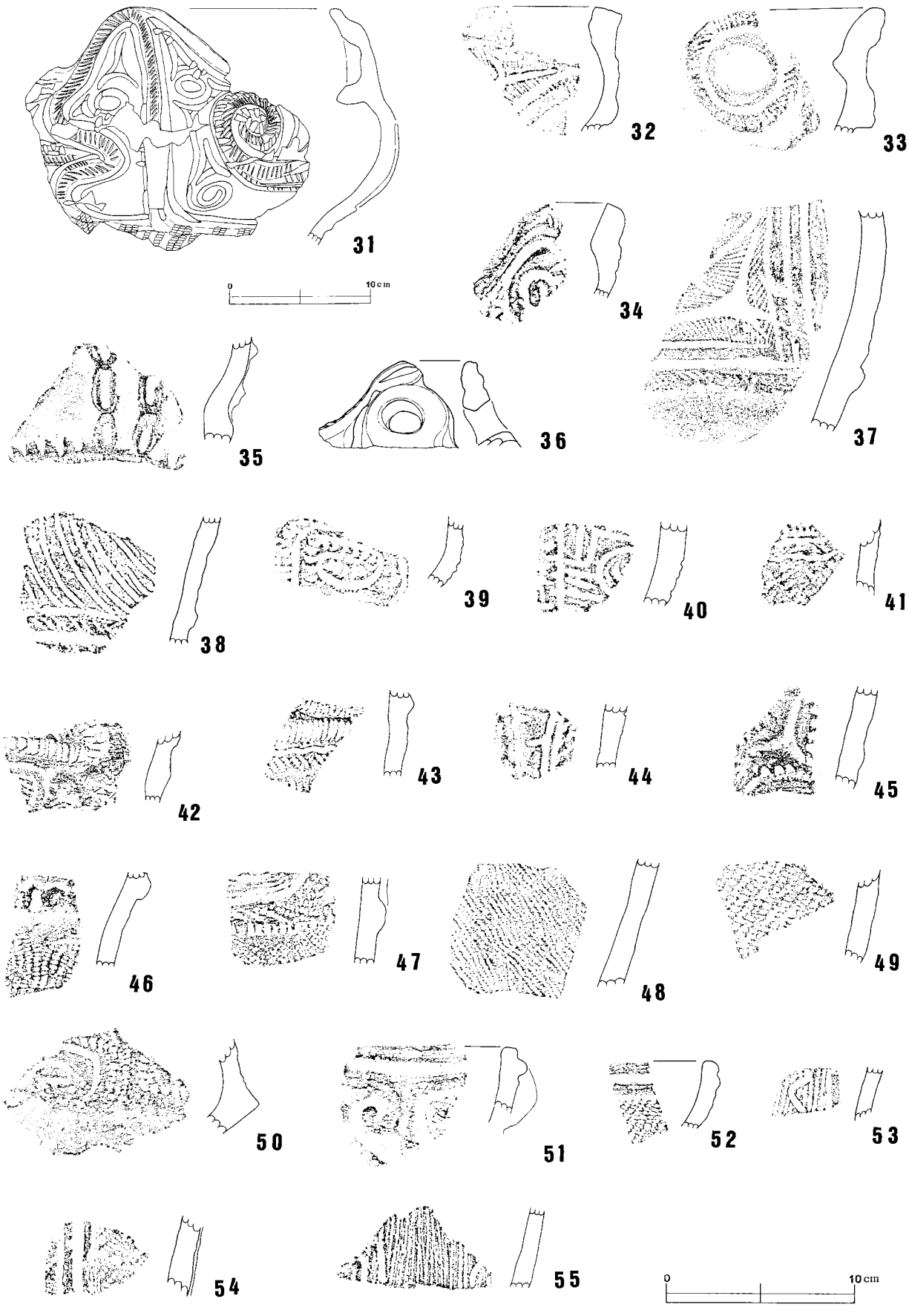
23は円筒形土器で、器形は22に類似する。口縁部は外反する無文帯で、幅は狭い。頸部は段差によって、胴部と分割する。胴部は直線的な円筒形を呈し、地文に撚糸 l をやや間隔を空けて縦位、斜位に施している。残存率は、図化部分で70%。現存高24.8㎝、口径推定17.2㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

24～29は大型の破片から復元実測したもので、いずれも深鉢と思われる。24は屈折底の底部周辺である。７に類似する。屈折点より上には、単節 RL を縦位に施文している。現存高22.0㎝、底径は推定11.8㎝、器厚1.0～1.8㎝を測る。25は胴部の大型破片である。胴部は緩く括れ、底部は屈折するものと思われる。地文は撚糸 l の縦位施文で、頸部には地文施文後に指頭による横「L」字の磨消しを推定で４単位施す。現存高18.7㎝、器厚1.1～1.4㎝。26も深鉢の胴部で、口縁部は外反する無文帯である。胴部は中位で膨らみ、縦位のナデが施される他は無文である。現存高17.9㎝、器厚0.7～1.4㎝を測る。27は小型深鉢の無文口縁部で、外反が強い。頸部直上に指頭によるナデを巡らしている。現存高5.8㎝、口径推定13.2㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。28は屈折底の底部である。24と同様の器形を呈する。無文。現存高6.5㎝、底径11.2㎝、器厚1.1～2.1㎝。29は円筒形を呈するものと思われ、現存部分で文様は認められない。現存高13.5㎝、底径9.0㎝、器厚1.1～1.4㎝を測る。

30は本住居跡出土土器中、唯一復元し得た浅鉢である。残存率50%。口縁部は幅の狭い無文帯で、わずかに外反する。頸部及び胴中位で「く」字に屈曲する。文様帯上端は三角形の連続刺突による交互刺突文を、下端には隆帯を巡らす。文様は半円状の区画に渦巻文を組合わせたものを、推定で６単位作出する。隆帯上には交互刺突文と刻目を施し、隆帯脇には単沈線を引く。区画内と各単位間には太い縦位集合沈線と列点に近い結節沈線を充填し、渦巻脇には線状の三叉文を添える。器高23.0㎝、口径推定37.6㎝、底径



第41図　第２号住居跡出土土器（８）



第42図　第２号住居跡出土土器（９）

11.0㎝、器厚0.8～1.7㎝を測る。

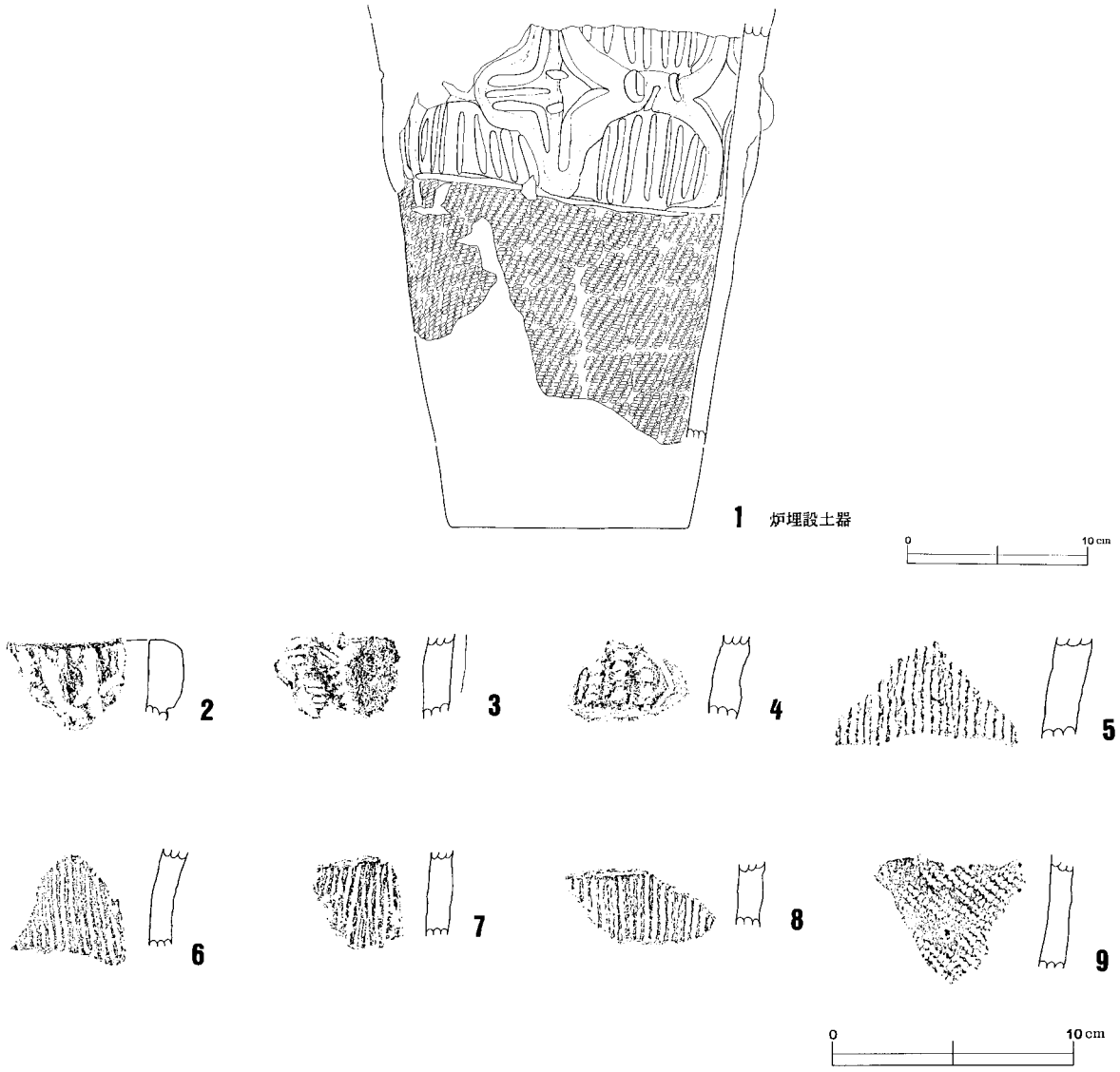
31～55は覆土各層から出土した破片で、勝坂式後半を主体とするが、一部加曽利ＥⅠ～Ⅱ式が混入する。31は多喜窪タイプの土器で、口縁部から頸部にかけての大型破片である。口縁部は大きく内湾し、鰭状の４単位突起を配するものと思われる。突起内面には円形の凹みを持つ。突起頂部からの垂下隆帯によって文様帯を４分割するものと考えられる。隆帯文は、蛇行、渦巻などのバリエーションが認められるが、詳細は不明である。隆帯上には細かい爪形文、渦巻末端には刺突を加え、隆帯脇には単沈線を付す。空間には円環文と三叉文の組合わせが見られる。口縁部文様帯下端の隆帯以下が地文になることから、文様は大略口縁部に集中するものと考えられる。地文は単節 RL の縦位施文で、一部文様帯下端の隆帯上に及ぶ。32は口縁部破片で、隆帯による三角形区画内に爪形文と三叉文を施している。33は円形の把手で蛇体文の一部と思われる。隆帯上には粗い刻目を加飾する。34は31と同一個体と考えられる。突起の一部で円環文が認められる。35は勝坂式終末段階のもので口縁部から垂下する２条の隆帯は連鎖状を呈する。36は円環を基部とする蛇体把手である。37は円筒形土器の胴部中位で、縦位区画状の文様に三叉文と付随する爪形文が認められる。胴下半部は無文である。38は口縁部下端付近の破片で、大きく外反する器形が考えられる。隆帯上には刻目、上位には平行沈線を引く。39は楕円の渦巻きに爪形文を伴う。内湾する口縁部破片と考えられる。40は円筒形土器の文様部分で、縦位の交互刺突文が施されている。41は胴部破片で、爪形文に沿う波状沈線が見られる。地文単節 RL 縦位。41は胎土に金雲母を含有する。42は隆帯脇に爪形文を施す。文様帯は多段構造を持つ。43は抽象文土器の胴部破片で、地文は単節 RL の横位施文。44は縦位区画文の一部で、截痕文を施す。45は三叉文の周囲を刺突文で囲う。46は口縁部付近で隆帯に指頭圧痕を付す。地文単節 RL の斜位施文。胎土に金雲母を含む。47は円筒土器の胴部破片で、文様帯下端と考えられる。隆帯脇に刺突を加える。地文は単節 RL で隆帯上にも施している。48・49は地文のみの胴部破片で、48は細かい単節 RL の横位、49は複節 RLR の縦位施文である。50は浅鉢の屈曲部破片で、沈線の楕円区画に複列の三角押文を施す。胎土には金雲母が含まれる。51～55は加曽利Ｅ式である。51は突出する渦巻文と区画文の組合わせが確立しており、加曽利ＥⅡ式と考えられる。区画内の地文は単節 RL 縦位である。52も口縁部破片で、加曽利ＥⅠ～Ⅱ式と考えられる。地文単節 RL の縦位施文。53～55は加曽利Ｅ式の胴部で、蛇行沈線、２本隆帯の懸垂文が認められる。地文は53は撚糸 l 縦位、54は単節 RL 縦位施文、55は条線を施している。

第３号住居跡出土土器（第43図）

本住居跡は覆土がほとんど残存していないため、復元し得たのは炉埋設土器のみである。勝坂Ⅲ式後半段階に相当しよう。

１は炉埋設土器である。円筒形土器で、口縁部と胴下半部、底部付近を欠損する。図化部分での残存率80%。文様帯下端は約１/２に沈線を引き地文部と分割するが、残り部分には区分処理が施されない。第２号住居跡の円筒土器群に比して、文様帯区画意識の変化が顕著と言えよう。文様は隆帯作出の上下対弧文を基本として推定６単位配す。ただし、一部は横位展開の渦巻文となっており単純性を嫌う。対弧間の処理にもバリエーションが認められる。隆帯上の刻目は残存部分では見られず、部分的に交互刺突を加えている。隆帯脇単沈線も統一性がない。区画内は太い縦位集合沈線を施しているが、全体的に簡素な充填に終始する。地文部は長めで、単節 RL を縦位に施文している。現存高23.3㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

２は深鉢の口縁部破片で、縦位に隆帯を貼り付け間に単沈線を引く。３は胴部で区画の一部と考えられ



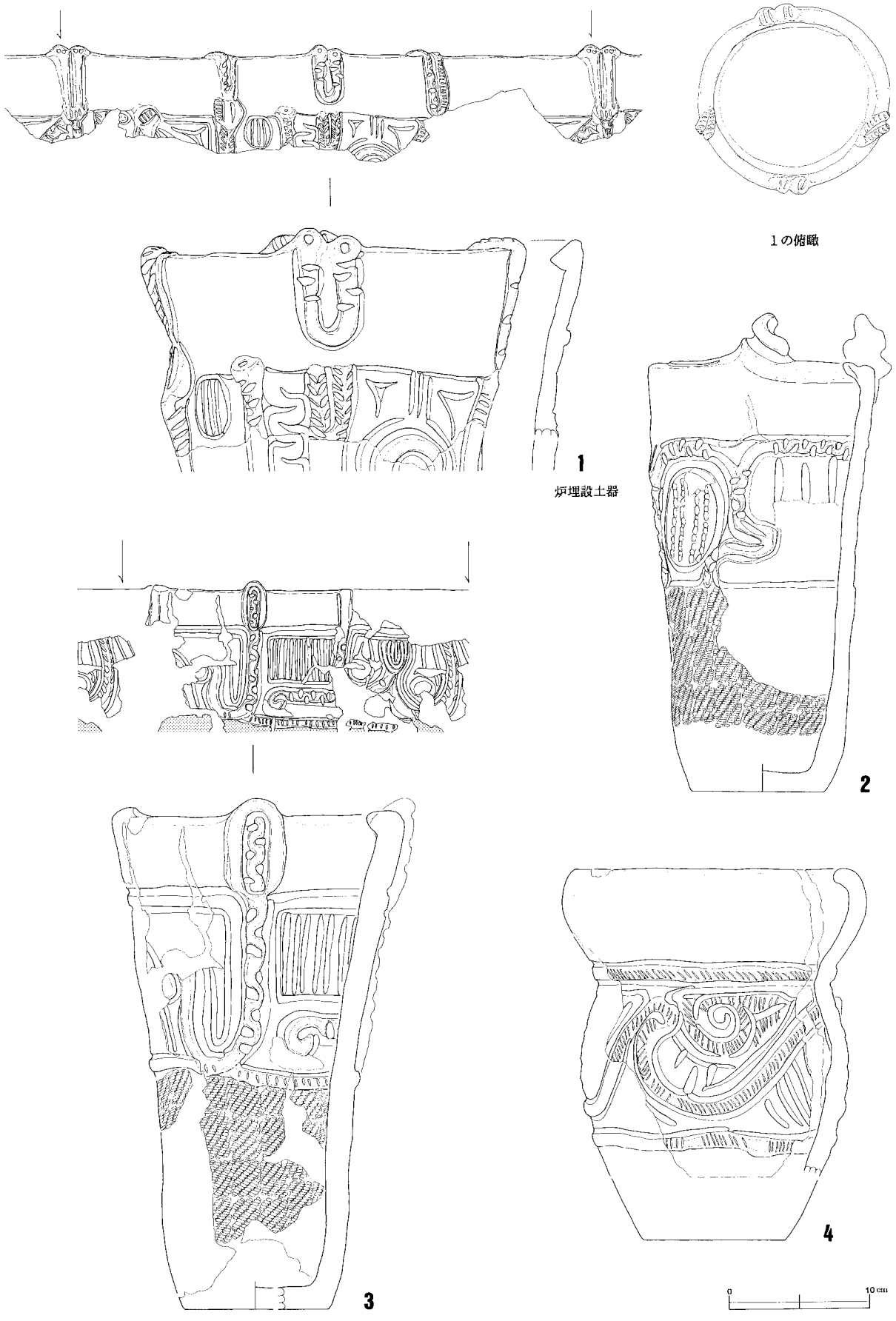
第43図　第３号住居跡出土土器

る。隆帯脇に爪形文を伴う。４は粗い三角押文を縦位に施す。５～９は地文のみのもので、いずれも胴部破片である。６が撚糸 r、５・７・８が撚糸 l を縦位に、９は単節 RL の横位施文である。

第４号住居跡出土土器（第44・45図）

本住居跡では、第13図に示したように炉埋設土器の他、炉西側で床面より若干浮いた状態でまとまった出土があった。７個体が復元されている。勝坂Ⅲ式後半の所産と思われる。また、加曽利ＥⅠ式前半段階に伴う４単位波状口縁の東関東系土器を組成に含むが、加曽利ＥⅠ式土器自体は伴わない。

１は炉埋設土器である。円筒形土器で、口縁部から胴部上半部を残すのみであるが、残存部分の器形から２・３に類するものと考えられる。内面は、被熱による剥離が顕著である。無文の口縁部は幅広で、やや外反して立ち上がる。口唇部は内側に突出しつつ内傾し、断面三角形を呈する。口縁部には「U」字状文を４単位配し、隆帯上には交互刺突文、刻目を加飾する。口唇部の処理は刻目を付すものと豚鼻状の２種があり、各々が対となっている。胴部文様帯は下部を欠損するため不明確であるが、断面台形の隆帯により大きく４単位に分割されている。隆帯上には交互刺突文、綾杉文、楕円形文等が見られ、隆帯脇には



第44図　第４号住居跡出土土器（１）

単沈線を引く。また、単位内にも隆帯による文様作出が認められるが、詳細は不明である。空間処理には簡略化した三叉文、縦位の交互刺突文、沈線のみの円環文に集合沈線を充填するものがあるが、印刻的技法は新相が明瞭である。また、各内部を上下に分割する傾向も認められる。現存高17.3㎝、口径23.2㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。図化部分での残存率は70%である。

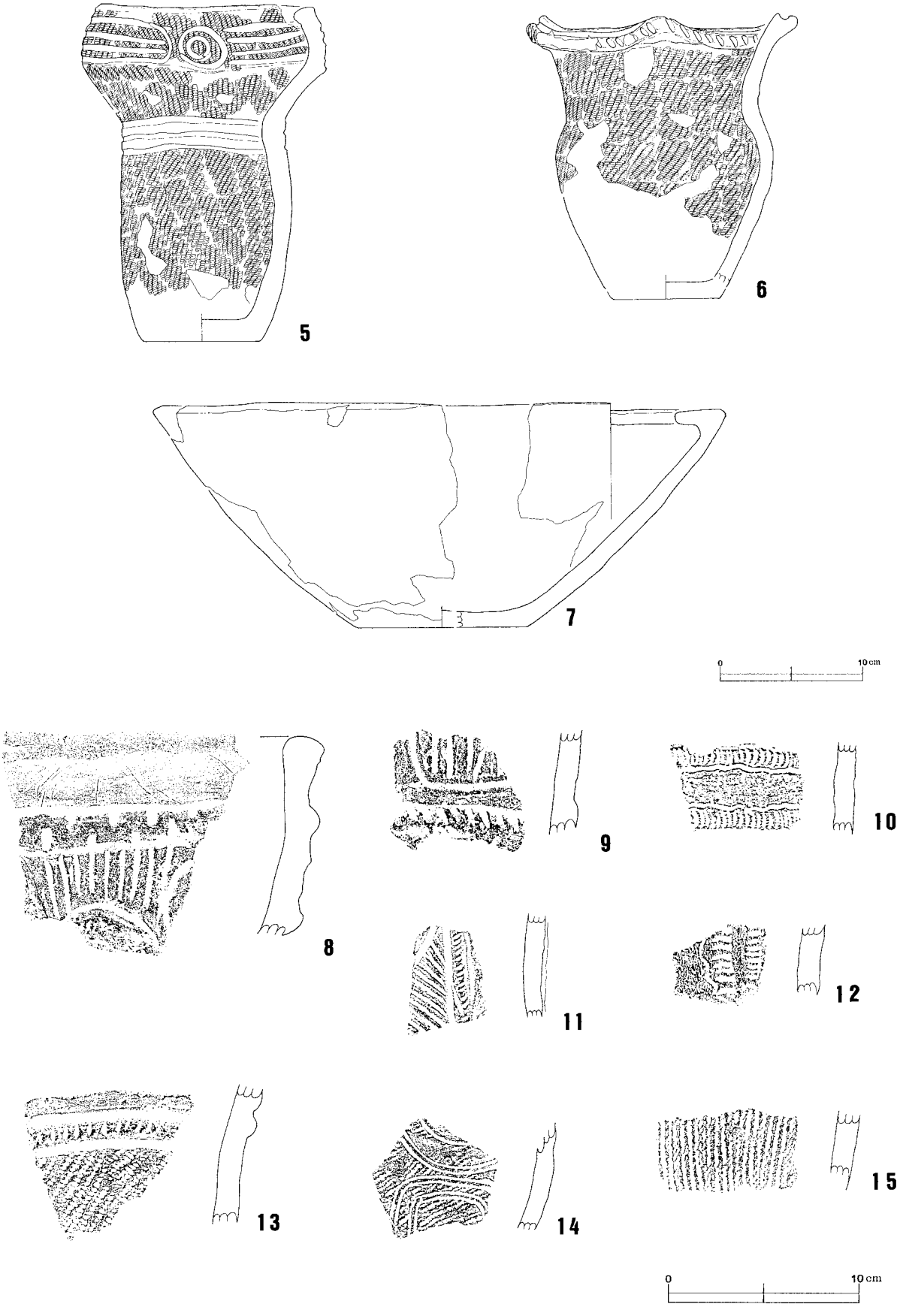
２は細身の円筒形土器で、口縁部に加飾を持たない省略型の蛇体突起を持つ。対面にも垂下する隆帯の一部が残存するため２単位の配置が考えられる。口縁部は幅の広い無文帯で、口唇部は内側に突出し、平坦部に一部沈線を引く。文様帯は上半部にあり、上端は沈線で区画されているが、下端は区画意識の不明確化が認められる。隆帯作出の楕円区画文を推定５単位配する。隆帯上には背割沈線、交互刺突文が粗く施され、隆帯脇には単沈線を引く。区画内は太い結節沈線、集合沈線を充填している。地文のみの下半部はやや長めで、０段多条の単節 RL を縦位に施文する。底部付近は無文となっている。残存率50%。現存高34.1㎝、口径推定12.2㎝、底径9.3㎝、器厚1.0～1.9㎝を測る。

３も２と同様、細身の円筒形土器である。焼成不良で、文様部分に剥離が目立つ。口縁部は外反してたち上がり、口唇部は内面に張り出す。口縁部には４単位の突起を配し、各々から隆帯文を胴部文様帯内に垂下させる。これらはいずれも異なった様相を持ち、蛇体状隆帯や三本指のモチーフが認められる。蛇体文頭部は、楕円形枠内に蛇行隆帯を置く。文様帯上端は沈線、下端には隆帯を巡らし区画意識は明確である。ただし、垂下隆帯による文様帯内分割は不明瞭で、横方向に走る隆帯による上下分割など、従来の構成とは異なった様相が看取される。隆帯上には粗い交互刺突文、綾杉文、刻目を施し、隆帯脇には単沈線を引く。空間充填手法は沈線のみで、三叉文、長方形枠に縦位集合沈線を伴うものが見られるが、全体的に充填意識が乏しいと言えよう。下半部は地文のみで、単節 RL を縦位施文する。残存率60%。器高36.4㎝、口径16.4㎝、底径推定10.2㎝、器厚1.5～1.8㎝を測る。

４は大型の破片から復元実測したものである。口縁部が大きく内湾する無文帯で、頸部は強く括れる。口唇部の断面形は丸みを帯びている。胴部は中位に最大径を有する樽形を呈する。頸部から胴部中位にかけて幅広の文様帯を横展開している。文様帯上下端は隆帯により区画される。主文様は隆帯による波状文で、うねるような表現がなされている。波頂、波底部ともに文様帯上下の隆帯には結合しない。隆帯上には丁寧な刻目を加飾し、隆帯脇には単沈線を引いている。空間には沈線表現による渦巻文に三叉文と刻目を組合わせるものや、交互沈線文、斜行集合沈線が認められる。胴下半部から底部にかけては無文となっている。残存率35%。現存高22.0㎝、口径18.4㎝、器厚1.1～1.4㎝を測る。

５は口頸部が屈曲するキャリパー形深鉢である。厚手の土器で、大きさの割に重量感がある。焼成はやや不良で上半部に生焼け部分があり、器面に剥離が目立つ。口縁部文様の基本モチーフは、中峠式（０地点型深鉢）に類似している。頸部は大きく括れ、胴部は大略円筒形を呈する。文様帯は屈曲部より上位にあり、沈線表現の同心円文を４単位配する。各単位間には、横位の「U」字文内に２本沈線を引き、左側を開放している。口頸部下半は地文のみとなっている。頸部は３本の平行沈線を巡らし、沈線間は地文を磨り消している。地文は０段多条の単節 RL で、沈線描出前に施文されている。口頸部は横位、斜位、胴部には縦位、斜位にやや間隔を空けて施される。口頸部に剥離が集中する他、底部の一部を欠損するが、ほぼ完形と言える。器高23.7㎝、口径14.9㎝、底径7.9㎝、器厚1.1～1.6㎝を測る。

６は東関東系の土器で、口唇部に文様を持つ他は、地文のみの簡素な土器である。口縁部は４単位の弱い波状を呈し、胴部上半部がやや外反し中位で強く張る。下半部の大半と底部を欠損する。口唇部は隆帯



第45図　第４号住居跡出土土器（２）

貼り付けにより外側に突出し、頂部に太い沈線を巡らす。隆帯上には粗い刻目を施している。地文は０段多条の単節 RL を縦位施文する。残存率は50%。現存高19.3㎝、口径推定15.9㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

７は無文の浅鉢である。器形は、底部から緩やかにやや湾曲気味に立ち上がる。口唇部は大きく内側に突出し、幅広の平坦面を作出している。内外面ともに丁寧な磨きが加えられている。残存率は約30%。器高15.8㎝、口径推定33.2㎝、底径推定11.6㎝、器厚0.8～1.2㎝を測る。

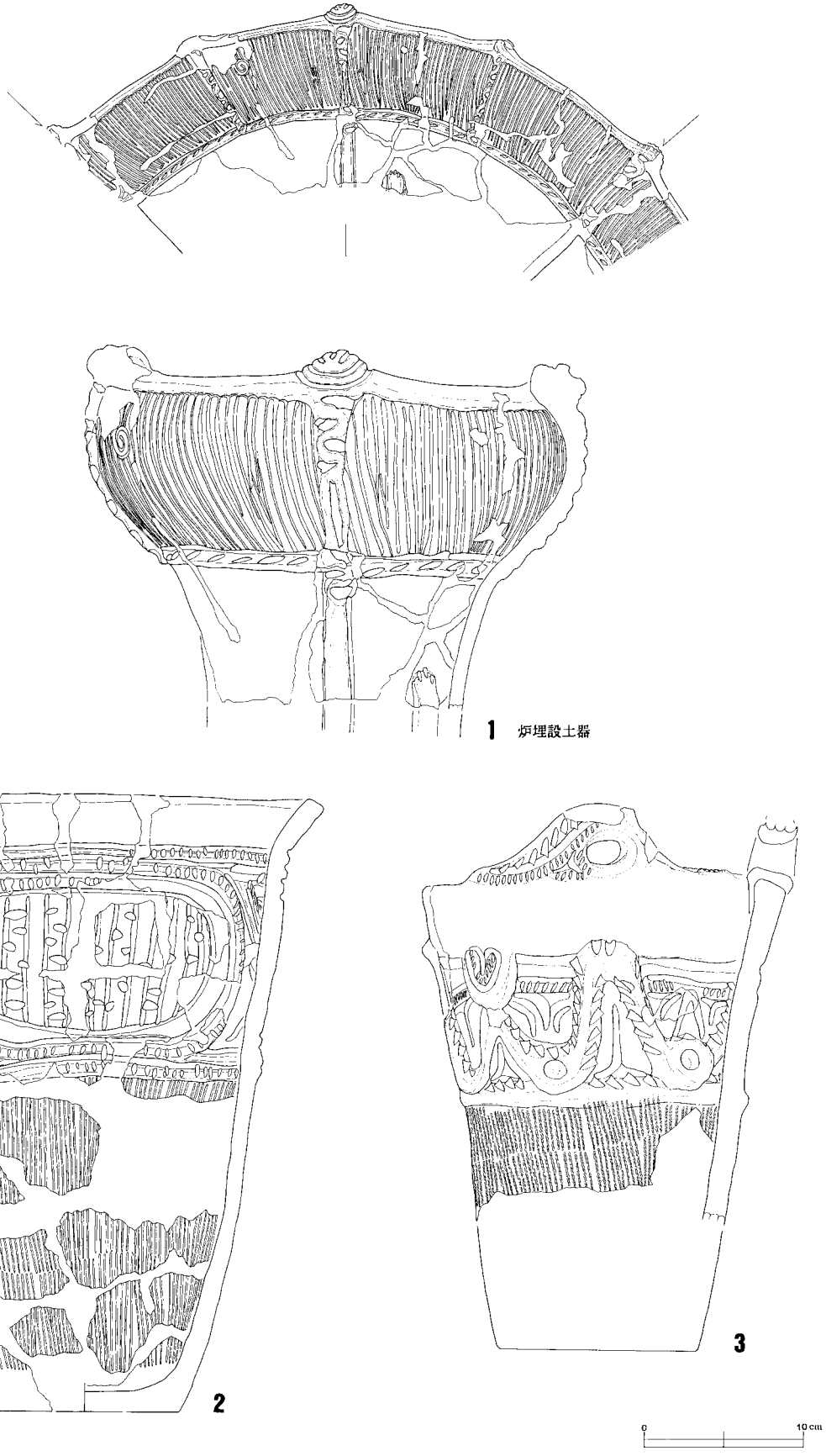
８は深鉢の口縁部破片である。口縁部は幅の狭い無文帯で、わずかに湾曲している。口唇部は肥厚する。口頸部の張り出しは弱く、外反して立ち上がる。無文帯直下には隆帯を巡らし、交互刺突を加える。口頸部文様帯部分には隆帯による横「S」字状文あるいは渦巻文が一部残存する。隆帯脇は単沈線を伴う。空間は縦位の集合沈線を充填する。文様構成や手法から中峠式近似の中峠６次１住型深鉢と思われる。９～13は勝坂式の深鉢破片である。９は円筒形土器で粗い刻目を施した文様帯下端の隆帯の一部と、文様帯内の沈線描出による区画に縦位集合沈線が認められる。10は横位の爪形文に蛇行沈線が伴う。11は縦位区画文土器である。区画内に充填される斜行沈線は、半截竹管の内皮面を使用している。12は背の高い隆帯に爪形文と蛇行沈線が沿う。13は口縁部が外反する器形を呈する。無文の口縁部直下に隆帯を巡らすものと思われる。隆帯上には刻目、脇には単沈線を付す。地文は単節 RL の縦位施文。14は東関東系の土器で、６に近い器形を呈すると思われる。地文に単節 RL を縦位、斜位施文後、半截竹管の内皮面で文様を描いている。15は円筒形土器の胴下半部で、地文のみである。撚糸 l を縦位に施文している。

第５号住居跡出土土器（第46～50図）

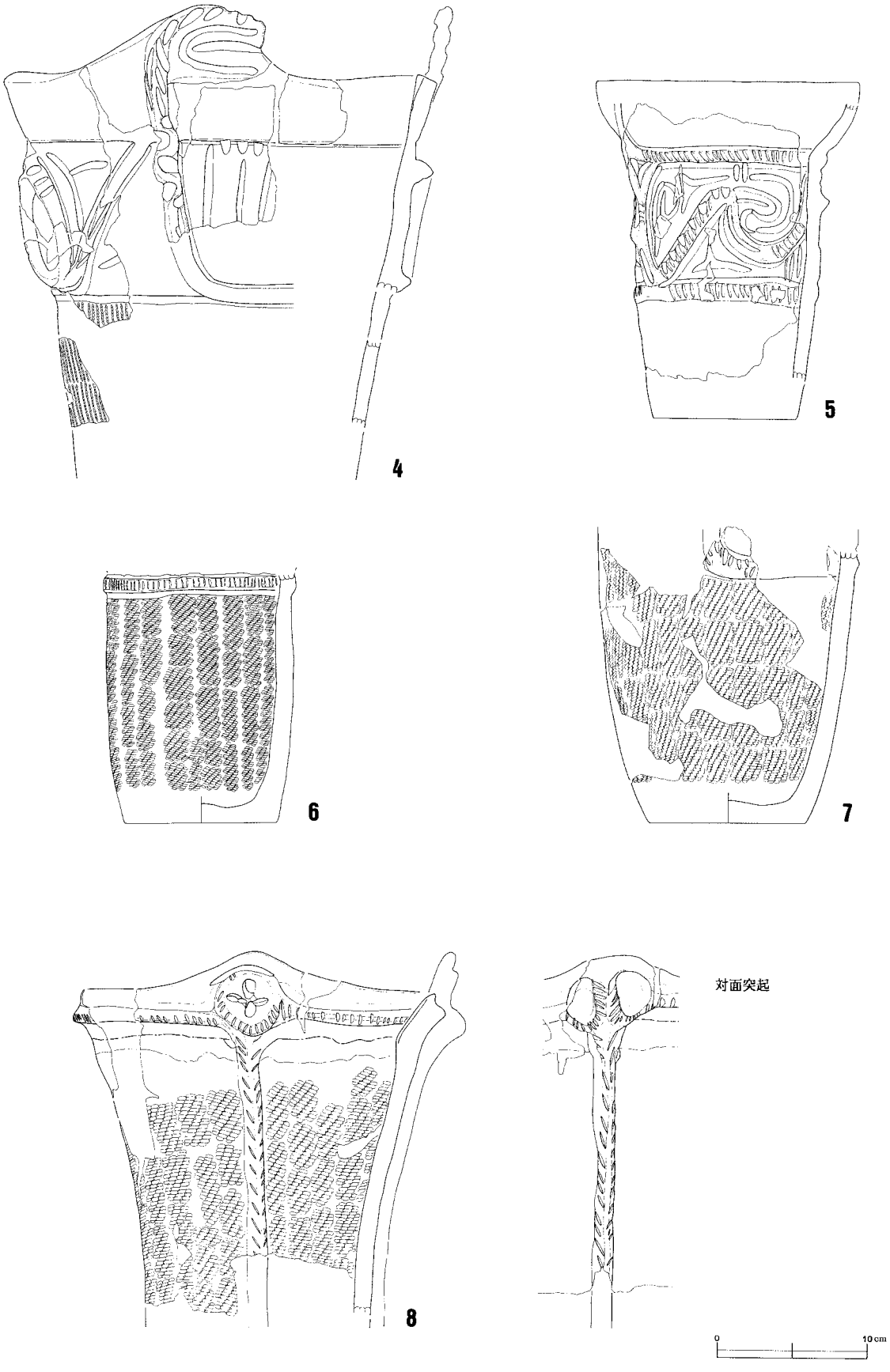
本住居跡からは第15図に示したように第２号住居跡と同様、良好な一括土器群が出土している。ただし、時期は第２号住居跡より後出する。その出土状況は、住居廃棄と埋没過程を推測する上で極めて示唆的と言える。復元された土器は17個体で、勝坂Ⅲ式後半段階を主体とするが、東関東系の口縁部４単位波状口縁土器等、加曽利ＥⅠ式前半段階に伴う土器群も組成に加えている。

１は炉埋設土器である。キャリパー形深鉢で、口縁部の一部と胴部の大半を欠く。口縁部は強く内湾する。口唇部は内外面に肥厚し、幅広の平坦面を持つ。頸部は絞るように括れている。胴下半部の器形は櫛形文土器に類似するものと思われる。口縁部には４単位の突起を配する。突起の加飾は２種あると思われ、それぞれ対角に置く。口縁部文様帯は蛇行する垂下隆帯により４分割し、半截竹管の内皮面重複施文による平行沈線を集合的に充填する。１単位のみに渦巻文を描出し、画一性を嫌う。頸部には隆帯を巡らし、隆帯上には斜位の刻目を加える。隆帯脇には単沈線を引く。突起からは、平行沈線施文後に交互刺突的な蛇行垂下隆帯を貼り付ける。垂下隆帯の内、２単位は胴下半部に至った後「J」字状に跳ね上がり、先端に３本指様の文様を施す。頸部以下の空間部無文で、丁寧にナデが加えられている。勝坂式最終末の非在地的土器であるが、半截竹管の重複施文に在地での受容が看取される。残存率は、図化部分で80%。現存高22.3㎝、口径22.8㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

２は円筒形土器である。口縁部は幅の狭い無文帯で、「く」字に外反する。文様帯は胴上位から中位にかけて幅広に設定され、上下は隆帯によって区画されている。下端隆帯の一部は二重になっている。残存部分が少ないため、文様の全体像は把握できないが、大柄な楕円区画を斜行隆帯による三角区画の組合わせを各２単位配するものと思われる。隆帯上の刻目も一部加飾を欠く。隆帯脇には複沈線を引く。楕円区画内は縦位集合沈線を充填し、部分的に交互刺突を加える。三角区画内には三叉文が認められる。胴下半部には木口状施文具による条線を施している。残存率は約30%。器高推定38.8㎝、口径推定27.2㎝、底径



第46図　第５号住居跡出土土器（１）



第47図　第５号住居跡出土土器（２）

11.6㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

3も円筒形土器で、口縁部に蛇体文の省略型把手を持つ。口縁部は幅広の無文帯で、わずかに外傾する。口唇部は内面に肥厚し、平坦面を作る。把手は円環状の基部に左に流れる蛇身表現が加飾されている。文様帯は胴部上半に展開し、上端を沈線、下端を隆帯で区画する。主文様は横展開の波状隆帯で、推定7～8単位。波頂部は口縁部無様帯に突出する。先端の加飾は蟹鋏状、鼻状のバリエーションが認められるが、配置関係は不明である。波底部は残存部分から円環文を付す2単位に対して、これを持たないものを1単位置くものと思われる。把手も含めて隆帯上及び脇には、半截竹管の連続刺突と粗い刻目を施している。空間部には三叉文、松葉文が沈線で簡素に描かれている。胴下半部は地文のみで、撚糸lを縦位施文するが、一部文様帯下端隆帯に及ぶ。残存率50%。現存高26.2㎝、口径推定18.6㎝、器厚1.2～1.4㎝を測る。

4は口縁部に向かって開く器形の円筒形土器で、破片からの推定復元である。口縁部は幅の狭い無文帯で、鎌首を上げたタイプの蛇体文を持つ。蛇体文からは蛇行垂下隆帯が発し、文様帯を縦断する。文様帯下端は沈線により分割されている。主文様の残存部分が少ないため詳細は不明であるが、斜行する隆帯に楕円文の組合せを残す。隆帯上には綾杉文、交互刺突文を付している。空間には半截竹管の連続刺突、縦位集合沈線、簡略化された三叉文が認められる。胴下半部には撚糸rを縦位に施文する。残存率は、図化部分で25%。現存高28.2㎝、口径推定26.0㎝、器厚0.6～1.2㎝を測る。

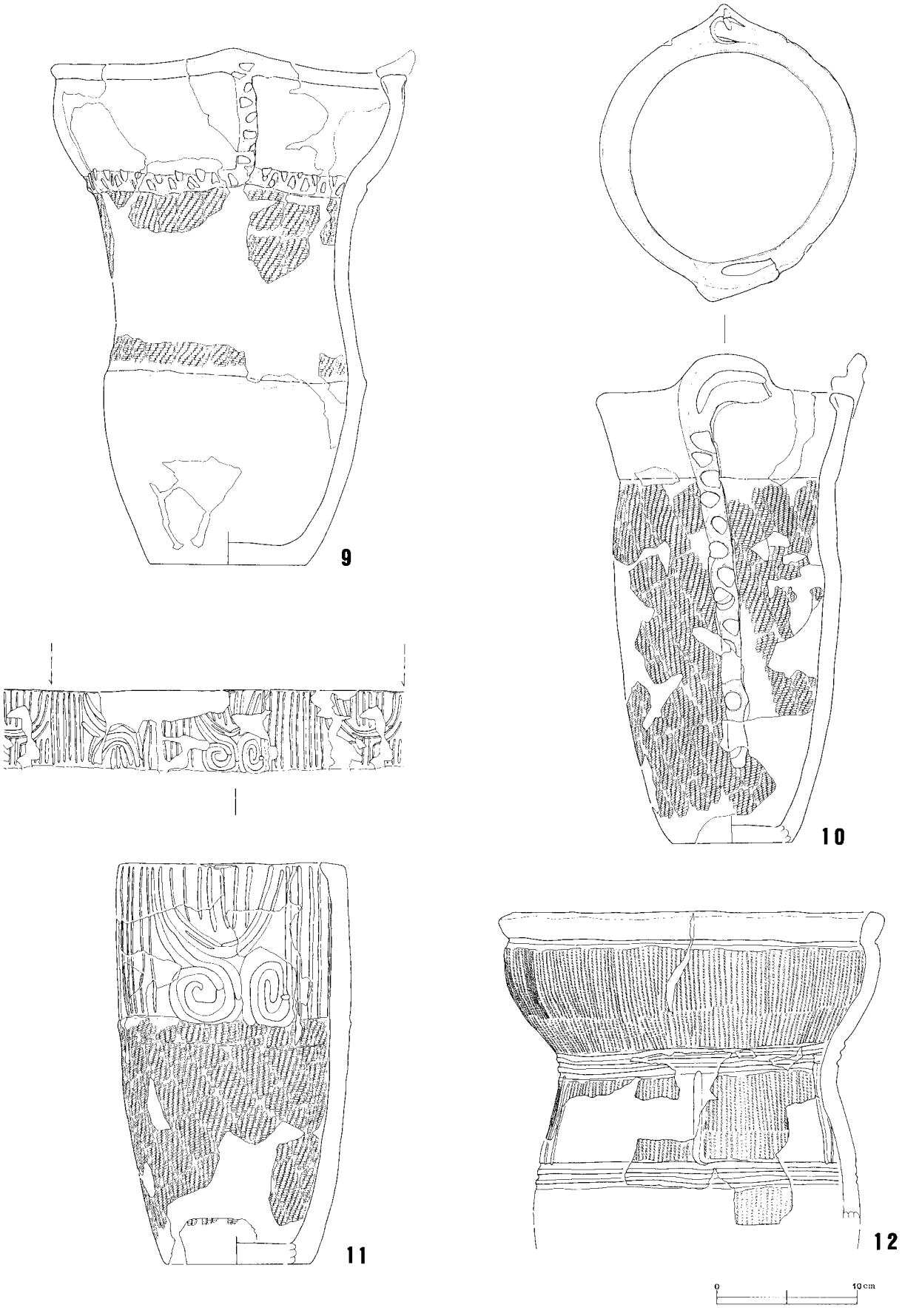
5は口唇部と底部を欠く。口縁部はわずかに内湾して立ち上がる無文帯で、胴部はほぼ円筒形を呈する。口縁部には文様帯上端から昇る隆帯が一部残存しているため、把手が付けられていた可能性がある。頸部隆帯部分には、この隆帯と結合した形で小突起が付随する。文様帯は、上下端ともに隆帯によって区画される。文様区画単位数は、残存部分が少ないため不明であるが、垂下隆帯によって単位分割するものと考えられる。残存部分には波状文が認められる。上下区画隆帯と主文様隆帯上には粗い刻目、半截竹管の刺突、背割沈線が施され、隆帯脇には単沈線を引く。空間には三叉文、集合沈線が見られる。胴下半部は無文である。残存率30%。現存高19.5㎝、器厚0.9～1.0㎝。

6は円筒形土器の胴下半部である。輪積み部分での剥離が明確で、文様帯下端隆帯以下が残存する。隆帯上には丁寧な刻目、隆帯脇には単沈線を伴う。地文は単節RLの縦位施文で、やや間隔を空けて施されている。残存率は、図化部分で100%。現存高16.7㎝、底径11.8㎝、器厚0.9～1.5㎝を測る。

7は円筒形土器の胴下半部である。残存部上端には文様帯区画隆帯の一部を残すが、全周するか否かは不明である。隆帯上には粗い刻目、隆帯脇には単沈線を引く。地文は単節RLの縦位施文。残存率は、図化部分で70%。現存高19.8㎝、底径10.2㎝、器厚1.1～1.5㎝を測る。

8は胴上半部から口縁部にかけて外反し、胴下半部は概ね円筒形を呈する。口唇部は、内面に稜を持たず偏平になっている。口縁部は幅の狭い無文帯で、2単位の波頂部を対角に置く。無文帯直下には隆帯を巡らし、隆帯上には刻目を施す。波頂部には円形の貼り付けにヘラ状施文具による刺突を「十」字に施したものと、眼鏡状突起を付している。突起からは襞状隆帯を垂下させ、隆帯上に綾杉文を加飾する。地文は撚りの粗い単節RLの縦位施文で、隆帯貼り付け前に施される。ただし、口縁部を巡る隆帯下には空白があり、輪積痕を残している。残存率は図化部分で80%。現存高24.4㎝、口径23.0㎝、器厚1.1～1.7㎝。

9は櫛形文系類似の器形を呈するが、文様はかなり単純化されている。口縁部は内湾しつつ立ち上がる。胴部中位はやや括れた円筒形である。胴下半部は外側に張り出し、第2号住居跡出土土器（第39図20）に酷似する。口唇部には隆帯を巡らし、2単位の波頂部を設ける。波頂部からは隆帯を垂下させ、頸部に巡



第48図　第５号住居跡出土土器（３）

る隆帯に結合させる。隆帯上には、半截竹管による粗い交互刺突文を加飾している。口縁部は無文帯となっている。胴部中位には地文単節 RL を縦位に施文する。下半部から底部にかけては無文である。残存率は50%。器高36.8㎝、口径推定22㎝、底径10.8㎝、器厚1.0～1.5㎝を測る。

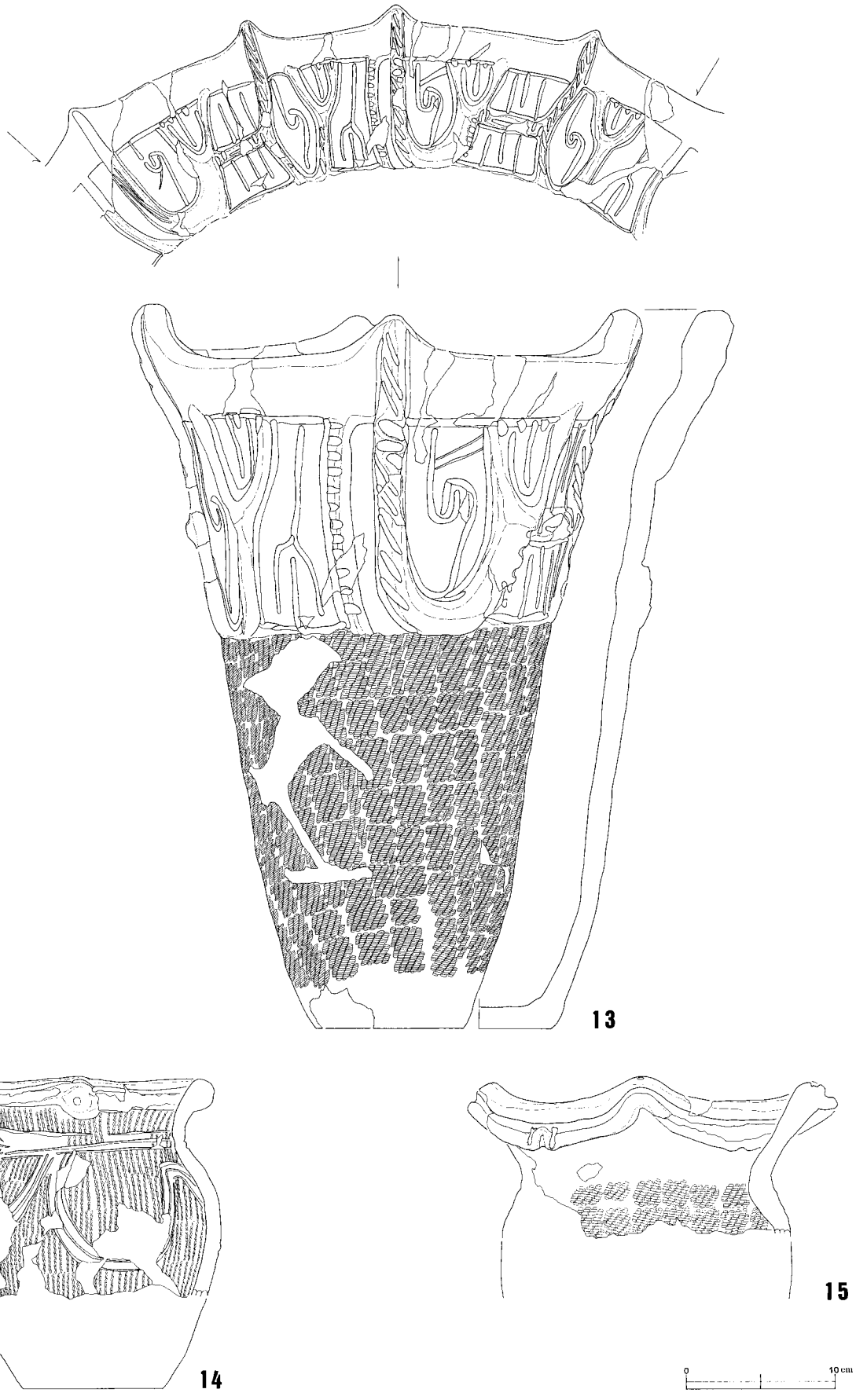
10は円筒形の器形を呈する。口縁部はわずかに外反し、口唇部は内面に張り出し平坦部を作る。胴部は中位で若干膨らむ。口縁部は幅広の無文帯で、頸部に段差を有する。口唇部から胴部を貫く垂下隆帯により、蛇体表現を２単位施し、１単位のみ簡略化した蛇頭表現を持つ。垂下隆帯には指頭押圧が施されるが、粗い作りとなっている。地文は隆帯貼り付け前に施され、単節 RL をやや斜位に施文している。本土器は、外面に高温による剥離や発泡の痕跡が広範囲に認められ、焼成時の失敗か二次焼成の可能性を指摘できる。残存率は80%。現存高35.0㎝、口径28.8㎝、器厚1.0～1.4㎝を測る。

11は円筒形土器である。加曽利ＥⅠ式初頭段階まで残存する典型的な勝坂系土器で、本住居跡の時期決定の指標ともなったものである。口縁部には無文帯を持たず、上半部全体を文様帯とする。口唇部は内面に三角形状に突出し、平坦面を形成する。文様帯下端は、隆帯等による明確な区画は行われていない。文様は沈線のみで描出されている。施文具は２種認められる。文様帯は７～９本の縦位集合沈線により３単位に区画し、各区画内には上部に半円状の沈線区画に縦位集合沈線を充填、下部には対弧沈線、対渦巻文、垂下沈線をそれぞれ加え、三様の表現を見せている。空白には短集合沈線、松葉文を充填する。胴下半部は地文単節 RL を斜位に施文する。文様帯下端は低い隆帯状の盛り上がりを持つが、胴下半部と同様に地文が施されている。残存率80%。器高28.8㎝、口径12.2㎝、底径10.2㎝、器厚1.2～1.8㎝を測る。

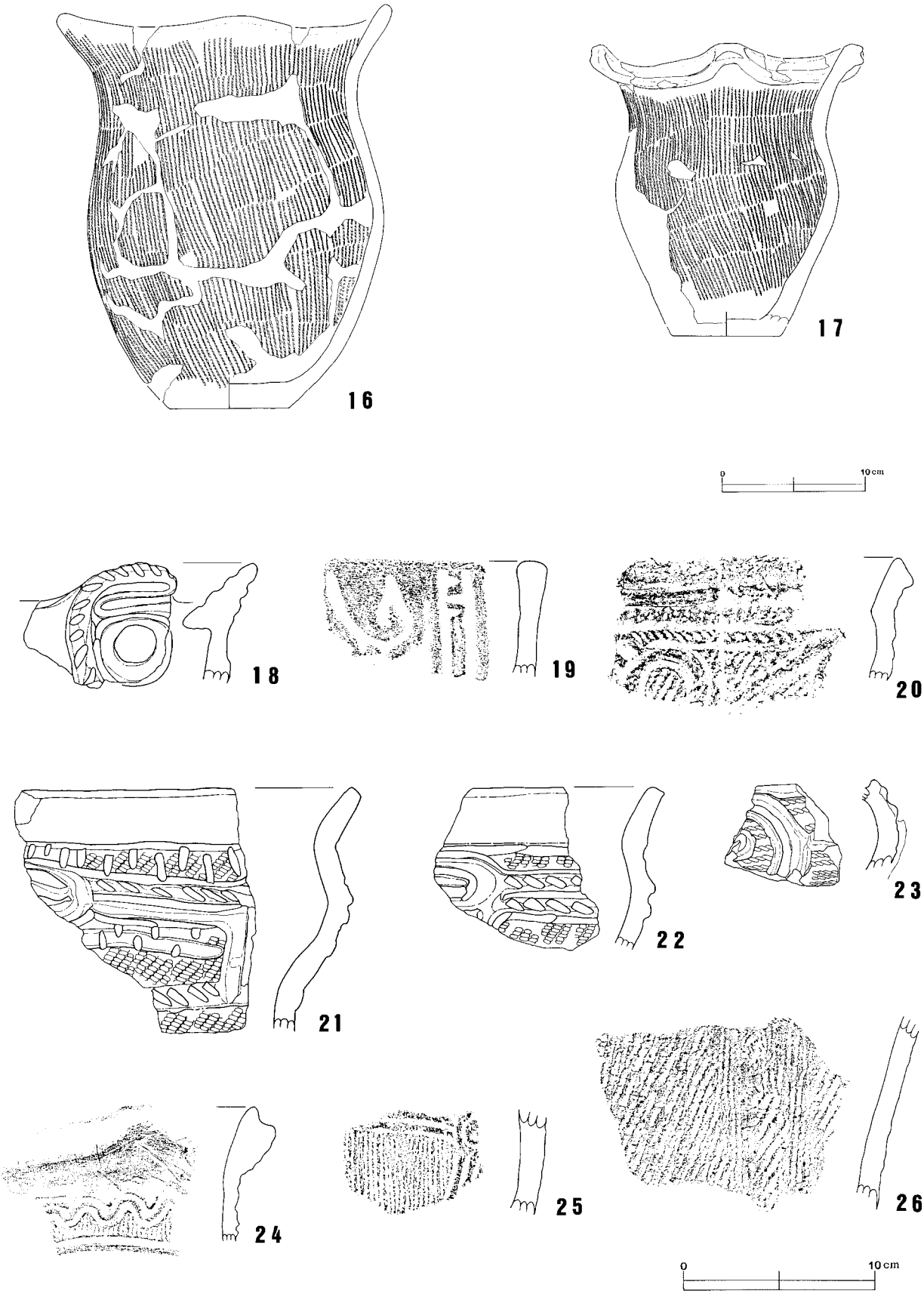
12は緩いキャリパー形を呈する土器で、頸部以下の大部分を欠損する。口縁部は幅の狭い無文帯が外反する。口頸部は丸みを帯び、頸部は強く括れる。胴部は若干膨らむ器形を呈するものと思われる。地文に撚糸 l を施文後、沈線のみで文様を描出する。口縁部無文帯直下に単沈線を引く。頸部と胴中位には３本の平行沈線を巡らし、前者から１～２本の沈線を垂下させ器面を分割する。推定５単位。沈線間は地文を磨り消している。残存率は、図化部分で60%。現存高22.2㎝、口径24.6㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

13は直線的に外反する器形の大型土器で、口縁部には４単位の突起を有する。口縁部は無文帯で板状に肥厚する。胴上位に展開する文様帯は上端を沈線で区画するが、第48図11と同様に下端は明確な区画を設けず、区画意識の低下が看取される。文様は突起より垂下する隆帯で４単位に分割する。垂下隆帯は下端部から上昇し、先端には３本指のモチーフを付ける。この在り方は第46図１と共通するものである。主文様は相互に連結するものと、垂下隆帯に平行する隆帯を付すもの、各２単位の構成となる。隆帯上には斜行沈線、交互刺突文、半截竹管の連続刺突、背割沈線が加飾されている。また、隆帯脇には単沈線を引く。空間には線表現の三叉文、フォーク状文、上下交互沈線等が施されるが、隙間が多くかなり簡素化された印象を与えている。下半部の地文部分には、０段多条の単節 RL を縦位施文する。残存率は90%。器高48.2㎝、口径29.8㎝、底径10.8㎝、器厚1.1～1.6㎝を測る。

14～17は、４単位の波状口縁を持つ所謂東関東系の土器群である。14は大木８a 式に近い器形で、頸部は強く括れ、胴部中位で膨らむ。口径は胴部の最大径に及ばない。口縁部には４単位の突起を配し、上方から俯瞰すると方形を呈している。突起には円形の凹みを加飾する。口唇部は肥厚し、突起間に背割状に太い沈線を入れることにより、２段の隆帯を表現する。頸部以下には地文撚糸 l を縦位施文した後、半截竹管内皮面の重複施文による３条沈線で文様を描出する。胴部上位の沈線文は、やや不規則ながら５単位の波状をなしている。なお、本土器は口縁部の一部が欠けた状態で火熱を受けた痕跡があり、焼成色が明



第49図　第５号住居跡出土土器（４）



第50図　第５号住居跡出土土器（５）

瞭に異なる部分がある。また、胴下半部には被熱による剥落が多く認められ、10と同じ様相を呈している。残存率は70%。現存高18.4㎝、口径14.4㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

15は４単位の波状口縁を持つ深鉢である。口縁部には張り出すように隆帯を貼り付け、太い沈線を入れ２段隆帯を表現する。波頂部には円形刺突を加える。波頂間は直線的で、俯瞰すると方形を呈している。波底中間には交互刺突を施す。頸部は強く括れ、胴部は中位で張る。頸部は無文で、胴部には単節 RL を縦位に施文する。残存率は、図化部分で60%。現存高10.8㎝、口径20.2㎝、器厚1.1～1.9㎝を測る。

16は４単位の波状口縁の深鉢で、波の上下動が少ない。口縁部は直線的に外反して立ち上がる。頸部の括れは14・15に比して弱い。胴部中位は大きく膨らむ。口縁部と底部付近は無文で、胴部には撚糸 l を縦位、斜位に施している。残存率70%。器高28.2㎝、口径21.6㎝、底径8.2㎝、器厚0.7～1.1㎝を測る。

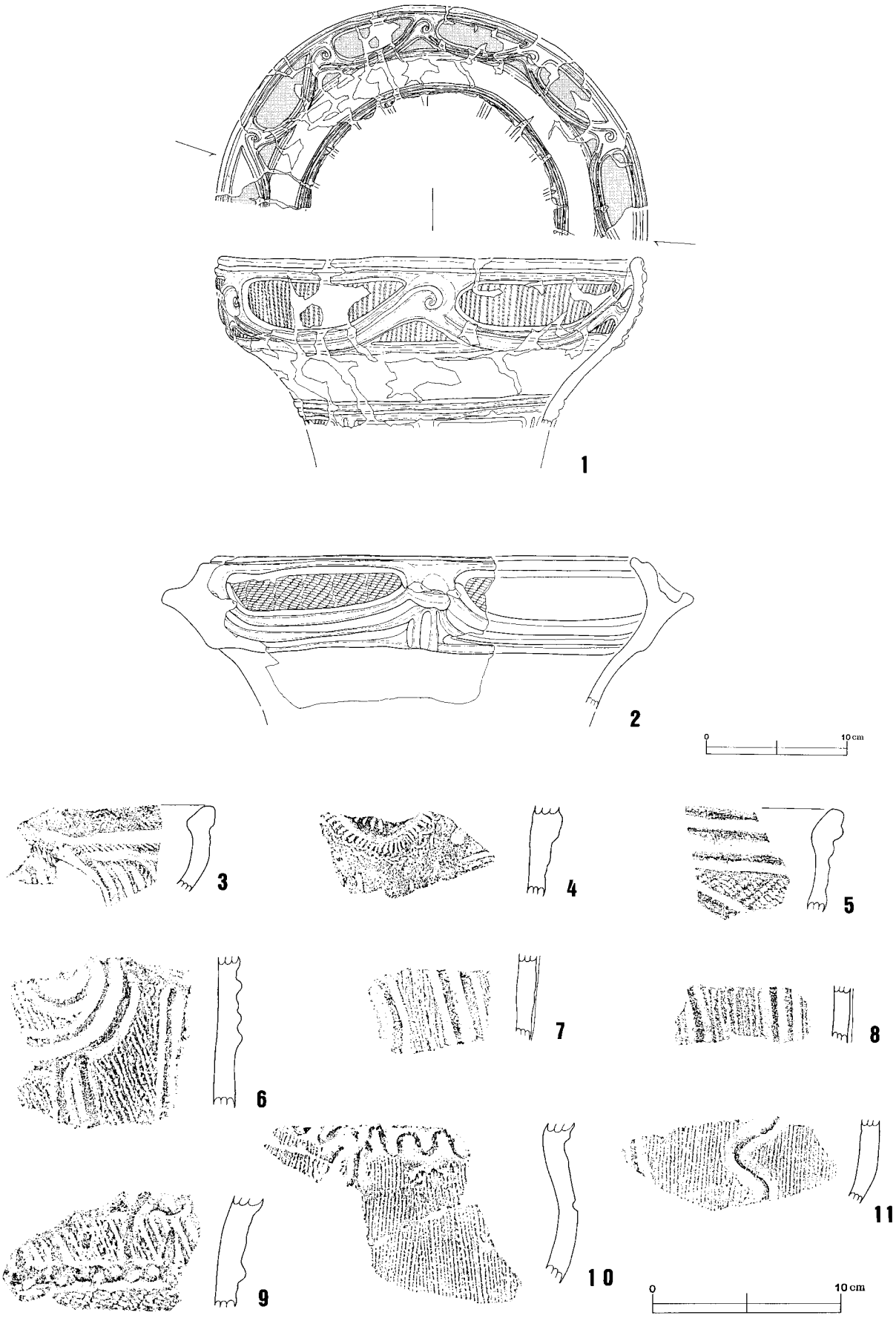
17は４単位の波状口縁を持つ深鉢で、底部を欠く。口唇部直下に張り出すように隆帯を貼り付け、ナゾリ状の沈線を入れ２段隆帯を作出する。波頂部には半円状文を付す。頸部の括れは16と同様、やや弱めで、胴部は中位で張る。胴部には細かい撚糸 l を縦位、斜位に施文する。残存率は50%。現存高19.6㎝、口径推定16.6㎝、器厚0.7～1.4㎝を測る。

18～26は覆土出土の破片の内、特徴的なものを選択して掲載した。18は円筒形土器の口縁部と考えられる。鎌首を持上げるタイプの蛇体文の頭部が認められる。口唇部は内面に大きく突出する。19は加曽利ＥⅠ式前半段階に特徴的な勝坂系の円筒形土器で、口縁部に無文帯を持たない。複数本の縦位沈線により器面を分割する。交互刺突文、剣先状の沈線文が見られる。20～22は中峠式、あるいはその類型と考えられる。20はキャリパー形の深鉢口縁部で、口唇部は外側に肥厚する。口頸部は弱い球形を呈する。口縁部文様は、単節 RL を縦位、斜位に施文後、隆帯を貼り付けて作出する。上端隆帯上には刻目を施す。また、隆帯脇には単沈線を引く。中峠０地点型深鉢と思われる。21・22は同一個体で、中峠式類型の台耕地34住型深鉢である。無文の口縁部は外反し、口頸部は球状に膨らむ。口縁部文様は単節 RL 縦位施文後に描出する。主文様は２本隆帯に楕円文を組合わせるが、一部頸部隆帯に接続する垂下隆帯があり、単位区画がなされていたようである。口縁部無文帯直下には、部分的に単沈線による交互刺突文、隆帯上には刻目、交互刺突を加飾し、隆帯脇には単沈線を引く。また、胴部以下にも単節 RL を施文している。23は加曽利ＥⅠ式土器で、深鉢の口縁部破片である。地文に撚糸 l を横位施文した後に、隆帯を貼り付けている。文様は渦巻文の一部と思われる。24は東関東系の土器で、４単位の波状口縁を呈すると考えられる。口唇部直下に隆帯を上方に張り出すように貼り付ける。地文は撚糸 l で、波状平行沈線と頸部区画沈線は半截竹管の内皮面を使用している。25・26は深鉢の胴部破片で、25は撚糸 l 施文後に半截竹管の内皮面により平行沈線を引く。26は地文に単節 RL を縦位施文する。懸垂文状の部分は、斜位施文で描出している。

第６号住居跡出土土器（第51図）

本住居跡の出土土器は比較的少なく、図化し得たのは遺構南西コーナーで出土した伏甕を含めて２個体である。いずれも、加曽利ＥⅡ式前葉段階に比定できよう。

１は南西コーナー床面により出土した伏甕で、所謂渦巻繋ぎ弧文土器である。胴部を欠損する。口縁部は外反し、口唇部でわずかに内傾する。頸部無文帯部は直線的で、胴部は大略円筒形を呈するものと推定される。口唇部には単沈線を巡らしている。口縁部文様は２本隆帯の弧線と付随する渦巻文により、５単位の半円状区画を作出し、渦巻文直下には三角形の地文部を残す。隆帯脇の沈線は丁寧に引かれる。頸部は無文帯である。胴部には隆帯による４単位構成の懸垂文を垂下させる。基本的には１本と２本の交互配



第51図　第６号住居跡出土土器

置であるが、１単位のみ２本隆帯が連続する。地文は、口縁部、胴部ともに撚糸Ｌを縦位に施文している。残存率は図化部分で90％。現存高12.2㎝、口径28.4㎝、器厚0.7～0.8㎝を測る。

２は大形破片から復元実測したもので、１と同様、渦巻繋ぎ弧文土器の範疇に入るものである。口縁部は内湾が強い。口縁部文様は２本隆帯と突起状の渦巻文で、推定４単位の楕円区画を作出している。渦巻文直下には２本隆帯を垂下させる。頸部は無文帯である。地文は単節 RL の縦位施文。現存高10.8㎝、口径推定28.6㎝、器厚0.7～1.4㎝を測る。

３～11は覆土各層から出土したもので、３・４は明らかに混入である。３は勝坂式最終末の土器で、キャリパー形深鉢の口縁部破片と思われる。口縁部は波状口縁、あるいは把手が付くと考えられる。口唇部には単節 RL を横位施文している。４は抽象文土器の胴部破片である。刻目を加飾した隆帯脇に蓮華文を施している。５～８は、深鉢の破片である。いずれも加曽利ＥⅡ式の古段階と考えられる。５は口縁部破片で、区画の一部が残存する。地文は単節 RL の縦位施文。６～８は胴部破片である。６は、隆帯で懸垂文と渦巻文が作出されている。地文は撚糸Ｌを斜位に施文している。７・８は隆帯による２本と蛇行懸垂文を交互配置する。地文は、７が条線、８は撚糸Ｌの縦位施文である。９～11は曽利Ⅱ式土器である。９は頸部の破片で、半截竹管内皮面の平行沈線上に斜行隆帯を貼り付け、籠目文を描出する。胴部には地文、単節 RL の縦位施文が認められる。10・11は同一個体で、頸部から胴部上半の破片である。頸部には、貼り付け隆帯に交互刺突を加えた波状隆帯、胴部には蛇行懸垂隆帯を垂下させる。地文は条線である。

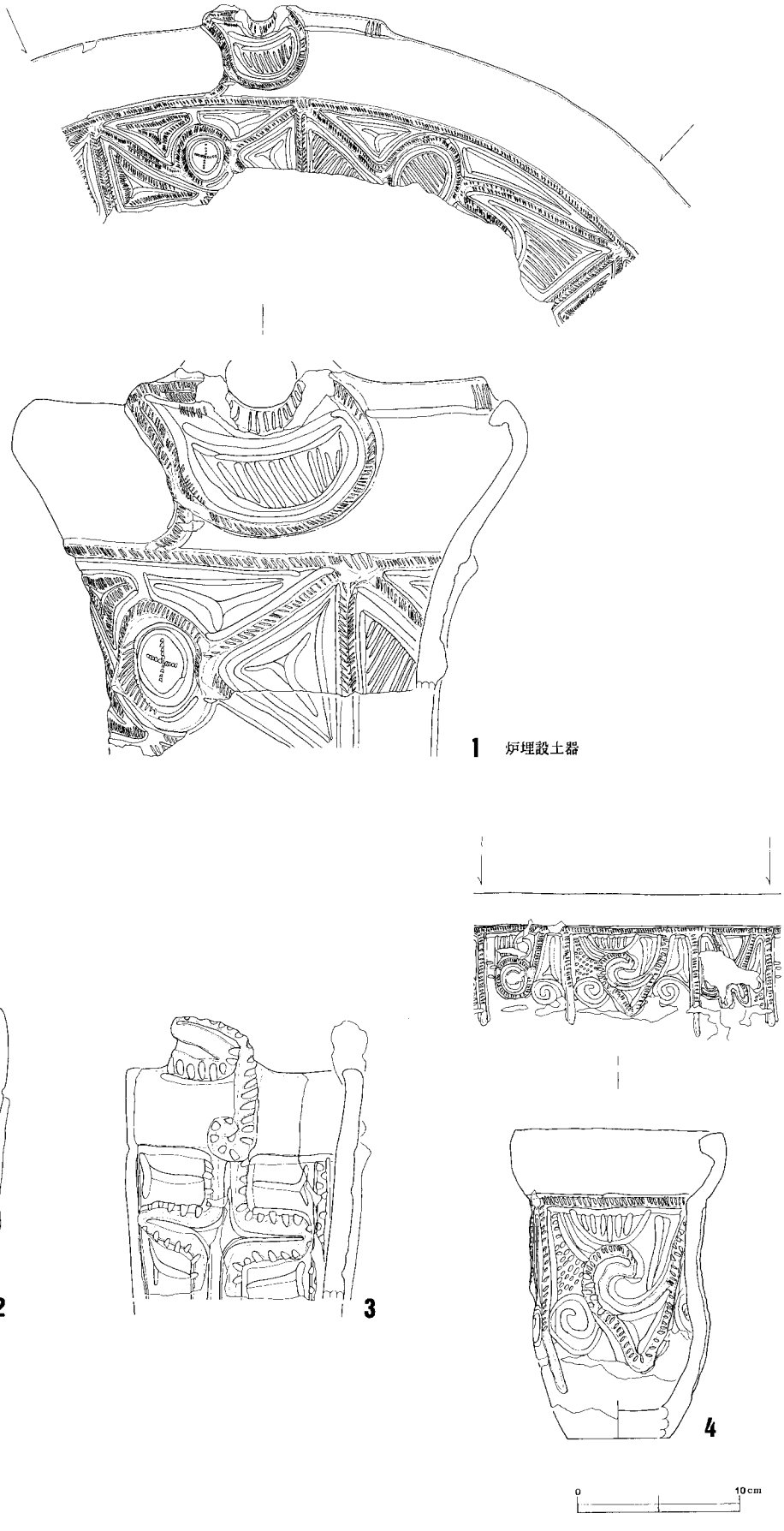
第７号住居跡出土土器（第52～57図）

本住居跡からは第18図に示したように、遺構中央やや北寄り、覆土中位からまとまって土器が出土している。ただし、第２・５号住居跡と比較すると散乱した様相を呈している。器種としては浅鉢の出土が多く、復元・図化された土器24個体中、11個体を占めている。時期は、勝坂Ⅲ式後半段階と考えられる。

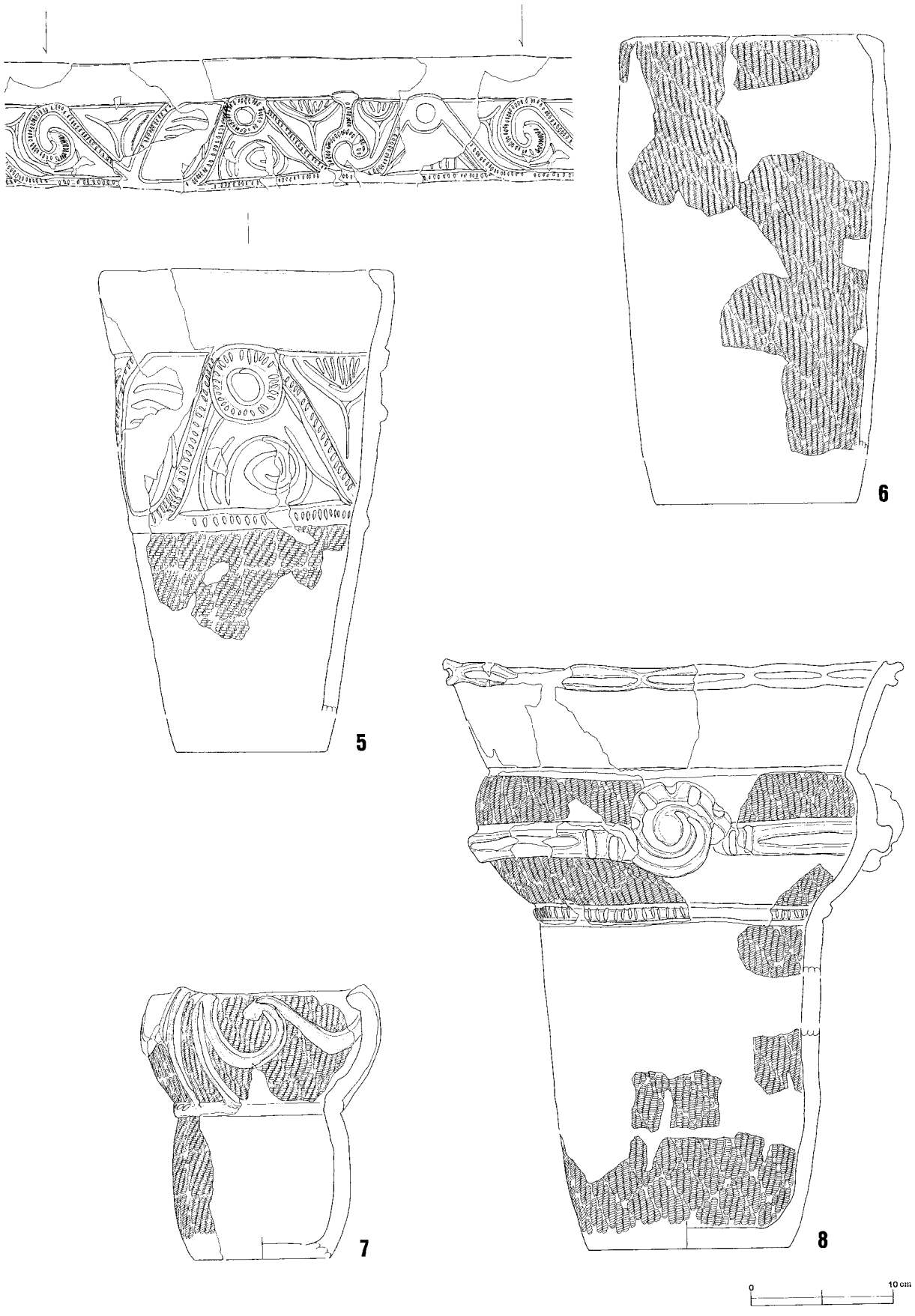
１は炉埋設土器である。把手と、胴下半部を欠損する。口縁部は把手から連続する半円状区画以外は無文で、袋状を呈している。口唇部は内側に肥厚し、平坦面は内傾する。頸部の括れは弱く、緩やかに胴部に至る。把手は欠損するため形状は不明であるが、残存部分から円環の基部に蛇体装飾を施したものである可能性が高い。把手右側は連続する形で一段高くなっている。把手直下の半円状区画は隆帯で作出され、隆帯上に刻目、隆帯脇には複沈線を引き集合沈線を充填する。区画隆帯の一部は頸部区画隆帯に連結する。胴部文様は上下端を隆帯で区画し、人体状の文様を２単位描出するが、占める範囲は１対２となっている。人体文を作出する隆帯上には細かい刻目を施し、区画隆帯は断面三角形を呈し綾杉文を加飾する。隆帯の接合部分は、突起状に肥厚する。それぞれの隆帯脇には複沈線を引き、空白内には三叉文と爪形文、斜行集合沈線を充填する。また、人体文中心の円環部には十字の結節沈線と斜行集合沈線を施している。残存率は、図化部分で80％。現存高24.0㎝、口径27.2㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

２は小型の円筒形土器で、口縁部から胴部下半部の破片からの復元実測である。器形は文様帯部が若干膨らみ、胴下半部に向かって径を減じる。口縁部は幅広の無文帯で、わずかに内傾する。文様帯上端は沈線、下端は隆帯で区画し、垂下隆帯で文様分割する。隆帯上には綾杉文、交互刺突文を加飾し、隆帯脇には単沈線を引く。主文様のモチーフは不明である。空間には沈線描出の簡略化した三叉文が施されるのみで、極めて簡素である。胴下半部には地文０段多条の単節 RL をやや斜位に施している。残存率は、図化部分で20％。現存高17.3㎝、口径推定11.8㎝、0.9～1.1㎝を測る。

３も小型円筒形土器である。口縁部は幅広の無文帯で、蛇体把手を持つ。把手は垂下隆帯を介して胴部



第52図　第７号住居跡出土土器（１）



第53図　第７号住居跡出土土器（２）

文様帯に結合し、結合部は渦を巻く。胴部文様帯は上端に突起を有する隆帯で２単位に分割され、各々十字文を配する。隆帯上には、把手も含めて太めの刻目、半截竹管による連続刺突が加えられている。空間には簡略化した三叉文を施している。破片同志で焼成色が大きく異なり、焼成時に破損した可能性がある。残存率は、図化部分で60%。現存高17.4㎝、口径推定12.2㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

４は縦位区画文土器の系統と思われる。底部を欠損する。口縁部は内湾する無文帯で、口唇部は内面に突出し、幅広の平坦面を形成する。頸部から胴下半部にかけて幅の広い文様帯を展開する。頸部には刻目加飾の隆帯を巡らし区画するが、文様帯下端は明確な区画線を持たない。文様帯は垂下隆帯により３単位に区画され、隆帯作出のｄ字状文、渦巻文、Ｘ字状文を配する。空間充填手法は隆帯文に対応せず、特に展開図中、中央の単位には上端の隆帯に呼応した形で半円状区画を沈線で描出する等、規格性の崩れが看取される。他には、刺突文、渦巻文、三叉文が認められる。地文は持たない。残存率90%。器高14.1㎝、口径10.0㎝、底径推定6.2㎝、器厚0.6～1.2㎝を測る。

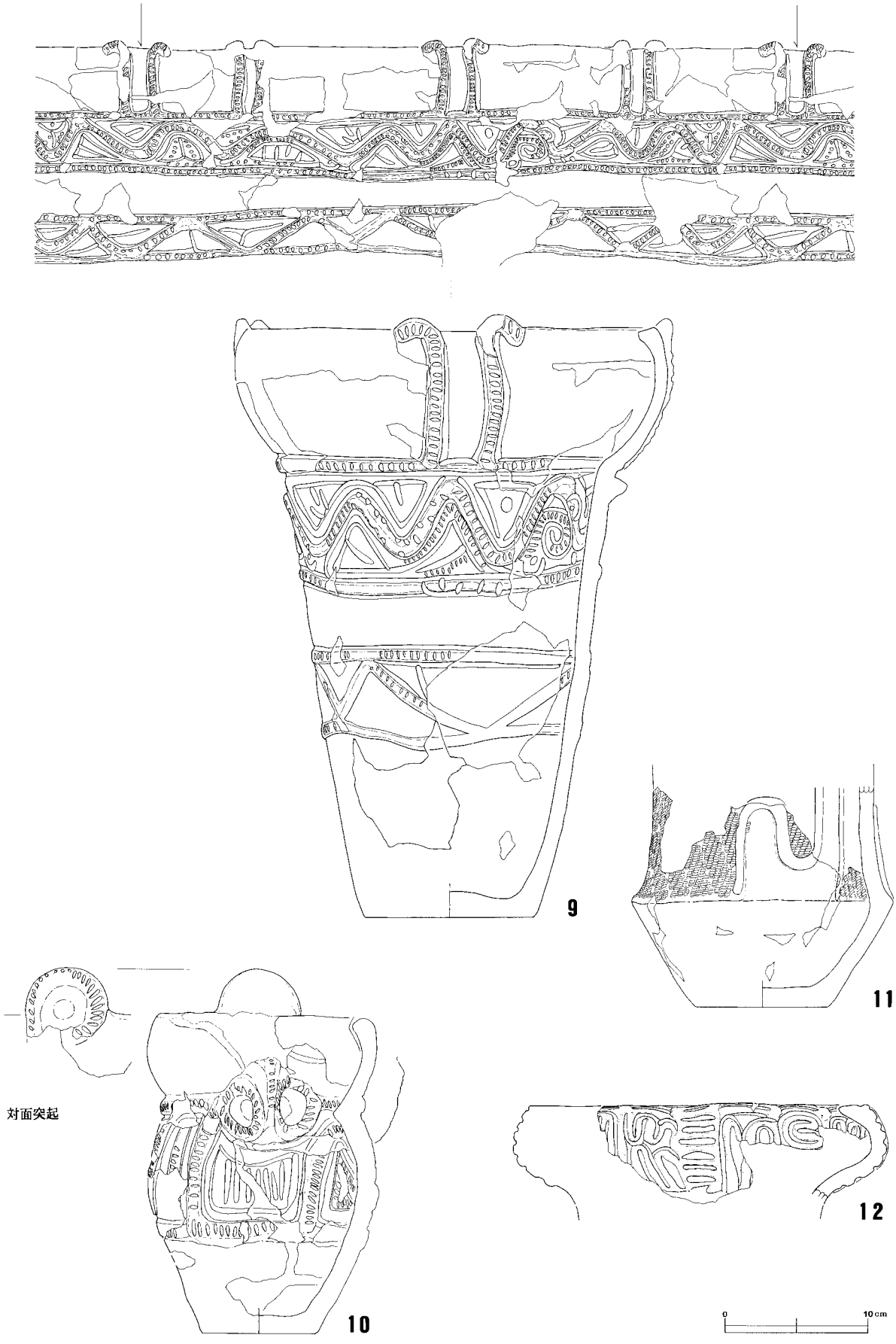
５は円筒形土器で、胴部上位がわずかに膨らみ、口縁部が若干外傾する器形を呈する。口唇部は内面に突出し平坦面を作る。文様帯は、上位に横位展開する。波状隆帯の上下動による三角区画を基調とするが、１単位は左側が下端隆帯に結合せずに円環文部分が渦巻文となる。さらに、１単位は三角区画と四辺形区画に分割することにより、基本的には５単位であるが、６単位構成としている。隆帯上には刻目、隆帯脇には単沈線を引く。区画内には沈線描出の半円状区画に三叉文を組合わせたもの、三叉文、渦巻文、結節沈線が認められるが、全体的に隙間が多く粗雑である。文様帯下端は隆帯で区画している。胴下半部は地文のみで、単節RLを縦位に施文している。残存率60%。現存高31.5㎝、口径17.5㎝、器厚0.9～1.2㎝。

６も円筒形土器であるが、文様帯を持たない。器形は、ほぼ垂直に立ち上がり、口唇部はやや内傾する。器面は地文のみで、０段多条の単節RLが密に斜位施文されている。残存率は20%。現存高29.7㎝、口径推定14.8㎝、器厚0.6～1.0㎝を測る。

７はキャリパー形の小型深鉢である。口縁部は緩やかに内湾し、頸部で括れる。胴部は短躯で、やや膨らむ器形を呈する。口縁部文様帯は幅広で、頸部で隆帯により区画され、口唇部から垂下する隆帯により３単位に分割されると考えられる。区画内にはＳ字状文類似文、上下対弧文をそれぞれ隆帯で作出している。これらは１本隆帯で作られており、加曽利ＥⅠ式の手法とは異なる。頸部隆帯の一部には刻目が施されている。隆帯脇にはくっきりとした単沈線が伴う。なお、隆帯貼り付けは地文施文後に行われる。地文は０段多条の単節RLで、口縁部は斜位、胴部には縦位に施される。残存率は40%。器高19.2㎝、口径推定12.4㎝、底径推定9.4㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

８は中峠式の類型で、台耕地34住型深鉢と考えられる。住居跡覆土内から散乱した状態で出土しており、全体形は推定復元である。口縁部は外反する幅広の無文帯で、口唇部には連鎖状隆帯を巡らしている。口頸部は球形を呈し、主文様が作出されている。上端は沈線、下端は刻目加飾の隆帯で区画される。胴部は円筒形を呈する。口頸部文様は大柄な作りで、反転渦巻文を推定２単位配し、渦巻文間を太い隆帯で連結する。渦巻文周辺には交互刺突文、連結隆帯上には太い背割沈線を引く。また、隆帯脇には単沈線を伴う。地文は０段多条の単節RL斜位施文で、文様作出前になされている。残存率30%。推定器高41.9㎝、口径推定27.4㎝、底径14.0㎝、器厚0.8～1.3㎝を測る。

９は口縁部が内湾する幅広の無文帯で、胴部は若干開く円筒形を呈する。横帯文土器の変形と思われる。口唇部は内側に若干肥厚する。口縁部には、上端が曲り小突起状を呈する垂下隆帯を２本一組で４単位置



第54図　第７号住居跡出土土器（３）

く。隆帯は頸部区画隆帯に接続する。胴部文様は３帯構成を採るが、中位帯は無文となっている。上位帯は波状隆帯を基幹とする。波頂、波底部のほとんどは上下端の区画隆帯に接合せず、区画意識が低いものと思われる。波頂部は８単位配す。空間充填にはバリエーションがあるが、渦巻文、三叉文、交互刺突文、列点の組合せで行われている。下位帯は上下に隆帯を巡らし、隆帯の直線的な上下動により三角区画を14単位作出する。区画内は充填意識が乏しく、三叉文のみか空白となっている。隆帯上には刻目と部分的に交互刺突文を加飾し、隆帯脇には単沈線を引く。ただし、上位帯の空間の一部は複沈線を伴い、パネル文手法の残影が認められる。胴下半部は無文である。残存率は90%。器高42.2㎝、口径26.4㎝、底径11.8㎝、器厚0.9～1.5㎝を測る。

11は多喜窪タイプの胴下半部である。胴部には地文単節 RL を縦位施文するが、１箇所のみ釣針状の突帯を無文で残し、突帯脇には地文施文後に単沈線を引く。当該文様は多喜窪重文タイプに多く見られる垂下渦巻文の簡略形と見ることができよう。底部は算盤玉状に屈曲する。残存率は、図化部分で80%。現存高15.4㎝、底径9.2㎝、器厚0.9～1.3㎝を測る。

10は口縁部が内湾する無文帯で、頸部が括れ、胴部が球状に張る器形を呈する小型深鉢である。口縁部には２箇所の対面する把手を配し、上部が円形で下端が眼鏡状となるものと考えられる。胴部文様は、上下端ともに隆帯で区画される。把手、隆帯上には粗い刻目、隆帯脇には単沈線を引く。文様は、パネル文手法による区画文と反転渦巻文を推定３単位配する。空間には縦位集合沈線、三叉文、刻目を充填する。胴下半部は無文である。残存率60%。現存高25.6㎝、口径12.4㎝、底径7.9㎝、器厚1.0～1.5㎝を測る。

12は破片からの復元実測で、褶曲文土器である。口縁部は強く内屈する器形を呈している。口唇部には連鎖状隆帯が付く。梯子状の区画帯を推定４単位配し、文様を分割するものと思われる。文様は、隆帯貼り付けにより作出されている。褶曲文は単位が不明確で、多分に崩れた様相を呈しており、加曽利ＥⅠ式前半段階より新しいものと考えられる。現存高7.0㎝、口径推定19.4㎝、器厚0.9～1.0㎝を測る。

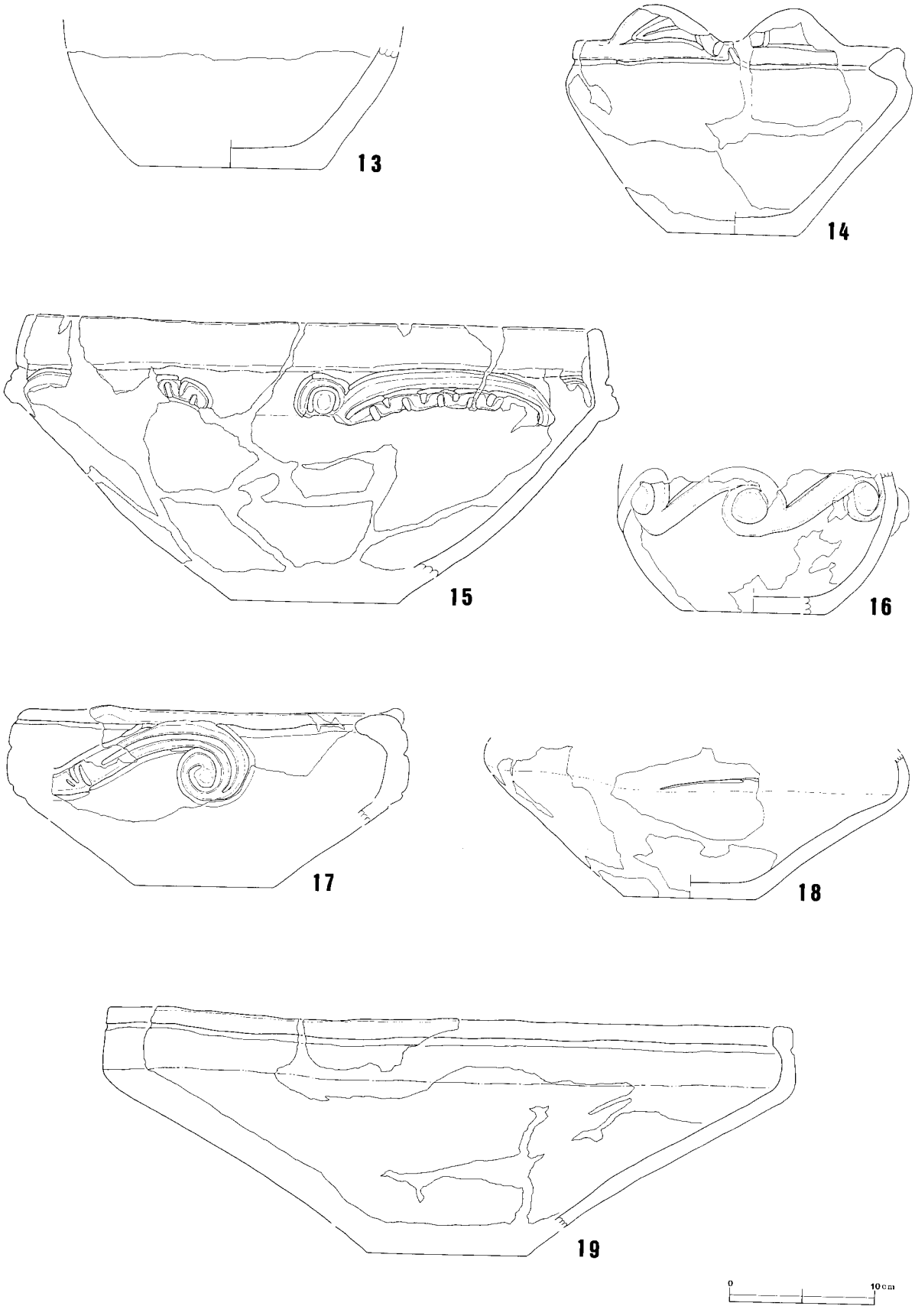
13は大型深鉢の底部で、地文は持たない。現存高8.2㎝、底径12.5㎝、器厚1.6～2.0㎝を測る。

14～24は鉢及び浅鉢であるが、全体的に残存率が低い。14は鉢形の器形を呈する。胴部は直線的に外反して立ち上がり、口縁部で強く内屈する。口唇部には段差があり、内面は断面三角形に突出する。２箇所の耳状突起が残存する。突起外面には窪み状の区画を設け、区画内に三叉文を置く。両突起間には交互刺突が加えられる。残存率40%。現存高15.3㎝、口径推定17.8㎝、底径8.8㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

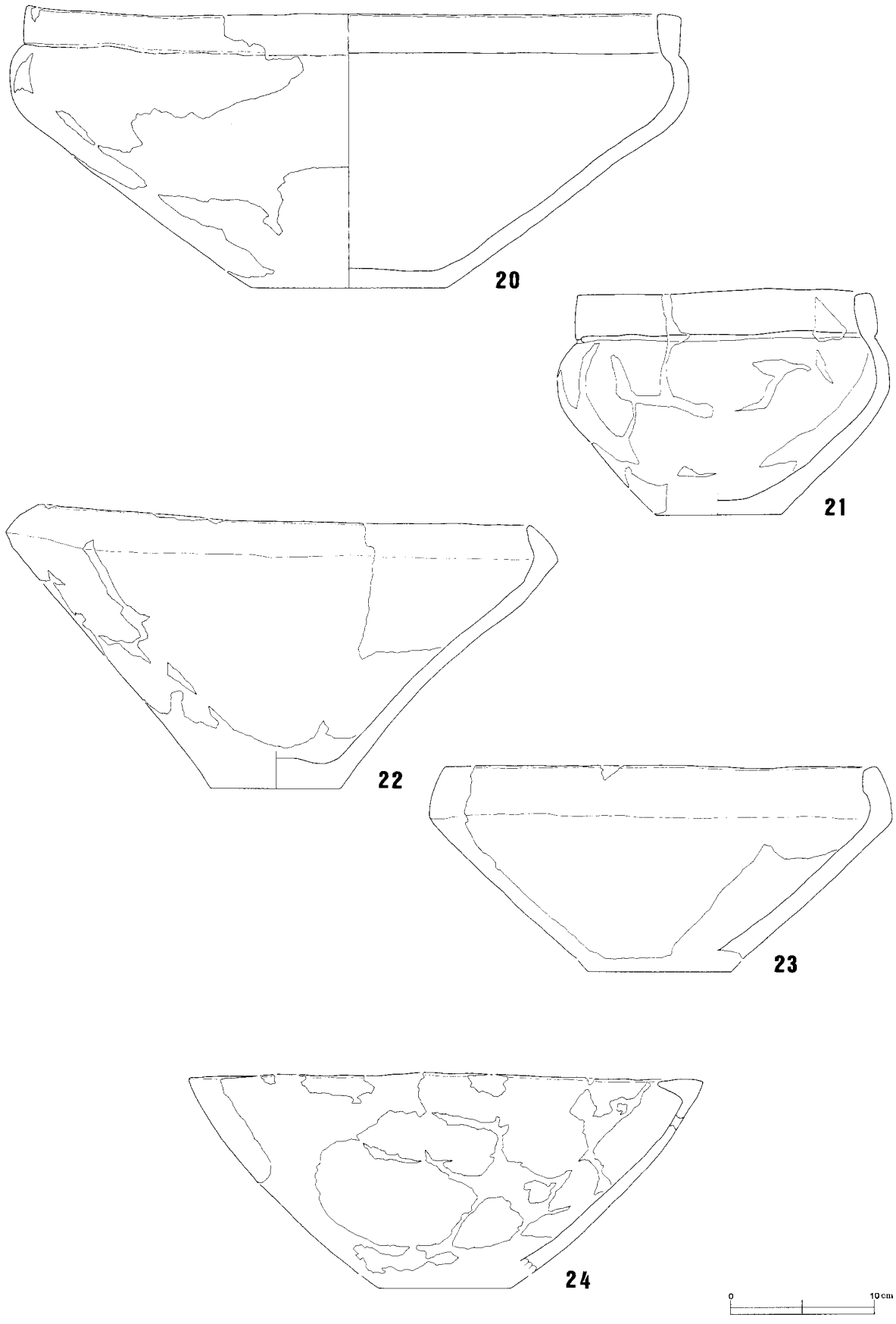
15は大型の浅鉢である。胴部はわずかに内湾しつつ立ち上がり、上位でくの字に屈曲する。口縁部は若干内傾する。口縁部は無文帯で、直下に弧状文を隆帯で作出する。推定４単位。弧状文は先端に円形突起を付け、背割沈線で２本に上下分割する。隆帯には交互刺突文を加える。残存率60%。現存高17.5㎝、口径37.6㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

16は小型の鉢形土器である。口縁部を欠損する。胴部は内湾して立ち上がる。上位に背の低い隆帯で連続するＳ字文を、推定６～７単位作出している。Ｓ字の先端は渦巻きではなく、突起状を呈している。残存率は、図化部分で30%。現存高10.0㎝、底径推定9.8㎝、器厚0.8～1.2㎝を測る。

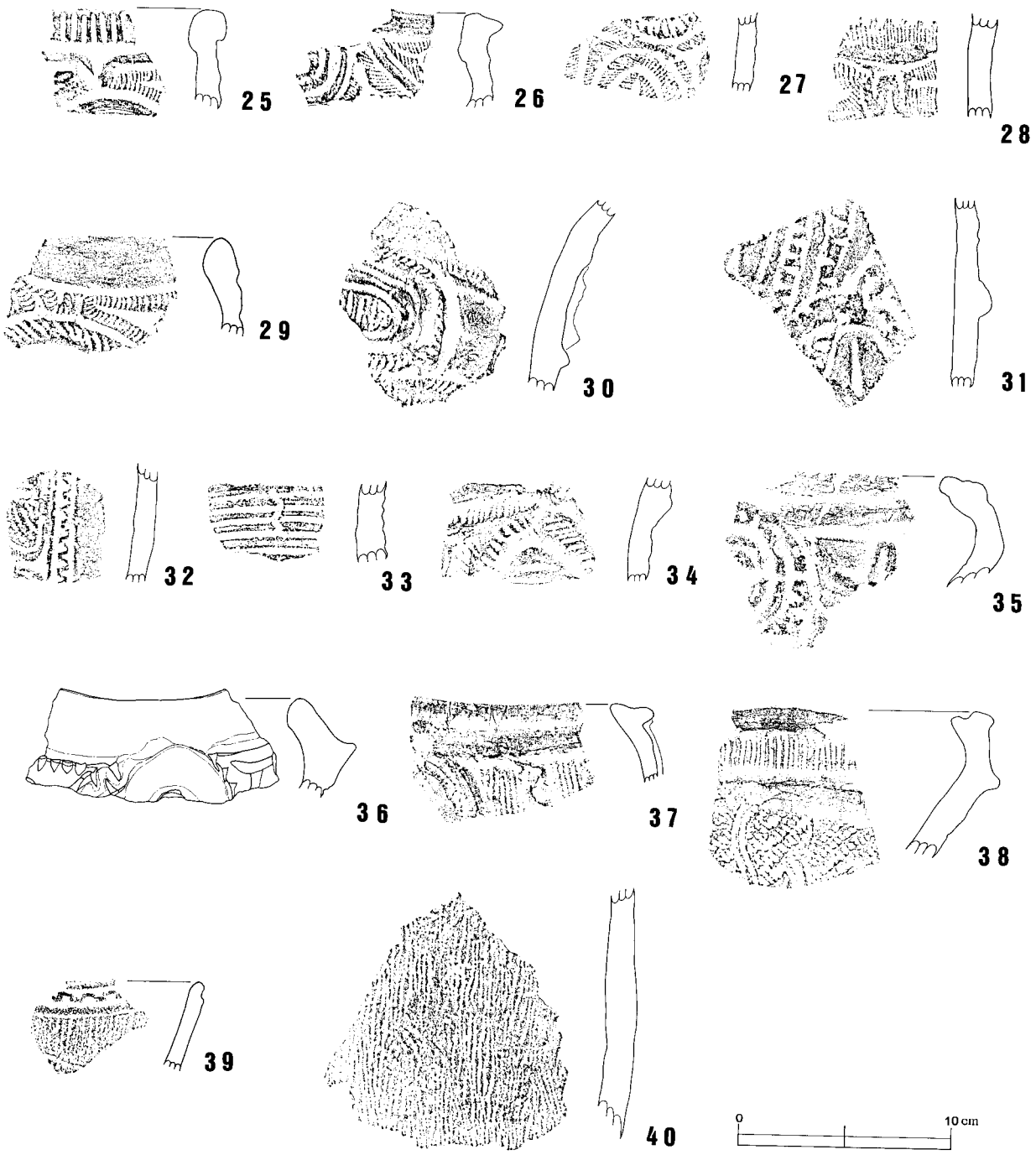
17は小型の浅鉢で、下半部を欠く。底部から直線的に外反して立ち上がり、上位で直立し、口縁部は内屈する。口唇部には幅広の平坦面を有し、推定４箇所の小突起を配する。文様は大柄なＳ字文で、推定３単位作出する。先端は渦を巻き、背割沈線を入れ、中間に交互刺突を施している。残存率は、図化部分で50%。現存高7.9㎝、口径推定20.4㎝、器厚1.0～1.6㎝を測る。



第55図　第７号住居跡出土土器（４）



第56図　第７号住居跡出土土器（５）



第57図　第７号住居跡出土土器（６）

18は口縁部を欠損する。胴部は、やや反り気味に立ち上がり、上位で内湾する。文様は一部に沈線を残すのみで、モチーフ、単位等は不明である。内面の荒れが著しい。残存率は、図化部分で60%。現存高10.3㎝、底径9.0㎝、器厚0.6～1.2㎝を測る。

19は口径に比して背の低い浅鉢である。器形は、底部から直線的に外反して立ち上がり、上位から口縁部はほぼ直立する。口唇部は肥厚し、直下に幅広の沈線を巡らしている。内外面ともに丁寧に磨かれているが、文様は持たない。残存率30%。現存高14.3㎝、口径推定44.4㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

20は胴部が直線的に外反し、上位で丸みを帯びて内湾する。口縁部は厚手で直立する。１箇所のみ、内

外面より孔が穿たれているが、補修孔か否かは不明である。残存率40%。器高19.6㎝、口径推定43.2㎝、底径13.4㎝、器厚0.9～1.6㎝を測る。

21は、やや小型の鉢形土器である。胴部は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は若干内傾する。口縁部、胴部の境目に沈線を巡らす他は無文である。残存率は50%。器高15.7㎝、口径18.2㎝、底径8.6㎝、器厚0.6～1.8㎝を測る。

22は、やや反り気味に立ち上がる器形の浅鉢で、背が高い。口縁部でくの字に屈曲し、平縁の口唇部に至る。口唇部の断面形は三角形を呈する。器面全体は無文である。残存率60%。器高19.6㎝、口径33.8㎝、底径推定9.0㎝。器厚は0.9～1.2㎝であるが、底部は厚手で2.1㎝を測る。

23は大型破片からの復元実測である。厚手の器壁で、直線的に外反し、口縁部で緩く内屈する。無文。残存率30%。現存高13.4㎝、口径推定28.2㎝、器厚1.2～1.4㎝を測る。

24は胴部がわずかに内湾して立ち上がり、口縁部でくの字に折れる。口唇部は内面に突出し、幅広の平坦面となっている。1箇所のみ、内外面より孔が穿たれている。補修孔か否かは不明である。残存率30%。現存高13.9㎝、口径推定29.4㎝、器厚0.6～1.1㎝を測る。

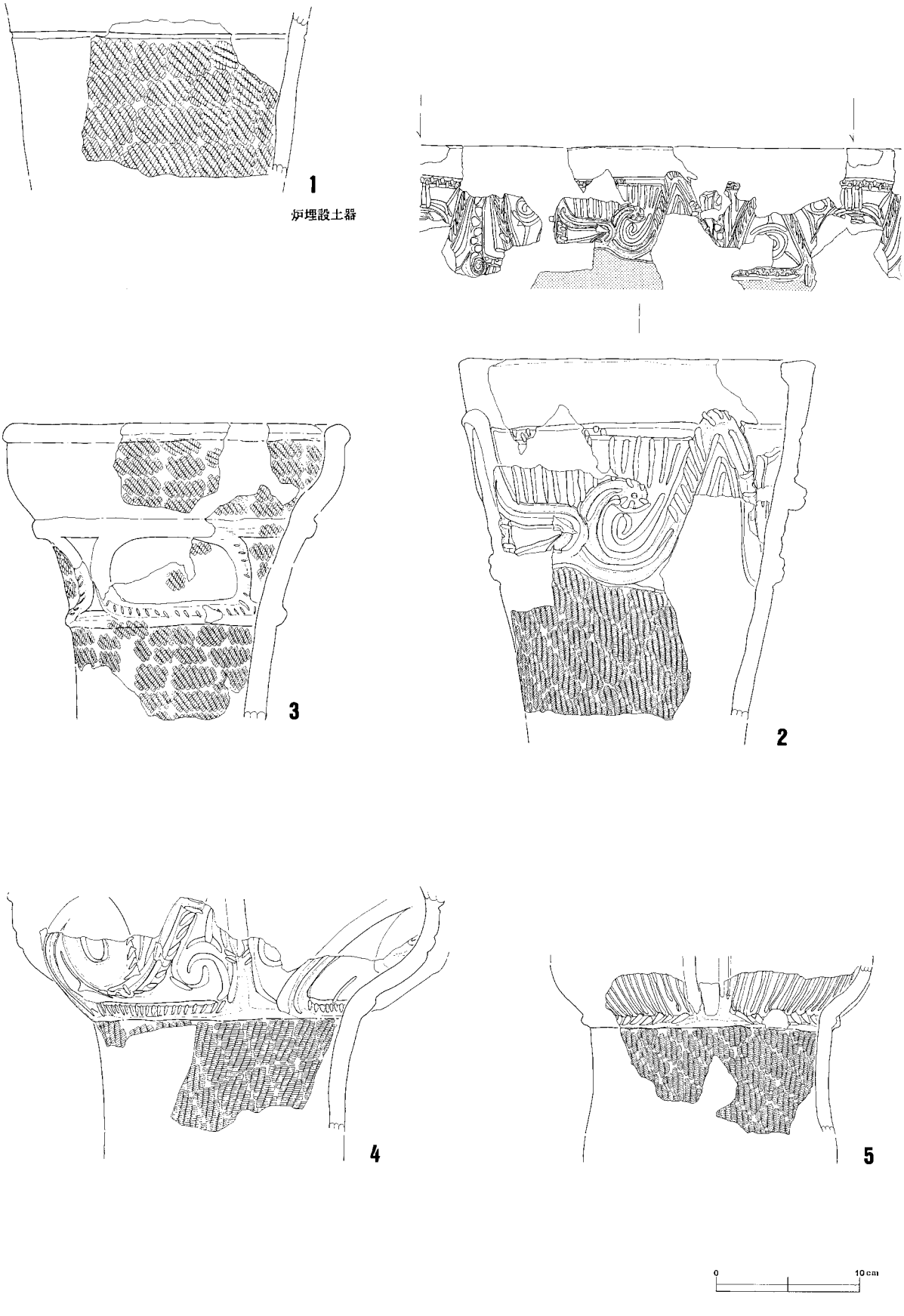
25～40は覆土各層から出土したものであるが、多時期の混入が認められる。25～29は勝坂式土器で、区画内充填手法に細かい爪形文が認められ、三叉文の作りも丁寧である。30は頸部横帯区画文土器で、楕円区画の一部を残す。胴下半部には撚糸 l が施されている。31・34は円筒形土器の胴部破片と思われる。31は隆帯上に背割沈線が入り、縦位の交互刺突文が充填されている。34は、隆帯上に粗い爪形文を綾杉状に施している。32は縦位区画文土器と考えられる。縦位の交互刺突文と区画内充填に結節沈線を用いる。33は沈線を重層的に巡らし、蛇行沈線を垂下させる。35・36は多喜窪タイプの口縁部破片である。強く内屈する器形が特徴的である。35は渦巻文の一部が残存し、隆帯の一部に背割沈線が見られる。36には幅広の口縁部無文帯があり、主文様の頂部が小突起状を呈する。隆帯上には交互刺突文を加飾する。37・38は加曽利ＥⅠ式土器の口縁部破片である。37はＳ字文の渦巻きの一部を残す。地文は撚糸 l の縦位施文。38は口縁部が、くの字に内傾する。口縁部文様は区画文の一部と考えられ、縦位集合沈線を施している。胴部は地文に単節 RL を縦位施文し、半截竹管の内皮面で平行沈線を引く。39は連弧文土器の口縁部破片である。口唇部には２条の沈線を巡らし、交互刺突を追加する。下端には、連弧文の一部が認められる。地文は撚糸 l である。40は深鉢の胴部破片で撚糸 r を乱雑に施している。

第８号住居跡出土土器（第58～62図）

本住居跡からは多量の土器が出土しており、復元、図化し得た土器は27個体を数える。ただし、いずれも散乱したような状況で出ており、顕著なまとまりは認められなかった。大半は勝坂Ⅲ式後半のものであるが、加曽利ＥⅠ式前半段階の土器群が伴っている。

１は北側の炉に埋設されていた土器である。円筒形の器形を呈し、上位に巡らされた沈線は口縁部無文帯下端と考えられる。胴部には単節 RL を横位に施文するのみで、他に文様は認められない。図化部分で30%残存。現存高11.0㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

２は口縁部に向かって若干開く器形の円筒形土器である。口縁部は幅広の無文帯で、口唇部は内面に肥厚する。文様帯は上半部に展開し、上端は２本沈線と交互刺突文、下端は部分的に途切れるが、隆帯で区画されている。主文様は隆帯の上下動による三角区画で、推定８単位配する。ただし、２単位は結合して四辺形の単位を形成している。隆帯脇には単沈線を施し、隆帯上には背割沈線、交互刺突文、綾杉文、斜



第58図　第８号住居跡出土土器（１）

行短沈線を加飾する。区画内は玉抱き三叉文、集合沈線を充填するが、２単位のみ交互押圧を加えた垂下隆帯で左右分割する。下半部には０段多条の単節 RL を斜位に施文する。残存率は、図化部分で60%。現存高25.3㎝、口径19.4㎝、器厚1.2～1.5㎝を測る。

３は頸部横帯区画文土器である。胴部は外反しつつ立ち上がり、口縁部は内湾する。口唇部は、外側に肥厚する。頸部楕円区画は上下端を隆帯で区画し、推定５単位配するが、１単位のみ単位間の「工」字部分を省略している。隆帯上には刻目を加飾するが、上端隆帯の残存部分には認められない。また、隆帯脇には沈線を伴わない。口縁部、楕円区画内及び一部の隆帯上には、例外的に地文が施されている。地文は単節 RL で、胴下半部とともに横位施文されている。残存率は、図化部分で40%。現存高20.6㎝、口径推定20.8㎝。厚手の土器で、器厚は1.4～1.6㎝を測る。

４・５は多喜窪タイプと考えられ、いずれも接合破片からの復元実測である。４は口縁部が大きく開き、口唇部が内屈する。胴部は下半部は不明であるが、上位はほぼ円筒形を呈する。口縁部は４単位の波状をなすものと思われ、波頂部よりの垂下隆帯で文様帯を分割する。各区画内には反転渦巻文を配するが、中央部は渦巻文ではなく円環状を呈している。空間には三叉文、反転沈線文が認められる。区画隆帯、主文様隆帯上には刻目、交互刺突、半截竹管の刺突が加えられている。胴部には０段多条の単節 RL を、やや斜位に施している。残存率は、図化部分で25%。現存高17.1㎝、器厚1.1～1.3㎝を測る。

５は口縁部が内湾し、胴部は下方に向けて４よりやや開く器形を呈する。口縁部文様は、２本組の垂下隆帯で４単位分割されるものと思われる。区画内には縦位集合沈線を密に充填する。文様帯下端隆帯には竹管による斜位の連続刺突を加飾する。残存率、図化部分で25%。現存高11.7㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

６は頸部が緩く屈曲し、口縁部が直立する器形の深鉢である。胴部は、下部でやや径を減じるも、大略円筒形を呈する。口縁部の文様構成は、２本組の連鎖状垂下隆帯により４単位分割し、区画内上半部に縦位集合沈線を施すなど５に類似する。また、集合沈線間には三角押文を加えている。垂下隆帯頂部は、突起となっている。文様帯下端隆帯には、半截竹管の斜位刺突を加飾する。胴部は地文のみで、撚糸 l を斜位施文している。残存率は、図化部分で25%。現存高21.3㎝、口径推定23.4㎝、器厚1.1～1.4㎝を測る。

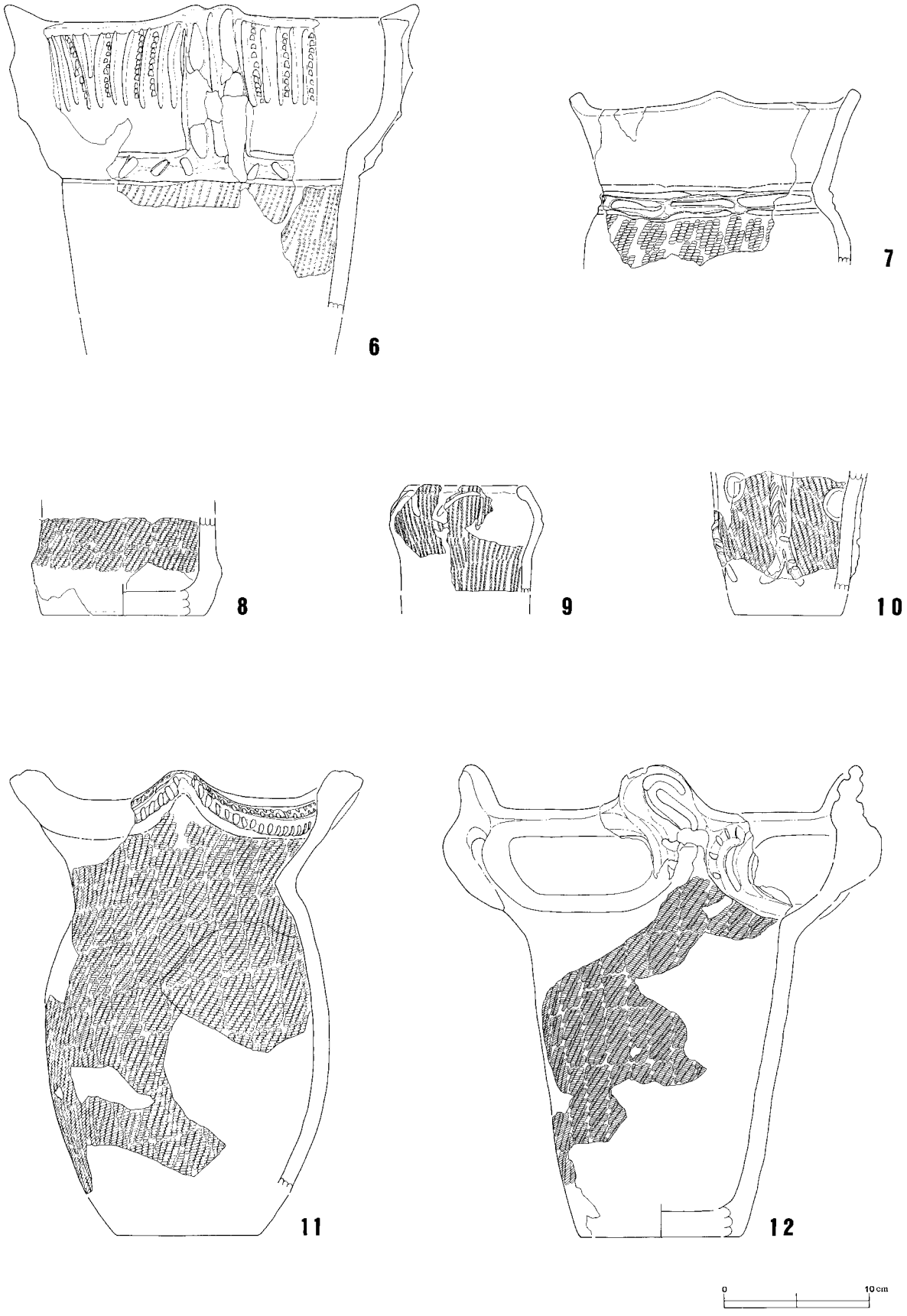
７は大型破片からの推定復元で、４単位波状口縁の土器である。口縁部は、外反する幅広の無文帯である。頸部には連鎖状隆帯を巡らすが、作りは粗い。隆帯上下には沈線を引く。胴部は、上位で膨らむと思われる。地文は単節 RL で、縦位に施文している。口径推定18.8㎝、器厚0.6～1.2㎝を測る。

８は深鉢の底部で、図化部分で90%残存する。所謂屈曲底であるが、屈曲部はかなり下位に位置する。地文は単節 RL で、縦位施文である。現存高6.9㎝、底径推定11.0㎝、器厚1.0～1.9㎝を測る。

９は小型土器である。口縁部は内湾し、胴部は円筒形を呈すると考えられる。口唇部は内傾し、内側に肥厚する。文様は地文撚糸 l を縦位、斜位に施文後、口唇部直下に逆 U 字文を沈線で施す。単位不明。残存率は、図化部分で40%。現存高7.4㎝、口径推定7.0㎝、器厚0.5～0.7㎝を測る。

10は小型土器の胴下半部で、残存部分は円筒形を呈する。底部を欠く。綾杉文を加飾し末端が Y 字状の隆帯を、４本垂下させている。綾杉文は１本のみ上下逆に施される。隆帯間には円環文を沈線で描出し内側の地文を磨り消すが、２単位のみ認められ、他の単位に付されたかどうかは不明である。地文は０段多条の単節 RL で、斜位に施文している。残存率は、図化部分で90%。現存高8.2㎝、器厚0.9～1.0㎝。

11は東関東系の土器で、口縁部は４単位の波状を呈する。器形は強く括れた頸部から口縁部にかけて直線的に外反して立ち上がり、胴部中位で膨らむ。同系統の土器の中では、比較的長胴である。口唇部は内



第59図　第８号住居跡出土土器（２）

傾し、波頂部は肥厚する。文様は口唇部のみに施され、以下は地文のみである。口唇部には下方に張り出す形で突帯が貼り付けられ、中間に交互刺突文、突帯上には刻目が施されている。地文は単節 RL を縦位、斜位に施文する。残存率25%。現存高29.2㎝、口径推定18.0㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。なお、胴部の一部は、第５号住居跡の覆土より出土したものが接合した。

12は接合した破片から推定復元したものである。キャリパー形の器形を呈する。口縁部には推定４単位の把手を配し、把手間には大柄な楕円区画を置く。区画内の充填手法は不明である。残存する把手には、沈線により E 字状文を引き、区画隆帯上の一部に刻目が認められる。頸部以下には地文が施される。０段多条の単節 RL の縦位施文であるが、条の太さが異なり、３本の内１本のみ細いものを使用したと考えられる。現存高32.7㎝、口径推定23.2㎝、底径推定10.8㎝、器厚1.1～1.3㎝を測る。

13は２単位の緩い波状口縁を呈する長胴の深鉢である。口縁部は、緩やかに外反して立ち上がる。口唇部は内側に屈曲する。胴上位で括れるが、弱い。胴下半部の形状は、第２・５号住居跡出土土器（第39図20・第48図９）に類似する。口唇部には、幅広の沈線を巡らしている。文様は地文のみであるが、胴下半部には施されない。地文は単節 RL の縦位施文。残存率25%。器高38.6㎝、口径推定25.2㎝、底径12.4㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

14は、やや外反しつつ直線的に立ち上がる小型円筒形土器である。底部を欠損する。口縁部は幅の狭い無文帯で、下端には沈線を巡らしている。胴部には撚糸 l を縦位、斜位に施している。残存率50%。現存高19.4㎝、口径13.8㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

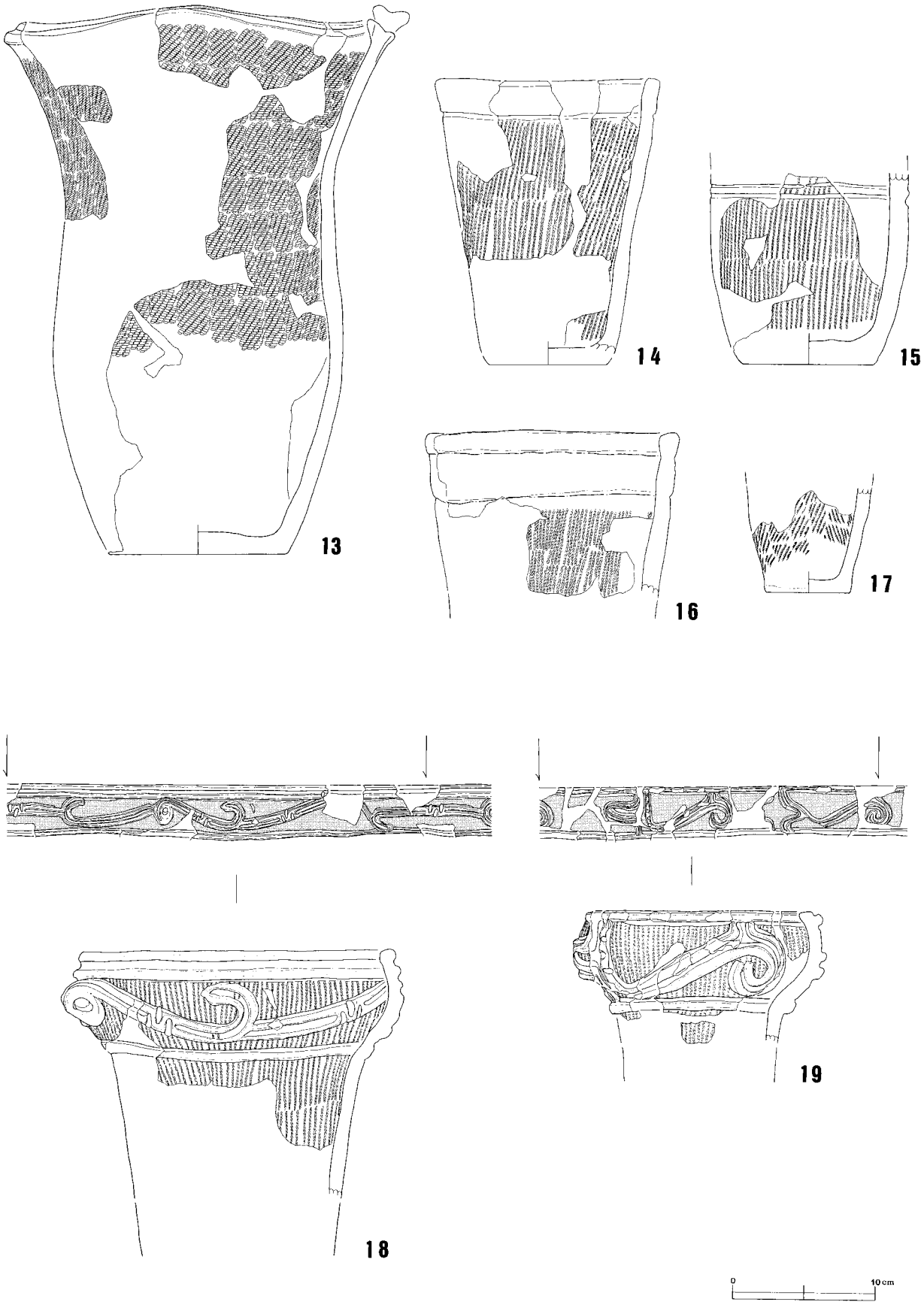
15は深鉢の胴下半部で、厚手の土器である。残存部分は、ほぼ円筒形を呈している。地文に撚糸 l を縦位施文している。残存部上位には２本沈線を巡らすようであるが、詳細は不明である。残存率は、図化部分で70%。現存高13.6㎝、底径9.0㎝、器厚1.3～1.8㎝を測る。

16は円筒形土器で、口縁部から胴部上半部が残存する。器形はわずかに外反して、直線的に立ち上がる。口縁部は幅広の無文帯であるが、口唇部直下と胴部地文部の境目に段差を持つ。ただし、明確な区画線は引かれていない。胴部には撚糸 l を縦位施文する。残存率は、図化部分で20%。現存高11.7㎝、口径推定15.0㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

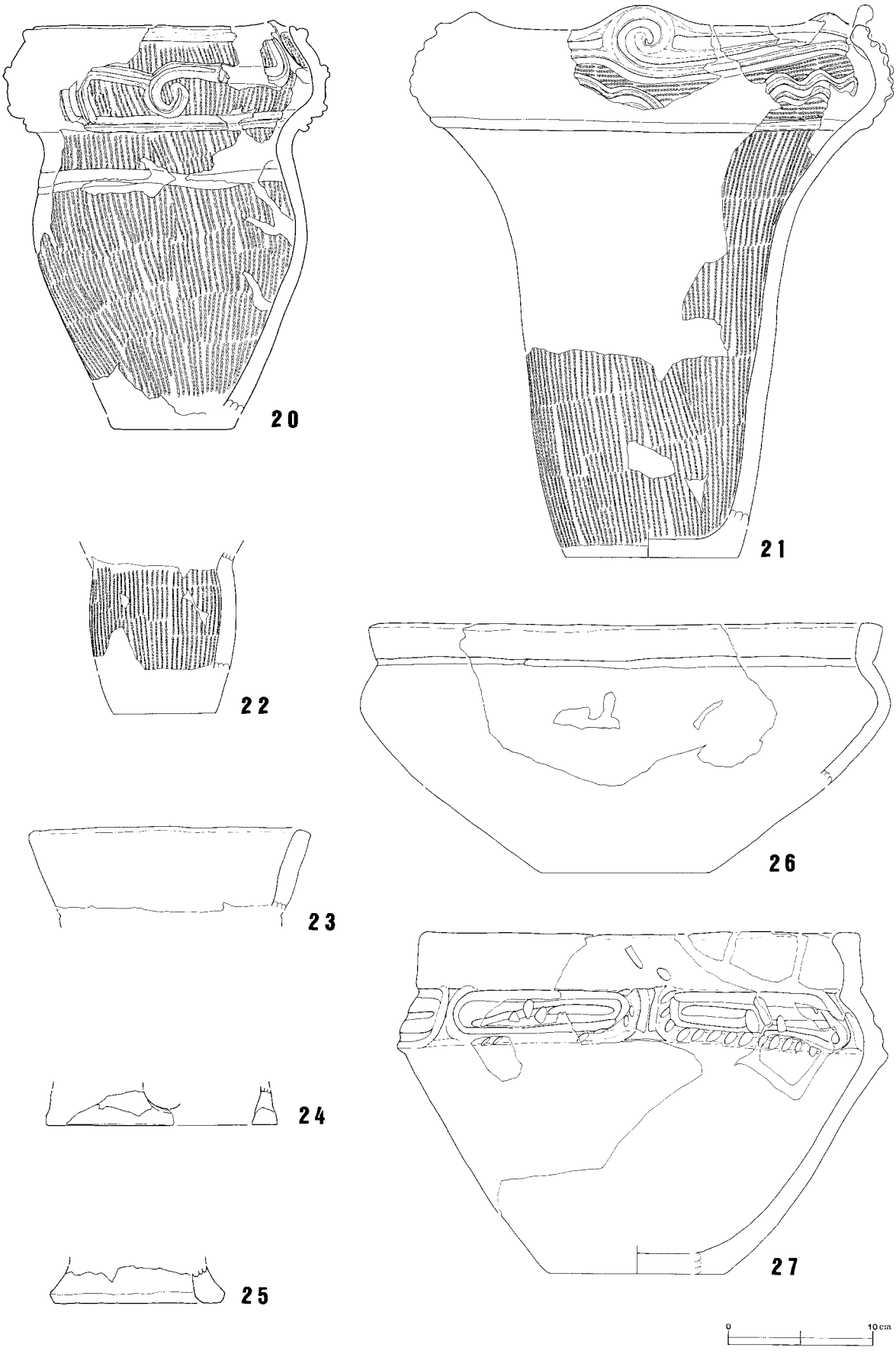
17は小型土器の胴下半部である。底部は端部で、やや外側に張り出す。地文は無節 R で、縦位、横位に施文している。図化部分でほぼ全周する。現存高9.5㎝、底径5.7㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

18～22は加曽利 E Ⅰ式土器である。いずれも、他の土器群と混在した形で破片で出土している。18は口縁部が内湾するキャリパー形の器形を呈し、胴部はわずかに外反して立ち上がる。ただし、口縁部の内湾の度合いは若干弱いようである。口唇部直下に太い沈線を巡らす。文様帯上下端は隆帯で区画している。口縁部文様は２本隆帯により、横 S 字文、横 J 字文とそれを連結する部位に分かれ、４単位構成を採っている。横 S 字文と横 J 字文の連結部は、S 字の片側が突起状を呈する。隆帯脇沈線には不明確な部分が認められる。隆帯間は背割沈線が施されており、２本の隆帯は別個に貼り付けられたものではない。背割沈線内の一部には地文が認められる。隆帯文中、３単位の中間に交互刺突が加えられている。地文は撚糸 l の縦位で、口縁部、胴部ともに共通する。残存率は70%。現存高17.6㎝、口径19.2㎝、器厚0.7～1.1㎝。

19は比較的小型の深鉢で、口縁部文様帯部分と胴部の一部を残す。表面は高熱により発泡したような痕跡が顕著で、２次的な被熱、焼成時の失敗が想定される。器形は口縁部が強く内湾し、胴部は残存部分から円筒形に近いものと考えられる。口唇部は平坦で、沈線が巡らされている。口縁部文様帯は幅広で頸部



第60図　第８号住居跡出土土器（３）



第61図　第８号住居跡出土土器（４）

まで至り、下端は隆帯を巡らして区画する。文様は２本隆帯によるもので、十字文、横凸字文にＪ字文を組合せたもので、２単位作出されている。Ｊ字文先端は渦を巻き、上部は上端区画隆帯に結合する。横凸字文の垂下隆帯部分には交互刺突文が加飾される。隆帯脇沈線は不明確な部分が多い。地文は撚糸ｌで、隆帯貼り付け前に施されている。残存率は70％。現存高9.3㎝、口径13.2㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

20は口縁部の一部と胴部の大半を残す。口縁部が強く内湾し、胴部上位に膨らみを持つ。大木系の器形に類似する。口縁部文様は上下端を背割沈線を入れた隆帯で区画し、同様の隆帯で渦巻文と横Ｌ字の枠状文を貼り付ける。推定４単位。渦巻き部分を除けば、クランク文に近い構成を採っている様にも見える。また、文様単位中間には交互刺突を加える。隆帯脇沈線は一部のみ引かれる。頸部下部には細沈線を引き内側を磨り消した横位の磨り消し帯を巡らす。地文は撚糸ｌの縦位施文で、隆帯貼り付け前に施されている。残存率60％。器高27.4㎝、口径推定17.6㎝、底径推定7.4㎝、器厚0.8～1.1㎝を測る。

21は中型の深鉢である。胴部は低位が円筒形に近く、上位から頸部にかけて外反しつつ立ち上がる。口縁部は強く内湾し、断面形は多喜窪タイプに似る。口唇部には渦巻文を伴う大突起と無文の小突起を交互配置するものと思われる。口縁部の主文様は２本隆帯で作出されるが、口縁部の残存率が低いため構成については不明確な点が多い。渦巻文と波状文の一部が残存する。２本隆帯は背割沈線による分割ではなく、それぞれに貼り付けられたような様相を呈する。隆帯間と脇には、くっきりとした沈線を引く。地文は撚糸ｌで、隆帯貼り付け前に口縁部は横位、胴部は縦位施文している。残存率50％。現存高37.5㎝、口径推定27.6㎝、器厚0.8～1.4㎝を測る。

22は小型深鉢の胴部である。胴部は緩い膨らみを持ち、頸部から上位は外反する。地文に撚糸ｌを施すが、頸部には認められない。残存率は40％。現存高8.2㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

23は深鉢の口縁部で、無文である。外反する器形で、断面形は板状を呈している。残存率50％。現存高5.9㎝、口径17.8㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

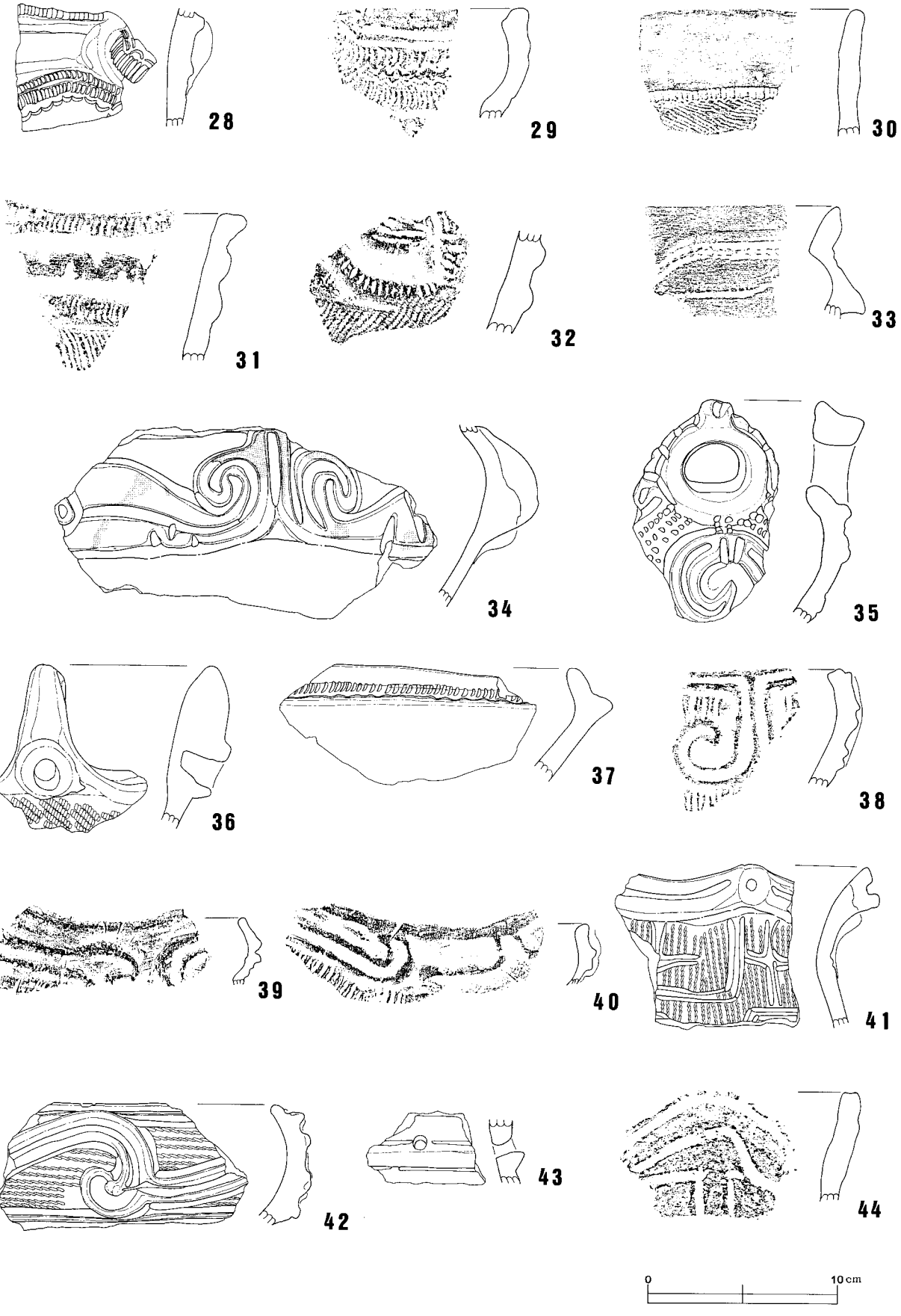
24は器台で、破片からの復元実測したものである。孔の一部が残存する。無文。

25は台付土器の台部で、無文である。残存率40％。底径推定11.3㎝。

26は浅鉢で、破片からの推定復元である。胴部はやや内湾気味に立ち上がり、上位で内傾する。口縁部はやや外反する。頸部には太い沈線を巡らす他は無文である。内外ともに丁寧な磨きが施されている。現存高11.2㎝、口径推定32.6㎝、器厚0.8～1.6㎝を測る。

27は鉢形土器である。胴部は、わずかに内湾気味に立ち上がり、上位で緩く内傾する。口縁部は幅の狭い無文帯で、ほぼ直立している。口唇部は内側に肥厚する。文様は楕円区画を基調とするもので、上端を口縁部無文帯との段差、側面と下端を隆帯で作出する。隆帯上には斜位の大柄な刻目を加飾する。区画内は隆帯脇に沈線を引き、中央に横位沈線を入れ交互刺突を付す。残存率50％。器高23.6㎝、口径推定26.6㎝、底径11.8㎝、器厚0.9～1.5㎝を測る。

28は抽象文土器の胴部破片で、上位に位置する楕円区画の一部を残す。区画側面は肥厚する。隆帯脇には爪形文を伴い、半截竹管の連続刺突で縁取る。29は深鉢の口縁部破片である。隆帯脇に単沈線を引き、区画内に爪形文を施している。30は円筒形土器である。口縁部は直立する無文帯で、無文帯直下に幅広の角押文を沿わせ、半截竹管の刺突を付す。地文は目の細かい単節ＲＬの斜位施文である。31は口縁部が若干開く器形の円筒形土器と考えられる。多段の隆帯を巡らし、口唇部と下部の隆帯上には爪形文、中位には交互刺突文を加える。地文は撚糸ｌである。33は阿玉台式土器の浅鉢で、頸部と口縁部はくの字に屈曲



第62図　第８号住居跡出土土器（５）

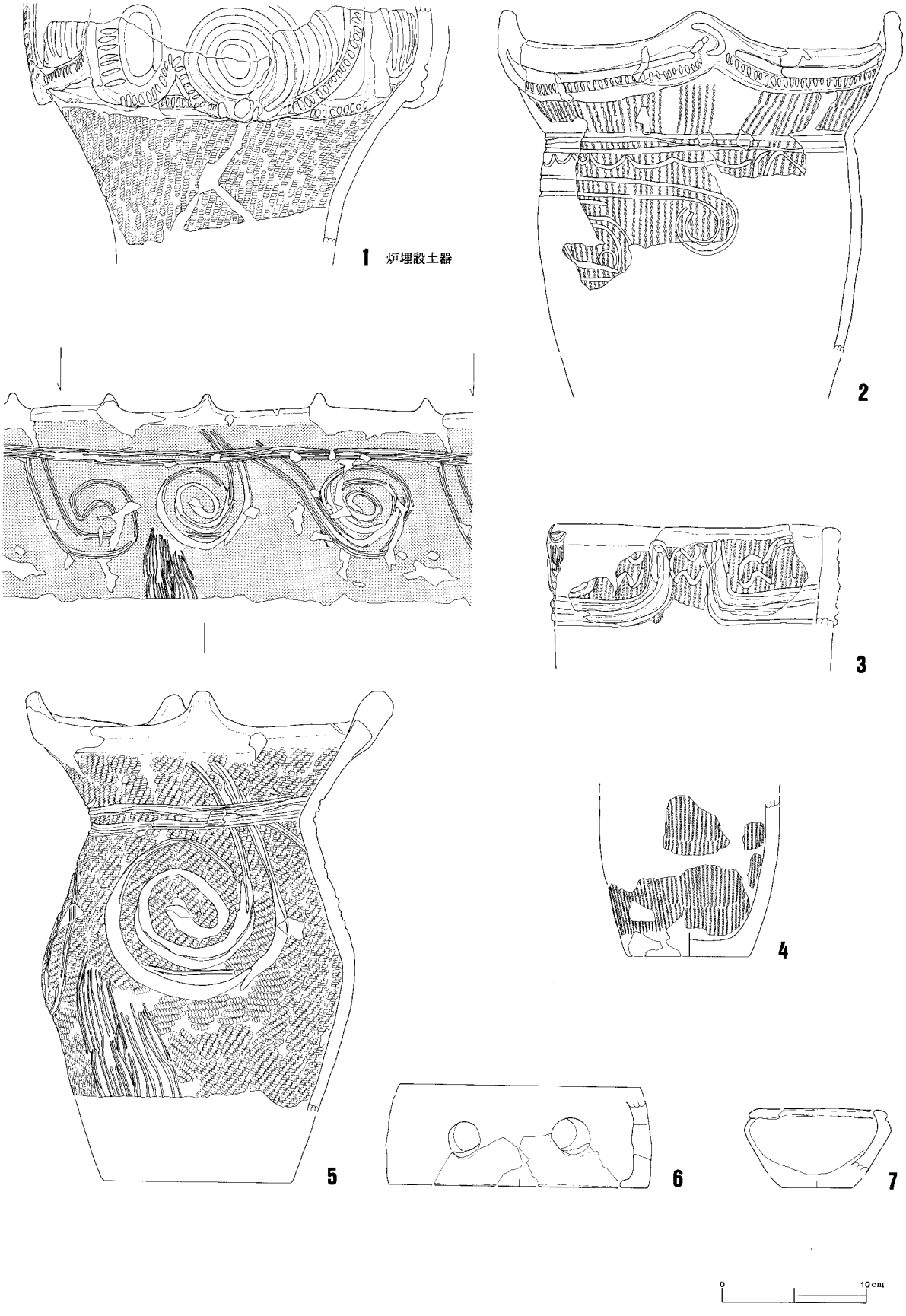
する。区画内に複列の角押文を施していることから、阿玉台Ⅱ式と思われる。胎土には多量の雲母を含有する。34は浅鉢の頸部破片である。赤色塗彩を一部に残している。沈線と半隆起帯で描出された横S字文を残す。S字末端の渦巻き対抗部分は大きく突出する。隆帯には部分的に交互刺突を加えている。胎土には雲母を含む。35は深鉢の把手で、円環状基部の端部に交互刺突を施している。口縁部文様は渦巻文あるいは横S字文の一部で、隆帯上には背割沈線、交互刺突、隆帯脇には部分的に単沈線を引く。空間には、竹管の連続刺突を充填している。36も深鉢の把手である。蛇体把手の簡略形であろう。下端には円孔を開けるが、貫通しない。地文は単節RLで、横位施文である。37は浅鉢の口縁部から頸部の破片である。第14号住居跡覆土から同一個体が出土している（第75図19）。口縁部の立ち上がりは幅が狭く、頸部は大きく突出する。口縁部には１条の幅広の角押文を施し、その直下に鋸歯状沈線を沿わせる。胎土に雲母を含有する。38～41は加曽利ＥⅠ式前半段階の土器群で、いずれも深鉢口縁部破片である。38は緩く内湾する口縁部で、２本隆帯の渦巻文を持つ。隆帯は別個に貼り付けられたような痕跡があり、背割状の沈線も深い。空間充填の縦位集合沈線は隆帯貼り付け後になされており、加曽利ＥⅠ式の手法とは若干異なる。39・40は同一個体であるが、接合しなかった。口縁部は強く内湾する。口縁部文様帯は幅が狭く、横S字文を２本隆帯で作出する。地文は撚糸lで縦位施文。ただし、口縁部文様帯部分には地文は施されていない。41は東関東系の土器で、口縁部は４単位波状を呈し強く外反する。波頂部は肥厚し孔を開ける。波頂部間には沈線を引く。胴部は地文撚糸lを施文後、半截竹管の平行沈線ではなく別個の２本沈線でクランク状文、十字状文を描いている。42は緩く内湾する器形を呈する。口縁部文様は横S字文を基調とし、横J字文を組み合わせるものと考えられる。文様は２本隆帯で作出されており、隆帯脇の沈線は明確である。地文は撚糸lの横位施文で、隆帯貼り付け前に施される。文様帯下端は隆帯を巡らして区画するが、直下は無文帯と考えられる。加曽利ＥⅠ式後半段階と考えられる。43は有孔鍔付土器の鍔部破片である。断面三角形の鍔の直上に孔を穿っている。44は４単位波状口縁の土器の口縁部破片で、後期称名寺式と思われる。無地の器面に沈線文を施すが、モチーフ、単位等は不明である。

第９号住居跡出土土器（第63・64図）

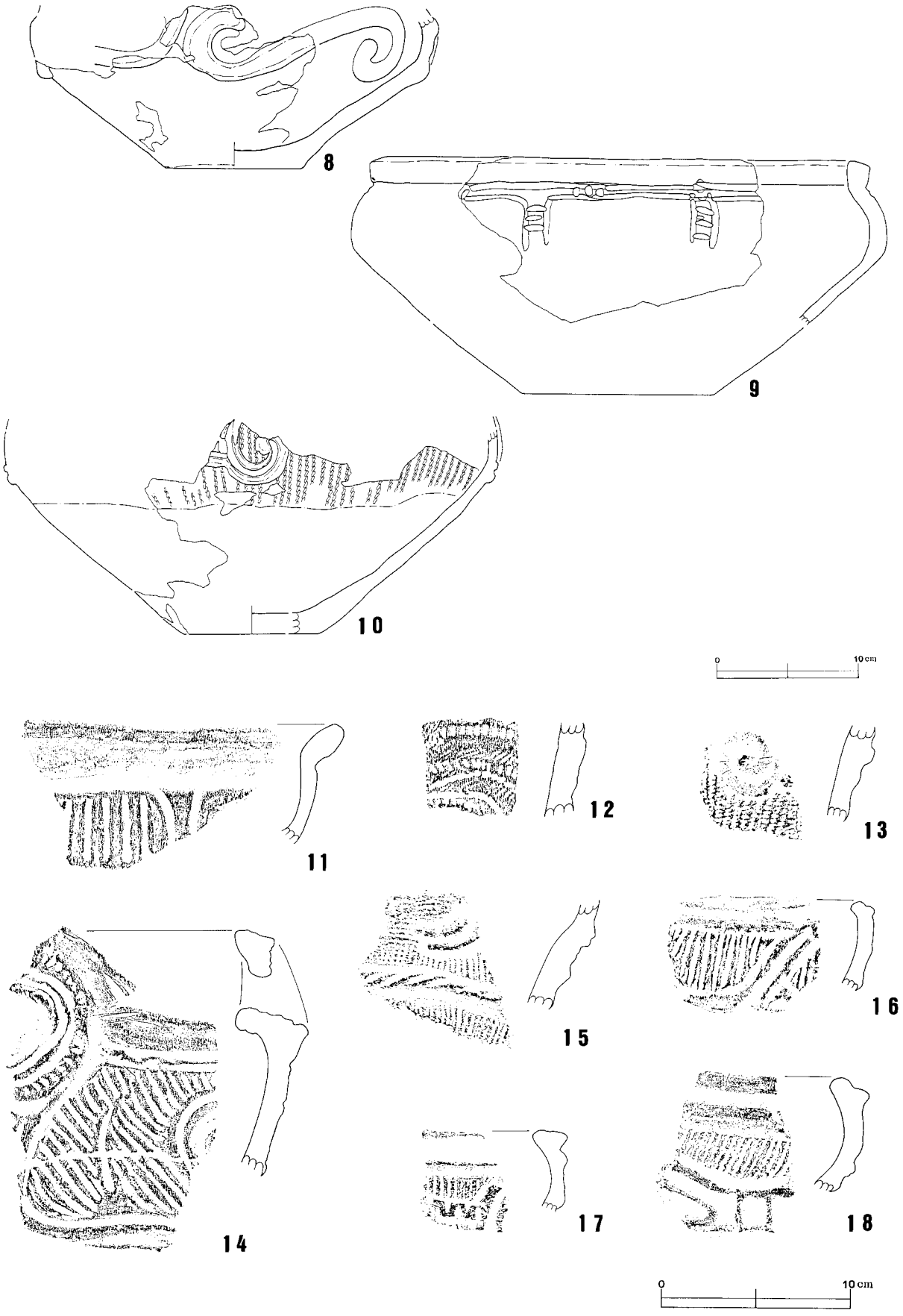
出土土器は全体的に少ないが、第21図に示したように炉跡直上から若干まとまった出土があった。復元・図化された土器は、炉埋設土器を含めて10個体である。時期は、勝坂Ⅲ式後半段階と考えられるが、覆土からはこれらに混じって加曽利ＥⅠ式前半段階の土器破片が多く出土している。

１は炉埋設土器である。多喜窪タイプの深鉢で、口縁部と胴部下半部を欠く。内面は被熱痕跡が顕著であばた状の剥離が目立つ。胴部は反るように立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。口縁部文様は反転する渦巻文を基調とするが、中央部は重円環文となっている。空間には縦位集合沈線を充填する。推定４単位。単位間は板状に突出するが、埋設時に炉縁石と干渉したためか、意図的に打ち欠いてある。円環文下部には交互刺突文、隆帯上には粗い刻目を施している。文様帯下端の区画線は、文様下端隆帯をそのまま使用し、明確な一線を引かない。胴部には、まばらに地文単節RLが斜位に施されるが、乾燥しかけた時点で施文されたためと考えられる。残存率は、図化部分で80%。現存高16.8㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

２は東関東系の器形を持つ土器で、破片からの推定復元である。胴部は樽状に膨らみ、頸部で括れた後、外反して立ち上がる。口縁部は、ほぼ直立する。口縁部は４単位の波状口縁を呈し、波頂部にはC字状の沈線文を置く。波頂間は弧状沈線で結び、その直下に刻目を施している。頸部には２～３条の沈線を巡らし、その下には波状沈線を引く。胴部は２本組の沈線文を描くが、横位の渦巻文が認められる他は、単



第63図　第９号住居跡出土土器（１）



第64図　第９号住居跡出土土器（２）

位、モチーフ等は不明である。地文は撚糸Ｌで、縦位、斜位に施されている。残存率は、図化部分で30%。現存高23.8㎝、口径推定25.6㎝、器厚0.6～1.3㎝を測る。

３は円筒形土器で、口縁部を40%残す。背割沈線を施した隆帯で、長方形状の区画を作出する。一部に、区画内にも隆帯を残すが、詳細は不明である。区画内、区画間には波状沈線を描いている。地文は撚糸Ｌで、隆帯貼り付け前に施す。現存高7.2㎝、口径推定18.0㎝、器厚1.2～1.4㎝を測る。

４は深鉢の胴下半部である。地文に撚糸Ｌを縦位に施文している。残存率は、図化部分で50%。現存高11.1㎝、底径8.3㎝、器厚0.9～1.3㎝を測る。

５は東関東系の土器に類似するが、その出自については検討を要する。胴部はわずかに外傾して立ち上がり、中位に膨らみを持つ。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部に向かって外反する。口縁部には４単位の突起を有するが、２箇所を欠損する。突起部分は肥厚している。口唇部直下には段差があり、突起を含めて無文となっている。文様は、主として半截竹管の内皮面による平行沈線で描かれている。頸部には平行沈線を巡らすが、部分的に途切れる。これを跨ぐように、渦巻文が口縁部から胴部中位に垂下するように同一施文具で描出される。これらは３単位配しているが、図正面とした単位のみ逆方向に巻く。また、２単位の渦巻部分は指頭により磨り消された箇所が目立つ。地文は単節 RL であるが、縦位、横位、斜位と様々な施文を見せている。特に、渦巻文部分は文様描出を意識したような方向性が認められる。また、胴下半部の一部は半截竹管の平行沈線を乱雑に充填した部分があるが、地文を磨り消して施されたようである。本土器は、当初口縁部の４単位構成と胴部の文様描出技法から東関東系の土器と考えたが、垂下する渦巻文の様相は多喜窪タイプの土器を想起させる。すなわち、頸部より上は多喜窪重文タイプの上部を簡略化、さらに上下に縮小し、頸部以下は同種土器の屈曲底を延長したものと考えることができる。多喜窪タイプが受容され、さらに変容したものと思われる。残存率は、図化部分で90%。現存高29.4㎝、口径20.8㎝、器厚0.7～1.0㎝を測る。

６は器台である。図化部分の20%が残存する。底部は内側に張り出す。孔は２孔一組で、２～３単位と考えられる。現存高6.1㎝、底径推定19.8㎝、器厚1.0～1.4㎝を測る。

７はミニチュアの鉢形土器である。口唇部直下に段差があるが、明確な沈線は引かない。器面は無文である。残存率は30%。現存高4.6㎝、口径推定7.8㎝、器厚0.6～1.0㎝を測る。

８～10は浅鉢である。８は胴部がやや反るように立ち上がり、上位で内湾する。口縁部は欠損するため不明である。文様は、横Ｓ字文を分離した形で展開する。推定４単位。地文は持たない。残存率は、図化部分で30%。現存高11.4㎝、底径推定9.6㎝、器厚0.8～1.6㎝を測る。

９は破片から推定復元したものである。胴部は外傾して立ち上がり、上位で緩く内湾し、幅の狭い口縁部は直立する。胴部上位から口縁部は器厚が厚い。口唇部は若干傾斜する。口縁部直下に２本沈線を巡らし、下部の沈線から梯子状沈線文を垂下させる。また、部分的に交互刺突文を付している。残存部分が少ないため、単位については不明。現存高11.5㎝、口径推定32.2㎝、器厚0.7～1.3㎝を測る。

10は加曽利ＥⅠ前半段階の浅鉢である。胴部は緩やかに立ち上がり、上位で緩く内湾する。文様帯は口頸部にあり、地文撚糸Ｌを縦位施文後に背割沈線を施した隆帯を貼り付ける。残存部分は渦巻文と連結する隆帯が認められる。剥離痕跡があるため、文様帯下端にも区画隆帯が存在したと考えられる。残存率は、図化部分で30%。現存高15.1㎝、底径推定9.6㎝、器厚0.7～1.8㎝を測る。

11は口縁部が幅の狭い無文帯で、口頸部が膨らむ器形を呈する。文様は沈線で描かれた楕円区画に、縦

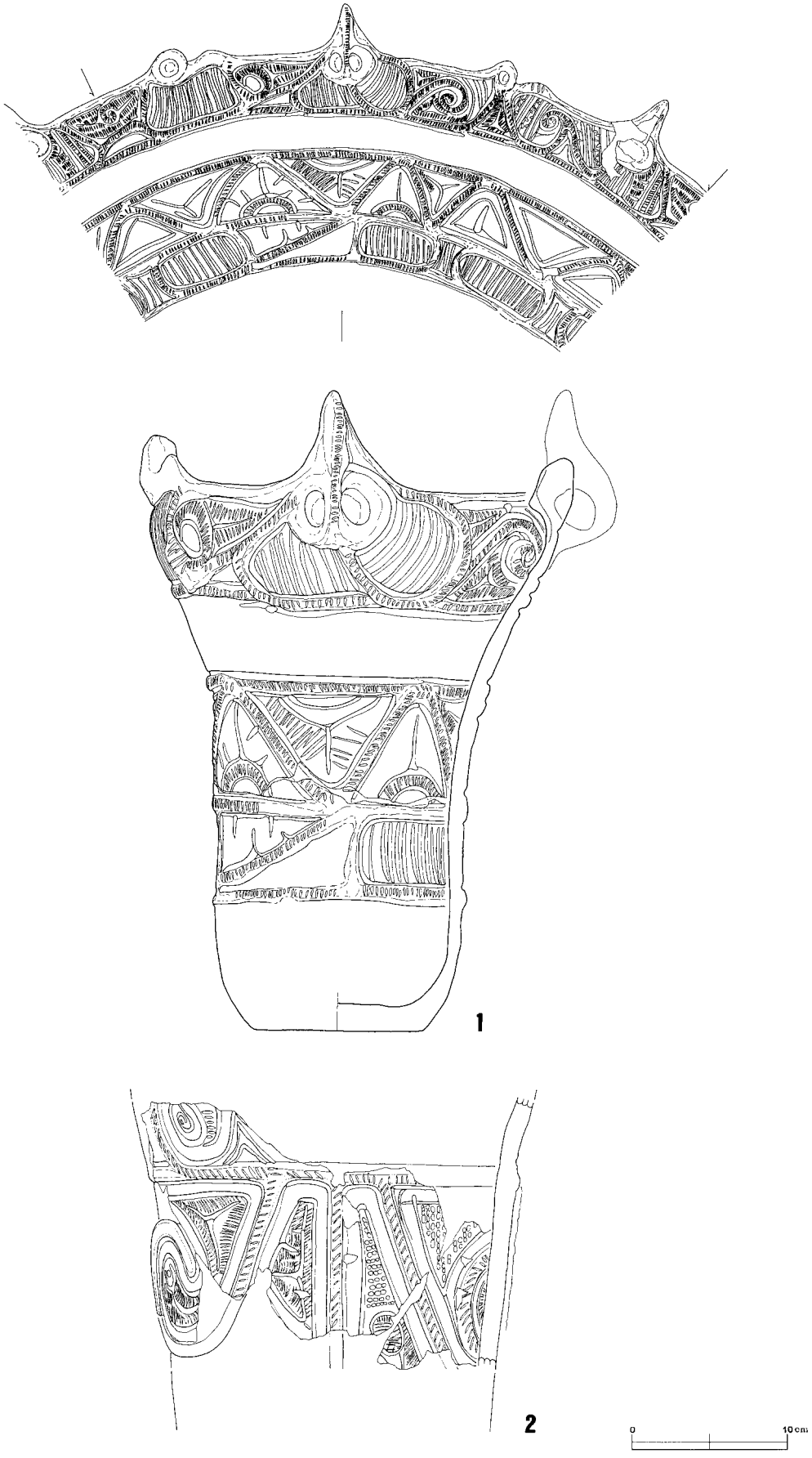
位集合沈線を充填する。12は抽象文土器の胴部破片である。地文に目の細かい単節 RL を施す。残存する文様は抽象文の一部で、半隆起帯に角押文、三角押文を沿わせる。13は地文に単節 RL を斜位施文後、隆帯貼り付けにより渦巻文を作出している。14～18は加曽利 E Ⅰ式の一群である。14は口頸部を幅広の文様帯とするタイプで、口頸部全体は内湾する。内面は口唇部近くで内屈し、稜を形成する。口縁部に円環を基調とした把手を付け、内面には同心円沈線、側縁を刻目で加飾する。口唇部直下には２本沈線を引き、一部に交互刺突を施す。文様構成は、残存部分からは区画状を呈すると考えられるが、詳細は不明である。ただし、単位中央に背割沈線を施した渦巻文の一部を残している。空間は斜行沈線を充填するが、隆帯貼り付け後になされている。胎土に多量の金雲母を含有する。15は頸部破片で、横 S 字文と文様帯下端隆帯の一部を残す。下端隆帯上には斜位の刻目が付される。地文は撚糸 l で、縦位、横位に施文されている。16は口縁部破片で、斜行する２本隆帯は横 S 字文の一部と考えられる。地文は縦位集合沈線で、隆帯貼り付け後に施している。17には横 S 字文の一部と交互刺突を施した連結隆帯が認められる。地文は撚糸 l の縦位施文。18には若干新しい様相が認められ、口縁部に渦巻繋ぎ弧文を展開するものと考えられる。弧線下部と文様帯下端隆帯を連結する短隆帯を残す。地文は撚糸 l で、やや斜位に施している。

第10号住居跡出土土器（第65・66図）

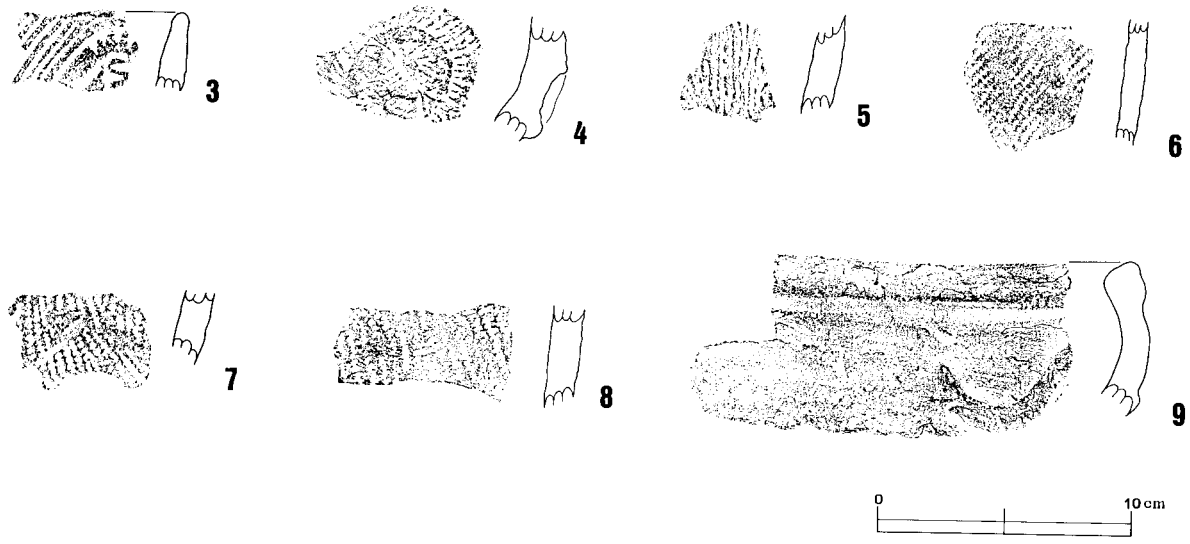
本住居跡の出土土器は、極めて少なかった。炉埋設土器も無く、復元・図化された土器は２個体のみである。ただし、P10内に落込んでいた土器（第65図１）は典型的な横帯文土器で、今回報告の土器群の中でも優品と言える。時期は、勝坂Ⅲ式前半段階である。

１は P10内から出土した土器で、上半部は柱穴の縁に引っ掛かるように、下半部は重さで剥離し柱穴中位に落ちていた。把手の一部を除いて完形である。第39図20に類似性が認められるが、頸部に無文帯を置くことと底部形状が異なる。器形は胴部が円筒形で、頸部は緩く外反、口縁部は内湾し、口唇部は内面に肥厚する。文様は頸部無文帯を含めて４帯構成を採っている。口縁部には尖頭状を呈する眼鏡状把手と、窪みを持つ円形の突起を各２単位交互配置する。口縁部文様帯は重三角区画を基調として、把手に連係して隆帯により８単位作出されているが、各区画は半円状、台形状となる他、文様帯上端に結合する部分が渦巻文となる等、顕著な崩れが認められる。区画隆帯上には爪形文、隆帯脇には単沈線を伴う。区画内は縦位集合沈線、渦巻文、三叉文に刻目を伴うもの、交互刺突文があり、交互配置といった規則性は看取し難い。頸部は幅広の無文帯で、上下隆帯の脇には単沈線を引く。胴部文様帯は上下２帯に分れる。上位帯は波状隆帯により、三角形区画を８単位作出する。隆帯上には刻目、隆帯脇には単沈線が伴う。区画内は簡素な充填で、三叉文に刻目を伴うもの、三叉文に斜行集合沈線を加えるもの、三角形の枠取り等が見られる。極一部に爪形文が認められる。下位帯は縦位集合沈線を充填した楕円区画を３単位配するが、単位間の「工」字部分の内、１箇所は斜行隆帯で三角形に分割し上位のみ截痕文を施す。また、「工」字部分にも集合沈線を充填している。下位帯以下、底部付近は無文である。残存率は、ほぼ100％。器高41.6㎝、口径28.1㎝、底径8.6㎝、器厚0.6～1.3㎝を測る。

２は円筒形土器である。胴部は、上位でわずかに外反する。文様帯は上下２段構成を採る。上位文様帯は残存部分が少ないため詳細は不明であるが、上下分割隆帯から発する区画隆帯があり、楕円区画文を置くものと思われる。区画内には沈線による渦巻文の一部が見られる。下位文様は縦位区画文の様相を強く残し、複沈線使用の簡略化したパネル文手法を用いている。長台形状の区画と渦巻文を垂下させる区画が認められるが、構成等は不明である。ただし、４単位構成の可能性が高い。隆帯上には刻目が施されてい



第65図　第10号住居跡出土土器（１）



第66図　第10号住居跡出土土器（２）

る。隆帯脇の複沈線で囲われた内側は三叉文、截痕文の周辺に、爪形文、結節沈線、刻目が充填される。残存率は、図化部分で20%。現存高17.2㎝、器厚1.0～1.2㎝を測る。

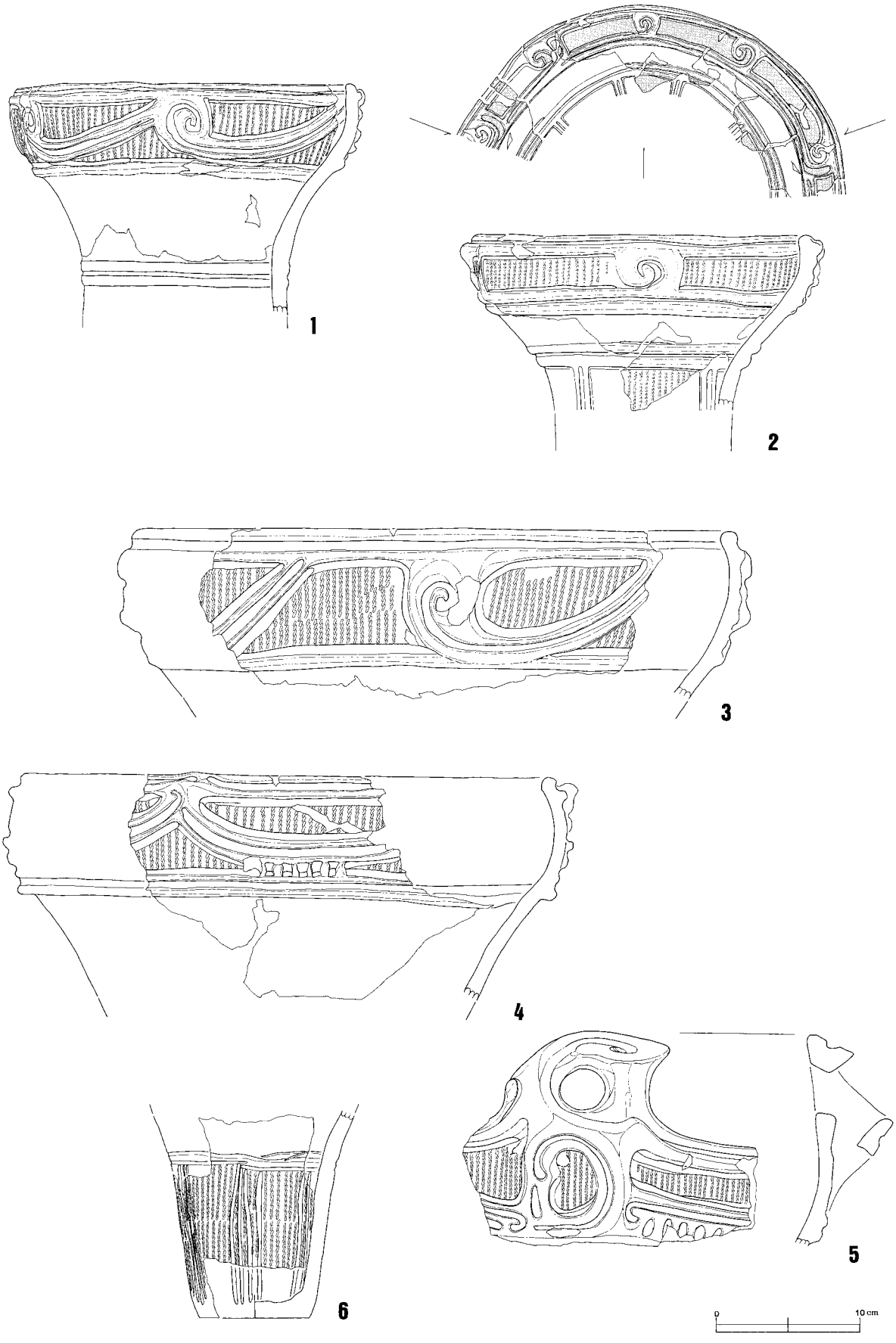
３は円筒形土器の口縁部破片である。口縁部無文帯を持たないタイプで、文様が口唇部にまで及ぶ。残存する文様は、半隆起帯による渦巻文と思われ、刻目、交互刺突文が付される。空間部には斜行集合沈線が充填されている。４は隆帯による渦巻文の一部で、隆帯脇に爪形文を伴うやや古い様相を持つ。５は胴下半部の破片で、地文撚糸Ⅰが縦位に施されている。６・７は胴部破片である。地文は両者とも単節RLで、６がやや間隔を開けた縦位施文、７は斜位施文である。８も胴部破片で、地文は無節Lの斜位施文。９は浅鉢で、肥厚する口唇部に緩く内湾する頸部を有する。文様は、波状隆帯の一部を残すのみで単位、構成等の詳細は不明である。地文は持たない。

第11号住居跡出土土器（第67・68図）

出土土器は比較的少ないが、第23図に示したように遺構中央より東側に偏ってまとまった出土が認められた。復元・図化された土器は14個体であるが、破片からの推定復元が多い。時期は加曽利ＥⅠ式後半段階を主体とするが、一部に加曽利ＥⅡ式前葉段階が混入している。

１はキャリパー形を呈する深鉢で、口縁部から頸部を残す。器形は、口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁部文様は上下端を隆帯で広めに区画し、２本隆帯でＳ字文とＪ字文を展開するが、相互に連結しない部分がある。単位不明。また、渦巻部分の巻きが強い。頸部は幅広の無文帯である。胴部は極一部が残存するのみで詳細は不明であるが、頸部下端区画は２本隆帯でなされ、１箇所に蛇行隆帯の懸垂文が認められ、２本隆帯と蛇行隆帯の懸垂文の交互配置が想定される。地文は口縁部、胴部ともに撚糸Ⅰの縦位施文である。残存率は、図化部分で40%。現存高16.1㎝、口径22.2㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

２はキャリパー形深鉢で、口縁部から頸部にかけて残存する。器形は頸部から強く外反し、口縁部は直立気味に緩く内湾する。口縁部文様帯は幅が狭く、口唇部直下に巡らした隆帯と下端隆帯で明確に区画される。文様は隆帯作出の独立した渦巻文と長方形区画を４単位交互配置するが、内２単位は渦巻文右側に文様帯下部隆帯の背割沈線から連続する小区画を置く。隆帯脇の沈線は比較的明瞭である。頸部は幅狭の



第67図　第11号住居跡出土土器（1）

無文帯で、下端には隆帯を２本巡らしている。胴部は残存部分が少なく詳細は不明であるが、２本隆帯の懸垂文を４単位配するものと考えられる。また、懸垂文間に口縁部文様帯の渦巻文が対応する形となっていると思われる。地文は撚糸Ｌで口縁部、胴部ともに縦位に施されている。他の土器に比して若干新しい様相が看取される。残存率は、図化部分で80%。現存高12.2㎝、口径21.4㎝、器厚1.0㎝を測る。

３は大型深鉢の口縁部破片である。器形は、直立気味に緩く内湾する。口唇部直下に沈線を巡らす。残存部分が少ないため構成等は不明確であるが、先端が渦を巻く斜行隆帯を４単位配するものと考えられる。隆帯は２本で隆帯脇沈線は太く明瞭である。渦巻文は文様帯上端隆帯に結合する。文様帯下端は隆帯で区画されている。頸部は無文帯である。地文には、撚糸Ｌが縦位に施されている。残存率は、図化部分で30%。現存高11.9㎝、口径推定39.8㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

４も大型深鉢の口縁部から頸部にかけての破片である。器形は３に近いが、内湾の度合いが低い。口唇部直下に沈線を巡らす。文様帯下端は２条の隆帯によって区画する。文様は残存率の関係から不明確ながら、所謂渦巻繋ぎ弧文と思われる。波状の２本隆帯の先端は突出する渦巻文で、文様帯上端の隆帯に結合する。波底部は６本の短隆帯を文様帯下端隆帯に貼り付ける。隆帯脇の沈線は太く、明確に引かれている。頸部は、やや幅広の無文帯である。地文は撚糸Ｌで、縦位に施されている。残存率は、図化部分で20%。現存高10.6㎝、口径推定35.2㎝、器厚0.9～1.0㎝を測る。

５は、口縁部に立体的な把手を有する深鉢の口縁部破片である。器形は、わずかに内湾する。把手正面から上部には、沈線による渦巻文が加飾され、中央には大きめの孔を持つ。把手下の渦巻文は橋状に把手と結合し、両側に区画文を配する。区画文下には並列する短沈線、背割状の沈線が認められるが、以下に段差が認められる。諸様相から頸部に無文帯を有するものと考えられる。地文は撚糸Ｌの縦位施文。

６～11は深鉢の胴下半部である。６は比較的小型の深鉢で、頸部以下が残存する。器形は、胴部がわずかに外傾する円筒形で、頸部で外反する。頸部は無文帯である。頸部下端には３本沈線を巡らし、その下端から２本、４本、蛇行の三種類の沈線懸垂文を垂下させる。推定６単位。地文は撚糸Ｌで、縦位に施文されている。残存率30%。現存高14.3㎝、底径推定7.6㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

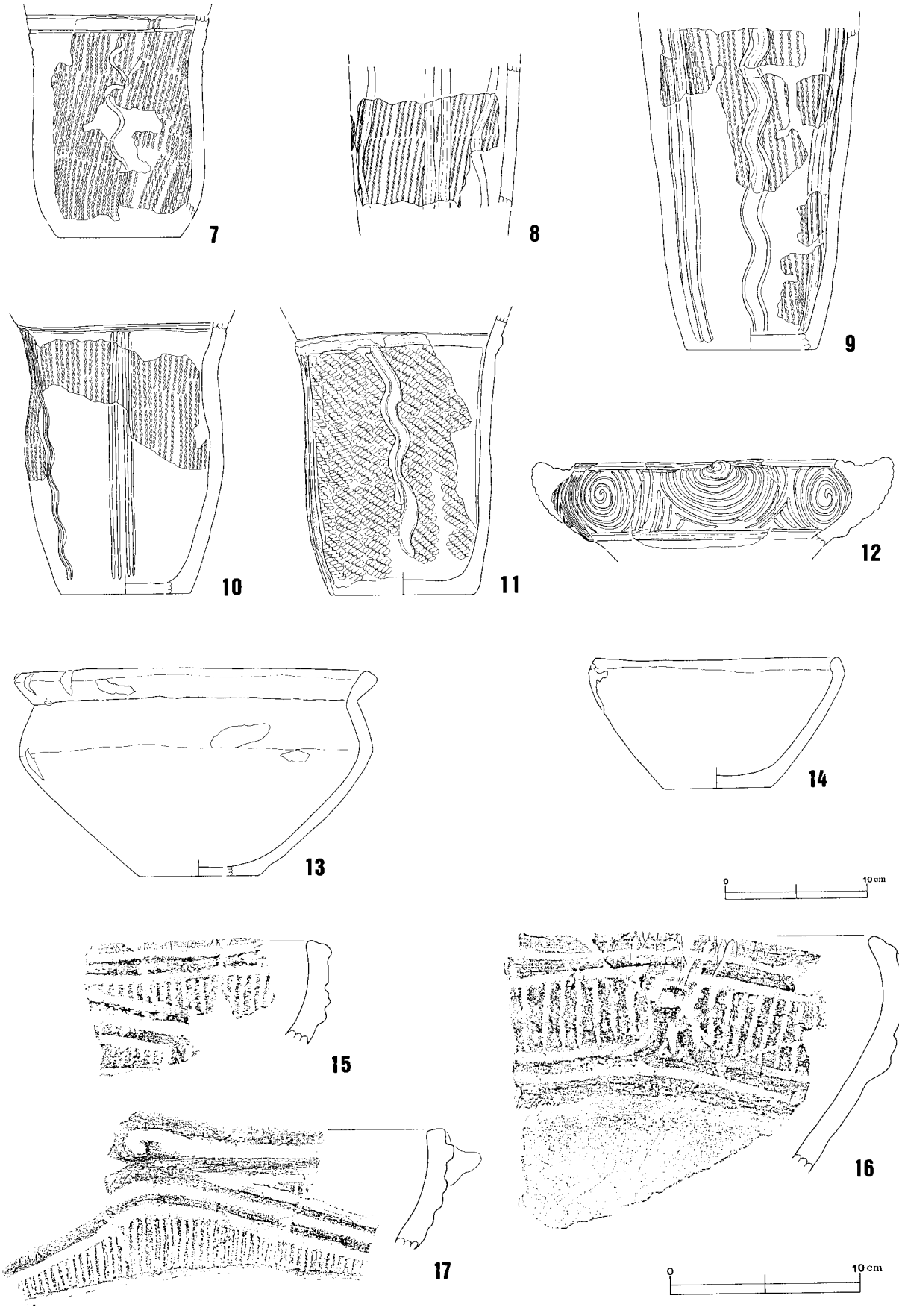
７は円筒形の器形を呈する胴部である。底部は欠損する。上端には頸部下端の区画沈線が巡る。地文に撚糸ｒをやや斜位に施し、沈線の蛇行懸垂文を引く。一部、直線の懸垂文も認められ、蛇行懸垂文と交互配置したものと思われる。推定４単位。残存率30%。現存高14.4㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

８は深鉢の胴部中位で、円筒形を呈している。地文に撚糸Ｌをやや斜位に施し、２本隆帯と蛇行隆帯による懸垂文を交互配置する。推定４単位。懸垂文脇には沈線を引く。残存率30%。現存高10.2㎝、器厚0.7～0.9㎝を測る。

９は細身の胴部で、上位が若干開く器形を呈している。地文に撚糸Ｌを縦位施文した後、太い蛇行隆帯と２本隆帯を交互に貼り付ける。推定６単位。隆帯脇には沈線を施している。残存率20%。現存高22.8㎝、底径推定9.0㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

10は中位が膨らむ器形の深鉢胴部である。図化部分の10%を残す。一部残存する底部は薄手である。上端には、頸部下端区画沈線が認められる。胴部は地文に撚糸Ｌを施し、半截竹管内皮面で４本沈線と蛇行沈線を交互に４単位引く。現存高18.8㎝、底径推定9.0㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

11は円筒形を呈する深鉢の胴部である。上端には外反する頸部無文帯と区画隆帯の一部を残す。地文は粗い単節ＬＲで、縦位に施文する。懸垂文は２本隆帯と蛇行隆帯の交互配置で４単位構成を採る。隆帯脇



第68図　第11号住居跡出土土器（２）

沈線が部分的に認められる。残存率50%。現存高19.5㎝、底径10.0㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

12は重弧文土器である。３点の破片から推定復元したもので、内湾の強い器形を呈する。角状に突出する重弧文加飾の突起を２単位と、突起間の一部を残している。突起間は渦巻文になる可能性がある。文様帯上下端には隆帯を巡らし、明確に区画する。下端隆帯以下は無文帯と思われる。残存率は、図化部分で20%。現存高6.2㎝、口径推定17.2㎝、器厚0.9㎝を測る。

13・14は浅鉢である。13は胴部がわずかに内湾するように立ち上がり、上位で緩く内傾する。口縁部は強く外傾する。一部に赤色塗彩を残す他は無文である。残存率50%。器高14.7㎝、口径23.6㎝、底径8.3㎝、器厚0.7～0.9㎝を測る。

14は小型の浅鉢である。胴部は直線的に立ち上がり、幅狭の口縁部が内傾する器形を呈する。一部を欠くのみで、ほぼ完形である。無文。器高7.4㎝、口径16.2㎝、底径6.4㎝、器厚0.7～1.1㎝を測る。

15～17は深鉢の口縁部破片である。15は斜行する２本組の隆帯と渦巻文の一部を残す。やや外傾気味の器形である。地文は撚糸Ⅰの縦位施文。16は区画文と渦巻文を交互配置するタイプで、緩く内湾する器形を呈する。口縁部に推定４単位の突起を有する。区画内は縦位集合沈線を充填する。頸部は幅広の無文帯である。17の口縁部破片は外傾する。渦巻きは突起状を呈する。地文は撚糸Ⅰの縦位施文。

第12号住居跡出土土器（第69～71図）

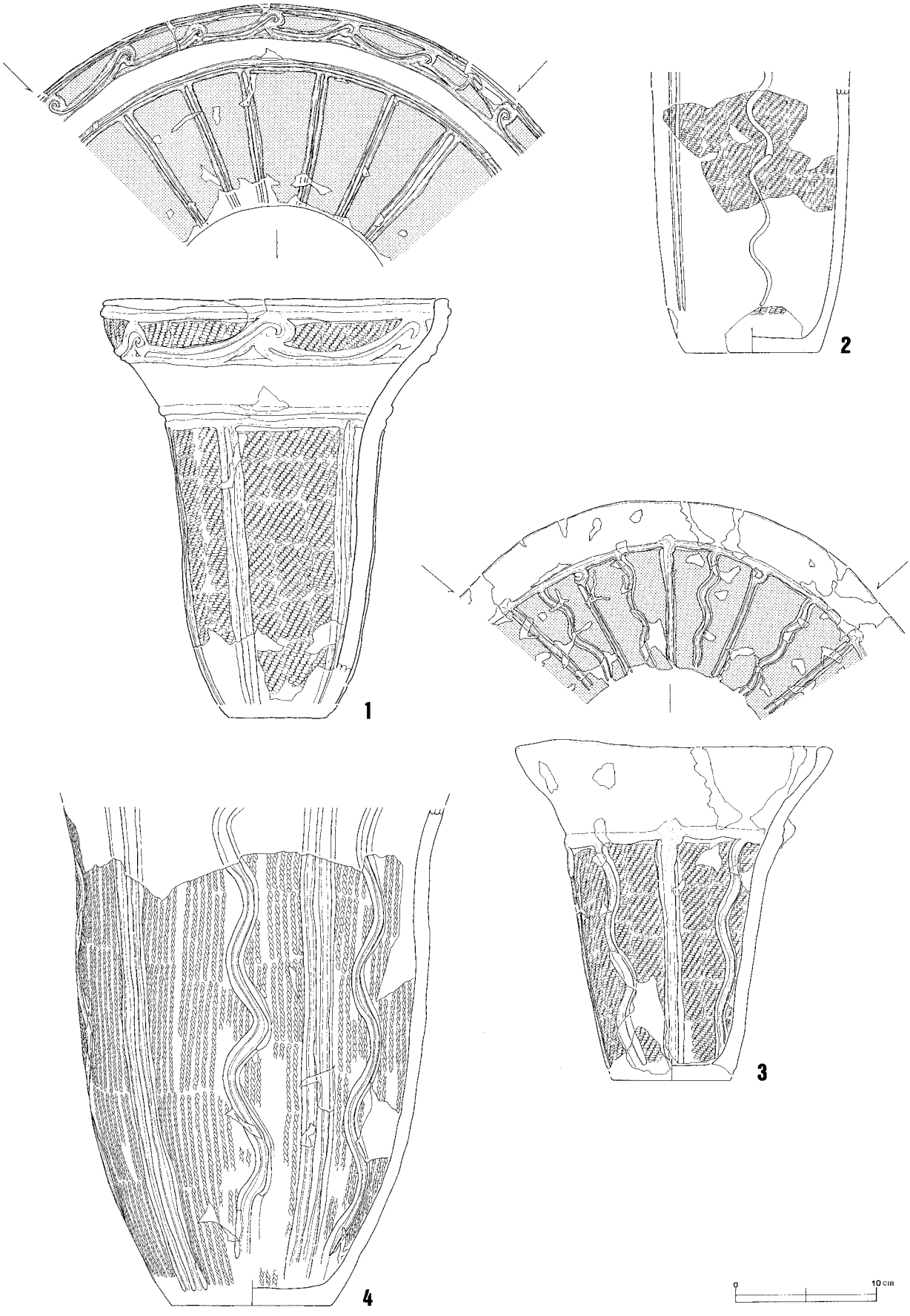
本住居跡からは、第26図に示したように炉跡南側及び北壁際でまとまった出土があった。復元・図化された土器は９個体で、残存も良好である。時期は加曽利ＥⅡ式前葉段階と考えられるが、曽利Ⅱ式土器の共伴が顕著で、当該期の良好なセットと言える。他にミニチュア土器１点が出土している（第105図62）。

１はキャリパー形の深鉢で、底部と口縁部の一部を欠く。胴部はわずかに外傾して立ち上がり、頸部で外反する。口縁部は内湾の度合いが低く、上位はほぼ直立する。口唇部直下には沈線を巡らす。口縁部文様帯は幅が狭く、上下を隆帯で区画する。文様は渦巻きから連続する沈線が左方向に流れる渦巻繋ぎ弧線を基本とするが、６単位の内１単位は渦巻きが連結し、隣接する区画を１本隆帯で分割する。また、隆帯は背が低めで、隆帯脇処理はナゾリ状で明確に沈線を引く部分は少ない。頸部は幅の狭い無文帯である。胴部は頸部下端の２本隆帯で分割し、２本隆帯による懸垂文を６単位垂下させる。懸垂文は口縁部文様帯の区画部分に概ね対応している。隆帯脇処理は口縁部文様帯と同様である。地文は口縁部、胴部ともに単節 RL の縦位施文である。残存率90%。現存高29.0㎝、口径24.1㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

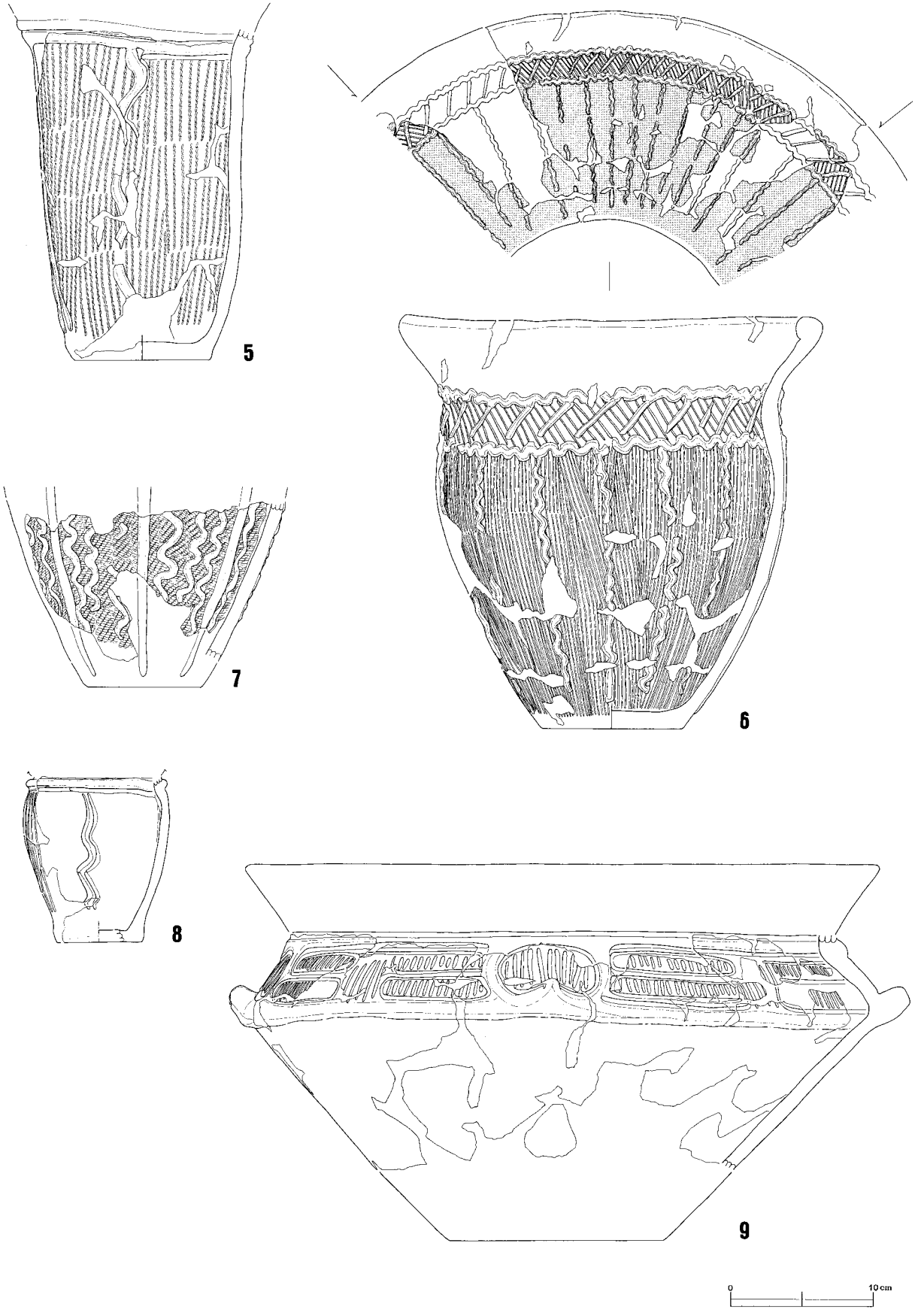
２は深鉢胴部である。器形は、ほぼ円筒形を呈している。地文に単節 RL を縦位施文し、２～３本沈線と蛇行沈線を交互に垂下させる。沈線間の磨り消しは認められない。推定４単位。残存率は、図化部分で30%。現存高18.7㎝、底径9.4㎝、器厚0.7～0.9㎝を測る。

３は胴部がやや開き気味に立ち上がり、幅広の無文口縁部が強く外傾する。底部は欠損する。口唇部は内面に肥厚している。頸部には１条の沈線を巡らし、太めの１本隆帯と蛇行隆帯を交互に各４単位垂下させる。直線隆帯の頸部区画隆帯接合部には突起状を呈するものと略渦巻き状を呈するものの２種があり、これらも交互に配置されている。蛇行隆帯の接合部には変更はなく、区画隆帯と同一レベルで付く。隆帯脇には比較的明確な沈線が引かれる。地文は単節 RL の縦位施文で、隆帯貼り付け前に施されている。残存率80%。現存高23.9㎝、口径20.6㎝、器厚0.6～0.8㎝を測る。

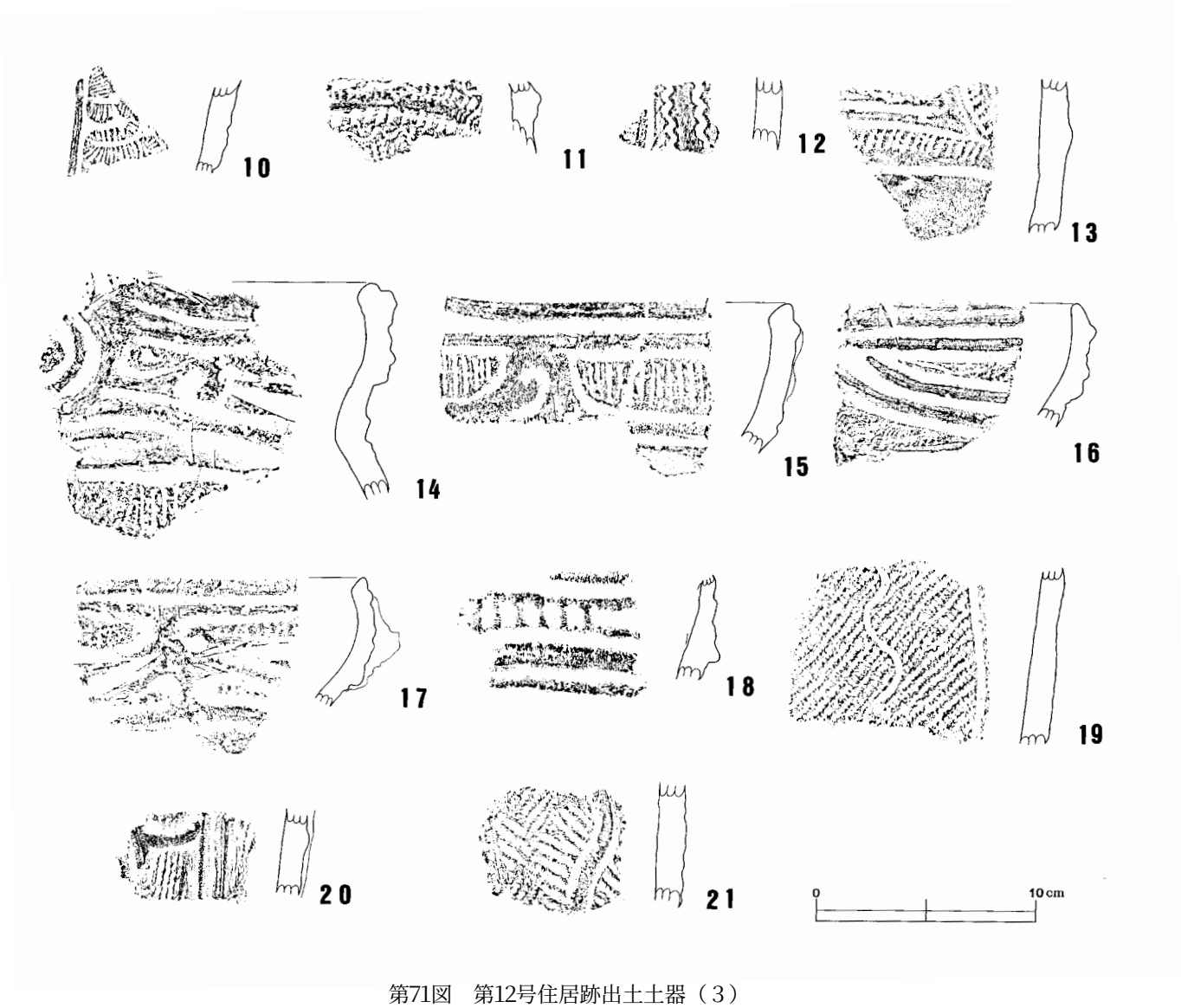
４は深鉢の胴部で、大型の土器である。器形は中位でやや膨らみ、上位で外反する。文様は隆帯による懸垂文が認められ、地文施文後に作出されている。２本隆帯と蛇行隆帯の交互垂下で、推定各５単位。隆



第69図　第12号住居跡出土土器（1）



第70図　第12号住居跡出土土器（２）



第71図　第12号住居跡出土土器（３）

帯の背は低く、隆帯脇には太い沈線を引く。地文は太めの撚糸ｒで、縦位に施文されている。残存率は、図化部分で60%。現存高35.5㎝、底径11.2㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

５も深鉢の胴部で、概ね円筒形を呈している。上端には２条の頸部下端区画隆帯を残し、外反する頸部無文帯の一部が認められる。胴部は２本隆帯と蛇行隆帯の交互配置で、それぞれ２単位垂下させている。隆帯脇には一部沈線を施している。地文は間隔の空いた撚糸Ｌの縦位施文。器面の荒れが著しい。残存率は、図化部分で80%。現存高24.2㎝、底径7.4㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

６は曽利式土器で、器形、文様作出技法等、典型的なものと言える。胴部は樽形の器形を呈し、口縁部は強く外傾する幅広の無文帯である。口唇部は内側に肥厚している。頸部には上下を波状隆帯で区画した籠目文を置く。半截竹管の内皮面重複施文で右下がりの平行沈線を引き、左下がりの隆帯を貼り付けて作出している。胴部は地文に櫛歯状施文具による条線を縦位、斜位に施し、蛇行隆帯を14本垂下させる。隆帯の貼り付けは籠目文部分と同様で、端部は未処理である。そのため、両者ともに剥離が目立つ。文様の作出順位は、籠目文の平行沈線、胴部の条線、籠目文の蛇行隆帯貼り付け、胴部の蛇行隆帯貼り付けとなっている。残存率80%。器高29.0㎝、口径25.8㎝、底径9.8㎝、器厚0.6～1.3㎝を測る。

７は胴下半部の一部から復元実測したものである。６に類似するが、地文に縄文を施している。また、直線隆帯懸垂文の在り方も曽利式の在地受容の結果と言えよう。器形は６よりやや細身で、外傾気味に立

ち上がる。地文に単節 RL を縦位施文した後、１本隆帯と２～３本の蛇行隆帯を交互に貼り付ける。ただし、前者の端部は加曽利 E 式的な処理が加えられ、後者は６と同様となっている。残存率は、図化部分で30%。現存高11.2㎝、器厚0.8～0.9㎝を測る。

８は小型深鉢の胴部である。頸部下端の区画隆帯以下を残している。器形は細身の樽形を呈し、底部はやや外側に突出する。胴部は半截竹管内皮面を使用して懸垂文を引く。４本沈線と蛇行平行沈線の交互配置である。４単位。地文は施されていない。残存率は、図化部分で40%。現存高11.6㎝、底径推定5.8㎝、器厚0.5～1.1㎝を測る。

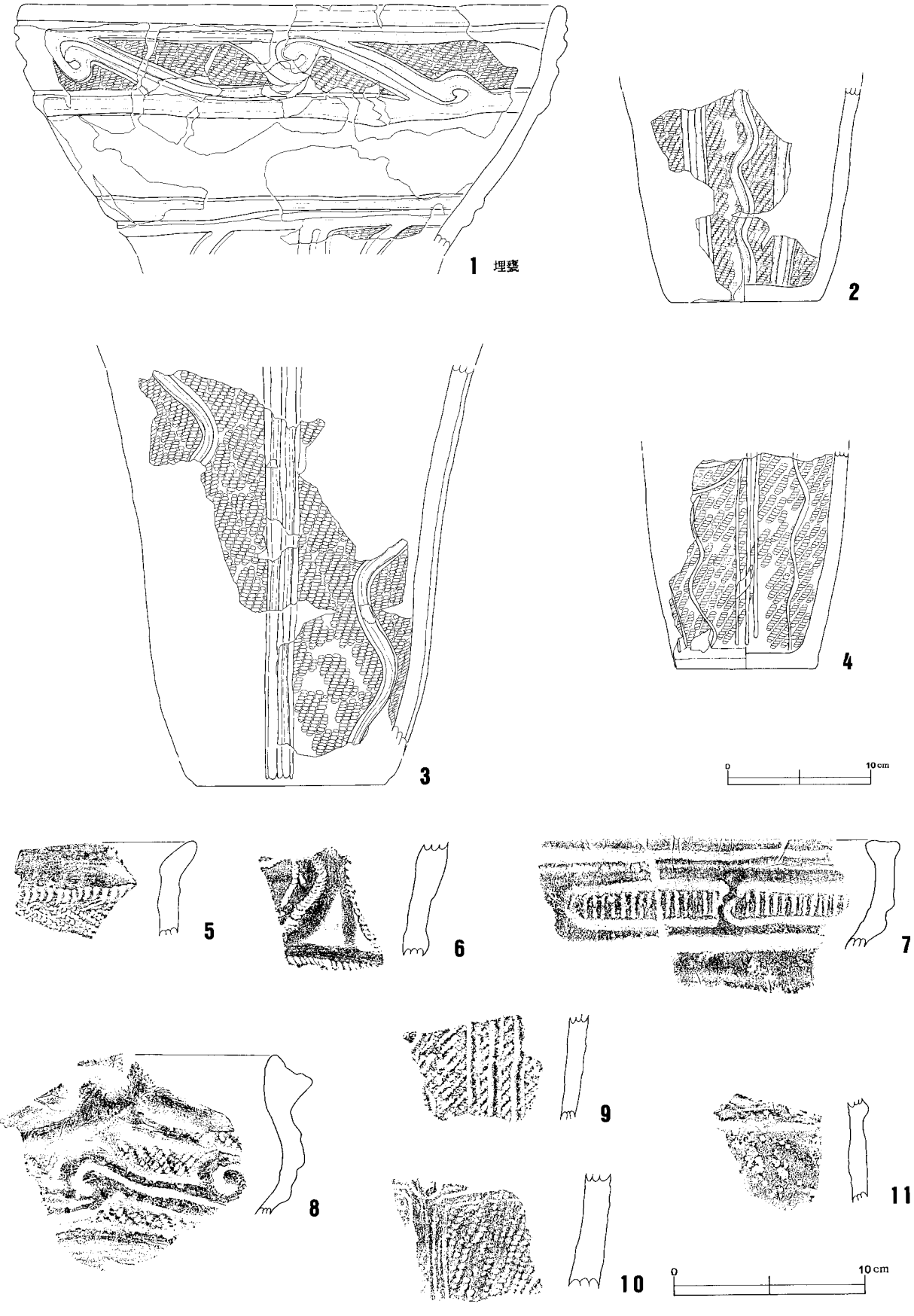
９は唯一復元された浅鉢で、大型品である。口縁部と底部を欠損する。胴部は緩やかに立ち上がり、上位でくの字に屈曲し、さらに頸部で外傾するものと考えられる。頸部の文様帯は上下端を隆帯により区画する。下端の隆帯には斜上方に突出する４箇所の突起があり、その直上に楕円区画を配する。楕円区画両側には沈線で上下重層の枠状沈線文を置く。楕円区画、枠状沈線文内は縦位集合沈線を充填する。また、枠状沈線文間にも集合沈線を施している。文様全体は８単位構成を採っている。胴部は無文である。残存率は、頸部から胴部で70%。現存高16.3㎝、器厚0.9～1.8㎝を測る。

10～13は勝坂式土器で、遺構の時期から混入と思われる。10は三叉文を上下交互配置し、截痕文のような効果を出している。三叉文の脇は爪形文を施す。11は頸部破片である。隆帯脇に幅広の角押文を沿わせ、波状沈線を平行させる。12は胴部破片で、縦位の波状沈線と爪形文が認められる。13は円筒形深鉢の文様帯下端部の破片と考えられる。文様帯の簡素な充填、隆帯上の粗い刻目等、新しい要素が見られる。下半部は無文である。14～21は加曽利 EⅡ式土器である。いずれの器形も、口縁部はやや外傾あるいは直立気味になっている。14は左側の隆帯が把手になるものと考えられ、両側に区画を置く。区画内中央には小渦巻文を配する。頸部は幅の狭い無文帯で、下端は沈線で分割する。胴部には４本沈線の懸垂文が残存する。地文は、口縁部、胴部ともに単節 RL の縦位、斜位施文である。15は渦巻きの両側が楕円区画に近い形状を呈する。区画内には縦位集合沈線を充填。頸部は無文帯である。16は２本組隆帯の弧状文を残す。左側には渦巻文を置くものと思われる。頸部は、下端に区画隆帯の一部を残している。地文は撚糸 l で、頸部にも施されている。17は文様帯中位に渦巻きと弧線を置き、上下２段に分割するような効果を見せる。渦巻きは突起状を呈する。地文は撚糸 l の縦位施文。18は口縁部文様帯の下端部で、弧線文と下端隆帯を結合する短隆帯部分である。19～21は胴部破片である。19は地文単節 RL の縦位施文後に、２本沈線と蛇行沈線を交互垂下させる。26は撚糸 l を縦位施文した後、２本隆帯を垂下させる。懸垂文間には大木的な隆帯文を作出しているが、残存部が少ないため詳細は不明である。21は無節 L と単節 RL の交互縦位施文で綾杉文を描出する。隆帯は蛇行懸垂文で、両脇に沈線を引く。

第13号住居跡出土土器（第72図）

本住居跡は、遺構が大型の割に遺物出土量は少なかった。図化し得た土器は屋内埋甕を含めて４個体で、３個体は胴部破片からの推定復元である。他にミニチュア土器１点が出土している（第105図63）。時期は加曽利 EⅡ式前葉段階と考えられる。

１は屋内埋甕で、比較的大型である。焼成が極めて悪く、取り上げ時点で大部分が細片化してしまった。作りも粗く、胎土には多量の砂粒を含有する。器形は頸部から口縁部にかけて直線的に外傾する。口唇部直下に沈線を引く。口縁部文様はやや幅が狭く、上下を隆帯で区画している。文様は上位に位置する渦巻文から２本隆帯が片流れに下端隆帯に接合するもので、推定６単位と考えられる。ただし、残存部分には



第72図　第13号住居跡出土土器

上下両側に渦巻文を持つ単位が認められる。隆帯脇には明確な沈線を伴う。頸部は無文帯で、下端に太い隆帯を２条巡らしている。胴部は極一部が残存するのみで詳細は不明であるが、垂下する２本隆帯と蛇行隆帯が認められる。懸垂隆帯脇の沈線も明瞭である。地文は単節 RL で、口縁部、胴部ともに縦位に施文されている。残存率は30%。現存高17.6㎝、口径推定37.0㎝、器厚1.1～1.2㎝を測る。

２は深鉢の胴下半部で、わずかに外傾する器形を呈する。残存率は、図化部分で20%。地文は単節 RL で、部分的に隙間を空けつつ縦位に施文されている。地文施文後に２本隆帯と蛇行隆帯を推定８単位、交互に施す。残存部分の隆帯は片側のみ沈線を引く。現存高14.9㎝、底径10.2㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。

３は深鉢の胴部で、やや外反する器形を呈している。胴部上位まで残存するが、底部を欠く。残存率は、２と同様20%である。地文は粗い単節 RL の斜位施文である。懸垂隆帯は２本と蛇行で、推定で４単位垂下させる。隆帯脇の沈線は明瞭で、両側に施されている。現存高29.2㎝、器厚1.1～1.2㎝を測る。

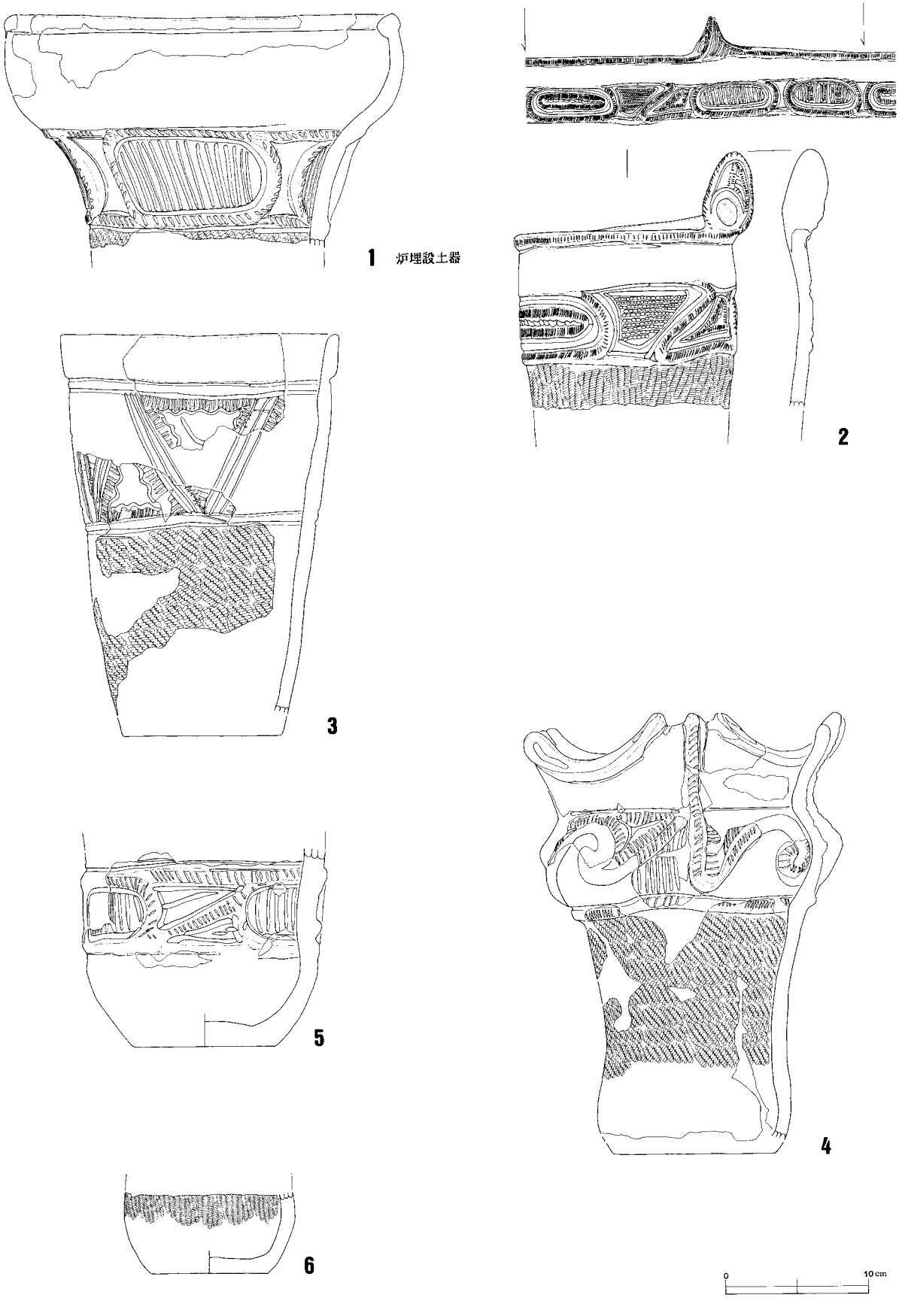
４は深鉢の胴下半部で、ほぼ円筒形の器形を呈する。地文は単節 RL であるが、乾きかけた後の施文か、条間にやや隙間が空く。懸垂文は沈線によるもので、残存部分では３本沈線と蛇行沈線の交互配置が認められる。ただし、左側の蛇行沈線の上には２条の弧状沈線文が見られる。残存率は、図化部分で30%。現存高15.1㎝、底径9.6㎝、器厚1.0～1.3㎝を測る。

５・６は勝坂式土器である。５は無文の口縁部が外傾し、胴部が円筒形を呈するものと思われる。口縁部直下に爪形文を巡らし、それに平行して２条の波状沈線を施す。地文は単節 RL の横位施文。６は胴部破片である。文様区画隆帯に沿った三角押文が認められる。隆帯上の加飾は無い。７～10は加曽利ＥⅡ式の一群である。７は口縁部破片で、楕円区画の中央を波状隆帯で二分する。区画区内は縦位集合沈線を充填する。左側には渦巻文の一部を残す。頸部は無文帯である。８も口縁部破片で、４単位の突起を持つものと思われる。突起上には渦巻文を持つ。口縁部文様は横方向に連結する横Ｓ字文で、２本組み隆帯で作出されているが、やや雑な作りになっている。地文は単節 RL の横位施文。文様帯下端は隆帯で区画し、頸部は無文帯となっている。９は胴部破片で、地文に単節 RL を縦位施文した後、半截竹管の内皮面により３本と蛇行の懸垂文を描出する。10も胴部破片である。単節 RL をやや斜位に施文し、平行沈線で十字文状の文様を描く。十字の中心には円環文を置く。また、破片右隅に蛇行懸垂文の一部が残存している。11は鍔付き土器の頸部付近で、無文である。鍔は貼り付けが雑で、孔は残存しない。

第14号住居跡出土土器（第73～75図）

本住居跡からは、第28図に示したように炉跡直上及び南側でまとまった出土があった。復元・図化された土器は炉埋設土器を含めて８個体であるが、半完形と破片からの復元実測を主体とする。時期は勝坂Ⅲ式前半段階である。

１は炉埋設土器である。炉縁石の設置の関係か、口縁部を意図的に欠いた痕跡が認められる。器形は、幅広の口縁部無文帯が袋状に膨らむキャリパー形を呈する。口唇部は内外に肥厚し、内傾する。口唇部直下には段差があり、口縁部無文帯部には横方向のナデが施されている。頸部文様帯は楕円区画横帯文で、上下端を隆帯で区画し楕円区画文を４単位配する。楕円形の輪郭が上下区画隆帯に優先して作出されている。また、区画隆帯左側は隆帯が低く、右側は薄くなり耳状に突出する。隆帯上には斜位の刻目、隆帯脇には明確に単沈線を引く。区画内処理は一様で、縦位集合沈線が充填されている。胴部は文様帯区画隆帯直下にわずかに残り、地文単節 RL の横位施文が認められる。内外ともに被熱痕跡が明瞭で、表面の剥離が著しい。残存率は、図化部分で80%。現存高16.3㎝、口径24.2㎝、器厚0.9～1.2㎝を測る。



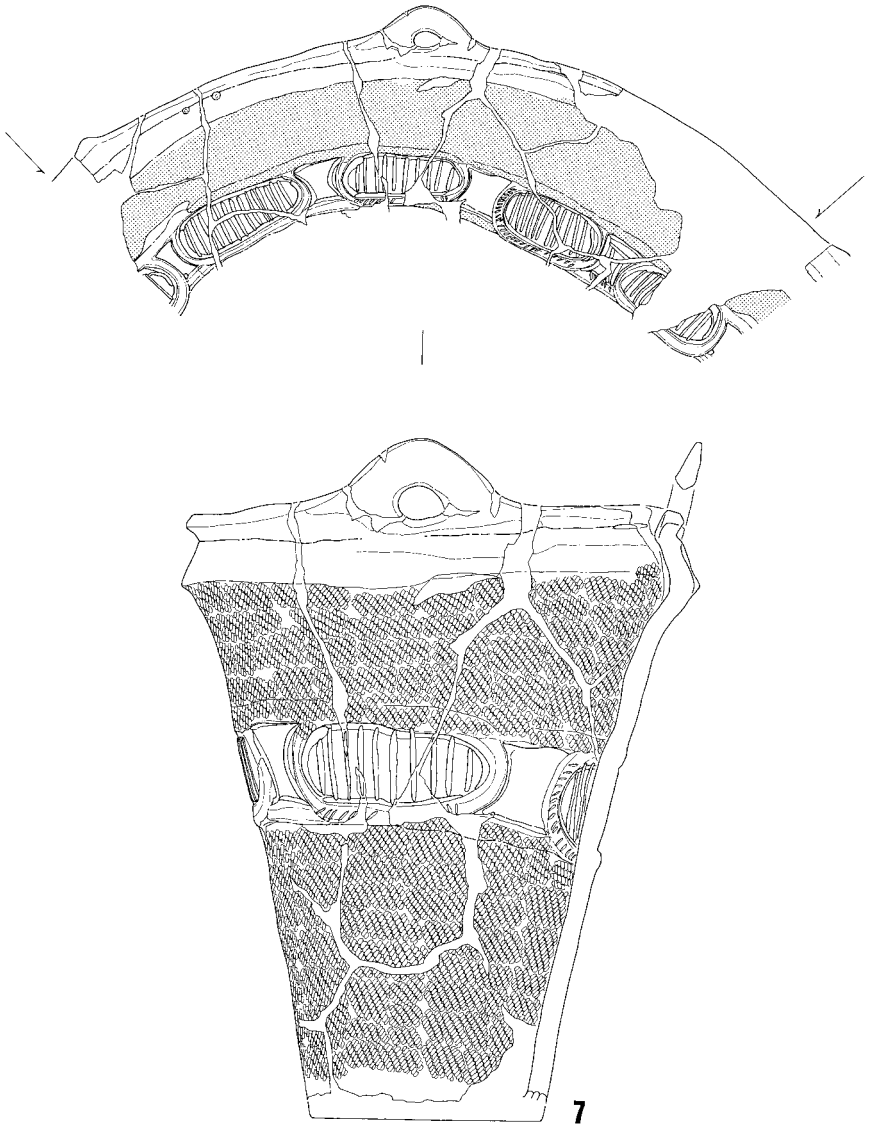
第73図　第14号住居跡出土土器（1）

２は比較的小型の土器で、１箇所の把手を持つ。器形は、胴部上位の文様帯部がわずかに膨らむ円筒形である。口縁部は若干内傾し、口唇部は外側に肥厚し突帯状を呈する。把手はこの突帯から立ち上がるように付けられ、口唇部の突帯も含めて、隆帯上には細かい刻目が加飾されている。左側面は上端がすぼまる楕円形で、縁取るように沈線が引かれ、下部に円形の窪みを置く。空間には爪形文を施す。正面はやや不整な三角形で、集合沈線を充填する。全体としては、うねるタイプの蛇体文の変形と思われる。突帯下の無文部には丁寧なナデが施されている。胴部上位の文様帯は楕円区画横帯文であるが、１単位のみ崩している。文様帯上端は段差のみで、区画線を設けない。下端は隆帯で区画するが、主文様である楕円区画の輪郭を優先する。文様は楕円区画を３単位配するが、楕円区画間の「工」字部分が１単位拡張され、台形区画の交互配置により単位を形成する。隆帯上には口唇部突帯と同様、細かい刻目が施され、隆帯脇には複沈線を引く。区画内の充填は各々異なり、半截竹管の連続刺突による波状沈線に爪形文が伴うもの、縦位集合沈線のみと沈線間に刻目を持つもの、横位の集合結節沈線がある。胴部下位は地文のみで、０段多条の単節 RL を斜位に施文している。外面には顕著な被熱痕跡が認められる。残存率は図化部分で100％。現存高18.0㎝、口径12.2㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

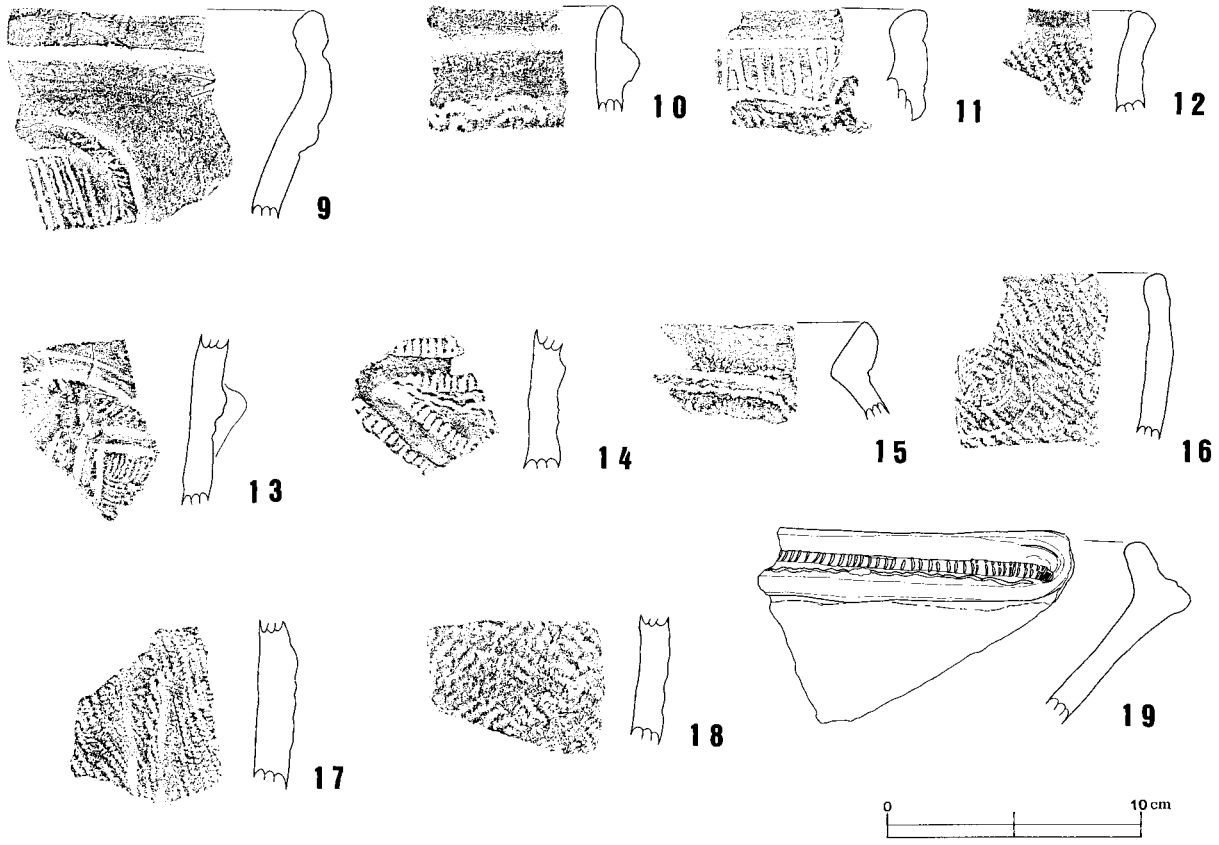
３は円筒形土器である。口縁部から胴下半部の破片からの推定復元で、残存率は30％。器形はわずかに外傾すると考えられる。口縁部は幅の狭い無文帯で、口唇部は丸みを帯びる。胴部上位に展開する文様帯は、上下を２条の沈線で区画している。文様は３条の平行沈線の上下動による連続三角区画を基調とし、区画縁辺を縁取るように粗い爪形文とそれに沿って波状沈線が施される。空間には三叉文の一部が残存する。主文様に隆帯を使用しないため、平板な印象を与えている。胴部は地文のみで、単節 LR の縦位施文。現存高26.7㎝、口径推定18.4㎝、器厚0.8～1.2㎝を測る。

４は４単位波状口縁の深鉢で、遺存状態は良好であったが、焼成不良のため取り上げ時に多くの部分が細片化してしまったものである。器形は底部が緩い屈曲底で、胴部はわずかに外反してたち上がる。文様帯を有する頸部付近は球形を呈し、４単位波状の口縁部は外傾する。口唇部には鎖状文を付ける。波頂部からは頸部文様帯に向けて隆帯を垂下させる。文様帯上端までは無文である。文様帯は上端を沈線、下端を隆帯で区画する。波頂部より垂下した隆帯は下端隆帯手前で跳ね上がり、主文様である反転渦巻文に連結する。反転渦巻文は４単位作出されている。隆帯上には刻目が施されているが、隆帯脇の単沈線は認められない。空間は縦位集合沈線、三叉文、粗い爪形文で充填される。胴部には地文単節 RL を横位に施文するが、屈曲底付近は無文である。残存率50％。現存高30.1㎝、口径推定19.8㎝、器厚0.7～1.2㎝を測る。本土器は器形、文様の在り方、構成等、後続する中峠式との関連がうかがわれるが、本住居跡と同時期と思われる第２号住居跡出土の三原田型深鉢（第40図21）との時間的関係が興味を引く。

５は横帯文土器の底部と考えられる。下位文様帯の２/３を残す。文様帯直下の無文部分の幅が狭いが、第10号住居跡出土土器（第65図１）に類似する。器形は底部から緩やかに立ち上がり、文様帯部分から上位にかけて概ね円筒形を呈する。文様帯上下端は隆帯で区画され、楕円区画文を配置するが、残存部分は楕円区画の１単位が三角形区画の組合わせとなり、さらに区画間の「工」字部分が同様に変更されている。楕円区画は推定で４単位。隆帯上には斜行する刻目、隆帯脇には単沈線を引く。区画内は縦位集合沈線を施すが、三角形組合わせ文に変更した「工」字部分には三叉文が認められる。また、他の「工」字部分にも縦位集合沈線が充填されている。中位文様帯については不明であるが、一般的な波状隆帯の痕跡は下位文様帯上端隆帯には認められない。残存率は、図化部分で80％。現存高13.6㎝、底径9.8㎝、器厚1.3～1.5㎝。



第74図　第14号住居跡出土土器（２）



第75図　第14号住居跡出土土器（３）

６は深鉢の底部で、緩い屈曲底である。上位に地文０段多条の単節 RL を斜位に施文している。残存率は、図化部分で100%。現存高5.9㎝、底径8.2㎝、器厚0.9～1.1㎝を測る。

７は楕円区画横帯文土器であるが、一風変った器形を呈している。胴部が外傾しつつ直線的に立ち上がり、上位で外反する。口縁部は内傾し、口唇部がさらに外傾する。底部は欠損する。口縁部には孔を有する山状把手と、その対面に同形の小突起を置く。口唇部直下に２箇所の補修孔が認められるが、貫通していない。文様帯は胴部中位に位置する。文様帯上下端ともに、やや不明瞭な隆帯で区画されている。楕円区画は４単位作出され、ほぼ等間隔に置かれる。隆帯の上には部分的に斜位の刻目が加飾され、隆帯脇には単沈線を引く。区画内には縦位集合沈線が充填されるが、区画間「工」字部分の１単位にも沈線文が施されている。地文は単節 RL の横位施文で、文様帯上端の隆帯上と下端隆帯の一部にも施される。口縁部は内傾する部位から口唇部までが無文である。残存率70%。現存高35.0㎝、口径22.8㎝、器厚0.6～1.6㎝を測る。

８は浅鉢である。胴部は丸みを帯びて立ち上がり、肩部で内湾する。口唇部直下には沈線を巡らす他は無文である。内外ともに磨きが加えられているが、外面はやや粗い。残存率は、図化部分の30%。現存高12.0㎝、口径推定28.8㎝、器厚0.7～0.9㎝を測る。

９～14は勝坂式土器で、口縁部及び胴部破片である。９は口縁部無文帯が内湾する器形で、口唇部直下に沈線を巡らす。頸部に楕円区画文を置くが、文様帯上端の区画は認められない。区画文隆帯上には爪形文、内側には単沈線を引く。区画内には縦位集合沈線を施している。10は口唇部直下に隆帯を巡らし、下部の文様帯と区画する。口唇部は直立する。文様は半截竹管の内皮面で波状平行沈線が見られる。11は口

縁部文様の一部で、隆帯による区画文を残す。隆帯上には刻目、区画内は縦位集合沈線を充填する。12は頸部付近がやや膨らむ器形を呈するものと思われる。肥厚した口唇部以下には地文０段多条の単節 RL を横位施文している。13は縦位区画文土器と考えられる。文様帯上端の隆帯は垂下隆帯との結合部が突起状を呈している。隆帯上には爪形文、隆帯脇には複沈線を引く。区画内にも爪形文の使用が認められる。14は三角形区画の一部と考えられる。隆帯脇に幅広の角押文を施す。15は阿玉台Ⅱ式土器で、浅鉢と思われる。区画内に複列の角押文を施す。胎土には金雲母が顕著に含まれている。16は小型円筒形土器である。地文に０段多条単節 RL を横位、斜位に施し、口縁部より垂下する渦巻文を細沈線で描く。17は胴部破片で、縦位隆帯の一部を残す。地文は単節 LR で、縦位斜位に施すが、隆帯上にも施文されている。18も胴部破片で、地文単節 RL を縦位施文している。19は浅鉢の口縁部である。肩部で強く屈曲する器形を呈し、口縁部は内傾する。幅の狭く長い楕円区画を口縁部に配しており、区画内には幅広の角押文とその直下に波状沈線を沿わせる。なお、本土器は第８号住居跡覆土からも破片が出土している（第62図37）。

遺構外出土土器（第76～78図）

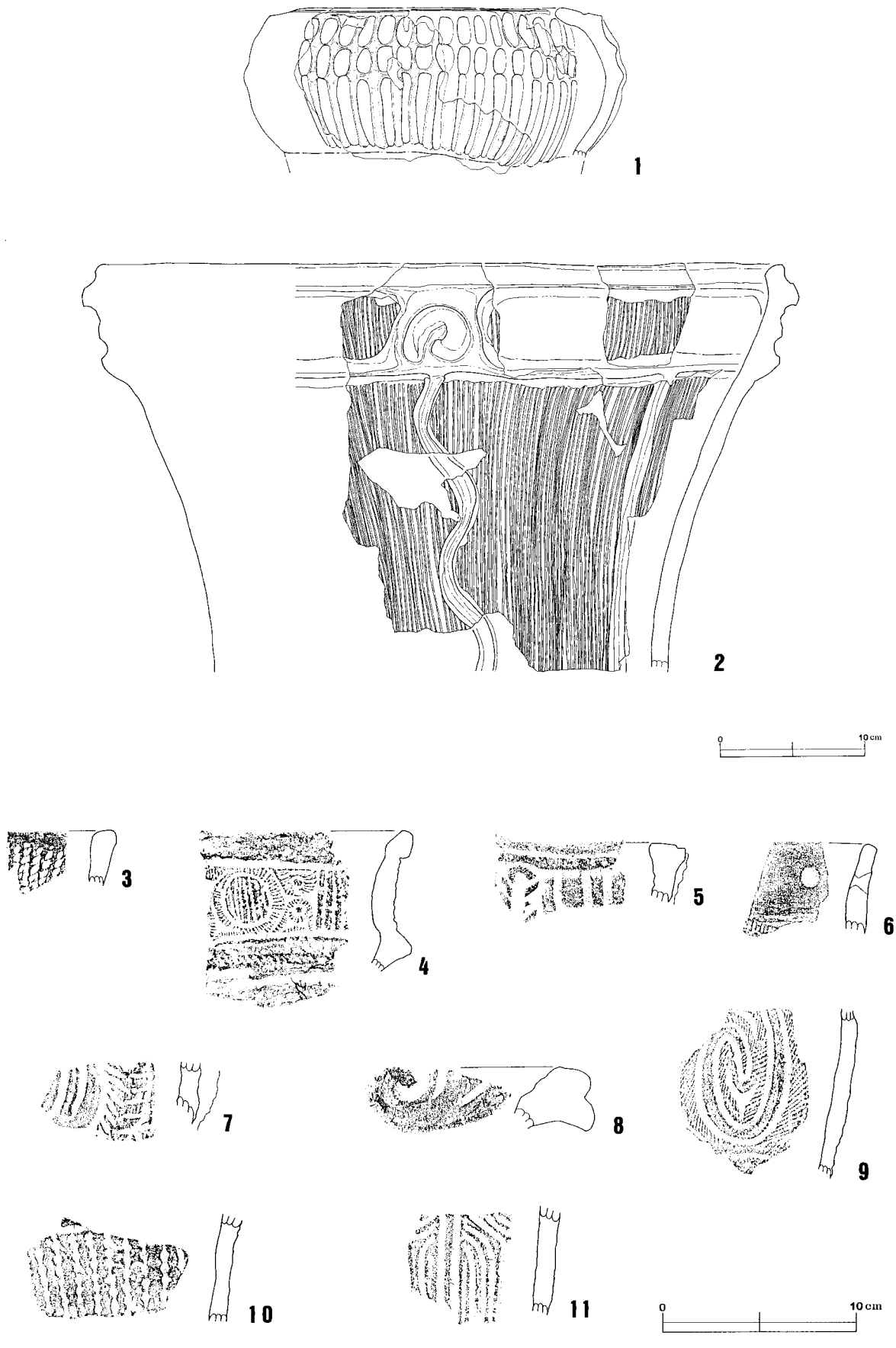
第76～78図に示した土器は、主としてＤ・Ｅ－３グリッドを中心に広がる遺物包含層から出土したものを提示した。ただし、１は遺物整理中に注記が剥がれ帰属が不明になったもの、２は遺構の時期から大幅に外れるため遺構外出土土器として取り扱うこととした。

１は勝坂Ⅲ式後半、加曽利ＥⅠ式初頭にたびたび認められる土器である。器形としては多喜窪タイプに類似する。やや太めの胴部は直立気味で、頸部から口縁部にかけて強く内湾する。口唇部はさらに内側に突出して平坦面を作り、１条の沈線を巡らす。口頸部は一帯の文様帯となっている。上位には横位に２条の隆帯を貼り付け、縦位隆帯はこれを跨ぐように付けられ、さらに頸部まで垂下する。末端は貼り付けの痕跡をそのまま残す。隆帯間は、なで付けられる程度の処理で明確な沈線とはなっていない。残存する胴部には地文は認められなかった。器面内外ともに被熱による剥離が顕著で、炉に使用された可能性がある。残存率は、図化部分で30％。現存高10.2㎝、口径推定16.6㎝、器厚0.8～1.0㎝を測る。

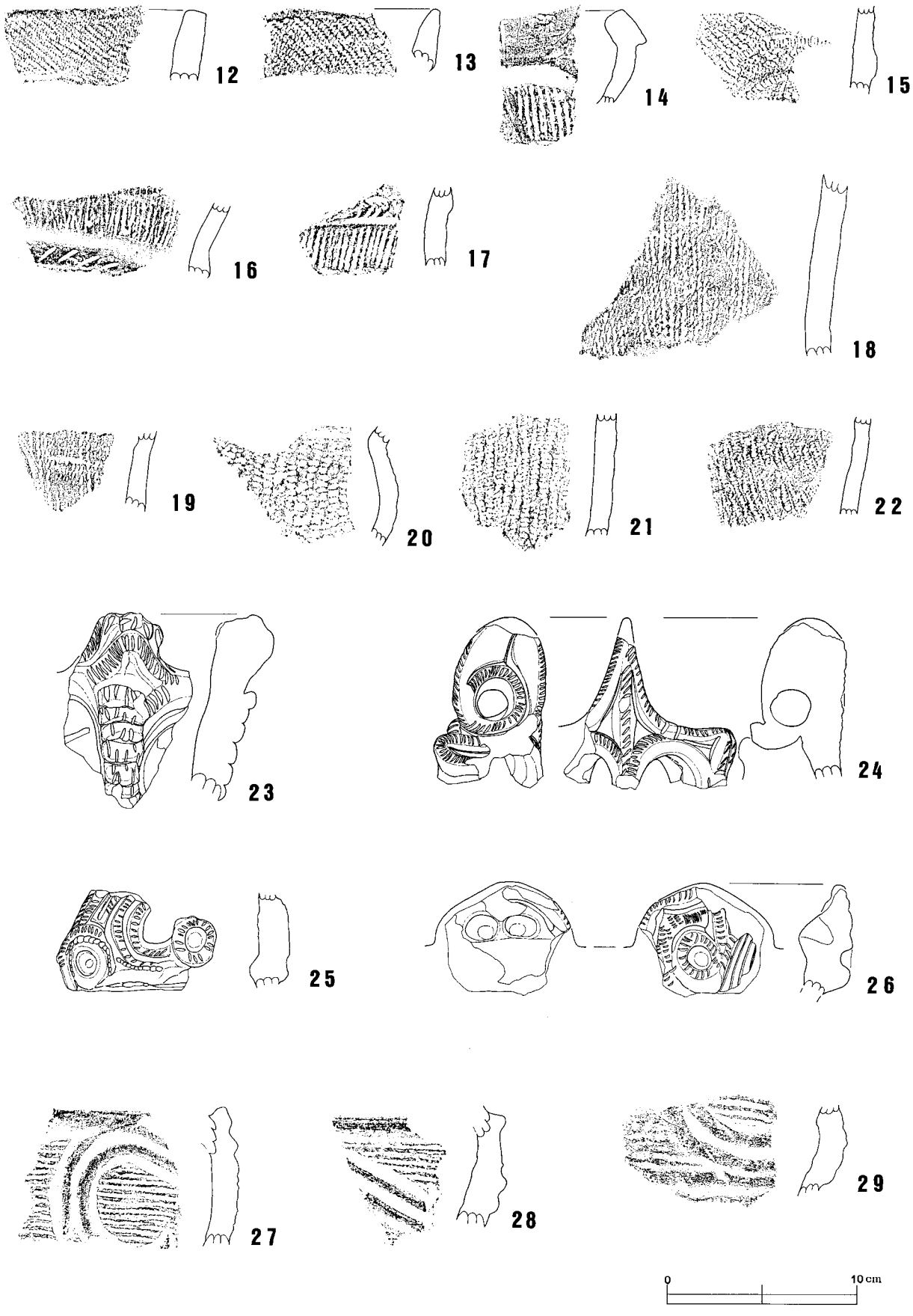
２は第７号住居跡覆土最上層より遺構確認時に出土したものである。加曽利ＥⅡ式前葉段階と考えられる。当該住居跡は他の出土土器から勝坂式最終末の所産と考えられるが、本土器の出土状況は住居跡の埋没期間の推定に興味深い問題を与えている。器形は、胴部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、口唇部がわずかに内傾する。口縁部文様は、独立した渦巻文と長楕円形の区画文を交互に配置するもので、各４単位と思われる。頸部無文帯は持たない。胴部文様は、口縁部文様帯下端隆帯から１本隆帯と蛇行隆帯を交互垂下させるが、残存部では蛇行隆帯が渦巻文に、１本隆帯が区画文中央に対応している。推定各４単位。なお、口縁部、胴部の隆帯はいずれも断面三角形を呈する。地文は木口状施文具による条線である。残存率、図化部分で30％。現存高23.5㎝、口径推定45.0㎝、器厚1.1～1.3㎝を測る。

３は撚糸文土器の口縁部破片である。口唇部がわずかに肥厚する。地文は撚糸１である。

４は深鉢の口縁部破片である。頸部でくの字に屈曲し、口縁部が外反する器形を呈する。口縁部は幅の狭い無文帯で、下端が肥厚する。口頸部文様は、長方形状の単位内に円環文と彫刻的な三叉文の組合せを施し、空間は爪形文、集合三角押文で充填する。頸部の隆帯上には刻目を加えている。頸部以下は無文である。５は多喜窪タイプの口縁部破片と思われる。破片右側がやや上がり突起となる可能性がある。口唇部に１条の細い隆帯を貼り付けている。左側には区画隆帯の一部があり、隆帯上に刻目を施している。空間には太い沈線でＵ字文、縦位沈線を充填している。６は円筒形土器の口縁部である。幅広の口縁部無

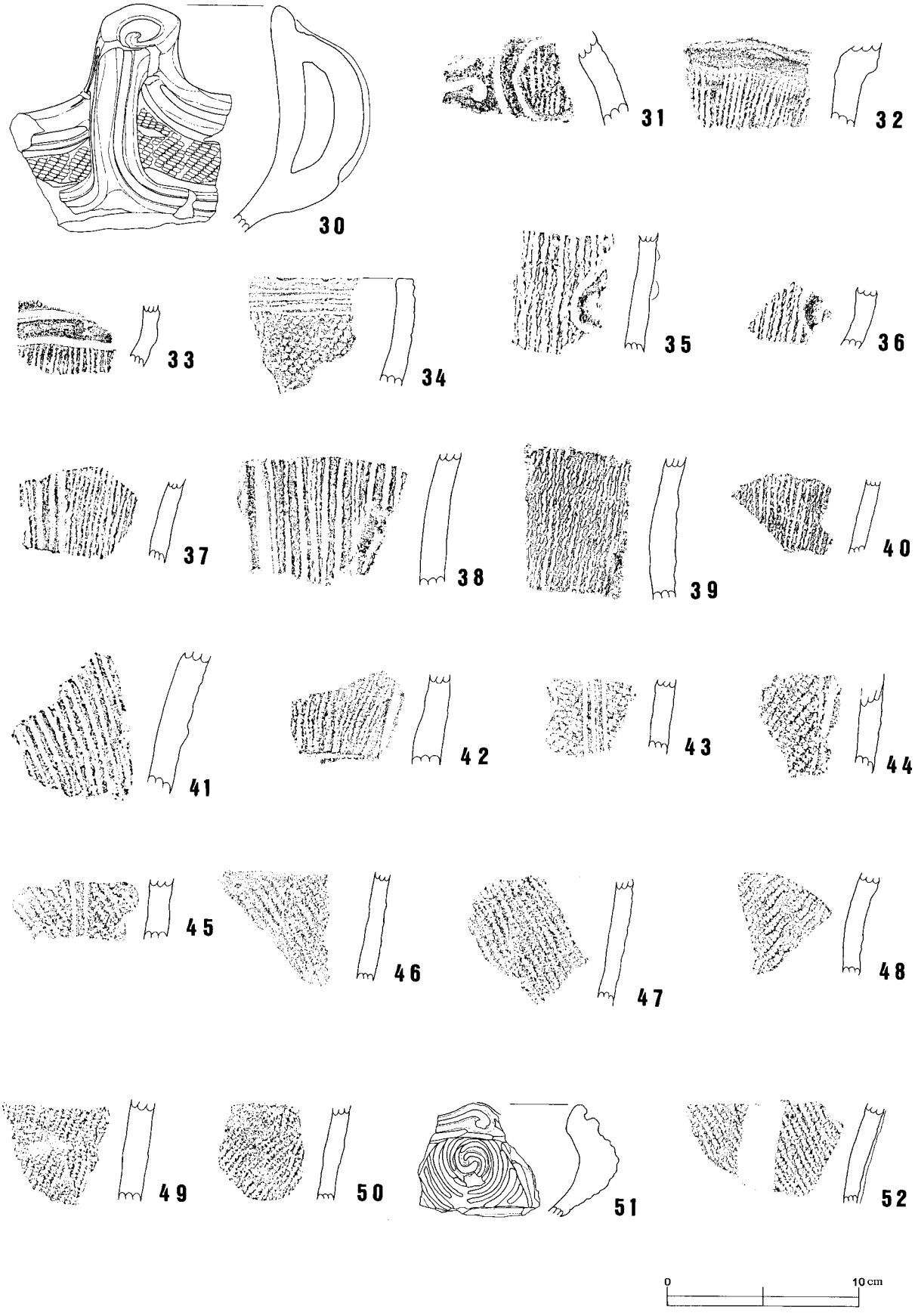


第76図　遺構外出土土器（1）



第77図　遺構外出土土器（２）

文帯直下に角押文を施す。無文帯部には両面から穿った孔があるが、補修孔と考えられる。７は円筒形土器の胴部と思われる。隆帯上に綾杉文、空間には沈線文を施している。８は浅鉢の肩部である。突出する渦巻文の一部を残している。９は深鉢の胴部である。垂下する渦巻文を平行沈線で描き、空間に三叉文、爪形文を充填する。10は胴部破片で、先端に文様帯下端隆帯の一部を残している。全体に連続円形刺突を集合的に施している。11も胴部破片で、２本沈線により作出された垂下隆帯の両側に平行沈線文を描出している。12・13は地文が施された口縁部破片で、単節 RL を横位施文している。両者とも下端に文様区画沈線の一部を残す。14は加曽利ＥⅠ式土器の口縁部破片で、内湾の度合いが強い。隆帯脇に沈線を施し、区画内に撚糸 r を縦位施文している。15は幅広の隆帯と隆帯両脇に施された角押文が認められる。地文に単節 RL を横位、縦位に施すが、隆帯上にも及んでいる。16は頸部破片である。背の低い区画隆帯上に斜行する刻目が加飾される。隆帯脇にはなぞり状の沈線を引く。地文は撚糸 l で、縦位に施文される。17は文様帯下端区画隆帯を残し、円筒形土器と思われる。隆帯上には綾杉文、地文は撚糸 l の縦位施文である。18～22は地文のみの胴部破片である。18・19は撚糸 l の縦位施文、20は粗い単節 RL の斜位施文、21は０段多条単節 RL の斜位施文、22も21と同様であるがやや間隔を空けて施されている。23～26は勝坂式土器の突起及び把手である。23は大柄な作りの突起で、菱形の基部の下部は文様区画隆帯に連続する。基部は口唇部両側より伸びる刻目加飾の隆帯で縁取られ、先端に刻目表現の王冠状突起を付ける。菱形下部より垂下する区画隆帯には橋渡し状に粘土が重層的に貼り付けられ、刻み状の交互刺突を加える。隆帯脇には単沈線を引く。左右の区画については、残存部分が少ないため詳細は不明であるが、左側には三叉文の一部が認められる。24は頂部が尖頭形を呈する眼鏡状把手で、隆帯で縁取られている。隆帯上には刻目、交互刺突を施している。尖頭形頂部は側面楕円形で、孔を作出し、左側面には孔に沿った刻目と三叉文を加えている。眼鏡部分は横に張り、側面先端は角状に突出する。孔は表面が２孔、裏面が１孔となっている。25は三角形を基調とする把手で、中央に孔を有する。孔の周囲は同心円の沈線、刻目、三角押文、三叉文を施し、左右には隆帯貼り付けによる円環文を配する。裏面の処理も正面と同様であるが、三角押文を多用する。26は裏面に人面を持つ把手で、丸みを帯びた三角形を呈する。人面は簡素な作りで、２つの孔により表現がなされている。孔周囲の装飾は、孔の上に円弧を引くのみである。表面は円環文とそれに付随する隆帯を残すが、モチーフは不明である。隆帯上には刻目、周囲には平行沈線、爪形文を施している。27～29はいずれも口縁部破片で、加曽利ＥⅠ式土器前半段階と思われる。27は比較的大型の土器と考えられる。２本組隆帯で横 S 字文を作出する。隆帯脇には沈線を伴う。地文は撚糸 l の横位施文。28は横 S 字文の中間部分である。２本組隆帯で作出し、地文に撚糸 l を横位に施文している。29は両面とも被熱痕跡が顕著で、特に内面の剥離が目立つ。炉に使用されていた可能性がある。２本組隆帯の横 S 字文の一部を残す。地文は撚糸 l の横位施文。30～51は加曽利ＥⅠ式後半あるいは加曽利ＥⅡ式前葉の土器と考えられる。30は大柄な橋状把手を有する口縁部破片である。把手先端は突起状を呈し、文様帯下部から伸びる沈線が先端で渦を巻く。口縁部文様は把手を区画の一部とし、帯状の単位文を推定４単位置く。区画内の地文は単節 RL の縦位施文。頸部は無文帯である。31は浅鉢の肩部破片である。沈線描出の円形区画と区画間の横位小渦巻文が認められる。地文は撚糸 l の縦位施文。32は頸部破片で、口縁部文様下端隆帯の一部を残す。地文は撚糸 l の縦位施文。33は口縁部文様部分で区画隆帯の一部である。区画内には地文撚糸 l を縦位に施す。34は円筒形土器の口縁部破片で、口縁部に３本沈線を巡らし、沈線による懸垂文を垂下させる。地文は単節 RL の縦位施文。35は胴部破片で、地文撚糸 l を縦位施文し、蛇行隆帯あるいは渦巻



第78図　遺構外出土土器（３）

文を貼り付けている。36は口縁部文様の一部である。撚糸 l の縦位施文後、渦巻文を貼り付ける。37～50は、いずれも胴部破片である。37は懸垂文に３本沈線を引く。38は隆帯懸垂文で、１本あるいは２本隆帯と蛇行隆帯を交互垂下させる。両者とも地文は撚糸 l の縦位施文。39～41は地文のみで撚糸 l を縦位、斜位に施す。42は下端に横位沈線が認められ、これに垂下沈線が結合する。地文は単節 RL 斜位施文。43～45は２～３沈線による懸垂文が描かれる。地文は43・44が単節 RL の縦位、45は単節 LR の縦位施文である。46～50は地文のみ施された胴部破片である。46・47は０段多条の単節 LR 縦位、48・49は単節 RL の縦位、50は縦位、斜位施文である。51は口縁部に渦巻文を持つ土器で内４単位は瘤状に突出し、その上には蕨状文を施した小突起を置く。頸部は無文帯になるものと思われる。52は微隆起線文を施し、地文に単節 RL を横位に充填するが、微隆起線上にも施文されている。磨り消し部分のモチーフは不明である。

石　器

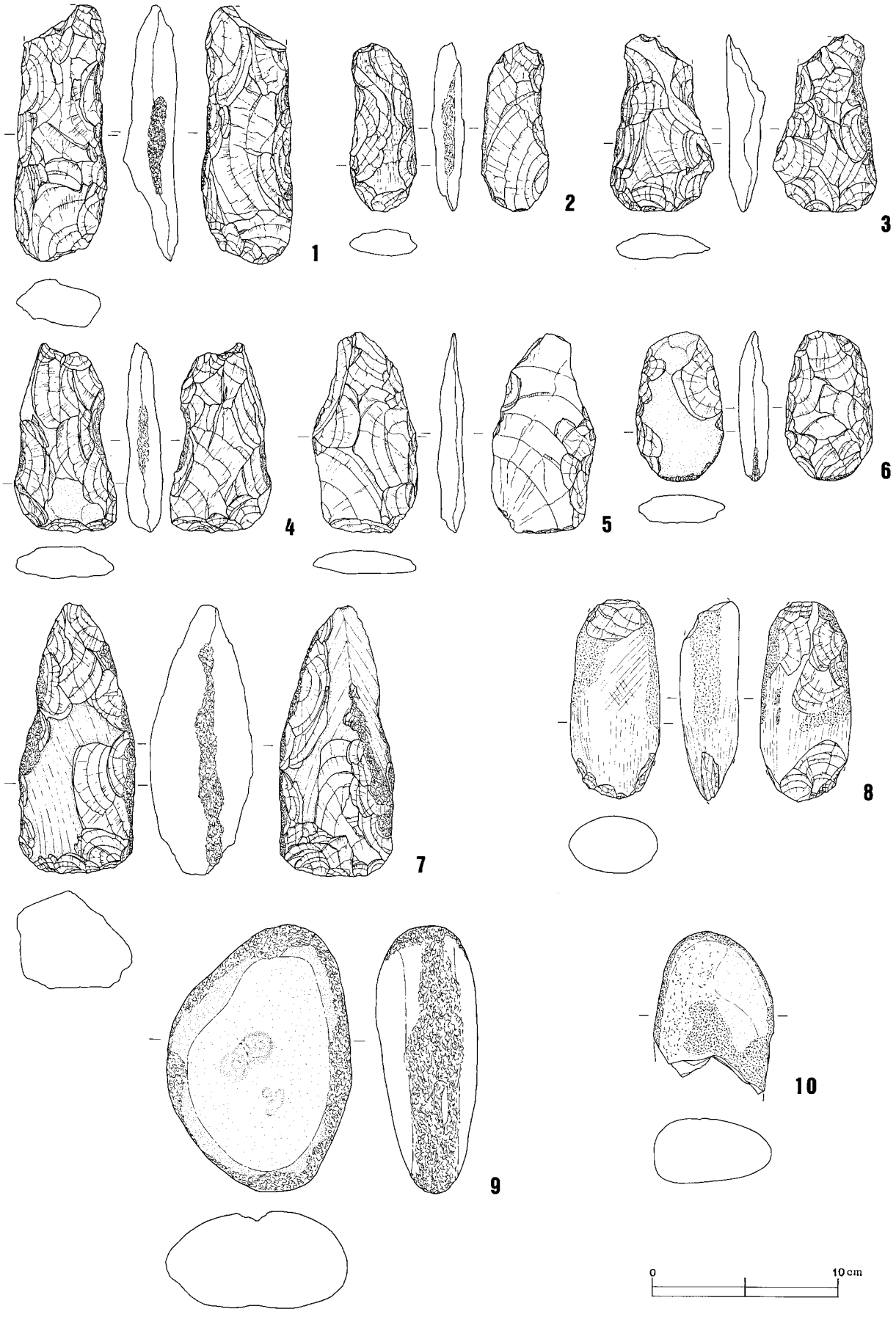
第１号住居跡出土石器（第79図）

本住居跡からは打製石斧を中心として多量の石器が出土しているが、その多くが破損品あるいは破片である。第79図には打製石斧７点、磨製石斧１点、敲石２点を提示した。

１～７は打製石斧である。１は短冊形で、基部先端を欠く。裏面に主要剥離面を残す。両側縁には調整剥離が加えられ、さらに敲打を施している。刃部は両面から作出された両刃で、形状は円刃であるが、裏面の使用時剥離が目立つ。２も短冊形の打製石斧で、正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。側縁の調整は正面左側に顕著で、右側には敲打が多く加えられている。刃部は片刃で形状は円刃であるが、正面に剥離が目立つ。刃部作出時か、使用時かは不明である。３は撥形を呈し、基部の一部を欠損する。基部から中央にかけて細長く自然面を残している。裏面は多方向からの面的剥離によって形成されている。両側縁には調整剥離が加えられているが、正面左側に多く敲打を加えている。刃部は両刃で、先端は直線部分が長く直刃に近い。４も撥形であるが、正面右側の調整剥離と敲打により湾曲するような形状を呈する。正面に部分的に自然面、裏面に主要剥離面を残している。刃部は両面剥離の両刃で、直線部分の長い直刃状を呈する。５は、やや粗雑な作りに打製石斧で、撥形を呈する。裏面には主要剥離面を残している。両側縁の調整剥離は部分的で、敲打も加えられない。刃部は断面が片刃で、形状は直刃である。裏面に使用時と考えられる剥離が見られる。６は楕円形を呈する。正面に大きく自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。調整剥離は両側縁とも細かいが、敲打は認められない。刃部は正面に剥離が認められず、片刃と考えられる。形状は円刃である。なお、刃部には広範囲の敲打痕が見られ、比較的固いものを対象としたか、敲石に転用された可能性がある。７は厚手の打製石斧で、基部は尖頭状を呈する。両面に自然面を大きく残し、厚さからも未製品ともとれるが、刃部は両面からの剥離で整えられている。また、刃部裏面左側の剥離は使用時の可能性がある。両側縁は調整剥離と敲打痕が広範囲にわたって施されている。敲打は自然面稜線上にも認められる。刃部は断面形が両刃で、形状は丸みを帯びた直刃である。

８は磨製石斧で、刃部、基部に調整痕、敲打痕が認められる。欠損後に修復が試みられたものと考えられる。敲打痕の一部は剥離上に及ぶ。平面形状は楕円形で、断面形はやや偏平である。刃部には垂直方向の、基部周辺には斜行する擦痕が顕著に認められる。

９は円礫を使用した敲石で、両面に凹みを有する。被熱痕跡が認められ、一部には亀裂が入る。敲打痕は周縁部に全周的に認められるが、図下端に特に顕著である。平坦部にはほとんど見られない。10は破損



第79図　第１号住居跡出土石器

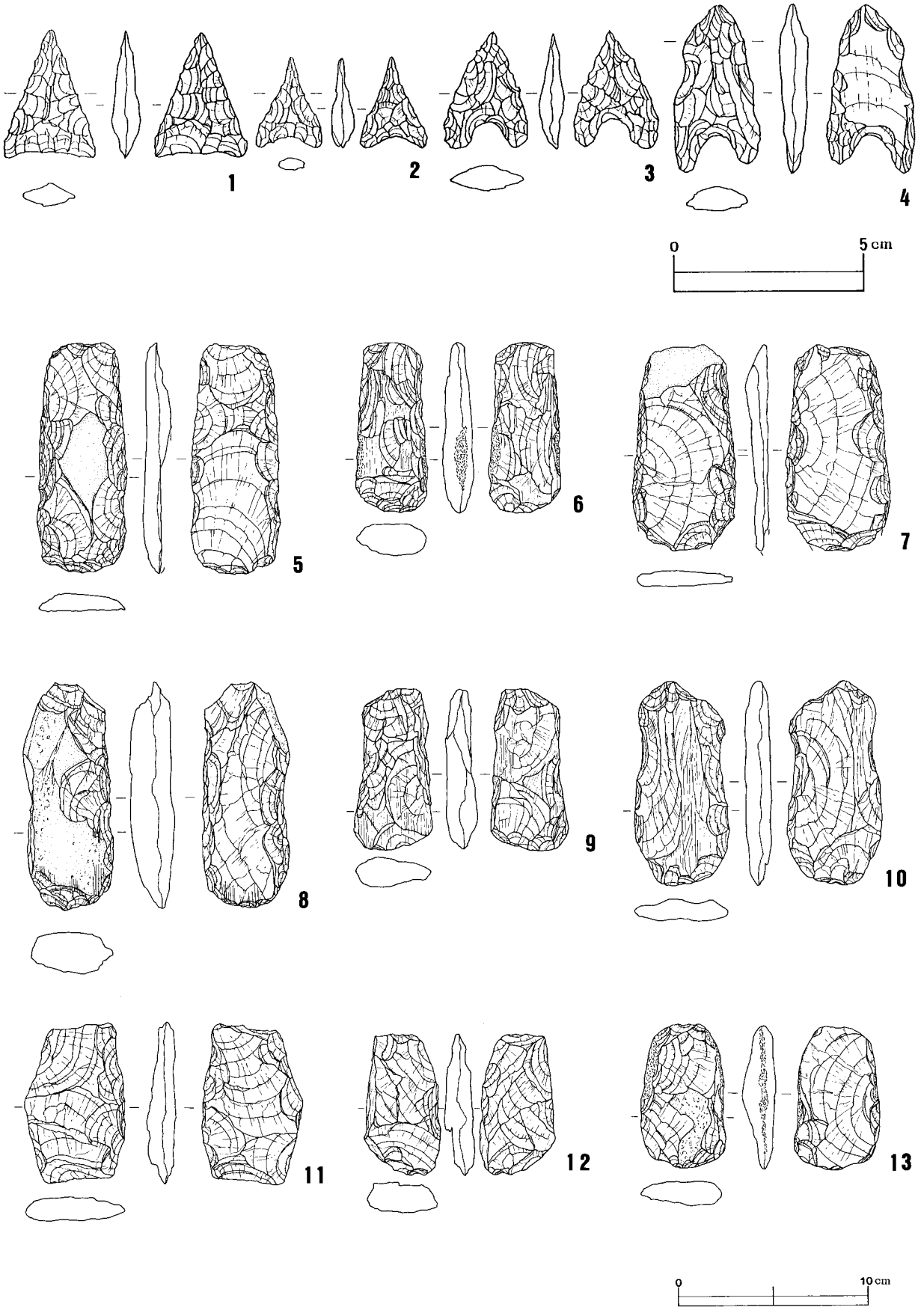
した敲石である。残存部周縁部と正面中央に敲打痕が顕著である。

第２号住居跡出土石器（第80～82図）

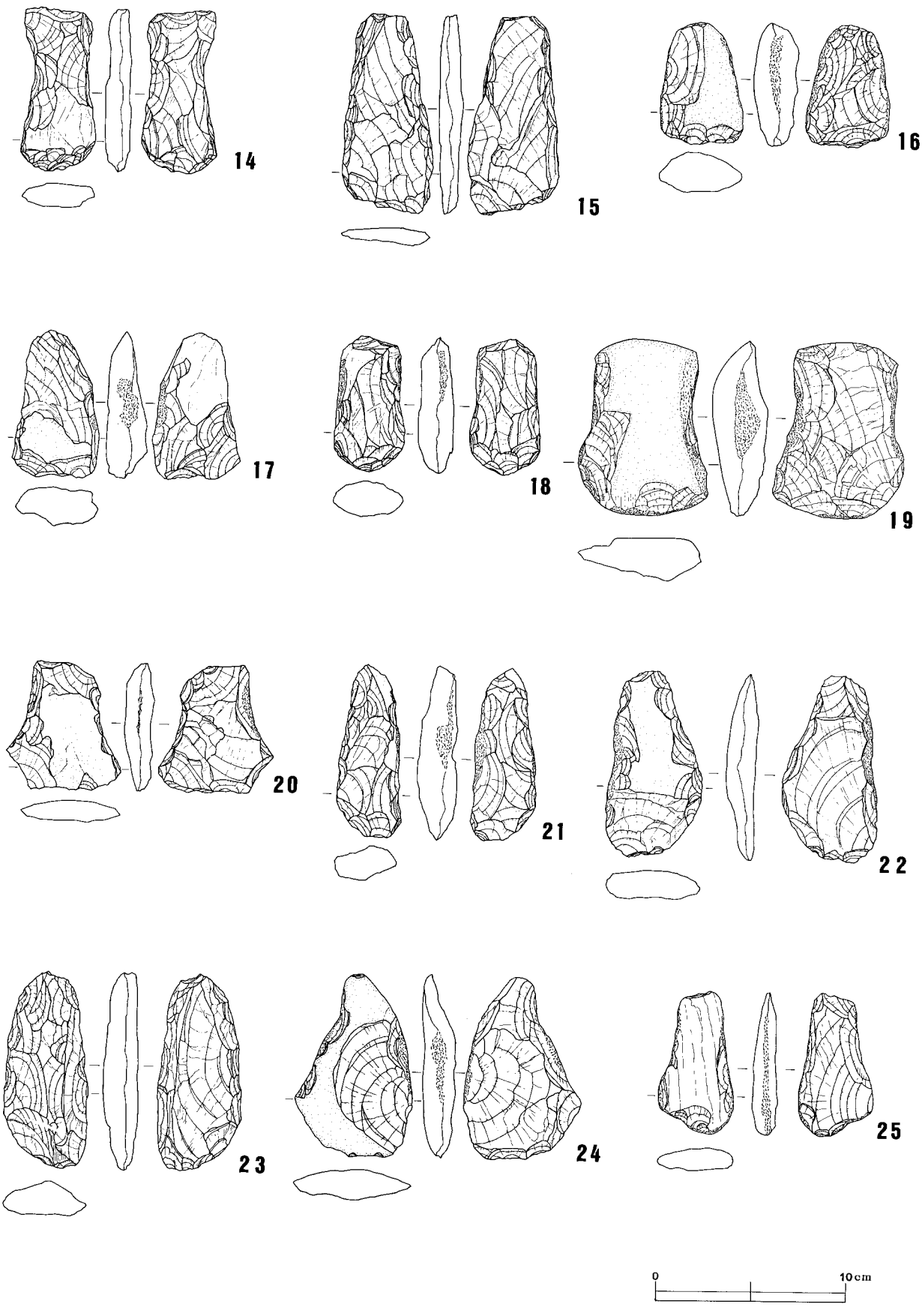
本住居跡からは多量の土器とともに他の住居跡を凌駕する石器が出土しており、特に打製石斧は60点余を数える。ただし、その多くが破損品、破片である。第80～82図には石鏃４点、完形あるいはそれに近い打製石斧21点、敲石１点、石皿・多孔石２点を示した。

１～４は石鏃で、いずれも完形である。１は整った二等辺三角形を呈し、平基、無茎である。基部は若干湾曲している。両面とも押圧剥離による細かい調整が辺に対してほぼ直角に施され、ほぼ中央に稜を形成している。基部裏面には、やや大きな剥離が入る。２は小型石鏃で、先端が細く仕上げられている。凹基、無茎であるが、基部の抉りは浅い。調整剥離は、正面が辺に対して直角に、裏面にはややランダムに施されている。３は両脚が長く、凹基、無茎である。側縁は湾曲し、脚部先端は丸みを帯びる。作りはやや粗く、両面ともに押圧剥離が大きめに入る。中央は厚手である。４は長めの石鏃で、作りが粗く裏面には主要剥離面を残している。凹基、無茎。基部の抉りは深い。側縁の形状はわずかに湾曲し、脚部先端は丸みを帯びる。調整剥離は正面が幅広且つランダムで、裏面は側縁部にとどまる。

５～25は打製石斧である。形態的には微妙なものもあるが、５～13が短冊形、14～25を撥形とした。ただし、14のように両側縁の抉りによって分銅形に近い中間的なものもある。５は裏面に使用時と思われる剥離が大きく入るが、修復した痕跡が認められる。正面中央に自然面を残す。両側縁には調整剥離が細かく加えられ、整った短冊形に仕上げられている。敲打痕はほとんど見られない。刃部は直刃で、正面の調整痕から両刃だったと思われるが、使用時の剥離があるため断定はできない。６は両面に自然面を残す。両側縁には細かい調整が加えられ､刃部近くには敲打が施されている｡刃部は両面から作出された両刃で、形状は円刃である。７は正面基部に自然面、裏面に主要剥離面を残す横長剥片を使用している。調整剥離は両側縁から刃部にかけて多く加えられ、周縁部に終始する。側縁の敲打痕は認められない。刃部は両刃と考えられ、形状は円刃である。８は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。横長の剥片を使用している。基部は正面右側に剥離が多く、左側は未加工である。側縁の調整剥離は正面右側に集中するが、裏面は両側縁に施される。敲打痕はあまり顕著でなく、面を形成しない。刃部は円刃で、両面からの剥離が入る両刃。刃部先端から自然面の一部に擦痕が認められる。また、自然面にはまばらに敲打がなされている。９は刃部がわずかに広い形態を呈する。正面は一部に自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。調整剥離は両側縁とも正面に顕著で、裏面はほとんど施されない。両面とも研磨状の擦痕が多く認められる。刃部は両面剥離の両刃で、やや傾いた直刃である。10は基部がわずかに抉れる形状を呈する。正面中央に線状に自然面、裏面に主要剥離面、一部自然面を残している。正面には大きな面的剥離が見られるが、調整剥離は刃部、基部を含めて周縁部に施されている。刃部は両面からの剥離による両刃で、形状は円刃である。刃部を中心に擦痕が顕著である。11は側縁が横に広がる形状を呈するが、基部は使用時に欠損している可能性がある。正面は多方向からの面的剥離で構成され、裏面には主要剥離面を残す。側縁の調整は大きめの剥離が目立ち、やや粗雑な印象を与える。刃部は両面剥離で作出された両刃で、形状は直刃である。12は両面とも多方向からの面的剥離によって構成される。両側縁の調整は部分的に大きめの剥離を入れるのみで、やや粗雑な作りである。左右ともに節理面を残している。刃部は両面からの剥離で作出された両刃で、斜刃である。13は楕円形に近い形状を呈している。正面には敲打が施された自然面を一部に、裏面には主要剥離面を残している。側縁の調整剥離は縁辺にとどまり、基部



第80図　第２号住居跡出土石器（１）

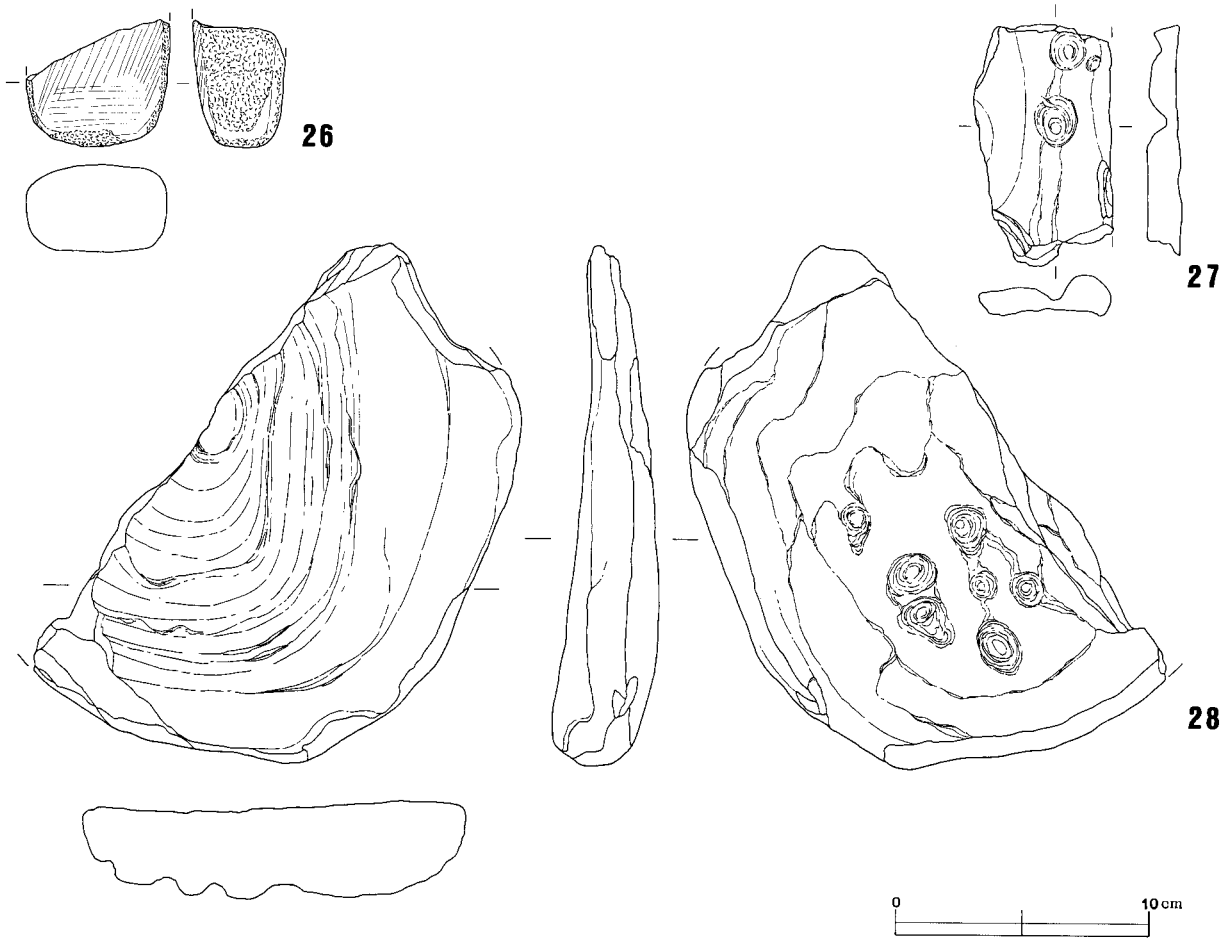


第81図　第２号住居跡出土石器（２）

にかけて広範囲に敲打痕が認められる。刃部は断面は両刃であるが、調整剥離は主として正面に見られる。形状は円刃である。14は正面に自然面、裏面中央部に主要剥離面を残している。正面左側の抉りが若干深い。基部と両側縁には面的な剥離が両面から入る。また、両側縁には敲打が加えられるが、面は形成しない。刃部は両面から作出された両刃であるが、一部は使用時の剥離と考えられる。形状は円刃である。15は両面に主要剥離面を残す。基部、両側縁の調整は縁辺部に集中し、刃部周辺には面的な大きな剥離が入る。また、基部側縁には弱い敲打が加えられている。刃部は両刃で形状は直刃であるが、やや斜になる。16は小型の打製石斧である。正面右側に自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。基部は丸みを帯びる。側縁の調整は縁辺に限定されるが、広範囲にわたって面的に敲打が加えられている。刃部は両面加工の両刃で、形状は直刃である。ただし、使用時の潰れが認められる。17は正面刃部付近と裏面基部に自然面を残している。裏面の状況から、欠損したものを再加工した可能性がある。側縁の調整は裏面左側に顕著で、右側は部分的になされるのみである。敲打は面的に加えられている。刃部は両面に加工痕が認められる両刃で、形状は直刃である。18は比較的小型の打製石斧で、正面は左右からの大きな剥離が入り正面基部の一部に自然面を残す。裏面は多方向の面的剥離で構成されている。両側縁の調整は縁辺に沿って加えられ、基部を中心に敲打が施される。刃部は両面加工の両刃で正面には擦痕が認められる。形状は中心がやや尖った円刃である。19は正面に大きく自然面、裏面は一部に主要剥離面が残存する。調整剥離は基部、両側縁とも縁辺に施され、面的な敲打が加えられている。刃部は両面加工の両刃で、敲打状の潰れが認められる。また、自然面の一部には擦痕が見られる。形状は円刃である。20は小型の打製石斧で、正面に自然面、裏面に大きな面的剥離が入るが主要剥離面を残す。基部、両側縁の調整剥離は縁辺部に集中し、敲打が施されている。刃部は正面からの剥離で作出された片刃であるが、断面形は両刃状を呈する。形状は直刃である。21はやや細身の打製石斧である。正面の一部と基部先端の両面に自然面を残している。調整は基部から両側縁にかけて細かく施され、縁辺には敲打を加えている。刃部は両面加工の両刃で、形状はやや偏った円刃である。22は正面中央から基部にかけて自然面、裏面に大きく主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整は縁辺に沿って施され、正面左側縁には面的に敲打が加えられている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。23は正面が多方向からの面的剥離、裏面には主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は裏面に顕著で、正面は部分的に施される。ただし、縁辺に限定される。敲打痕は見られない。刃部は両面加工の両刃で、正面右に偏った斜刃状を呈する。正面には擦痕が認められる。24は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部は屈曲する。正面右側に大きな面的剥離が入る他は素材剥片の様相を明確に残している。両側縁部には縁辺に調整剥離が施され、面的な敲打が加えられている。刃部にも正面の調整剥離はほとんど認められず、片刃状を呈している。形状は円刃である。25は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残す。基部、両側縁の調整剥離は、ほとんどが縁辺部に沿って施されるが、裏面の剥離はやや大きく面的になっている。刃部は両面加工の両刃で、形状は正面右に偏った斜刃である。側縁から刃部にかけて顕著な敲打痕が認められるが、側縁は製作時、刃部は使用時のものと考えられる。

26は敲石としたが、敲打と擦痕が顕著に見られること、面構成が明確なことから磨製石斧の基部の可能性もある。敲打は側面と図端部に面的に施され、正面、裏面には横、斜方向の擦痕が認められる。

27は多孔石である。裏面が節理面で剥離しているため、石皿かどうかは不明である。２箇所の孔が残存する。28は石皿で、裏面は多孔石となっている。全体の１/３ほどが残存していると思われる。側縁には



第82図　第２号住居跡出土石器（３）

整形時の調整痕を残す。正面は使い込まれ浅い皿状を呈し、裏面には８箇所の孔が残存する。

第３号住居跡出土石器（第83図）

本住居跡は覆土がほとんど残存していないため、土器、石器ともに出土量は極めて少ない。図示し得た石器は敲石２点、石皿１点で、いずれも欠損部分が多い。

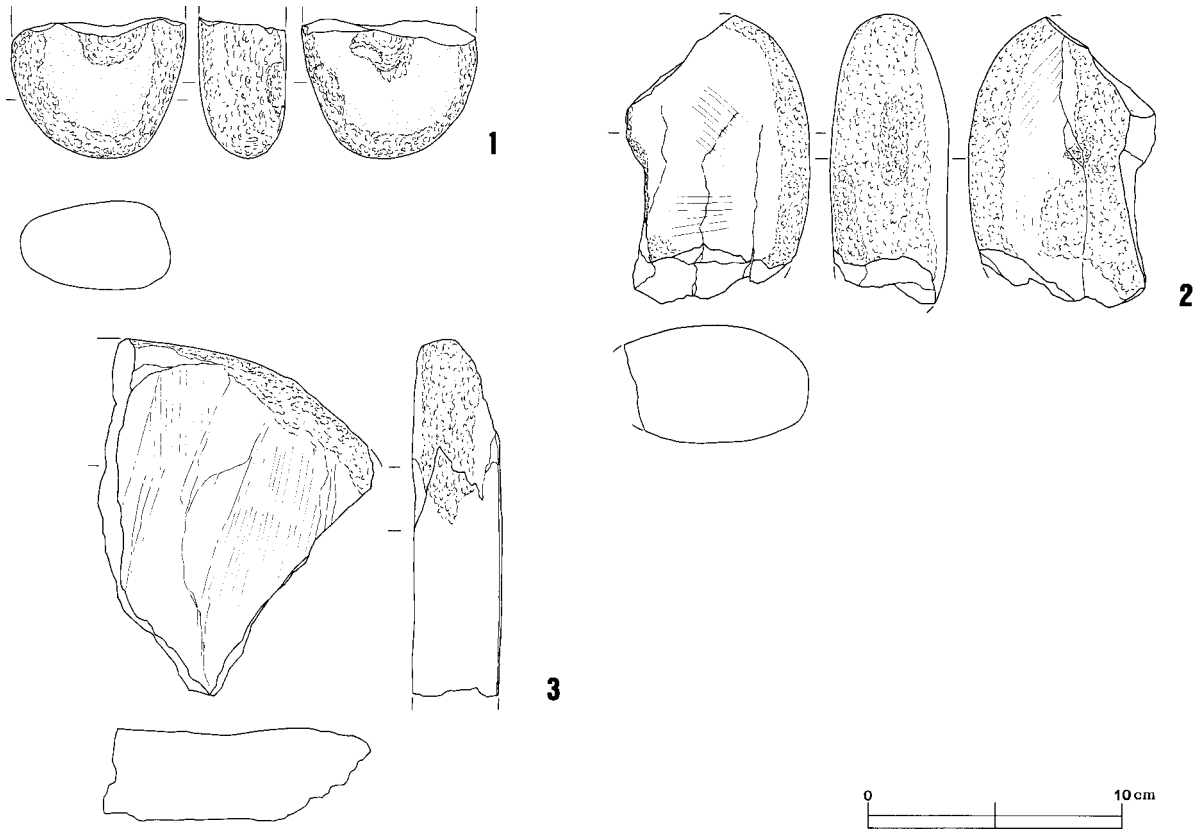
１は敲石で、およそ１/２が残存する。周縁部には均等に敲打痕が認められ、両面に自然面を残している。擦痕は見られない。凹みは敲打によって両面に作出されている。２も円礫利用の敲石で、磨石を兼ねる。被熱痕跡が顕著で、亀裂が入っている。敲打痕は周縁部に見られるが、部分的に強い敲打が認められる。平坦部には正面、裏面ともに擦痕、敲打痕を残し、裏面のみ浅い凹みが見られる。

３は平坦面に擦痕を残し、形状から石皿と考えられる。図上部には周縁部に敲打痕が見られるが、使用時ではなく整形時の所産と思われる。正面の擦痕は線的で、砥石としての使用も想定される。

第４号住居跡出土石器（第84図）

本住居跡の石器出土量は比較的少ない。器種は打製石斧が主体となるが、そのほとんどが破損品あるいは一部のみの破片である。図化したのは打製石斧４点である。

１～４は打製石斧で、いずれも撥形の範疇であるが、３・４は抉りが深く入る。特に３は分銅形に近い中間的形態を呈する。１は正面に主要剥離面、裏面に自然面を大きく残す。基部と両側縁の調整は周縁部に限定してなされ、基部の一部に敲打が施されている。刃部は両面加工の両刃であるが、裏面が平坦であ



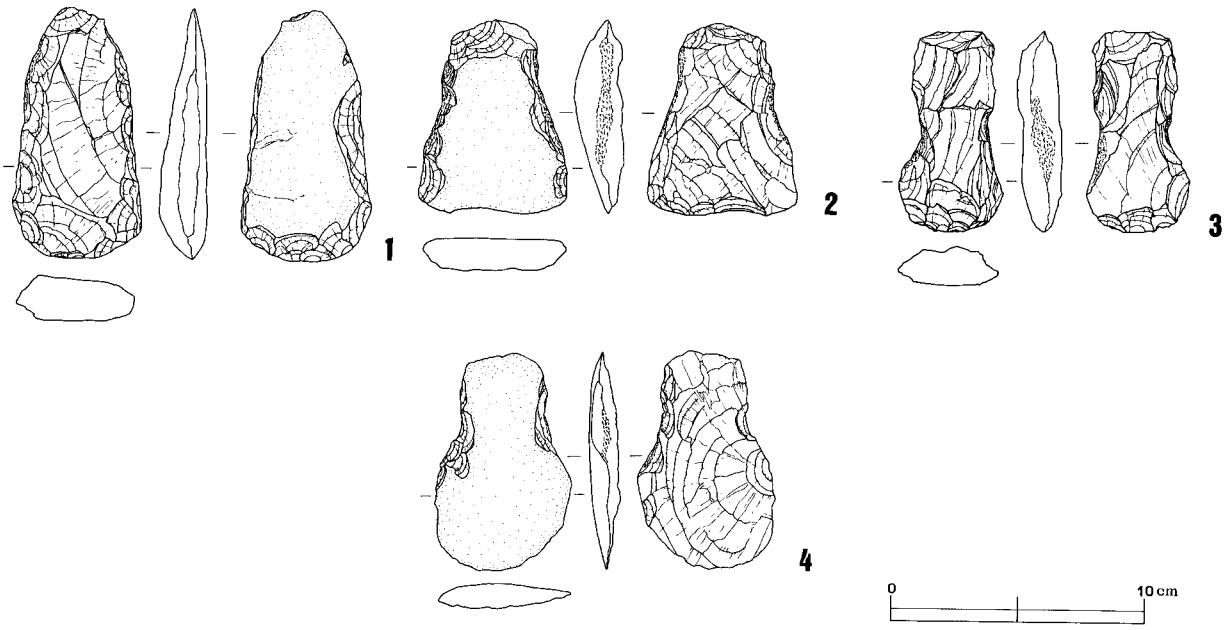
第83図　第３号住居跡出土石器

るため断面は片刃状を呈する。形状は円刃である。２は正面に自然面、裏面は多方向の面的剥離で構成されている。基部から両側縁の調整剥離は周縁部に限定され、中心に届く大きな剥離は見られない。敲打は両側縁に面的に施される。刃部は裏面に剥離が認められるが、正面は自然面をそのまま残している。片刃で、形状は直刃である。自然面に擦痕は認められない。３は正面が両側縁からの面的剥離、裏面には主要剥離面を残している。基部はやや大きめの剥離によって整えられているが、両側縁の調整剥離は周縁部の小さな剥離によって抉りを作出する。抉り付近を中心に敲打が施される。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。４は横長剥片の一部を調整したのみで、簡素な作りである。正面に自然面、裏面に大きく主要剥離面を残す。両側縁の調整は中央から基部側縁にかけて周縁部に限定して施され、線状に敲打を入れる。基部先端は未調整である。刃部は一時剥離面をそのまま使用するもので、形状は円刃である。自然面に擦痕は認められなかった。

第５号住居跡出土石器（第85図）

本住居跡からは打製石斧を中心に多数の石器の出土を見たが、その多くが破損品である。図示した石器は打製石斧４点、磨製石斧１点、敲石２点である。

１～３は打製石斧である。１は抉りの深い撥形で、他の２点は短冊形に近い。１は両面とも多方向からの面的剥離で構成され、一部に自然面を残している。基部、両側縁の調整剥離は比較的大きな剥離によってなされ、側縁には弱い敲打が線的に施される。基部先端は節理面である。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。２はやや厚手の石斧である。横長剥片を使用し、正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。基部、両側縁の調整は比較的大きい面的剥離でなされ、敲打が広範囲に施されている。刃部は片面加



第84図　第４号住居跡出土石器

工であるが、正面自然面が丸みを帯びるため、断面両刃状を呈する。形状は円刃である。被熱痕跡が認められる。３はやや湾曲した形状を呈している。顕著な被熱痕跡が認められる。横長剥片を使用し、正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部及び両側縁の調整は部分的で、素材剥片の形状をそのまま生かしたものとなっている。敲打は刃部近くから基部まで施されている。刃部は両面加工の両刃であるが、他の調整と同様、やや粗雑な作りである。形状は円刃である。

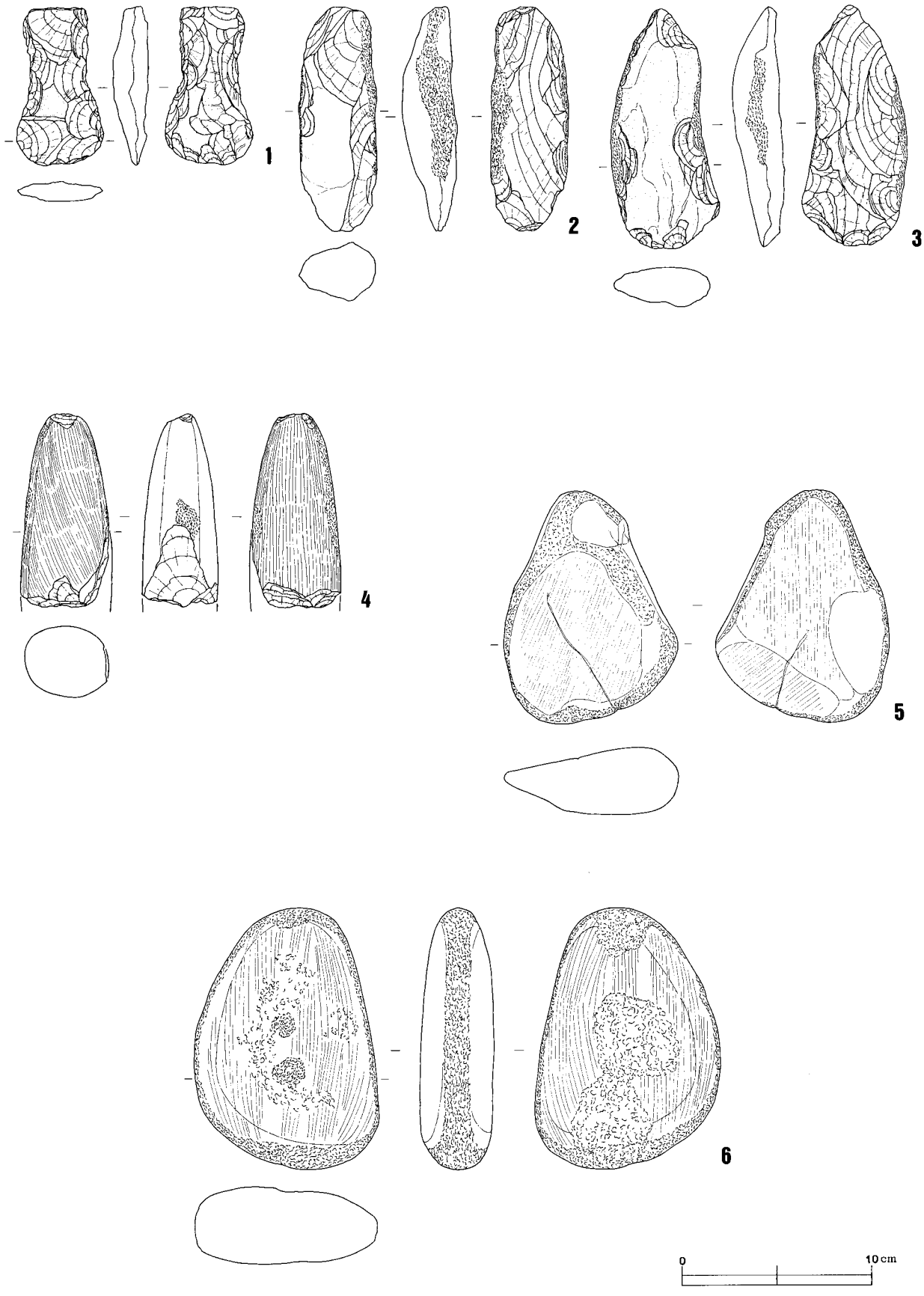
４は乳棒形の磨製石斧で、顕著な被熱痕跡が見られる。刃部は欠損する。正面には斜方向、裏面と両側面には縦方向の丁寧な磨痕が認められるが、基部先端に調整剥離、側面の一部に敲打痕を残している。敲打痕は破損部分に及ばないため、修復行為は行われなかったと思われる。

５・６は敲石である。５は不整形の礫を使用したもので、周縁部に敲打痕が認められる。両面の平坦部分は平滑で磨いたような跡があり、砥石として使用されていた可能性がある。６は円礫を使用し、周縁部と両面に敲打痕を顕著に残している。また、正面に２箇所の浅い凹みがある。裏面には中央と先端近くに広範囲の敲打が加えられているが、明確に凹みを形成していない。両者ともに作業時の滑り止めと考えられる。また、両面の平坦部分には擦痕が認められ、一部は敲打痕に重複する。

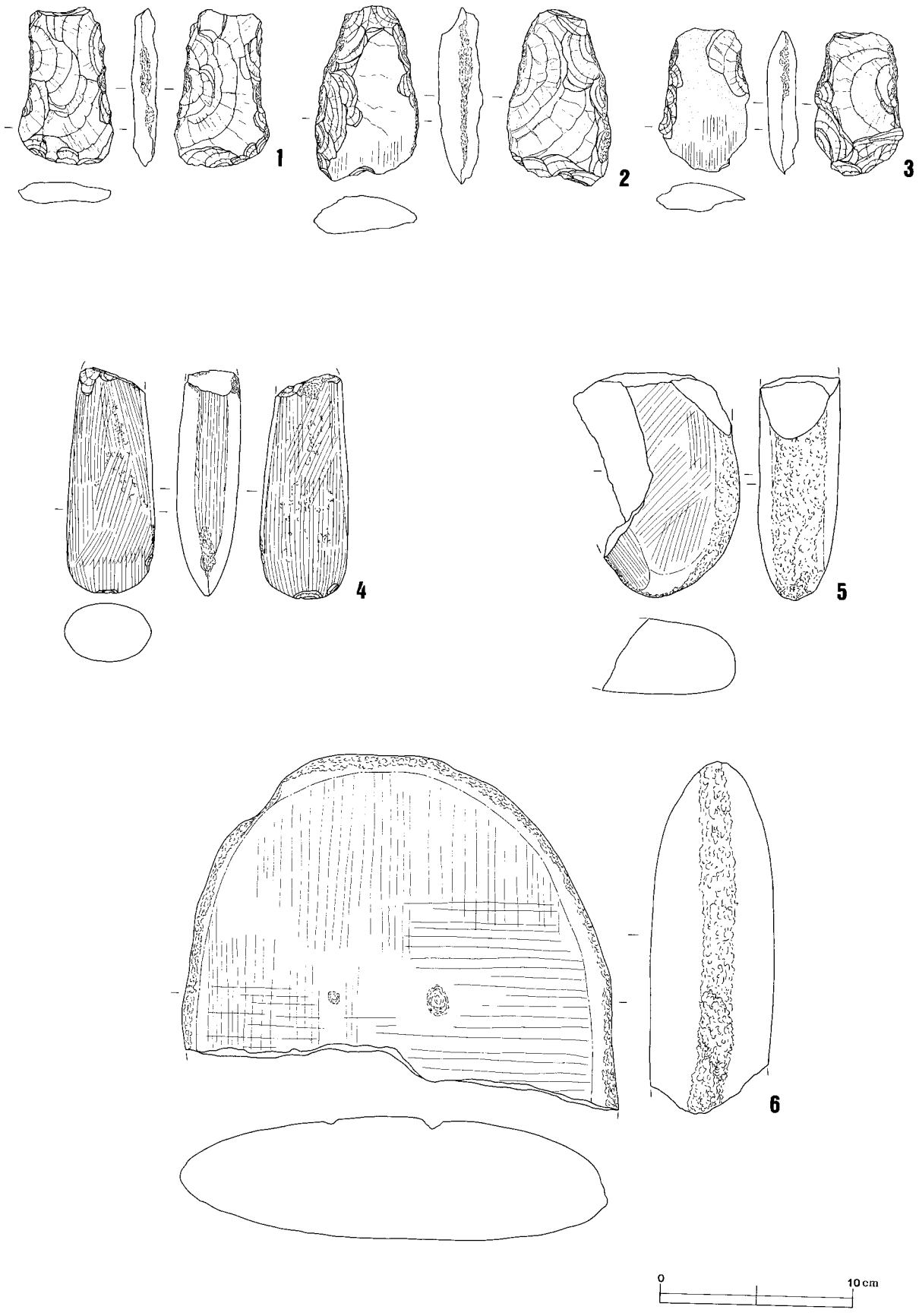
第６号住居跡出土石器（第86図）

本住居跡は土器、石器ともに出土量が少なかった。図示したのは打製石斧３点、磨製石斧１点、敲石１点、台石１点である。なお、磨製石斧は遺構南壁際、伏甕近くから出土している。

１～３は打製石斧である。１・２は刃部がやや広がる撥形、３は不定形ながら楕円形に近い形態を呈する。１は両面に主要剥離面、正面刃部に部分的に自然面を残している。基部、側縁部の調整剥離は縁辺部に施される。両側縁には敲打が認められる。刃部は両面加工の両刃で、形状はやや偏る斜刃である。２は正面に自然面、裏面に大きく主要剥離面を残す。基部、側縁の調整剥離は正面に顕著で裏面は縁辺に限定される。また、両側縁の敲打は基部から刃部付近まで施されている。刃部は裏面のみ加工痕が見られる片刃で、形状はやや偏る直刃である。刃部正面には使用痕と思われる擦痕が認められる。３は正面に自然面、



第85図　第５号住居跡出土石器



第86図　第６号住居跡出土石器

裏面に主要剥離面を大きく残している。基部には面的剥離が入るが、側縁部の調整剥離は縁辺部のみに施される。敲打は基部両側に認められる。刃部は裏面に調整剥離が顕著な片刃で、形状はやや尖頭状を呈するが円刃である。刃部正面には擦痕が見られ、使用痕と考えられる。

４は磨製石斧で、やや偏平ながら乳棒状を呈する。基部先端を欠損するが、修復の痕跡を残す。正面、裏面ともに縦位、斜位の磨痕が認められ、一部敲打痕を残す。両側縁は縦位の磨痕のみ見られる。刃部には使用時のものと思われる剥離が若干認められる。刃部は両刃で、形状は円刃である。

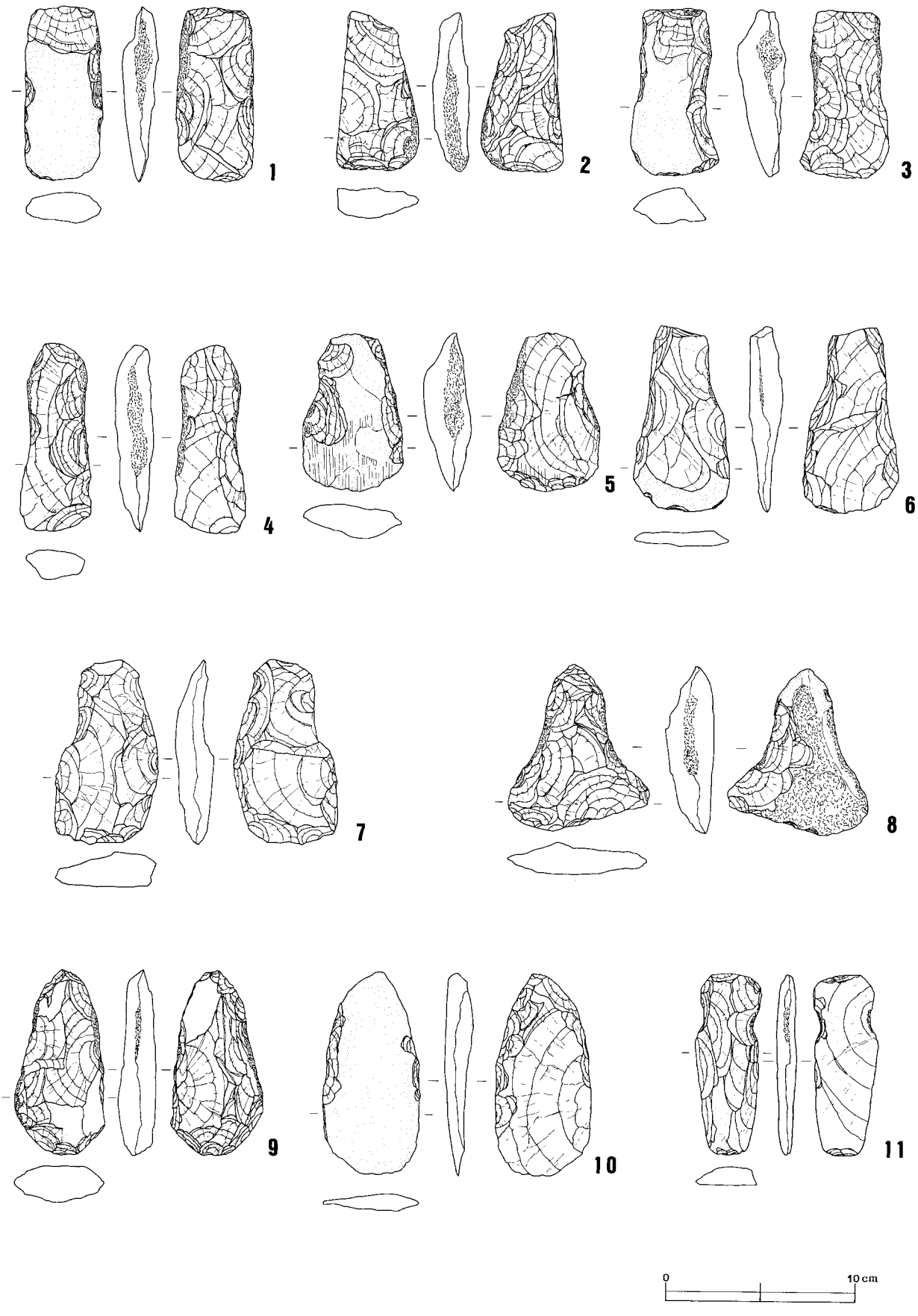
５は敲石である。円礫をそのまま使用したもので、周縁部に顕著な敲打痕が見られる。両面の平坦部及び側縁の一部に擦痕が認められ、磨石の機能も兼ねていた可能性がある。

６は円礫利用の台石と思われる。正面に２箇所の孔を持つ。周縁部は敲打痕が顕著であるが、形状調整時か使用時かは不明である。両面の平坦部には擦痕が認められる。

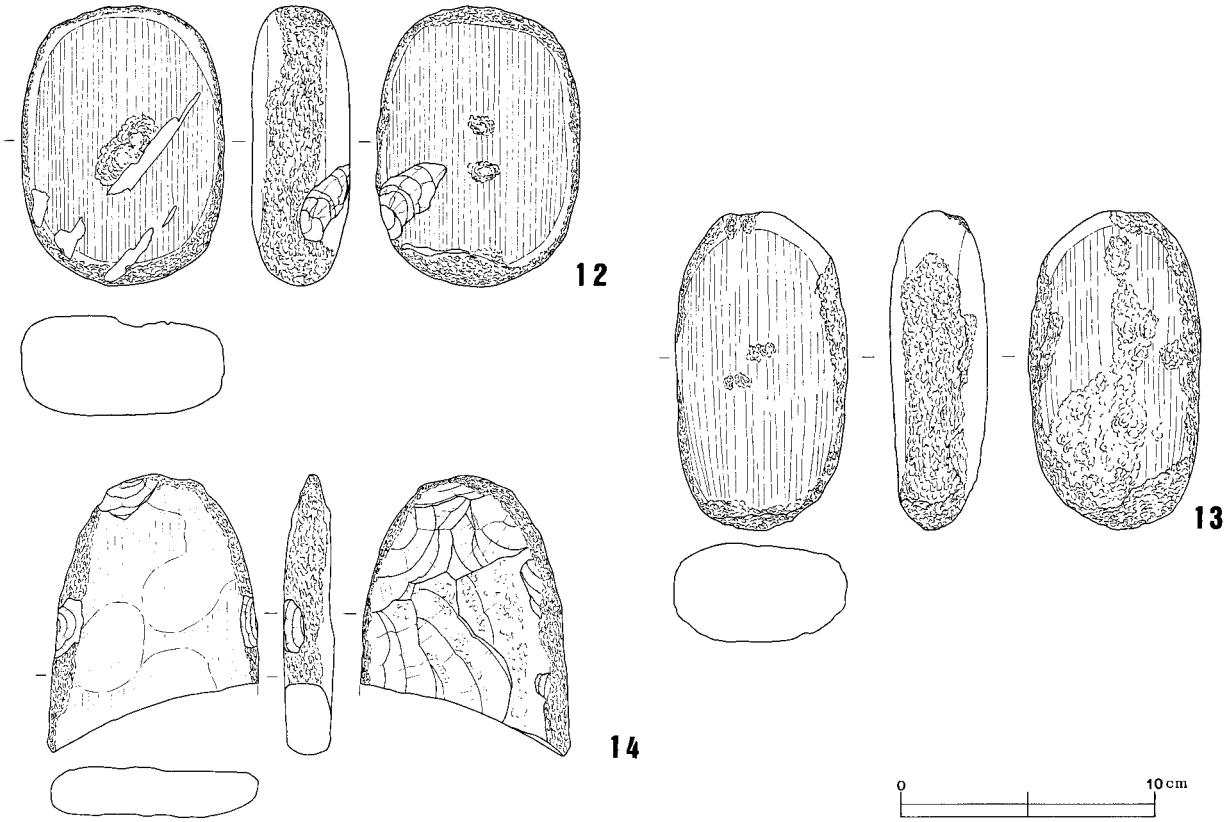
第７号住居跡出土石器（第87・88図）

本住居跡は、土器とともに石器出土量も多かった。主体となるのは打製石斧であるが、例にもれず多くが破損品あるいは部分破片である。図示したのは完形の打製石斧11点、敲石３点である。

１～11は打製石斧である。１～３は短冊形、４～９は撥形、10は楕円形であるが、11は基部に抉りが入る特異な形態を呈する。１は正面に自然面を残し、裏面は主要剥離面を大きく残す。両側縁の調整剥離は縁辺部に限定され、基部側面から中央部にかけて敲打が施される。基部は正面に見られる面的な剥離から欠損しているようにも見えるが、裏面と周縁部に認められる敲打から原形と判断される。刃部は片刃で加工痕がほとんど見られず、主要剥離面は刃部先端まで及ぶ。形状はやや丸みを帯びた直刃である。２は両面とも多方向からの面的剥離で構成されている。基部先端には自然面、正面左側縁に節理面を残す。側縁の調整剥離は正面右側に顕著に認められ、左側には部分的になされている。敲打痕は右側縁から刃部付近に及ぶ。刃部は両面加工の両刃に見えるが、剥離の一部は使用時のものである可能性もある。形状は直刃である。３はやや不整な短冊形を呈し、正面に自然面、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。基部、両側縁の調整剥離は正面に顕著で、基部を中心に面的に敲打が施されている。刃部は両面に剥離が見られるが、使用時の剥離を含むものと思われ、片刃と判断した。形状は円刃である。４は細身で、正面に主要剥離面、裏面は面的剥離で構成される。基部及び両側縁の調整剥離は比較的大きめの剥離がなされ、わずかに抉りを形成する。敲打は広範囲且つ面的に施されている。刃部は正面に加工痕が見られるが、断面形は両刃である。形状はやや偏った円刃である。５は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部は未加工で、先端部にも自然面が及ぶ。両側縁の調整はやや大きめで面的な剥離が加えられ、正面左側はわずかに抉り状を呈する。敲打は裏面左側に顕著である。刃部は裏面に加工痕が多く認められ、正面には先端まで自然面を残す。断面形は両刃で、形状は円刃である。６は正面刃部付近に自然面、裏面に主要剥離面を残している。基部及び両側縁の調整剥離は、正面が比較的大きく面的な剥離、裏面が周縁部に集中したものとなっている。敲打は縁辺を潰す程度に施されている。刃部は両面とも加工痕が見られず、先端に認められる小さな剥離も使用時のものと思われる。片刃で、形状は円刃である。７は中央で若干屈曲した形状を呈する。正面基部先端に自然面を残す他は、両面とも多方向からの面的剥離で構成されている。両側縁の調整剥離は裏面左側に顕著であるが、他にはほとんど認められない。刃部は両面加工の両刃で、形状は直刃である。８は基部が尖頭状を呈し、幅広の刃部を有する撥形の典型である。正面が多方向からの面的剥離で構成され、裏面には大きく自然面を残している。自然面には広範囲にわたって敲打が加



第87図　第７号住居跡出土石器（１）



第88図　第７号住居跡出土石器（２）

えられている。両側縁の調整剥離は縁辺部に施され、基部から中央部にかけて敲打がなされている。刃部加工は正面のみに見られ、裏面は使用時の剥離以外は自然面をそのまま残す。断面形は両刃状を呈する。刃部形状は斜位であるが、直刃の範疇であろう。９は正面に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残している。また、両面に節理面が認められる。基部及び両側縁の調整剥離は縁辺部に限定され、基部周縁部に敲打が施されている。基部は尖頭状を呈する。刃部は両面加工の両刃で、形状はやや尖った円刃である。10は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残し、横長の素材剥片の状態をそのまま残している。基部と両側縁の調整剥離は形状を整える程度で、大きな剥離はほとんど見られない。刃部は加工痕が認められず、素材をそのまま使用している。断面形は片刃で、形状は円刃である。11は細身の打製石斧で、基部に両側縁からの抉りが入る。正面は自然面と多方向からの面的剥離、裏面は主要剥離面を大きく残している。両側縁の調整剥離は抉り部分に限定される。敲打も同様である。刃部は両面に剥離が認められるが、使用時の欠損の可能性もある。断面形は両刃、形状は幅の狭い直刃である。

12～14は敲石で、12・13は完形である。12は楕円礫を使用し、周縁部に反復使用による敲打痕が見られる。両面の平坦面には縦方向の擦痕が顕著で、磨石としての機能も有していたと思われる。また、平坦面中央には両面とも２箇所の凹みを有する。作業時に握り易いように作出されたものと考えられる。13は長楕円礫を使用している。周縁部と裏面に敲打痕を顕著に残すが、特に図下端に顕著で変形が著しい。正面に２箇所の凹みを有する。また、両面の平坦部分には擦痕が認められ、凹みと敲打痕に重複する。12と同様、磨石としての機能も有していたと思われる。14は偏平な楕円礫を使用し、約１／３を欠損する。正面には自然面の凹凸を残し、裏面は調整剥離と考えられる面的剥離が見られる。周縁部は敲打痕が顕著で、

部分的に使用時に欠いたような剥離が認められる。また、正面平坦面には擦痕、裏面には弱い敲打痕を残す。

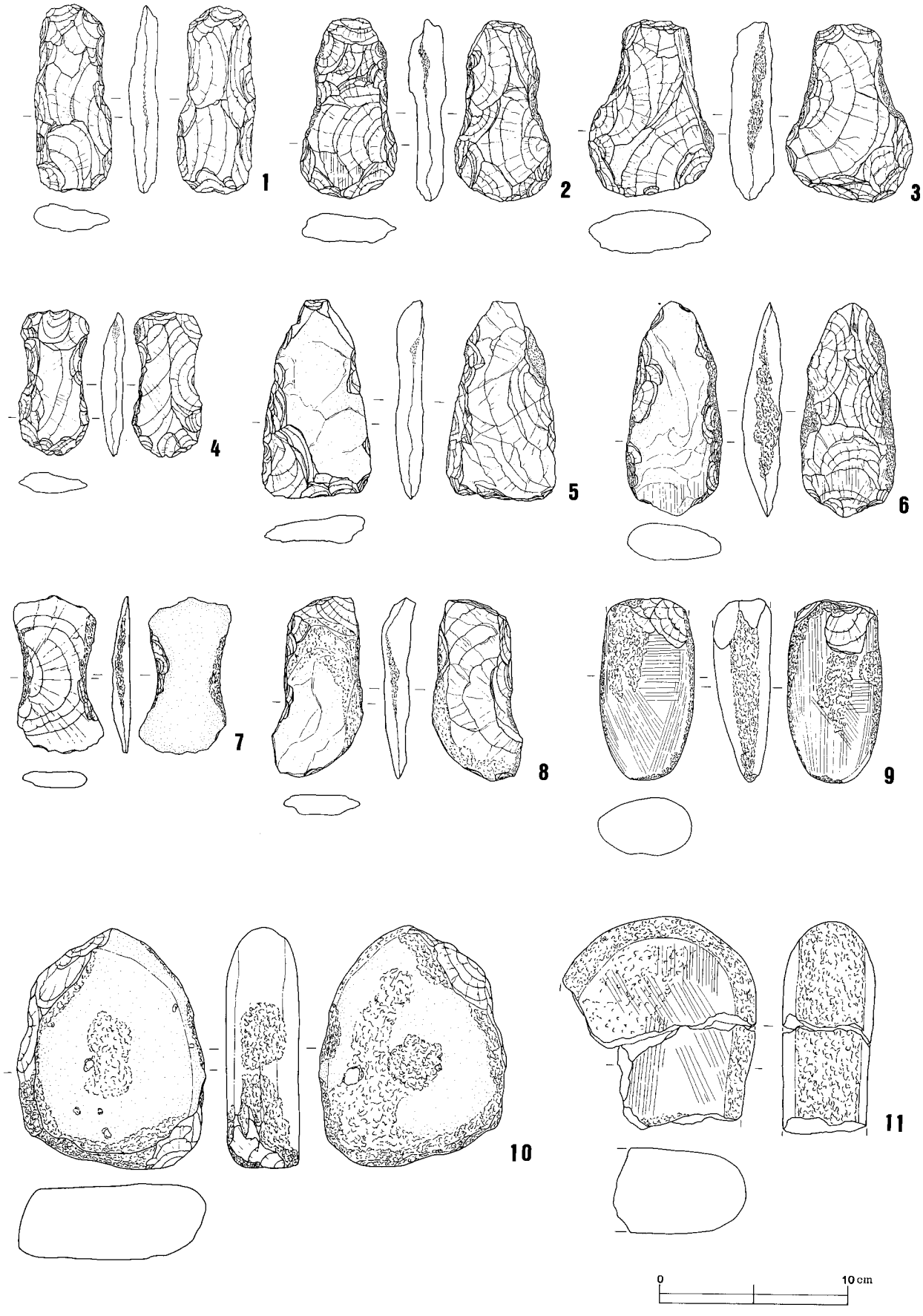
第８号住居跡出土石器（第89図）

本住居跡からは、土器とともに石器も散乱したような状態で多量に出土している。主体となるのは打製石斧であるが、多くが破損品あるいは部分破片である。図示したのは完形の打製石斧８点、磨製石斧１点、敲石２点である。

１～８は打製石斧である。形状は、１が短冊形、２～８を撥形としたが、４・７は中央部にやや深い抉りが入り、分銅形との中間的形態を呈する。１は細身で、両面とも多方向からの面的剥離で構成される。基部及び両側縁の調整剥離は周縁的であるが、裏面右側のみやや面的になっている。側縁の敲打は線的で、弱い。刃部は裏面のみ加工痕が認められるが、断面形は両刃。形状は円刃である。２は両面とも面的剥離で構成される。基部、両側縁の調整は、基部がやや面的であるが、他は周縁部に止まる。正面左側縁はわずかに抉り状を呈する。刃部は両面とも側縁から先端にかけて細かい調整が入る。両刃で、形状は整った円刃である。刃部正面には擦痕が認められる。３は厚手で、正面の一部に自然面、裏面に大きく主要剥離面を残している。また、正面右側縁には節理面が見られる。基部、両側縁の調整剥離は周縁部に限定され、側縁には刃部近くまで敲打が施されている。刃部は、主として裏側に調整剥離が見られ、断面両刃に作出されている。形状は円刃である。４は正面に主要剥離面、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。基部の調整は面的であるが、両側縁は周縁的でわずかに抉り状を呈している。基部の一部には敲打が認められる。刃部は両面加工の両刃で、形状はやや尖った円刃である。５は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部はほとんど未加工で、両側縁の調整剥離も縁辺に止まる。敲打も部分的になされている。刃部は正面に加工痕が多く見られるが、裏面の先端部と同様、一部は使用時の欠損とも考えられる。断面形は両刃で、形状は直刃である。６は基部が尖頭状を呈する。正面に大きく自然面、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。基部はほとんど未加工で、両側縁の調整剥離も周縁的である。また、これらの調整、特に裏面のものは敲打によって潰されている。刃部は先端が尖るが、両側の剥離は使用時のものの可能性がある。断面形は両刃、形状は円刃と思われる。刃部両面には擦痕が認められる。７は正面に主要剥離面、裏面に自然面を大きく残す。基部は未加工で、両側縁の調整も周縁部のみである。敲打は基部から刃部近くまで施されている。刃部も基部と同様、未加工でそのまま使用しているようである。片刃で、形状は円刃である。８は基部から中央部までは短冊形であるが、刃部周辺は鎌状に曲がる。正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部及び両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打も縁辺部に線状になされている。ただし、正面中央及び右側面、裏面左側面には弱い敲打が施されている。刃部には加工痕が見られず、一部使用時の欠損と思われる小剥離が認められる。刃部断面は両刃で、形状は円刃、あるいは斜刃である。特異な形状であるため、一般的な打製石斧とは異なった用途も考えられる。

９は磨製石斧で、偏平であるが側面の稜が不明確であるため乳棒形と推定される。基部周辺を欠損する。ただし、欠失部剥離面には強い敲打痕があり、修復が試みられた可能性がある。正面は斜方向、横方向、裏面には縦方向、横方向の磨痕が明瞭に認められる。両側縁と刃部には敲打が施され、欠失部と同様、修復の跡と考えられる。これらの敲打痕は磨痕を覆っている。刃部断面形は両刃で、形状は丸刃である。

10・11は敲石で、11は欠損品である。10は楕円礫を使用し、中央部から下端にかけて反復使用による敲打痕が認められる。平坦面中央には両面とも１箇所の凹みを有する。作業時の滑り止めと考えられる。11も楕円礫を使用している。周縁部と強い敲打、両面の平坦部に弱い敲打痕を残す。両面の平坦部分には擦



第89図　第８号住居跡出土石器

痕が認められるが、それほど顕著ではない。

第９号住居跡出土石器（第90・91図）

本住居跡の出土石器は、他の住居跡に比して器種が豊富である。石器の主体をなすのは打製石斧であるが、例にもれず多数が破損品である。図示したのは完形の打製石斧６点、磨製石斧１点、敲石２点、石皿１点、砥石１点である。特に砥石は磨製石斧の両面、側縁の研磨溝が用途別に明確となっている。

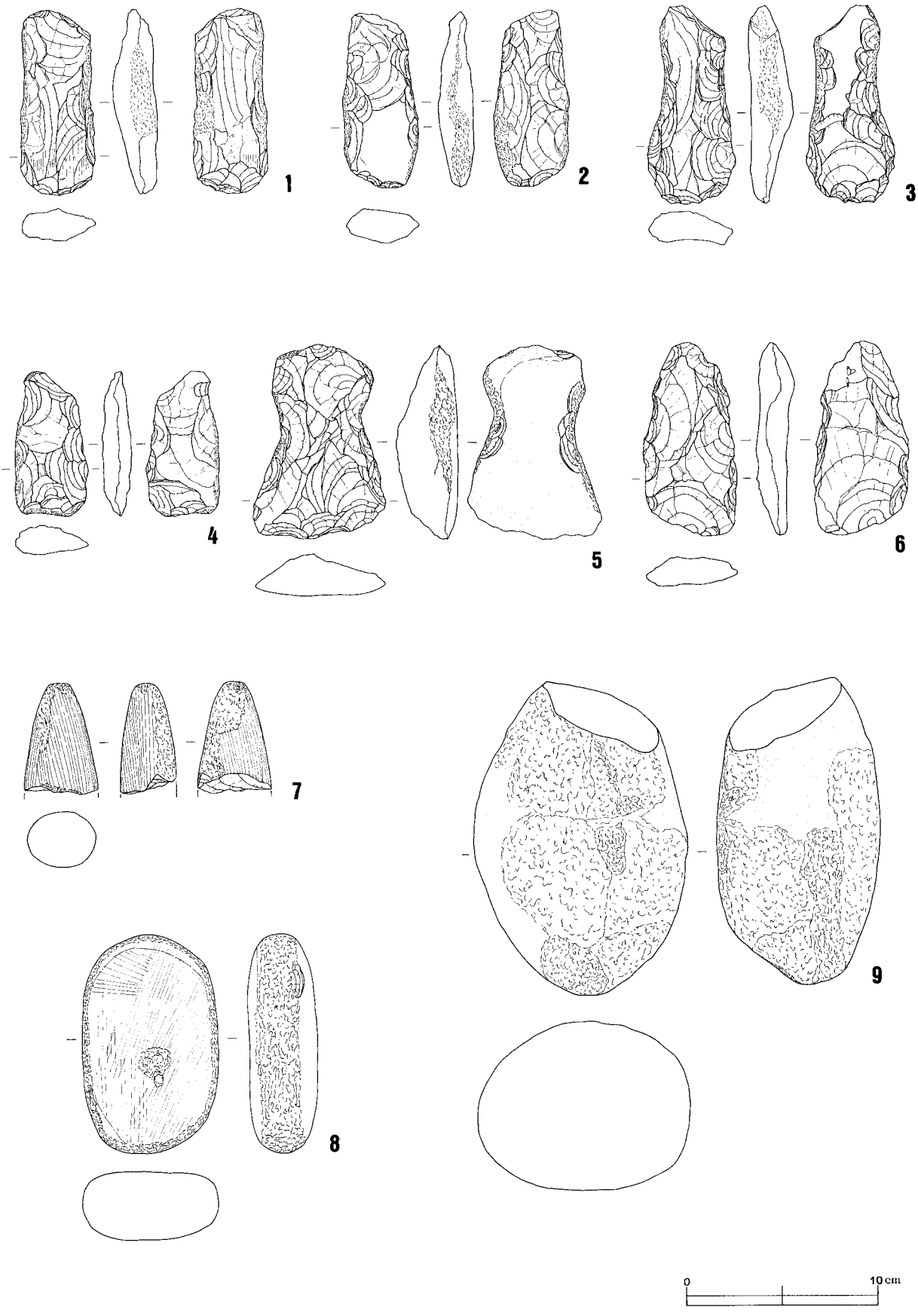
１～６は打製石斧である。形態は１・２が短冊形、３～６が撥形であるが、３・５は抉りがやや深いタイプである。１は正面が多方向からの面的剥離と一部自然面で構成され、裏面は中央に主要剥離面を残している。両側縁の調整剥離はやや大きめの面的剥離で、基部から中央にかけて敲打が施されている。刃部の調整は裏面に顕著で、両面に擦痕が認められる。刃部断面は両刃で、形状は円刃である。２は基部がやや絞られるが、短冊形とした。正面基部と刃部付近に自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。両側縁の調整剥離は中央から基部にかけて多く見られ、敲打は基部から刃部近くまで施されている。ただし、基部付近の敲打痕が形状調整時のものかどうかは不明である。刃部は両面から先端部付近に剥離が施された両刃で、形状はやや偏った円刃である。３は中央部がやや絞った形態を呈している。正面に主要剥離面の一部、裏面に自然面を残している。両側縁の調整剥離は、面的でやや大きめである。敲打痕は幅広で、基部から中央部にかけて施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。４は正面は多方向からの面的剥離で構成され、裏面中央部には主要剥離面の一部を残す。基部、両側縁の調整剥離は面的で、やや大きめである。敲打痕は中央から刃部にかけて認められる。刃部の敲打痕は使用時のものと考えられるが、敲石に転用された可能性もある。刃部は両面から加工された両刃で、形状は中央がやや凹む直刃である。５は抉りが深く、分銅形に近い形状を呈する。正面は多方向からの面的剥離で構成され、裏面には自然面を大きく残す。基部、両側縁の調整剥離は周縁部のみに施され、特に裏面は調整剥離以外はすべて自然面となっている。敲打は両側縁の基部から刃部近くまで及ぶ。刃部は正面に調整が認められ、裏面は未加工である。断面は片刃で、形状はやや丸みを帯びた直刃である。６は正面が多方向からの面的剥離で構成され、裏面基部に自然面を残している。両側縁の調整は周縁部の一部になされ、敲打痕も弱い。刃部は正面のみに加工痕が見られる片刃で、形状は斜刃である。

７は乳棒形の磨製石斧で、基部のみ残存する。正面、裏面ともに斜方向の磨痕が認められる。また、基部から裏面左側縁にかけて、敲打痕が顕著である。

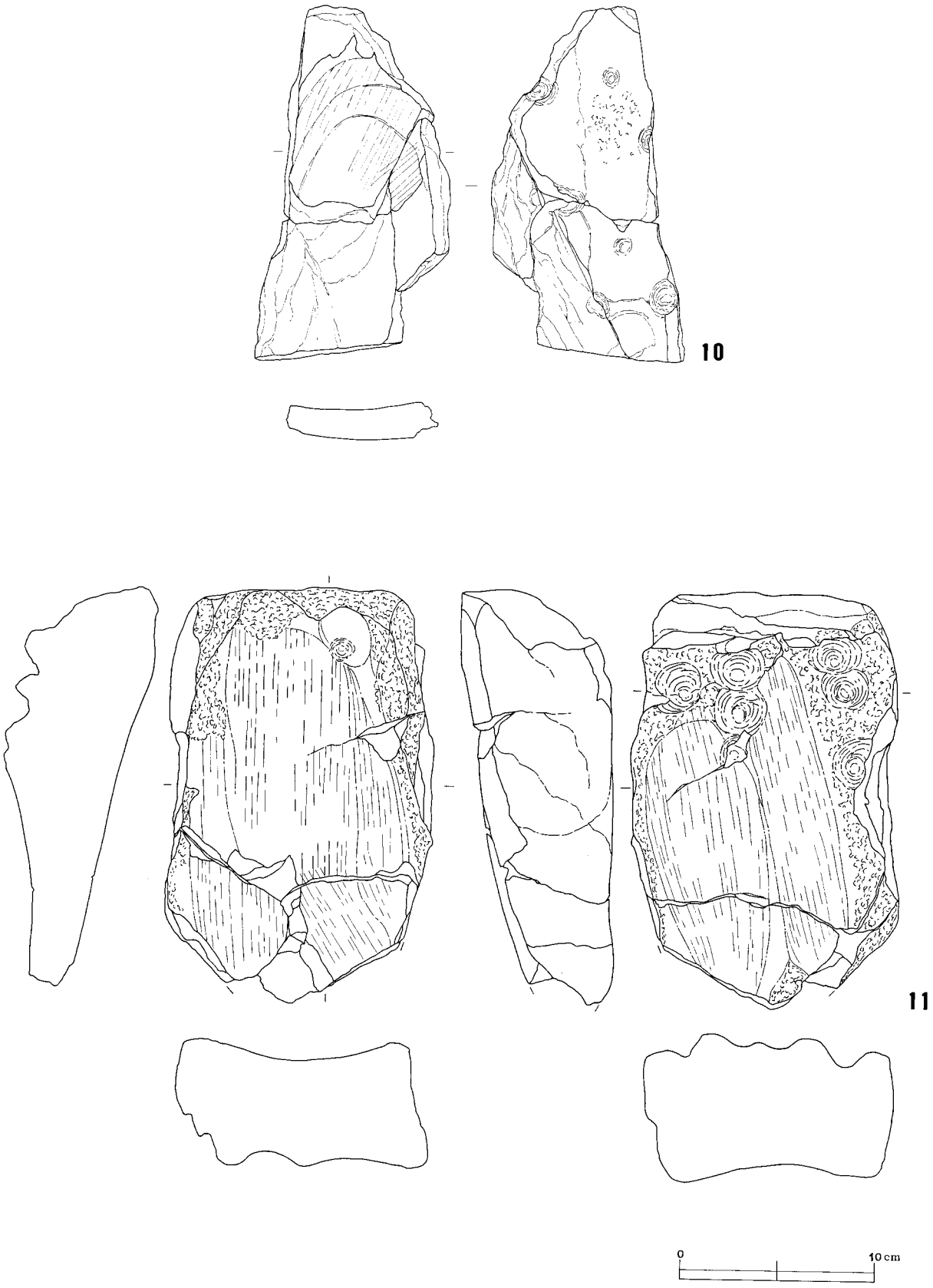
８・９は敲石である。８は楕円礫を使用し、周縁部には全周的に顕著な敲打痕が認められる。両面平坦面には擦痕が見られ、磨石を兼ねていたと考えられる。また、平坦部中央には両面とも１箇所の浅い凹みを有する。９も、やや不整な楕円礫を使用している。自然面を多く残す。敲打痕は部分的には周縁的、線的に強く見られるが、素材形状をそのまま残すため、敲打の強弱、疎密が全体に分布している。

10は石皿で、３点の破片が接合したものである。正面は皿状に窪み、顕著な擦痕が認められる。裏面には７箇所の凹みが残存し、部分的に弱い敲打痕が見られる。

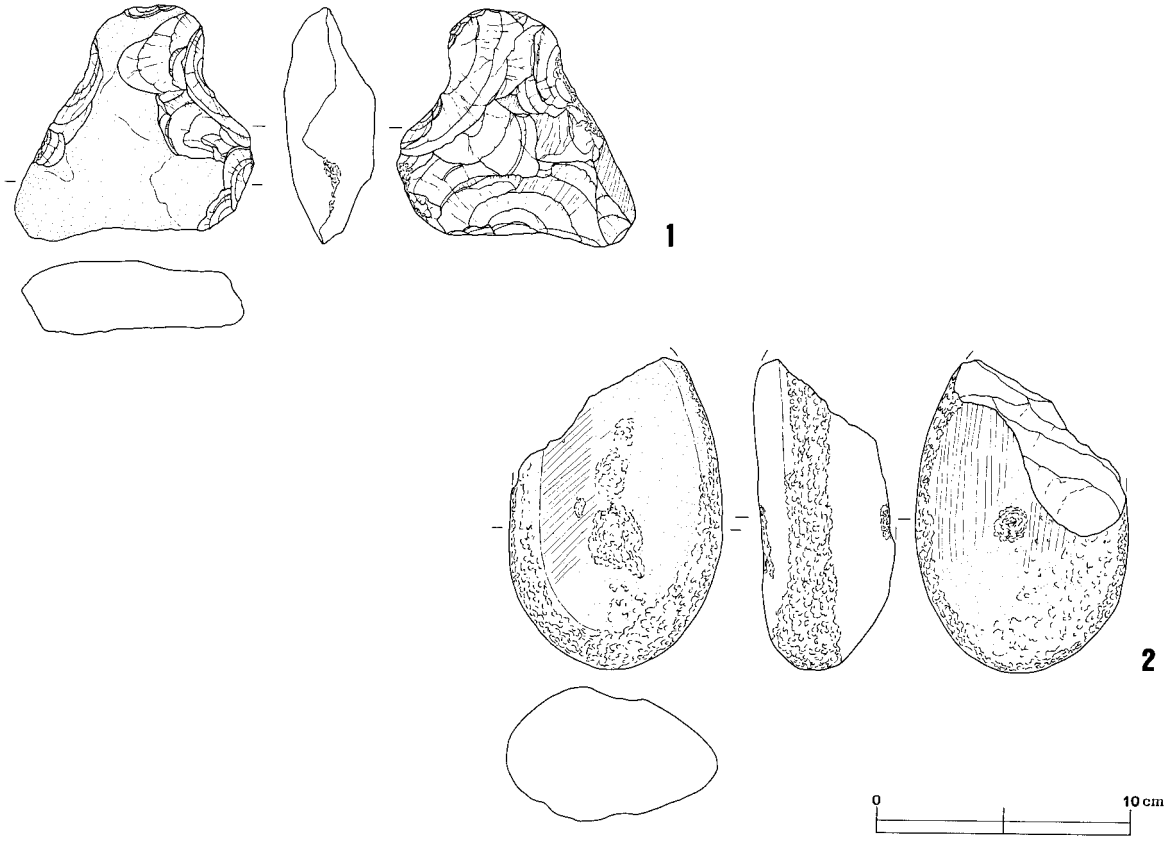
11は砥石で、石皿から転用されたものと思われる。３点の破片からなり、最も大きな破片は床面に斜位に据え置かれたような状態で出土している（第21図）。ただし、他の２点の内１点は柱穴覆土中から出土しており、使用状態と考えるには疑問が残る。正面には広い研磨面が形成され、裏面には刃部、側縁を研ぎ出したような幅の狭い研磨面が認められる。これらの研磨面は、特に乳棒形磨製石斧の製作に最適と考えられる。研磨面以外には敲打が施され、形状調整の痕跡と思われる。なお、正面には１箇所、裏面には



第90図　第９号住居跡出土石器（１）



第91図　第９号住居跡出土石器（２）



第92図　第10号住居跡出土石器

６箇所の凹みが残存している。

第10号住居跡出土石器（第92図）

本住居跡は土器、石器ともに出土量が少なかった。図示し得た石器は打製石斧１点、敲石１点である。

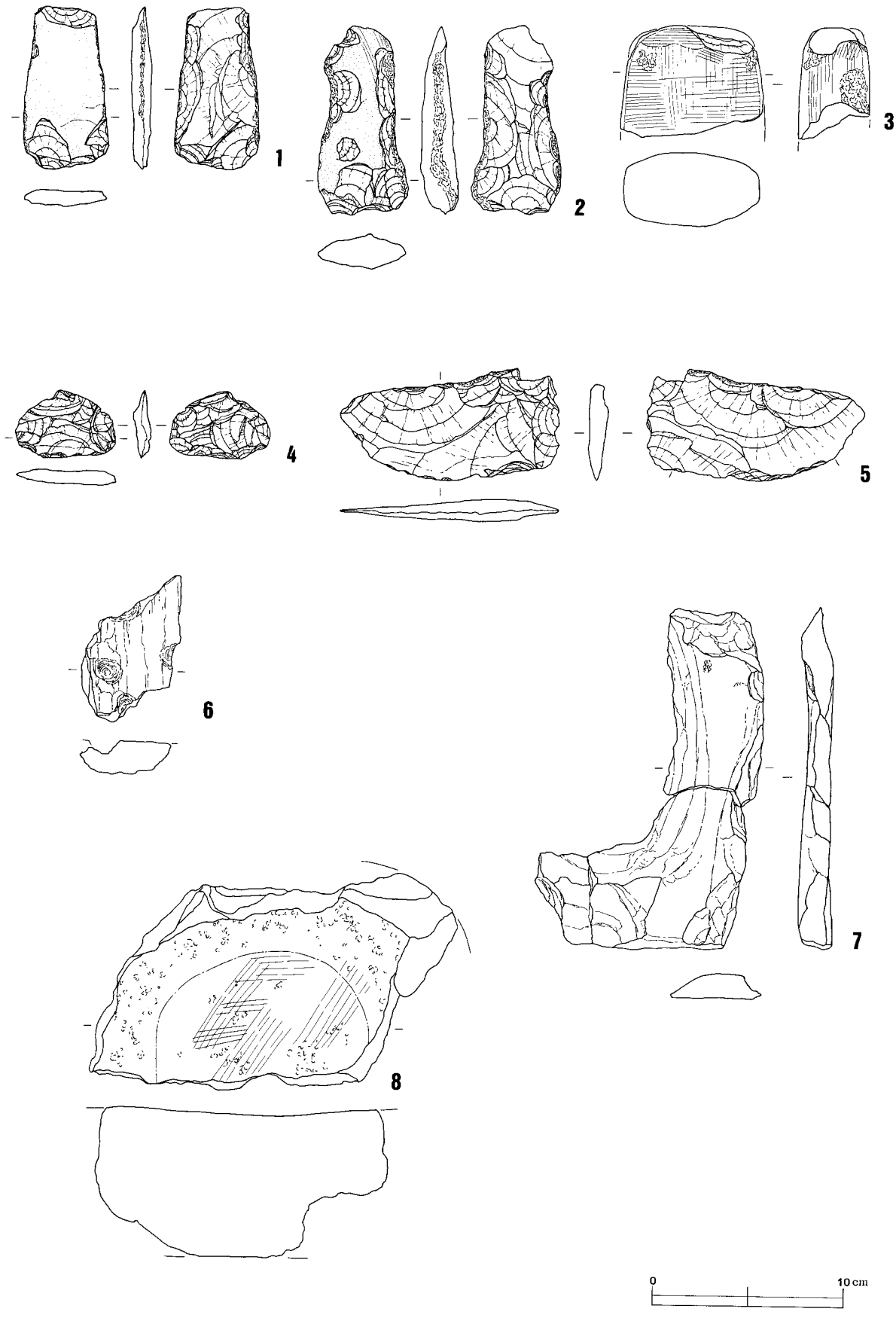
１は撥形の打製石斧で、厚手である。正面には自然面を大きく残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。基部、両側縁の調整剥離は大きめで、敲打は線的且つ部分的に施されている。刃部は裏面のみ加工痕が認められる片刃で、形状は直刃である。

２は敲石で、一部欠損する。楕円礫を素材とし、周縁部に満遍なく敲打痕が認められる。両面ともに擦痕が見られるが、それほど顕著ではなく、敲石の機能が優先されたものと考えられる。正面平坦面には２箇所、裏面中央には１箇所の浅い凹みを有している。

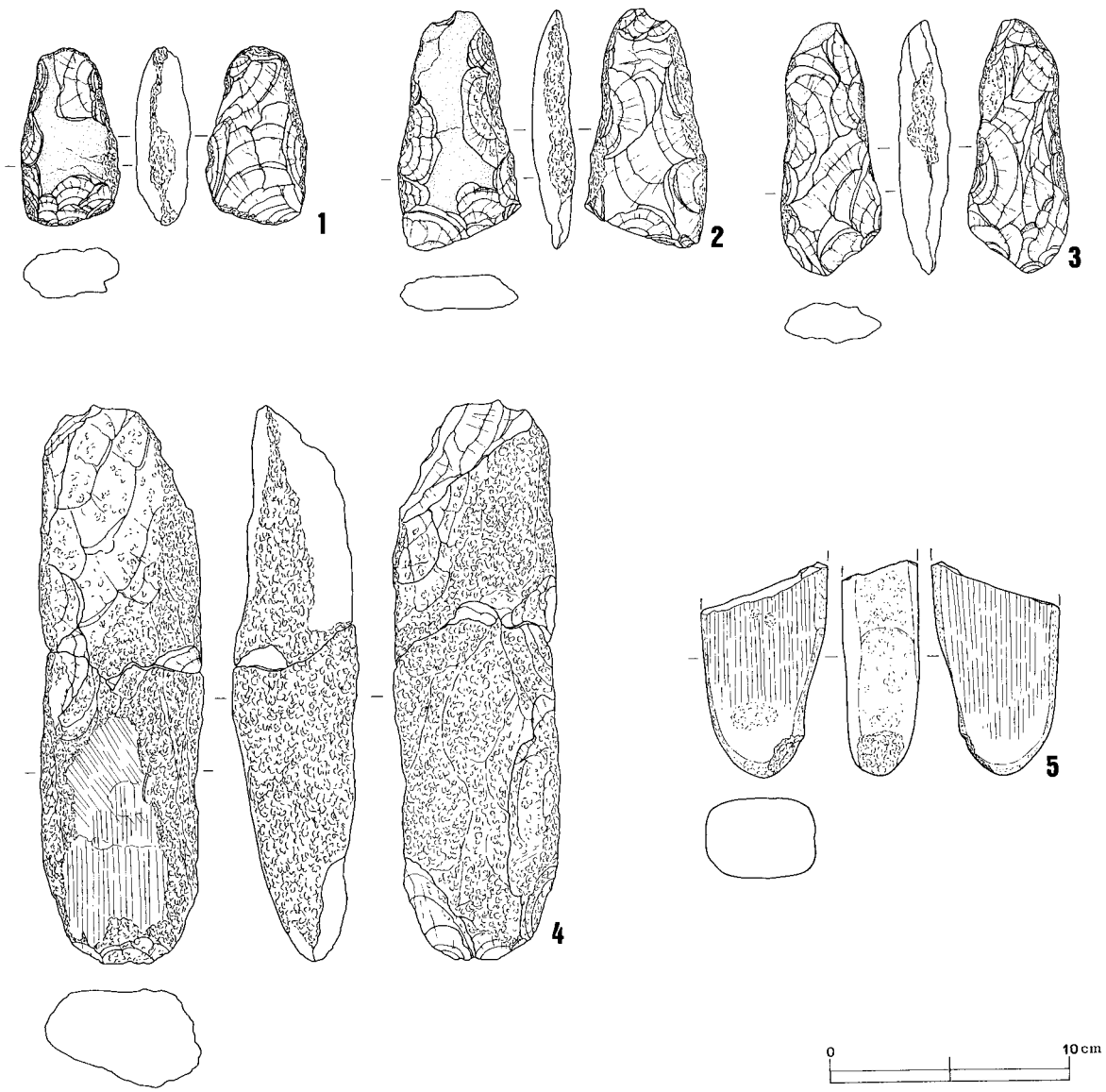
第11号住居跡出土石器（第93図）

本住居跡の出土石器は、数的には少ないが、器種は比較的豊富である。図示したのは打製石斧２点、磨製石斧１点、掻器２点、石皿の破片３点である。

１・２は打製石斧で、１は短冊形、２は撥形を呈する。１は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部、両側縁の調整剥離は周縁的であるが、裏面左側縁の剥離のみ面的である。敲打は基部から刃部付近まで及ぶ。刃部は両面加工の両刃で、形状は直刃である。２は正面に自然面、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。また、裏面基部付近には主要剥離面を残している。両側縁の調整剥離は面的で比較的大きい。基部は未加工である。側縁部の敲打痕は一部刃部先端まで及ぶ。刃部は両面加工の両刃であるが、一部の剥離は使用時の欠損と考えられる。形状は直刃である。



第93図　第11号住居跡出土石器



第94図　第12号住居跡出土石器

３は定角形の磨製石斧である。基部のみ残存するが、先端を欠く。正面、裏面ともに縦方向、横方向の磨痕が認められる。また、基部から裏面左側縁にかけて部分的に敲打痕を残している。

４は掻器である。全体形は楕円形を呈するが、上部に摘みが付いていた可能性もある。両面ともに多方向からの面的剥離で構成される。刃部は両面からの加工によって作出されているが、正面に認められる小剥離は使用痕と考えられる。５も掻器と思われるが、刃部に平行する使用痕から溝を彫るのに使用されたものと思われる。両面とも多方向からの面的剥離で構成され、上部には刃潰し状の敲打が施されている。

６～８は石皿の破片である。６は小破片で石皿裏面の一部と思われる。４箇所の凹みを残している。７は３点の破片が接合したもので、裏側は欠損する。周縁部には形状調整の加工痕が残る。正面には１箇所のみ凹みが認められる。８は台石状を呈し、裏面と周縁部を欠損する。中央部は図下部がわずかに窪み、凹面となっている。多方向の擦痕と弱い敲打痕が認められる。

第12号住居跡出土石器（第94図）

本住居跡も石器出土量は少なかった。主体となるのは打製石斧であるが、ほとんどが破損品である。図

示したのは打製石斧３点、磨製石斧未製品１点、敲石１点である。

１～３は打製石斧である。３点とも撥形を呈する。１は正面に自然面、裏面に主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は刃部近くまで加えられている。刃部は正面に加工痕が多く認められ、先端には使用時のものと考えられる敲打痕が見られる。断面形は両刃で、形状はやや偏った円刃である。２は正面に自然面、裏面の一部に主要剥離面を残す。両側縁の調整剥離は大きめで面的である。敲打は刃部付近まで施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は斜刃である。３は正面基部に自然面を残すが、他の部分は多方向からの面的剥離で構成される。裏面の一部には主要剥離面が残存する。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は基部から中央部にかけて加えられている。特に中央部は面を形成している。刃部は両面加工の両刃で、形状は斜刃であるが、正面右側は使用時に欠損した可能性もある。

４は磨製石斧の未製品で、炉内から出土した２点が接合した。製作時に中央部で折れたものを炉縁石に転用したと考えられるが、明確な被熱痕跡は認められない。基部と両側縁には形状調整の面的剥離が見られるが、広範囲に加えられた敲打で判別しにくくなっている。刃部は両面に剥離が加えられ、正面に磨痕が見られることから、形状をある程度整えた後に刃部を研ぎ出そうとした跡が認められる。ただし、磨痕上に敲打痕が重複するため研ぎ出しを途中で中断したようである。また、裏面には磨痕は見られない。側縁部の形状は未だ直線的で最終形態として定角形、乳棒形のどちらを意図していたかは不明である。

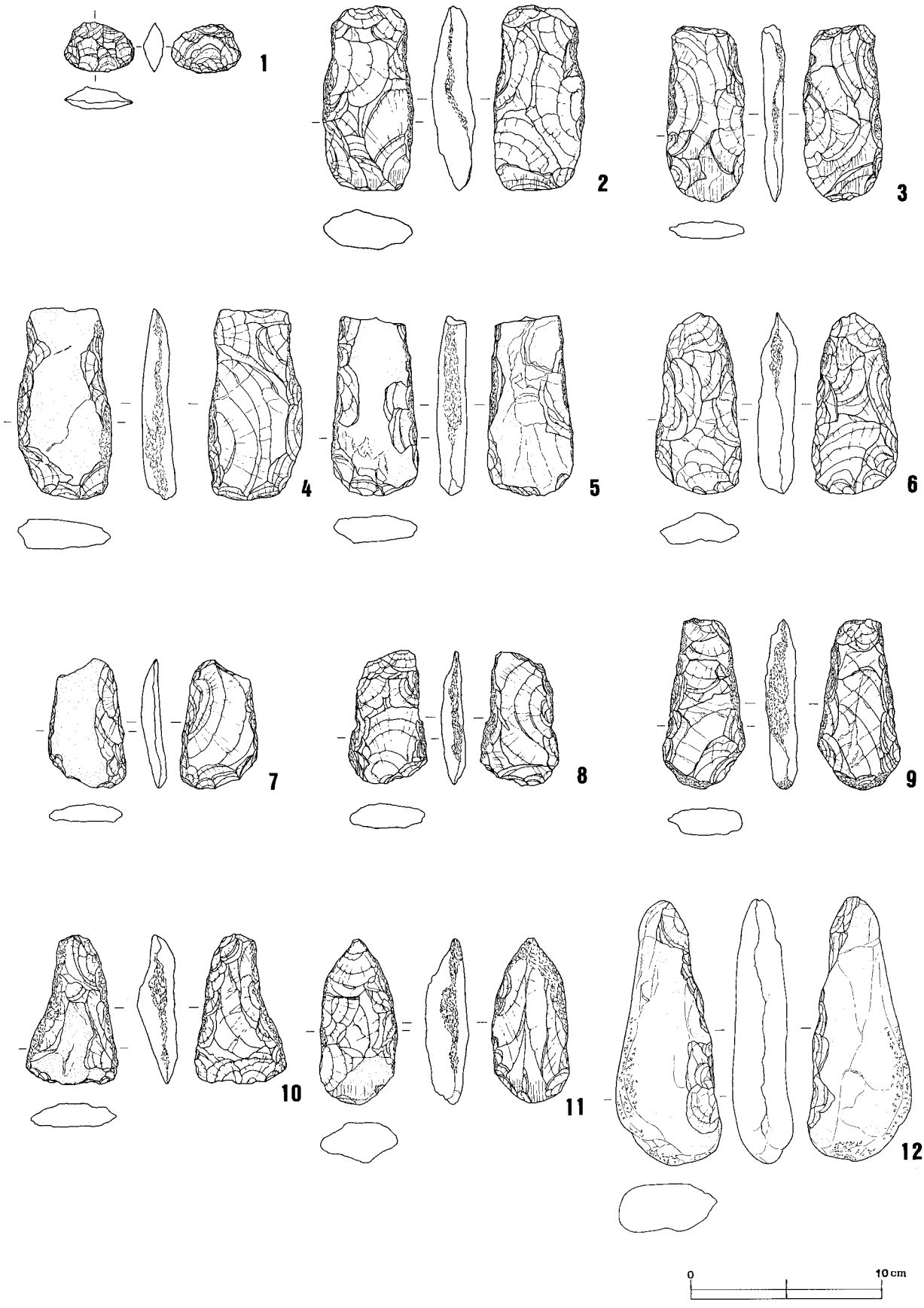
５は棒状の敲石で、基部を欠損する。正面右先端部に強い敲打痕が認められ、この部位が主たる作業に供されたと考えられる。両側縁部には弱い敲打が見られ、平坦部両面には擦痕が残されている。

第13号住居跡出土石器（第95・96図）

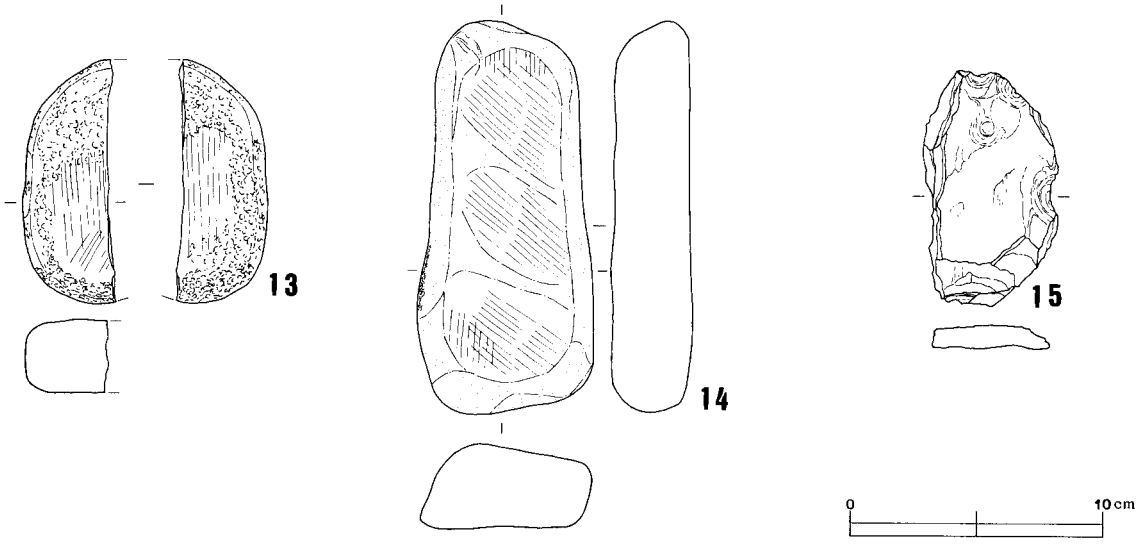
本住居跡から多量の石器が出土しているが、定形的なものは比較的少ない。図示したのは掻器１点、打製石斧10点、敲石２点、砥石１点、石皿の破片１点である。

１は掻器で、整った楕円形を呈する。両面とも多方向からの面的剥離によって構成される。周縁部はやや大きめの剥離で形状調整されている。刃部は裏面の加工痕が明確で、細かい押圧剥離が認められる。

２～11は打製石斧である。２～５が短冊形、７～10が撥形、11は基部が尖頭状で楕円形を呈する。７・８は小型の部類に入る。２は両面とも多方向からの面的剥離によって構成されている。基部、両側縁の調整剥離は部分的になされ、刃潰し状に刃部近くまで敲打が施されている。刃部は裏面に加工痕が見られ、断面は片刃状を呈する。形状は直刃である。刃部両面には擦痕が認められる。３は両面の一部に自然面を残し、裏面には主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は刃潰し状に線的になされている。刃部は裏面のみに剥離が見られるが、断面は両刃状を呈する。形状は円刃である。刃部両面には使用痕と考えられる擦痕が顕著に認められる。なお、擦痕と両側縁の敲打痕の終点はほぼ一致している。４は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部裏面に面的剥離が見られるが、両側縁の調整は周縁的である。敲打は側縁に線的に施される。刃部は両面加工の両刃で、形状は直刃である。なお、刃部先端にも敲打が認められ、使用痕と考えられる。５は両面に大きく自然面を残している。裏面には節理面が認められる。基部は欠損している可能性がある。両側縁の調整剥離は一部面的となるが、周縁部に沿って細かくなされている。敲打は両側縁に幅広に施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。６は両面とも多方向からの面的剥離で構成される。裏面の一部には節理面が見られる。基部、両側縁の調整剥離は面的であるが、周縁部には細かい剥離も認められる。敲打は基部付近を中心に加えられている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。７は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大



第95図　第13号住居跡出土石器（１）



第96図　第13号住居跡出土石器（２）

きく残している。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で細かくなされている。敲打は刃潰し状に弱く施される。刃部は裏面のみに加工痕が見られる。断面は片刃で、形状は斜刃である。８は正面が多方向からの面的剥離で構成され、裏面には大きく主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整剥離は、周縁的で縁辺部に細かく加えられる。敲打は基部から刃部近くまで施されている。刃部は両面から加工されているが、断面形は片刃状を呈する。形状は円刃である。９は正面が多方向からの面的剥離、裏面には主要剥離面を大きく残す。基部、両側縁の調整は周縁的で、敲打は基部から刃部近くまで施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。刃部先端には使用痕と考えられる敲打痕が顕著である。10は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部、両側縁の調整剥離は大きめで面的である。側縁の敲打は刃部付近まで施されている。刃部は裏面に加工痕が顕著な片刃で、形状は直刃である。正面左側縁が湾曲するが、敲打痕の在り方から意図された形態の可能性がある。11は基部先端が尖頭状を呈する。正面刃部周辺に自然面、裏面は左右に対面する面的剥離で構成されている。基部、両側縁の調整は正面が面的、裏面が周縁的で剥離後の敲打が優越する。刃部は微加工を施すのみで断面形は片刃である。形状は円刃の範疇に入るが、やや偏る。刃部先端には使用痕と思われる擦痕が認められる。３と同様、両側縁の敲打痕の終点と擦痕の部位はほぼ一致している。

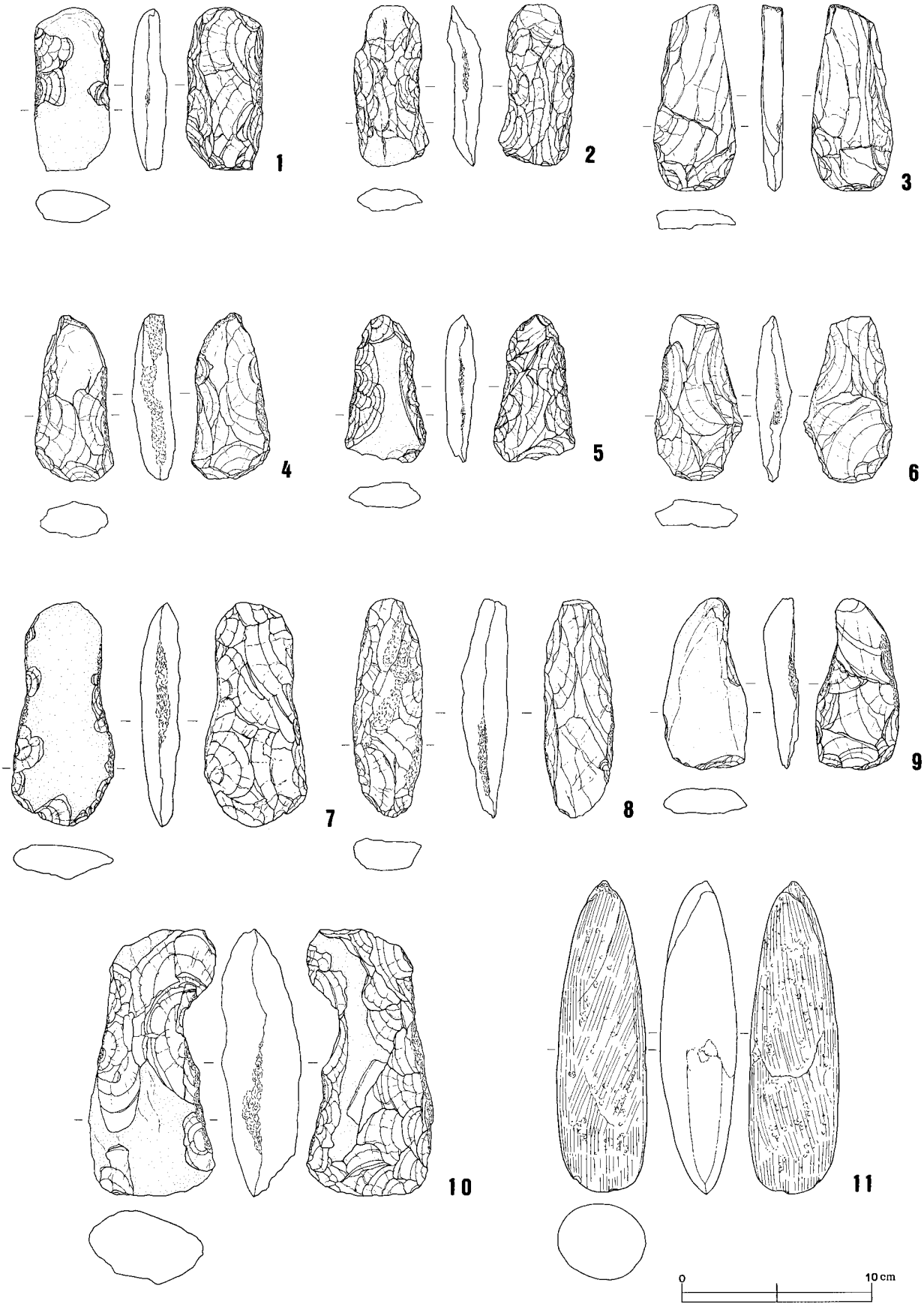
12は鉈状の形態を呈する敲石である。正面右側縁部と基部に形状調整剥離が見られる。敲打痕は左側縁に顕著で、側縁に対して垂直に使用されたものと思われる。13は楕円礫利用の敲石で、中心から１／２を欠損する。図下部先端に反復使用による強い敲打痕、側縁から両面の平坦部には弱い敲打痕が認められる。また、両面の平坦部には擦痕が顕著で、磨石を兼ねていた可能性がある。

14は平坦面に残された３条の幅広の磨痕から砥石と思われるが、正面左側縁の一部に敲打痕が認められ、敲石としても使用されていた可能性もある。長方形の礫をそのまま使用したもので、研磨面以外は自然面を残し、形状調整等の加工は加えられていない。

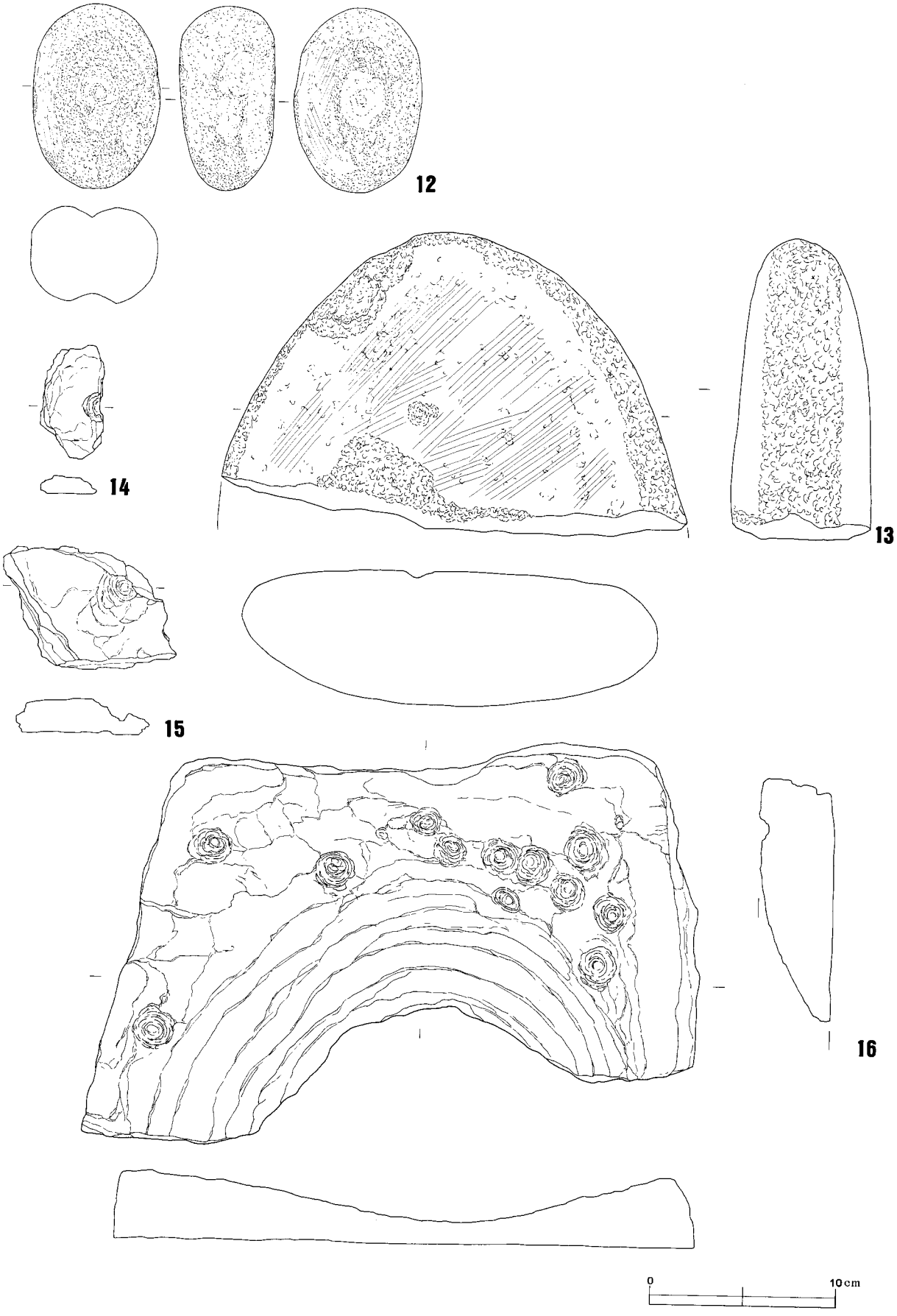
15は石皿の破片で、裏面である。２箇所の凹みが残存している。

第14号住居跡出土石器（第97・98図）

本住居跡は土器とともに石器の出土量も多い。主体となるのは打製石斧であるが、破損品、破片が多い



第97図　第14号住居跡出土石器（１）



第98図　第14号住居跡出土石器（２）

のも例にもれない。図示したのは打製石斧10点、磨製石斧１点、敲石１点、台石１点、石皿１点、同破片２点である。なお、磨製石斧、台石は床面直上より、石皿は炉縁石に使用されていたものである。

１～10は打製石斧である。１・２は短冊形、３～７は撥形、８は尖頭形で、９・10は片側の抉りが深く鉈状を呈するが撥形と分銅形の中間形とした。１は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。素材は横長剥片である。基部、両側縁部の調整は正面は中央から基部周辺に集中し、裏面は周縁的に施されている。敲打は中央部に限定される。刃部は裏面に加工痕が見られるが、先端に厚みがあり欠損している可能性がある。形状は直刃である。２は正面刃部と基部に自然面、裏面中央に主要剥離面を残す。基部は未加工で、両側縁部の調整剥離は面的になされている。敲打痕は中央部に集中する。刃部は裏面の先端に剥離が見られるが、先端に敲打が顕著であるため、使用時の欠損である可能性が高い。断面は片刃で、形状は直刃である。３は両面に主要剥離面を残し、正面左側縁は節理面をそのまま使用している。側縁部の加工は裏面右側縁に顕著に見られ、反対側の節理面との形状調整を行っているようである。敲打は基部先端、刃部付近に部分的に施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。４は基部が尖頭状を呈する。正面基部に自然面、裏面に自然面と主要剥離面を残している。両側縁部の調整は、正面が面的で、裏面は周縁的である。敲打は基部先端から刃部付近まで及ぶ。刃部は両面に剥離が見られる両刃であるが、先端には使用時の潰れが認められる。形状は円刃である。５は正面に自然面、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。基部、両側縁部の調整剥離は周縁的で、反復して加えられている。敲打は線的に基部側面から刃部付近まで見られる。刃部は片刃で、形状は直刃であるが、裏面の剥離の在り方から使用時に欠損した可能性がある。６は基部に自然面、裏面は多方向からの面的剥離によって構成されている。基部、両側縁の調整は部分的で、敲打も中央付近に弱く施される。刃部は両面加工の両刃で、形状は丸刃である。７は正面に大きく自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。基部、両側縁の調整は、特に正面において部分的且つ周縁的である。大まかな形状調整は正面から加えられた剥離でほぼ達成されたかのようである。敲打は基部側面から中央にかけて施されている。刃部の加工は、逆に正面に顕著で細かい剥離が認められる。断面は両刃で、形状は円刃である。８は打製石斧としたが、石材から磨製石斧の未製品、あるいは破損品からの再生途中の可能性もある。両面とも多方向からの面的な剥離で構成される。基部、両側縁の調整は周縁的で、敲打は両側縁と正面に認められる。刃部は正面に加工痕があり、断面は片刃、形状は円刃である。９は正面に大きく自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成される。基部は未加工で、両側縁部の調整も周縁的である。敲打は中央部を中心に施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状はやや丸みを帯びた直刃である。10は大型の打製石斧で、両面に自然面を残す。両側縁の調整加工は面的且つ反復して行われる。基部は正面右側を残しており、右側縁部の抉りを深くしているが、意図されたものかどうかは不明である。左側縁は直線的である。敲打は左側に顕著で、基部から刃部付近まで至る。刃部は正面が自然面を生かし、裏面には面的な加工が加えられている。自然面が湾曲するため、断面は両刃状を呈する。形状はやや丸みを帯びた直刃である。

11は完形の磨製石斧で、*P*１東側の床面直上から13とともに出土した（第28図）。乳棒形で、中央の断面は整った楕円形を呈する。両面には斜方向、縦方向、側縁部には縦方向の磨痕が認められる。刃部側面は面取りがなされ、両面からの縦方向の研磨により両刃の刃部を作出している。刃部形状は円刃である。また、全体的に敲打痕をわずかに残す。被熱痕跡が顕著で変色し、基部、中央部に亀裂が入っている。

12は楕円礫を使用した敲石である。両面に深い凹みを有する。全体的に敲打痕が見られるが、特に凹み

周辺と図下部に顕著である。また、両面平坦面には部分的に擦痕が見られ、磨石を兼ねていたと思われる。

13は台石である。11と近接して、床面直上より出土している。大きな楕円礫を使用しているが、およそ１/２を欠損する。周縁部には敲打痕が見られ、両面の平坦面には多方向の擦痕が認められる。また、両面に各々１箇所の浅い凹みを有する。

14～16は石皿である。14・15が裏面の破片で、各々１箇所の凹みが残存する。16は使い込まれた石皿で、炉埋設土器南側の炉縁石として再利用されていた。本来は長方形を呈していたものと思われ、およそ１/２を欠く。正面には凹面が形作られ、周囲には13箇所の凹みが見られる。中央部は欠失している。

第１号集石土壙出土石器（第99図１）

１は焼礫に混じって出土した敲石で、三角形の礫を素材としている。図下部を欠損するが、破損面にも弱い敲打が見られる。敲打痕は周縁部を中心とし、部分的に強弱の差が認められる。また、両面の平坦部には擦痕があり、磨石としても使用されていたと思われる。被熱痕跡が顕著で、亀裂が入る。

第７号土壙出土石器（第99図２）

２は楕円礫使用の敲石である。被熱が顕著で、各所に亀裂が入っている。強い敲打が周縁部全体に見られる。両面には擦痕は認められず、機能的な限定が看取される。

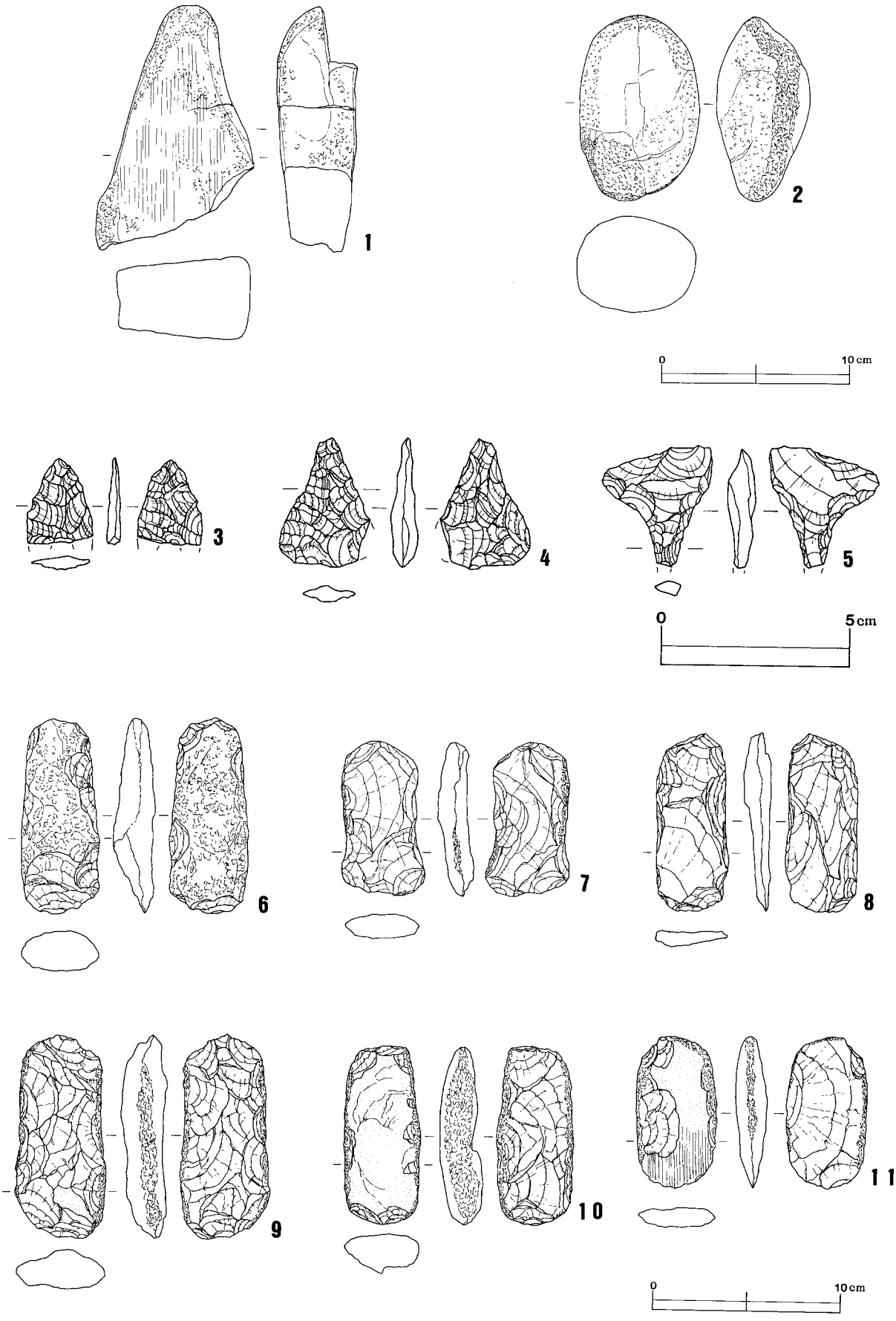
遺構外出土石器（第99図３～第101図）

調査区内からは、遺構外からも多量の石器が出土している。その大半は遺構確認、遺構清掃の過程で出土したものである。主体となるのは打製石斧であるが、例にもれず多くが破損品あるいは破片であるため、掲載は完形品かそれに近いものに限定した。他の器種としては石鏃、石錐、石錘、磨製石斧、敲石、石皿がある。ただし、石錘は形態的に後期のものと思われ、対岸の宮原遺跡に関連する遺物と考えられる。

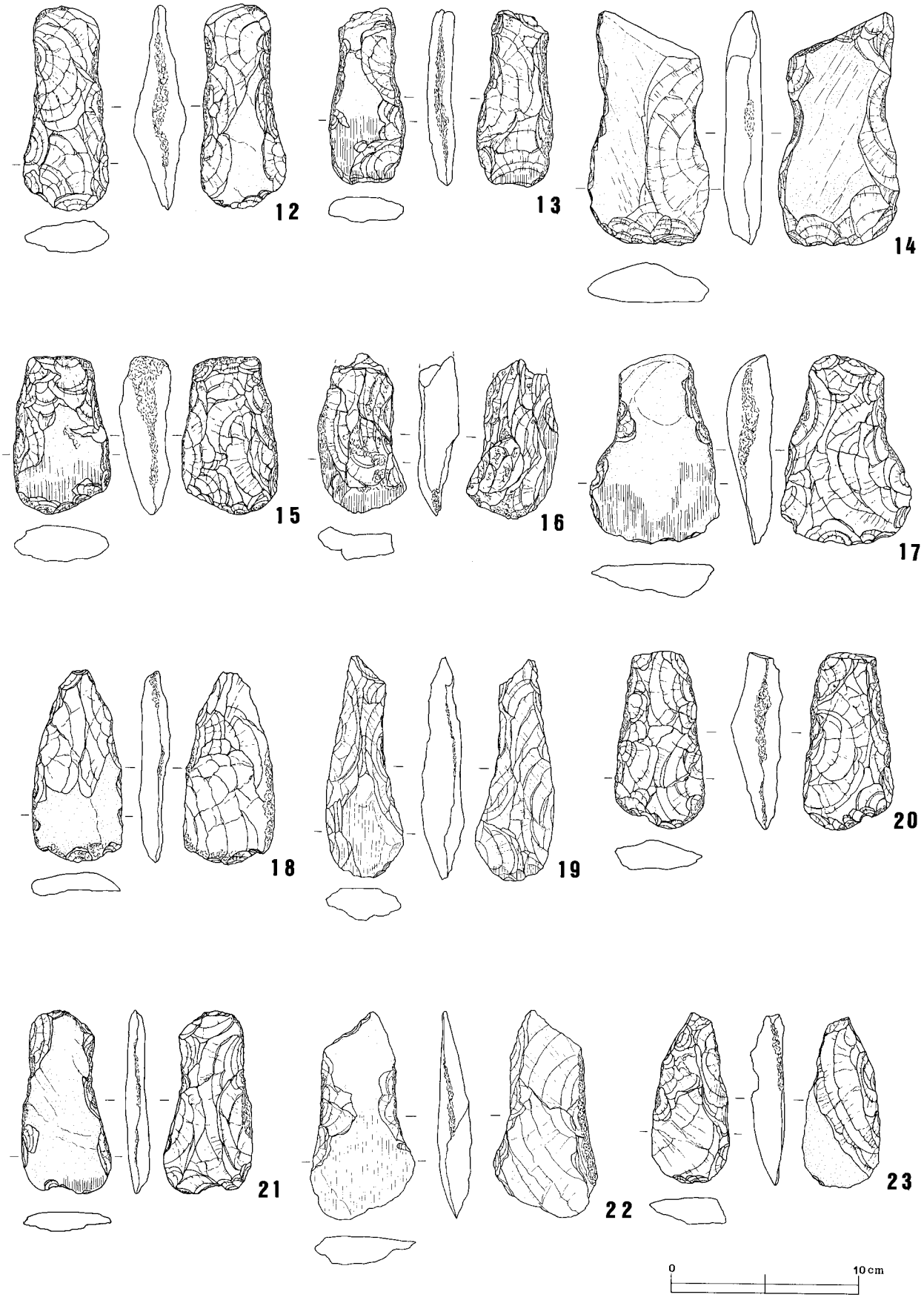
３・４は石鏃である。３は基部を欠損する。両面とも大きめの押圧剥離による調整が辺に対してほぼ直角に施され、正面にはほぼ中央に稜を形成している。下端部には下方向からの剥離が見られ、基部は凹基、無茎であった可能性が高い。４は大型の石鏃で、やや作りが粗雑である。凸基、無茎。側縁の形状は、正面左側がわずかに湾曲している。調整剥離は正面が細かく、裏面が幅広且つランダムである。

５は石錐で、錐部先端を欠く。正面は基部に大きめの剥離、裏面には主要剥離面を残している。錐部は両側の押圧剥離が細かくなされている。側面から見ると錐部はわずかに湾曲している。

６～26は打製石斧である。６～11は短冊形、12～26は撥形であるが、抉りが深い中間形も含んでいる。６は両面とも敲打痕が著しく、剥離方向は不明である。基部、両側縁部の調整は周縁的で、部分的に施されているが、敲打痕はこれらの剥離上にも及んでいる。刃部は両面からの加工が見られるが、断面は片刃状を呈する。形状は直刃である。石材と敲打痕から、磨製石斧の未製品である可能性もある。７は両面に主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整は周縁的で、敲打はこれらの上に刃潰し状に施されている。刃部は両面加工の両刃であるが、先端の一部に敲打状の使用痕が認められる。形状は直刃である。８は正面刃部から基部近くまでの大きな剥離が見られるが、使用時の欠損と思われる。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、刃潰し状に弱い敲打が加えられている。刃部は断面片刃状を呈し、形状は円刃である。９は両面とも多方向からの面的な剥離で構成される。基部、両側縁の調整も面的で、敲打は幅広に刃部近くまで施されている。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。10は正面に自然面、裏面に主要剥離面を残している。刃部も含めて調整剥離は周縁的で、側縁部を覆うかのように敲打が加えられている。刃部は断面両刃状で、形状は円刃である。11は楕円形に近い形状を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を

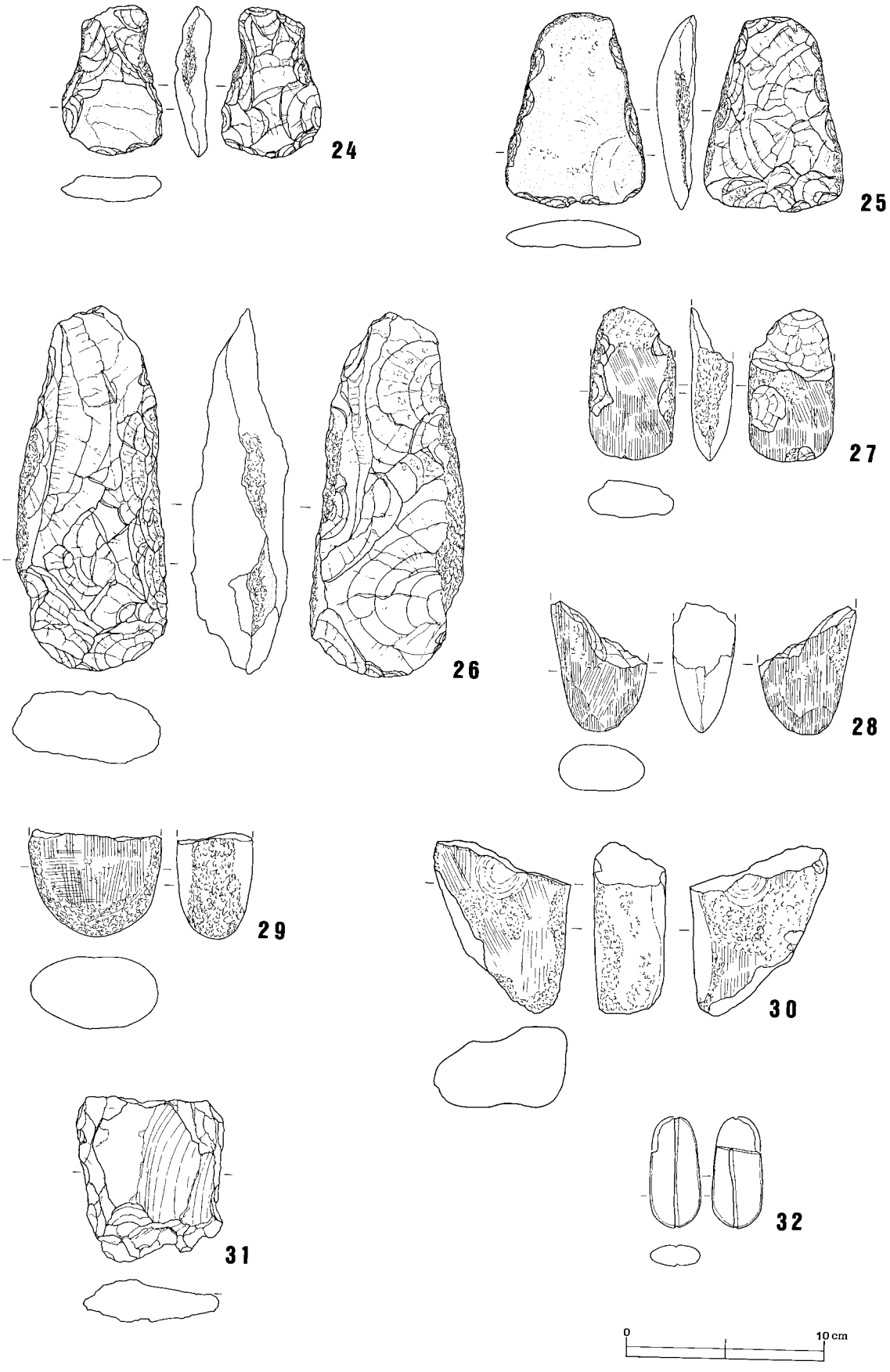


第99図　土壙出土石器・遺構外出土石器（1）



第100図　遺構外出土石器（２）

残す。基部、両側縁の調整は主として正面に認められるが、周縁的である。基部から刃部近くまで敲打が施されている。刃部は裏面の一部剥離が見られるのみで、素材の形状をほとんど残しているようである。断面は片刃で、形状は円刃である。刃部正面には光沢状の使用痕が認められる。12は正面が多方向からの面的剥離からなり、裏面には刃部を中心に自然面を残している。両側縁部の調整剥離は周縁的で、わずかに抉り状を呈している。敲打は中央部を中心に幅広に加えられる。刃部の調整は面的で入念である。断面は片刃状で、形状は円刃である。13は正面に自然面、裏面に主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整は周縁的で、敲打は刃潰し状に施されている。刃部は断面両刃状を呈し、形状は直刃である。なお、刃部両面には光沢状の使用痕を明確に残している。14は正面に自然面、裏面に節理面を大きく残している。基部の調整は裏面、側縁部は正面に大きく面的になされ、その後に細かい調整剥離が加えられる。敲打は中央部に限定的で、やや抉り状を呈する。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。刃部先端には使用時の潰れが認められる。15は正面中央から刃部にかけて自然面、裏面に主要剥離面の一部を残している。基部、両側縁の調整剥離は面的で、反復して施される。敲打は基部先端から刃部付近まで及ぶ。刃部は両面加工の両刃であるが、先端部の潰れが顕著で、一部は使用時の剥離と思われる。断面は両刃で、形状は円刃である。正面刃部の自然面には光沢状の使用痕が見られる。16は石材から磨製石斧の再利用品の可能性がある。正面刃部と裏面右側縁には、磨製石斧様の磨痕を残している。両面の剥離面は面的であるが、形状調整とは異なるようである。また、剥離面上には弱い敲打痕が広範囲に加えられている。刃部は旧刃部をそのまま使用し、先端部には作業時の潰れを残す。17は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は基部から中央部にかけて加えられている。刃部は裏面に加工痕が見られる片刃で、形状は円刃である。刃部正面の自然面には光沢状の使用痕を明確に残している。18は基部が尖頭状を呈している。正面刃部付近に自然面を残し、裏面は多方向からの面的剥離で構成されている。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で部分的になされ、敲打は刃潰し状に刃部付近まで施されている。刃部先端には使用時の潰れが見られ、一部の剥離はそれに伴うものと考えられる。刃部断面は片刃で、形状は円刃である。19は正面右側縁が反る形状を呈する。正面刃部付近に自然面を残し、裏面は多方向からの面的な剥離で構成される。基部、両側縁の調整は面的で、敲打は刃潰し状に基部側面に加えられている。刃部は断面片刃で、形状は円刃である。刃部正面の自然面には光沢状の使用痕を残している。20は正面に多方向からの面的剥離が加えられ、裏面には主要剥離面を残す。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で、敲打は中央が幅広に、他は刃潰し状に施される。刃部は両面加工の両刃であるが、使用時の潰れが顕著で、一部の剥離はこれに伴うものと考えられる。形状は偏った円刃である。21は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残す。基部、両側縁の調整剥離は周縁的で縁辺部に限られる。敲打は刃潰し状に弱く施されている。刃部は裏面に加工が認められ、正面は自然面をそのまま残す。刃部中央の欠損は使用時のものと思われる。先端には使用痕状の擦痕が認められる。刃部断面は片刃、形状は円刃である。22は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。両側縁部の調整は、裏面が周縁的で、正面は中央部を中心に面的に施され浅い抉り状を呈する。敲打は刃潰し状に施されるが、裏面右側縁は幅広となっている。刃部は加工痕が見られず、素材剥片のままである。断面形は片刃で、形状は斜刃である。刃部正面の自然面には光沢状の使用痕を残す。23は正面に主要剥離面、裏面刃部付近に自然面、基部先端には節理面を残している。基部、両側縁の調整は、正面には面的剥離が加えられているが、裏面にはほとんど見られない。敲打は刃潰し状に基部周辺に施されている。刃部は断面片刃状を呈し、形状は円刃である。24



第101図　遺構外出土石器（３）

は正面刃部に自然面、裏面に主要剥離面を残している。基部、両側縁の調整剥離は面的で、側縁はわずかに抉り状を呈する。敲打は、抉り部分から基部にかけて加えられている。刃部は両面に小剥離が認められるが、一部は使用時のものと思われる。断面形は片刃で、形状は円刃である。25は正面に自然面、裏面に主要剥離面を大きく残している。基部、両側縁の調整は縁辺部に限定されており、敲打は基部先端から刃部近くにまで及ぶ。刃部は裏面に加工が見られ、正面の小剥離は使用時のものと考えられる。断面形は片刃、形状は直刃である。26は大型の打製石斧である。裏面刃部付近に一部自然面を残しているが、両面とも多方向からの面的剥離で構成されている。基部は未加工に近く、両側縁の調整は周縁的である。正面右側の側縁部は階段状の剥離が顕著である。敲打は基本的に刃潰し状に施されているが、正面左側縁は幅広になっている。右側縁には弱い敲打が認められる。刃部は両面加工の両刃で、形状は円刃である。

27・28は磨製石斧で、いずれも刃部付近の破片である。両者とも修復の痕跡が見られない。27は定角形で、両側縁には調整剥離と敲打痕を残す。両面とも磨痕が明確で、刃部の断面形は均等な両刃を呈する。形状は直刃である。28は乳棒形を呈していたものと思われる。正面左側縁には、わずかに敲打痕が見られる。刃部の未完成状態で、研いだ後が面取り状に残存する。断面形は整った両刃で、形状は円刃である。

29・30は敲石で、いずれも破片である。29は楕円礫の周縁部を作業面とするもので、約１／２を欠損する。図下部に反復した強い敲打が顕著である。両面の平坦面には擦痕が見られ、磨石としても使用されていたと思われる。30は長楕円礫を素材としたと考えられるが、破損面の一部にも強い敲打が及んでいる。両面に深い凹みを有し、周辺には弱い敲打と擦痕が認められ、磨石併用の可能性が高い。

31は石皿の破片である。図右側に凹面の一部を残している。

32は有溝石錘で、一部を欠損する。長楕円形の偏平礫を使用したもので、溝は両面の長軸方向に直線的に彫られている。後期的な様相を持つため、本遺跡と小河川を挟んで対峙する宮原遺跡に関係する遺物と思われる。

丸山遺跡出土石器計測表

図版番号	出土位置	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
601	SJ－８	有舌尖頭器	(5.8)	1.7	0.7	5.5	チャート	
7901	SJ－１	打製石斧	(13.8)	4.9	2.7	213	ホルンフェルス	
7902	SJ－１	打製石斧	9.5	3.5	1.7	6	緑泥片岩	
7903	SJ－１	打製石斧	(9.6)	5.4	2.0	108	ホルンフェルス	
7904	SJ－１	打製石斧	10.2	5.3	1.9	130	砂岩	
7905	SJ－１	打製石斧	10.8	5.5	1.4	85	頁岩	
7906	SJ－１	打製石斧	8.1	4.6	1.1	81	砂岩	
7907	SJ－１	打製石斧	14.5	6.2	5.5	500	ホルンフェルス	
7908	SJ－１	磨製石斧	(10.8)	4.8	3.1	249	緑色岩	
7909	SJ－１	敲　　石	14.3	9.9	5.1	950	砂岩	
7910	SJ－１	敲　　石	(8.7)	6.4	3.8	(264)	砂岩	
8001	SJ－２	石　　鏃	2.4	1.8	0.4	0.7	チャート	
8002	SJ－２	石　　鏃	1.8	1.3	0.4	0.4	チャート	
8003	SJ－２	石　　鏃	2.2	1.6	0.5	0.5	チャート	
8004	SJ－２	石　　鏃	3.3	1.7	0.6	1.5	チャート	
8005	SJ－２	打製石斧	12.2	4.5	1.3	100	砂岩	
8006	SJ－２	打製石斧	9.0	3.8	1.7	64	片岩	

図版番号	出土位置	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
8007	SJ－2	打製石斧	(11.0)	5.3	1.2	91	ホルンフェルス	
8008	SJ－2	打製石斧	12.0	4.5	2.3	181	ホルンフェルス	
8009	SJ－2	打製石斧	8.5	4.1	1.6	74	珪質岩	
8010	SJ－2	打製石斧	10.7	5.0	1.3	88	緑泥片岩	
8011	SJ－2	打製石斧	8.5	5.3	1.5	67	砂岩	
8012	SJ－2	打製石斧	7.4	4.0	1.5	56	ホルンフェルス	
8013	SJ－2	打製石斧	7.6	4.4	1.8	71	頁岩	
8114	SJ－2	打製石斧	8.6	4.0	1.3	63	珪質岩	
8115	SJ－2	打製石斧	11.5	4.8	1.2	76	頁岩	
8116	SJ－2	打製石斧	6.5	4.3	2.3	62	黒色頁岩	
8117	SJ－2	打製石斧	7.7	4.6	2.1	73	ホルンフェルス	
8118	SJ－2	打製石斧	7.1	3.7	1.8	61	珪質岩	
8119	SJ－2	打製石斧	9.2	6.5	2.3	216	砂岩	
8120	SJ－2	打製石斧	6.7	5.6	1.2	56	ホルンフェルス	
8121	SJ－2	打製石斧	9.1	3.3	2.1	61	ホルンフェルス	
8122	SJ－2	打製石斧	8.8	6.0	1.6	81	ホルンフェルス	
8123	SJ－2	打製石斧	10.4	4.4	1.9	99	緑泥片岩	
8124	SJ－2	打製石斧	9.1	6.2	1.7	104	ホルンフェルス	
8125	SJ－2	打製石斧	7.5	4.0	1.3	43	緑泥片岩	
8226	SJ－2	敲　　石	(4.2)	5.4	3.4	130	閃緑岩	
8227	SJ－2	多孔石	(9.5)	5.2	1.4	110	緑泥片岩	凹あり
8228	SJ－2	石　　皿	22.1	12.5	3.9	1220	緑泥片岩	裏面、多孔あり
8301	SJ－3	敲　　石	(5.2)	(6.9)	3.4	(175)	安山岩	
8302	SJ－3	敲石・磨石	(10.4)	(7.2)	4.6	(520)	砂岩	
8303	SJ－3	敲　　石	(13.5)	(10.5)	3.5	(770)	緑泥片岩	
8401	SJ－4	打製石斧	9.9	5.0	1.9	106	砂岩	
8402	SJ－4	打製石斧	7.7	5.8	1.9	81	ホルンフェルス	
8403	SJ－4	打製石斧	7.9	4.1	1.6	59	片岩	
8404	SJ－4	打製石斧	9.6	5.4	1.1	51	砂岩	
8501	SJ－5	打製石斧	8.4	4.6	1.9	(165)	ホルンフェルス	
8502	SJ－5	打製石斧	9.8	4.0	2.8	175	砂岩	被熱
8503	SJ－5	打製石斧	12.7	5.2	2.4	190	砂岩	被熱
8504	SJ－5	磨製石斧	(10.3)	(4.8)	3.9	(310)	緑色岩	被熱？
8505	SJ－5	敲　　石	12.2	9.2	3.5	500	砂岩	
8506	SJ－5	敲　　石	13.8	9.7	3.9	780	閃緑岩	被熱
8601	SJ－6	打製石斧	8.1	4.9	1.2	61	ホルンフェルス	
8602	SJ－6	打製石斧	8.5	5.3	1.9	120	珪質岩	
8603	SJ－6	打製石斧	7.4	4.5	1.5	62	ホルンフェルス	
8604	SJ－6	磨製石斧	(11.5)	4.5	3.1	(277)	緑色岩	
8605	SJ－6	敲　　石	(11.7)	(7.6)	4.0	(520)	砂岩	
8606	SJ－6	台　　石	16.6	22.4	6.4	(3800)	閃緑岩	凹あり
8701	SJ－7	打製石斧	9.2	4.1	1.9	76	砂岩	
8702	SJ－7	打製石斧	8.4	4.2	1.9	88	頁岩	

図版番号	出土位置	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
8703	SJ－7	打製石斧	8.9	4.4	2.5	120	砂岩	
8704	SJ－7	打製石斧	9.9	3.7	2.0	75	ホルンフェルス	
8705	SJ－7	打製石斧	8.4	5.3	2.5	113	ホルンフェルス	
8706	SJ－7	打製石斧	9.8	5.0	1.8	72	砂岩	
8707	SJ－7	打製石斧	9.8	5.4	2.0	105	ホルンフェルス	
8708	SJ－7	打製石斧	8.7	7.4	2.6	122	ホルンフェルス	
8709	SJ－7	打製石斧	9.8	4.7	2.0	96	珪質岩	
8710	SJ－7	打製石斧	9.7	5.0	1.4	97	緑色岩	
8711	SJ－7	打製石斧	9.6	3.3	1.0	43	ホルンフェルス	
8812	SJ－7	敲石・磨石	11.0	8.0	3.9	575	閃緑岩	
8813	SJ－7	敲石・磨石	12.5	6.8	3.8	565	閃緑岩	
8814	SJ－7	敲　　石	(11.0)	8.1	1.9	251	砂岩	
8901	SJ－8	打製石斧	9.9	4.0	1.5	70	緑泥片岩	
8902	SJ－8	打製石斧	9.5	5.0	1.5	108	ホルンフェルス	
8903	SJ－8	打製石斧	9.5	6.9	2.3	181	ホルンフェルス	
8904	SJ－8	打製石斧	7.7	3.7	1.1	46	ホルンフェルス	
8905	SJ－8	打製石斧	10.6	5.7	1.4	106	チャート	
8906	SJ－8	打製石斧	11.5	5.0	2.0	137	ホルンフェルス	
8907	SJ－8	打製石斧	8.4	4.4	1.0	44	砂岩	
8908	SJ－8	打製石斧	9.5	4.3	1.5	81	ホルンフェルス	
8909	SJ－8	磨製石斧	(9.7)	5.0	3.0	(245)	緑色岩	
8910	SJ－8	敲　　石	12.5	9.9	3.9	(810)	安山岩	
8911	SJ－8	敲　　石	(11.2)	(10.2)	4.8	(774)	閃緑岩	
9001	SJ－9	打製石斧	9.7	3.9	1.6	101	緑色岩	
9002	SJ－9	打製石斧	9.1	3.8	1.8	69	ホルンフェルス	
9003	SJ－9	打製石斧	10.3	4.5	2.2	105	チャート	
9004	SJ－9	打製石斧	7.4	3.8	1.5	54	ホルンフェルス	
9005	SJ－9	打製石斧	10.0	6.7	2.2	98	ホルンフェルス	
9006	SJ－9	打製石斧	10.2	4.8	1.4	88	砂岩	
9007	SJ－9	磨製石斧	(5.8)	(3.8)	(2.9)	(78)	緑色岩	
9008	SJ－9	敲　　石	11.4	7.1	3.5	484	閃緑岩	
9009	SJ－9	敲石・磨石	(16.1)	11.0	8.4	(1225)	砂岩	
9110	SJ－9	石　　皿	(18.0)	(8.5)	(1.7)	(485)	緑泥片岩	
9111	SJ－9	砥　　石	21.0	13.2	6.5	27500	砂岩	石皿再利用
9201	SJ－10	打製石斧	8.9	8.7	3.1	297	ホルンフェルス	
9202	SJ－10	敲　　石	(11.6)	8.3	5.3	625	安山岩	
9301	SJ－11	打製石斧	8.5	4.3	1.1	56	砂岩	
9302	SJ－11	打製石斧	9.8	4.6	1.9	88	ホルンフェルス	
9303	SJ－11	磨製石斧	(5.7)	(7.3)	3.7	224	安山岩	
9304	SJ－11	掻　　器	3.5	5.1	0.7	16	チャート	
9305	SJ－11	掻　　器	5.4	11.4	1.0	(65)	頁岩	
9306	SJ－11	凹　　石	(5.4)	(4.7)	(1.7)	(80)	緑泥片岩	
9307	SJ－11	石　　皿	(11.7)	(10.7)	(1.5)	(296)	緑泥片岩	

図版番号	出土位置	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
9308	SJ－11	石　　皿	(10.3)	(14.4)	7.4	(1235)	安山岩	
9401	SJ－12	打製石斧	7.4	4.1	1.9	90	ホルンフェルス	
9402	SJ－12	打製石斧	9.5	4.8	1.4	105	ホルンフェルス	
9403	SJ－12	打製石斧	10.5	4.2	1.6	98	ホルンフェルス	
9404	SJ－12	磨製石斧	23.3	6.6	4.1	1170	緑色岩	未製品
9405	SJ－12	敲　　石	7.7	5.2	3.2	208	安山岩	
9501	SJ－13	掻　　器	2.5	3.6	1.0	8	チャート	
9502	SJ－13	打製石斧	9.7	4.6	2.0	111	砂岩	
9503	SJ－13	打製石斧	9.1	4.1	0.9	63	ホルンフェルス	
9504	SJ－13	打製石斧	9.9	4.8	1.5	111	砂岩	
9505	SJ－13	打製石斧	9.3	4.5	1.3	95	ホルンフェルス	
9506	SJ－13	打製石斧	9.5	4.5	1.4	89	ホルンフェルス	
9507	SJ－13	打製石斧	6.7	4.0	0.9	38	頁岩	
9508	SJ－13	打製石斧	7.8	4.1	1.4	43	頁岩	
9509	SJ－13	打製石斧	8.9	4.3	1.4	78	片岩	
9510	SJ－13	打製石斧	7.6	4.7	1.2	79	ホルンフェルス	
9511	SJ－13	打製石斧	8.7	4.0	2.1	83	緑色岩	
9512	SJ－13	敲　　石	13.8	5.2	2.5	(244)	緑色岩	
9613	SJ－13	敲　　石	(9.5)	(3.3)	2.9	(170)	安山岩	
9614	SJ－13	砥　　石	15.3	6.9	3.1	600	砂岩	
9615	SJ－13	多 孔 石	(9.1)	(5.2)	(0.9)	61	緑色岩	
9701	SJ－14	打製石斧	8.6	3.9	1.7	85	ホルンフェルス	
9702	SJ－14	打製石斧	8.5	3.7	1.5	51	片岩	
9703	SJ－14	打製石斧	9.7	4.2	1.2	80	緑泥片岩	
9704	SJ－14	打製石斧	8.5	4.0	1.9	90	ホルンフェルス	
9705	SJ－14	打製石斧	7.5	4.2	1.3	(58)	ホルンフェルス	
9706	SJ－14	打製石斧	8.7	4.6	1.8	69	ホルンフェルス	
9707	SJ－14	打製石斧	11.7	5.2	1.7	147	砂岩	
9708	SJ－14	打製石斧	11.4	3.6	1.5	125	緑色岩	
9709	SJ－14	打製石斧	8.7	4.3	1.3	80	片岩	
9710	SJ－14	打製石斧	14.0	6.4	4.2	375	ホルンフェルス	
9711	SJ－14	磨製石斧	17.0	4.7	4.0	445	緑色岩	被熱
9812	SJ－14	敲石・磨石	9.9	6.9	5.0	583	砂岩	凹部で厚さ4.1
9813	SJ－14	石　　皿	(15.9)	(24.3)	7.1	(1235)	閃緑岩	
9814	SJ－14	石　　皿	(6.0)	(3.4)	(1.0)	(24)	緑泥片岩	凹あり
9815	SJ－14	石　　皿	(6.4)	9.6	1.8	(156)	緑泥片岩	凹あり
9816	SJ－14	石　　皿	32.0	(20.4)	1.2－3.6	(1230)	緑泥片岩	多孔あり
9901	SC－1	敲　　石	(11.7)	(7.3)	4.3	(490)	砂岩	
9902	SK－7	敲　　石	9.7	6.3	5.0	372	砂岩	
9903	表採	石　　鏃	2.3	1.7	0.4	(1.0)	チャート	
9904	表採	石　　鏃	3.5	(2.4)	0.7	(3.5)	チャート	
9905	表採	石　　錐	3.2	2.9	0.7	(4.5)	チャート	
9906	表採	打製石斧	10.4	4.2	2.1	(127)	緑色岩	

図版番号	出土位置	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考
9907	表採	打製石斧	7.9	4.4	1.4	73	ホルンフェルス	
9908	表採	打製石斧	9.3	3.8	1.4	(57)	頁岩	
9909	表採	打製石斧	10.9	4.7	2.1	143	砂岩	
9910	表採	打製石斧	9.5	4.0	2.0	115	砂岩	
9911	表採	打製石斧	8.1	4.2	1.6	69	砂岩	
10012	SD−5	打製石斧	10.9	4.5	2.7	106	ホルンフェルス	
10013	SD−3	打製石斧	9.3	4.0	1.3	51	珪質岩	
10014	表採	打製石斧	12.5	6.4	2.0	203	砂岩	
10015	表採	打製石斧	8.4	5.1	2.3	129	砂岩	
10016	表採	打製石斧	(8.6)	4.3	1.9	95	緑色岩	磨製石斧の再利用？
10017	表採	打製石斧	10.0	6.8	2.2	163	ホルンフェルス	
10018	表採	打製石斧	10.2	4.8	1.4	83	砂岩	
10019	表採	打製石斧	11.8	4.0	2.2	102	緑泥片岩	
10020	表採	打製石斧	9.4	4.7	2.4	109	ホルンフェルス	
10021	表採	打製石斧	9.4	4.7	1.1	66	ホルンフェルス	
10022	表採	打製石斧	10.5	5.3	1.5	100	砂岩	
10023	表採	打製石斧	9.1	4.1	1.7	69	ホルンフェルス	
10124	SD−3	打製石斧	7.5	5.0	1.5	71	ホルンフェルス	
10125	SD−3	打製石斧	9.8	9.0	1.8	145	頁岩	
10126	SD−5	打製石斧	18.4	7.4	4.5	595	ホルンフェルス	
10127	表採	磨製石斧	(7.6)	4.2	2.0	(73)	緑色岩	
10128	表採	磨製石斧	(5.6)	(4.3)	3.1	(86)	緑色岩	
10129	表採	磨　　石	(5.2)	6.6	3.6	(180)	安山岩	
10130	SD−3	敲　　石	(7.1)	(6.7)	4.0	(240)	安山岩	
10131	表採	石　　皿	(7.6)	(7.3)	(2.1)	(158)	緑泥片岩	
10132	表採	石　　錘	(5.6)	2.5	1.1	(19.0)	珪質岩	

土製品

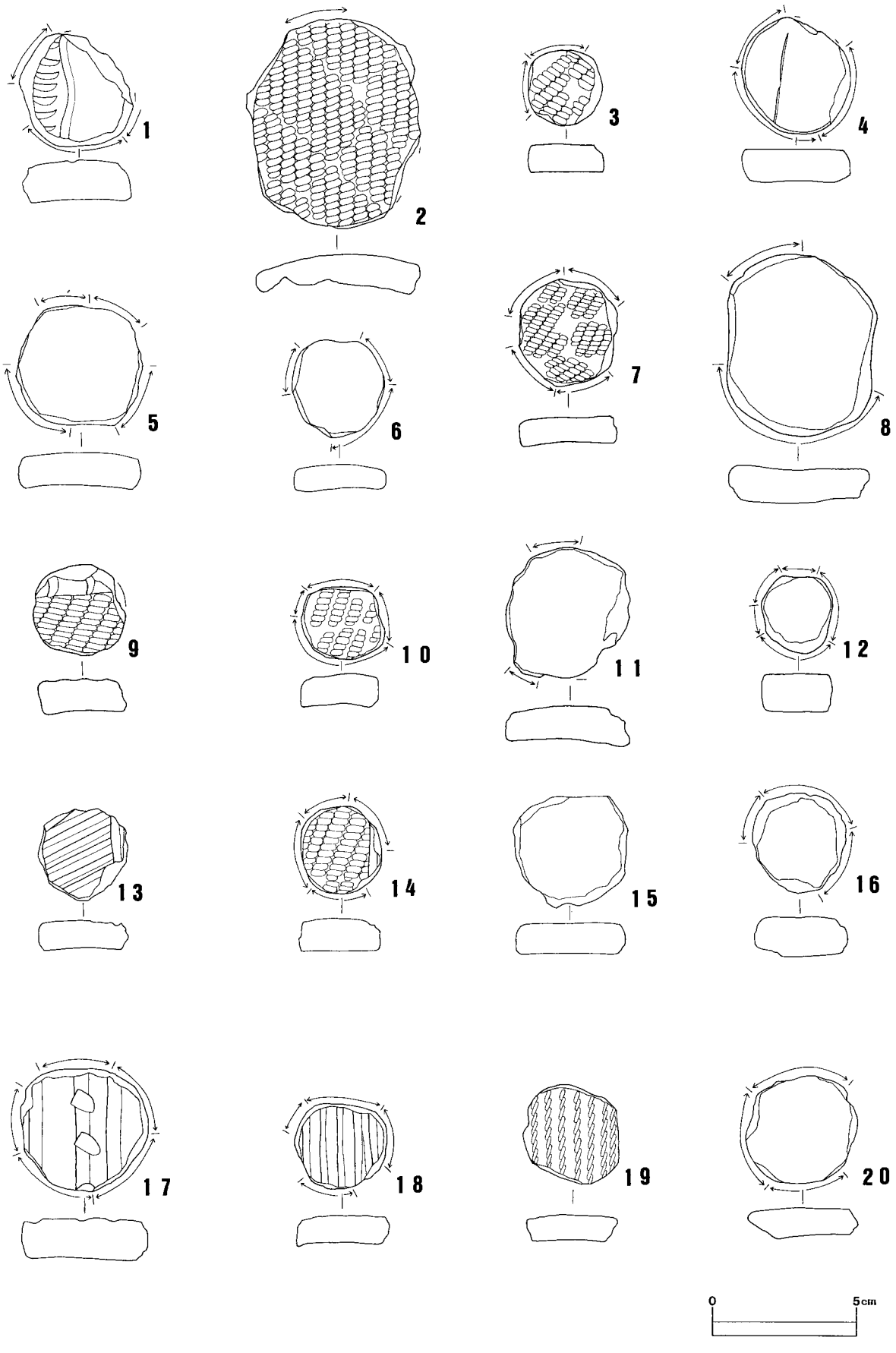
土製円盤（第102～104図57）

土製円盤は、遺構覆土内及び遺構外から57点が出土している。１～47が各住居跡内、48～57が表採である。いずれも土器片を再利用したものもある。文様を残すものも多いが、勝坂式の文様と地文に０段多条の単節 RL を施すものが多く、時期的には勝坂期に偏りが見出せる。ただし、遺構の時期と出土点数はこれに連動せず、当時の集落内で採集された土器片を任意に利用していたものと思われる。形状は楕円形を主体とし、円形がこれに次ぐ。必然的に周縁部は連続した面ではなく、いくつかの単位に分かれ、１単位は直線的なものが多く認められる。擦痕は破片面に対して垂直方向が多数を占める。また、浅鉢の破片利用が目立つのも特徴的である。浅鉢は概して胎土が緻密であるため、深鉢の破片に比して周縁部が比較的滑らかとなっており、用途を推測する上で示唆的である。

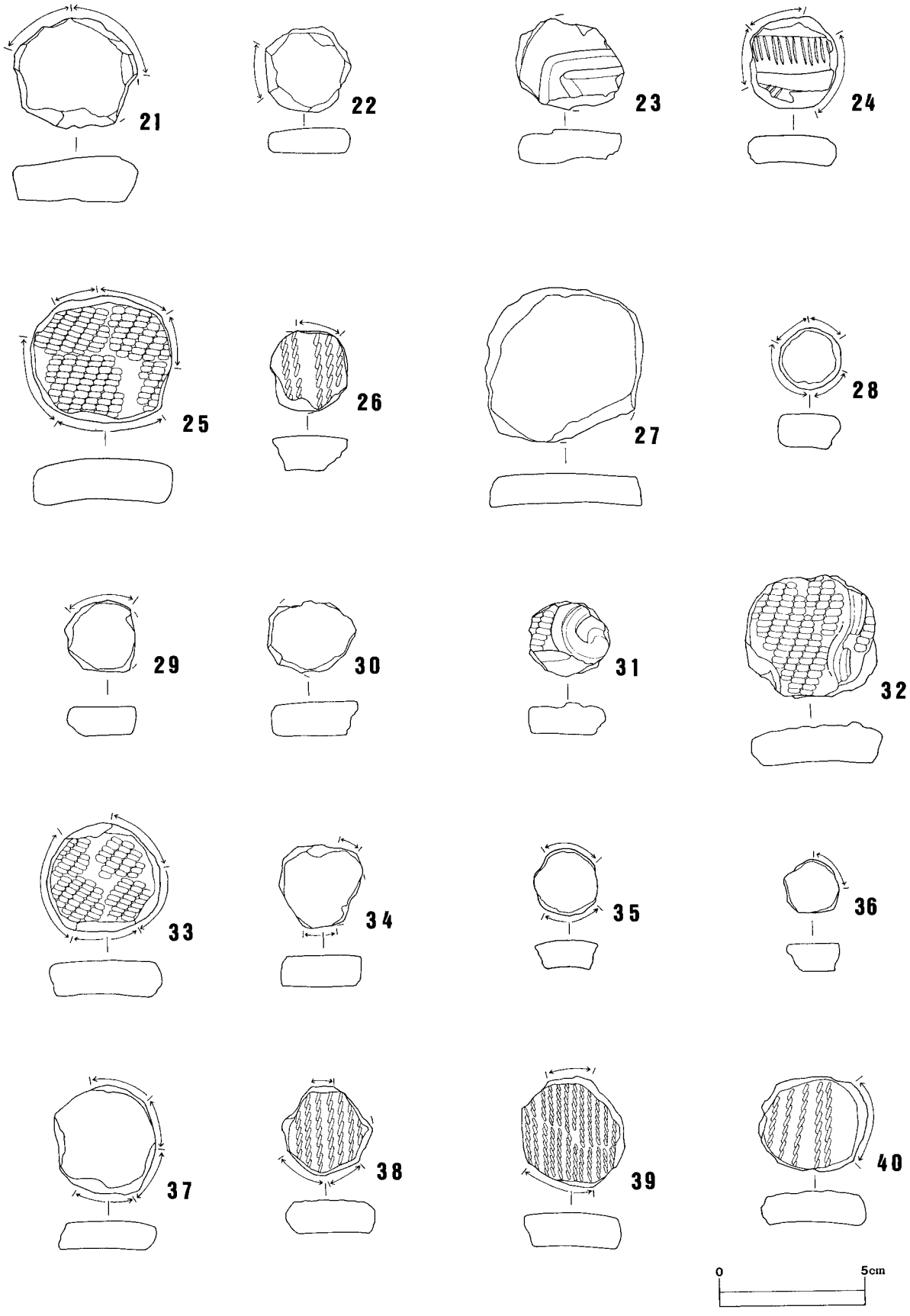
土製円盤の用途については、メンコ説、計数用具説、祭祀具説の他、木製品仕上げ砥説（海老原1988）があるが、今回の擦痕観察から土器製作時の内面調整具の可能性を提示しておきたい。

耳栓（第104図58～61）

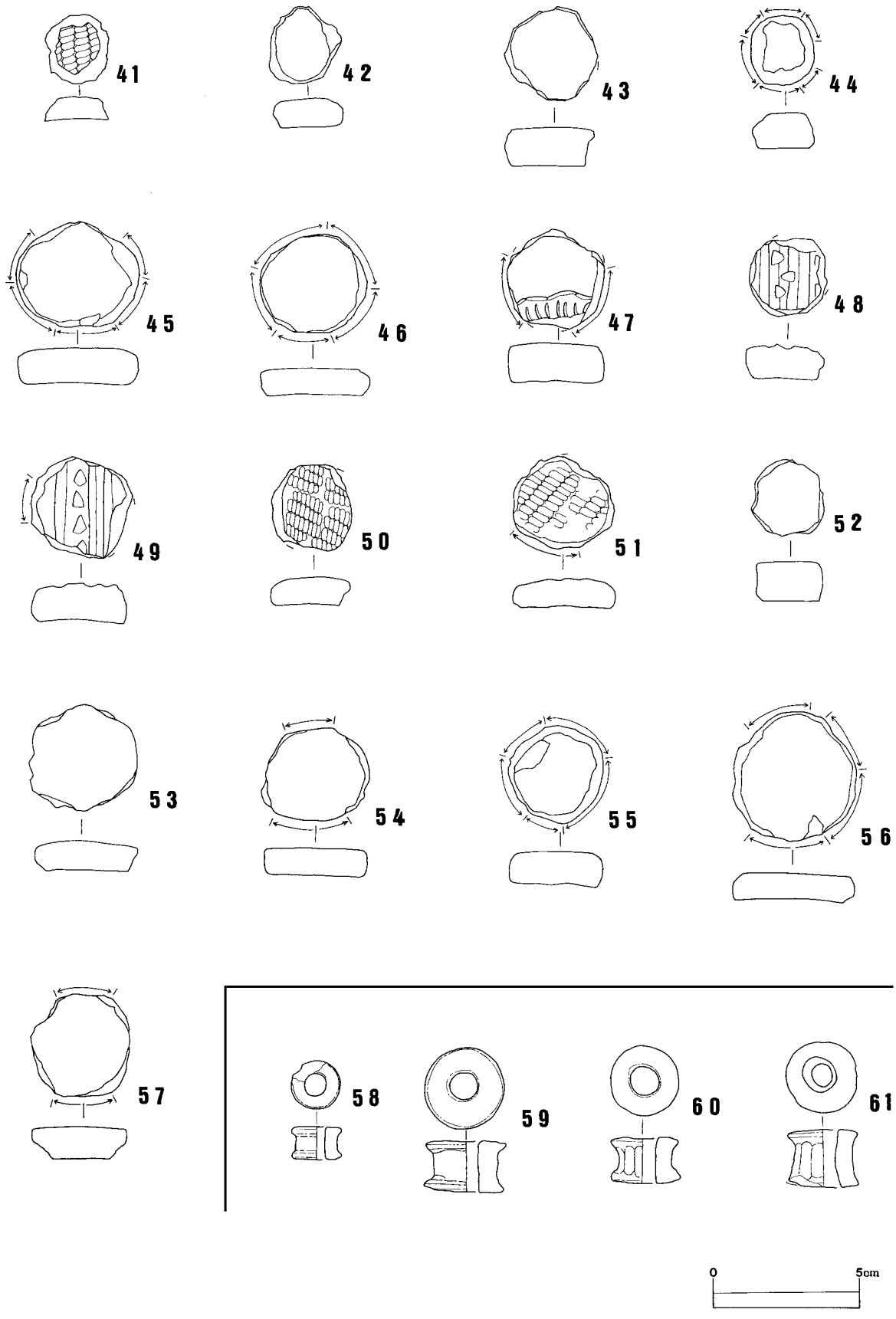
耳栓は住居跡覆土内から４点が出土している。58は第２号住居跡から出土した。４点中、最も小型で全



第102図　出土土製品（１）



第103図　出土土製品（２）



第104図　出土土製品（３）

第105図　出土土製品（４）

体形は糸巻状を呈し、中央に孔が貫通する。整形は良好で、滑らかに仕上げられている。59～61は第７号住居跡から出土した。59は58をやや大振りにしたもので、上下はタガ状を呈する。整形は良好で、表面は滑らかである。中央には孔が貫通する。60・61はやや歪んだ鼓状を呈するもので、作りが酷似し、対で使用されていた可能性もある。両者とも上下の平坦面がわずかに湾曲し、側面には縦方向の削りが入る。中央には孔が貫通している。

ミニチュア土器（第105図）

第105図62は手捏ね土器で、完形である。第12号住居跡から出土した。底部は平坦で、やや内傾してたち上がり口縁部は直立する。上半部は厚手となっている。器面には単節 RL が縦位に施されているが、素地がいくらか乾燥した時点で施文されたようで条間に隙間が見られる。63は第13号住居跡から出土したもので手捏ね土器である。口縁部を欠損する。直立気味の胴下半部には指頭状の圧痕、部分的に爪痕が認められる。64は表採土器で、ミニチュアの台付土器台部あるいは器台である。孔が１箇所残存している。

Ⅳ　近・現代の遺構

１　調査成果の概要

今回の調査で検出された遺構は縄文時代中期を主体とするが、他の時代の所産である溝状遺構が４条検出された（付図１）。断面形は、第４号溝状遺構以外は定形的な様相は見られず一貫性がない。時期については、後述するように覆土中位から針金や磁器片が出土しているため、現代に近似するものと考えられる。また、これら４条の溝状遺構は調査区を取り囲むように掘り込まれており、区画意識が明確なことから地境溝や根切り溝の機能を有していたと考えられる。

２　近・現代の遺構

溝状遺構

第１号溝状遺構（付図１）

本遺構は、Ｂ－３からＦ－２グリッドにかけて検出され、調査区北側を東西に横断する。西側は調査区外に続き、東側は第２号溝状遺構との間が通路状に開口する。

規模は検出部分で長さ50m、幅3.8～4.4m、深さ80～100cm を測る。断面形は、確認面で大きく広がり中位から急激に幅を減じている。覆土はローム状の黄褐色土を主体とし、ほぼ単一の層からなる。粒子は粗く､軟質であった｡調査区北側に形成された土器包含層を切るため多くの縄文土器片が流入しているが、覆土中位から針金や磁器片が出土している。

第２号溝状遺構（付図１）

本遺構は、Ａ－４からＣ－７グリッドにかけて検出された。調査区西側を南北に縦断し、長さは検出部分で41m を測る。南北ともに調査区外に続き、北側は第１号溝状遺構との間が通路状に開く。中央部で第３号住居跡と重複する。

規模は検出部分で幅1.4～1.8m、深さは30～48cm を測る。断面形は丸みを帯びるが、溝底幅が一定していないため定形的ではない。覆土は粘度の強い水成ローム質土を主体とする。覆土から流れ込んだ縄文土器片、石器の他、磁器片が若干出土している。

第３号溝状遺構（付図１）

本遺構は、Ａ－５からＢ－８グリッドにかけて検出され、調査区西側を第２号溝状遺構と平行して南北に縦断する。南側は調査区外に続き、北側で第１号住居跡を切る。

規模は検出部分で長さ33m、幅0.6～1.8m、深さは15～20cm を測る。断面形は第２号溝状遺構に類似する。覆土も同様で、粘度の強い水成ローム質土を主体とする単一層である。出土遺物は、流入した縄文土器片、石器のみである。

第４号溝状遺構（付図１）

Ｈ－６からＧ－７グリッドにかけて検出された。調査区南側を東西に横断し、西側は湾曲する。

規模は検出部分で長さ20m、幅1.9～2.6m、深さは62～80cm を測る。断面形は、他に比して整っており箱状を呈する。覆土は、上部が黒褐色土、下層はロームブロックを主体とし、軟質。出土遺物は、縄文土器片、石器のみである。

Ⅴ　考　　察

はじめに

今回の調査では、勝坂式後半から加曽利ＥⅡ式前葉段階までの住居跡14軒を検出し、勝坂式後半期・加曽利ＥⅠ式前半期を中心とした比較的短期間且つ小規模な環状集落の一端が明らかとなった。発掘調査と整理作業の過程で抽出された問題点は、勝坂式後半の組成と編年的問題、土器の地域性と共伴した非在地系土器の関係、「中峠式」土器とその類型の編年的位置、遺構に関しても遺構廃棄と遺物廃棄の過程、住居跡の柱穴配置に見られる時間的な類似性、炉跡形態の時間的変化、遺構内施設の問題等多岐にわたる。ここでは、それら全てについて詳細に検討を加えることはできないが、調査・整理に携わった者として問題提起と私見を述べ、その責を果たしたい。

１．出土土器の時期と分類

今回の調査で出土した土器群は、勝坂式後葉の井戸尻式を主体とし、加曽利ＥⅠ式からⅡ式がこれに次ぐ。既編年案に照らせば、勝坂式は鈴木保彦氏の勝坂Ⅲ式（鈴木1982)、加曽利Ｅ式は谷井彪、細田勝両氏の加曽利ＥⅠ前半から加曽利ＥⅡ式前葉に当たる（谷井・細田2000)。出土土器の主体となる井戸尻式の様相については、在地系土器に限定しても、その内容の複雑さについて言を待たないが、さらに非在地系の土器群が加わることにより、いっそうの多様さを現出している。特に、第２号住居跡出土の中峠諸類型の三原田型深鉢（大村1998）は、在地系の共伴土器群との関係からその編年的位置付けに問題を投げかけるものである（1)。

本項では、遺構出土土器群を中心に分析を行う。遺構一括出土土器群の時間的問題と資料的な扱い方については、様々な観点から問題提起がなされているが、今回検出された土器群がその出土状況から炉埋設土器等との時間的な隔たりが認められない以上、基本的に同一時期と看做し、それを遺構の時期として記述することとする。時期設定及び土器群の分類基準は以下のとおりである。なお、勝坂Ⅲ式と井戸尻式の対比については、その前半を井戸尻Ⅰ～Ⅱ式、後半を井戸尻Ⅱ式の系譜を引き在地化が著しく文様に簡略化が見られる一群とした。

時期設定

第１期　勝坂Ⅲ式前半（井戸尻式前半）	第１・２・10・14号住居跡出土土器
第２期　勝坂Ⅲ式後半（井戸尻式後半）・加曽利ＥⅠ式前半	第４・５・７～９号住居跡出土土器
第３期　加曽利ＥⅠ式後半	第11号住居跡出土土器
第４期　加曽利ＥⅡ式前葉	第６・12・13号住居跡出土土器

土器分類基準（第106～108図）

第Ⅰ群土器

中期中葉の勝坂式土器を一括する。鈴木氏の勝坂Ⅲ式、井戸尻編年では井戸尻式に該当し、前半と後半に分かれる（丸山第１・２期)。また、後半段階は加曽利ＥⅠ前半段階の土器を伴う。

１a類（１～３・33)

所謂横帯文土器で、新道式の系譜を引くものである。器形はキャリパー形を呈する。口縁部、胴部中位、

胴部下半部の三帯の文様帯を有するものを基本とするが、下半部文様帯を持たないものも含める。口縁部文様帯は三角形連続区画を基調とする新道式からの伝統的なものである。中位文様帯には波状隆帯文を基本とするが、縦位区画文的な文様を置くものも見られる。第１期でほぼ消滅するが、類似構成を採る33のような土器が残存する。

１b類（７・８）

器形は１a類に類似するが、口頸部のみに文様帯を有する。胴部には地文を施している。

２a類（第106図４～６・37）

口縁部が無文で、１単位の大把手を持つものが多い。口縁部無文帯直下に、主として楕円区画文を配する。底部は緩い屈曲底を呈するものが一般的である。

２b類（９～12・34～36）

構成は２a類に似るが、胴部に幅広の縦位区画文的文様を展開するものである。キャリパー形の器形を呈するものが多いが、樽形の器形のものも認められる。

３　類（15～22・39～44）

円筒形の器形を呈するものを一括する。在地色の強い土器群で、第１・２期では組成の中核となる。口縁部は直立あるいは若干外反する無文帯で、把手を持つものもある。胴部中位にやや幅広の縦位区画文類似の文様帯を展開する。第２期になると口縁部無文帯が幅広になるか喪失するものが数的に増加し、文様帯下端の区画線が不明確となる傾向が認められる。

４　類（13・14・27～32）

多喜窪タイプを一括する。櫛形文との折衷的土器も含む。第２期に主体を置くが、第１期にも若干見られる。

５　類

地文のみの一群。口縁部は外反する無文帯で、胴部は円筒形が多い。

６　類（25・26）

浅鉢を一括する。

第Ⅱ群土器

第Ⅰ群に伴う非在地系の土器を一括した（丸山第１・２期）。

１　類（24・47・48）

所謂「中峠式」とその類型を本類とする。

２　類（45・46）

東関東系の４単位波状口縁の土器群を一括する。井戸尻式後半及び加曽利ＥⅠ式前半段階に共伴する。

３　類（23）

その他の土器を一括する。

第Ⅲ群土器

中期後半の加曽利Ｅ式土器と曽利式土器を一括する（丸山第２期～第４期）。

１　類（50～53・57・61）

加曽利ＥⅠ式の主体となるキャリパー形土器である。隆帯主導の文様描出で、口縁部に横Ｓ字文、「十」字文、クランク文等を隆帯連結にて配する。初源段階では胴部に半截竹管による平行沈線文を描くものが

多い。加曽利ＥⅡ式前葉まで系譜が見られる。地文は撚糸文主体。

２　類（58）

加曽利ＥⅠ式後半に特徴的な大把手を有する土器。把手自体は横Ｓ字文の末端が変化したものと思われるが、東関東の加曽利ＥⅠ式の影響が想定される。加曽利ＥⅡ式段階では把手が喪失し、一部は１類とともに口縁部文様の渦巻文が単位文化し、区画文と交互配置される４類に変化するものと思われる。頸部には無文帯を持ち、懸垂文は隆帯によるものが一般的である。

３　類（63・64）

所謂「渦巻繋ぎ弧文」土器である。頸部に隆帯による懸垂文を持つ。地文は撚糸を主体とするが、縄文のものも一定量を占めるようになる。胴部文様は２類と同様である。地文は撚糸文が主体を占める。

４　類（62）

口縁部に単位文化した渦巻文と区画文を交互配置する一群。文様描出はやや太めの沈線が主導的になり、１類に比して平板な印象をあたえる。加曽利ＥⅡ式中葉以降、主体となる。地文は縄文が一般化する。

５　類（65・66）

無文の口縁部が外反し、胴部が加曽利Ｅ式に類似するものを本類とする。

６ａ類（67）

曽利式土器を一括する。

６ｂ類（68）

曽利式土器に類似するが、地文縄文のものを本類とする。

７　類（55・59）

褶曲文土器とその系譜を引くものを一括する。

８　類（56・60・69）

浅鉢を一括する。

２．各期の土器様相

第１期（第106・107図）

第１・２・10・14号住居跡出土土器が該期に当たる。

本期の土器群は、従来の井戸尻Ⅰ式のやや新しい段階から井戸尻Ⅱ式の古手、鈴木保彦氏の勝坂Ⅲａ式にほぼ該当する。第２号住居跡の土器群が本期の典型と言える。

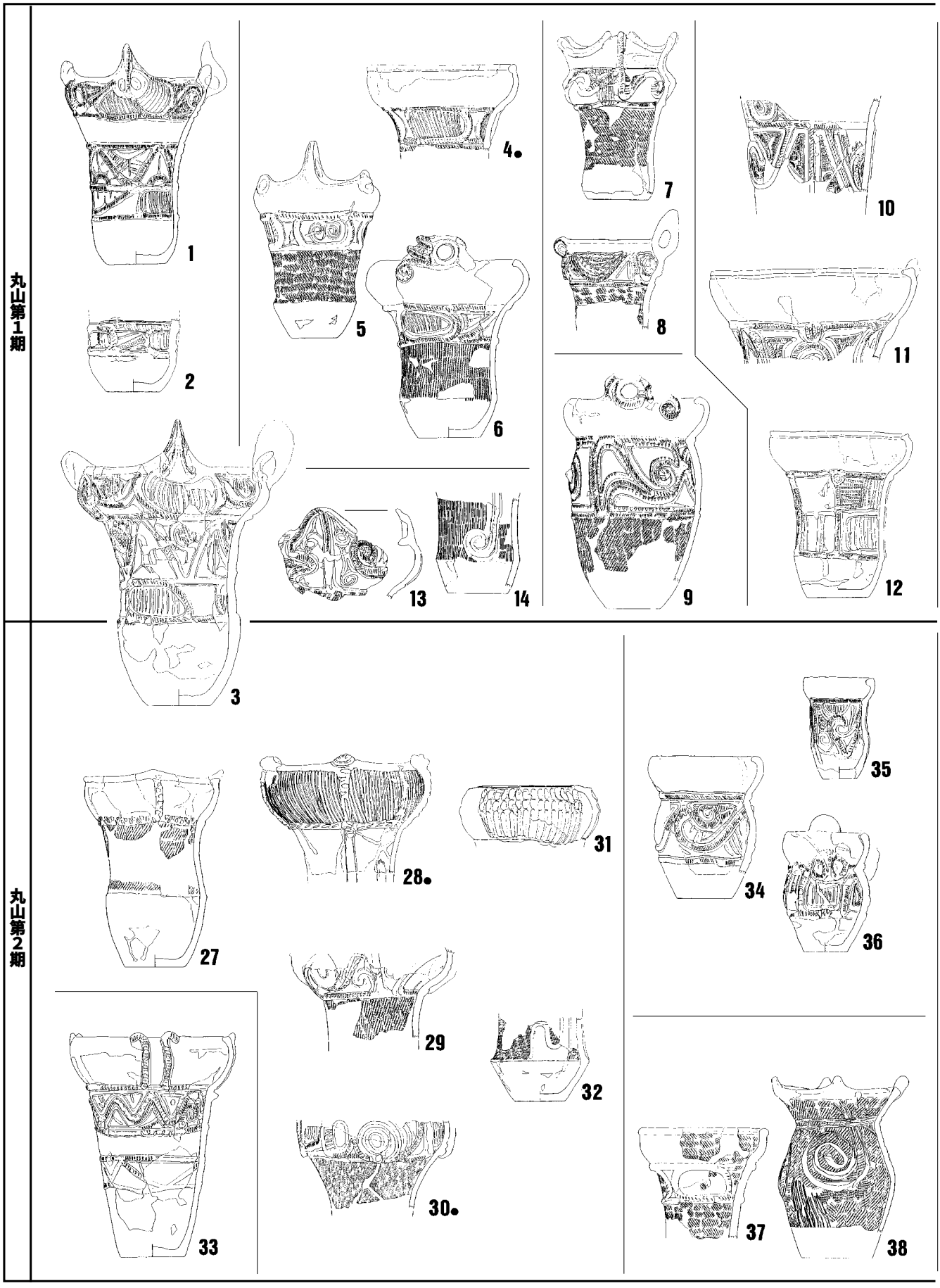
組成については、横帯文土器（第Ⅰ群１ａ類）、前段階に成立した頸部楕円横帯区画文土器（第Ⅰ群２ａ類）に、新たに口頸部文様帯土器（第Ⅰ群１ｂ類）、縦位区画文や抽象文類似の文様を胴部に展開する胴部文様帯土器（第Ⅰ群２ｂ類）が加わる。また、在地色が強い円筒形土器（第Ⅰ群３類）が数的に増加する。円筒形土器は比較的小型のものが多く、文様も横帯文土器の中位文様である波状隆帯文（15・19・20）や楕円区画文（17）の他、反転渦巻文の横位展開（18）を採用している。新道式期からの伝統的土器である横帯文土器は本期をもって消滅するものと思われ、数的にも少ない。期を一にして第１号住居跡に認められるように、勝坂式終末に特徴的な多喜窪タイプや櫛形文土器が本期の末期に新たに流入あるいは成立すると考えられる（14）が、終末期段階のような明確な屈曲底を持たない。頸部横帯区画文土器は前段階のものに比して、口縁部無文帯が拡大し湾曲も強くなる。前段階に組成の一定部分を占めていた縦位区画

文土器はほぼ消失するが、区画が上下に圧縮されたパネル文類似の文様は残存し、抽象文とともに文様構成、描出手法に残影を残している（９～12)。また、前段階の指標とも言える多段楕円区画文土器もほとんど見られなくなっているが、これについては組成の差異の可能性もある。

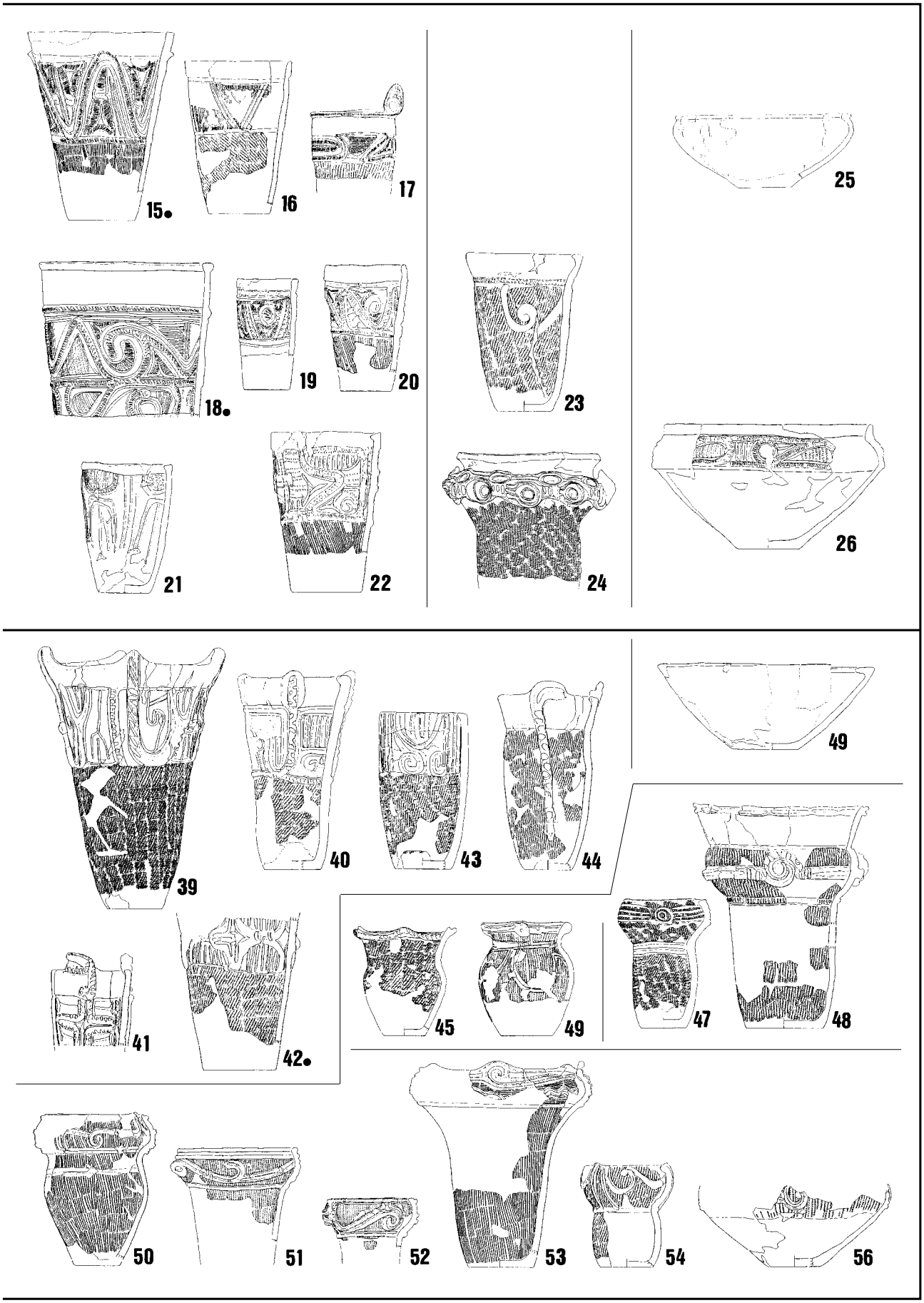
文様描出手法は、基幹文様の隆帯脇に施す連続爪形文が消滅し、隆帯脇に単沈線を引き隆帯上に刻目や交互刺突文、綾杉文を付すものが一般化する。藤内色がほぼ払拭されたと言えるが、縦位区画文的手法として隆帯脇に複沈線を引くパネル文の手法を残すものも多く認められる。ただし、半截竹管による平行沈線ではなく、２本の沈線を別々に引くもので縦位区画文土器に盛行した手法とは若干異なる。区画内充填手法は、細かい爪形文、集合的な結節沈線、印刻状の三叉文等、前段階の特徴を多く残すが、次段階的な粗い刻目、太めの集合沈線、列点も見られる。ただし、これらを使用する場合は空間処理がやや疎になる。地文は撚糸の縦位と単節縄文の縦位、横位が一般的で、斜位施文は比較的少ない。

ところで、第２号住居跡出土土器群は、時間的には一時期の良好な一括資料として評価できるが、その多くが前段階的な様相を残すにも関わらず、３・９・22のように新しい様相を持つ土器が混入する実態も認められる。３のような伝統的な横帯文土器は、本来第10号住居跡出土土器（１）と同種であるが、櫛形文土器に類似する器形の胴下半部を有している。９は、方形区画内に抽象文的文様を持つが、樽形の器形や隆帯付随文様要素である半截竹管の連続三角刺突に次段階の様相をうかがえる。さらに、22は方形の大区画内に横に突出する「く」字の隆帯により小区画を設け、区画上部は隆帯と沈線を併用させる半楕円文は、隆帯で全周囲を縁取る本来の在り方からやや逸脱した手法である。また、下部は渦巻きと三叉文の組合せという従来的には別区画にそれぞれ施されるものが同一区画内に縦構造に作出されている。これは抽象文土器の残映とも見て取れるが、隆帯をもって描出される単位形状が変質した結果の妥協的手法とも言えよう。個々の文様要素も、結節沈線に代って列点を使用し、隆帯に付加される刻目も他のものに比して粗い印象を受ける。これらは、その特徴から型式的には次段階のものに近似するが、組成の主体を占めるものではない。転換期の過渡的な様相と解するべきであろう。

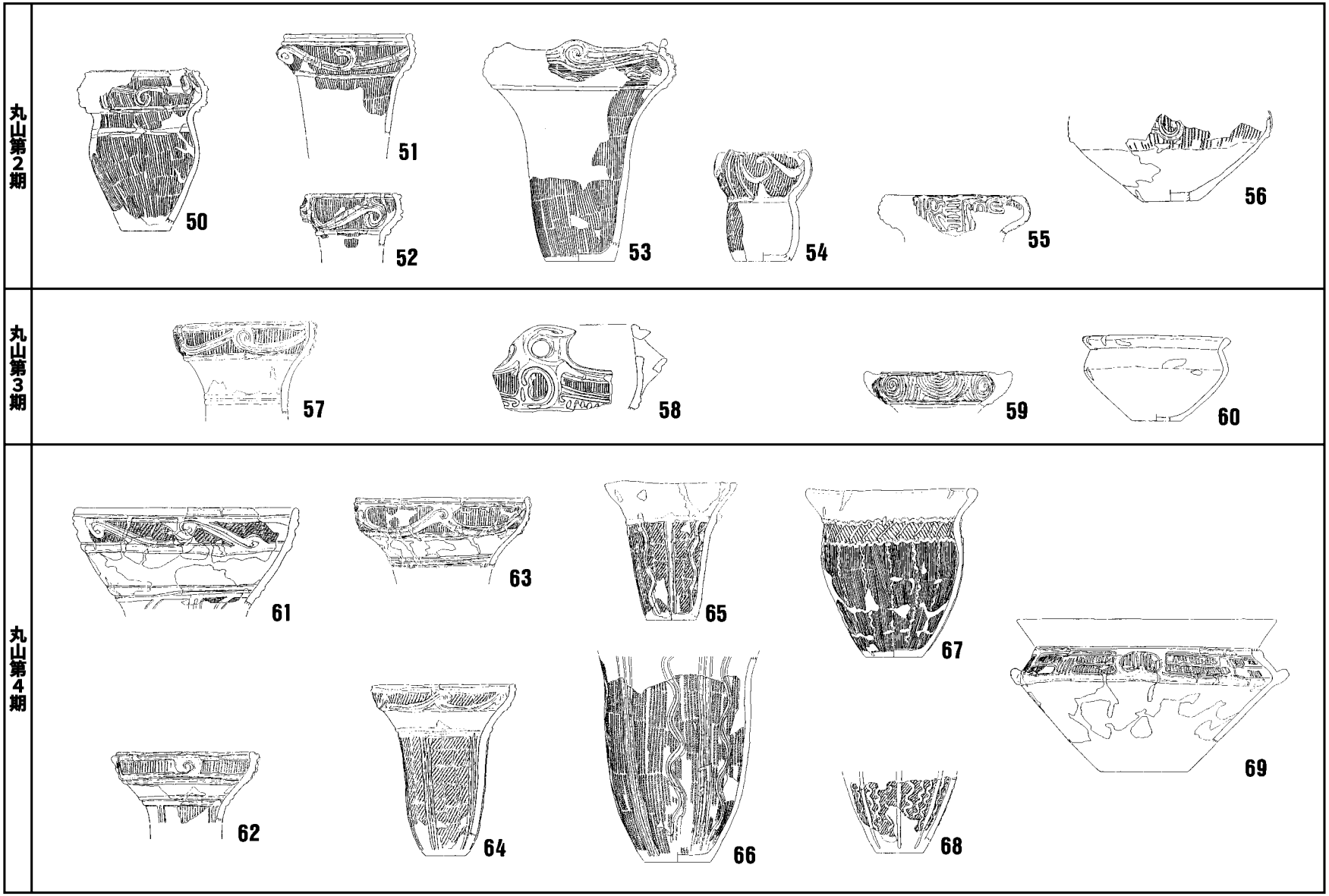
これらに加えて、第２号住居跡出土土器群の中で異彩を放っているのが、24の三原田型深鉢（第Ⅱ群１類)である。当該土器については近年多くの論考が発表され、分布域等の実態が明らかになりつつある(大村1998・山下1999・山口2000）が、その出自、出現段階の様相、変遷についてはなお研究が待たれる。三原田型深鉢は中峠諸類型の一つとして把握されており、時期についても概ね合致すると考えられる。ただし、中峠系土器自体の出現時期、変遷については再考を要する意見が提出されており（金子2000)、本遺跡出土土器はそれを裏付ける資料と思われる。従来、三原田型深鉢は「中峠式」と同時期の所産として、加曽利ＥⅠ式直前段階に位置付けられてきたが、型式学的検討と共伴土器との比較から数段階の変遷が提唱され、井戸尻Ⅱ式から加曽利ＥⅠ式新段階への併行が明らかとなりつつある（山下前掲)。また、その安定した段階を加曽利ＥⅠ古段階とする見解も出されている（山口前掲)。本遺跡は本来の分布圏である群馬県南部から掛け離れており、中間地域での明確な出土も現在のところ認められないため、明らかに搬入と考えられる。また、群馬県における勝坂式後半期の様相については、主要分布圏から離れるため不明確な部分が多い。本遺跡を含む入間地方との直接の比較は現状では困難であるが、三原田型深鉢の初源は従来考えられていた時期より若干古い位置付けが必要と思われる。土器自体は球形の口頸部に立体的な中空突起の多用、河童イメージの文様等が典型的で、三原田遺跡２－33住居出土土器（赤山1988）に酷似している。現編年案では、山下歳信氏のⅡ期、加曽利ＥⅠ式前半に該当すると考えられるが、本例の共伴土



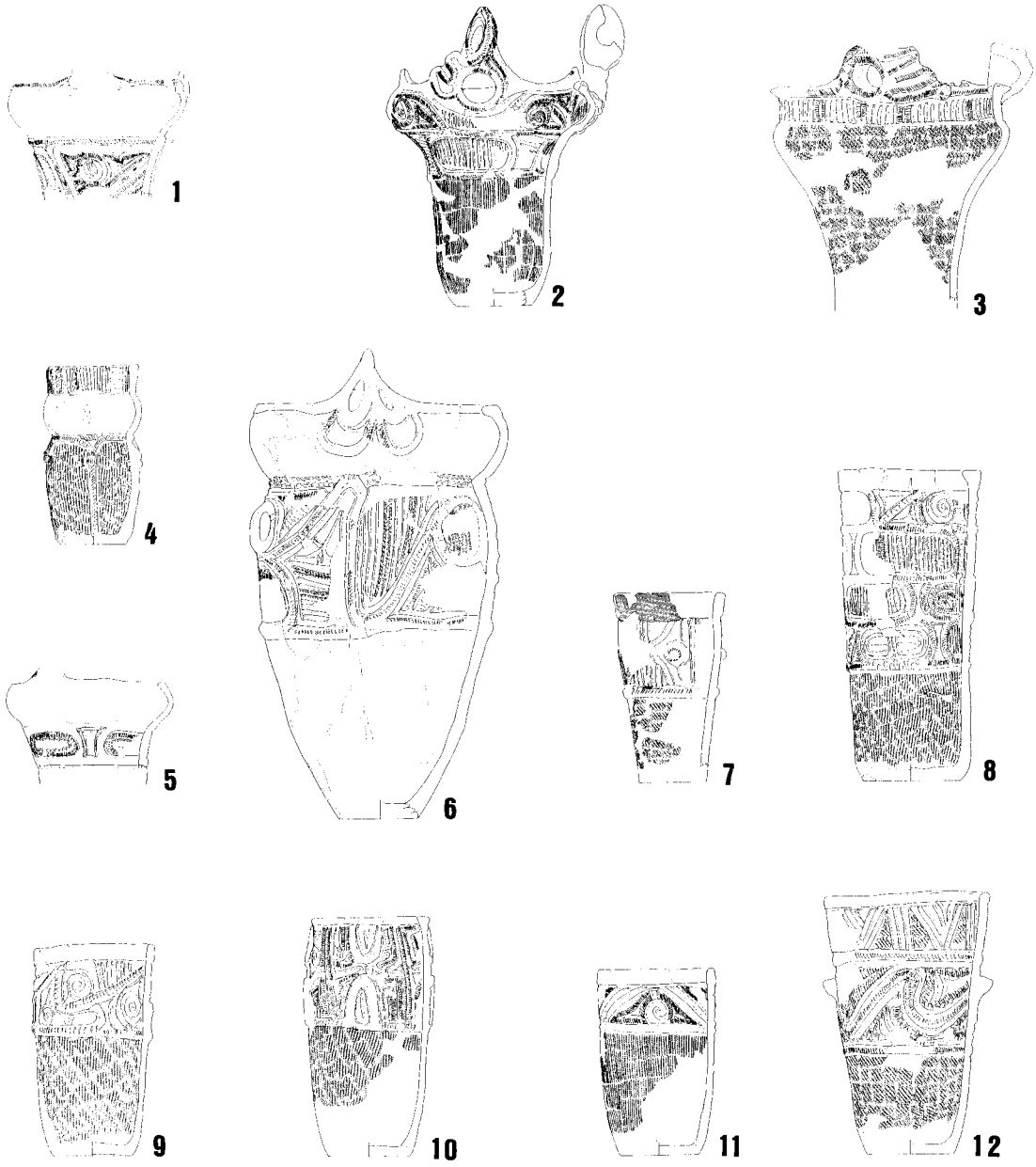
第106図　丸山遺跡出土土器変遷図（1）



第107図　丸山遺跡出土土器変遷図（２）



第108図　丸山遺跡出土土器変遷図（3）



第109図　第１期の土器群

器は井戸尻Ⅰ～Ⅱ式で山下氏のⅡ期より一段階前のものとなっている。大木８*a* 式では古から中段階が考えられ、時間的には山下氏のⅠ期に相当する。確かに、完成された河童イメージの文様を持ちつつも、胴部に文様を施さないなど古い様相も認められる。また、口唇部が幅の狭い無文帯でやや外反し球形の口頸部を持つ土器は井戸尻Ⅰ式から認められ、器形の面からも若干遡る可能性を考えるべきであろう。ただし、山下氏が指摘するようにⅡ期については過渡的な様相が認められ、細分の可能性も残している。これについては後述するが、本類型の変遷の問題についてはなお検討を要しよう。

周辺地域での本段階の類例は意外に少ない。本市宮地遺跡では、第５次調査第83号住居跡より該期の良好な一括資料が出土している（第109図　石塚1986）が、丸山例とは組成や文様描出技法に微妙な差異が見られる。第109図にその一部を示した。土器組成は、炉埋設土器がパネル手法を残す胴部文様帯土器（１）

で、覆土出土土器は円筒形土器（７～12）を主体とし、横帯文土器（２）、口縁部文様帯土器（３・４）、頸部楕円横帯区画文土器（５）、胴部文様帯土器（６）に浅鉢が加わる。２は頸部に楕円区画を置き、６は区画隆帯に爪形文を付随させるなどやや古い様相が看取される。組成としてはやや過渡的なものと言えよう。また、２と３の口縁部文様帯土器には、口縁部に大把手を１箇所置くもので円環基部に隆帯貼り付けによりうねるタイプの蛇体文を作出する。これも前段階に出現した蛇体装飾で、特に基部円環のものは本段階で盛行するようである。本遺跡でも同タイプの把手を持つ土器が第２号住居跡で２個体出土している（第106図６・９）。円筒形土器のうち、７は多段楕円区画文をもつもので、本段階では比較的稀な存在と言える。宮地第83号住居跡と丸山第２号住居跡の出土土器を比較すると、前者は隆帯上に爪形文を付すものや２・６のように古相を示すものを含みつつ、円筒形土器の占める率が非常に高い。文様描出技法も前述の第106図９や第107図22に認められるような新しい様相も認められ、後者に比べると極めて過渡的な組成と言える。今回は同時期における新旧の組成と解釈し、詳細は今後の課題としたい。

以上のように、本期は内的動態に過渡的な様相が見られるが、器形や器種、文様そのものの急激な変化は顕在化していない。また、中峠類型等の非在地系土器群も組成の中で一定量を占めるに至らず、勝坂式を基幹とする本地域への外的圧力も未だ弱いものと言えよう。

第２期（第106・107図）

当該期の住居跡には、第４・５・７・８・９号住居跡がある。ただし、第７号住居跡については、炉埋設土器と覆土出土土器の間に時間差が認められる。

第Ⅱ期は勝坂式最終末で、井戸尻Ⅱ式の新しい様相のもの、加曽利ＥⅠ式前半段階に当たり、概ね鈴木保彦氏の勝坂Ⅲb式に該当する。第５号住居跡出土土器群が代表例として上げられる。また、中峠式類型や東関東系土器といった非在地系土器群が量的に増加する。

勝坂系土器群は、文様が簡略化した円筒形土器（第Ⅰ群３類）が多数を占めるとともに、多喜窪タイプ（第１群４類）も増加する組成となる。第Ⅰ期に盛行した頸部楕円横帯区画文土器（第Ⅰ群２a類）、胴部文様帯土器（第Ⅰ群２b類）は数的に減少する。横帯文土器（第Ⅰ群１a類）はほぼ消滅するが、第７号住居跡出土土器（33）のように文様帯が部分的に省略された形で残存するものも見られる。

文様描出手法は、前段階のものを踏襲するものが多いが、隆帯上に付されていた爪形文は刻目、刺突に換り、粗い交互刺突文や指頭状圧痕も多用される。また、隆帯上中央に引かれる背割沈線も目立つ。空間充填手法も同様で、太い集合沈線、線状三叉文等、簡略化の一途を辿り、前段階のバラエティに富んだ密な様相は影をひそめる。本段階に盛行する文様描出手法として、半截竹管内皮面使用の平行沈線が注目される。本手法は藤内段階で盛行した縦位区画文土器に普遍的に見られたものであるが、第１期にはほとんど認められなくなる。したがって、第２期の本手法の出自は、加曽利ＥⅠ前半段階の土器や東関東系土器の胴部文様に多用されること、重複施文されることから、勝坂式の系譜ではなく大木的なものと言えよう。地文は０段多条単節縄文が急激に増加する。他に撚糸の縦位、単節縄文の斜位、縦位が多く見られ、横位施文は減少する。

３類の円筒形土器は、第１期から引続き普遍的存在であるが、本段階では大型化、長胴化し、量的にも他の器種を凌駕するようになる。器形は簡素であるが、勝坂式に特徴的な文様置換の典型とも言える様相を示し、他の器種の文様を自由闊達に展開する。基本的には口縁部は幅広の無文帯で、胴部上位に文様帯を有し胴下半部は地文のみ、あるいは無文となる。胴部上位の文様には鎌首をもたげた横向きの蛇体文を

基幹とするものが増加し、横位展開する所謂「人体意匠文（山口2000）」とそれに類似する反転渦巻文が多用されるが、他に多喜窪タイプの垂下隆帯を置換したもの（39）、縦位区画文を上下に圧縮したもの（40）、楕円区画を配するもの（第46図２）、上下対弧文（42・43）などがある。また、文様帯下端を明確に区画しないものが増加するのも本期３類の特徴である。

胴部文様帯土器は、第７号住居跡出土土器（35・36）のように、本遺跡では樽型の器形に縦位区画文的文様を施すものが一般的であるが、３類と同様、横位展開の人体意匠文と反転渦巻文も多々見られる。頸部楕円区画文土器は37のみで、区画内と本来無文帯である口縁部に縄文を施す点で、従来の勝坂式的手法から逸脱している。

多喜窪タイプは第５号住居跡炉埋設土器（28）、同住居跡出土土器（27）、第８号住居跡出土土器（29）、第９号住居跡炉埋設土器（30）があり、文様の在り方からも定着した感がある。第５号住居跡炉埋設土器は、４単位の口縁部突起から２単位の垂下隆帯となり先端に３本指の文様を付ける。注目すべきは、口縁部文様区画内を加曽利ＥⅠ式初源段階に特徴的な半截竹管重複施文の集合沈線で充填していることである。本住居跡からは加曽利ＥⅠ式土器の口縁部破片が出土しているのみで他の土器群は東関東系土器を除いて勝坂系土器で占められているが、明確な共伴がなくとも加曽利ＥⅠ式前半段階の所産であることが確認し得る。また、第９号住居跡出土土器（38）のように、口縁部に４単位の突起を有し、胴部に垂下渦巻文を模倣した文様を半截竹管重複施文で描出する。頸部以下は多喜窪タイプの屈曲底を上下に拡張したもので、器形は変容し施文手法も非在地系土器に準じているにも関わらず、構造的には多喜窪タイプを継承している。すでに触れたとおり、前段階に本タイプが流入した証左であり、非在地系土器同志の融合を示す好例と言えよう。

本期では、上記の勝坂系土器に東関東系土器（第Ⅱ群２類）、中峠諸類型（第Ⅱ群１類）、加曽利ＥⅠ式前半段階（第Ⅲ群１・５類）が組成に加わる。東関東系の土器は、４単位の波状口縁と胴上位で膨らむ器形が特徴的な土器群で、第４・５・８・９号住居跡で出土している。口唇部に文様が集約されるもの（45）、胴部に半截竹管で平行沈線文を描くもの（46）の他、地文のみのものも見られる（第50図16）。前段階において出現を見た中峠式とその類型は、本期において量的にわずかに増加するが、あくまで客体的存在に止まる。第４号住居跡出土土器（47）は、沈線の円環文と片側を開放する長方形区画の沈線文が交互に位置するもので、モチーフは中峠式の０地点型深鉢に類似する。ただし、特徴的な重層する横位交互刺突文と口縁部の無文帯を欠く。同48は第７号住居跡から出土した台耕地34住型深鉢で、川口市木曽呂表遺跡第２号住居跡出土土器に酷似する（並木1978）。口唇部に連鎖状隆帯を巡らし、球形の口頸部に反転渦巻文を２単位置き、それを横位隆帯で連結する。隆帯には背割沈線と交互刺突が施されるなど、加曽利ＥⅠ前半段階に残存する勝坂系の手法が多々見られ、同一段階であることを明示している。入間地方においては、勝坂式最終末あるいは加曽利ＥⅠ式前半段階の土器群に共伴して中峠類型が１～数個体出土する事例が知られる。本遺跡例の他、所沢市膳棚遺跡（岩井ほか1973）、大井町西ノ原遺跡（坪田ほか1997）などが著名であるが、飯能市、日高市ではあまり例を見ない。

加曽利ＥⅠ式前半段階の土器群は第８号住居跡でまとまった出土があり、個々の様相から既に安定した存在となっていると言える（50～53）。本段階の加曽利ＥⅠ式土器には、50・52のように口縁部に２本組隆帯で横Ｓ字文を基調とした連続文様を持つものと、51のように横Ｓ字文にＪ字文を組合せたものが共伴している。なお、51には部分的に勝坂式的な交互刺突文が施され、一部Ｓ字の末端が突起状を呈する。

器形は50・53のように口縁部の屈曲が強いものが多い。これについては、多喜窪タイプの口縁部器形に類似するという指摘もある（金子前掲）。また、50の胴部形状は大木８a 新段階的な器形を呈し、口縁部文様帯の隆帯も貼り付け後の処理がなされず、大木的様相が強く感じられる。加曽利Ｅ式生成段階での両者の関係を考える上で興味深い事例である。

本遺跡周辺の入間地方では、第４・５号住居跡のように在地的な勝坂系土器を主体とし、多喜窪タイプや東関東系土器を組成に加える一括資料が多く認められる。飯能市加能里遺跡第21号住居跡では円筒形土器と胴部文様帯土器を主体とするものに多喜窪タイプが加わり、加曽利ＥⅠ式土器がわずかに含まれる。（富元1998）。これに対して同市中郷遺跡第８号住居跡では、円筒形土器、胴部文様帯土器等の在地的土器群と多喜窪タイプ、加曽利ＥⅠ式土器がほぼ同比率の組成を示している（柳戸1998）。これらに加えて、青梅市駒木野遺跡第26b 号住居跡出土土器群に見られる典型的な多喜窪重文タイプと加曽利ＥⅠ式の良好な共伴関係は、両者を繋ぐ接点として当該期の実態を明確にしている（伊藤1998）。このように、本地方を含む関東西部縁地域では、加曽利ＥⅠ式土器の共伴は比較的少なく、客体的な印象を与えているが、東松山市岩の上遺跡（栗原ほか1973）を代表とするように県央から県東部にかけて加曽利ＥⅠ式を主体とする組成が多く見られる。この東西での顕著な地域的差異が本段階の様相を不明確にしてきた主要因と言えるが、典型的な組成をもって論議が進められてきたことも問題の一つとして上げられよう。

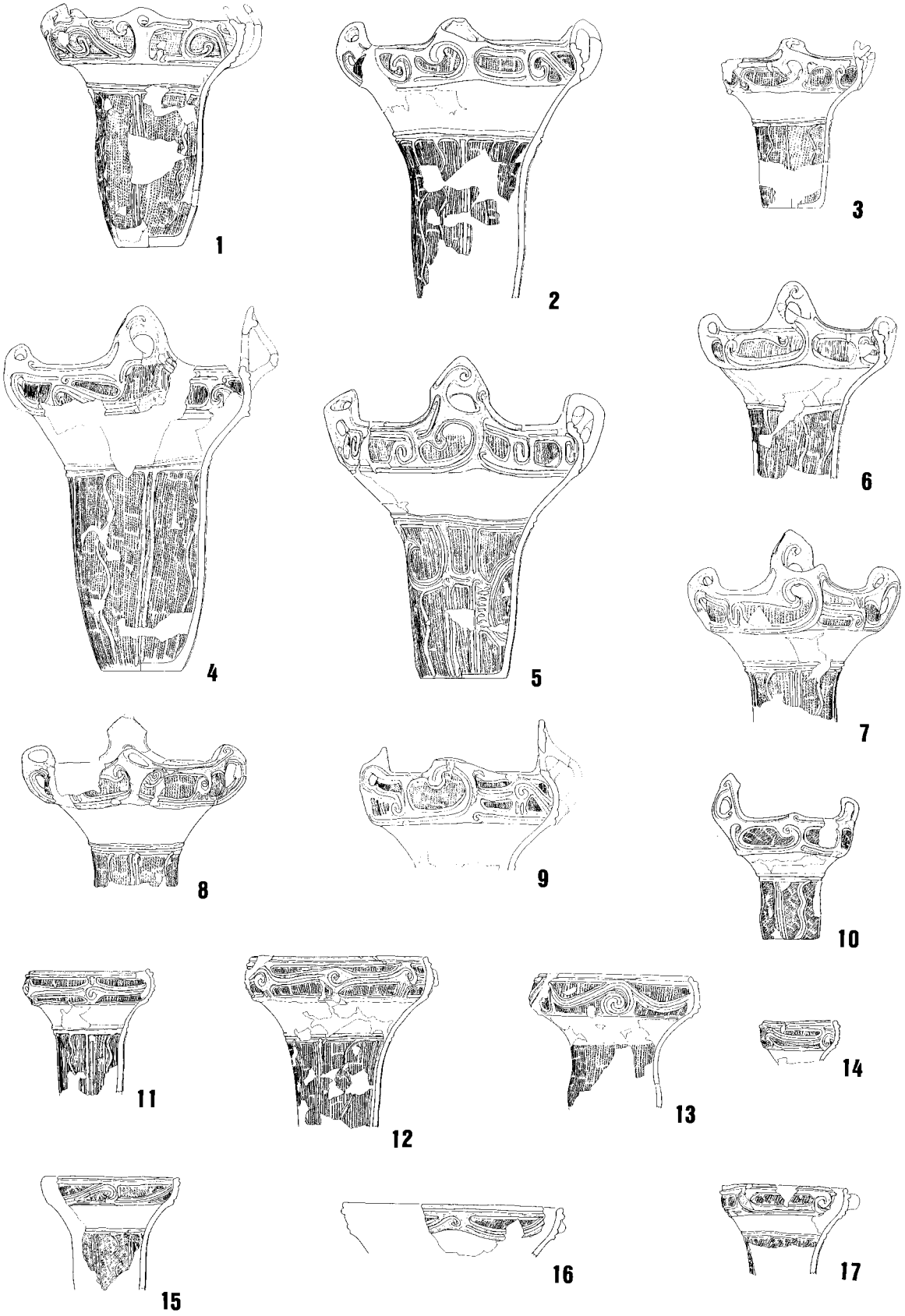
第３期（第108図）

本期は谷井・細田両氏の加曽利ＥⅠ式後半段階に当たる（谷井・細田前掲）。今回の報告では第11号住居跡のみ該当する。ただし、調査区北側に広がる包含層からも当該期の土器が出土しており、調査区外南斜面でも表採されているため、該期遺構の存在が想定される。

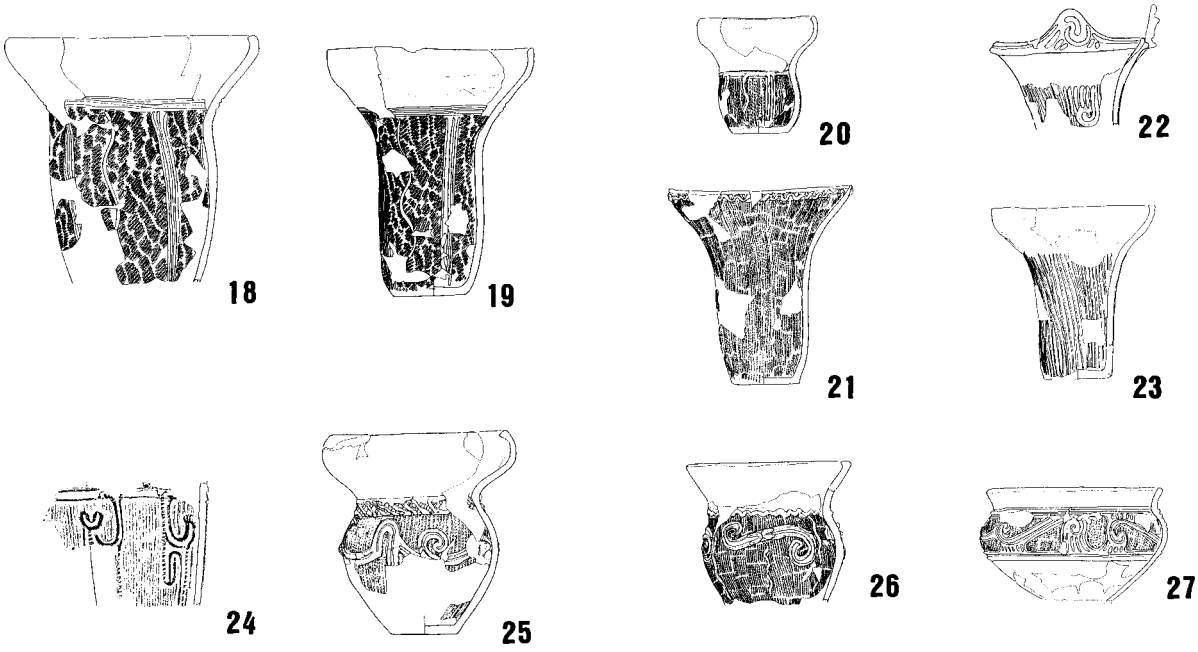
本段階では、加曽利ＥⅠ式土器が主体となる。勝坂系の土器はほぼ消滅し、曽利Ⅰ式がこれに代わる。組成は57のように前段階に成立した横Ｓ字文主導の土器群（第Ⅲ群１類）に、Ｓ字末端が変化したと考えられる大型の把手を有する２類が新たに加わる（58）が、後者を主体に据える組成も多々見られる。また、第11号住居跡出土土器には認められないが、後述する飯能市加能里遺跡（富元2001）や日高市宿東遺跡（渡辺1998）例に見られるように、渦巻繋ぎ弧文土器（３類）と口縁部に単位文化した渦巻文と楕円区画を交互配置する土器（４類）も本段階で成立したと考えられる。１類の横Ｓ字の末端が渦巻状を呈するようになるのも、これに関連しているものと考えられる。さらに、頸部無文帯と胴部隆帯懸垂文が一般化するのも本段階である。これらに加えて、褶曲文の系譜と思われる重孤文土器（59）も散見される。器形は口縁部の内湾の度合いが弱くなり、直立気味となる。胴部も円筒形が顕著となる。地文は撚糸文が主体的であるが、第78図30のように地文縄文の土器も認められる。

本段階の土器群は、本市宮地遺跡（増田ほか1986）、飯能市加能里遺跡（富元前掲）等で第Ⅲ群２類を主体とする良好な一括資料が出土している。宮地遺跡は、未だ正式報告がなされていないため、ここでは加能里遺跡第15号住居跡出土資料について若干検討を加え、本期の結びとする。

加能里遺跡第15号住居跡一括出土遺物（第110・111図）は、加曽利ＥⅠ式の２類を主体とし１類を従として構成され、これに曽利式土器が組成に加わる。口縁部文様は隆帯主導で、横Ｓ字文から渦巻文への変化が明確な土器群である。また、区画文醸成の様相も看取される。１～10の立体的な大把手を有する２類は、本段階に顕著なもので指標とも言える。第15号住居跡では把手が尖頭状を呈するものが多く、通常大小が対となり、各々横Ｓ字文の末端が変化したものと考えられる。11～15の１類は、第２期の加曽利Ｅ



第110図　第３期の土器群（１）



第111図　第３期の土器群（２）

Ⅰ式前半段階の系譜を直接引くもので、渦巻繋ぎ弧文土器に類似するものや、次段階以降に主体的になる単位文化した渦巻文と楕円区画文の交互配置に変化する直前の様相を呈している。１・２類ともに頸部無文帯を有する。また、16・17は次段階の様相がさらに強くなっている。特に17には渦巻文と区画文の交互配置が見られる。胴部文様は蛇行隆帯と２本隆帯を交互配置する隆帯懸垂文を基本としているが、地文縄文のものは沈線懸垂文が多い。また、大木８ｂ類似の胴部文様も認められる（５）。第Ⅲ群６ａ類の曽利式土器（第111図24～26）は、客体的存在ながら、一定の割合を占めている。口縁部が外反する無文帯で、胴部文様は加曽利ＥⅠ式に準ずる５類（18～20）も本段階で普遍的となる。本類は胴部器形も加曽利ＥⅠ式に類似する円筒形を呈するものが主体的である。この様相から、外反する無文帯は頸部無文帯で、加曽利ＥⅠ式の口縁部文様帯を喪失したものと解釈し得る。

本期の特徴を、加能里第15号住居跡出土土器をもって整理すれば、加曽利ＥⅠ式土器に関しては頸部無文帯と隆帯懸垂文の出現と定着、沈線懸垂文の出現、地文縄文の土器が一定量を占めるなどが上げられよう。胴部隆帯懸垂文については、貼り付け後の沈線による両脇の処理が施されないものも多い。口縁部文様には、これが普遍化している点で対象的である。隆帯懸垂文の出自については検討を要するが、加曽利ＥⅠ式前半には見られないことから本段階において別系統の文様の移入が考えられ、現時点では曽利系統の影響下に成立したものと思われる。隆帯脇に沈線を伴う手法が在地的な勝坂式の手法を継承するものと考えるならば、頸部無文帯を介して異系統の土器を融合させた結果とも解釈できるかもしれない。組成の面では、前段階の勝坂系土器や東関東系土器が減少し曽利式土器がこれらにとって代り、前段階で交錯した状態にあった異系統土器と文様要素の混入が単純化される。換言すると加曽利ＥⅠ土器が完全に定着したと同時に、組成の大部分を占めるようになった結果とも言えよう。

第４期（第108図）

本期の住居跡には、第６・12・13号住居跡がある。

本期土器群は、谷井彪、細田勝両氏の加曽利ＥⅡ式前葉段階（谷井・細田前掲）で、連弧文土器出現直前段階である。本遺跡の一括資料としては、第12号住居跡出土土器群があり、加曽利ＥⅡ式と曽利Ⅱ式の良好な共伴を示している。これに、他の住居跡出土土器を補填する形で説明を進めることとする。

本段階では、前段階まで主流だった横Ｓ字主導の土器群（第Ⅲ群１類）に加えて、渦巻繋ぎ弧文土器（３類）と口縁部に単位文化した渦巻文と楕円区画を交互配置する土器群（４類）が組成の大半を占めるようになる。62は第３期の第11号住居跡出土土器であるが、４類の特徴を備えている上にやや外傾する口縁部から新しいと判断し本段階のものとした。全体的に文様の簡略化の傾向が看取されるが、特に１類については横Ｓ字やクランク文の崩れが顕著となっている（第108図61）。また、３類は次段階の連弧文土器と文様原理が類似し、その生成に密接な関係があるとの指摘がある（谷井・細田前掲）。これらに加曽利Ｅ系土器の口縁部文様を喪失したものと考えられる５類や曽利Ⅱ式（６類）が加わるのが基本的な組合わせとなる。なお、第３期に多く見られた立体的な大把手を有する２類は、本段階にはほとんど認められない。

加曽利Ｅ系の土器群は、口縁部が若干外傾あるいは直立する。胴部は前段階と同様、円筒形に近い器形を呈するが、胴中位で若干膨らむ。口縁部文様帯は前段階に比して幅が狭くなる。頸部無文帯を置くものが一般的であるが、飯能市芋久保遺跡では４類で頸部無文帯を喪失した土器が共伴している（富元1991）。口縁部文様の描出は、１・３類が隆帯主導、４類が沈線主導となり、後者はやや平板な印象を与える。胴部文様は２本隆帯と蛇行隆帯を交互配置する懸垂文が主体的であるが、一部沈線で同じ文様を描くものも見られる。地文は前段階に比して縄文の占める割合が多くなる。

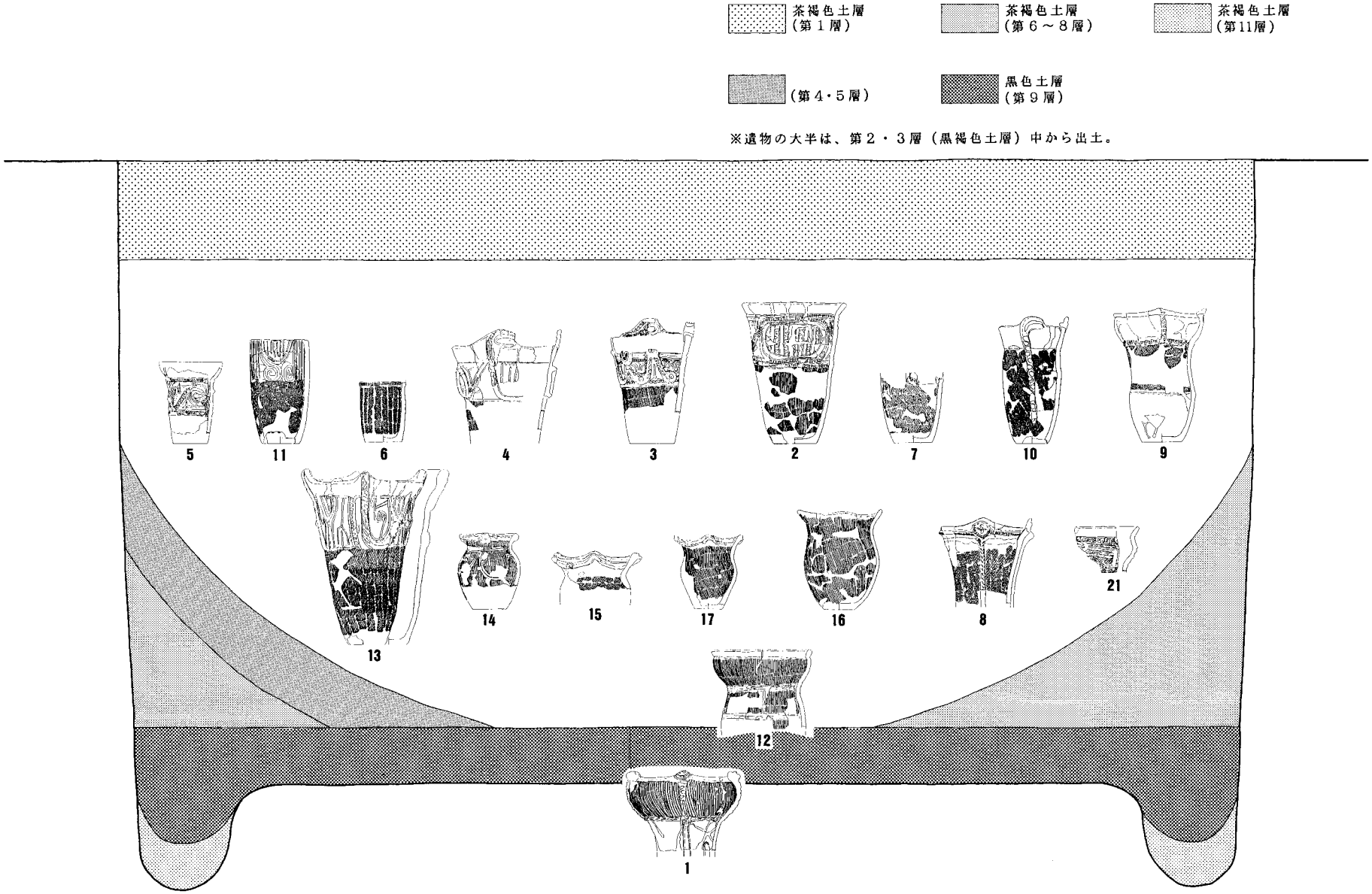
曽利系土器は、第12号住居跡で出土している。67は曽利Ⅱ式の典型例であるが、やや丈の低い器形を呈している。口縁部は外反する無文帯で、頸部に籠目文を置く。胴部の懸垂文は隆帯貼り付けによるが、隆帯脇の処理が施されない点で加曽利Ｅ系の胴部懸垂文とは異なる。68も曽利系土器であるが、地文に縄文を施しており、既に在地化している証左と言えるかもしれない。

本期では、加曽利ＥⅠ式成立以来の横Ｓ字文からの流れが途切れた感があり、前段階にこれから派生した渦巻繋ぎ弧文土器や渦巻文、区画文交互配置の土器が組成の主体を占めるようになる。さらに前者は連弧文土器生成の一翼を担い、後者は隆帯による文様作出の伝統を沈線に変換させ、次段階以降、加曽利Ｅ系の主要土器となっていく。また、４類が一般化する過程で口縁部文様とともに胴部懸垂文の沈線化も進み、次段階の連孤文土器成立も相まって中期末に向けて文様全体の沈線化が加速するものと思われる。

一括出土土器の同時性認定について

第１・２期については、それぞれ第２号住居跡、第５号住居跡出土土器を一括資料と考えて設定基準とした。両住居跡の遺物出土状況は第１次埋没後の一括廃棄の典型的なもので、後述するように極めて同時性の高い様相を呈している。第112・113図は両住居跡の遺物出土状況について、各層出土土器及び炉埋設土器等の関係を模式化したものである。ここではその出土状況について検討を加え、土器群の同時性について言及することとする。

第５号住居跡は、先述したように火災住居跡と考えられる（第112図）。床面上20㎝ほどに堆積した破砕した炭化物、焼土を主体とする層（第９層）の存在、被熱痕跡の顕著な床面、主柱穴と壁溝覆土上層に混入した多量の炭化物、焼土がその根拠となっている。床面上の炭化物層の上位にはロームブロックを多く含む茶褐色土層（第６～８層）がレンズ状に堆積する。同層には焼土、炭化物はほとんど含まれない。土



第112図　第５号住居跡土器出土層位概念図

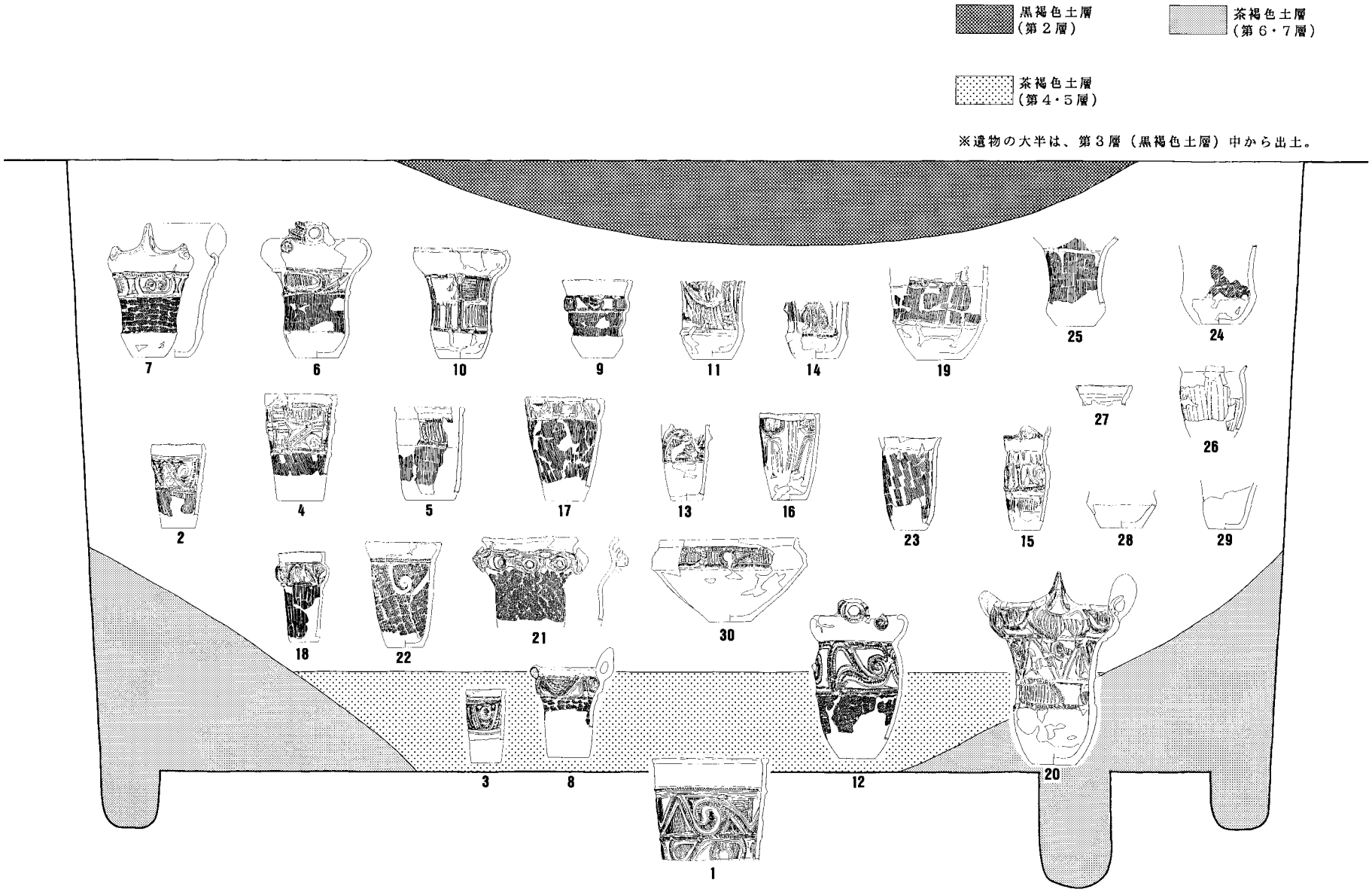
器等の遺物はこの直上に沿うように出土した。特筆すべきはこれらの土器のうち、５・10・11・14は高熱を受けた痕跡が明確で、10は表面の大半が剥落し、14は口縁部の一部が破損した後の被熱により変色している。当初は焼成時の失敗から一括廃棄されたものと考えていたが、火災住居となると状況は異なってくる。すなわち、罹災時に家屋内で焼けた可能性も考えられるのである。この可能性から導き出せる解釈は、原因を失火とするか、故意とするかで二通りが考えられるが、主柱穴覆土上層の炭化物から上屋は存在していたものと考え、失火説を採ることとする。したがって、罹災から遺構埋没までは以下の過程が想定される。

①失火、住居焼失
②家財道具の片付け
③周堤の埋め戻し
④回収された土器等の一括廃棄
⑤遺構埋没の進行

これらの過程から、住居廃絶から第１次埋没層の形成、第２・３層内の土器群の一括廃棄が比較的短期間に行われたと考えることができ、炉埋設土器と覆土に廃棄された土器の同時性がほぼ証明し得るものと思われる。問題となるのは、第６～８層が真に周堤土であるか否かである。周堤土は、住居構築時の排土を使用したものと考えられるが、掘削深度からその大半がロームで上層の腐植土との混合層であった可能性が高い。今回の調査の所見では、これらの層はロームブロックの混入が顕著であるが、比較的均質なローム類似の茶褐色土層として認識されている。所謂「第１次埋没土」について言及した報告に清瀬市野塩前原遺跡例があり（内田1982）、中期勝坂期の住居跡１軒が検出されている。出土土器は勝坂式終末段階（丸山第２期）を主体とし、加曽利ＥⅠ式土器及び中峠類型を含んでいる。報告者は、「覆土全体の約１/２程度の土量を占めている」第Ⅳ層（黄褐色ローム質土）の形成過程に注目し、「住居構築に際して掘り出されたものと思われる」としている。報告者は自然堆積説を採るが、周堤を残した状態で徐々に埋没が進行したのなら、周辺の腐植土、おそらく黒色土の顕著な混入が認められてもよいはずで、本例第Ⅳ層も第５号住居跡第６～８層と同様、周堤を埋め戻した可能性が高いと思われる。これらの所見から、第１埋没土は周堤土由来で埋め戻されたものとし、炉埋設土器及び覆土出土土器群の同時性の根拠とする。

第５号住居跡に比して、第２号住居跡は住居解体後の土器一括廃棄と考えられる事例である。遺構全体から30個体もの土器が出土しており、出土状況と型式学的検討から過渡的な要素も認められるが、同時性の高い組成と考えられる（第113図）。本住居跡では第１次埋没層として、第６・７層があり典型的なレンズ状堆積を示している。同層出土土器には第１期の指標でもある20があり、ほとんどが散乱した状態で出土したが、その一部はＰ２内に入り込んでいた。この所見からは、第10号住居跡に認められるように柱の抜き去り行為が考えられる。３・８・12は炉跡に近接して、床面よりわずかに浮いた状態であたかも置かれたような状態で出土した。３・８は入れ子状になっている。他の土器群は第３層中からまとまって出土しているが、その多くが投棄されたというより置かれたような状態で出土している。第２層には多量の焼土が混入していた。ただし、流入したような感じで、火を焚いたような印象は受けなかった。上記の所見から、想定される住居の埋没過程は以下のとおりである。

①住居解体、部材の撤去
②土器の一部放置、周堤の埋め戻し（１回目）



第113図　第２号住居跡土器出土層位概念図

③土器の一部放置、周堤の埋め戻し（２回目）
④土器の大量廃棄（この後、⑤までに第２・３層の形成が進行）
⑤儀礼行為(?)、遺構の埋没

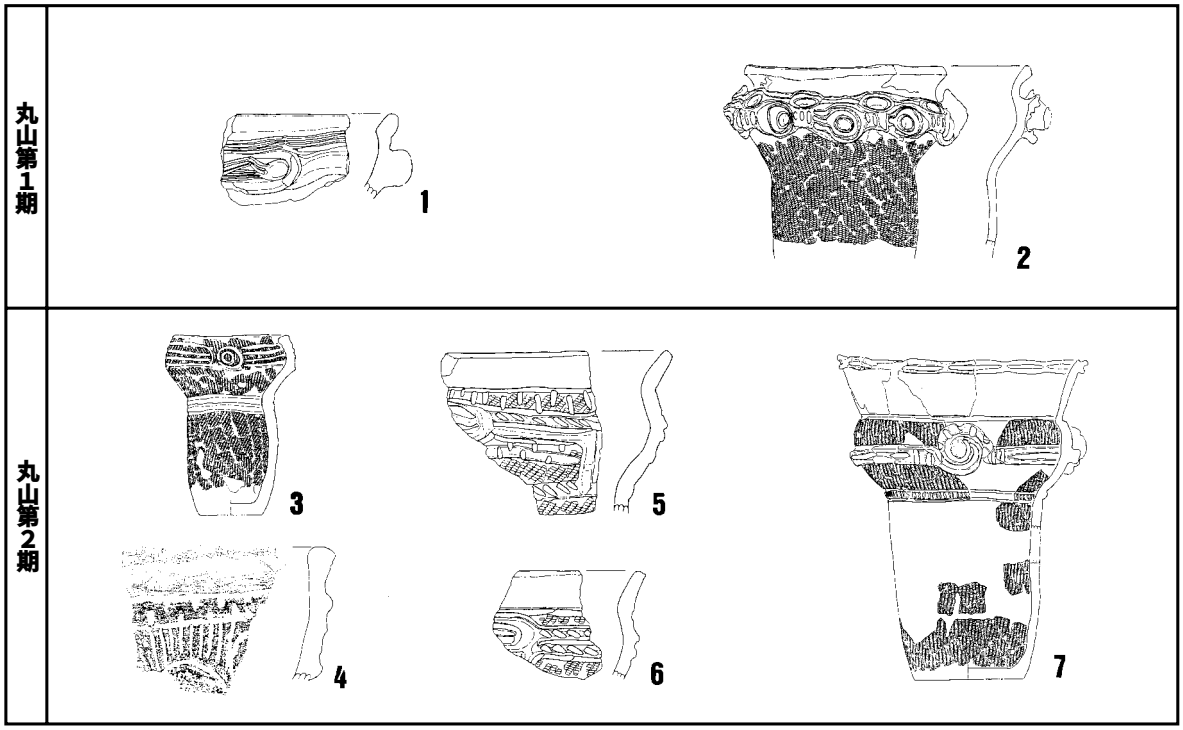
土器群の出土状況は、あたかも３段階にわたって廃棄されたかのような印象を与えるが、出土土器の項で述べたように、４・12などに新しい要素が認められるも、型式学的には同一の時期と認定され得るものである。また、想定される埋没過程も比較的短期間に進行したものと考えられる。これらの出土状況を考える場合には埋没過程における周堤の埋め戻し行為の介在は、出土土器群に型式的な矛盾がない限り、同時性を認定するための有力な決め手となるものと思われる。

以上、第１・２期設定の指標となった第２・５号住居跡の出土状況と埋没過程の推定から、土器群の同時性について検討を加えた。土器の出土状況に関しては、過去、所謂「吹上パターン」に関する解釈論が展開されたが、サイクル論、集団移動論からの第１次埋没層生成過程と土器大量廃棄の検討が先行した（可児1969・末木1975・石井1975）。特に後者は、遺構廃絶後に一定の埋没期間を想定し、その間に集団が移動し、集団の帰還あるいは他集団により遺棄土器が片付けられて土器一括廃棄がなされたとするもので、当時停滞気味であった集落論へ大きな刺激を与えた。これに対する反論として、1976年には山本暉久氏が、吹上パターンを「住居跡内土器一括遺存現象」として位置付け類例を集成し検討を加えた。その結果、第１次埋没層は周堤の埋め戻し土である可能性が高く、土器の投棄も住居に関係がある人々によってなされた「住居廃絶に伴う一連の行為」とし、大きな時間差はないとする説を開示した（山本1978）（2）。両者は、今日の集落論にも影響を与えており、前者は移動性に富んだ集落像、所謂「横切りの集落論」、後者は長期的定住集落論へと連なる。今回の事例は山本氏の説を積極的に支持するものであるが、言うまでもなく今回の少数事例をもって一般化するものではない。今後は、住居埋没過程の多様性を認識しつつ、かつて山本氏が行ったように集成作業を進め、個別事例を詳細に検討する方法論を鍛えていく必要があろう。

３．中峠諸類型について

「中峠式」土器は1976年の提唱以来、関東地方一円で報告例が相次ぎ、その後多くの研究者によって言及されることとなった。その主たる興味は、勢い編年の妥当性に及ぶことが多く、勝坂式、阿玉台式、加曽利ＥⅠ式などとの共伴関係からその時間的独立性については否定的な見解が相次いだ。また、当初「中峠式」として紹介された土器群に加えて同時期の類似する土器群が編入されることにより、「中峠式」の内容はいっそう不明確なものとなっていった。下総考古学研究会は、これらの動向を受けて自ら再検討に踏み切り、1998年の第11回縄文セミナーにおける大村裕氏の発表（大村1998）及び『下総考古学15』（下総考古学研究会1998）における総括を経て「中峠式」は再編された。その結果、「中峠式」自体は中峠０地点型深鉢を中核とし、提唱以降、「中峠式」に包括されてきた類似土器群を中峠諸類型として再認識するに至った。また、その時期については下総考古学研究会の勝坂Ⅴ式と併行関係にある阿玉台Ⅳ式段階で生成され、加曽利ＥⅠ式段階まで存続するとしている。

本遺跡でも第１・２期の勝坂式、加曽利ＥⅠ式と共伴する形で中峠諸類型が出土している。第114図にこれらの本遺跡出土の諸類型をまとめたが、在地土器に比して極めて客体的な存在と言える。本項では個々の土器について検討し問題点を抽出してみたい。なお、用語等については近年の下総考古学研究会の成果を鑑み、これに準ずることとする。



第114図　丸山遺跡出土中峠諸類型

第１期（第114図１・２）

第114図１は、第１号住居跡の覆土から出土した口縁部破片で三原田型深鉢と思われる。口唇部は幅の狭い無文帯で、外傾する。口頸部は弱く膨らむ。無文帯直下には半截竹管の内皮面で平行沈線を引く。主文様は、突起状の渦巻文を隆帯で繋ぎ横位展開させる。単位不明。隆帯以下は無文である。２は第２号住居跡から出土したもので、三原田型深鉢である。所謂「河童」様の典型的な土器で、口頸部に中空把手を連続配置する。胴部に文様を持たない点で、やや古手の様相を持つ。口縁部は無文で急角度に外反し、口頸部が球形に膨らむ。胴部は円筒形を呈する。

第２期（第114図３～７）

３は第４号住居跡出土土器である。口縁部が内傾し、口頸部全体で球形を呈する。胴部は円筒形。文様は地文施文後に沈線で描かれている。口縁部には同心円文を２箇所配し、円文間には横 *U* 字文を置く。頸部には３本沈線を巡らしている。口縁部文様はかなり簡略化したものであり、交互刺突文等の要素を欠くが、屈曲部上半に文様が置かれることやモチーフが中峠０地点型深鉢に類似する。４は中峠６次１住型と考えられる。第４号住居跡出土。幅の狭い口縁部無文帯直下に交互刺突文を施す。主文様は隆帯作出であるが、モチーフは不明である。空間には集合沈線を充填する。第９号住居跡に類似資料が認められる（第64図14）。５・６は同一個体で第５号住居跡から出土している。台耕地34住型深鉢と考えられる。器形は２に酷似し、外反する無文の口縁部と球形の口頸部を有する。文様は地文施文後に施される。無文帯直下には、短沈線交互施文により連続コの字文を描出する。最大径部に横位の隆帯を巡らし、中間に２あるいは４単位の楕円形突起を置く。隆帯上には斜行刻目、隆帯脇には部分的に交互刺突を加えている。７も、台耕地34住型深鉢で川口市木曽呂表遺跡に類例がある（並木前掲）。口縁部は幅広の無文帯で外傾し、口

唇部連鎖状隆帯を貼り付ける。口頸部は球形で最大径部に２単位の反転渦巻き文を置き、中間を隆帯で繋ぐが、いずれも地文施文後に作出している。隆帯上には背割り沈線、交互刺突文、隆帯上刻目等、勝坂の伝統的な文様を施す。これらの特徴は５・６に共通し、同じ類型であることを明確に示している。

上記をまとめると、４以外は外傾、外反する無文帯を持つ、口頸部は球形を呈する。主文様は口頸部最大径部位に施されるといった共通点が認められる。すなわち、諸類型には文様描出技法に明確な差異があるが、第１期から第２期への移行の過程で、基本構造の大幅な変化は見出し難い。この変化の漸移性が中峠類型の時期について分かり難くしている最大の要因と言えるだろう。したがって、諸類型の変容過程の検証は、オーソドックスではあるが、共伴土器との関係を詳細に検討するのが最良の方法と考える。

中峠諸類型と勝坂式の並行関係について

下総考古学研究会は前述のとおり、中峠諸類型の時期を下総考古学研究会の勝坂Ⅴ式（以下、下総勝坂Ⅴ式）と加曽利ＥⅠ式の両方にまたがる土器群と位置付けた。下総勝坂Ⅴ式として『下総考古学』８第50図に例示された資料は、広義の多喜窪タイプと西関東系の円筒形土器を主体としている（下総考古学研究会1985）。前者には２・５があり、加曽利ＥⅠ式前半段階に伴う多喜窪タイプの典型として認識されている。円筒形土器の６は本遺跡第５号住居跡や毛呂山町まま上遺跡（金子2001）に類例があり、先述したように加曽利ＥⅠ前半段階に伴うものである。さらに９も本遺跡第５号住居跡に類例を見ることができる。これらの事例から考えると、下総勝坂Ⅴ式は丸山第２期（勝坂Ⅲｂ式）にほぼ相当する。

中峠類型の多くは、下総勝坂Ⅴ式段階に在地土器群への大木８ａ式の影響により、多元的に生成された加曽利ＥⅠ式への転換直前の過渡的な土器群として説明されているが、これまで述べてきたように下総勝坂Ⅴ式段階（丸山第２期）には既に加曽利ＥⅠ式が成立していた可能性が高いため、これら三者はほぼ同時期のものと解することができよう。

丸山第１期は勝坂Ⅲａ式（井戸尻式前半）に該当する。下総勝坂編年ではⅣ式となろうが、『下総考古学』８の第46・47図に示された勝坂Ⅳ式土器には、丸山第１期に相当する土器は意外に少ない。例示された資料の中では、第47図１・４・５・７・８が該当するものと思われる。多段楕円区画文を持つ円筒形土器（６・８）は、６が隆帯脇に爪形文が沿い前段階藤内Ⅱ式の特徴を具備するが、８は宮地遺跡第83号住居跡出土土器（第109図７）に類似した様相を持ち、本段階に残存する少数の事例と考えられる。１・５は第46図６・８に類似するが、これらを比較すると前二者の口縁部無文帯が幅広く袋状を呈するのに対して、後二者は口縁部無文帯の狭いタイプで藤内Ⅱ式段階に出現する頸部楕円区画文土器の初源的な様相を持つ。したがって、第47図１・４・５・７・８以外は型式的には藤内Ⅱ式とすることができよう。例示された資料には中部地方のものが多く含まれているため、多摩丘陵や武蔵野台地の勝坂式の概念とはいくらか異なると思われるが、設定基準、方法が異なるとは言え、現時点では丸山第１期に関しては下総勝坂Ⅳ式では明確に説明できないのである。かつて、鈴木保彦氏が指摘したように、藤内Ⅱ式と井戸尻Ⅰ式の一部が時間的に重なる（鈴木前掲）。旧埼玉県事業団編年（細田他1986）の第Ⅶ期もこの状況を勘案して設定された経緯があり、両者が共伴する事例もたびたび見られる。しかしながら、本遺跡第２号住居跡出土土器群の在り方は、藤内式的な様相を払拭した段階として両者を分離し得ると考えられ、細部に若干の差異はあるが鈴木氏の編年案をほぼ支持している。

さて、ここで問題となるのが第２号住居跡出土の三原田型深鉢の時間的な位置である。説明できないにしても、丸山第１期は下総勝坂Ⅳ式段階と考えるしかない。つまり、当該土器は下総考古学研究会が再編

した勝坂Ⅴ式から加曽利ＥⅠ式にまたがる中峠諸類型より確実に１段階古くなるのである。また、当該土器の様相は先述したように三原田型深鉢としてほぼ完成されたもので、初源的なものとは言い難い。したがって、中峠諸類型の中でも少なくとも三原田型の成立は、現在考えられている編年案より遡ると考えるのが妥当である。山下歳信氏は三原田型深鉢が伴出資料の検討と土器自体の変化、明確な分布域から３段階の変遷が明確とし三原田式として提唱した（山下2000)。本事例は出現段階と時期変遷について、氏の見通しを大筋で支持する事例となる。また、金子直行氏は毛呂山町まま上遺跡の考察で県内の中峠類型の共伴資料を提示し、井戸尻Ⅱ式から加曽利ＥⅠ式初頭の土器群との関係から、その時期変遷について少なくとも２段階が考えられるとしている（金子前掲)。いずれにしても、本事例で顕在化した事実から現在まで出土している中峠諸類型について、伴出土器から個々の土器の時間差と段階変遷の有無を再検討すべきと考える。特に指標となっている中峠０地点型深鉢については、詳細な再検討を要するものと思われる。

４．住居跡について

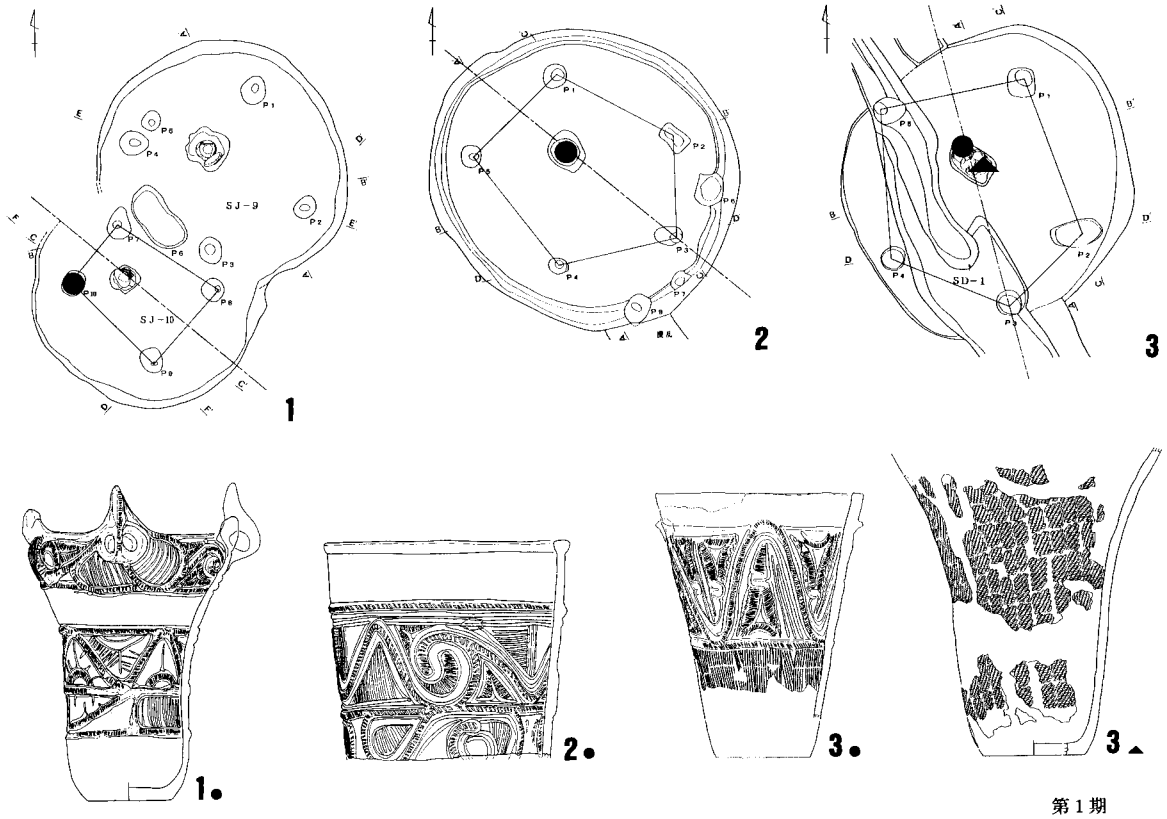
集落を時期区分し、その動態について論述する場合、住居跡の構造的な類似性の検討や「住居型式」の抽出、系統の研究は有効な手段とされている。住居跡の構造的な研究は多くの研究者によって試みられ、上屋の推定復元、平面構造、内部施設の形態、機能論等多岐に渡る。土器型式による集落時期区分の限界は以前より指摘されている。「住居型式」をもって、積極的にこれを補完しようとする試みは赤山容造氏による三原田遺跡の研究を嚆矢とし（赤山1984)、近年では櫛原功一氏の一連の研究がある（櫛原1989・1994)。しかしながら、その有効性については認められながらも、土器型式との整合性（3）や系統性への疑問等から研究が進んでいるとは言い難い。本項でもいくつかの観点から検出住居跡の検討を試みるが、限定された資料からの分析であるため、将来的な研究に向けての足掛かりと認識していただきたい。

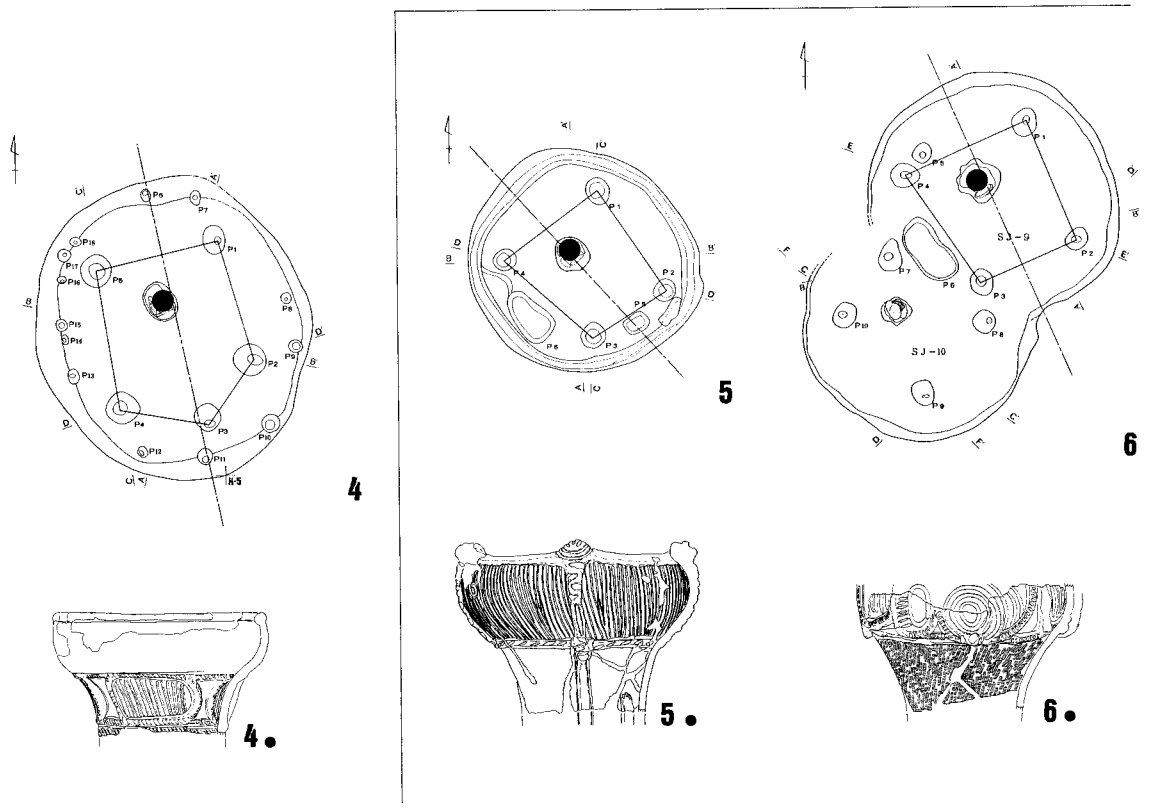
丸山第１・２期の住居形態（第115・116図）

第115・116図に丸山第１・２期の住居跡と時期決定資料を示した。主柱穴は結線し、主軸と推定されるラインを付した。第115図１～４は第１期のものである。１は、第10号住居跡で第９号住居跡と重複する。第１期で最も小型の住居跡で、平面形は重複部分が不明確であるが、円形を基調とする。主柱穴はＰ７～10の４個所で、南側に開く台形に配置されている。炉は中央やや北寄りに位置する。一見地床炉に見えるが、中央の窪みから土器が埋設されていた可能性が高い。２は第２号住居跡で１より一周り大きく、規模拡大に伴って主柱穴が１箇所増加する。平面形は楕円形を基調とする。炉は、中央より若干北寄りに位置する土器埋設炉である。主柱穴は５箇所で、南側に頂点を置く五角形に配置されている。ただし、北側の４箇所は第10号住居跡と同様、南側に開く台形状を呈する。３・４は第１・14号住居跡で、主柱穴配置、規模ともに第２号住居跡に類似する。炉の位置は、北側の台形部分中央よりやや北に偏って位置する。両者ともに土器埋設石囲炉である。

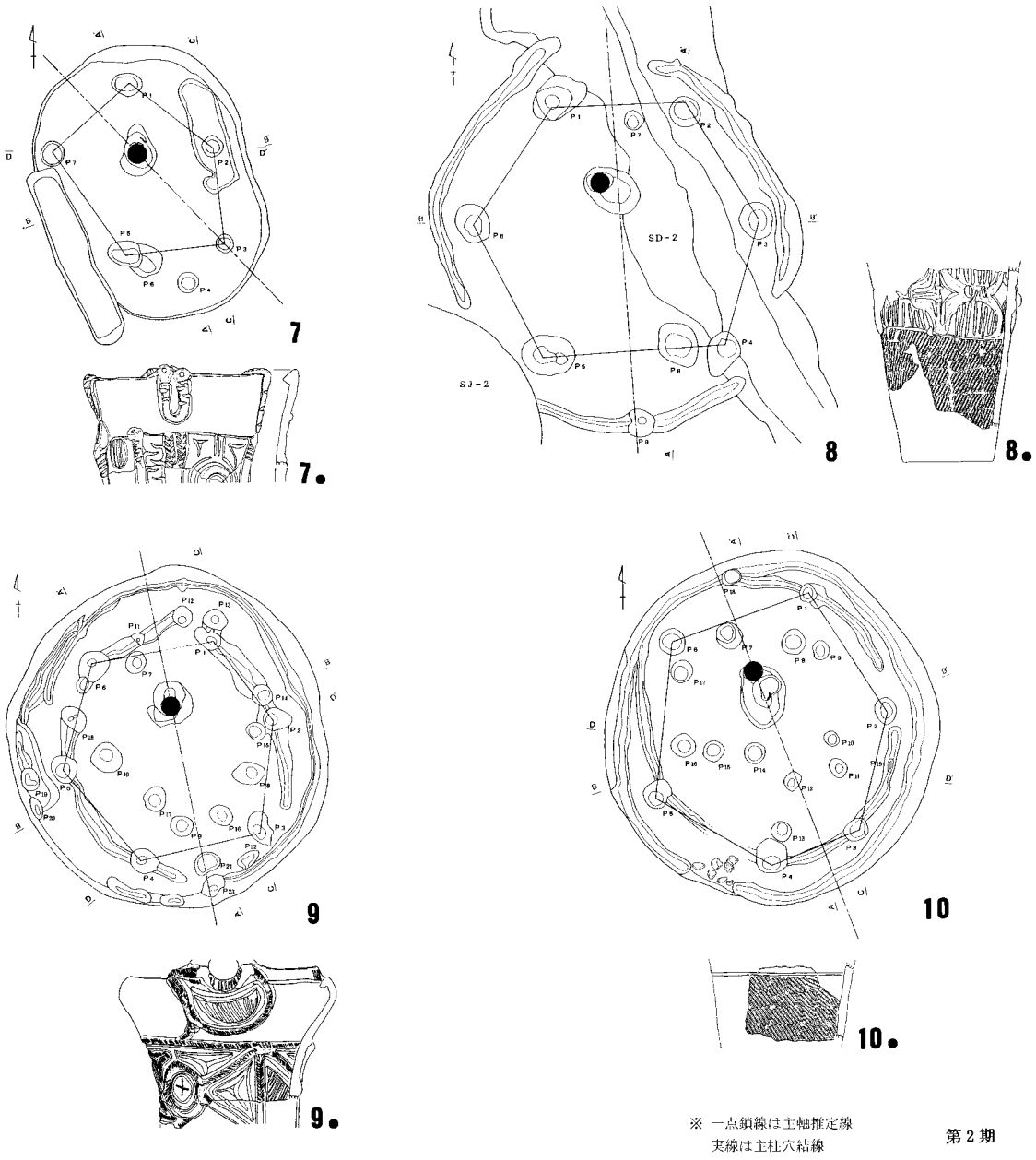
上記から第１期住居跡の共通点を列記すると、柱穴配置は南側に開く台形を基本とすること、規模が大きくなると南側に柱穴が追加されること、炉は土器埋設（石囲）炉の形態を採ること、炉の位置は台形の中央やや北側に位置することが上げられ、差異は壁溝の有無のみである。これらの諸条件から、本遺跡おける該期住居跡には明確な規格性が看取される。

５～10は第２期の住居跡である。５は第５号住居跡で今回報告の中では最小規模となるが、最も規格性が明確な遺構である。主柱穴４箇所で北側に開く台形に配置され、第１期の住居跡と逆になっている。平





第115図　第１・２期の住居跡と土器（１）



第116図　第１・２期の住居跡と土器（２）

面形は円形を基調とする。炉は台形部分の中央やや北寄りに位置する土器埋設石囲炉である。Ｐ３・４間の壁際にある土壙状の窪み（Ｐ６）は、同時期の第９号住居跡にも見られる（4）。６は第９号住居跡である。柱穴配置、炉形態、屋内施設等の規格は第５号住居跡に酷似するが、規模はやや拡大し壁溝を持たない。７は第４号住居跡である。主柱穴配置は南側に頂点を持つ五角形、炉は土器埋設石囲炉で北側の４箇所のほぼ中央に位置する。これらの特徴は第２・１・14住居跡に類似するが、主柱穴配置と住居プランが明確に一致しない。８～10は比較的大型の住居跡で、円形プランを基調とする。主柱穴配置は整った六角形を呈している。炉は、いずれも土器埋設炉である。８は第３号住居跡で、主柱穴配置は南側が若干開く。他の２軒と比較するとＰ４よりＰ８の方が位置的に合致するが、深さが不足している。９・10はそれぞれ第７・８号住居跡で２条の壁溝から拡張あるいは重複が考えられる。第８号住居跡は炉の作り変えが明確

であるが、第７号住居跡は炉埋設土器に第１期のものをそのまま使用している。したがって、第１期から第２期にかけての拡張、建て替えが想定し得る。また、両者の内側の壁溝は大略第２・14号住居跡の輪郭や規模に一致している。旧住居跡の主柱穴配置については確認できなかったが、規模等の特徴から南側に頂点を置く５本主柱配置が想定される。

第２期住居跡の共通点は、４本主柱の柱穴配置は北側に開く台形となること、第１・２・14号住居跡と同一規格の住居が継承されること、規模の拡大に伴い主柱穴が増加すること、部分的な調査であるため断定はできないが、住居が大型化する傾向が認められること、炉は土器埋設（石囲）炉の形態を採ること、炉の位置は台形の中央やや北側に位置することが上げられる。これらの諸条件から、該期住居跡にも明確な規格性が認められ、一部の変更のみで第１期のあり方を継承していると言えるだろう。

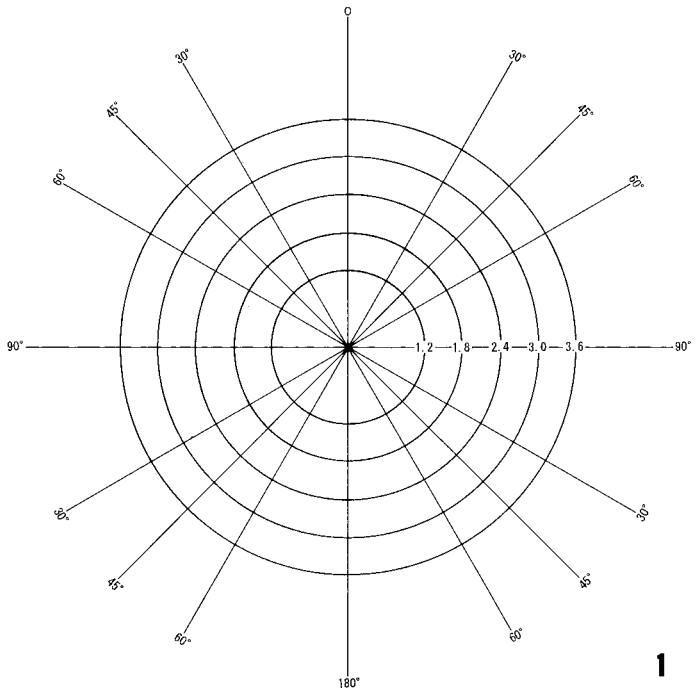
上記のとおり、第１期から第２期にかけては土器型式の変容に伴う住居形態の変化はほとんど認められない。また、同時期の住居形態が重複する事例の存在や耐用年数から考えても、時間幅を有することは明白である。換言すれば、住居というものを考えた場合、日用雑器である土器の文様に比して時間的な変化が見え難いものと言えるだろう。ただし、類似性と背後にある規格性については明確である。次項では、見方を変えて平面設計という観点から検出住居跡を検討する。

住居の平面規格について（第117・118図）

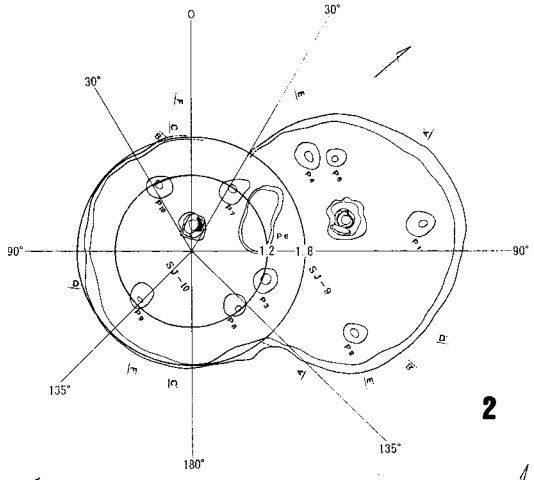
縄文時代、特に中期の住居跡については、主柱穴配置や上屋構造の想定から構築時の平面設計に何らかの規則性や規格が存在する可能性が指摘されてきた（橋本1976・神村1976・渋谷1982）。近年では、三内丸山遺跡の大型建物跡を対象とした分析が行われ、主柱穴間隔の検討から日本海側の多雪地域を中心とした35cm 尺と甲信越を中心とした40㎝尺の存在が想定されている（藤田他1994）。筆者も過去の調査経験から中期住居跡の柱穴配置のあり方に、身体尺や竪穴掘削時に明確な規格と設計概念があるのではないかと漠然と考えてきた。今回報告する検出住居跡については、際立った整然性にその感を強くした。

住居の構築は、神村　透氏の説にあるように整地後、プラン、規模、主軸の決定、竪穴の掘削、住居内施設の位置決定、掘削、設置といった過程をとるものと思われる。これに相前後して屋根材の伐採、刈り集めが行われる（神村前掲）。ただし、旧住居の解体が介在する可能性もあり、柱材、屋根材を現物合わせで使用する場合も考えられる。このなかで、今回問題となるのはプラン、規模、主軸の決定と住居内施設の位置決定である。神村氏は「住居に規則があるということは、大体こうしようと目見当で決めるのではなく、尺度の基準と作図法があったものと考える」とし、「角度の当分割法を知っていたと推測」している。渋谷文雄氏も同様の観点から、主柱穴配置に炉を中心とした360°の等分割を考え「放射状基準格子」を提案した（渋谷前掲）。氏は「放射状基準線」を扠首構造が平面的に投影されたものと規定し、住居平面と「放射状基準格子」との合致は扠首組からの一連の構築により、結果として現出したものとしている。両者は、以前より主観的と考えられてきた主柱穴の選定に客観性を導入した研究として高く評価し得る。筆者もこれらの案を支持するもので、今回の報告にあたって両者の案のうち主として渋谷氏の方法を援用し、検出住居跡の柱穴配置と住居規模の関係について若干の検討を加える。

渋谷氏の「放射状基準線」は基本的に夾角60°（６本主柱）、72°（５本主柱）、90°（４本主柱）の等角分割である。試しに氏の「放射状基準格子」を作成し、そのまま第１・２期の住居跡に重ねてみたが、明確に合致する事例は見出せなかった。前項で述べたように、４本主柱の場合でも配置が台形状になるのが一般的で、その内側に位置する炉が北側に偏ることに起因すると考えられる。そこで、渋谷氏の案に若干の変



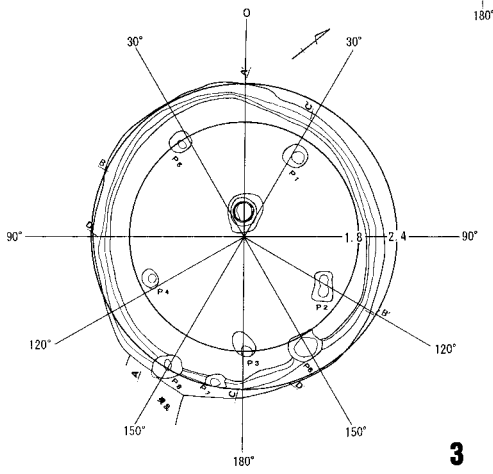
1



2

第10号住居跡

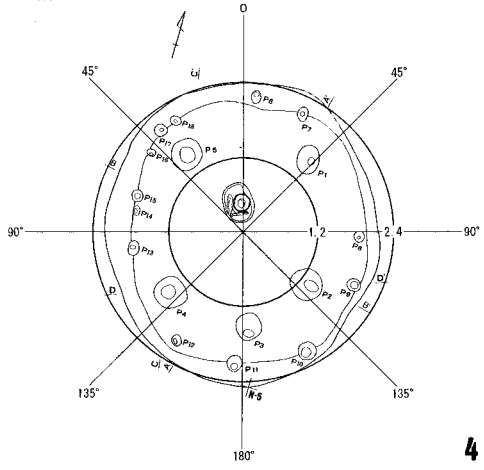
主軸方位	N—49° —W
炉 形 態	地床炉？
住居外形（半径）	1.8m
柱穴位置（半径）	0.9～1.2m



3

第2号住居跡

主軸方位	N—54° —W
炉 形 態	土器埋設炉
住居外形（半径）	2.4m
柱穴位置（半径）	1.5～1.8m

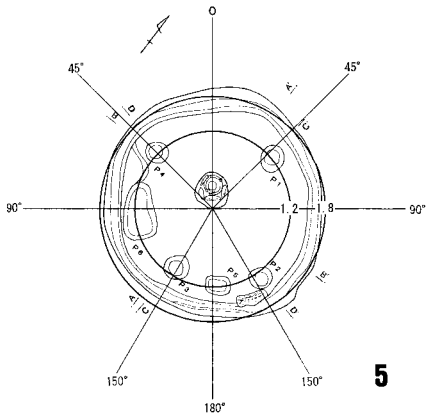


4

第14号住居跡

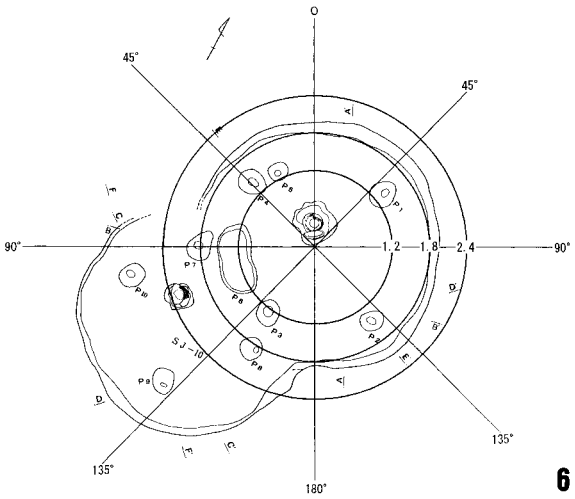
主軸方位	N—18° —W
炉 形 態	石囲土器埋設炉
住居外形（半径）	2.4m
柱穴位置（半径）	1.2～1.5m

第117図　検出住居跡の平面設計（1）



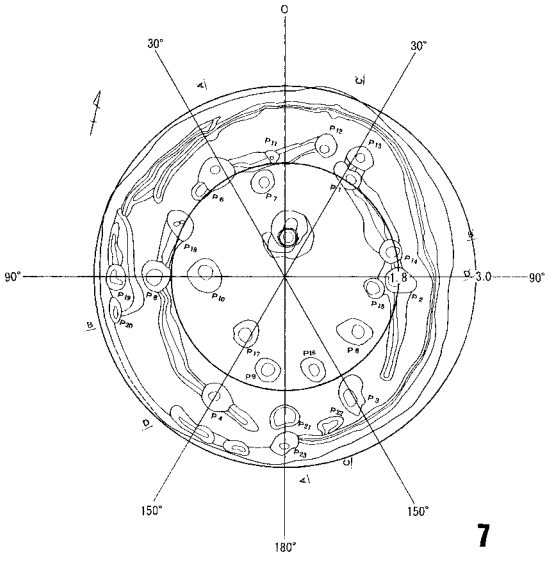
第５号住居跡

主軸方位	N―37° ―W
炉 形 態	石囲土器埋設炉
住居外形（半径）	1.8m
柱穴位置（半径）	1.2m



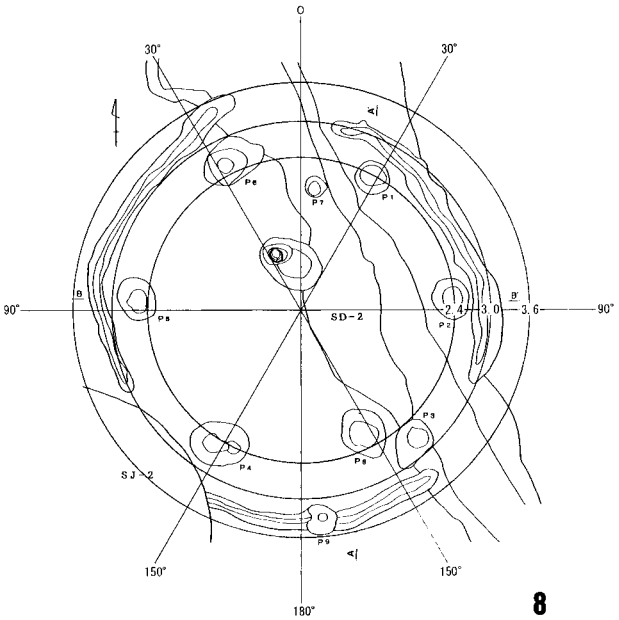
第９号住居跡

主軸方位	N―26° ―W
炉 形 態	石囲土器埋設炉
住居外形（半径）	2.1m
柱穴位置（半径）	1.2～1.5m



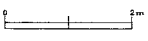
第７号住居跡

主軸方位	N―11° ―W
炉 形 態	土器埋設炉
住居外形（半径）	1.8～2.1m
柱穴位置（半径）	3.0m



第３号住居跡

主軸方位	N―3° ―W
炉 形 態	土器埋設炉
住居外形（半径）	3.3m
柱穴位置（半径）	2.1～2.7m



第118図　検出住居跡の平面設計（２）

更を加えることとした。まず、５本主柱や楕円形プラン住居の存在、入口部がほぼ例外無く南側に位置し方位意識があったと考えられるため、主軸とその二等分線を加えた（5）。これにより360°を４分割し、それぞれに30°、45°、60°の放射線を引いた。これに60㎝間隔の同心円を重ねる（第117図１）（6）。これを基本図とし、トレーシングペーパーに描き住居平面図を重ねて主柱穴の位置関係から住居の中心を割り出す。さらに、各主柱穴の中心からの距離、住居外形、規模の規格について個別検討する。

第10号住居跡（第117図２）

上記の基本図を重ね、柱穴位置から中心を推定したところ、主軸上の炉の南端付近となる。主柱穴の位置は主軸を０°とすると、北側のＰ１・４は各々30°、すなわち両者の関係は中心角60°となる。Ｐ２・３は各135°（90°＋45°）となっている。中心からの距離は半径0.9～1.2m 帯内に概ね収まる。住居外形は半径1.8m ラインに大略重なる。

第２号住居跡（第117図３）

主軸上の炉南端が中心と推定される。主軸を０°とすると、北側のＰ１・５は主軸から各30°（中心角60°）、南側のＰ２・４はそれぞれ120°（90°＋30°）、Ｐ３は180°となる。各主柱穴の位置は、中心から1.5～1.8m 帯内にあり、住居外形は半径2.4m の円形にほぼ重なる。また柱穴Ｐ６・８も主軸から150°（90°＋60°）の位置にあり、上屋を支える補助柱穴と考えられる。なお、第１号住居跡は、主柱穴の位置関係、中心からの距離等、本住居跡に類似し、外形については西側が不明確であるが、半径2.4m に概ね重なる。

第14号住居跡（第117図４）

中心は炉の南端と考えられる。主軸からＰ１・５は各々45°、Ｐ２・４は135°（90°＋45°）に位置する。したがって、北側の４箇所は90°等分割となる。五角形の頂点に当たるＰ３は180°にある。いずれの主柱穴も中心より半径1.2～1.5m 帯内に収まり、住居外形は半径2.4m にほぼ重なる。壁際に穿たれた小柱穴も、主軸より各30°、150°（90°＋60°）に符合するものが認められ、平面設計時に意図的に配された可能性がある（渋谷1998）。

第５号住居跡（第118図５）

前述のとおり、もっとも規格性が明確な住居跡である。主軸上の炉の南端に中心を置く。主軸を０°とすると、Ｐ１・４は主軸より各45°、Ｐ２・３は各120°（90°＋30°）を測る。入口と考えられるＰ５は180°に置かれる。いずれの柱穴も中心より半径1.2m 付近にあり、壁溝内側は概ね半径1.5m ライン、住居外形は半径1.8m に重なる。

第９号住居跡（第118図６）

柱穴の平面配置、屋内施設等は第５号住居跡に類似するが、主柱穴の位置決定は主軸を０°とするとＰ１・４は各45°、Ｐ２・３は135°（90°＋45°）と90°の等分割でなされている。中心は炉の南端に置かれる。各主柱穴の中心からの距離は半径1.2～1.5m 帯内に収まり、住居外形は半径2.1m ラインに重なる。これらの数値から、本住居跡は第５号住居跡を外側に30㎝拡大したものとすることができよう。

第７号住居跡（第118図７）

中心を炉の南端より30cm 南に置く。主軸を０°とすると、各主柱穴はＰ１・６が各30°Ｐ２・５は90°、Ｐ３・４は120°の位置にあり、60°の等分割で配置がなされている。中心からの距離は、半径1.8～2.1m 帯内に位置する。住居の輪郭は半径3.0m に概ね重なる。第８号住居跡は、第７号住居跡とほぼ同一の規格を有するが、主柱穴内部空間において北側をやや広く取る。そのため、Ｐ１・６が他の主柱穴に比して

30～60cm 離れた位置に穿たれている。住居外形は第７号住居跡と同様、半径3.0m ラインに大略重なる。両者ともに拡張されたものと思われるが、内側の壁溝に伴う主柱穴配置は見出せなかった。ただし、平面形や規模から第２号住居跡等に準ずる規格が想定される。

第３号住居跡（第118図８）

６本主柱の住居であるが、規模は前述の第７・８号住居跡より一周り拡大する。中心を炉南端より30cm 南に置く。主柱穴配置は60 ゜の等分割によってなされている。規模と深さから、主柱穴はＰ１～６が該当すると考えられるが、等角分割ではＰ３よりむしろＰ８が合致する。上屋部材の関係からの現物合わせを想定できようか。各主柱穴の中心からの距離は半径2.1～2.7m 内外にあり、炉の位置が主軸からずれることも合わせて、ややブレの目立つ平面構造が看取される。なお、住居外形は半径3.3m に概ね重なる。

以上、第１・２期の住居跡について渋谷氏の方法を援用して検討を加えた。本遺跡の勝坂期に限定すれば、主柱穴配置は角度で30 ゜、45 ゜、60 ゜が基本となり（7）、住居規模では30cm とその倍数がほぼ当てはまるという客観的な規格を見出せたと思う（8）。基本角度については、90 ゜の二等分、三等分がその基となっていると考えられる。また、規模と主柱穴数については、興味深い結果が得られた。基本となる４本主柱の住居である第５・10号住居跡を30cm 拡大したものが第９号住居跡となるが、４本主柱に変更はない。しかし、さらに30cm、計60cm 拡大した第１・２・14号住居跡は５本主柱となる。また、これらの５本主柱住居から60cm 拡大した第７・８号住居跡は６本主柱に変わる。これを30cm 拡大した第３号住居跡も６本主柱に変更はない。すなわち、半径が60cm 拡大するごとに主柱が１本増加し、中心からの角度や配置に変更が加えられることとなる。これについては、渋谷氏による下総地方の資料検討から既に検証済みであり、これを追認するものと言えよう。また、氏は４・５・６本主柱の住居について、基本となる円形部分の径を2.0m、2.6m、3.2m としているが、今回検討した30cm 単位の拡大を考えれば各々2.1m、2.7m、3.3m という近似値を与えることができる。すなわち、主柱穴の角度による配置、30cm ごとの規模の拡大という点で、関東南部では概ね同一の規格が存在する可能性を指摘できる。なお、氏の提示した下総西部地域における住居跡との差異は、中心は炉の中央ではなく、炉の南端あるいは炉の南側30cm 付近となること（9）、４本主柱の住居の場合でも、90 ゜の等角分割は普遍的ではないこと、５本主柱の住居に72 ゜の等角分割が当てはまらないこと等が上げられる。これらについては、今後多くの資料分析の過程を経て回答を見出したいと思う。

「住居型式」設定の問題点

前項の分析から、主柱本数の増加は住居の「型式」変化ではなく規模の拡大に由来するものと思われる。したがって、従来住居形態を示すのに使用されてきた「４本主柱型」、「６本主柱型」といった分類が妥当かどうか、またこれを基幹とする要素から「住居型式」を設定するのが可能かどうかという問題が派生する。かつて筆者は、阿玉台期の住居跡について検討を加えたことがある（石塚1986）。その中で、「中央主柱型」と「主軸上主柱型」の２種を阿玉台文化特有のものと位置付けた。これは、中期の一般的な住居跡と構造の点で明確な差異が認められるからで、言わば「阿玉台型住居跡」と呼称することも可能と考えた。これとは異なり、前期末に出現した炉を中心とする同心円型の住居は、中期に至って４～６本主柱住居を成立させ（笹森1990）、極小の円形プラン住居や柄鏡形住居が出現するまで普遍化する。すなわち、今回分析の対象とした丸山検出の住居跡は中期において、汎関東的に検出される類のもので、これらを平面プラン、主柱本数及び配置、炉形態等から分類しても相当数の類型を想定することになろう。これに加えて

地域差も加味すれば、分類のための分類に堕する恐れがある。また、前項の分析にあるように土器型式の変化に連動しない点も指摘されるため、前述の「阿玉台型」のように土器型式名を冠して「勝坂型」と呼称するのも無理があるように思える(10)。これについての解答として、やはり客観的な規格をもって分類された渋谷氏の案を型式として採用する他、中期中葉から後葉にかけての変化が明確であることから、櫛原功一氏が提示した「中期前半型」、「中期後半型」等の長いスパンを採用した名称も考えられ（櫛原2001)、現状ではこれらが最も実態に則した呼称と言えるかもしれない。また、今回の検討でも地域差が認められたが、櫛原氏の案に地域名を冠するのも一案となろう。いずれにしても、たびたび述べたように「住居型式」の抽出は集落研究に有効な戦略と考えられるため、詳細な集落分析を志向する者にとっては極めて魅力的な方法である。筆者も、形態分類を元に短絡的に型式設定を行う誘惑に駆られる。しかしながら、住居型式概念の明確な設定や客観的な根拠から導き出された系譜を抜きにして行うことは集落研究を行う上で害となる可能性が高い。反面、地域間の研究者が共通の認識をもって論議するための概念設定も急務となっている。自らを戒めるとともに、今後、縄文集落研究に寄与する方法を模索していきたい。

５．丸山集落の変遷

前項までに検討した諸要素を元に、丸山集落の動態について若干述べて結びとしたい。ただし、集落の全体像が明らかとなっているわけではない。遺構の分布様相レベルの記述にしかなり得ないが、今後丸山遺跡研究の見通しを構築する上で必要なことと考えられる。なお、土壙群については機能及び時期を明確にし得なかったため住居跡の記述に限定することとする。

第１期（第119図）

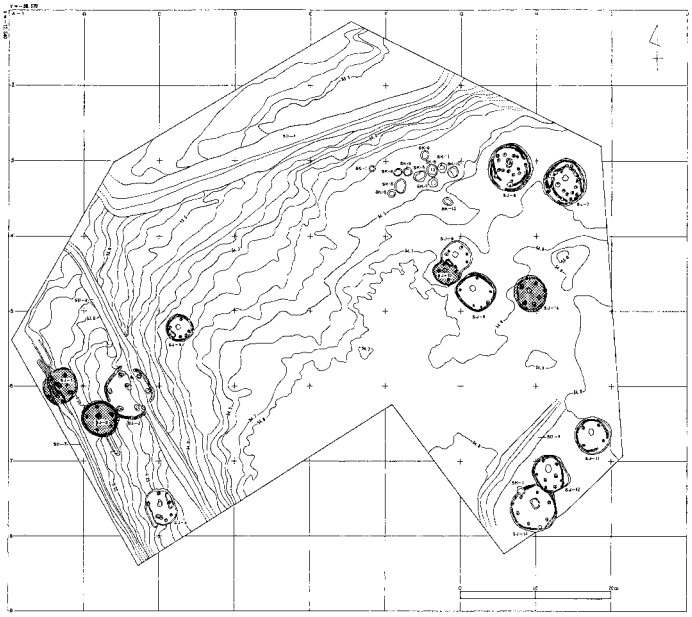
勝坂Ⅲａ式段階。本期の遺構として明確となっているのは、第１・２・10・14号住居跡である。位置関係は、あたかも第１・２号住居跡と第10・14号住居跡が対となり東西に対峙する形に看て取れる。ただし、前項で述べたように第７・８号住居跡の内側に残された旧住居跡は第１期に構築された可能性があり、緑地保存とした鉄塔周辺及び調査区外でも当該期の住居跡が確認されている（附編参照)。したがって、２棟単位の対峙関係は成立せず、初源段階から北方向に開口部を有する半円状分布が認められる。住居群は４・５本主柱のみで、規格が明確である。集落初源段階において、共同作業による比較的短期間の住居構築があり、共通の平面規格が集落構成員にあったことが考えられる。

第２期（第119図）

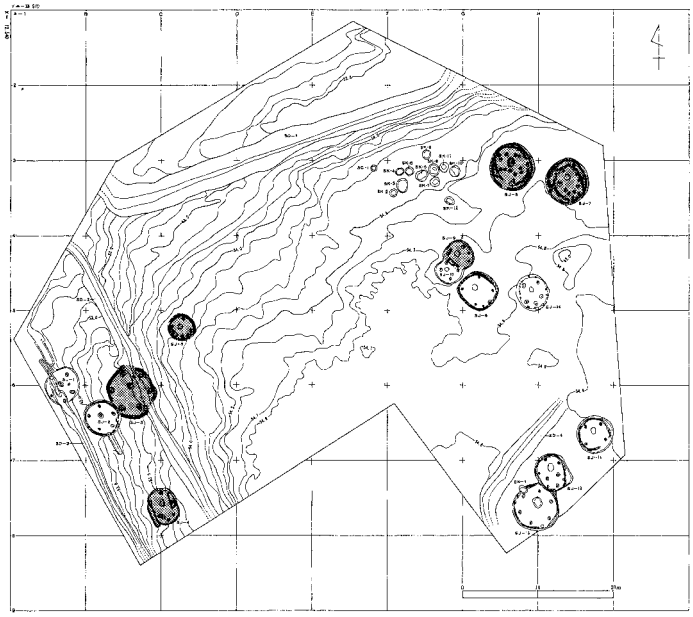
勝坂Ⅲｂ式・加曽利ＥⅠ式前半段階。本期の住居跡には、第３～５・７～９号住居跡がある。内、第７・８号住居跡については第１期に構築され、本期において拡張されたものと考えられる。分布状況は第１期と大きな変化はなく、環状構造が明確に維持されていると思われる。当該期には住居規模拡大に伴い６本主柱の住居が出現する。これに比して、第５・９号住居跡のような小型の住居跡が共存する。該期集落の南側については状況が不明確であるが、第３・７・８号住居跡に見られる住居規模拡大は食料資源の安定を主要因とする集落人口の増加が考えられ、同時に新規の小型住居が構築されるという点から、第１期と比較すると相対的に集落規模の拡大と定住化の促進が想定される。

第３期（第120図）

加曽利ＥⅠ式後半段階。検出された遺構は４本主柱の第11号住居跡のみであるため、実態は不明確である。ただし、集落北側に形成された包含層や遺跡南斜面部には同時期の土器片が散布しているため、該期

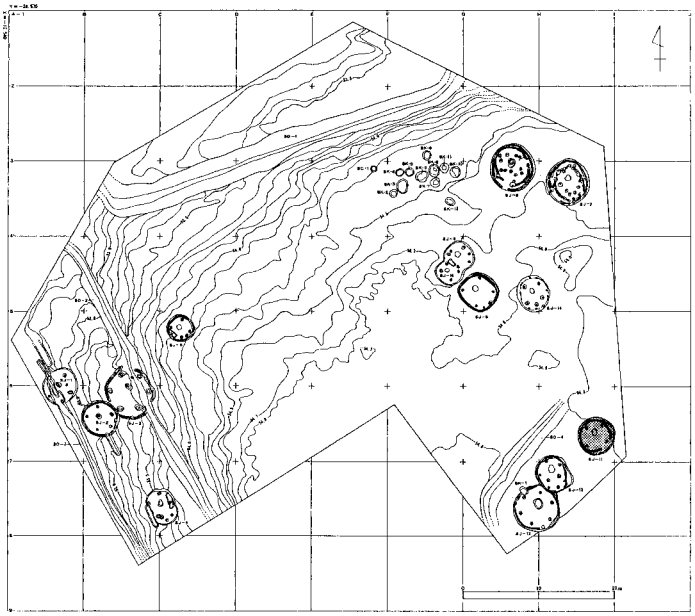


第１期（勝坂Ⅲ式前半段階）

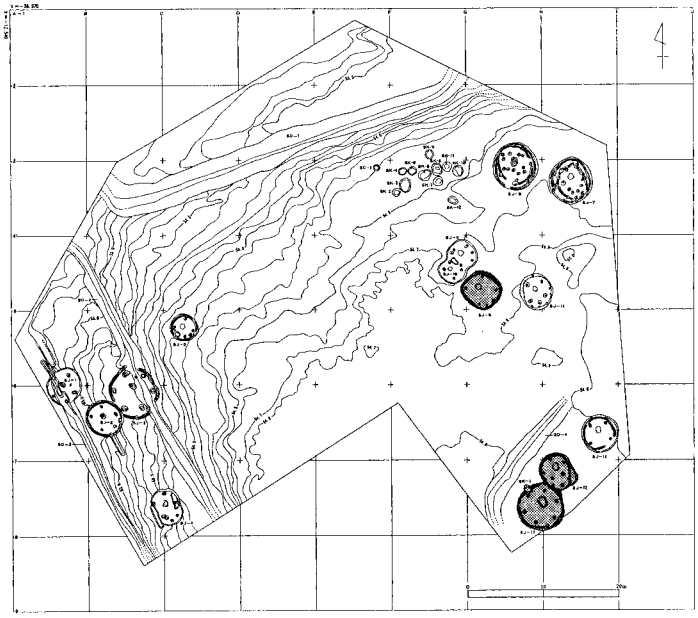


第２期（勝坂Ⅲ式後半・加曽利ＥⅠ式前半段階）

第119図　集落変遷図（１）



第３期（加曽利ＥⅠ後半段階）



第４期（加曽利ＥⅡ前葉段階）

第120図　集落変遷図（２）

住居跡の存在が考えられる。集落構成は該期から次段階の第４期にかけて一変し、南側斜面部に偏る傾向が認められ、斜面肩部の線状分布が想定され、集落初源以降、堅守された環状構造の崩れが看取される。

第４期（第120図）

加曽利ＥⅡ式前葉段階。本段階の住居跡には、第６・12・13号住居跡がある。前段階からの縮小傾向が認められ、調査区南東縁に分布の偏りがある。第６号住居跡のみやや中央に位置するが、傾向としては集落南縁に展開する線状あるいは弧状分布が想定される。集落北側への再進出は行われず、結果的に環状集落に顕著な居住区域の重層化が見られない。住居の形態は等角分割による主柱配置がほぼ確定し、炉の形態も第12・13住居跡では破壊されているが、石囲炉で一致を見る。また第13住居跡には唯一屋内埋甕が設置され、中期後半的な住居が確立する。丸山集落は、この第４期をもって終焉を迎える。小河川を挟んだ対岸には、規模、存続期間において本遺跡を凌駕する宮原遺跡が存在する。ただし、破片のみの出土であるが、丸山遺跡でも連弧文土器や堀之内式土器が認められるため、宮原集落の活動領域として本遺跡周辺が取り込まれていたのは確かであろう。

以上、丸山集落の変遷について簡単に触れた。結論として、通時的には環状構造を維持しているが、時期区分によって検討してみると中期中葉から後葉にかけての移行期に集落構造が変化した事実だけは確実であろう。また、それはこれまで触れてきた住居形態、土器もその移行期において明確に連動していると考えられる。今後は、これらを総合した集落景観解釈の方法を模索していきたいと考えている。

近年、集落景観の解釈について方法の限界性について論議が進んでおり、遺構間遺物接合の詳細な検討から導かれたライフサイクル論による集落景観の復元が試みられている（小林2000）。ただし、現在までに蓄積された検討方法、例えば村田文夫氏が試みた方法（村田1992）に見られるように、オーソドックスながら今まで見落とされていたような視点の抽出等にも未だ可能性が残されているのではないだろうか。いずれにしても、根底にある集落と縄文社会の基本的解釈の対立構造を解決しない限り、縄文時代集落論の実りある発展はないと考える。

おわりに

以上、調査と整理の過程で抽出した問題点について、いささか冗長となったが検討を加えてみた。結果として、個別集落の分析視点をいくつか提示し得たと思う。

筆者は、かつて環状集落の形成要因について私見を開示したことがあった（石塚1991）。当時の集落論は、環状集落を分割線で二分し、二大群をさらに時期別に分割して動態を記述するという方法が一般的であった。水野集落論が、あらゆる意味で破綻しているにもかかわらず、それに拘泥していたように思われたのである。また、移動論と定住論が平行線を辿るような論争に焦燥感を持っていた。この状況に対して、そもそも何が主要因となって「環状化現象」が起きるのかという観点から検討を行った。結果としては、集団維持に際してのクリを代表とする「有用植物の囲い込み」という結論を打ち出したわけであるが、初源段階の環状化についてはこの可能性を指摘できても、それに固執するのみでその後の集落醸成に明確なビジョンを持っていなかった点で方法が稚拙であったことは否めない。また、その論調から集落景観を維持する社会規制すら否定したのは重大な失点であった。この点については、他の研究者からの批判があり（鈴木1992・小林1992）、近年でも指摘を受けている（山本2001）。丸山集落の検討を通じて、いくつかの視点が提示されたわけであるが、これらを受けて前稿で得た結論を一時的に排するものである。原点に戻っ

て、前掲の村田氏の方法など、個別集落における様相、要素を客観的かつ詳細に観察する方法を鍛える必要性を強く感じた次第である。なお、今回は入間地方の他の大規模集落、例えば飯能市八王子遺跡（村上他1999）や大井町西ノ原遺跡（今井・坪田1996）との比較検討を行えなかったが、丸山集落で確認できた様相が他の集落遺跡でも見出し得るものか、また視点が有効であるか否か、稿を改めて考えてみたい。

＜註＞

（１）　中峠式土器の呼称については、提唱以来､大村氏の再検討までを「中峠式」とし､それ以降を「中峠諸類型」とした。

（２）　黒尾和久氏は、山本氏の「周堤埋め戻し説」について、第一次埋没土の生成過程を検討する上で批判を加えている（黒尾1988)。山本氏は、第一次埋没土形成について、時間幅があるという先入観が所謂レンズ状堆積を自然埋没として捉える要因となっているとする。黒尾氏は反証事例として、和田・百草遺跡報文（山崎・植田他1986）を上げ,「柱穴の観察において覆土の埋め戻し状況についてもふれて」いるため､「埋め戻しを含めた土層の堆積状態についても調査時に十分な観察が行われていることが容易に判断でき」るとした。和田・百草遺跡の報告者を批判するわけではないが、報文のこの部分についてはSI３のP16の埋め戻しについて触れられているだけである。確かに、氏の言うように「報文の記載は信用に値する」が、自然埋没か埋め戻し行為かという大きな問題を検討する上での反証としては弱すぎるのではないだろうか。なお、筆者個人は前述の「自然埋没」という常識や先入観は現在でも存在し、観察力を弱める一因となっていると思う。

（３）　当然のことながら、土器型式と「住居型式」の時間は連動したものではない。住居の変化については、土器型式より長いスパンで考えるべきものと考えられる。

（４）　同様の住居内施設は、同時期の日高市明婦遺跡（松本2000)、毛呂山町まま上遺跡検出遺構にも認められ、現在のところ勝坂式終末期に多く見られるようである。なお、丸山第５号住居跡例では本施設に近接して敲石が２点出土しており、何らかの作業施設と思われる。

（５）　これらに加えて、生活動線や内部空間の分割意識が住居構築時からあったものと思われるため、主軸は重要な要素となっている。また、主軸の二等分線については炉の南側の炉縁石が主軸に直交するのが示唆的と考え、基準格子に加えることとした。

（６）　本来は身体尺と思われる30㎝間隔の同心円を描くべきであるが、煩雑になるため１本置きとした。なお、身体尺30cmは直角に曲げた手首から肘までの長さを想定している。

（７）　角度分割については、土器の文様割付との類似性が思われ、これを相似的に拡大したと考えることも可能であろう。

（８）　第３・４期の住居については、図化はしていないが、５本主柱の第12号住居跡や中心の位置以外は概ね渋谷氏の「放射状基準格子」が合致する。加曽利Ｅ式の普遍化にも見られるように、住居についても関東全体での規格化が進行した結果と言えるかもしれない。

（９）　この点については、中心意識の差異があるものと考えられる。東関東では中期的な住居が成立する前段階、阿玉台式期の住居跡の基本形態は円形中央主柱タイプである。規模は比較的小規模なものが一般的である。また、同時期に存在する主軸上に２～３箇所の主柱穴を有する楕円形プランの

住居は、その構造から主軸を介して住居設計がなされたと思われ、想像を逞しくすれば両者の融合が炉を中心とした円形設計と主軸方向への拡張という規範を創出したと考えることもできる。

（10）　拙稿（石塚1986）では、「阿玉台型」に対してこういったニュアンスで勝坂式土器を伴う住居跡を検討した経緯があるが、今回の検討からこれを排するものである。

〈引用・参考文献〉

赤山容造　1982　「竪穴住居」　『縄文文化の研究』８

安孫子昭二他　1969　「多摩ニュータウンNo．46遺跡の発掘調査」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅶ

安孫子昭二他　1974　『小金井市貫井南遺跡発掘調査報告』

石塚和則　1986　「縄文中期前葉の住居形態」　『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』1986

石塚和則　1991　「環状集落考」　『埼玉考古学論集』

石塚和則　1997　『宮地遺跡第５次調査』　狭山市埋蔵文化財調査報告書10

石塚和則　2001　『城ノ越遺跡第７・８次調査』　狭山市埋蔵文化財調査報告書13

伊藤博司他　1998　『東京都青梅市　駒木野遺跡発掘調査報告書』

今井　尭・坪田幹男　1996　『西ノ原遺跡』　大井町遺跡調査会報告第６集

今井正美他　1994　『稲荷上遺跡』　狭山市遺跡調査会報告第６集

岩井住男他　1970　「膳棚」　『凰翔』７号

内田祐治　1982　『野塩前原』　清瀬市文化財調査報告書１

馬橋利行他　1994　『南養寺遺跡―Ⅷ・Ⅸ―』　国立市文化財調査報告第35集

海老原郁雄　1988　「所謂土製円盤の用途について」　『栃木県考古学会誌』第９集

大村　裕　1998　「中峠式土器の再検討」　『第11回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸問題』

金子直行　1987　『北・八幡谷・相野谷』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第66集

金子直行他　1996　『大山遺跡第９次』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第180集

金子直行　2001　『まま上遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第242集

神村　透　1980　「下伊那地方の縄文中期後半の様相」　『国分直一博士古希記念論集』考古篇

桐生直彦　1987　「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類について」　『東国史論』第２号

櫛原功一　1989　「縄文時代の住居形態と集落―甲府盆地を中心として―」　『山梨考古学論集』Ⅱ

櫛原功一　1994　「縄文中期の環状集落と住居形態」　『山梨考古学論集』Ⅲ

櫛原功一　2001　「山梨県における縄文時代の諸様相」　『縄文時代研究会第１回研究集会発表要旨　縄文時代集落研究の現段階』

久保田福造他　1983　『狭山市遺跡分布調査報告書』第２集

黒尾和久　1988　「竪穴住居出土遺物の一般的あり方について」　『玉口時雄先生古希記念論文集　古代集落の諸問題』

黒坂禎二他　1995　『向山／上原／向原』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第155集

小林　克　1992　「1991年の縄文時代学界の動向　遺構論」　『縄文時代』３

小林謙一　2000　「縄紋中期集落の一時的集落景観の復元」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』
小林謙一　2000　「縄紋中期土器の文様割付の研究」　『日本考古学』第10号
笹森健一　1990　「住まいのかたち－上屋復元の試み－」　『季刊考古学』第32号
渋谷文雄　1983　「竪穴住居址の柱穴位置と規模について」　『考古学雑誌』第67巻第４号
渋谷文雄　1998　「竪穴住居の小柱穴位置について」　『松戸市立博物館紀要』第５号
下総考古学研究会　1985　「特集　勝坂式土器の研究」　『下総考古学』８
下総考古学研究会　1999　「特集　中峠式土器の再検討」　『下総考古学』15
鈴木敏昭他　1983　『台耕地（Ⅰ）』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第27集
鈴木保彦　1982　「勝坂式土器」　『縄文土器大成』２中期
鈴木保彦　1992　「1991年の縄文時代学界の動向　集落・領域論」　『縄文時代』３
田中　信　1985　「住居空間分割に関する一試論」　『土曜考古』第10号
谷井　彪　1977　「勝坂式土器の文様構成について」　『埼玉考古』第16号
谷井　彪　1986　「加曽利Ｅ式にみられる大木式の要素」　『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第８号
谷井　彪　1987　「加曽利Ｅ式土器における口縁部文様と形態の系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集　埼玉の考古学』
谷井　彪　1992　「富士見市鶴瀬出土の勝坂式系土器について」　『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第14号
谷井　彪　1991　「勝坂式土器の変形にかかわる二三の要素」　『埼玉考古学論集』
谷井　彪・細田　勝　1997　「水窪遺跡の研究」　『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13
谷口康浩　1998　「縄文時代集落論の争点」　『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
谷口康浩　1999　「集落・領域研究」　『縄文時代』10
戸田哲也　1996　『東京都八王子市　小田野遺跡発掘調査報告書』
戸田哲也　1999　「関東地方　中期（勝坂式）」　『縄文時代』10第１分冊
富元久美子他　1991　『芋久保遺跡（第１・２次）発掘調査報告書』　飯能の遺跡（11）
富元久美子他　1998　『加能里遺跡第16・20・21次調査』　飯能の遺跡（25）
富元久美子他　2001　『落合上ノ台遺跡』　医療法人くすのき会飯能ホスピタル地内埋蔵文化財調査報告書
中村倉司　1988　『小山ノ上遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第70集
並木　隆他　1978　『木曽呂表遺跡』　川口市文化財調査報告書第９集
橋本　正　1976　「竪穴住居の分類と系譜」　『考古学研究』23－３
服部敬史　1972　『岳の上遺跡』　東京都西多摩郡日の出村岳の上遺跡の発掘調査報告書
浜野美代子　1997　『東町二丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第186集
細田　勝他　1982　「縄文中期土器群の再編」　『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』1982
細田　勝　1989　「縄文中期土器研究の諸問題」　『第３回縄文セミナー　縄文中期の諸問題』
松本尚也　2000　「日高市明婦遺跡の調査」　『埼玉考古学会　情報』20
三上徹也　1995　「土器利用炉の分類とその意義」　『長野県立歴史館研究紀要』第１号
宮崎朝雄　2001　「行司免遺跡縄文時代中期集落の分析」　『嵐山町博物誌調査報告』第６集
宮崎　博　1992　「1991年の縄文時代学界の動向　集落・領域論」　『縄文時代』３
村上達哉他　1999　『大日向遺跡・八王子遺跡』　飯能日高ゴルフコース地内埋蔵文化財調査報告書

村田章人　1997　『原／谷畑』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第179集
村田文夫　1992　「長野県棚畑遺跡縄文村の語り－中期集落理解に向けての断想－」　『縄文時代』３
柳戸信吾他　1998　『中郷遺跡第１～３次調査』　飯能の遺跡（26）
山口逸弘　2000　「「勝坂系」土器という末裔たち」　『群馬考古学手帳』10
山口逸弘　2001　「道訓前遺跡出土の「三原田型深鉢」について」　『道訓前遺跡』　北橘村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
山崎和巳・植田　真他　1986　『和田・百草遺跡群』　多摩市埋蔵文化財調査報告10
山下歳信　1998　「群馬県における中期中葉・後葉の様相－いわゆる「三原田式土器」の再検討」　『第11回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸問題』
山下歳信　1999　「三原田式土器再検討」　『縄文土器論集－縄文セミナー10周年記念論文集－』
山本暉久　1978　「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」　『神奈川考古』第３号
山本暉久　2001　「環状集落の形成」　『縄文時代研究会第１回研究集会発表要旨　縄文時代集落研究の現段階』
渡辺清志　1998　『宿東遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第197集

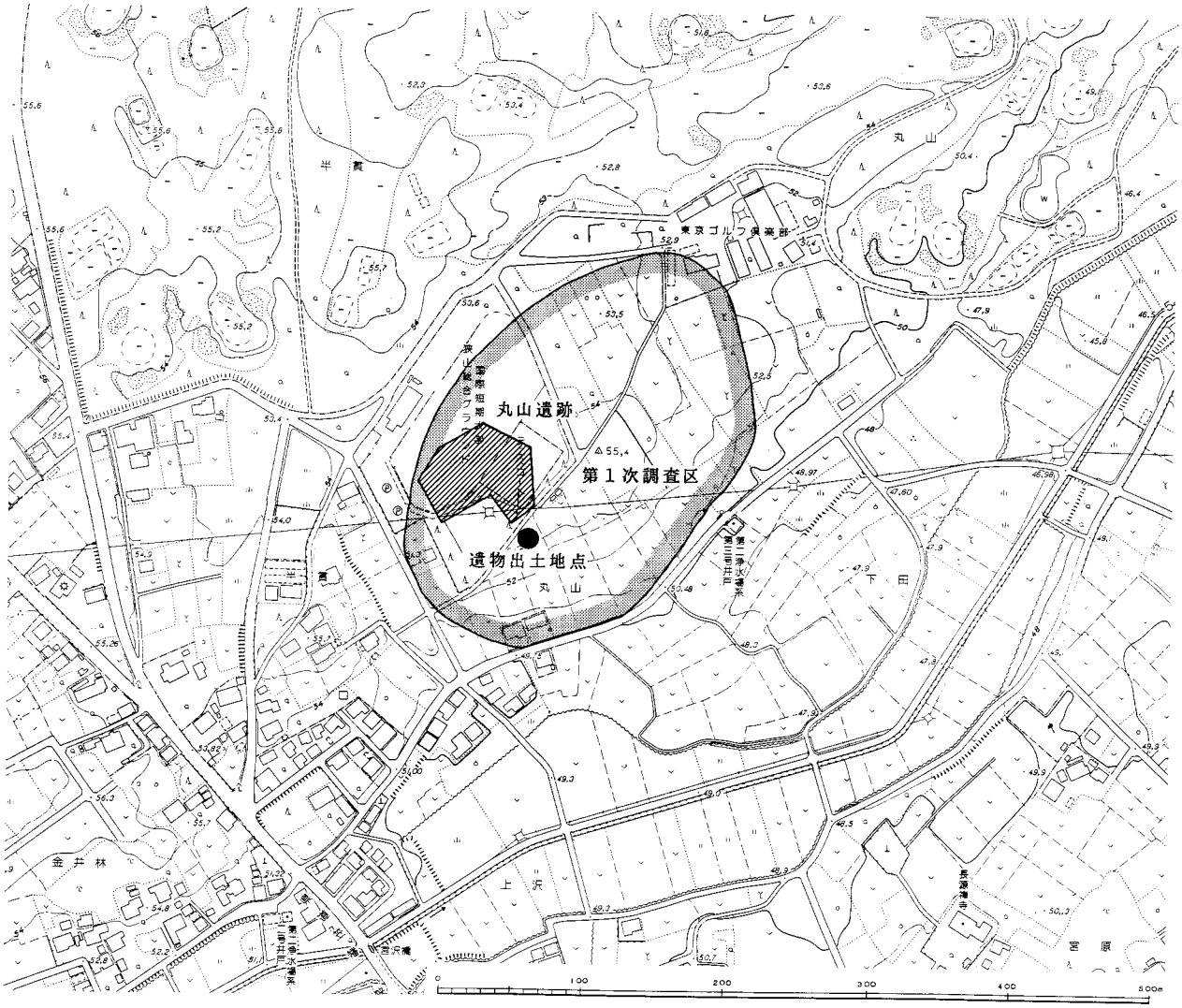
《附　編》

丸山遺跡出土の縄文時代中期中葉遺物について

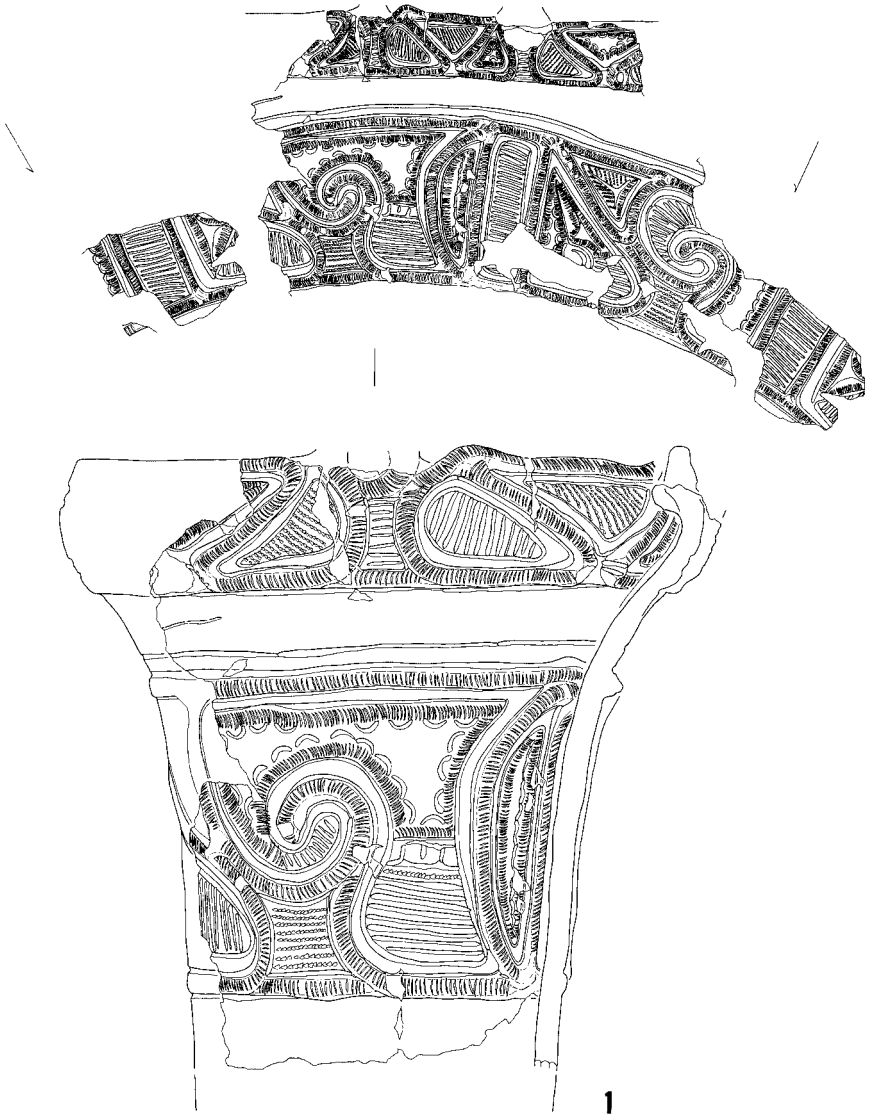
ここに紹介するのは、平成10年度に狭山市教育委員会に寄託された丸山遺跡出土の土器、石器である。

出土位置は、第121図に示したとおり、平成３年度調査区の南側の畑地内である。遺物引取り後に、筆者が現地を踏査したところ、出土した芋穴周辺には多量の焼土が認められ、住居跡の存在が確認された。

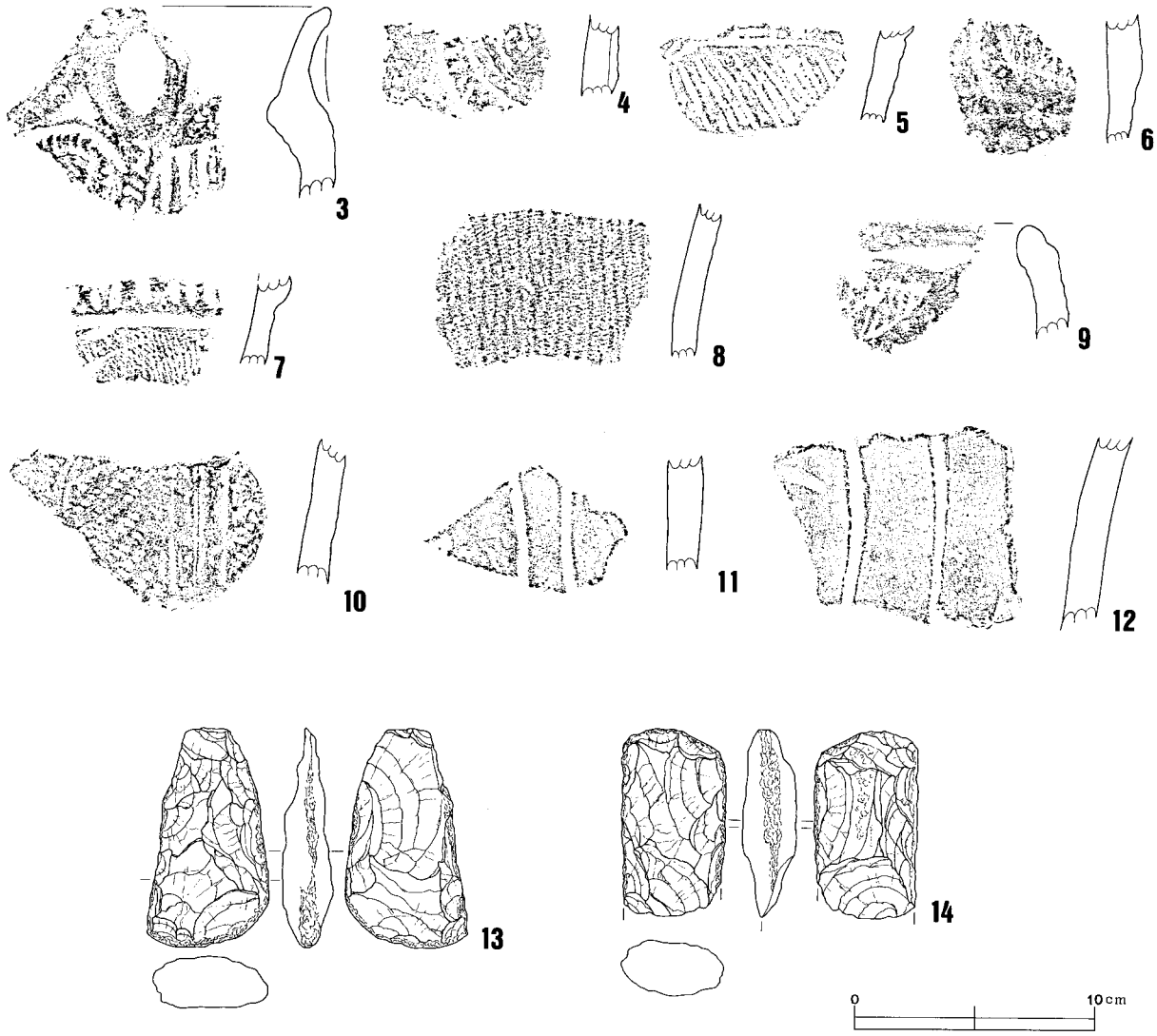
第122図１の深鉢は出土地点の状態と残存状況から炉埋設土器と判断した。図化部分で70%残存する。口縁部は内湾し、胴部は円筒形を呈する。口縁部には４単位の把手を置くと思われる。口縁部文様は、横帯文土器類似のモチーフで三角区画の交互に配置する。隆帯上には細かい爪形文を施し、隆帯脇には複沈線を引く。区画内充填手法には、縦位、横位の集合沈線、集合結節沈線、爪形文に半截竹管を並走させるもの等が認められる。胴部文様は、縦位区画文類似の構成を採る。渦巻文を基幹とする単位に、縦位長方形区画を付加する。隆帯上処理及び区画内の充填手法は口縁部文様に準ずるが、集合結節沈線に三叉文の組合わせが目を引く。現存高33.1㎝、口径推定28.4㎝、器厚1.2～1.4㎝を測る。焼成は良好で、暗褐色、暗赤褐色を呈する。２～12は、１の出土地周辺で表採したものである。２は平縁の浅鉢で、口縁部から胴部中位にかけて残存する。口唇部は内側に肥厚する。現存高8.8cm、口径推定39.8cm を測る。３～８は



第121図　遺物出土地点位置図



第122図　表採遺物（１）



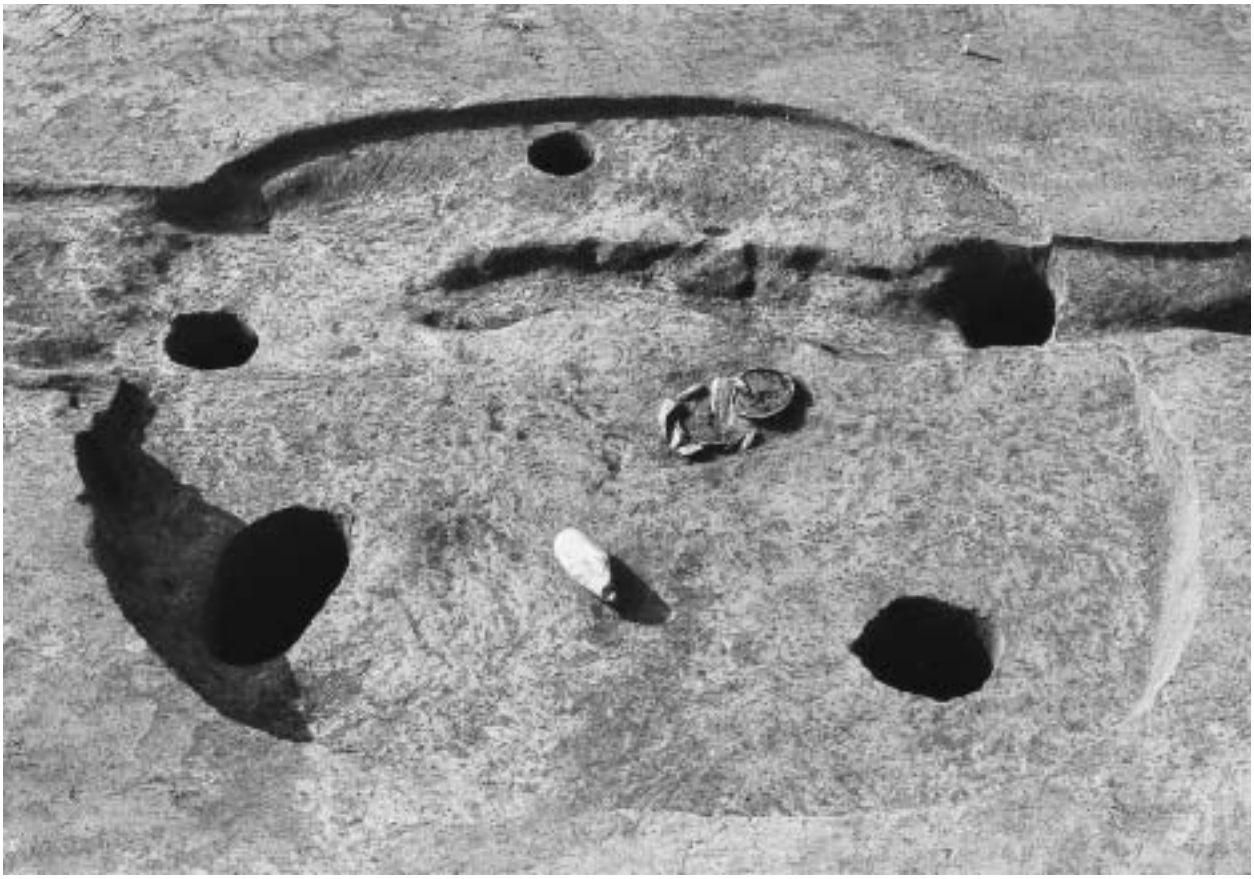
第123図　表採遺物（２）

勝坂式土器である。３は横帯文土器の口縁部破片と思われる。隆帯上に刻目、隆帯脇には粗い爪形文が施される。空間充填には縦位の集合沈線や結節沈線が認められる。４は胴部破片で、渦巻きの一部と考えられる隆帯が残存する。５も胴部破片で、沈線の区画文内に斜行集合沈線を施している。６は円筒形土器の文様帯下端部と考えられる。７も文様帯下端と思われ、隆帯上には棒状施文具の押圧を加える。地文は撚糸Ⅰである。８は胴部破片で、円筒形土器と考えられる。地文は、０段多条単節 RL を斜位施文している。９・10は加曽利Ｅ式土器である。９は口縁部破片で、区画隆帯の一部を残す。地文は撚糸Ⅰである。10は胴部破片で、地文単節 RL の縦位施文後に半截竹管で懸垂文を引く。11・12は堀之内式土器と思われる。いずれも胴部破片である。13・14は打製石斧である。13はほぼ完形で撥形を呈し、裏面には主要剥離面を残す。長さ9.2cm、最大幅4.8cm、厚さ2.1cm。緑色岩製。14は刃部を欠く。短冊形と思われる。両面とも多方向からの剥離が加えられている。現存長7.8cm、最大幅4.3cm、厚さ2.2cm。緑色岩製。

第122図１の土器は、丸山第１号住居跡炉埋設土器や第10号住居跡柱穴内出土土器と同時期の所産と考えられるが、文様描出手法や空間充填にやや古手の様相が看取される。第１期については、藤内Ⅱ式（勝坂Ⅱｂ式）の影響が強い組成も目立つため、当該土器類似例がどのような組成に加わるか検討を要しよう。

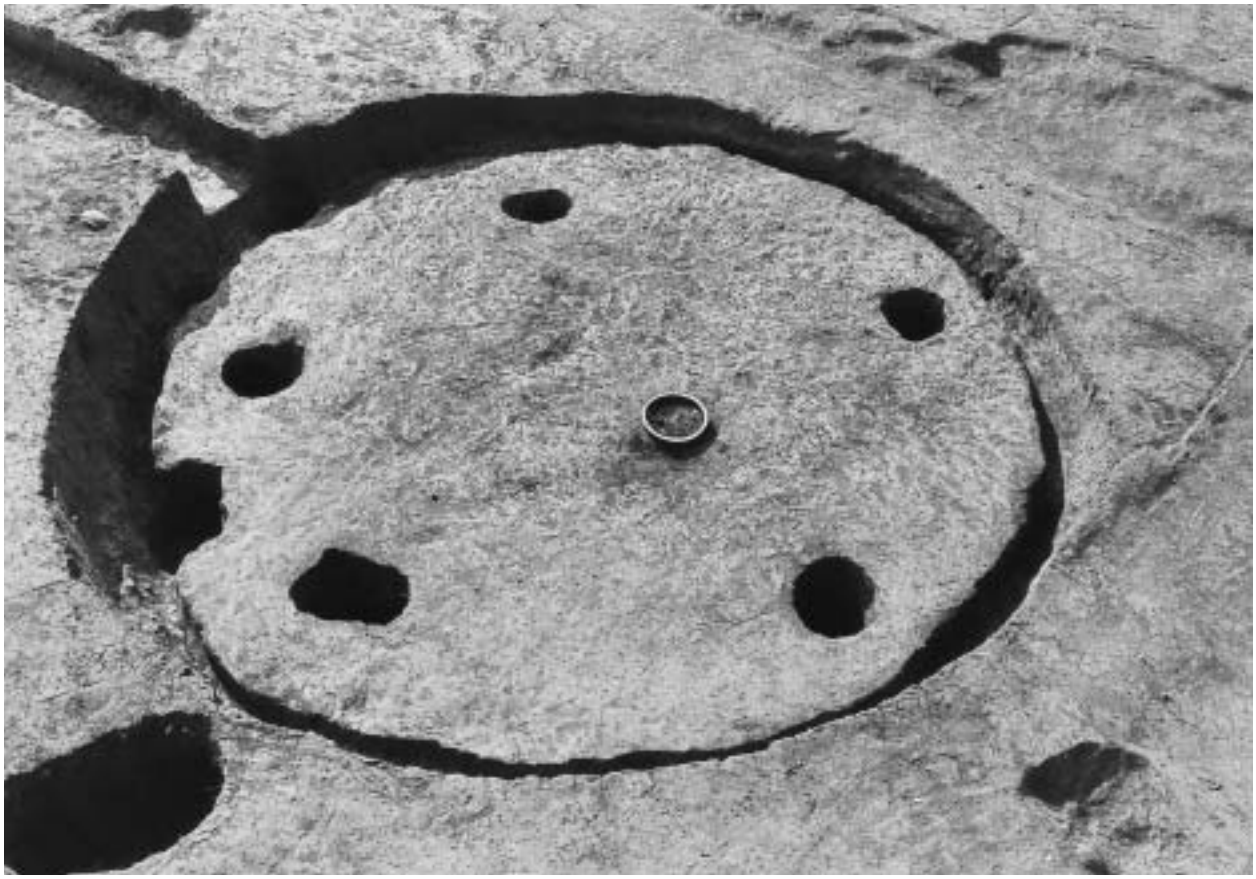
丸山遺跡第１次調査区全景

図版２



第１号住居跡全景

第１号住居跡炉跡



第２号住居跡全景

第２号住居跡炉跡

図版４

第２号住居跡遺物出土状況（１）

第２号住居跡遺物出土状況（２）

第２号住居跡遺物出土状況（３）

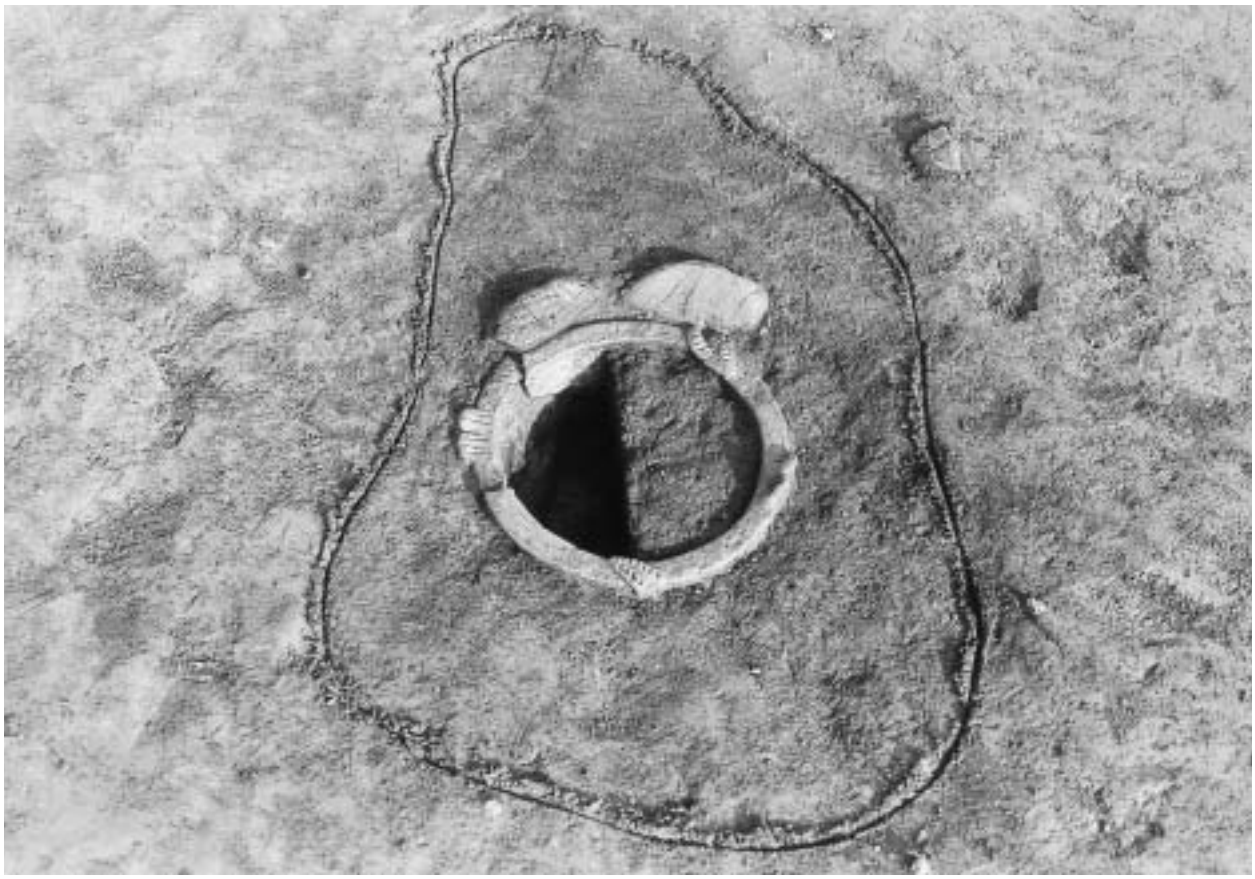
第２号住居跡遺物出土状況（４）

図版６

第３号住居跡全景

第３号住居跡炉跡

第 4 号住居跡全景

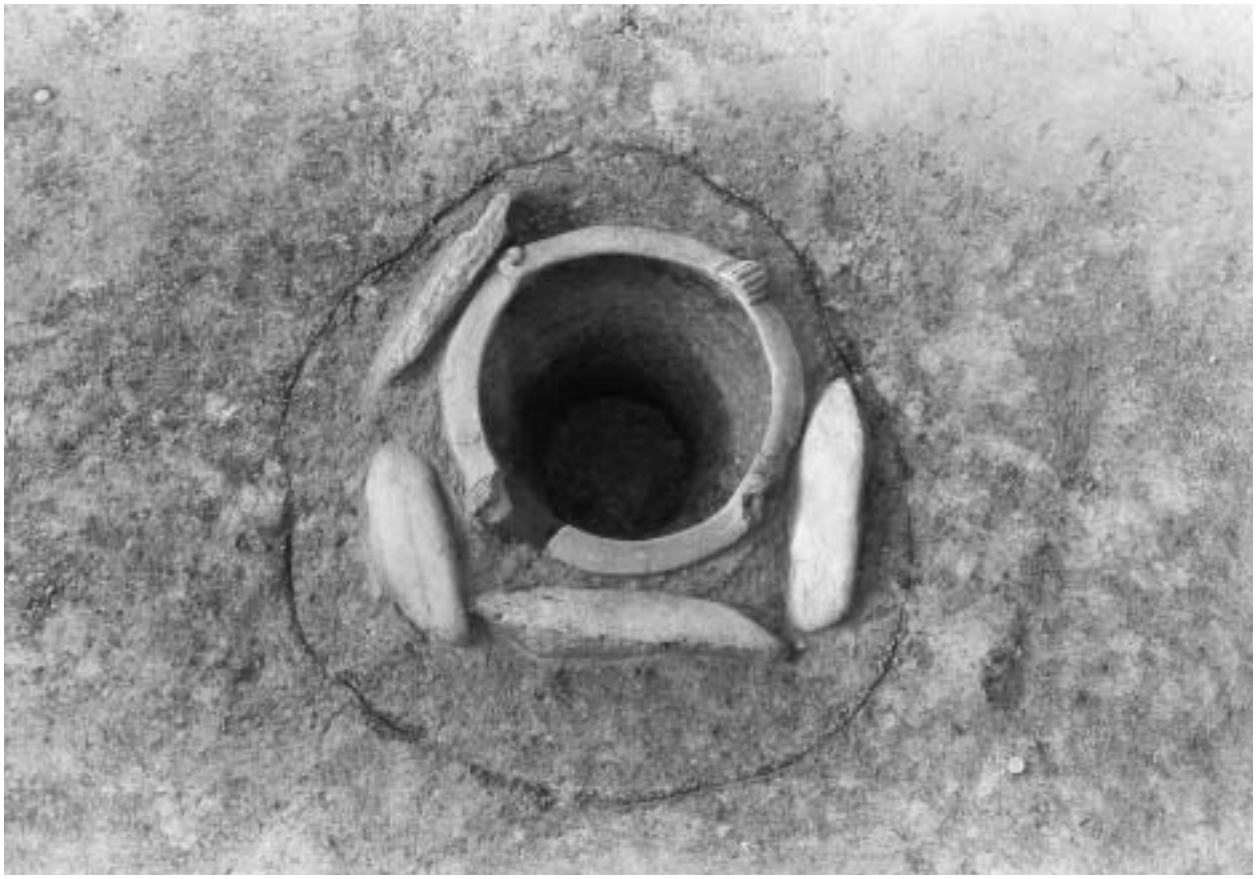


第 4 号住居跡炉跡

図版８

第４号住居跡遺物出土状況

第５号住居跡全景



第５号住居跡炉跡

第５号住居跡遺物出土状況

図版10

第５号住居跡覆土断面

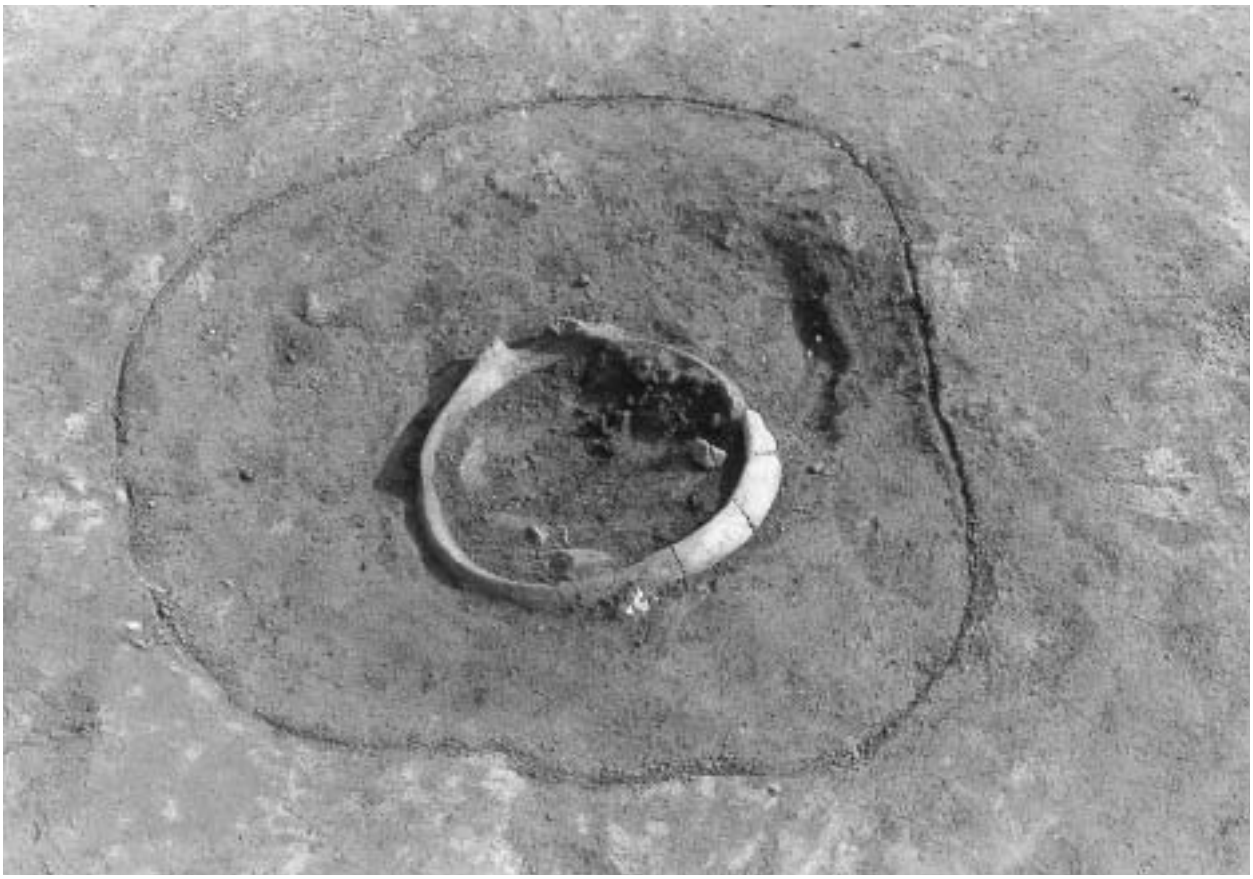
第６号住居跡全景

第６号住居跡炉跡

第６号住居跡遺物出土状況

図版12

第７号住居跡全景

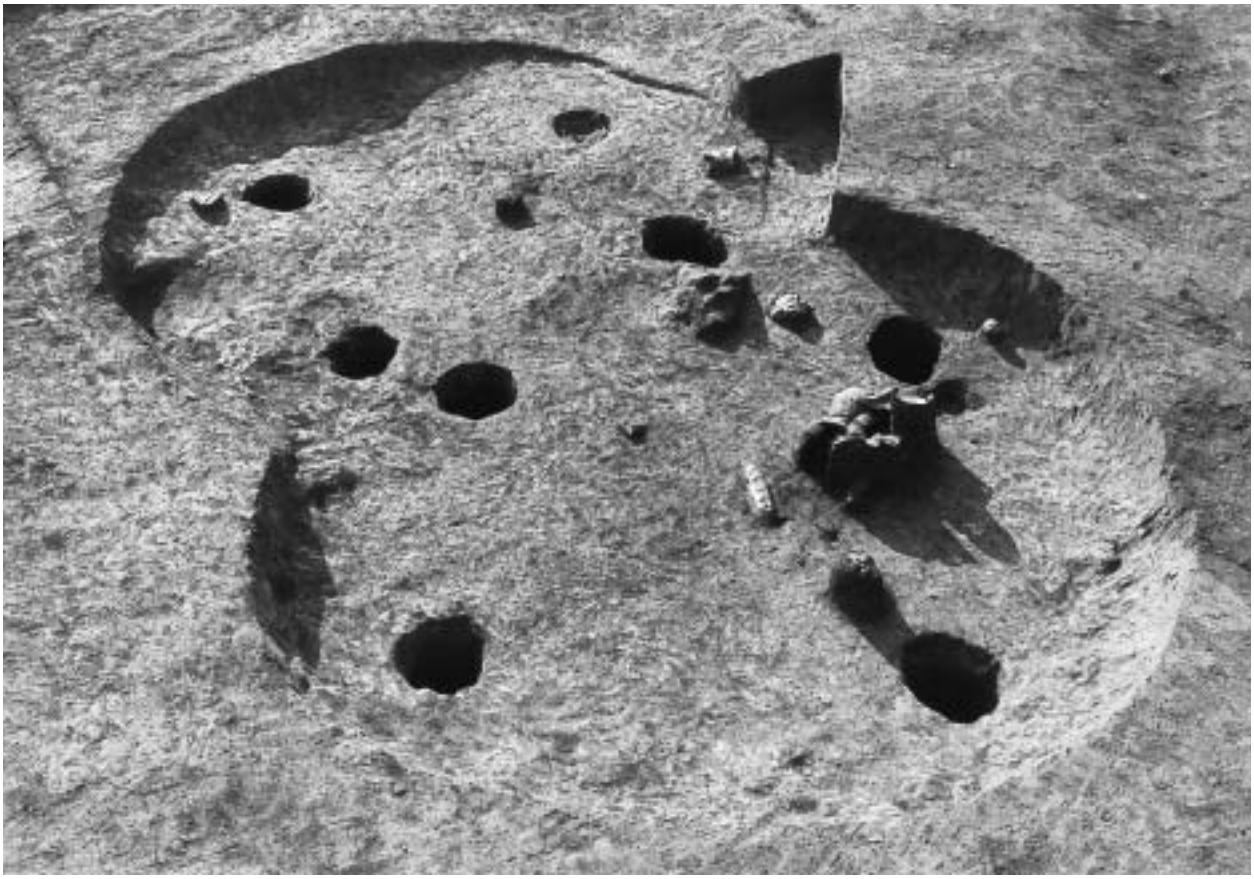


第７号住居跡炉跡

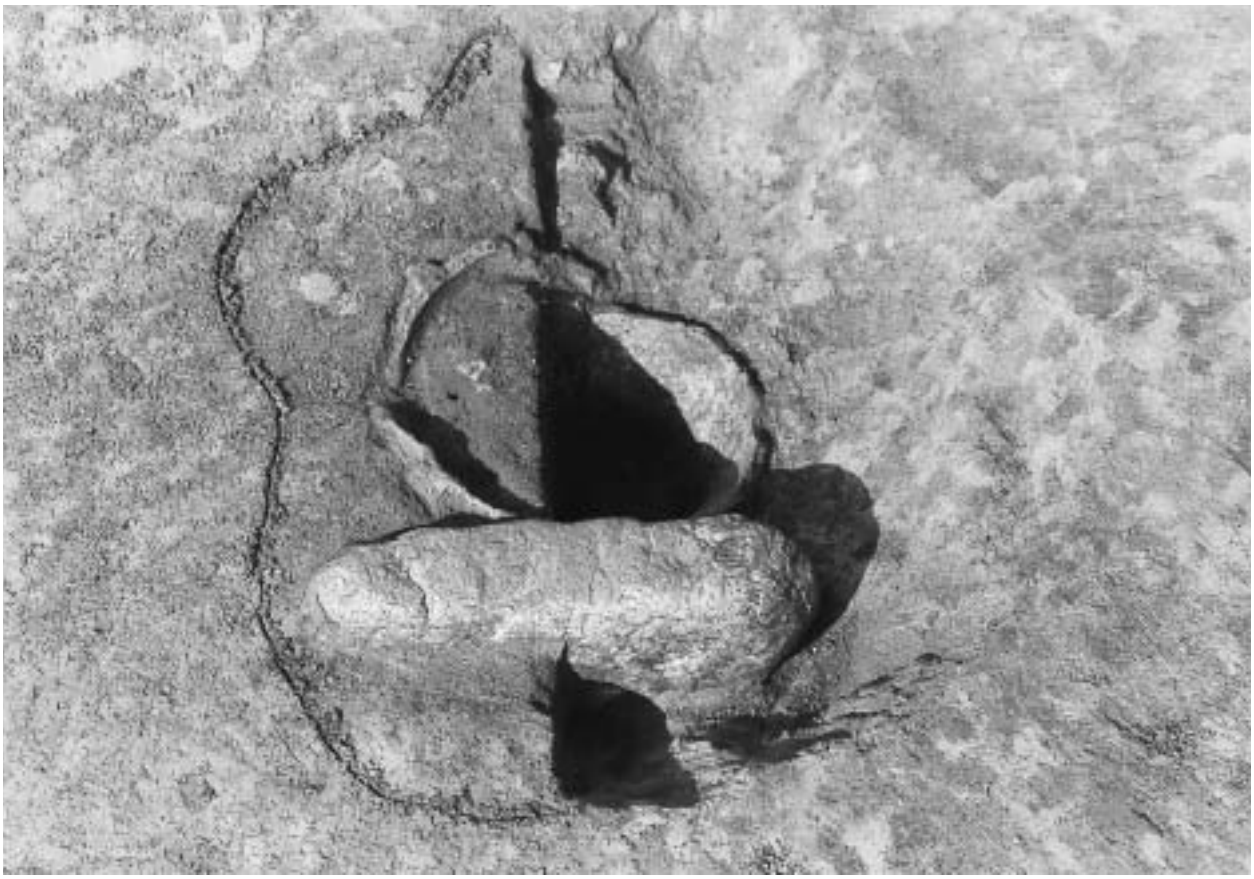
第７号住居跡遺物出土状況

第８号住居跡全景

図版14



第９・10号住居跡全景



第９号住居跡炉跡

第９号住居跡遺物出土状況（１）

第９号住居跡遺物出土状況（２）

図版16

第10号住居跡遺物出土状況（１）

第10号住居跡遺物出土状況（２）

第11号住居跡全景

第11号住居跡遺物出土状況

図版18

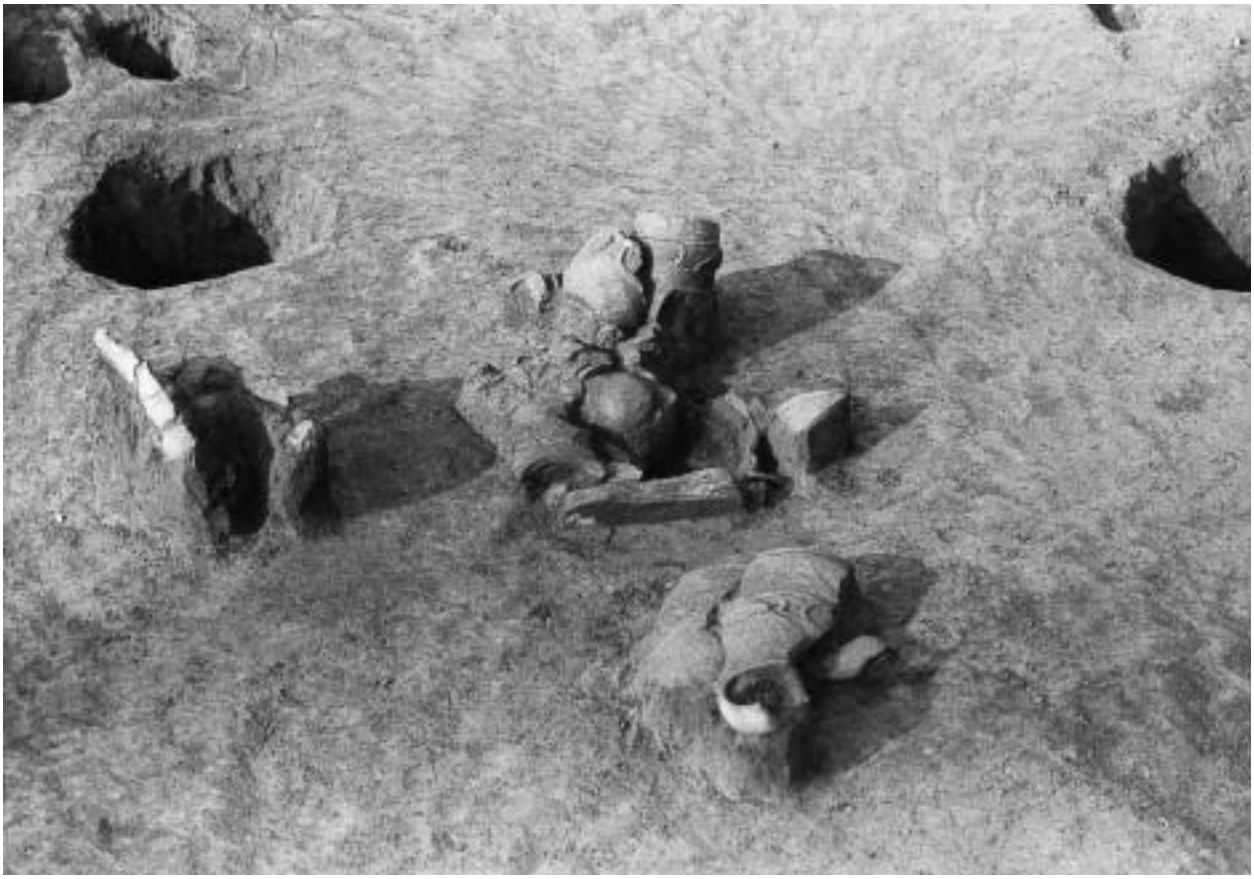
第12号住居跡全景

第12号住居跡遺物出土状況

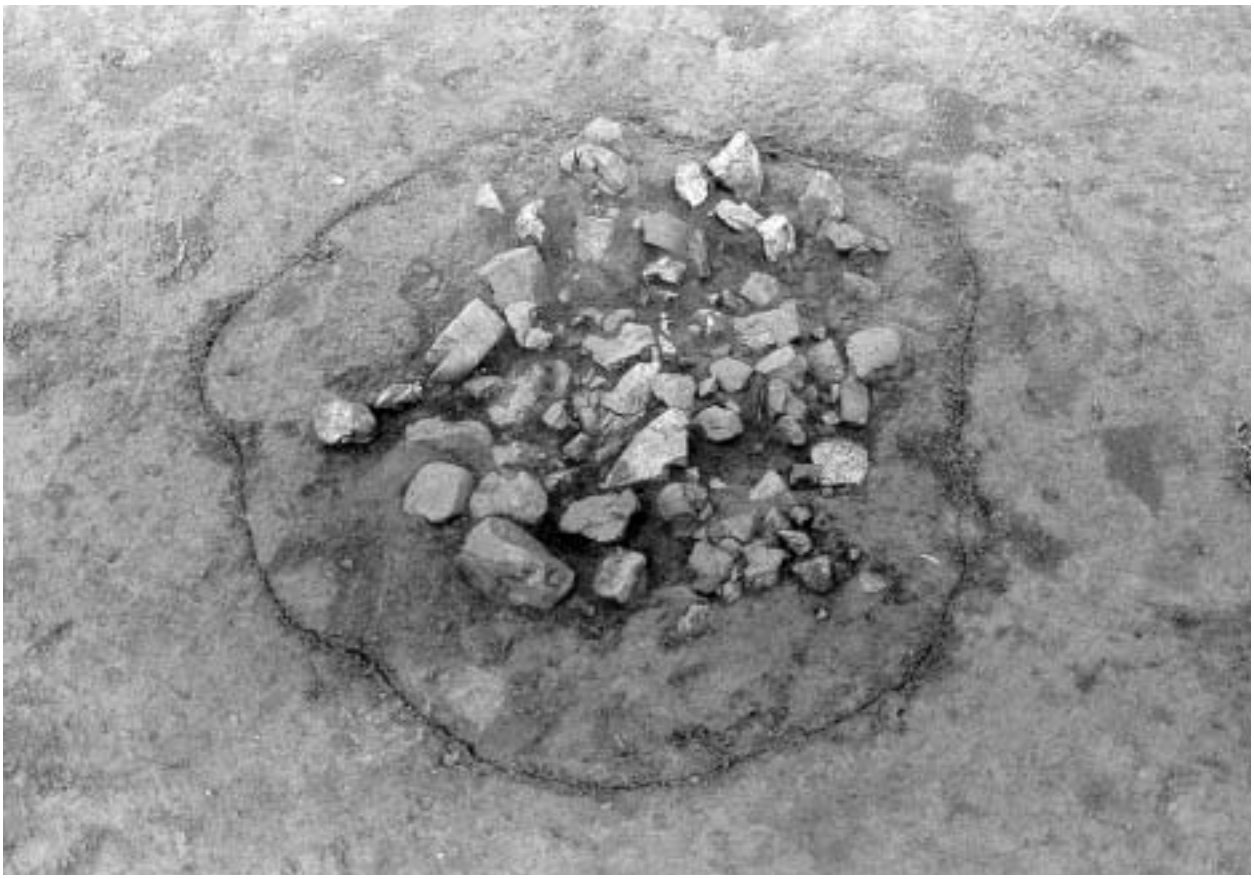
第13号住居跡全景

第14号住居跡全景

図版20



第14号住居跡遺物出土状況



第１号集石土壙全景

第１号住居跡（第31図１）

第１号住居跡（第31図２）

第１号住居跡（第32図３）

第１号住居跡（第32図４）

第１号住居跡（第32図５）

第２号住居跡（第34図１）

図版22

第２号住居跡（第34図２）

第２号住居跡（第34図３）

第２号住居跡（第35図４）

第２号住居跡（第35図６）

第２号住居跡（第35図７）

第２号住居跡（第36図８）

第２号住居跡（第36図９）

第２号住居跡（第36図10）

第２号住居跡（第36図11）

第２号住居跡（第37図12）

第２号住居跡（第37図13）

第２号住居跡（第37図14）

図版24

第２号住居跡（第37図15）

第２号住居跡（第38図16）

第２号住居跡（第38図17）

第２号住居跡（第38図18）

第２号住居跡（第38図19）

第２号住居跡（第39図20）

第 2 号住居跡（第40図21）

第 2 号住居跡（第40図22）

第 2 号住居跡（第40図23）

第 2 号住居跡（第40図24）

第 2 号住居跡（第41図25）

第 2 号住居跡（第41図30）

図版26

第３号住居跡（第43図１）

第４号住居跡（第44図１）

第４号住居跡（第44図２）

第４号住居跡（第44図３）

第４号住居跡（第44図４）

第４号住居跡（第45図５）

第４号住居跡（第45図６）

第４号住居跡（第45図７）

第５号住居跡（第46図１）

第５号住居跡（第46図２）

第５号住居跡（第46図３）

第５号住居跡（第47図５）

図版28

第５号住居跡（第47図６）

第５号住居跡（第47図７）

第５号住居跡（第47図８）

第５号住居跡（第48図９）

第５号住居跡（第48図10）

第５号住居跡（第48図11）

第５号住居跡（第48図12）

第５号住居跡（第49図13）

第５号住居跡（第49図14）

第５号住居跡（第49図15）

第５号住居跡（第50図16）

第５号住居跡（第50図17）

図版30

第６号住居跡（第51図１）

第７号住居跡（第52図１）

第７号住居跡（第52図３）

第７号住居跡（第52図４）

第７号住居跡（第53図５）

第７号住居跡（第53図６）

第７号住居跡（第53図７）

第７号住居跡（第53図８）

第７号住居跡（第54図９）

第７号住居跡（第54図10）

第７号住居跡（第54図11）

第７号住居跡（第54図12）

図版32

第７号住居跡（第55図14）

第７号住居跡（第55図15）

第７号住居跡（第55図16）

第７号住居跡（第55図18）

第７号住居跡（第56図20）

第７号住居跡（第56図21）

第７号住居跡（第56図22）

第７号住居跡（第56図24）

第８号住居跡（第58図１）

第８号住居跡（第58図２）

第８号住居跡（第58図３）

第８号住居跡（第58図４）

図版34

第８号住居跡（第58図５）

第８号住居跡（第59図６）

第８号住居跡（第59図９）

第８号住居跡（第59図10）

第８号住居跡（第59図11）

第８号住居跡（第59図12）

第８号住居跡（第60図13）

第８号住居跡（第60図14）

第８号住居跡（第60図15）

第８号住居跡（第60図16）

第８号住居跡（第60図18）

第８号住居跡（第60図19）

図版36

第８号住居跡（第61図20）

第８号住居跡（第61図21）

第８号住居跡（第61図22）

第８号住居跡（第61図27）

第９号住居跡（第63図１）

第９号住居跡（第63図２）

第９号住居跡（第63図３）

第９号住居跡（第63図４）

第９号住居跡（第63図５）

第９号住居跡（第63図６）

第９号住居跡（第64図８）

第９号住居跡（第64図10）

図版38

第10号住居跡（第65図１）

第10号住居跡（第65図２）

第11号住居跡（第67図１）

第11号住居跡（第67図２）

第11号住居跡（第67図３）

第11号住居跡（第67図４）

第11号住居跡（第67図５）

第11号住居跡（第67図６）

第11号住居跡（第68図７）

第11号住居跡（第68図11）

第11号住居跡（第68図12）

第11号住居跡（第68図13）

図版40

第11号住居跡（第68図14）

第12号住居跡（第69図１）

第12号住居跡（第69図４）

第12号住居跡（第69図３）

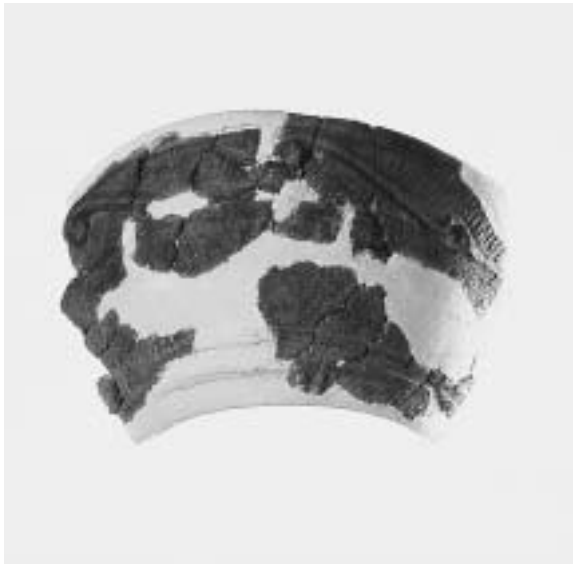
第12号住居跡（第70図５）

第12号住居跡（第70図６）

第12号住居跡（第70図７）

第12号住居跡（第70図８）

第12号住居跡（第70図９）



第13号住居跡（第72図１）

第13号住居跡（第72図２）

第13号住居跡（第72図３）

図版42

第13号住居跡（第72図４）

第14号住居跡（第73図１）

第14号住居跡（第73図２）

第14号住居跡（第73図３）

第14号住居跡（第73図４）

第14号住居跡（第73図５）

第14号住居跡（第73図６）

第14号住居跡（第74図７）

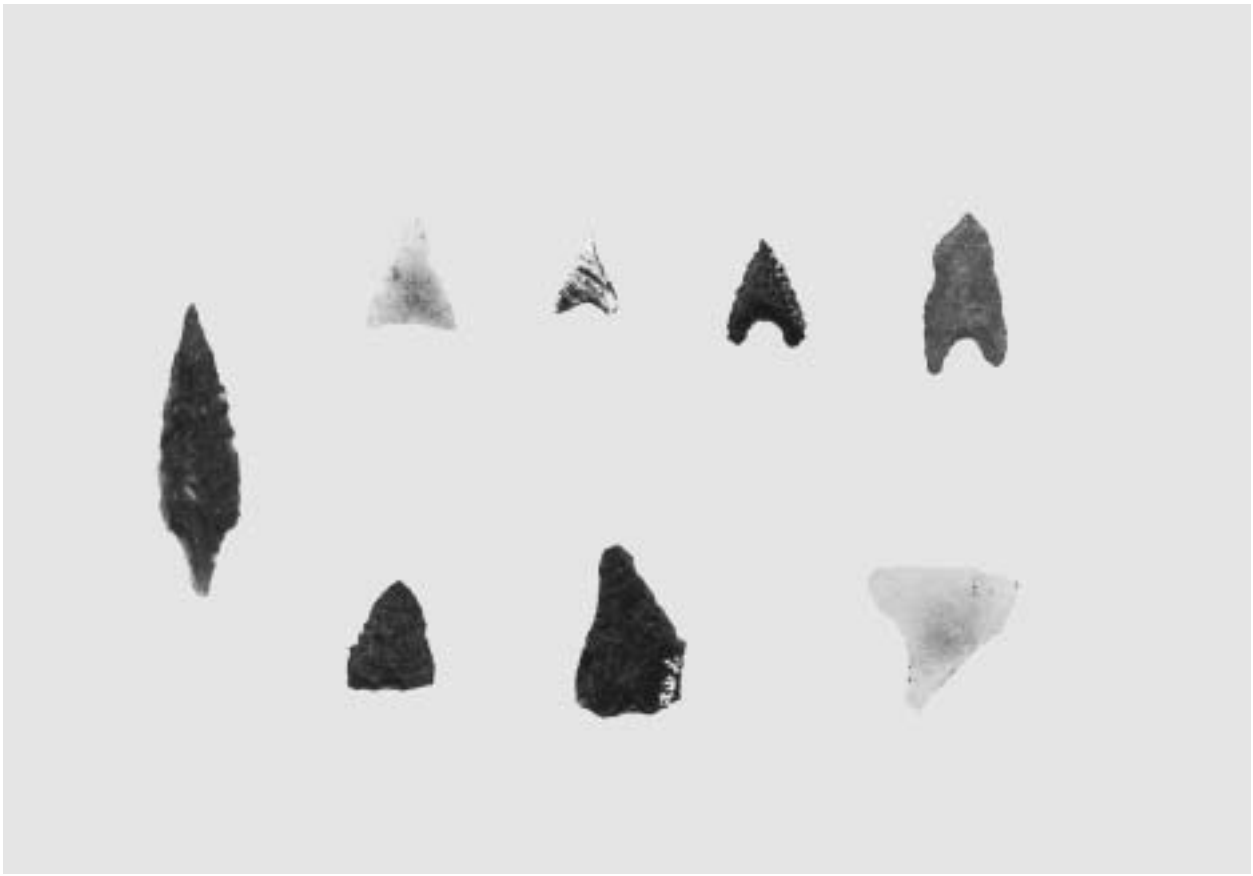
第14号住居跡（第74図８）

遺構外出土土器（第76図１）

遺構外出土土器（第76図２）

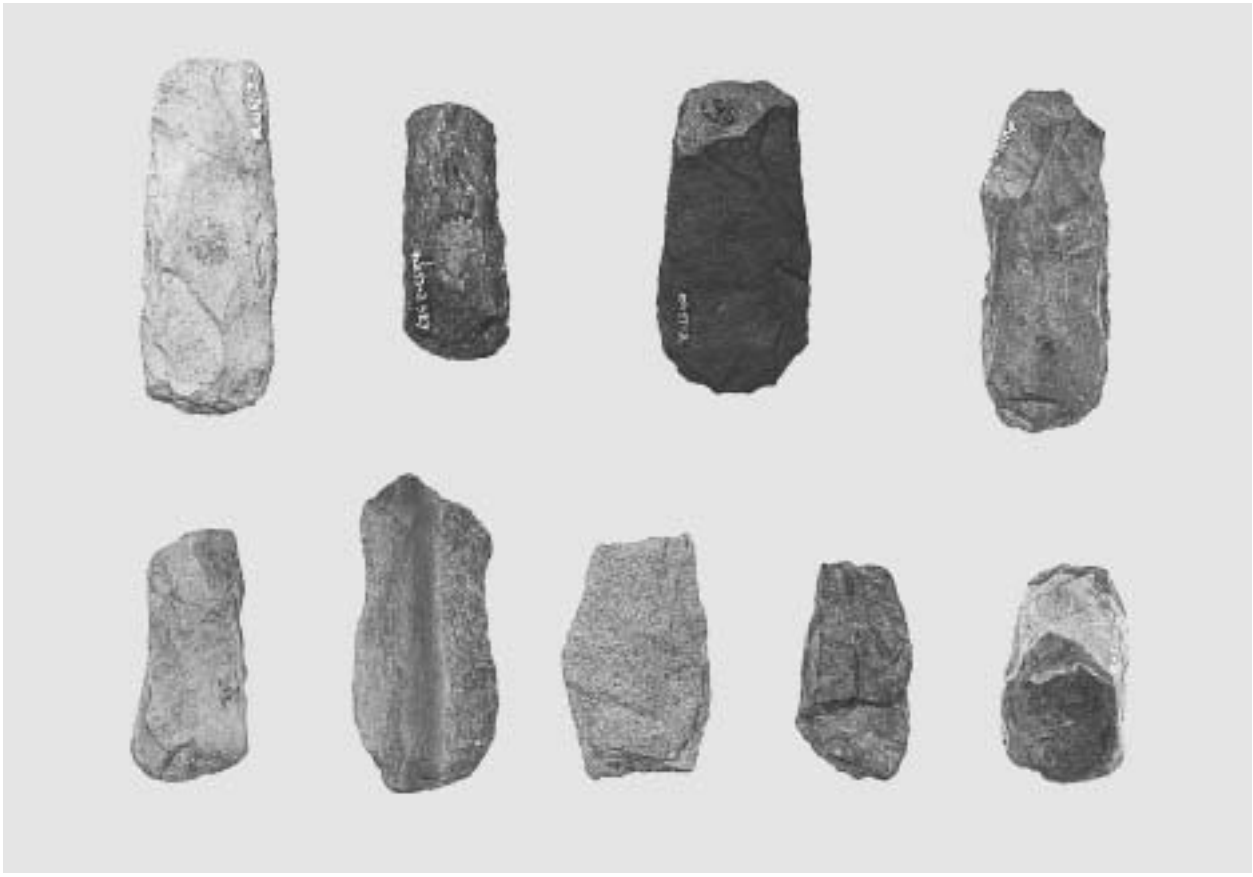
表採土器（第122図１）

図版44

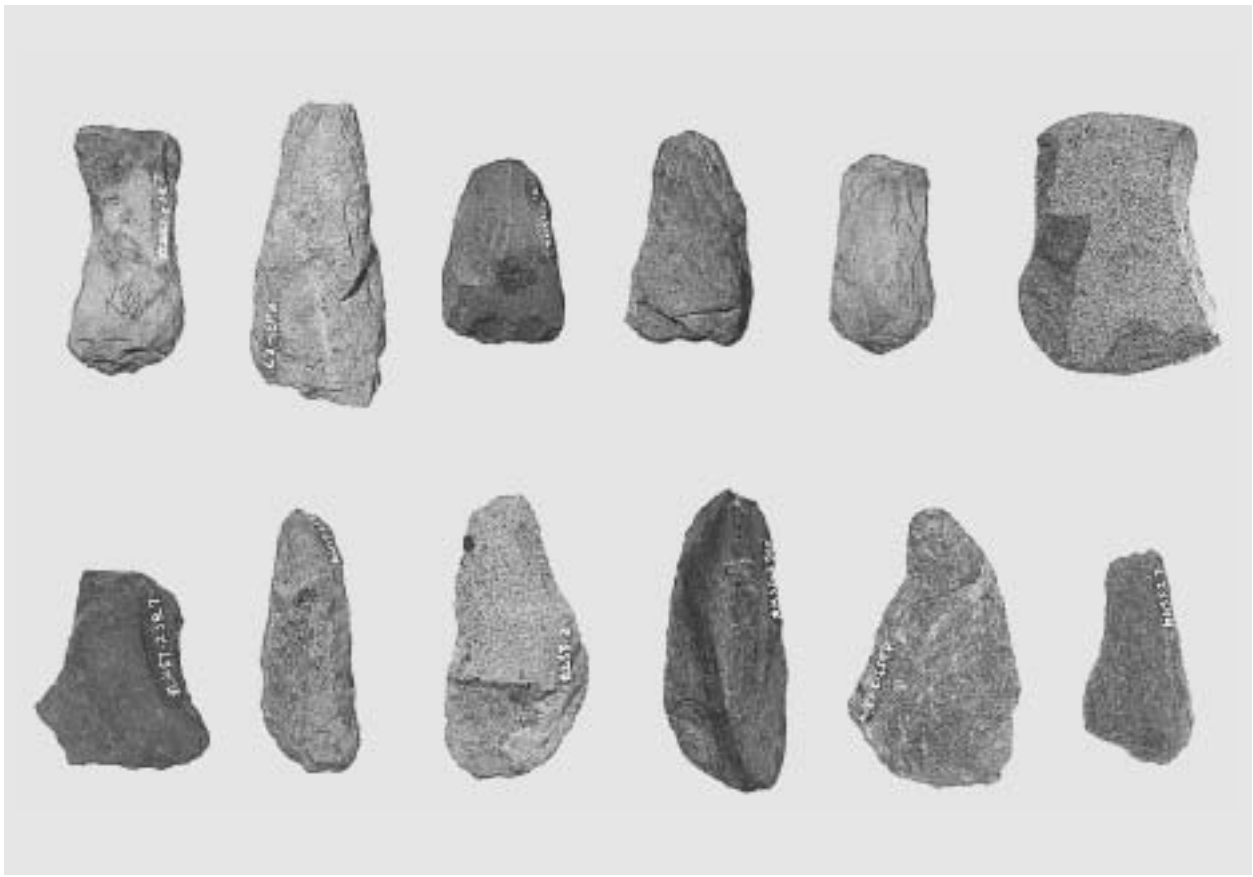


小型石器（第６図１、第80図１～４、第99図３～５）

第１号住居跡（第79図１～９）

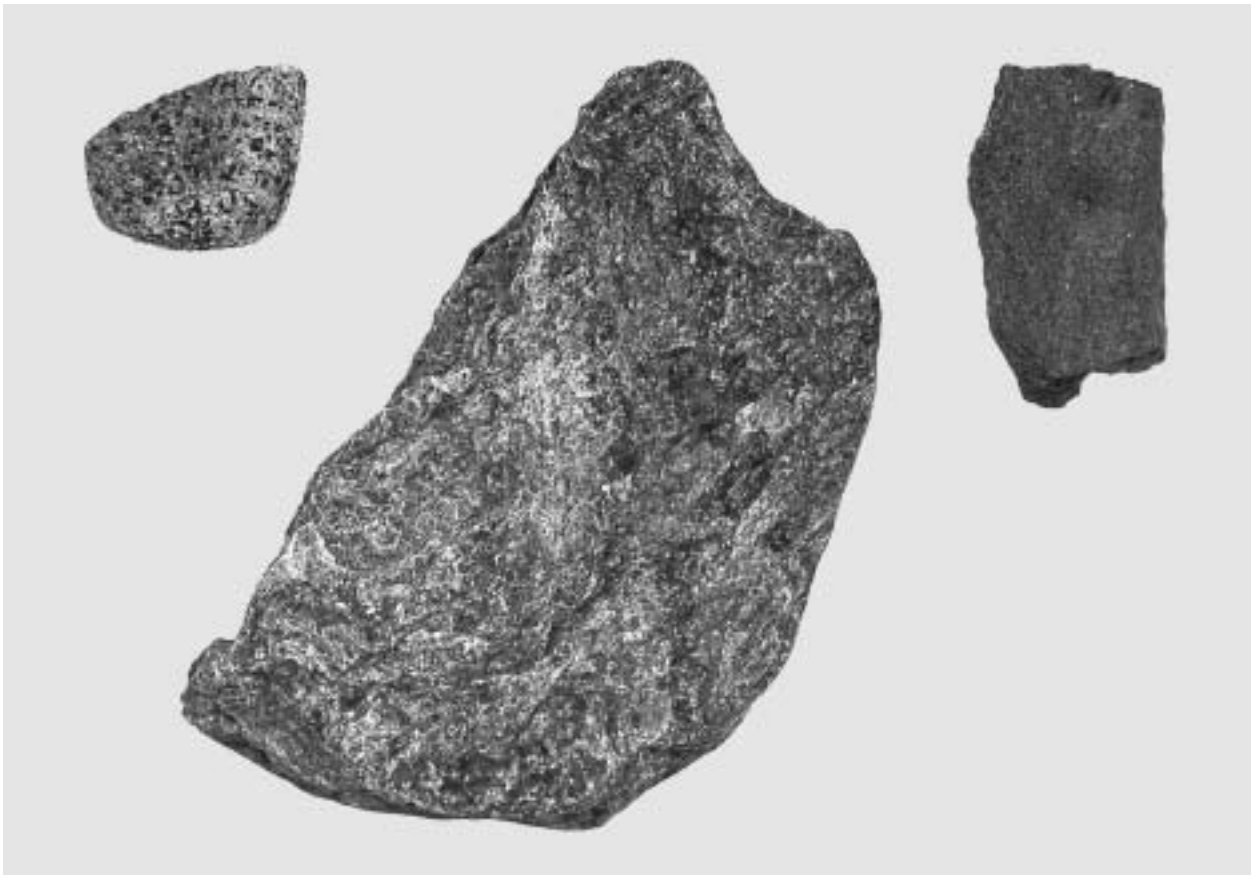


第２号住居跡（第80図５～13）



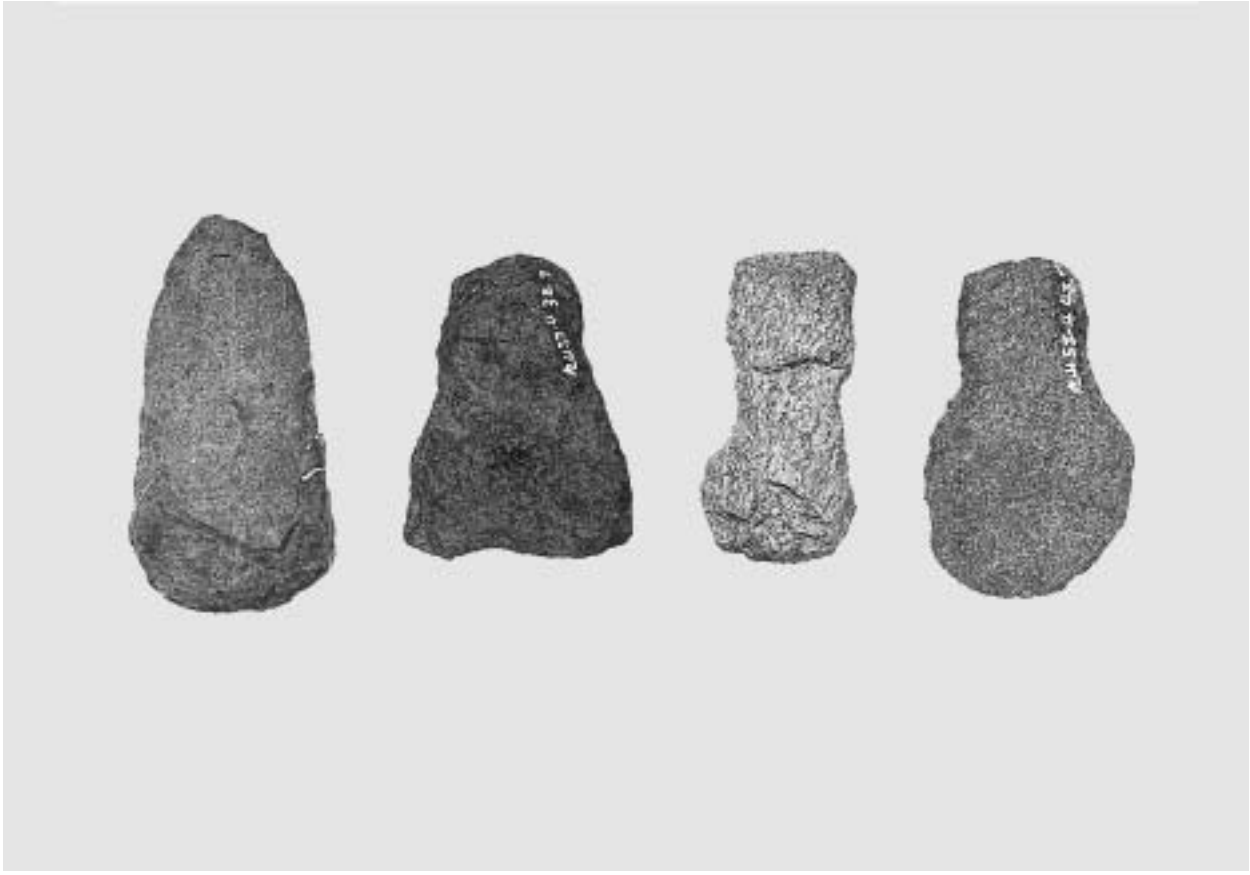
第２号住居跡（第81図14～25）

図版46



第２号住居跡（第82図26～28）

第３号住居跡（第83図１～３）

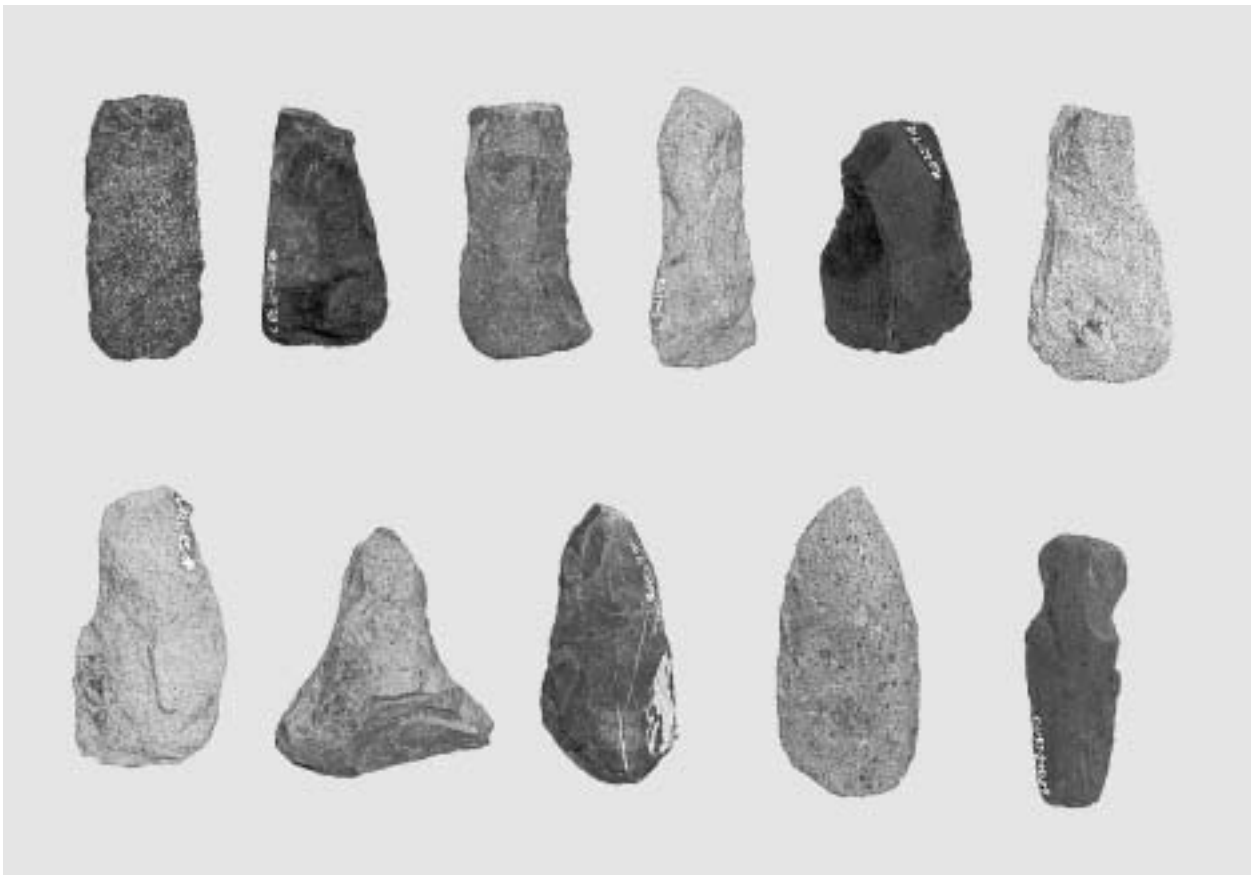


第４号住居跡（第84図１～４）

第５号住居跡（第85図１～６）

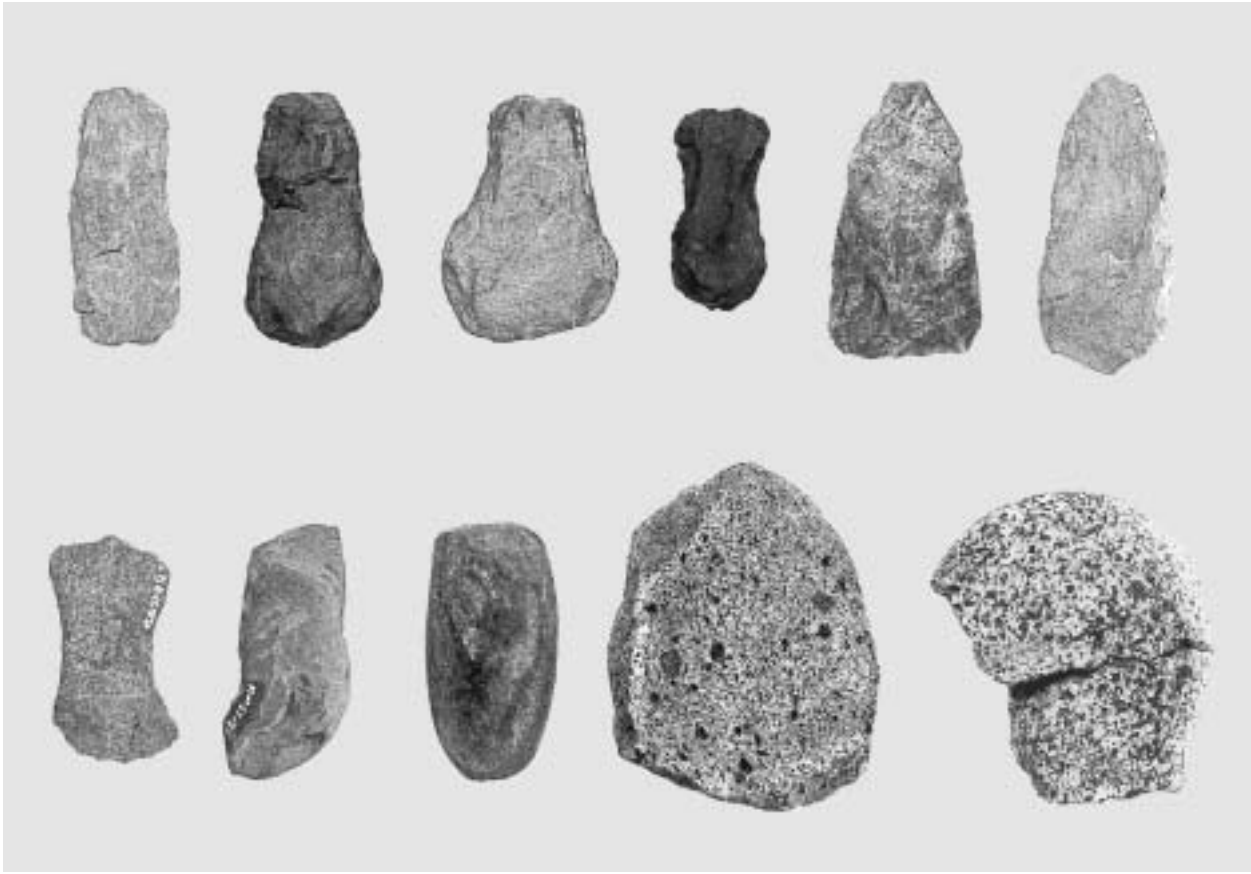
図版48

第６号住居跡（第86図１～６）



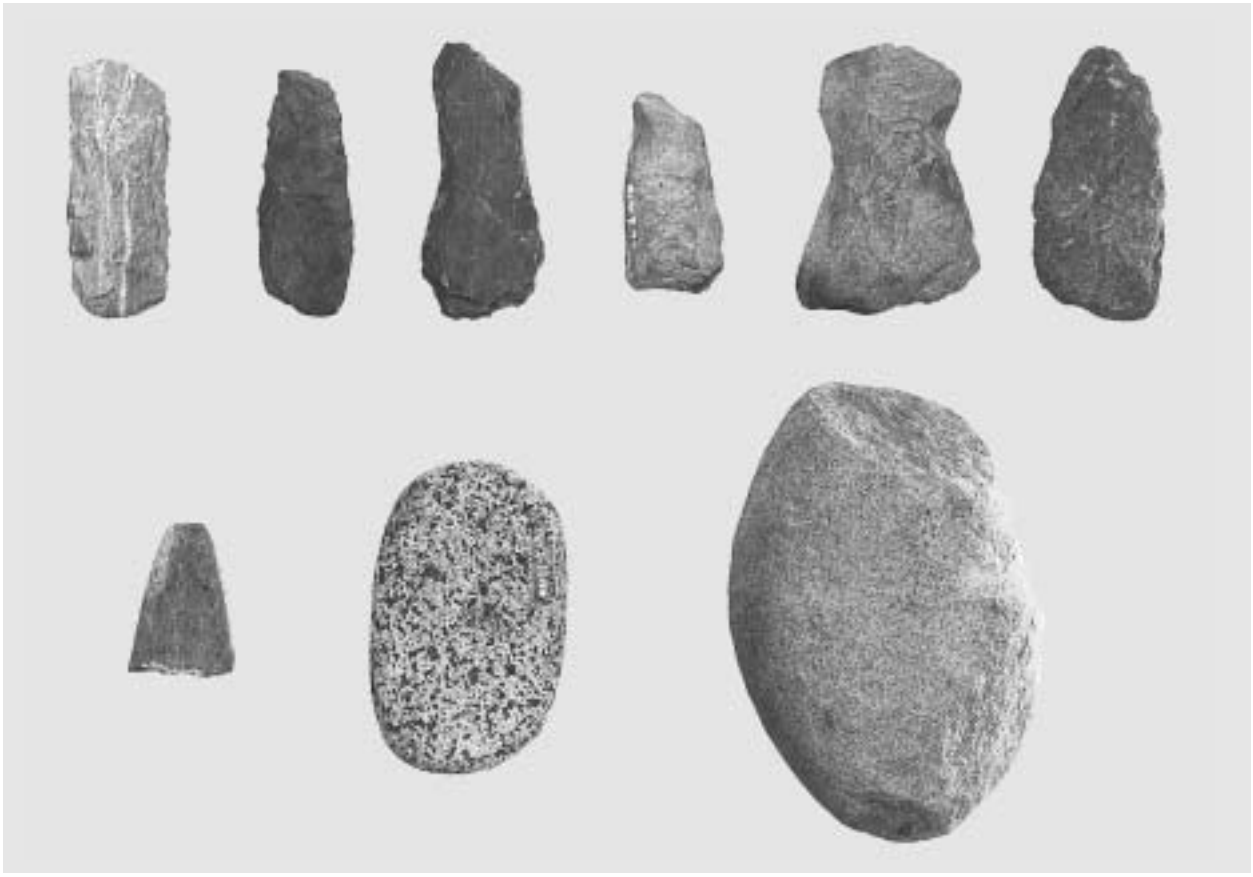
第７号住居跡（第87図１～11）

第７号住居跡（第88図12～14）

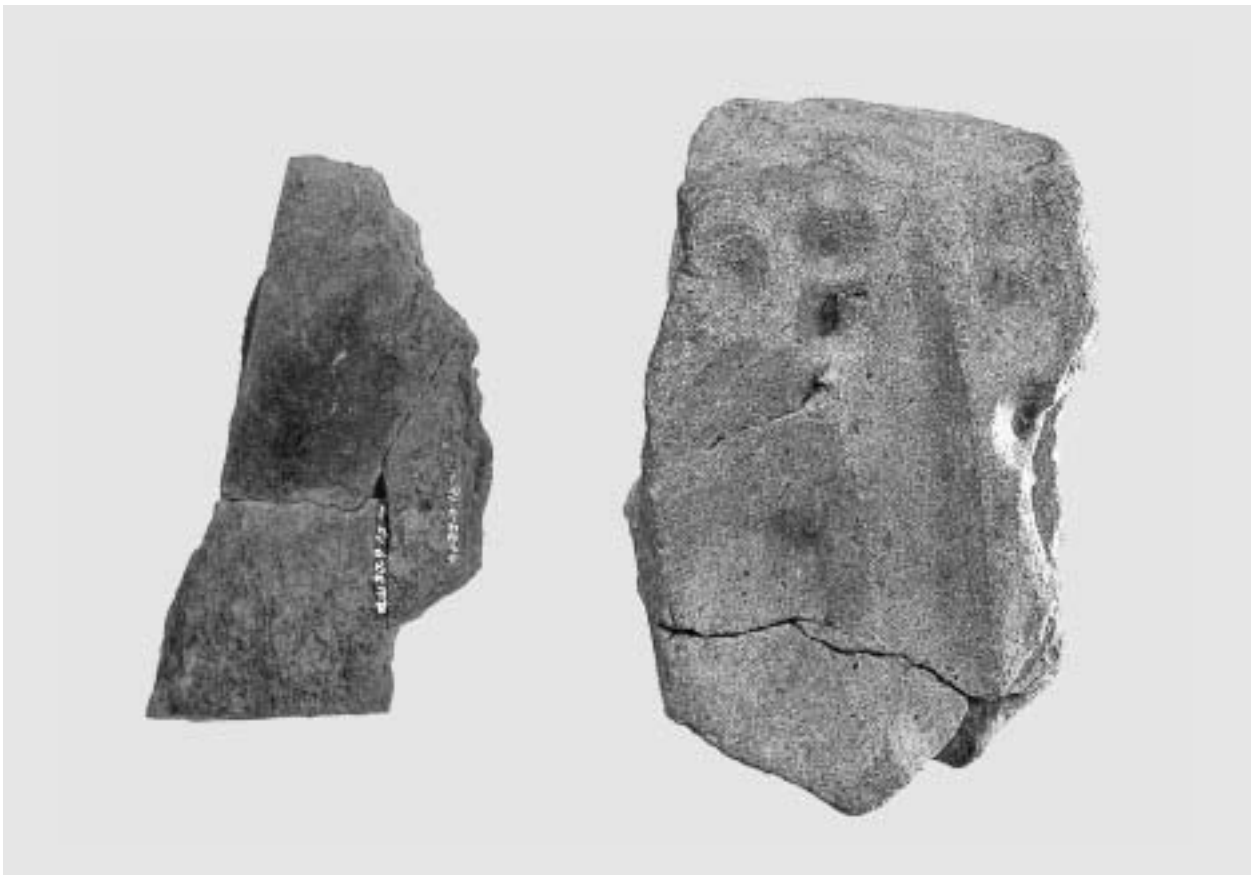


第８号住居跡（第89図１～11）

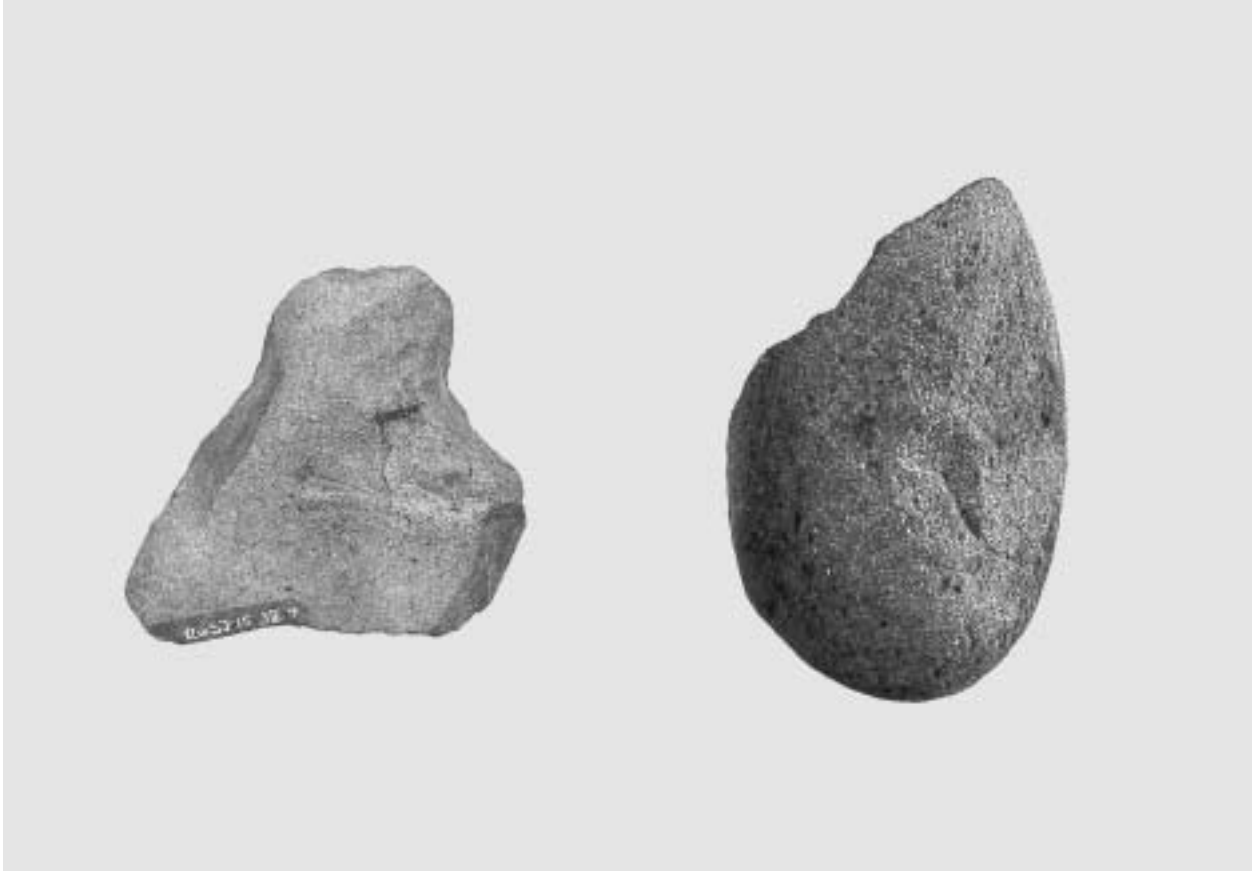
図版50



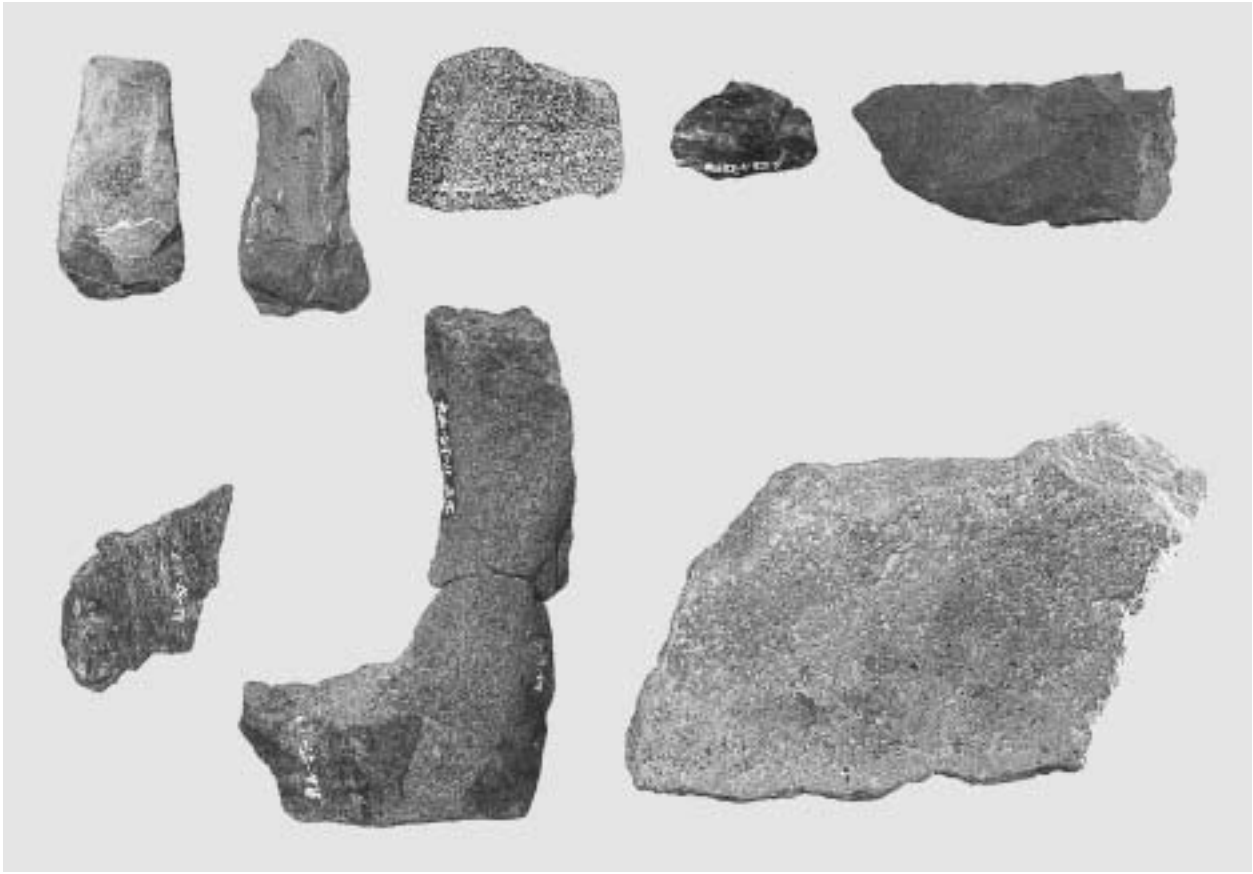
第９号住居跡（第90図１～９）



第９号住居跡（第91図10・11）

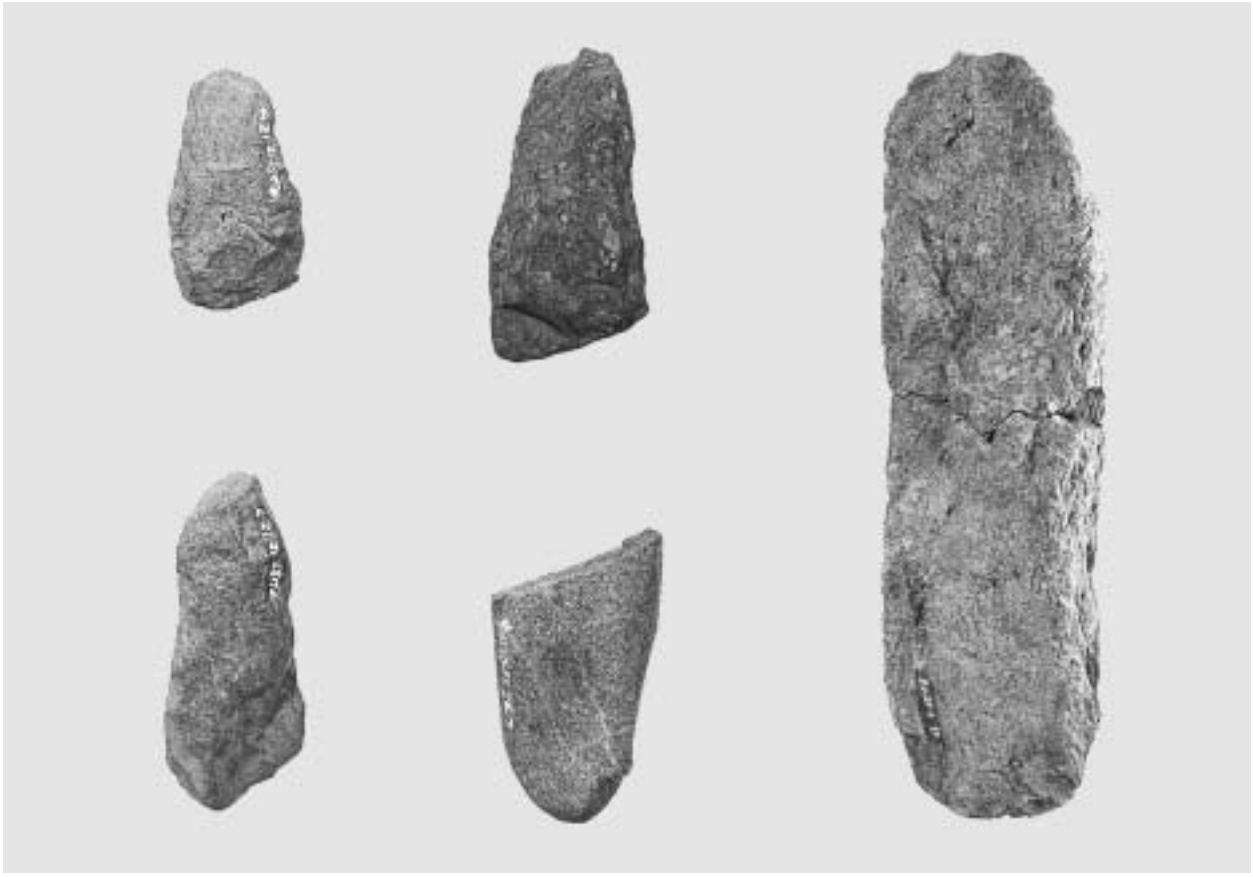


第10号住居跡（第92図１・２）

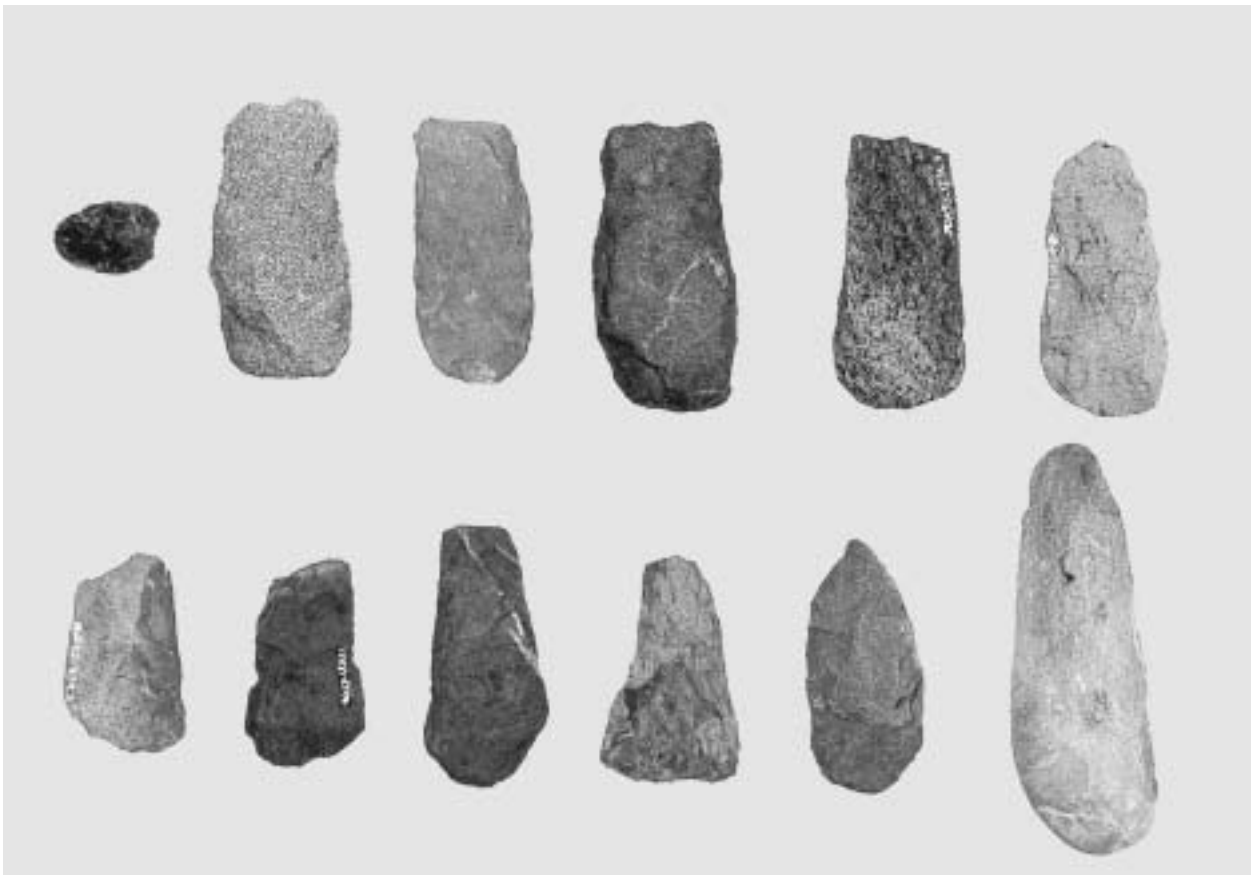


第11号住居跡（第93図１～８）

図版52

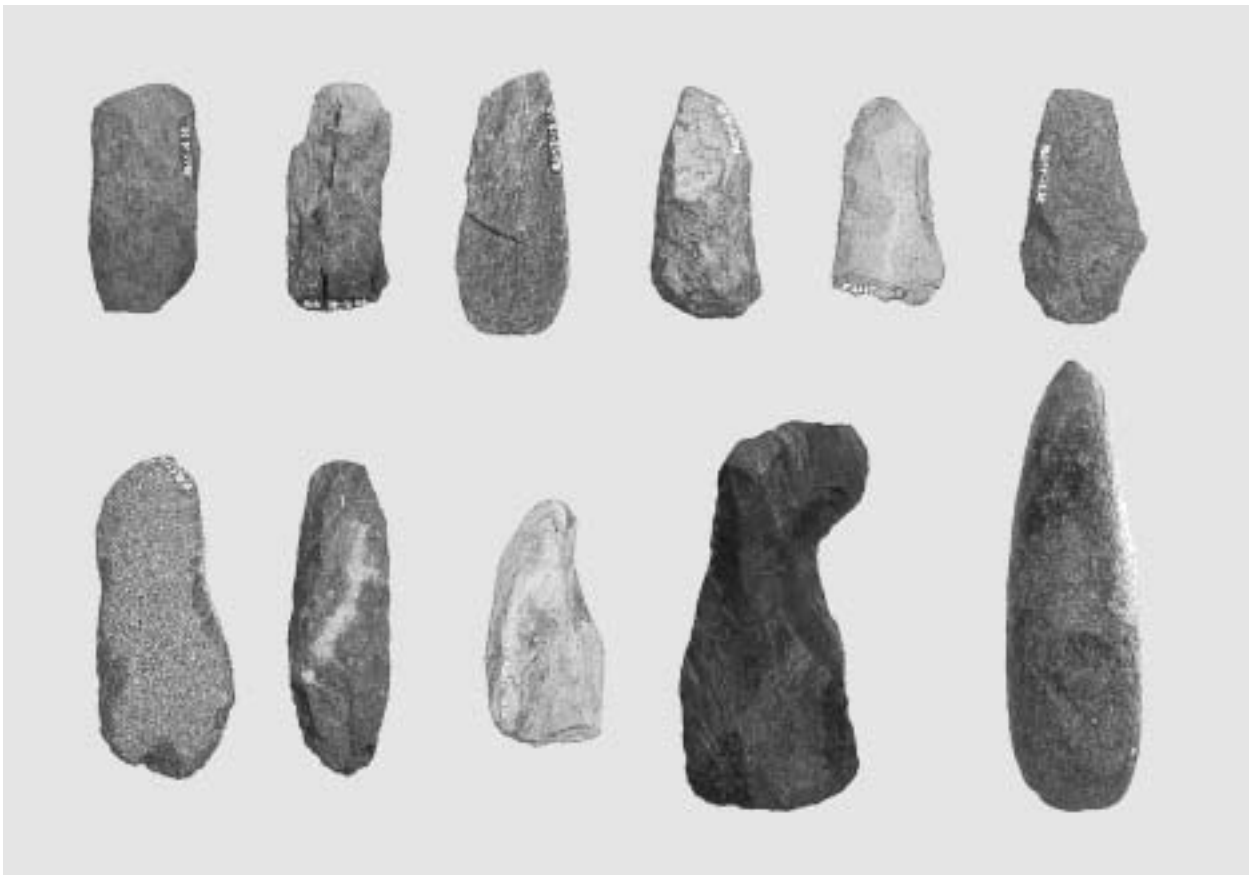


第12号住居跡（第94図１～５）



第13号住居跡（第95図１～12）

第13号住居跡（第96図13～15）

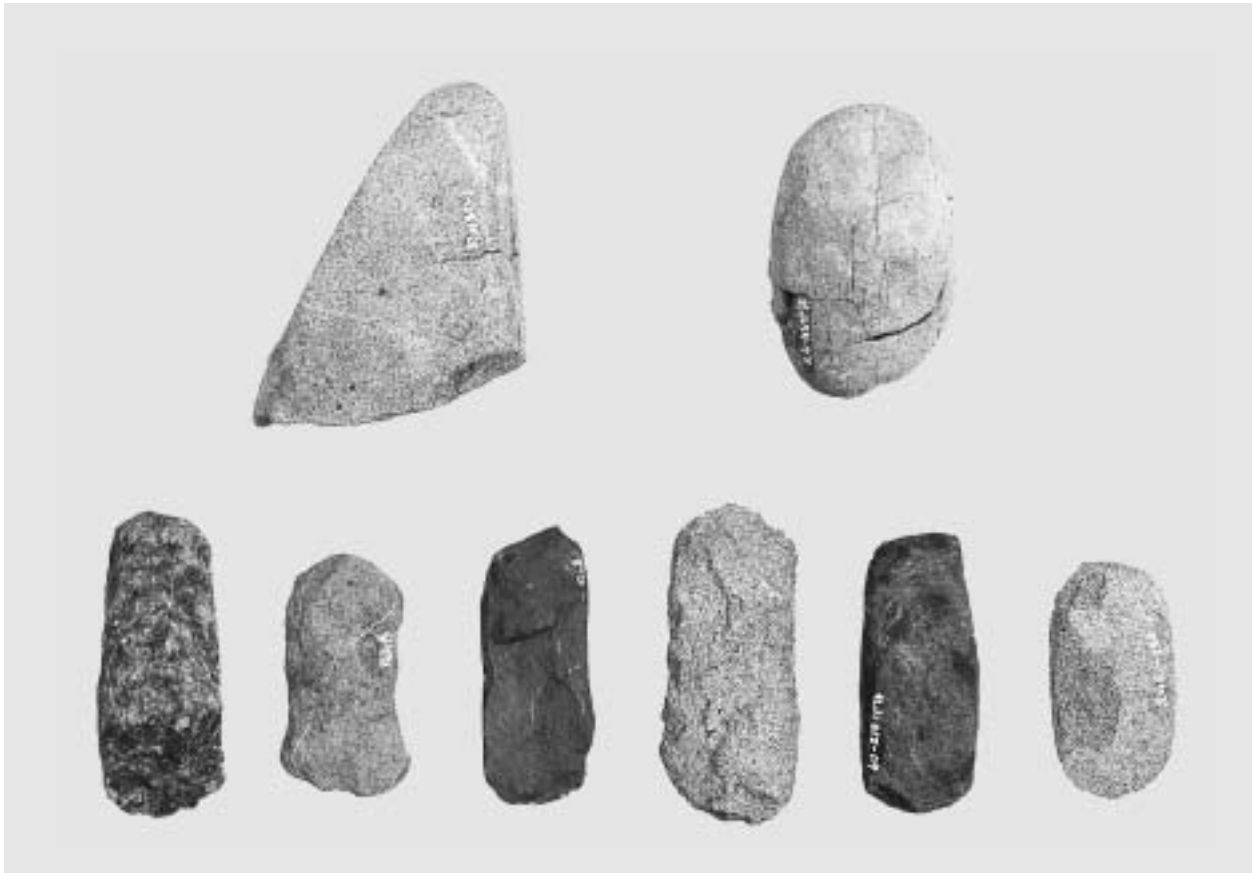


第14号住居跡（第97図１～11）

図版54

第14号住居跡（第98図12・13）

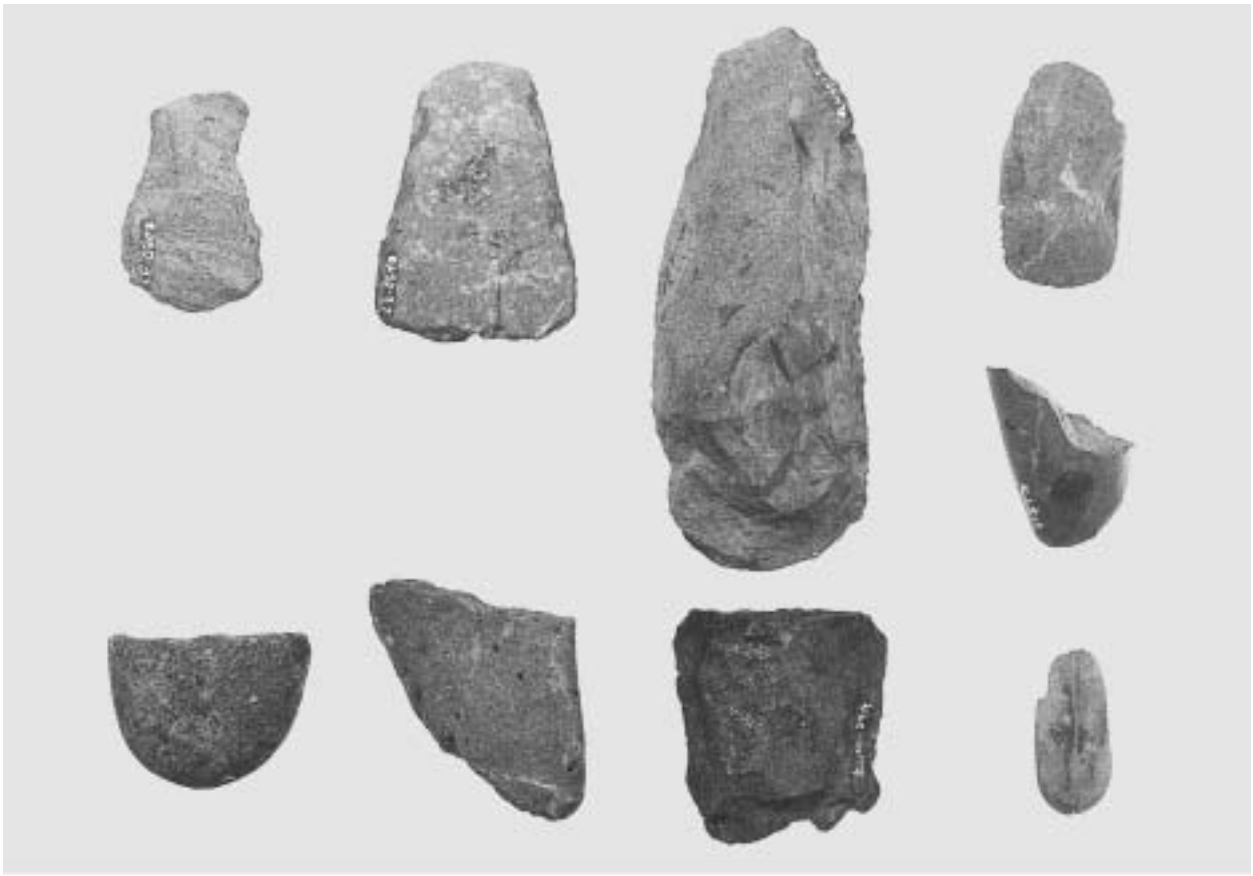
第14号住居跡（第98図14～16）



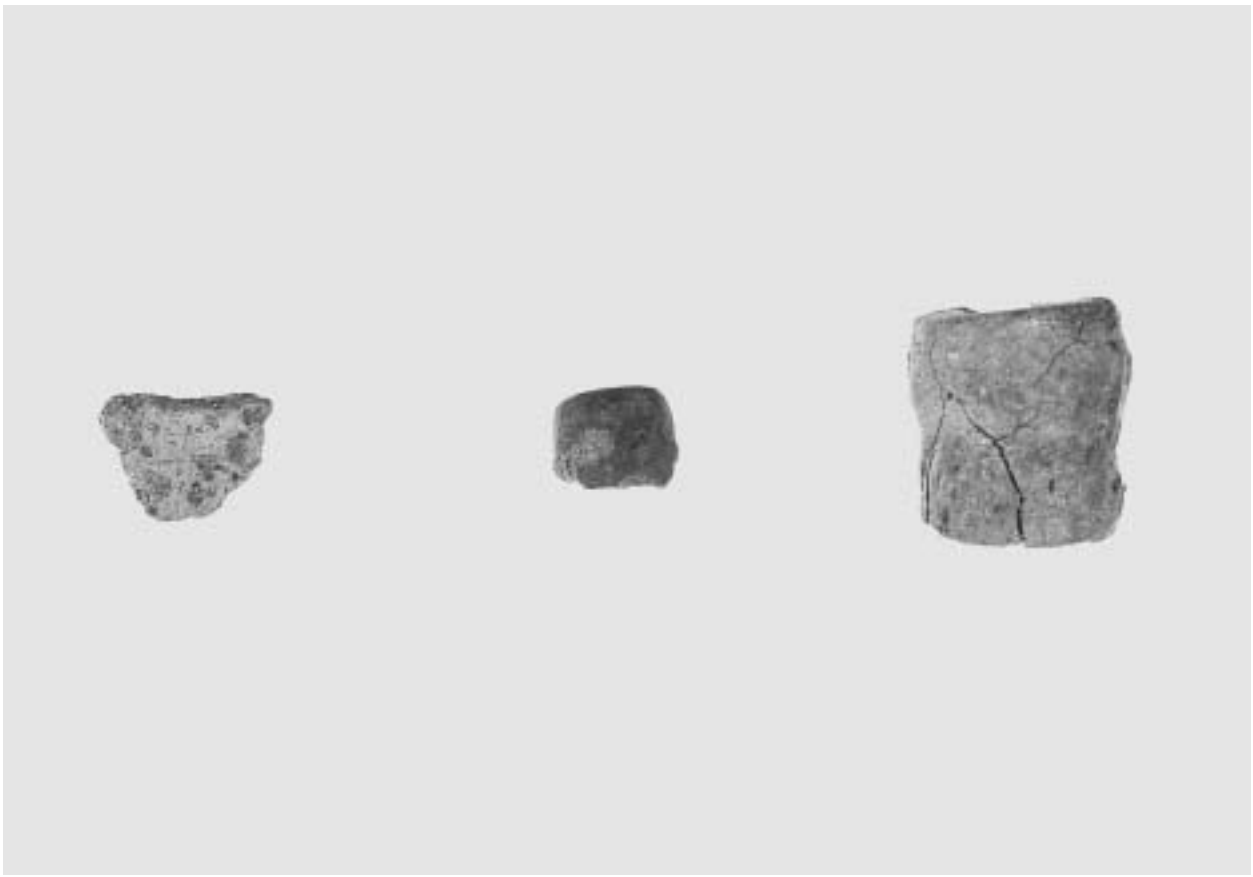
土壙・遺構外出土石器（第99図１・２、６～11）

遺構外出土石器（第100図12～23）

図版56



遺構外出土石器（第101図24～32）



土製品（第105図62～64）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	まるやまいせき
書 名	丸 山 遺 跡
副 書 名	学校法人　国際学園グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	埼玉県狭山市遺跡調査会報告書
シ リ ー ズ 番 号	第13集
著 者 氏 名	石塚和則
編 集 機 関	埼玉県狭山市遺跡調査会
所 在 地	〒350－1380　埼玉県狭山市入間川１－23－５　　TEL042－953－1111
発 行 年 月 日	西暦2003（平成15）年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
まるやまいせき 丸 山 遺 跡	さいたまけんさやましかしわばら 埼玉県狭山市柏原 あざはんぬき 字半貫1866番地他	22	37	35°53′08″	139°26′19″	19911011 ～19920214	3,658	グランド建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丸山遺跡	集落跡	縄文時代 近代以降	竪穴住居跡　14軒 集石土壙　１基 土壙　12基 溝状遺構　４条	縄文時代草創期石器 縄文時代中期土器・石器	比較的短期間に形成された小規模な環状集落跡。勝坂式後半期の土器が多量に出土。

狭山市遺跡調査会報告書　第13集

丸　山　遺　跡

―学校法人　国際学園グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成15年９月20日　印刷
平成15年９月30日　発行

発　行　　埼玉県狭山市遺跡調査会
埼玉県狭山市入間川１丁目25番５号
TEL　042（953）1111
印　刷　　株式会社　文化新聞社

【正誤表】

丸山遺跡

（狭山市遺跡調査会報告書　第13集）

ページ	行	誤	正
6ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038